岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 109

田益新田遺跡
西山古墳群

一般国道53号(岡山北バイパス)
建設工事に伴う発掘調査

1996

建設省岡山国道工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 109

田益新田遺跡
西山古墳群

一般国道53号(岡山北バイパス)
建設工事に伴う発掘調査

1996

建設省岡山国道工事事務所
岡山県教育委員会

１．１号墳遺物出土状況（西から）

２．２号墳遺物出土状況（南から）

３．２号墳奥壁部分遺物出土状況（西から）

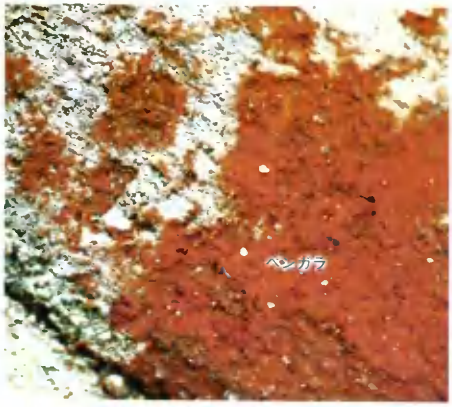
１．３号墳遺物出土状況（西から）

２．３号墳遺物出土状況（西から）

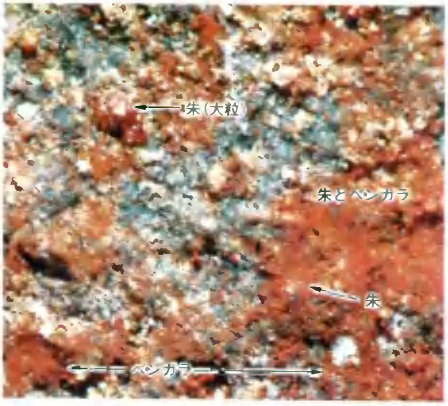
１．５号墳陶棺出土状況（西から）

２．６号墳遺物出土状況（北から）

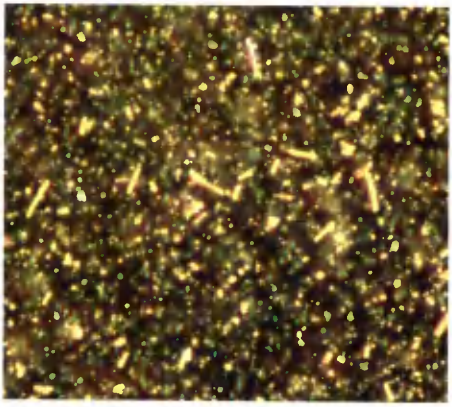
３．11号墳遺物出土状況（南から）



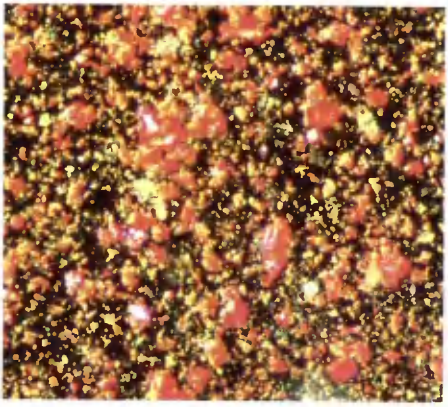
1　No.243の赤色顔料(ベンガラ)　×17.5



4．No.238Cの赤色顔料　×70

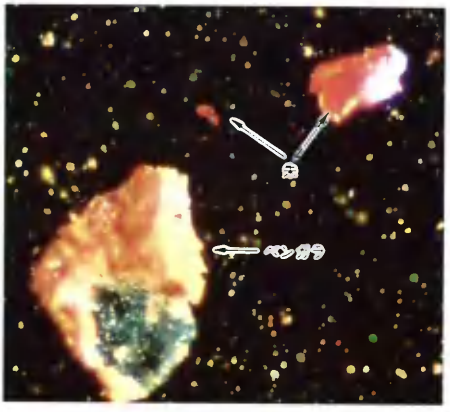


2．No.243の赤色顔料(パイプ状のベンガラ)　×175



5．No.238Cの赤色顔料(朱が主体)　×175

3．No.243の赤色顔料(パイプ状ベンガラ)透影像　×175



6．No.238Cの赤色顔料(朱とベンガラ)　×350

赤色顔料の顕微鏡写真

序

一般国道53号岡山北バイパスは、岡山市北部の交通混雑解消を目的として岡山市津島から御津郡御津町中山までの10.5kmにおいて計画されたバイパスで、昭和49年度から事業化している。これまでに、逐次部分供用を図り、平成７年度末までに6.9kmが供用され、混雑の解消に効果を上げるとともに、空港や高速ＩＣとのアクセス性が向上する他、新たな市街地の形成が図られてきた。

当バイパスの田益地区には田益新田遺跡、栢谷地区には西山古墳群が存在するため、これら遺跡の記録保存のため発掘調査を岡山県教育委員会に委託実施した。その結果、田益新田遺跡では建物の柱穴や溝などが発掘され、旧河道の中からは大量の土器が出土した。また、西山古墳群では12基の古墳や墳墓が発掘され、土器や鉄器・玉類などの遺物が出土し、この地が古代から多くの人々が生活していた場であることが明らかとなった。

本書は、この田益新田遺跡と西山古墳群の発掘調査の記録であり、これが埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、学術・文化等のため広く活用されることを期待するものである。

なお、この発掘調査ならびに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表します。

平成８年３月

建設省岡山国道工事事務所

所　長　酒　井　利　夫

序

岡山市北部の津高地区は、笹ヶ瀬川の沖積地に古代条里の跡をのこし、白鳳時代創建の富原北廃寺や奈良時代の駅家（津高駅）など重要な遺跡が集中しています。現在は国道53号が南北に貫いていますが、近年の交通量の増加や市街地から岡山空港、吉備高原都市へのアクセス道の充実を図るうえで、バイパスの建設が不可欠なものとなっていました。

岡山県教育委員会では、ルート設定の段階から、建設省岡山国道工事事務所と遺跡保存の協議を重ねてきましたが、路線内となる西山古墳群のうちの４基と、田益新田遺跡については記録による保存の処置を図ることとなり、発掘調査を実施したものです。なお、西山古墳群の調査中、新たに４基の古墳と４基の墳墓が見つかり、併せて発掘調査を実施しました。

調査の結果、西山古墳群の12基の古墳・墳墓は、いずれも６世紀中葉から７世紀前葉の間に築造されたことがわかりました。また、石室内からは、さまざまな副葬品など注目される資料も数多く出土しました。田益新田遺跡では、弥生時代から古墳時代前半にかけての集落跡の一端が明らかになりました。特に、旧河道からは大量の土器が出土するなど、貴重な資料を得ることができました。

本報告書が、文化財の保護・保存のために活用され、また、地域史研究の一助となれば幸いと存じます。

最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方から種々の御教示、御指導を得、また建設省岡山国道工事事務所をはじめ地元の関係各位からも御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成８年３月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩之助

例　言

1．本書は、一般国道53号（岡山北バイパス）建設工事に伴い、建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所の委託を受け、岡山県教育委員会が発掘調査を実施した報告書である。

2．本書には、岡山市田益に所在する田益新田遺跡と、岡山市栢谷に所在する西山古墳群を収載している。

3．発掘調査および報告書作成にあたっては国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

鎌木義昌（岡山理科大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）1992年２月まで
水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
角田　茂（元岡山市立岡輝中学校教諭）
西川　宏（元山陽女子高等学校教諭）
高橋　護（ノートルダム清心女子大学家政学部教授）1992年３月から
稲田孝司（岡山大学文学部教授）
小林博昭（岡山理科大学教養部教授）
絹川一徳（岡山大学文学部助手）

4．赤色顔料の分析は、本田光子氏（福岡市埋蔵文化財センター）に依頼し、有益な教示を得ることができた。記して深く感謝の意を表する次第である。

5．発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが担当し、田益新田遺跡（平成４年５月～平成５年３月）を内藤善史・野上恵司・村田秀石が、西山古墳群（平成４年11月～平成５年８月）を福田正継・渡辺武仁・山田明信・長川優・根木智宏が行なった。

6．報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて、平成５年９月から平成６年６月まで福田正継が、平成６年７月から平成７年３月まで内藤善史が専従し、文化財センター職員の協力を得て行なった。

7．本書の編集・構成は内藤が担当し、本文の執筆は、第１章・第２章・第３章は内藤が、第４章は福田が担当した。

8．本書に用いた高度は海抜高であり、方位は磁北である。

9．第２図は、国土地理院発行の1:25,000地形図「岡山北部」を複製し、加筆したものである。

10．本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺率は、下記のとおりに統一しているが、例外については縮尺率を明記している。

遺構

掘立柱建物1/60　　土壙・井戸1/30　　河道・溝断面図1/60

遺物

土器1/4　　石器1/2　　金属器・金属製品1/2　　玉類1/1

11．出土遺物ならびに図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325―３）において保管している。

本 文 目 次

序
例 言
目 次
第1章 地理的・歴史的環境 …… 1
第2章 調査の経緯および経過 …… 7
　第1節 調査の経緯 …… 7
　第2節 調査の体制 …… 8
　第3節 日誌抄 …… 10
第3章 田益新田遺跡 …… 11
　第1節 調査の経過 …… 11
　第2節 調査の概要 …… 15
　　(1) 河道および河道埋没以前の遺構 …… 19
　　(2) 河道埋没後の遺構・遺物 …… 57
　　(3) 古代・中世の遺構・遺物 …… 85
　第3節 小結 …… 87
第4章 西山古墳群 …… 93
　第1節 調査の経過 …… 93
　第2節 調査の概要 …… 95
　　1）各古墳および墳墓と出土遺物 …… 95
　　(1) 1号墳 …… 96
　　(2) 2号墳 …… 114
　　(3) 3号墳 …… 144
　　(4) 4号墳 …… 178
　　(5) 5号墳 …… 186
　　(6) 6号墳 …… 198
　　(7) 7号墳 …… 209
　　(8) 8号墓 …… 213
　　(9) 9号墓 …… 215
　　(10) 10号墓 …… 216
　　(11) 11号墳 …… 218
　　(12) 12号墓 …… 226
　　2）遺構に伴わない遺物 …… 227
　　(1) 古墳時代の遺物 …… 227
　　(2) 弥生時代の遺物 …… 230
　　(3) 縄文時代の遺物 …… 234

第３節　結語 ---------- 235
付　載　西山３号墳出土の赤色顔料について ---------- 261

図　目　次

地理的・歴史的環境

第１図　遺跡位置図 ---------- 1
第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000） ------- 2

田益新田遺跡

第１図　確認調査トレンチ位置図
（1/2,000） ---- 12
第２図　確認調査トレンチ断面柱状図
（1/60） ---- 13
第３図　遺跡調査範囲および
調査区図（1/1,000） ---- 14
第４図　検出遺構全体図（1/500） ---------- 16
第５図　南北（Ａ～Ｐ）土層断面図
（1/60） ---- 17
第６図　東西（Ｑ～Ｙ）土層断面図
（1/60） ---- 18
第７図　河道および河道埋没以前の
遺構配置図（1）（1/300）---20･21
第８図　河道および河道埋没以前の
遺構配置図（2）（1/300） ---- 22
第９図　河道－１断面図（1/60）・
出土遺物（1/4） ---- 23
第10図　河道－２断面図（1/120）・
出土遺物（1）（1/4） ---- 24
第11図　河道－２出土遺物（2）（1/4） ------- 25
第12図　河道－２出土遺物（3）（1/4） ------- 26
第13図　河道－２出土遺物（4）（1/4） ------- 27
第14図　河道－２出土遺物（5）（1/4） ------- 28
第15図　河道－２出土遺物（6）（1/4） ------- 29
第16図　河道－３断面図（1/60） ---------- 29
第17図　河道－４断面図（1/60）・
出土遺物（1）（1/4） ---- 30
第18図　河道－４出土遺物（2）（1/4） ------- 31
第19図　河道－４出土遺物（3）（1/4） ------- 32
第20図　河道－４出土遺物（4）（1/4） ------- 33
第21図　河道－４出土遺物（5）（1/4） ------- 34
第22図　河道－４出土遺物（6）（1/4） ------- 35
第23図　河道－４出土遺物（7）（1/4） ------- 36
第24図　河道－４出土遺物（8）（1/4） ------- 37
第25図　河道－４出土遺物（9）（1/4） ------- 38
第26図　河道－４出土遺物（10）（1/4） ---- 39
第27図　河道－４出土遺物（11）（1/4） ---- 40
第28図　河道－４出土遺物（12）（1/4） ---- 41
第29図　河道－４出土遺物（13）（1/4） ---- 42
第30図　河道－４出土遺物（14）（1/4） ---- 43
第31図　河道－４出土遺物（15）（1/4） ---- 44
第32図　河道－４出土遺物（16）（1/4） ---- 45
第33図　河道－４出土遺物（17）
（1/2･1/3） ---- 46
第34図　溝－２断面図（1/60） ---------- 46
第35図　溝－３断面図（1/60） ---------- 47
第36図　溝－４断面図（1/60）・
出土遺物（1/4） ---- 47
第37図　溝－５断面図（1/60） ---------- 47
第38図　溝－６・７出土遺物（1/4） ---------- 48
第39図　溝－８出土遺物（1/4） ---------- 48
第40図　溝－９・10断面図（1/60） ---------- 48
第41図　土壙－１（1/30）・
出土遺物（1/4） ---- 49
第42図　土壙－２（1/30）・
出土遺物（1/4） ---- 50
第43図　土壙－３（1/30）・
出土遺物（1/4） ---- 51
第44図　土壙－４（1/30）・

出土遺物（1/4） ···· 52
第45図　土壙－5（1/30） ···· 52
第46図　土壙－6（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 53
第47図　土壙－7（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 54
第48図　土壙－8（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 55
第49図　土壙－9（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 56
第50図　土壙－10（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 56
第51図　下がり出土遺物（1/4） ···· 56
第52図　河道埋没後の遺構配置図（1）
（1/300）···58·59
第53図　河道埋没後の遺構配置図（2）
（1/300） ···· 60
第54図　溝－12・13・16・18出土遺物
（1/2·1/4） ···· 61
第55図　建物－1（1/60） ···· 62
第56図　建物－2（1/60） ···· 62
第57図　建物－3・4（1/60） ···· 63
第58図　建物－5（1/60） ···· 64
第59図　建物－6・7（1/60）・建物－6
出土遺物（1/4） ···· 65
第60図　建物－8（1/60）・
出土遺物（1/4） ···· 66
第61図　建物－9・10（1/60） ···· 67
第62図　建物－11（1/60） ···· 68
第63図　建物－12（1/60） ···· 68
第64図　建物－13・14（1/60） ···· 69
第65図　建物－15・16（1/60）・建物－16
出土遺物（1/4） ···· 70
第66図　土器棺－1（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 71
第67図　土器棺－2（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 72
第68図　土壙－11（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 73
第69図　土壙－12（1/40）・
出土遺物（1/4） ···· 74
第70図　土壙－13（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 75
第71図　土壙－14（1/30）・
出土遺物（1）（1/4） ···· 76
第72図　土壙－14出土遺物（2）（1/4） ···· 77
第73図　土壙－15（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 78
第74図　土壙－16（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 79
第75図　土壙－17（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 80
第76図　土壙－18（1/30）・
出土遺物（1/4） ···· 81
第77図　土壙－19・20（1/30）・土壙－20
出土遺物（1/4） ···· 82
第78図　土壙－21（1/30） ···· 82
第79図　土壙－22（1/30） ···· 83
第80図　土壙－23（1/30） ···· 83
第81図　柱穴出土遺物（1/4） ···· 83
第82図　土器溜り－1出土遺物（1/4） ···· 84
第83図　土器溜り－2出土遺物（1/4） ···· 85
第84図　溝－20出土遺物（1/4） ···· 86
第85図　建物－17（1/60） ···· 86

西山古墳群

第1図　西山古墳群全体図（1/2,000） ···· 94
第2図　1号墳・10号墓調査前
周辺地形測量図（1/150） ···· 95
第3図　1号墳・10号墓調査後
周辺地形測量図（1/150） ···· 96
第4図　1号墳外護列石実測図（1/40） ···· 97
第5図　1号墳石室上面実測図（1/40） ···· 98
第6図　1号墳墳丘土層断面（1/40） ···· 99
第7図　1号墳石室実測図（1/40） ···· 101
第8図　1号墳遺物出土状況（1/40） ···· 104

第９図　１号墳出土土器（1/4） ---------- 105
第10図　１号墳出土鉄器（1）
（1/4,1/2） ---- 106
第11図　１号墳出土鉄器（2）（1/2） ------- 107
第12図　１号墳出土鉄器（3）（1/2） ------- 108
第13図　１号墳出土鉄器（4）（1/2） ------- 109
第14図　１号墳出土鉄器（5）（1/2） ------- 110
第15図　１号墳出土鉄器（6）（1/2） ------- 111
第16図　１号墳出土耳環（1/2） ---------- 112
第17図　１号墳出土玉類（1/1） ---------- 113
第18図　２号墳調査前周辺
地形測量図（1/150） ---- 114
第19図　２号墳調査後周辺
地形測量図（1/150） ---- 115
第20図　２号墳外護列石実測図（1/40） ---- 116
第21図　２号墳石室上面実測図（1/50） ---- 117
第22図　２号墳石室内箱式石棺
実測図（1/40） ---- 118
第23図　２号墳墳丘土層断面（1/40） ------- 119
第24図　２号墳石室実測図（1/40） ---------- 121
第25図　２号墳遺物出土状況（1/50） ------- 123
第26図　２号墳出土土器（1）（1/4） ------- 124
第27図　２号墳出土土器（2）（1/4） ------- 125
第28図　２号墳出土土器（3）（1/4） ------- 127
第29図　２号墳出土鉄器（1）（1/2） ------- 128
第30図　２号墳出土鉄器（2）（1/2） ------- 129
第31図　２号墳出土鉄器（3）（1/2） ------- 131
第32図　２号墳出土鉄器（4）（1/2） ------- 132
第33図　２号墳出土鉄器（5）（1/2） ------- 133
第34図　２号墳出土鉄器（6）（1/2） ------- 134
第35図　２号墳出土鉄器（7）（1/2） ------- 135
第36図　２号墳出土鉄器（8）（1/2） ------- 136
第37図　２号墳出土鉄器（9）（1/2） ------- 137
第38図　２号墳出土鉄器（10）（1/2） ------- 138
第39図　２号墳出土鉄器（11）（1/2） ------- 139
第40図　２号墳出土鉄器（12）（1/2） ------- 140
第41図　２号墳出土鉄器（13）（1/2） ------- 141
第42図　２号墳出土耳環（1/2） ---------- 142
第43図　２号墳出土玉類（1/1） ---------- 143
第44図　３号墳調査前周辺
地形測量図（1/150） ---- 144
第45図　３号墳調査後周辺
地形測量図（1/150） ---- 145
第46図　３号墳石室上面実測図（1/40） ---- 146
第47図　３号墳墳丘土層断面（1/40） ------- 147
第48図　３号墳石室実測図（1/40） ---------- 149
第49図　３号墳遺物出土状況（1/40） ------- 151
第50図　３号墳出土土器（1）（1/4） ------- 152
第51図　３号墳出土土器（2）（1/4） ------- 153
第52図　３号墳出土土器（3）（1/4） ------- 154
第53図　３号墳出土土器（4）（1/4） ------- 156
第54図　３号墳出土土器（5）（1/4） ------- 158
第55図　３号墳出土土器（6）（1/4） ------- 159
第56図　３号墳出土鉄器（1）（1/4） ------- 161
第57図　３号墳出土鉄器（2）（1/2） ------- 162
第58図　３号墳出土鉄器（3）（1/2） ------- 163
第59図　３号墳出土鉄器（4）（1/2） ------- 164
第60図　３号墳出土鉄器（5）（1/2） ------- 165
第61図　３号墳出土鉄器（6）（1/2） ------- 166
第62図　３号墳出土鉄器（7）（1/2） ------- 167
第63図　３号墳出土鉄器（8）（1/2） ------- 168
第64図　３号墳出土鉄器（9）（1/2） ------- 169
第65図　３号墳出土耳環（1/2） ---------- 169
第66図　３号墳出土玉類（1）（1/1） ------- 171
第67図　３号墳出土玉類（2）（1/1） ------- 172
第68図　３号墳出土玉類（3）（1/1） ------- 174
第69図　３号墳出土玉類（4）（1/1） ------- 175
第70図　３号墳出土玉類（5）（1/1） ------- 176
第71図　３号墳出土玉類（6）（1/1） ------- 177
第72図　４号墳調査前周辺
地形測量図（1/150） ---- 178
第73図　４号墳調査後周辺
地形測量図（1/150） ---- 179
第74図　４号墳石室上面実測図（1/40） ---- 180
第75図　４号墳墳丘土層断面（1/40） ------- 181
第76図　４号墳石室実測図（1/40） ---------- 183

第77図　4号墳出土鉄器・耳環（1/2）…… 185
第78図　5号墳調査前周辺
地形測量図（1/150）…… 186
第79図　5号墳調査後周辺
地形測量図（1/150）…… 187
第80図　5号墳石室上面実測図（1/40）…… 188
第81図　5号墳墳丘土層断面（1/40）…… 189
第82図　5号墳石室実測図（1/50）…… 191
第83図　5号墳遺物出土状況（1/50）…… 192
第84図　5号墳出土A陶棺
実測図（1/20）…… 193
第85図　5号墳出土B陶棺
実測図（1/20）…… 195
第86図　5号墳出土土器（1/4）…… 196
第87図　5号墳出土耳環（1/2）…… 197
第88図　5号墳出土玉類（1/1）・
鉄器（1/2）…… 197
第89図　6号墳調査前周辺
地形測量図（1/150）…… 198
第90図　6号墳調査後周辺
地形測量図（1/150）…… 199
第91図　6号墳石室上面実測図（1/40）…… 200
第92図　6号墳石室実測図（1/40）…… 200
第93図　6号墳墳丘土層断面（1/40）…… 201
第94図　6号墳遺物出土状況（1/40）…… 203
第95図　6号墳出土土器（1/4）…… 204
第96図　6号墳出土鉄器（1）（1/2）…… 206
第97図　6号墳出土鉄器（2）（1/3）…… 207
第98図　7号墳・8号墓・9号墓調査
前周辺地形測量図（1/150）…… 209
第99図　7号墳・8号墓・9号墓調査
後周辺地形測量図（1/150）…… 210
第100図　7号墳遺物出土状況（1/40）…… 211
第101図　7号墳石棺実測図（1/40）…… 211
第102図　7号墳出土遺物（1/4,1/2）…… 212
第103図　8号墓石棺実測図（1/40）…… 213
第104図　8号墓遺物出土状況（1/40）…… 214
第105図　8号墓出土鉄器（1/2）…… 214
第106図　9号墓石棺実測図（1/40）…… 215
第107図　10号墓石棺実測図（1/40）…… 217
第108図　11号墳・12号墓調査前周辺
地形測量図（1/150）…… 218
第109図　11号墳・12号墓調査後周辺
地形測量図（1/150）…… 219
第110図　11号墳外護列石実測図（1/40）…… 219
第111図　11号墳石室上面実測図（1/40）…… 220
第112図　11号墳石室実測図（1/40）…… 220
第113図　11号墳遺物出土状況（1/40）…… 221
第114図　11号墳出土土器（1/4）…… 222
第115図　11号墳出土鉄器（1/5,1/2）・
玉類（1/1）…… 225
第116図　12号墓埋葬施設および
遺物出土状況（1/40）…… 226
第117図　12号墓出土土器（1/4）…… 226
第118図　西山古墳群表土
出土土器（1）(1/4）…… 228
第119図　西山古墳群表土
出土土器（2）(1/4）…… 229
第120図　西山古墳群出土
弥生土器（1）(1/4）…… 231
第121図　西山古墳群出土
弥生土器（2）(1/4）…… 232
第122図　西山古墳群出土石器（1/3）…… 234
第123図　各古墳や墳墓の埋葬
施設規模（1/120）…… 236

表 目 次

田益新田遺跡

表－1　溝・溝状遺構一覧表 …… 90
表－2　建物一覧表 …… 91
表－3　土壙・土器棺一覧表 …… 92

西山古墳群

表－1　西山1号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表 …… 241
表－2　西山1号墳出土須恵器平瓶観察表 …… 241
表－3　西山1号墳出土須恵器甕観察表 …… 241
表－4　西山1号墳出土須恵器提瓶観察表 …… 241
表－5　西山2号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表 …… 241
表－6　西山2号墳出土須恵器壺観察表 …… 242
表－7　西山2号墳出土須恵器脚付壺観察表 …… 242
表－8　西山2号墳出土須恵器甕観察表 …… 242
表－9　西山2号墳出土須恵器提瓶観察表 …… 242
表－10　西山2号墳出土須恵器長脚無蓋高杯観察表 …… 242
表－11　西山2号墳出土須恵器短脚無蓋高杯観察表 …… 243
表－12　西山3号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表 …… 243
表－13　西山3号墳出土須恵器壺蓋観察表 …… 246
表－14　西山3号墳出土須恵器壺観察表 …… 246
表－15　西山3号墳出土須恵器椀観察表 …… 246
表－16　西山3号墳出土須恵器提瓶観察表 …… 246
表－17　西山3号墳出土須恵器横瓶観察表 …… 246
表－18　西山3号墳出土須恵器長脚無蓋高杯観察表 …… 246
表－19　西山3号墳出土須恵器短脚有蓋高杯観察表 …… 246
表－20　西山3号墳出土土師器壺形土器観察表 …… 247
表－21　西山3号墳出土土師器壺蓋観察表 …… 247
表－22　西山3号墳出土土師器甕形土器観察表 …… 247
表－23　西山3号墳出土土師器高杯形土器観察表 …… 247
表－24　西山5号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表 …… 247
表－25　西山5号墳出土須恵器壺観察表 …… 247
表－26　西山5号墳出土須恵器甕観察表 …… 247
表－27　西山5号墳出土須恵器提瓶観察表 …… 247
表－28　西山5号墳出土須恵器平瓶観察表 …… 248
表－29　西山5号墳出土須恵器高杯観察表 …… 248

表—30　西山６号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表 …… 248
表—31　西山６号墳出土須恵器提瓶観察表 …… 248
表—32　西山６号墳出土須恵器𤭯観察表 …… 249
表—33　西山６号墳出土土師器壺形土器観察表 …… 249
表—34　西山６号墳出土須恵器長脚無蓋高杯観察表 …… 249
表—35　西山７号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表 …… 249
表—36　西山11号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表 …… 249
表—37　西山11号墳出土須恵器壺蓋観察表 …… 249
表—38　西山11号墳出土須恵器壺観察表 …… 250
表—39　西山11号墳出土土師器壺形土器観察表 …… 250
表—40　西山11号墳出土土師器甕形土器観察表 …… 250
表—41　西山12号墓出土須恵器杯身・杯蓋観察表 …… 250
表—42　西山12号墓出土須恵器壺観察表 …… 250
表—43　西山古墳群表土出土須恵器甕観察表 …… 250
表—44　西山古墳群出土耳環計測表 …… 250
表—45　西山１号墳出土玉類計測表 …… 251
表—46　西山２号墳出土玉類計測表 …… 251
表—47　西山３号墳出土玉類計測表 …… 253
表—48　西山５号墳出土玉類計測表 …… 259
表—49　西山11号墳出土玉類計測表 …… 259

図版目次

巻頭図版１　１　１号墳遺物出土状況（西から）
　　２　２号墳遺物出土状況（南から）
　　３　２号墳奥壁部分遺物
　　出土状況（西から）
　２　１　３号墳遺物出土状況（西から）
　　２　３号墳遺物出土状況（西から）
　３　１　５号墳陶棺出土状況（西から）
　　２　６号墳遺物出土状況（北から）
　　３　11号墳遺物出土状況（南から）
　４　赤色顔料の顕微鏡写真
田益新田遺跡
図版１　１　工道４区（北から）
　　２　工道５区（南から）
　　３　工道２区（北から）
図版２　１　Ａ・Ｂ区（北東から）
　　２　Ａ・Ｂ—南区（北東から）
　　３　Ｃ区北半（南から）
図版３　１　Ｃ—東区北半（南から）
　　２　Ｄ区（北から）
　　３　Ｅ区（東から）
図版４　１　Ａ・Ｂ区河道—２検出状況（北東から）
　　２　河道—２断面（西から）
　　３　Ｂ—南区河道—４（北東から）
　　４　河道—４断面（南から）
図版５　１　溝—９・10（南から）
　　２　溝—９・10断面（南から）
　　３　溝—４・５（西から）
　　４　溝—４断面（南から）

図版6　1　建物―2（南東から）
2　建物―12（南から）
3　建物―15・16（東から）
4　建物―17（南から）
図版7　1　土器棺―1（南から）
2　土壙―17（南東から）
3　土壙―1（東から）
4　土壙―2（北から）
5　土壙―14断面（南から）
6　土壙―14（南から）
7　土壙―3断面（西から）
8　土壙―3（西から）
図版8　河道―1・2出土遺物
図版9　1　河道―2出土遺物
2　河道―4出土遺物（1）
図版10　河道―4出土遺物（2）
図版11　河道―4出土遺物（3）
図版12　河道―4出土遺物（4）
図版13　河道―4出土遺物（5）
図版14　河道埋没以前の溝・土壙出土遺物
図版15　河道埋没後の土壙出土遺物
図版16　土壙―14出土遺物
西山古墳群
図版17　1　西山古墳群遠景（東から）
2　西山古墳群全景（東から）
3　1号墳全景（北西から）
4　1号墳石室全景（西から）
図版18　1　1号墳石室全景（南から）
2　1号墳石室全景（南から）
3　1号墳西側墳丘土層断面（南西から）
図版19　1　2号墳全景（南西から）
2　2号墳石室内遺物出土状況（東から）
3　2号墳奥壁部分遺物
出土状況（東から）
図版20　1　2号墳石室全景（南から）
2　2号墳石室内検出箱式石棺（南から）
3　2号墳北側墳丘土層断面（北東から）
図版21　1　3号墳全景（南から）
2　3号墳石室上面（西から）
3　3号墳石室入口部分（南から）
図版22　1　3号墳石室内遺物出土状況（南から）
2　3号墳石室内遺物出土状況（北から）
3　3号墳石室内玉類出土状況（西から）
図版23　1　3号墳奥壁部分（南から）
2　3号墳玄室入口部分（北から）
3　3号墳玄室左側壁
石組み状況（西から）
図版24　1　4号墳全景（南西から）
2　4号墳石室全景（南から）
3　4号墳石室全景（北から）
4　4号墳石室全景（東から）
図版25　1　5号墳陶棺出土状況（南から）
2　5号墳陶棺出土状況（東から）
3　5号墳石室全景（西から）
図版26　1　5号墳石室全景（南から）
2　5号墳全景（北西から）
3　6号墳全景（北から）
図版27　1　6号墳埋葬施設内遺物
出土状況（西から）
2　6号墳埋葬施設南側小口部分
遺物出土状況（北から）
3　6号墳埋葬施設北側小口部分
遺物出土状況（南から）
図版28　1　7号墳全景（東から）
2　7号墳埋葬施設遺物
出土状況（南から）
3　7号墳埋葬施設北側
小口部分（南から）
図版29　1　8号墓全景（東から）
2　9号墓全景（東から）
3　10号墓全景（東から）
図版30　1　11号墳全景（東から）
2　11号墳埋葬施設内遺物
出土状況（東から）
3　11号墳埋葬施設北側遺物
出土状況（南から）

図版31　1　12号墓全景（東から）
　　2　5号墳・7号墳・8号墓作業風景
　　（南から）
　　3　11号墳埋葬施設内
　　作業風景（南から）
図版32　1号墳・2号墳出土土器
図版33　2号墳・3号墳出土土器
図版34　3号墳出土土器
図版35　3号墳出土土器
図版36　3号墳・5号墳出土土器
図版37　6号墳・7号墳・11号墳出土土器
図版38　11号墳・12号墓・表土出土土器、耳環
図版39　5号墳出土A陶棺（上）・B陶棺（下）
図版40　1　2号墳出土玉類
　　2　3号墳出土玉類（1）
図版41　1　3号墳出土玉類（2）
　　2　3号墳出土玉類（3）
図版42　1　3号墳出土玉類（4）
　　2　3号墳出土玉類（5）
図版43　1　3号墳出土玉類（6）
　　2　1号墳・5号墳・11号墳出土玉類
図版44　西山古墳群出土鉄器
図版45　1号墳出土鉄器（1）
図版46　1号墳出土鉄器（2）
図版47　1号墳出土鉄器（3）
図版48　1号墳出土鉄器（4）
図版49　2号墳出土鉄器（1）
図版50　2号墳出土鉄器（2）
図版51　2号墳出土鉄器（3）
図版52　2号墳出土鉄器（4）
図版53　2号墳出土鉄器（5）
図版54　2号墳出土鉄器（6）
図版55　2号墳出土鉄器（7）
図版56　3号墳出土鉄器（1）
図版57　3号墳出土鉄器（2）
図版58　3号墳出土鉄器（3）
図版59　3号墳出土鉄器（4）
図版60　3号墳出土鉄器（5）
図版61　3号墳出土鉄器（6）
図版62　4号墳・6号墳出土鉄器
図版63　6号墳出土鉄器
図版64　7号墳・8号墳・11号墳出土鉄器

第１章　地理的・歴史的環境

地理的環境

田益新田遺跡は岡山市田益に、西山古墳群は岡山市栢谷に所在する遺跡である。

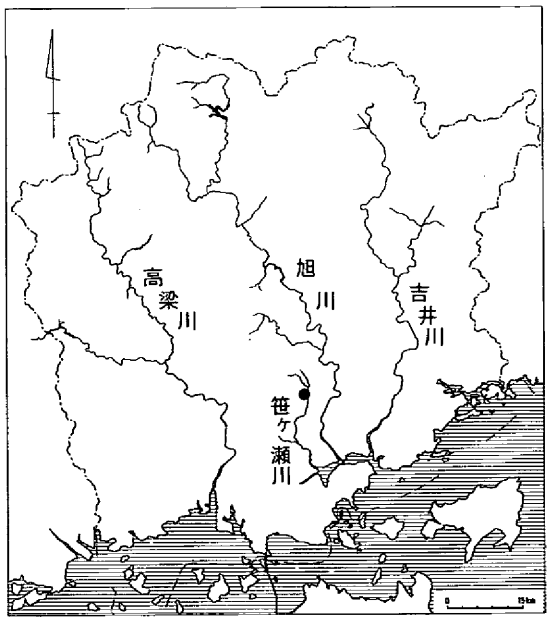
岡山県には、いずれも中国山地に源を発し県の中央部に広がる吉備高原を貫いて、ほぼ南北に流走して瀬戸内海に注ぐ吉井川・旭川・高梁川の三大河川があり、南部に肥沃な沖積平野を形成している。

その三大河川の一つ旭川の西側を、吉備高原に源を発した笹ヶ瀬川が瀬戸内海に流下している。笹ヶ瀬川は、岡山平野の北側に広い谷底平野を形成している。また、谷底平野の両側には吉備高原南端部の標高20～300ｍの丘陵地が延びている。この笹ヶ瀬川流域を中心にした岡山市北部の地域（東部は岡山市の高野尻・畑鮎・宿、南部は岡山市の津島、西部は岡山市の一宮地区、北部は御津郡御津町に接している。）は現在津高地区と称され、津高・富原・横井上・田益・栢谷・吉宗・菅野・高野・田原・富吉・三和・日応寺の12の地区で構成されている。

津高の津は古来港を意味しており、吉備高原南端の丘陵が港に面したところとの意から「津高」と称されたのであろう。『和名抄』に記載されている備前國津高郡の津高郷は、現在の津高地区にほぼ比定され、奈良時代には山陽道が東西に走り、津高驛が設けられていた古代交通の要衝である。現在古代山陽道のルートは明らかにされていないものの、津高地区の南部を通って一宮方面に抜けていたものとみられる。また、津高地区では現在でも整然とした条里の区割りが窺われ、津高地区の中央部には、条里の区割りに従って、香橋池が築造されている。この香橋池に面した笹ヶ瀬川西側丘陵の東斜面に西山古墳群がある。また、田益新田遺跡は香橋池から600ｍ程南の笹ヶ瀬川右岸の沖積地、西側丘陵の南東裾部に位置している。

西山古墳群が所在している栢谷は、笹ヶ瀬川の谷底平野の中央部にあり、かつては「かやだに」とも呼ばれていたが、現在は「かいだに」である。栢谷村は、明治22年の町村制施行時に吉宗村・菅野村と３村が合併して野谷村になった。一方田益新田遺跡の所在する田益は、横井上村の枝村の田中・益井の両村が合併して生まれた村で、栢谷のすぐ南隣に位置している。田益村は、町村制施行で横井上村・富原村・中原村と４村が合併して横井村になった。この野谷村と横井村が昭和34年に合併して津高町が生まれた。これが、現在の津高地区の原形となっている。(1)

津高町は、昭和46年に岡山市に編入され現在に至っている。

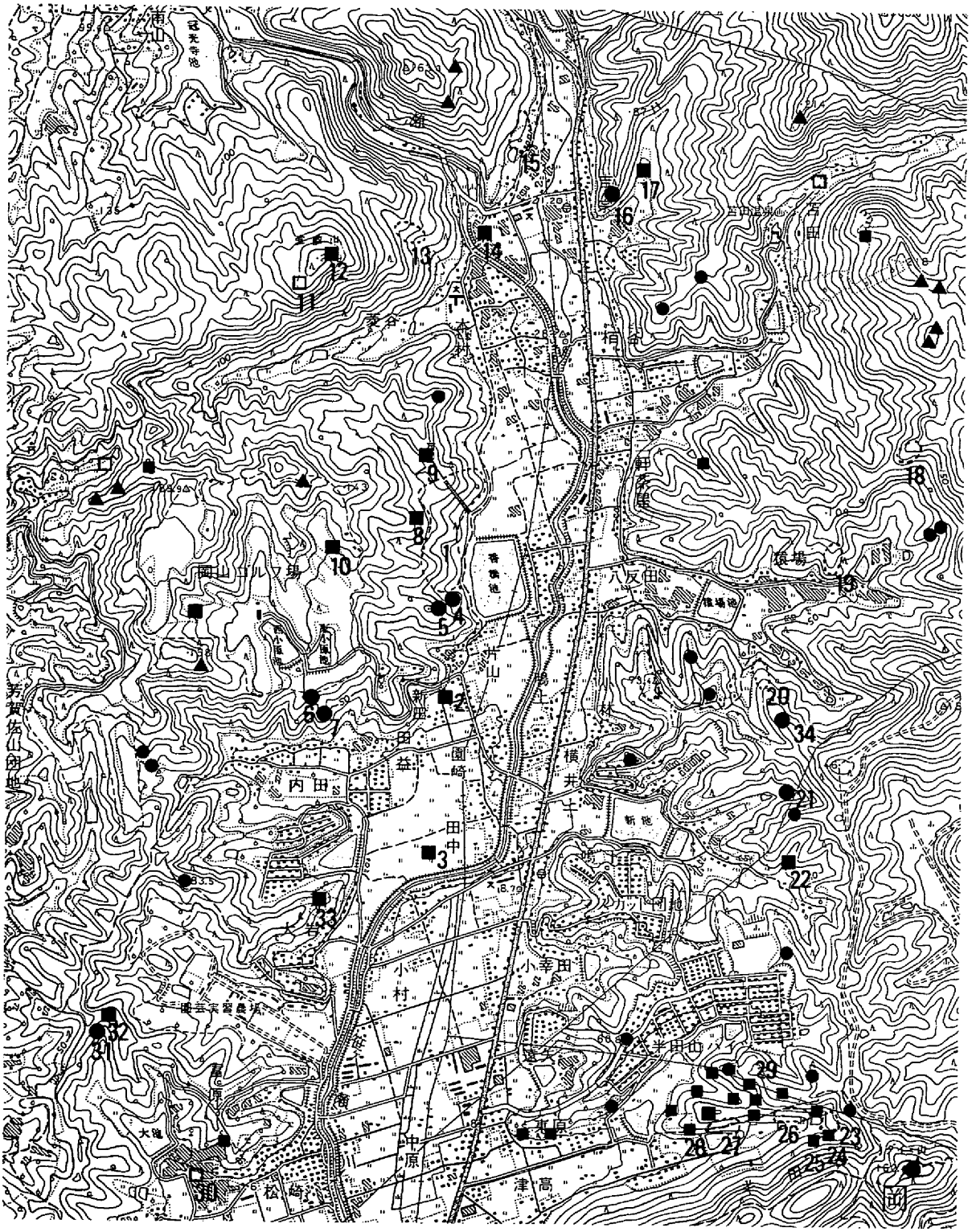


第１図　遺跡位置図

歴史的環境

遺跡の所在している津高地区は、古くは津高郡津高郷にあたる地域である。

当該遺跡周辺の津高地区においては旧石器・縄文時代の遺跡は知られていないものの、山陽自動車道建設に伴う田益田中遺跡の発掘調査で、自然河道の底などから縄文時代後期・晩期の土器片が出土している。[2] また、今回の田益新田遺跡の調査においても、河道の埋土中から若干磨耗はしているも



第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

のの、縄文時代後期・晩期の土器片が弥生時代前期の土器と共に出土しており、遺跡の周辺部あるいは上流部に縄文時代の集落跡などが存在していたものと推定される。

弥生時代の遺跡で特に著名なものとして、津高地区南部の岡山平野を見下ろす半田山山塊と烏山の間の鞍部に弥生時代の墳丘墓、都月坂２号弥生墳丘墓がある。尾根の隆起部を利用して長辺約20m・短辺約16m・高さ約２mの長方形の墳丘が築造され、墳丘のほぼ中央には竪穴式石室が構築されている。[3]この都月坂には、引き続いて最古の埴輪とされる「都月型」を出土した都月坂１号墳をはじめ、古墳時代初頭の古墳が築造されている。都月坂１号墳は全長33mを測る小形の前方後方墳で、尾根の自然地形を利用して二段に築成され、後方部中央に墳丘長軸に対して直角方向に竪穴式石室が設けられている。[4]また、烏山から南方に延びる尾根上にも、約９基からなる七つ坑古墳群が築かれている。古墳群の中核となる七つ坑１号墳は全長47.5mを測る前方後方墳で、前方部と後方部の中央にそれぞれ竪穴式石室が構築されているが、後方部のものは長さ5.1m・幅0.9mを測り、割竹形木棺が置かれたものとみられる。一方前方部の石室は長さ1.45m・幅0.45～0.5mほどの小形なものである。くびれ部斜面などからは、「都月型」の特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪がみつかっている。[5]半田山丘陵は、弥生時代の終末から古墳時代初頭にかけて墓制の変遷をたどるうえで重要な地域である。

このほかに弥生時代の遺跡として、半田山山塊の北側にある丘陵で近年団地の造成に伴い発掘調査が行なわれ、猪ノ坂東遺跡や新田上東遺跡から弥生時代中期末の竪穴住居が検出された。さらに、猪ノ坂遺跡・猪ノ坂南遺跡・新田上遺跡・新田上西遺跡などでも弥生時代後期の竪穴住居が検出され、集落跡の存在が明らかとなっている。[6]また、清水谷遺跡は平成５年に岡山理科大学が発掘調査を行ない、弥生時代後期から末にかけての木棺墓６が検出されている。[7]一方、笹ヶ瀬川を挟んだ西側の丘陵上では、山陽自動車道建設に伴う大岩遺跡の発掘調査で、弥生時代中期後半から後期の竪穴住居や弥生時代後期の袋状土壙が検出され、弥生時代集落の一端が明らかになった。[8]なお、笹ヶ瀬川の沖積地には弥生土器の散布している国司遺跡[9]や田益田中遺跡がある。田益田中遺跡では、弥生時代前期から中期にかけて機能した溝や、弥生時代中期の土壙墓、弥生時代から古墳時代の竪穴住居・井戸・土

周辺の主要遺跡名称

1．西山古墳群
2．田益新田遺跡
3．田益田中遺跡
4．片山２号墳
5．片山１号墳
6．青谷３号墳
7．青谷５号墳
8．散布地（古代）
9．神輪神社遺跡
10．小原山製鉄遺跡
11．堂敷山廃寺
12．堂敷山弥生遺跡
13．平岩古墳群
14．国司遺跡
15．横山古墳群
16．大谷古墳
17．大谷製鉄遺跡
18．猿場北奥古墳群
19．猿場古墳群
20．猿場池南奥古墳群
21．白壁古墳
22．白壁奥遺跡
23．佐良池谷尻古墳群
24．奥池遺跡・古墳群
25．立越南遺跡
26．擂鉢池炭窯・擂鉢池古墳群
27．佐良池古墳群
28．新田上南遺跡
29．猪ノ坂東遺跡
30．荒神廃寺
31．富原西奥古墳
32．富原大池奥山遺跡
33．大岩遺跡
34．清水谷遺跡

壙などの遺構が検出された。また、自然河道の上層からは弥生時代後期の土器などが大量に出土し、河底からは石鏃・石庖丁・石鍬・石鎌などの石器、木製の鍬先や鋤先が出土している。[10] この津高地区において弥生時代等の水田遺構はまだ検出されていないものの、丘陵上のみならず笹ヶ瀬川の沖積地に弥生時代すでに集落が営まれ、弥生時代後期から古墳時代初頭にはかなり大規模な集落に発展していたようである。

古墳時代前期には、半田山山塊のダイミ山山頂に一辺20mの方墳ダイミ山古墳が、半田山山塊北側の丘陵上に猪ノ坂東古墳などが築かれている。また、津高地区中央部では、笹ヶ瀬川の沖積地を望む左岸の苫田山から南西に延びる尾根先端部に一辺16mの方墳大谷古墳が、笹ヶ瀬川右岸の西山古墳群のすぐ南には径15m程の円墳、片山1号墳が築造されている。このほか、笹ヶ瀬川両岸の丘陵上に前期古墳とみられる方墳・円墳数基確認されている。古墳時代後期には、笹ヶ瀬川左岸側の丘陵上に、猿場古墳群・猿場北奥古墳群・佐良池古墳群・擂鉢池古墳群等の古墳群が所在している。笠井山から南西に派生する丘陵の南斜面に1基独立して所在している白壁古墳は、墳丘の約1／3が山陽自動車道建設の用地に含まれたため、用地内の発掘調査が行なわれた。調査の結果、径19m程の円墳で主体部は横穴式石室をもつ古墳で、6世紀後半頃築造され、7世紀後半から8世紀代まで数次の追葬が行われたものとみられる。[11] 半田山の北側にある丘陵の団地造成に伴う発掘調査では、奥池遺跡・立越南遺跡で製鉄炉や長形炭窯が検出され、6世紀代にここで製鉄集団の集落が営まれたことが明らかとなり、同時期の奥池古墳群はこれら製鉄集団により築造されたものとみられる。この丘陵では先端部に向かい、6世紀末から7世紀に擂鉢池古墳群が、7世紀代には佐良池古墳群が築かれ、また、猪ノ坂南遺跡東地点で製鉄炉が、猪ノ坂谷奥遺跡・新田上南遺跡・猪ノ坂東遺跡南斜面において長形炭窯が発掘され、この地域で6世紀から7世紀代にかけて大規模な鉄生産集落の存在が確認された。[12] 一方、笹ヶ瀬川右岸の丘陵上では、横山古墳群・平岩古墳群等の古墳群が所在し、田益新田遺跡の西側東小原池南側の丘陵上には、径20mを測る青谷3号墳が、さらに南東には青谷5号墳が所在している。青谷5号墳は、一般県道岡山・賀陽線（吉備新線）建設に伴って発掘調査され、径15m程の円墳で6世紀末頃に築造されたことが明らかになっている。[13]

津高地区南部には、白鳳時代に創建されたと考えられている富原北廃寺（荒神廃寺）[14]や古代山陽道の津高駅に推定されている富原遺跡（矢望城廃寺）、[15] これに伴う瓦窯址である上の段窯址などの遺跡が所在している。富原北廃寺は、四至・伽藍配置等不明であるが、数多く出土している瓦の出土場所などから方一町ないし一町半の寺域が推定されている。瓦は白鳳時代から白鳳時代末期のものと奈良時代の差し替え瓦と考えられるものとが出土している。富原遺跡は、かつて富原南廃寺・才の木廃寺とも呼ばれていたもので、遺構等は不明であるが出土する瓦はほとんど奈良時代のものである。[16]『延喜式』巻二十八、兵部省に「備前國驛馬　坂長。珂磨。高月各廿疋。津高十四疋。」とある「津高驛」を中世の宿辛川に求める説もあるが、近年ではこの富原遺跡に津高驛に想定する説が有力である。[17]

富原西奥古墳は、これらの遺跡を見下ろすように築造された古墳で、山陽自動車道に伴い発掘調査され、墳丘は一辺7.6～7.7mのやや不整形な方墳で、7世紀中頃に築造された終末期古墳であることが明らかとなっている。[18]

津高地区の低地部は条里地割の痕跡をとどめ、その一部は「津高庄」として東寺領となっていた。[19] 津高地区中・北部の丘陵上あるいは斜面において製鉄関連の遺跡や積石・磐座などがあり、古代から中世にかけても、祭祀跡・中世墓・城跡など人々の営みのあとは絶えることがない。

註

1．岡山市地名研究会『岡山市の地名』岡山市　1989年
　『岡山県市町村合併誌　総編』岡山県　1960年
2．『岡山県埋蔵文化財報告』22　岡山県教育委員会　1992年
3．近藤義郎「都月坂2号弥生墳丘墓」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県　1986年
4．近藤義郎「都月坂1号墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県　1986年
5．近藤義郎ほか「岡山市七つ坑古墳群」七つ坑古墳群発掘調査団　1987年
6．岡山市教育委員会「津高住宅団地造成地内遺跡発掘現地説明会資料」1991年
7．白石純氏の教示による。1993年に岡山理科大学が発掘調査を実施した。
8．『岡山県埋蔵文化財報告』23　岡山県教育委員会　1993年
9．『岡山県埋蔵文化財報告』20　岡山県教育委員会　1990年
10．註2
11．松本和男「白壁古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』83　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1993年
12．註6
13．氏平昭則氏の教示による。1994年に岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した。
14．富原北廃寺の名称はかつて「津高北寺」・「富原荒神廃寺」などと称され、『岡山市遺跡地図』では「荒神廃寺」と記載されている。
15．富原遺跡は「津高南寺」「富原矢望城廃寺」などと称されていたもので、『岡山市遺跡地図』では「矢望城廃寺」と記載されている。
16．伊藤晃「富原北廃寺・富原遺跡」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県　1986年
　巌津政右衛門「岡山平野の平地伽藍」『岡山市史』古代編　岡山市　1962年
　永山卯三郎『岡山県通史』上編　岡山県　1930年　岡山県通史刊行会　1984年復刻
17．高橋美久二「情報を制するものは」『古代史復元』9　講談社　1989年
18．松本和男「富原西奥古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』83　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1993年
19．石田寛「岡山市隣接地域の条里」『岡山市史』古代編　岡山市　1962年
　巌津政右衛門「駅伝」『岡山市史』古代編　岡山市　1962年

第2章　調査の経緯および経過

第1節　調査の経緯

岡山北バイパスは、一般国道53号の交通需要増大に対応するために計画されたバイパスである。また、山陽自動車道岡山インターチェンジの受け皿、岡山空港・吉備高原へのアクセス道路として使用されるものである。昭和49年度から事業化され、昭和50年9月23日に岡山市津島から岡山市吉宗の総延長約7.4kmが、都市計画決定された。この事業について、事業主体である建設省より、用地内にある遺跡について早期調査が要望されていたものである。

工事区間内には、国司遺跡（岡山市吉宗）・西山古墳群（岡山市栢谷）・片山古墳群（岡山市田益）の三遺跡が所在しているとみられ、平成2年度以降に発掘調査を行なうことが予定されていた。このうち、国司遺跡については平成元年6月13日に、建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育庁文化課・岡山県古代吉備文化財センターの三者で協議（以下、三者協議）が行なわれ、順調に用地買収などの準備が進んでおり、急遽平成元年9月に調査が行なわれた。

西山古墳群・片山古墳群の両遺跡については、平成2年6月19日の三者協議で、保安林の解除や未買収地の関係で発掘調査には入れないことが明らかとなり、延期されることになった。特に、西山古墳群にかかる未買収地については、収用の完了が平成4年10月にまでずれ込むことになった。その後、平成3年2月に山陽自動車道の建設に伴い「津高条里遺跡」の確認調査が行なわれ、弥生時代の集落跡（田益田中遺跡）の存在が明らかになった。岡山北バイパス建設用地内の田益地区においても、遺跡のひろがることが予想されるため、平成4年1月14日に確認調査が行なわれ、田益新田遺跡の存在が明らかとなった。このため、新たに周知の遺跡として田益新田遺跡が加えられた。これら三遺跡の発掘調査は、平成4年度から行なわれることで建設省と岡山県の間で委託契約がかわされた。

平成4年4月27日の三者協議では、発掘調査は年度後半から行なわれることになるが、田益新田遺跡の工事用道路部分については、工事が急がれるため先行して5月から調査することに、また、片山古墳群は所在している位置が明確でないため、事前に再度現地踏査を行い確認することになった。

田益新田遺跡は、平成4年5月25日から断続的に工事用道路部分の調査を調査員1名で行ない、平成4年11月1日からは、調査員3名により発掘調査を実施した。排土は調査対象地外に搬出することができず、うって返しで調査をすすめることになり、煩雑なものとなった。しかし、遺跡は後世に削平を受けていたり、さらに、調査区内を数本の河道が横切るなどで遺構の遺存状態は、それほど良好なものではなかったため、平成4年度末に調査を終了することができた。

西山古墳群は、調査員4名で平成4年11月1日から調査に着手した。一次調査の結果では、工事用地内に4基の古墳（1～4号墳）が所在していると考えられていたが、発掘調査に入った平成4年12月には、かつて未買収地で確認調査をすることのできなかった別荘の跡地に、地元の人から石室らしいものがあったとの話があり、確認したところ新たに古墳（5号墳）の存在することが明らかになった。また、3号墳の調査での立木伐開時においては、西側に円形の墳丘が新たに認められ、確認した

ところ6号墳が発見された。平成5年2月には、4号墳の墳丘調査のため周辺部の表土除去中に、2基の小石室（7号墳・8号墓）が確認されるなどした。これらの状況からみて小規模な古墳がさらに発見される可能性が高く、やや詳細な確認調査を行なった。その結果、4号墳の横で9号墓を、1号墳の横で10号墓を、また、3号墳の北側で11号墳・12号墓が発見された。そのため、年度内に調査を終了することは不可能になり、平成4年度には、当初からの古墳4基を調査し、この調査の過程で発見された古墳4基・墳墓4基は、平成5年4月から8月まで調査員3名で発掘調査された。

片山古墳群は、確認の結果1号墳・2号墳とも工事用地外に所在していることが明らかとなり、片山1号墳から東へのびる尾根上でも古墳は確認されず、調査の必要はなくなった。

報告書の作成は、平成5年9月から平成6年6月まで西山古墳群を、平成6年7月から平成7年3月まで田益新田遺跡を専従職員1名で行ない、平成7年度に印刷・刊行されることになった。

第2節　調査の体制

国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

鎌木　義昌	岡山理科大学教授、岡山県文化財保護審議会委員（1992年2月まで）
水内　昌康	岡山県文化財保護審議会委員
角田　　茂	元岡山市立岡輝中学校教諭
西川　　宏	元山陽女子高等学校教諭
高橋　　護	ノートルダム清心女子大学家政学部教授（1992年3月から）
稲田　孝司	岡山大学文学部教授
小林　博昭	岡山理科大学教養部教授
絹川　一徳	岡山大学文学部助手

平成4年度

岡山県教育委員会		主査	石井　　茂
教育長	竹内　康夫	主任	石井　善晴
教育次長	森崎岩之助	主任	三宅　秀吉
岡山県教育庁文化課		調査第二課	
課長	渡邊　淳平	課長	正岡　睦夫
課長代理	大橋　義則	第三係	
課長補佐（埋蔵文化財係長）	柳瀬　昭彦	課長補佐（係長）	山磨　康平
主査	時長　　勇	文化財保護主査	内藤　善史（調査担当）
岡山県古代吉備文化財センター		文化財保護主査	野上　恵司（調査担当）
所長	横山　常實	主事	村田　秀石（調査担当）
次長	河本　　清	調査第三課第二係	
文化財保護参事	葛原　克人	係長	福田　正継（調査担当）
総務課		文化財保護主任	山田　明信（調査担当）
課長	北原　　求	文化財保護主事	長川　　優（調査担当）
課長補佐（係長）	小西　親男	主事	根木　智宏（調査担当）

平成5年度

岡山県教育委員会
　教育長　森崎岩之助
　教育次長　岸本　憲二
岡山県教育庁文化課
　課長　渡邊　淳平
　課長代理　松井　新一
　課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功
　主査　時長　勇
岡山県古代吉備文化財センター
　所長　横山　常實
　次長　葛原　克人
　　総務課
　課長　北原　求
　課長補佐（係長）　小西　親男
　主査　石井　茂
　主査　石井　善晴
　主任　三宅　秀吉
　　調査第三課
　課長　柳瀬　昭彦
　　第一係
　係長　福田　正継（調査担当）
　　（報告書担当）
　文化財保護主査　渡辺　武仁（調査担当）
　文化財保護主任　山田　明信（調査担当）
　調査補助員　藤岡　耕一

平成6年度

岡山県教育委員会
　教育長　森崎岩之助
　教育次長　岸本　憲二
岡山県教育庁文化課
　課長　大場　淳
　課長代理　松井　新一
　課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功
　主任　若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター
　所長　河本　清
　次長　葛原　克人
　　総務課
　課長　丸尾　洋幸
　課長補佐（係長）　杉田　卓美
　主査　石井　善晴
　主任　三宅　秀吉
　　調査第三課
　課長　柳瀬　昭彦
　文化財保護主幹　福田　正継（報告書担当）
　第二係
　係長　江見　正己
　文化財保護主査　内藤　善史（報告書担当）

調査期間中、亀田修一氏（岡山理科大学）をはじめ、文化財センター職員の諸氏からも貴重なご助言をいただきました。特に西山古墳群の鉄器は尾上元規氏に、陶棺は横田美香氏にご協力を得た。また、建設省岡山国道事務所をはじめとする関係機関、地元の方々から有形無形のご援助、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

第3節　日　誌　抄

平成4年

5月25日　田益新田遺跡資材搬入、表土除去
5月26日　田益新田遺跡工道1区調査開始
6月1日　田益新田遺跡工道2区調査開始
6月4日　田益新田遺跡工道1区調査終了
6月11日　田益新田遺跡工道3区調査開始
6月15日　田益新田遺跡工道2区調査終了
6月20日　田益新田遺跡工道4区調査開始
6月22日　田益新田遺跡工道3区調査終了
7月10日　田益新田遺跡工道4区調査終了
9月1日　田益新田遺跡工道5区調査開始
10月12日　田益新田遺跡工道5区調査終了
11月2日　田益事務所開設
11月4日　西山古墳群資材搬入、調査準備
11月5日　西山古墳群1・2号墳調査開始
11月9日　田益新田遺跡A区調査開始
11月12日　西山古墳群4号墳調査開始
11月18日　田益新田遺跡A一南区調査開始
11月19日　西山古墳群3号墳調査開始
12月2日　田益新田遺跡B区調査開始
12月10日　片山古墳群確認踏査
12月25日　田益新田遺跡B一南区調査開始

平成5年

1月12日　田益新田遺跡A・B区調査終了
1月13日　文化財保護対策委員会開催
1月25日　田益新田遺跡C一東区調査開始
1月29日　所内会議を田益事務所にて開催
　田益新田遺跡・西山古墳群見学
2月3日　田益新田遺跡A・B一南区調査終了
2月9日　田益新田遺跡C区調査開始
2月15日　田益新田遺跡D・D一東区調査開始
2月23日　西山古墳群4号墳調査終了
3月4日　田益新田遺跡E・E一東区調査開始
3月7日　西山古墳群地元町内会を対象とした現地説明会開催
3月11日　田益新田遺跡C一東区調査終了
3月18日　田益新田遺跡D・D一東区調査終了
3月19日　西山古墳群空中写真撮影
3月22日　西山古墳群1号墳調査終了
3月23日　西山古墳群2・3号墳調査終了
3月26日　田益新田遺跡E一東区調査終了
3月30日　田益新田遺跡C・E調査終了
4月5日　西山古墳群5・6号墳調査開始
4月10日　津高公民館講座〈ふる里探訪〉西山古墳群現地見学
4月16日　西山古墳群11号墳調査開始
4月21日　西山古墳群7号墳、8・9号墓調査開始
5月20日　西山古墳群10号墓調査開始
6月11日　西山古墳群10号墓調査終了
6月16日　西山古墳群7号墳、8・9号墓調査終了
6月28日　文化財保護対策委員会開催
　西山古墳群12号墓調査開始
7月6日　西山古墳群12号墓調査終了
7月7日　建設省職員研修西山古墳群現地見学
7月25日　西山古墳群現地説明会開催
7月30日　西山古墳群6・11号墳調査終了
7月31日　西山古墳群5号墳調査終了、片づけ
8月31日　田益事務所撤収

第3章　田益新田遺跡

第1節　調査の経過

田益新田遺跡は当初の段階では遺跡として周知されてはいなかったが、平成3年2月に山陽自動車道建設に伴い、「津高条里遺跡」の確認調査が実施され、新たに弥生時代の集落跡（田益田中遺跡）の存在が明らかになった。この山陽自動車道と交差して建設される岡山北バイパス予定地内においても、遺跡のひろがることが予想されるため、急遽文化財保護サイドによる負担において確認調査が要請された。このため、平成4年1月14日河本清次長により確認調査を実施した。その概要報告をまとめると以下のとおりである。

確認調査の概要

調査は岡山北バイパス予定地のうち原地形を残す市道から北側の地域を対象にして、用地交渉の妥結した個所にトレンチを12か所設定し、重機を用いて実施した。

T－1からT－5までは現況が水田を呈する所である。各トレンチにみる土層の堆積状態は、ほぼ似かよった状況が看取される。ことに、下層の二層（T－1の第3・4層、T－2・4・5の第6・7層、T－3の第5・6層）は黄色粘土と白灰色粘土で形成されている。これらの層は無遺物層でこの平地の基盤土壌と考えられる堆積状態である。ここでは基盤層を掘り込む遺構は検出されず、中・近世の水田層をことさらにとりざたしなければ遺跡との競合はないものと思われた。出土遺物はT－2の第4層とT－5の第2層で1点づつ出土した。時期は弥生～中世と推定される小破片である。

T－6では、地表下－114cmの部位で第4・5層を切り込む東西溝が検出された。溝は上面幅46cm、底部幅30cm、深さ約30cmで溝低部には微砂の堆積がみられる。溝を埋める第3層は南に厚く、北に薄い。つまり基盤層の第4層の上面は北に高くなっていく状況がうかがわれる。出土遺物の弥生時代後期土器片2点は、第3層下部の溝の北肩部に近い所と、北に70cmばかり離れた所の二地点から出土したものである。

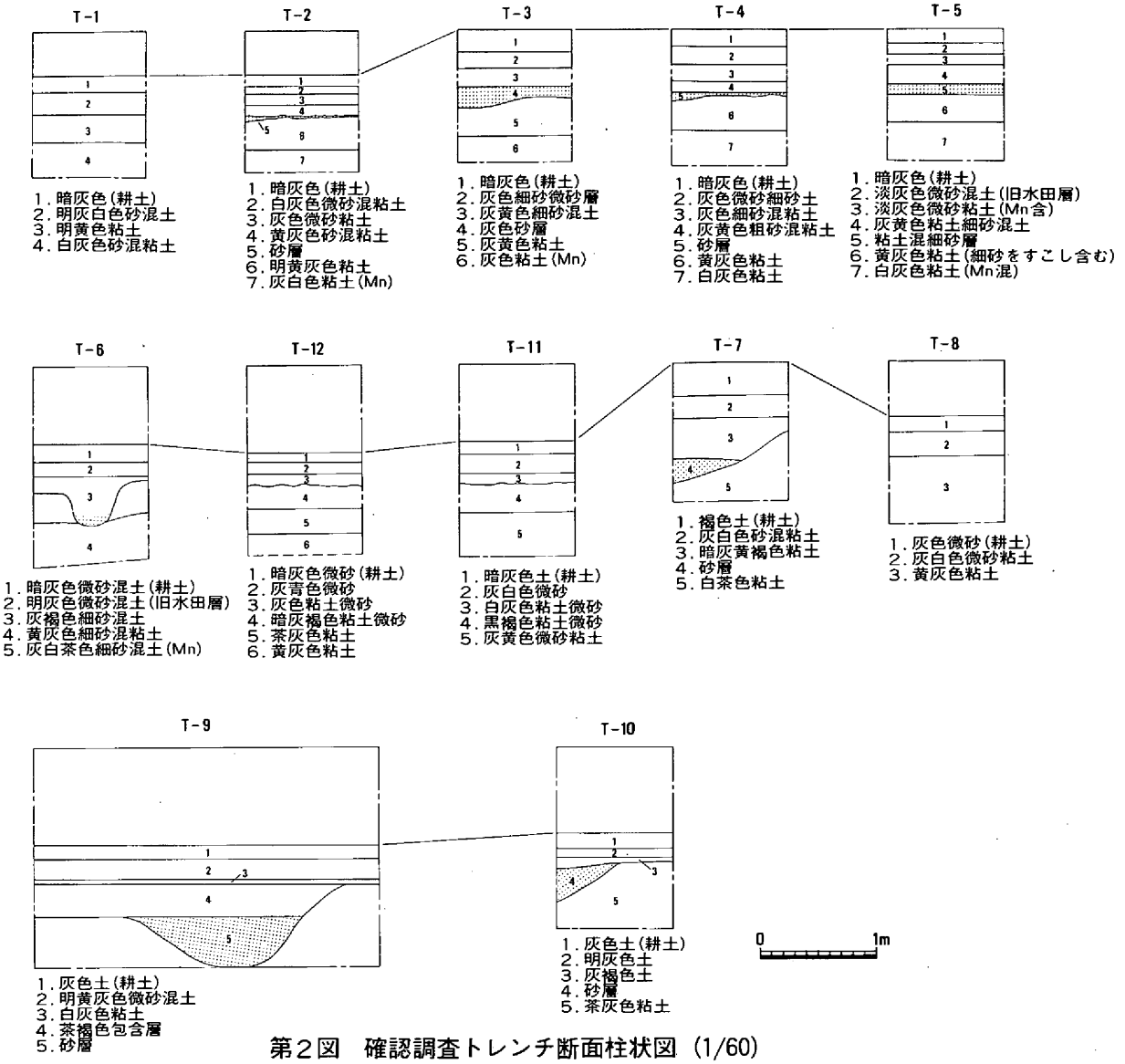
T－11・12は基本的にはあまり変わらない土層である。T－11の第4層は黒褐色の堅い土層であるが、埋土中から弥生土器片が出土しているので、第5層が基盤層と推定される。また、トレンチ内西端部で径1mばかりの円形状にグライ化した土質が検出された。井戸等の遺構が想定された。

T－7は第5層の基盤層と第3層の間に砂層をかむ土層断面を呈する。北側の丘陵に近い所であり、もう少し安定した堆積状況を呈するかと想定されたが、この部分ではそうでないらしい。このため近接してT－8を掘削したところ、この部分では安定した単純な土層の堆積が読みとれる。T－7の第3層から弥生時代後期土器片が2点出土している。

T－9は黄灰色の基盤層を掘り込む上面幅150cm、深さ約50cmの溝が検出された。溝内は細砂で埋まっているが、上面の第4層にあたる茶褐色土は弥生時代後期末の包含層である。狭い範囲の調査であるが、短脚高杯2個体をはじめ甕などの土器片が出土している。

T－10では細砂からなる溝状の落ち込みが検出され、その西肩部で弥生時代後期と推定される甕片

第１図　確認調査トレンチ位置図（1/2,000）



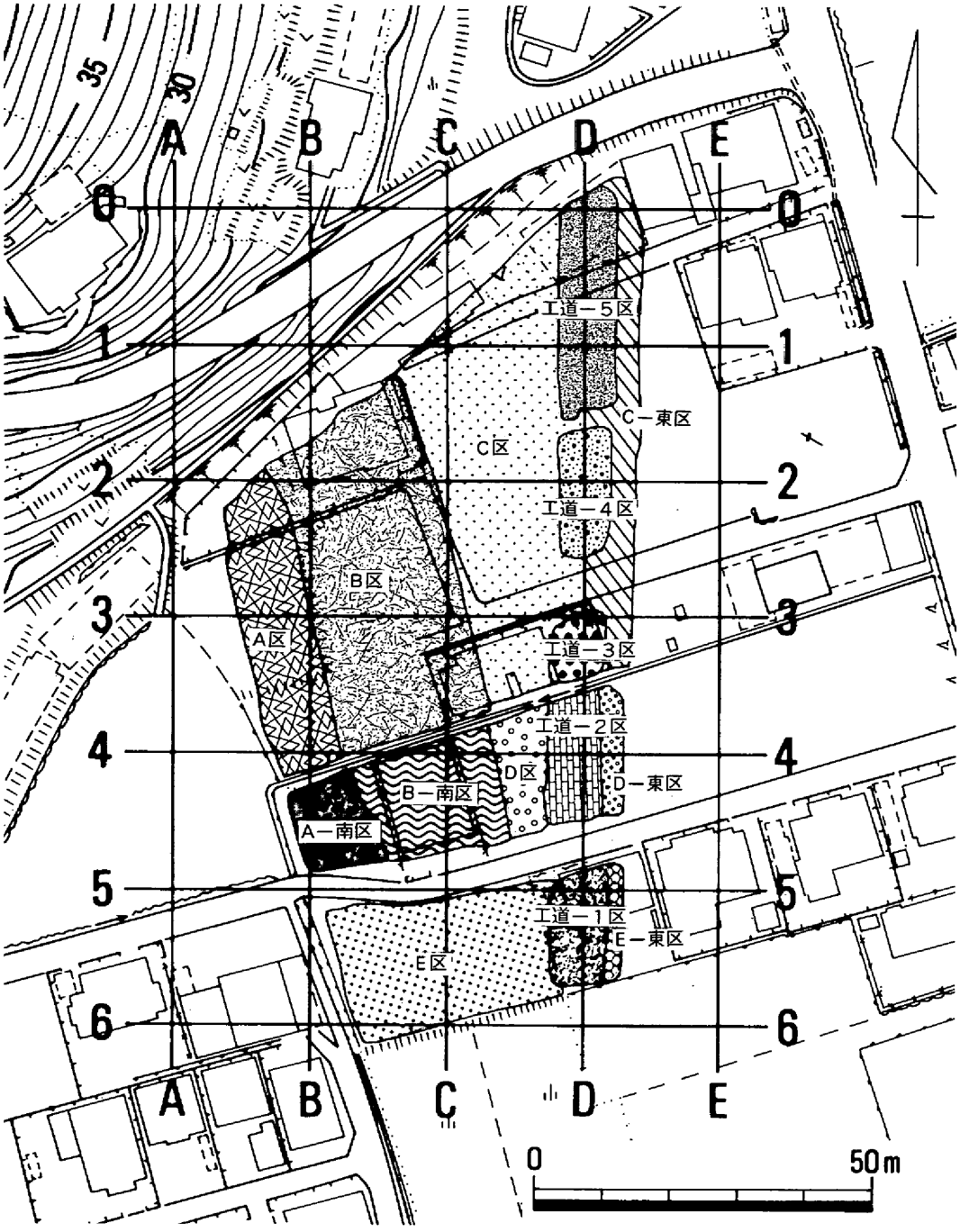
第2図　確認調査トレンチ断面柱状図（1/60）

が出土している。

確認調査の結果からバイパス予定地内においては、T－6以北に弥生時代後期の集落跡が想定された。しかし、対象地域内にはまだ未買収地があり、厳密な対象範囲の確定および遺構密度を確定することはできなかったため、遺跡の全面調査を実施するにあたり、その確認を行なう必要があった。

全面調査は、平成4年度の後半に予定されていたが、工事工程の都合上工事用道路の着工が急がれたため、まず、工事用道路部分（工道1区～工道5区）の発掘調査を先行させ、平成4年5月25日から途中、中断期間を挟み10月12日まで調査員1名が一次調査を兼ね実施した。その結果、工道1区において遺跡南端の下がりが確認され、北端の丘陵端部から約100m幅で遺跡のひろがっていることが明らかになった。また、検出された遺構は、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて埋没したと思われる河道と、一部河道に削平された弥生時代の溝や土壙（井戸）、古墳時代初頭の建物や柱穴等である。なお、河道の埋土中からは大量の土器が出土するものの、河道に削平されているためかその他の遺構はそれほど多く検出されなかった。

以上の結果をふまえ、平成4年11月からは調査員3名の体制で発掘調査に入った。しかし、調査対象地域は住宅地のただ中にあり、生活道路や用排水路が縦横断していることなどから、それらを維持



第３図　遺跡調査範囲および調査区図（1/1,000）

しながら発掘調査を行なわなければならず、また、排土を調査対象地域外に搬出することができないため、うって返しで調査を進めることになった。まず、Ａ区・Ａ－南区の表土剝ぎを行ない、調査に入った。引き続いてＢ区の表土剝ぎを行ない、Ａ区・Ｂ区の調査を終了し、その後ここをＣ区・Ｃ－東区の排土置場にして表土を剝ぎ、調査を実施した。一方、Ａ－南区は調査終了後にＢ－南区の排土置場として表土を剝ぎ、調査を実施した。さらに終了後ここを、Ｄ区・Ｄ－東・Ｅ・Ｅ－東区の排土置場にして表土を剝ぎ、調査を実施した。このため一つの遺構でも一度に検出することのできないものがある等、煩雑な調査を余儀なくされた。

第2節　調査の概要

田益新田遺跡の発掘調査は、調査の経過で述べたように、工道1区・工道2区・工道3区・工道4区・工道5区・A区・A－南区・B区・B－南区・C区・C－東区・D区・D－東区・E区・E－東区の15の調査区に分けて、それぞれ細切れの調査区ごとに遺構の検出が行なわれた。このため、遺跡全体の遺構検出状況を一度に見ることはできなかった。また、同一の遺構であっても一度に調査することができず、複数回にわたって検出されたものもある。

報告書における遺構等の記載にあたっては、遺跡全体に国土座標に従って20m方眼を組み、南北の軸線にA・B・Cとアルファベットを、それに直交する東西の軸線には0・1・2と数字を付し、北西角の軸交点の名称を、その桝目の区名として位置を示している。なお、起点の0－AはX＝－142920、Y＝－39380である。

田益新田遺跡は、香橋池から600m程南の笹ヶ瀬川右岸丘陵の南東裾部に位置し、現在では造成されて住宅地などになっているところである。岡山北バイパスは、遺跡を南北に横断している。

発掘調査の結果、田益新田遺跡からは、縄文時代後期から弥生時代前期・中期・後期、そして古墳時代初頭さらには、古墳時代後半や中世にいたる遺構・遺物が確認された。

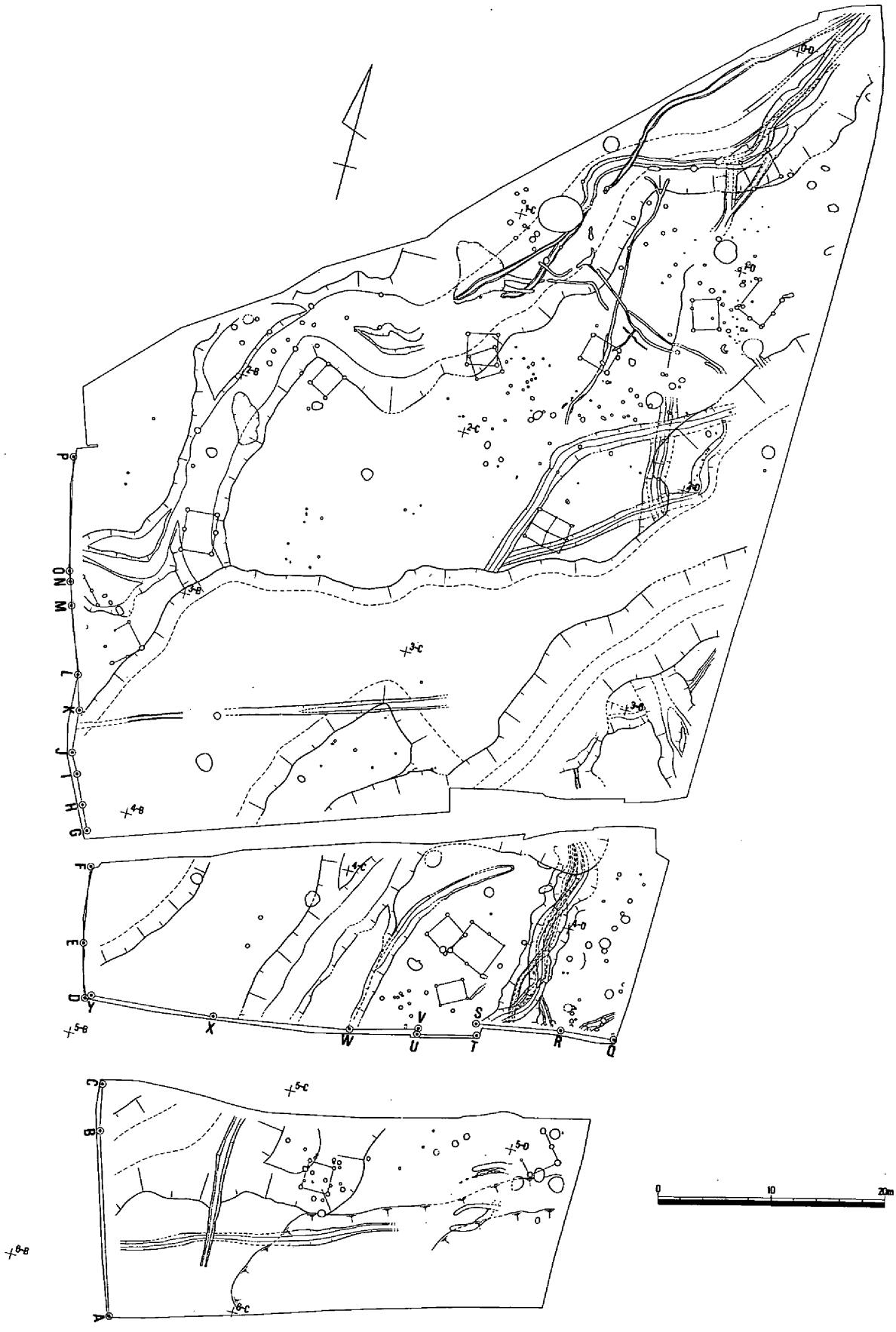
遺構

調査区内において検出された遺構は、河道・溝・建物・土壙および柱穴などである。このうち、河道は笹ヶ瀬川の旧河道の一つとみられ、北東から南東にかけて蛇行しながら調査区を横断している。しかも、何度か流れを変えながら流走し、遺跡に大きな爪痕を残している。河道の底からは、縄文時代後・晩期の土器や弥生時代前期の土器なども出土し、かなり早い時期から自然の河道が存在していたことを窺わせる。一方、人工的な遺構のうち、弥生時代前期から後期の古い時期のものは、溝や土壙などが調査区の東部付近に、断続的に検出されたのみで、河道により大きく削平されたものと思われる。これらの河道が埋没した後の、古墳時代初頭以降になると、営まれた集落跡とみられる建物や土壙（井戸）など数多くの遺構が検出されている。特に、調査区の北東部や南東部それに北西部にそれぞれ集中している。しかし、これらの遺構もその後削平され、上面がかなり削られているようである。古代以降のものは、削平されてしまったものかほとんど確認されず、わずかに溝1条と建物が1棟、それに柱穴・ピットが数本検出されたのみである。

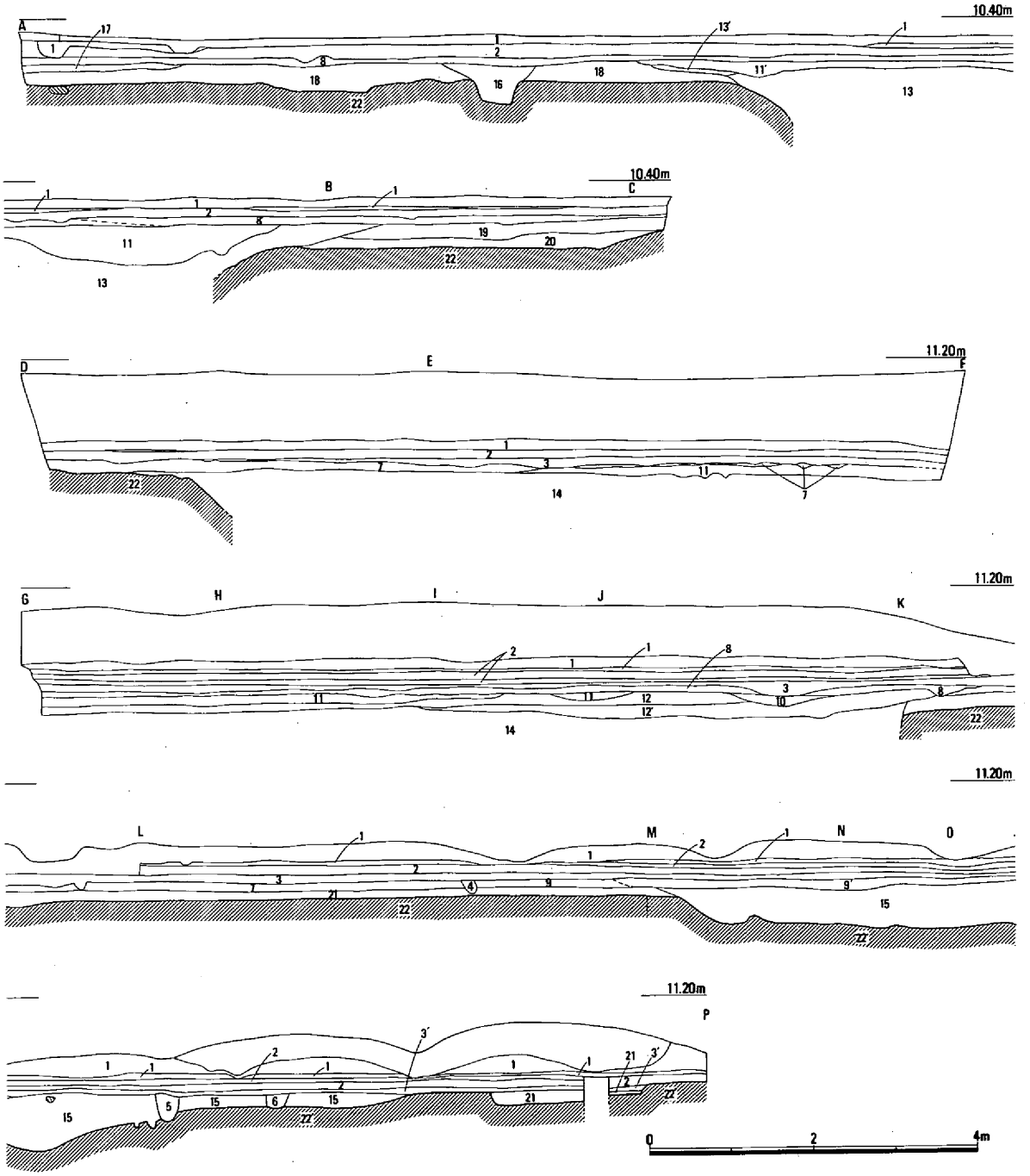
遺物

遺物は、河道から大量の土器が出土している。特に、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてのものが大半を占め、しかも完形や完形に近いものが多く含まれている。このことは、すぐ近くで使われていたものが、洪水などで流れ込みそのまま埋没してしまったものとみられる。その中には、壺形土器・甕形土器・高杯形土器・鉢形土器などのほかに、手焙り形土器や甑形の土師器、それに鳥形土器や犬とみられる土製品などの特異な遺物が出土している。

田益新田遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭の遺構として、建物や土壙が多く検出されている。しかも、土壙のうちの多くは井戸もしくは井戸状の遺構である。このことは、ここは集落が営まれていたことを窺わせるものであり、河道内に埋もれていた土器の量からみるとかなりの規模の集落が、ここであるいはこの周辺に推定される。

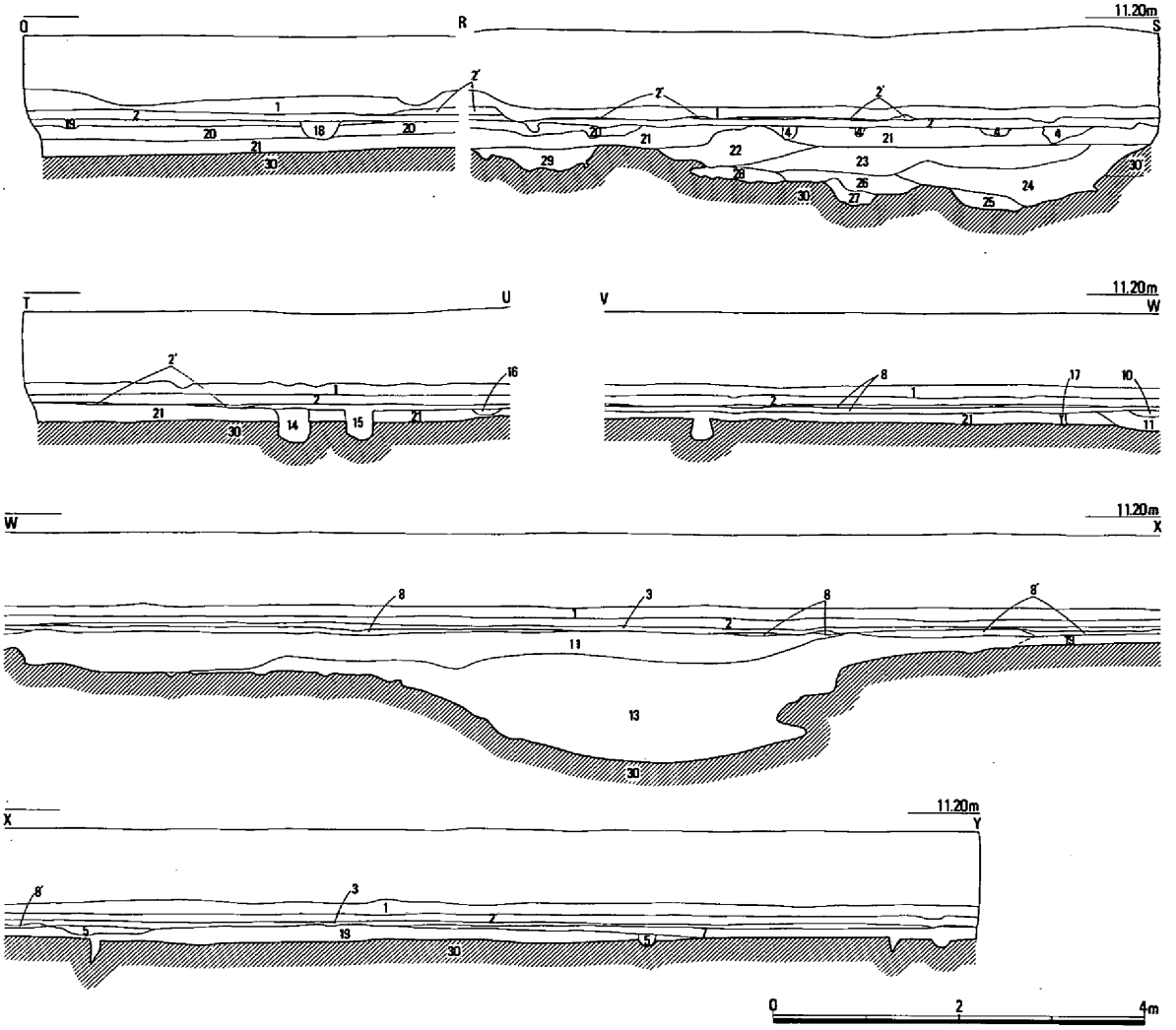


第４図　検出遺構全体図（1/500）



1．暗灰色微砂（耕作土）
2．淡灰色微砂（Fe沈着）
3．灰色粘質微砂
4．黄褐灰色粘質微砂（Fe含）
5．暗褐灰色粗砂
6．暗黄灰色粗砂（Fe含）
7．灰色粘質微砂（Fe沈着）
8．褐灰色粘質微砂（Fe沈着）
8．淡灰色微砂（Fe沈着）
9．黄灰色粘質微砂（Fe多含）
9'．褐灰色微砂
10．明灰色粘質微砂　（溝-20）
11．暗灰褐色粘質微砂（灰色細砂層含）（河道-1・3上面タマリ）
12．褐灰色粘質微砂　（河道-1上面タマリ）
12'．暗褐灰色微砂　（河道-1上面タマリ）
13．褐灰色細砂（下層は粗砂多含）　（河道-3）
13'．灰色粗砂　（河道-3）
14．褐灰色粘質微砂（下層は灰色砂）（河道-1）
15．暗褐灰色粗砂（上層は細砂）　（河道-2）
16．褐灰色細砂（粗砂，Mn粒含）　（溝-6）
17．暗褐灰色粘質微砂
18．褐灰白色粘質微砂（粗砂，Mn粒含）
19．灰褐色粘質微砂
20．明褐灰色粘質微砂（Mn粒含）
21．明黄灰色粘質微砂（Fe多含）
22．明灰色粘質微砂（Mn粒含）
22'．明灰色粘質土

第５図　南北（A～P）土層断面図（1/60）



1．暗灰色微砂(耕作土)
2．淡灰色微砂
2'．灰色微砂
3．淡灰色粘質微砂(Fe沈着)
4．暗灰色砂
5．褐灰色粘質微砂　やや褐色がつよい
7．灰色粘質微砂(Fe沈着)
8．褐灰色粘質微砂(粗砂多含)
8'．灰色粘質微砂
10．黒褐灰色粘質微砂(粗砂多含)
11．暗灰褐色粘質微砂(河道-3上面タマリ)
13．褐灰色細砂(下層は灰色粗砂)(河道-3)
14．暗オリーブ灰色粘質微砂
15．褐灰色粘質微砂　(柱穴)
16．オリーブ褐灰色粘質微砂
17．暗灰色粘質微砂
18．黒褐灰色粘質微砂(粗砂多含)
19．暗褐灰色粘質微砂
20．オリーブ灰色粘質微砂(Fe沈着)
21．灰オリーブ色粘質微砂(Fe沈着，粗砂含)
22．灰色粗砂　(溝-3)
23．黄灰白色細砂　(溝-3)
24．黄灰色細砂　(溝-3a)
25．灰白色粘土　(溝-3b)
26．黄灰色粗砂　(溝-3)
27．灰色粗砂　(溝-3c)
28．灰黄色微砂　(溝-3)
29．褐灰色細砂　(溝-2)
30．明灰色粘質微砂(明灰色粘質微砂，Mn粒混)
灰白色粘質土(Mn沈着)
30'．明褐灰色細砂(Mn粒多含)

第６図　東西（Q～Y）土層断面図（1/60）

基本土層

田益新田遺跡では、南一北断面を調査区西端部（Ａ－Ｐ）のものを、東一西断面は生活道の北側に沿ったライン（Ｑ～Ｙ）を設定した。

調査区西端の土層断面をみると、第１層が、暗灰色微砂の旧耕作土である。その下に第２層淡灰色微砂が、さらにその下に、第３層の灰色粘質微砂が堆積している。これらは比較的新しい時期の床土・耕作土であり。その下の第７層、灰色粘質微砂・第８層、褐灰色粘質微砂・第９層、黄灰色粘質微砂も中世以降、おそらくは近世頃の堆積土とみられる。ここまでの堆積土はほぼ水平に堆積しており、下のラインがほぼ揃っている。この段階で地ならしなどの削平が行なわれたのか、この下に水平に堆積している、第18層の褐灰白色粘質微砂・第19層の灰褐色粘質微砂・第20層の明褐灰色粘質微砂・第21層の明黄灰色粘質微砂など、まったく遺物を含まない層に接している。そして、これらの層を切り込むようにして、田益新田遺跡の遺構は検出された。第16層は溝－６の埋土、第13層は河道－４の埋土であり、その上の第11層は河道－４上面のタマリである。また、第14層は河道－２の埋土で、第11・12層は河道－２上面のタマリである。第10層は中世の溝（溝－20）の埋土、第15層は河道－１の埋土である。第22層の明灰色粘質微砂は地山である。

東一西ラインの土層断面も基本的には、南一北ラインと同様第１層の旧耕作土、その下の第２・３層（床土）の下から、一部には第８層の褐灰色粘質微砂を挟み、下側のラインがほぼ水平に揃っている。そして、第19層の暗褐灰色粘質微砂・第20層のオリーブ灰色粘質微砂・第21層の灰オリーブ色粘質微砂などの層に直接移行していく。検出された遺構は、この面から切り込まれている。第29層は溝－２の埋土、第22から第28層は溝－３の埋土である。第13層は河道－４の埋土、第11層は河道－４上面のタマリである。

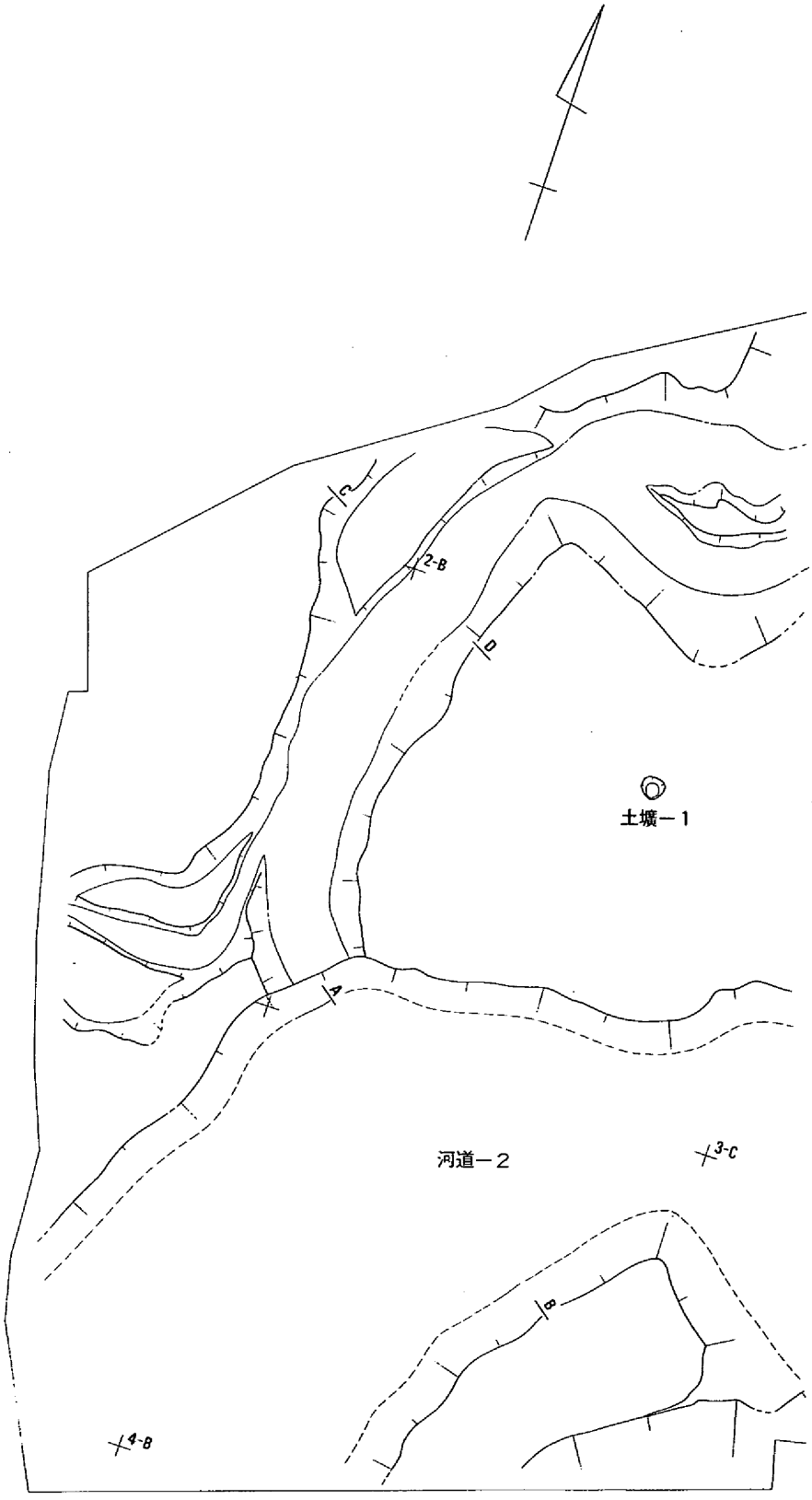
(1)　河道および河道埋没以前の遺構

１．河道

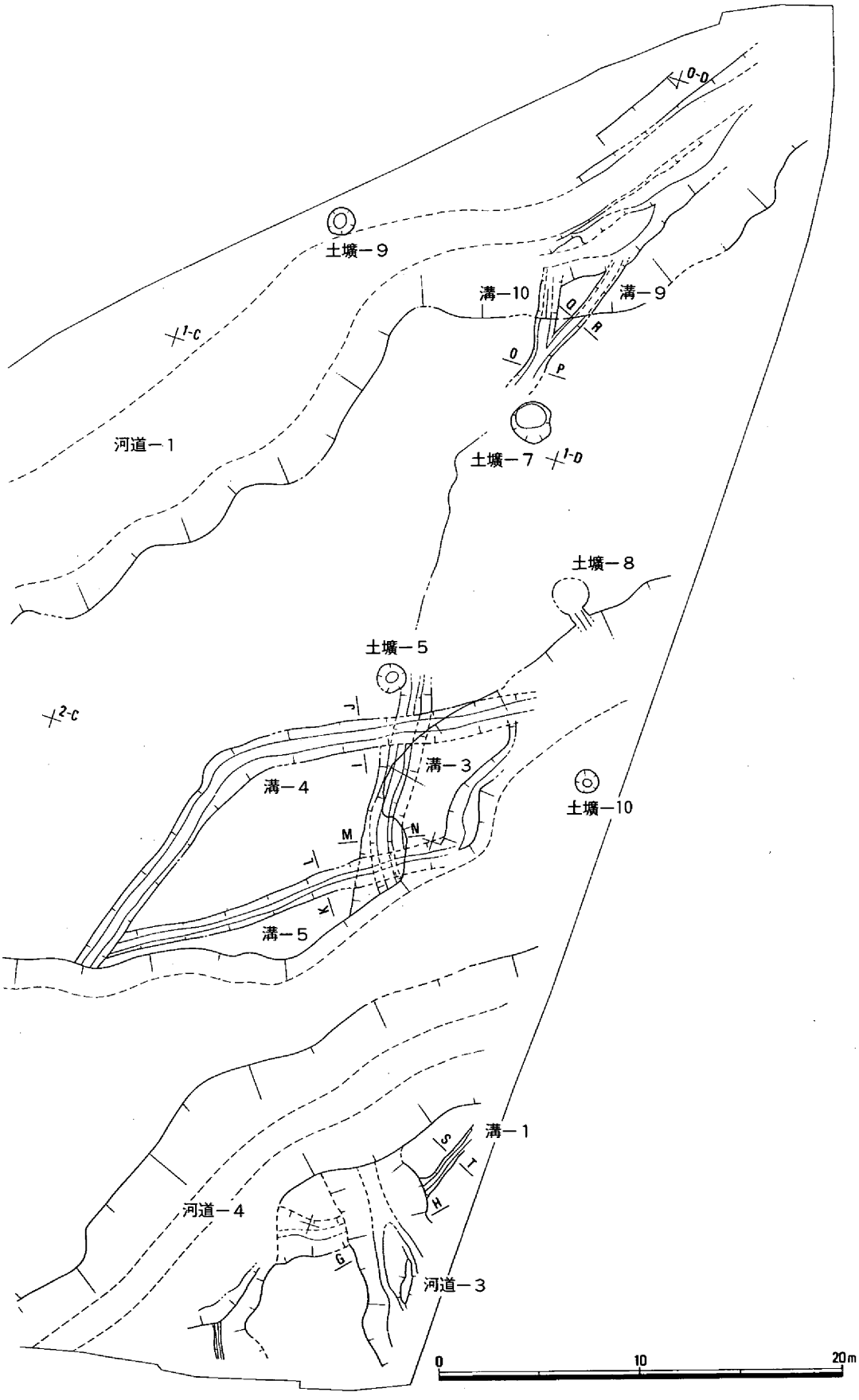
河道－１（第９図、図版２－１）

調査区の北端部において検出された自然河道状の遺構で、北東から南西に向かって蛇行して流走している。規模は、検出面から幅10ｍ以上・深さ85㎝程を測る。底面の高さは、海抜9．３ｍ程である。埋土は、上層の第１層・第２層が暗褐色もしくは灰褐色を呈する砂で角礫を含んでいる。この層は河道の埋土というよりも、河道埋没後の中央窪みに堆積した二次的なものと考えられる。中層の第３層・第４層は灰白色・灰色の細砂が、第５層・第６層は黄灰色・黄灰褐色の粘質土が埋積している。また、下層の第７層・第８層には、黄灰色粗砂や灰色の礫混じり粗砂が堆積している。なお、最下層の部分には地山面との間に鉄分の沈着が認められる。

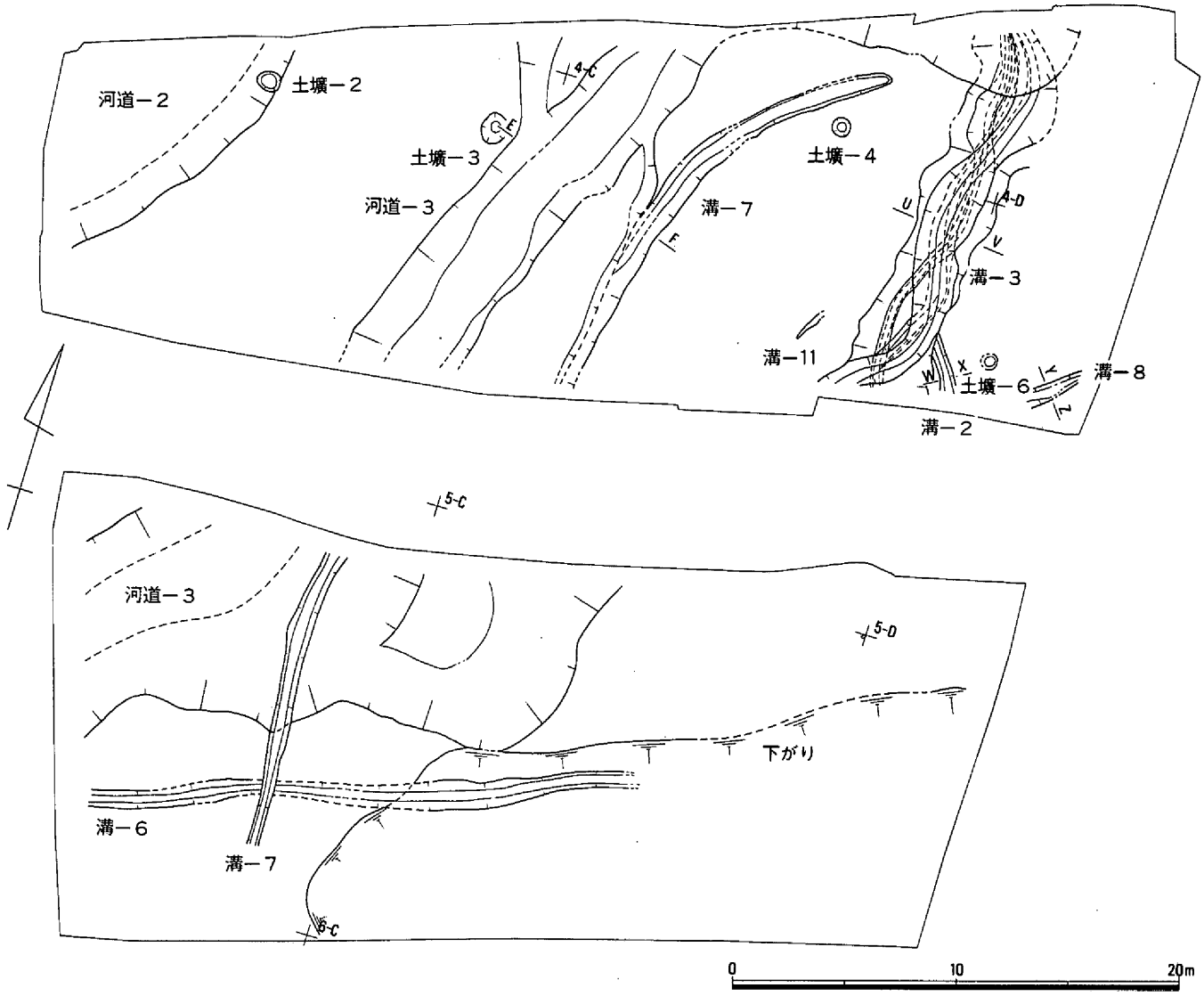
出土遺物は、僅かでいづれも細片である。１・２は最下層から出土した縄文土器で、いづれもよく磨耗している。黒褐色を呈し、外面は二枚貝条痕が、内面は指オサエおよびナデが認められる。３～８は上層・下層から出土した弥生土器で、４は口径19.2㎝程を測り胴上部に多条の沈線が、その下にヘラ先による列点文が巡っている。にぶい橙色を呈し、器面は若干磨耗している。６は口径16.5㎝を測る口縁部片で、口縁端面に１条の凹線が巡り、外面はヘラミガキされている。７はにぶい灰白色を呈する底部片で、底径8.5㎝を測り外面はヘラミガキされている。底部付近に黒斑が認められる。８



第７図　河道および河道埋没



以前の遺構配置図（１）(1/300)



第８図　河道および河道埋没以前の遺構配置図（２）(1/300)

は底部片で底径6.1cmを測り、外面はヘラミガキされている。にぶい黄橙色を呈する。

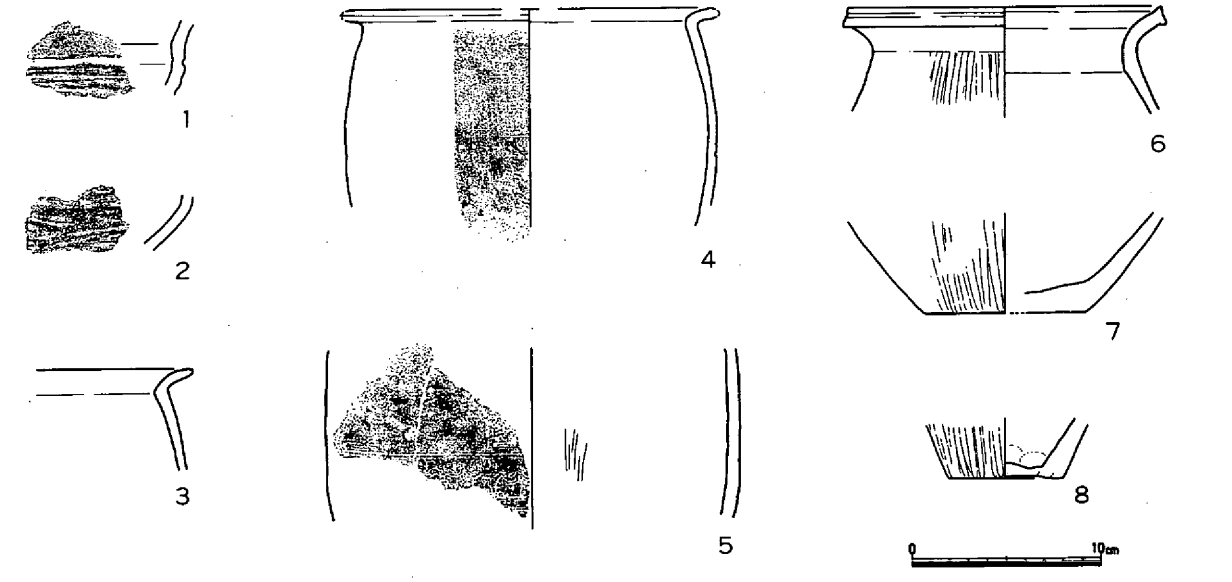
この河道の埋没時期は、出土遺物が少なく判然とはしないが、弥生時代後期とみられる。なお、この河道は、河道－２により切られている。

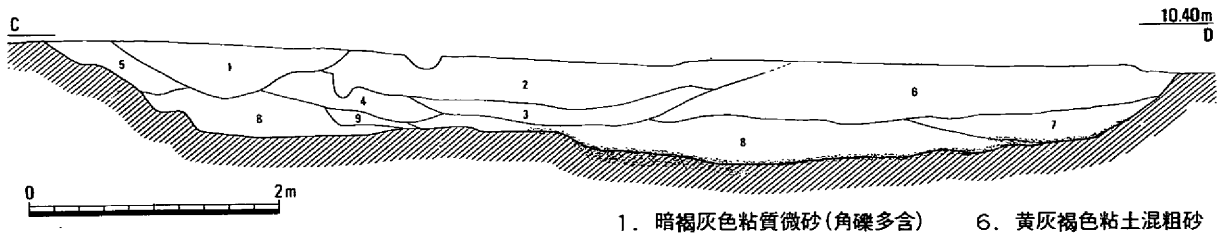
河道－２（第10～15図、図版４－１・２）

調査区の中央やや北寄りで検出された、自然河道とみられる遺構で、北東から南西に向かって蛇行して流走している。規模は、検出面から幅17m以上・深さ３m以上を測る。

埋土は、灰色粘質土をブロック状に含む灰黄色細砂が２m以上堆積している。最下層には灰色の粘質土が堆積し、河道中央部の最上層には黒灰褐色粘質土が一部タマリ状に堆積している。これは、河道埋没後の窪みに生じた二次堆積と考えられる。

遺物は、最下層から流木などと伴によく摩滅した縄文土器や弥生時代前期の土器片が少量出土したほか、灰黄色細砂の埋土中から弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が出土している。９・10は非常に摩滅した土器の細片で、最下層から出土している。11は下層から出土した、甕形土器の口縁部片である。「く」の字状に外反させた口縁端部を内側に拡張し、その端面に凹線の後竹管文が上下２段で巡っている。灰黄色を呈する。12は、肩部にヘラ先による列点文が２～３段巡っている甕形土器の口縁部片で、口縁端面に４条程の凹線が巡る。16は上方に折り曲げて端部を少し肥厚させた外面に５条

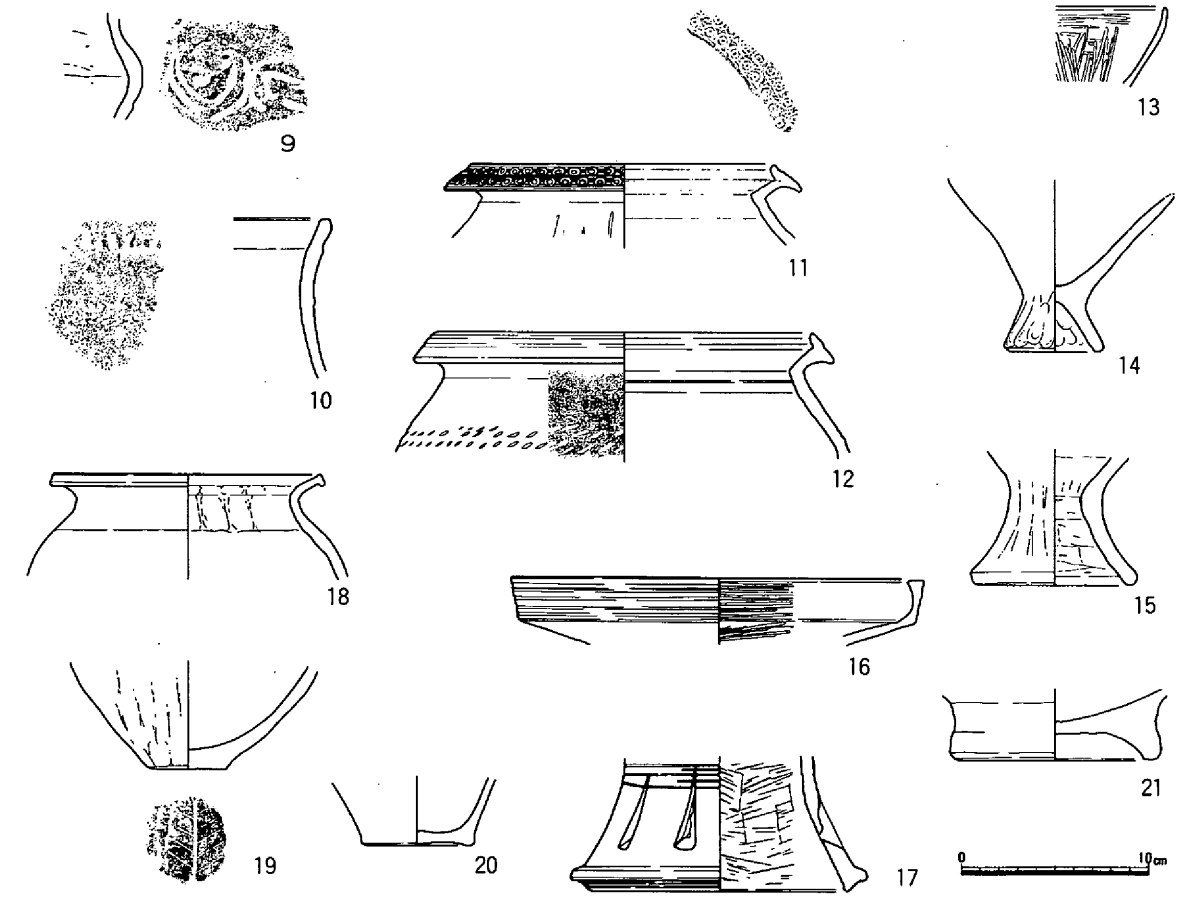


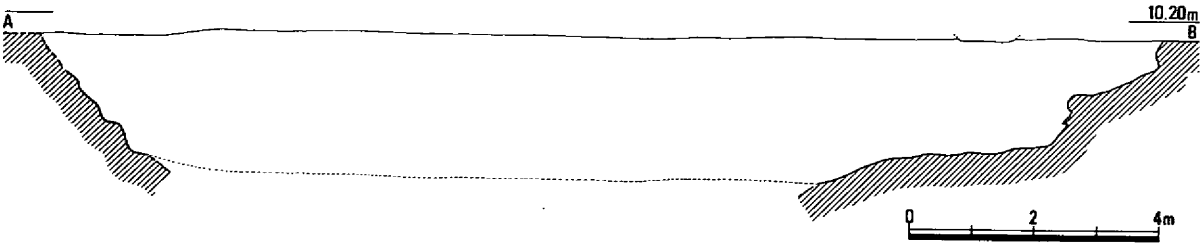


1．暗褐灰色粘質微砂（角礫多含）
2．灰褐色粘土混粗砂（角礫含）
3．灰白色細砂
4．灰色細砂
5．黄灰色粘質微砂
6．黄灰褐色粘土混粗砂
7．黄灰色粗砂
8．灰色礫混粗砂
9．暗灰色細砂

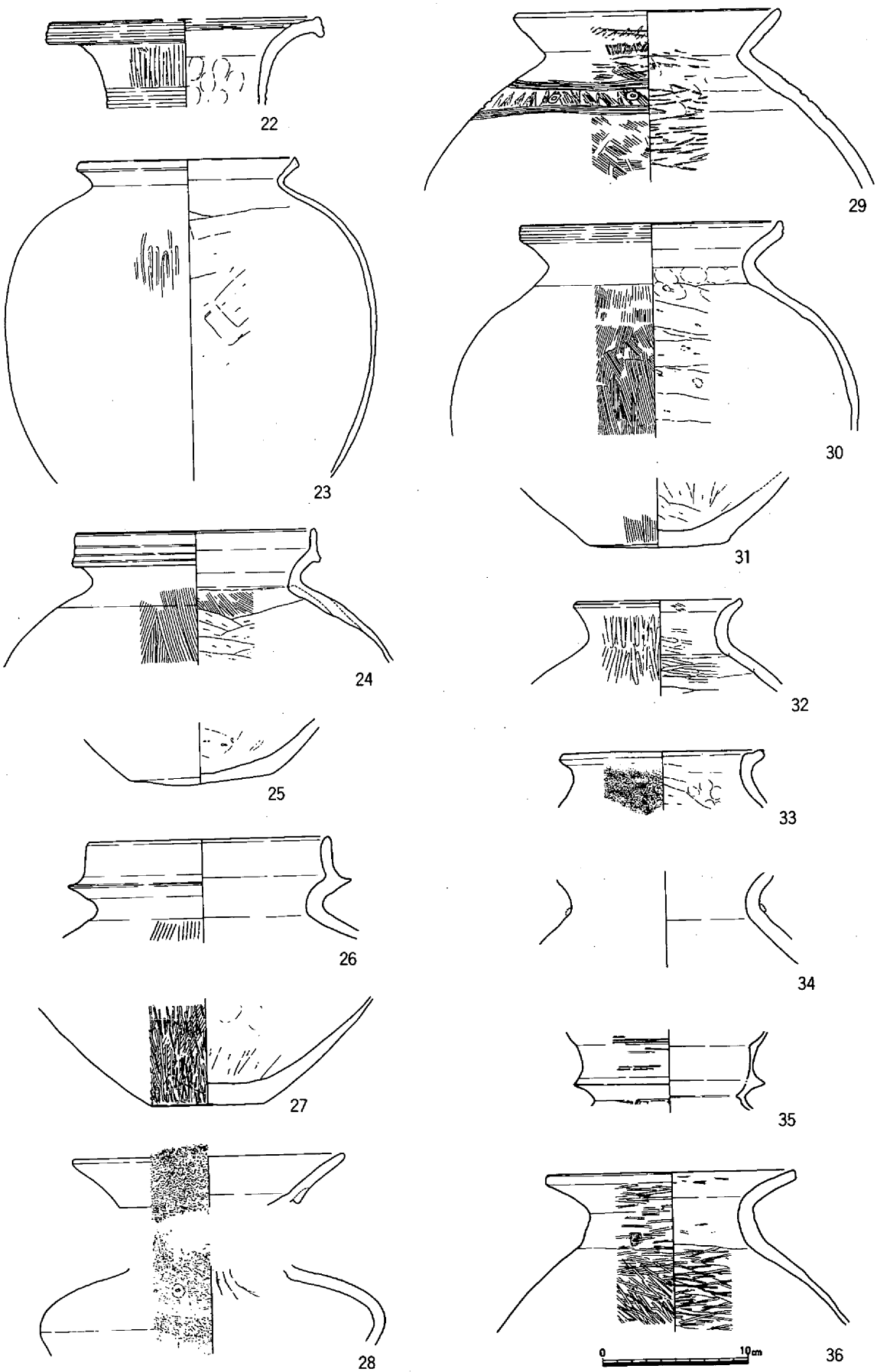
第９図　河道－１断面図（1/60）・出土遺物（1/4）

の凹線を巡らせている高杯形土器の杯部片である。灰白色を呈する。19は底部に木の葉の圧痕が認められる土器の底部片である。底径4.1cmを測り、灰白色を呈する。28は口縁部・肩部に波状文を巡らせ、肩部に竹管文を付した壺形土器である。口径18.6cmを測り、明褐灰色を呈する。29は口縁外面に貝殻文と波状文が、肩部に二段貝殻文が巡り、その間に波状文を配した上に、竹管文が巡る壺形土器である。口径18.0cmを測り、灰白色を呈する。37は口径21.2cmを測る壺形土器で、浅黄橙色を呈する。口縁や肩部に一部煤の付着が認められる。38は外面を細かくヘラミガキしている壺形土器で、灰黄色を呈する。51～53は、外反した口縁端部を上方に拡張し、その端面に櫛描き沈線を巡らせた甕形土器で、僅かに底部の痕跡を残しているものである。いずれも口径14.5cm程を測り、口縁端面に51は６条、52は７条、53は９条の櫛描き沈線が巡り、煤が付着している。56～73は高杯形の土器で、59は内・外面にハケメ調整の残るものである。脚裾部に４個の円孔が穿たれている。

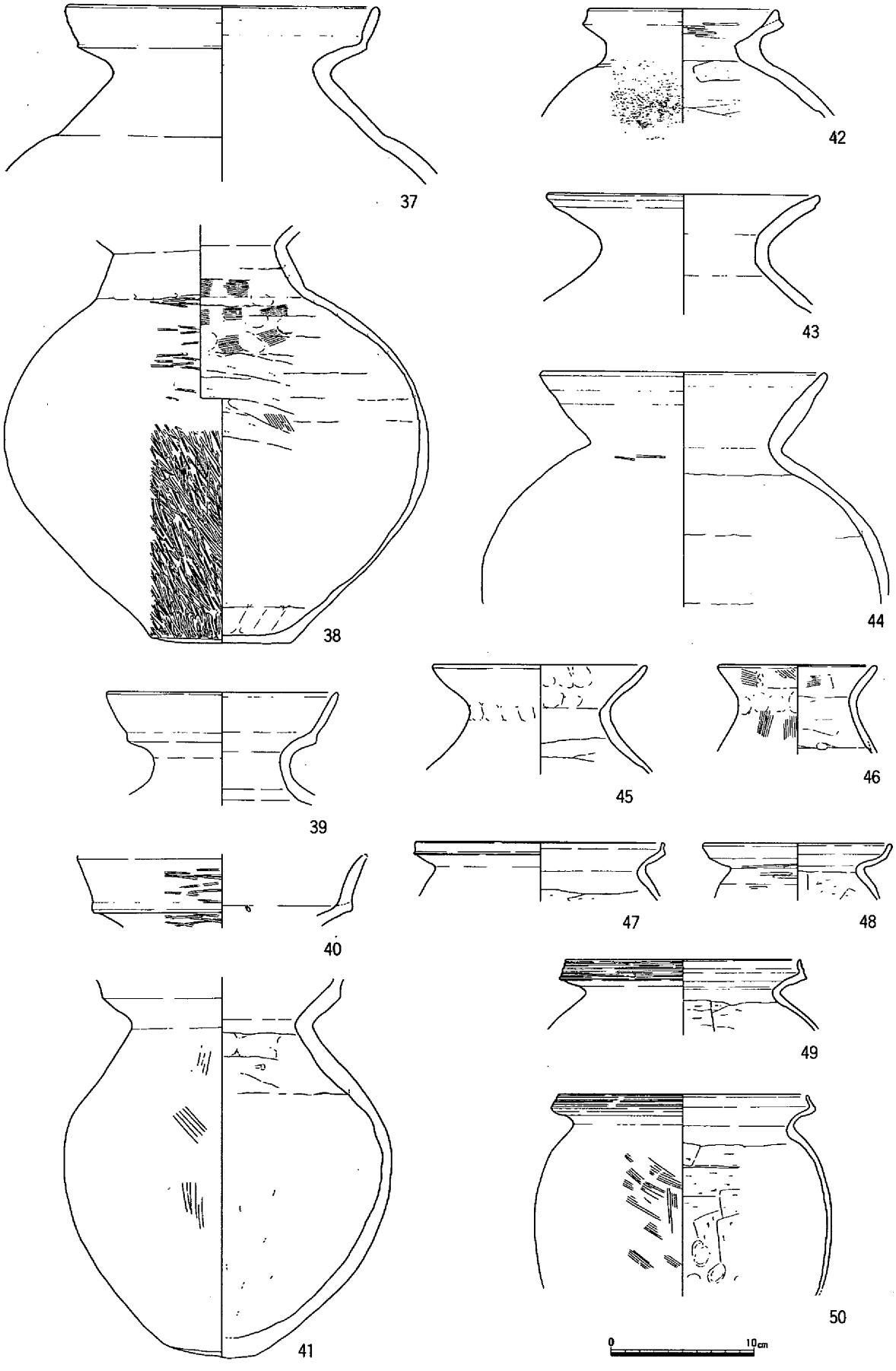




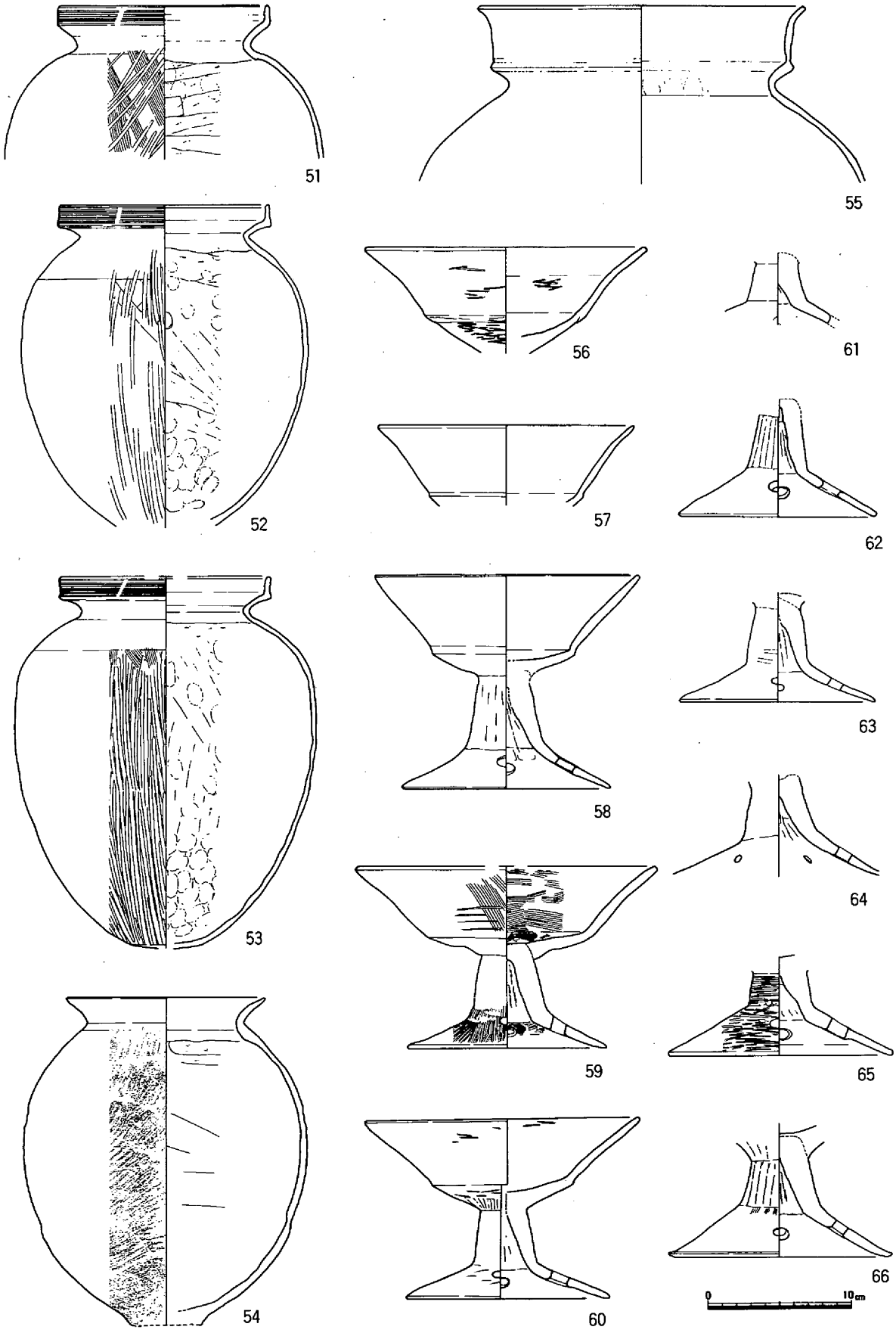
第10図　河道－２断面図（1/120）・出土遺物（１）(1/4)



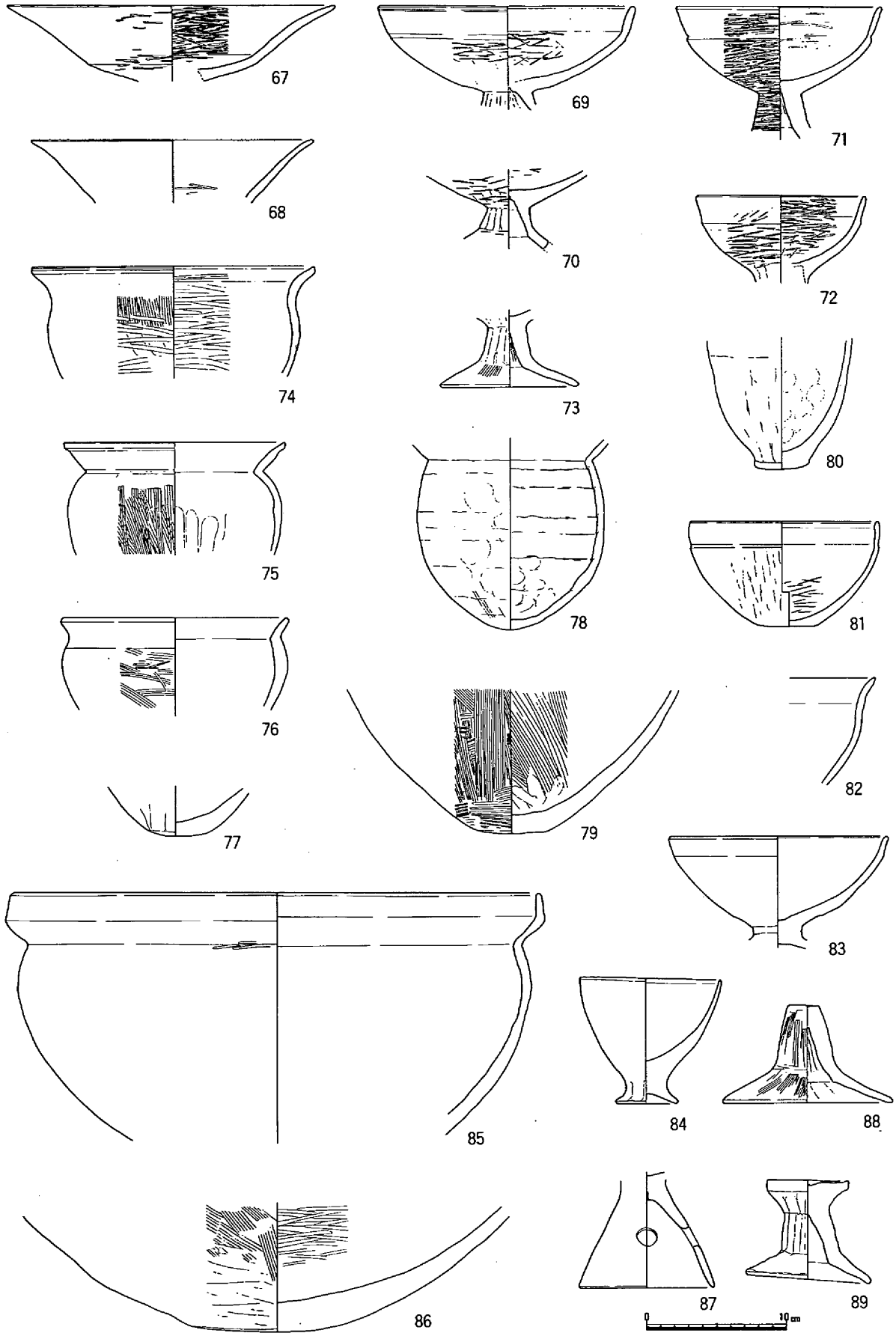
第11図　河道－２出土遺物（２）(1/4)



第12図　河道－２出土遺物（３）(1/4)

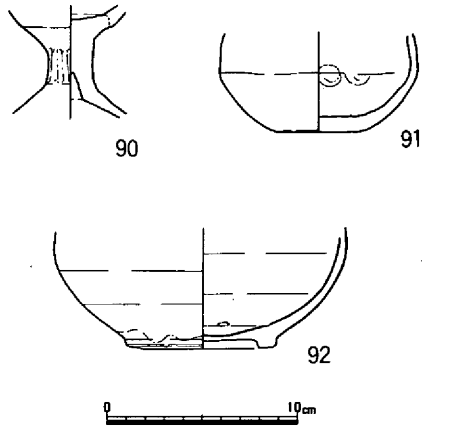


第13図　河道－２出土遺物（４）(1/4)



第14図　河道－２出土遺物（５）(1/4)

74～76は鉢形土器で、74の体部外面は縦方向のハケメ調整の後、横方向にヘラミガキされているが、指オサエが一部残る。75は口径15.3cmを測り、外面は斜めのハケメ後、縦方向のハケメにより調整されている。78は、指オサエとナデにより成形された小形の甕形土器である。にぶい黄橙色を呈し、底部付近に黒斑が認められる。81は平底の鉢形土器で、底部に浅い穴が認められる。83・84は、台付鉢形土器であるが、遺存状態が悪く調整は不明である。いずれも外面に黒斑が認められる。85・86は大形の鉢形土器である。85は口径36.2cmを測り、口縁部近くに若干ヘラミガキが認められる。86は外面をハケメ・ケズリで調整され、内面には黒斑が認められる。87は水漉し粘土風胎土の小形の器台で、台部に４か所円孔が穿たれている。橙色を呈する。88は外面をハケメ調整した蓋形土器である。一部に黒斑が認められるが、灰白色を呈する。89は外面に面取り痕のみられる支脚形の土器である。にぶい黄橙色を呈する。92は灰オリーブ色を呈する青磁碗とみられ、見込みに３か所重ね焼きの目跡がある。二次堆積土中に混入していたものとみられる。

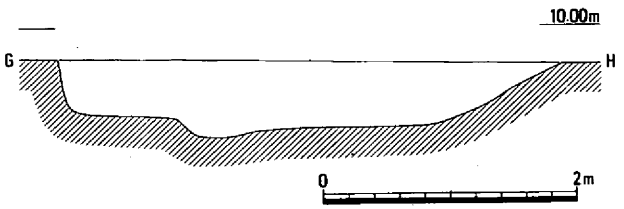


第15図　河道－２出土遺物（６）(1/4)

この河道は、最終埋没時においては、河道－１を切っているが、その前段階においては、河道－１の一部が河道－２に流入していたものとみられる。また、河道－４に切られているため判然としないが、ある時期河道－３に流出していたものとみられる。

河道－３（第16図）

調査区の中央東端部において検出された、河道－２から南東に流出する、自然河道とみられる遺構である。規模は検出面から幅４ｍ程・深さ0.6ｍを測る。底面は少し凹凸をもち、断面は東側が緩やかに下がるが、西側は急角度で下がっている。



第16図　河道－３断面図（1/60）

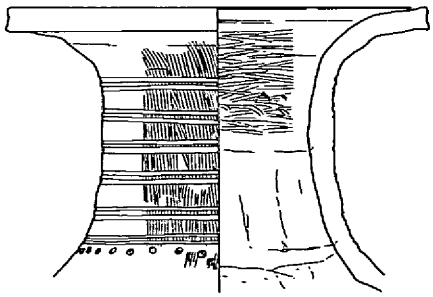
埋土は、河道－２と同じ灰黄色細砂が堆積している。出土遺物はなく、河道－２との接続部分が河道－４により削平されているため、時期・性格など判然としないが、河道－２から流出している河道と推定される。

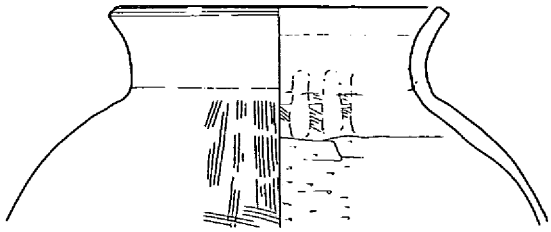
河道－４（第17～33図、図版４－３・４）

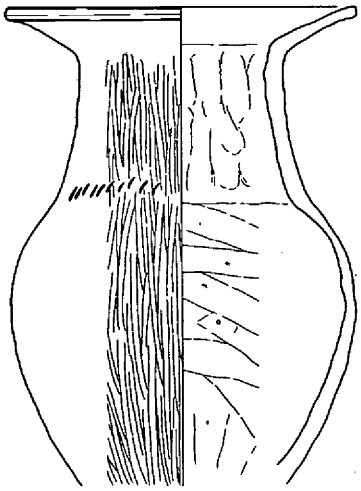
調査区の中央やや南東寄りを、北東から南西に向かって流走している、自然河道とみられる遺構であるが、埋土中からは完形のものを含み大量の土器が出土している。規模は、検出面から幅９ｍ程・深さ1.4ｍ程を測る。埋土は、地山に貼りついて一部暗灰色・黒灰色の粘質土が認められるが、大半は上層・下層とも砂層が堆積している。

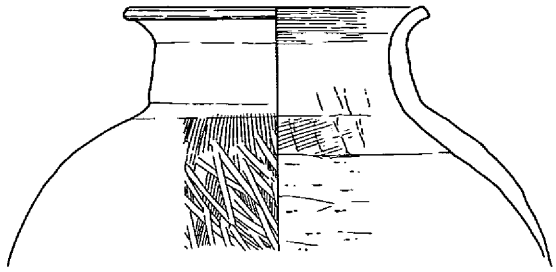
出土遺物としては、第２・３層の褐灰色および暗褐灰色粘質微砂、第７・８層の褐灰色および暗褐灰色微砂、第９層の灰色細砂および粗砂中などから土器が大量に出土している。

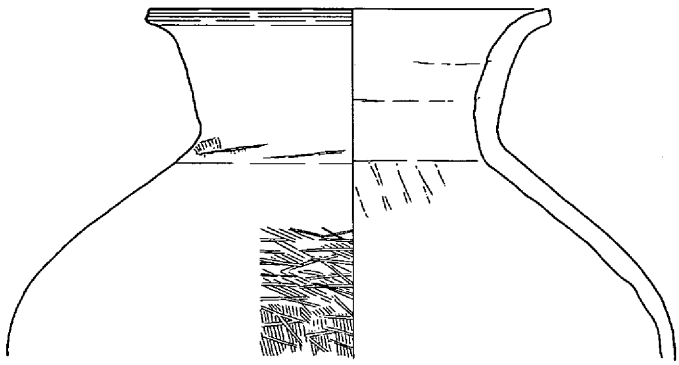
93～134・154～205・214～237・264～278は第７・８層から、135～153・206～213・238～263・279～297・298～318は第２・３層からおもに出土している。93～153は壺形土器、154～213は甕形土器、

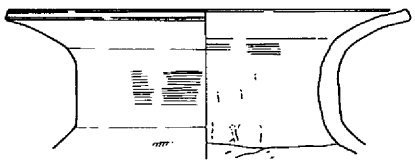

93

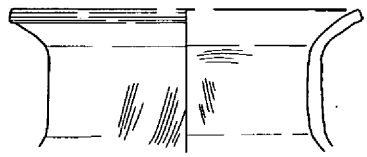

97

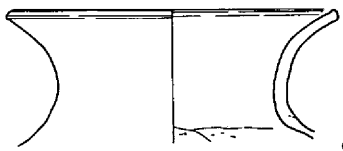

94


98

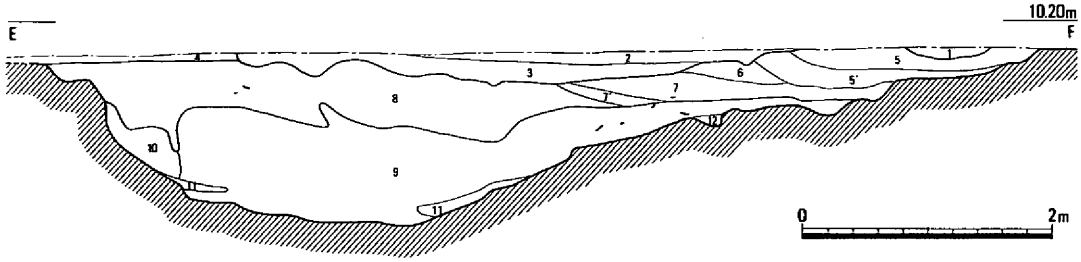

99


95


100

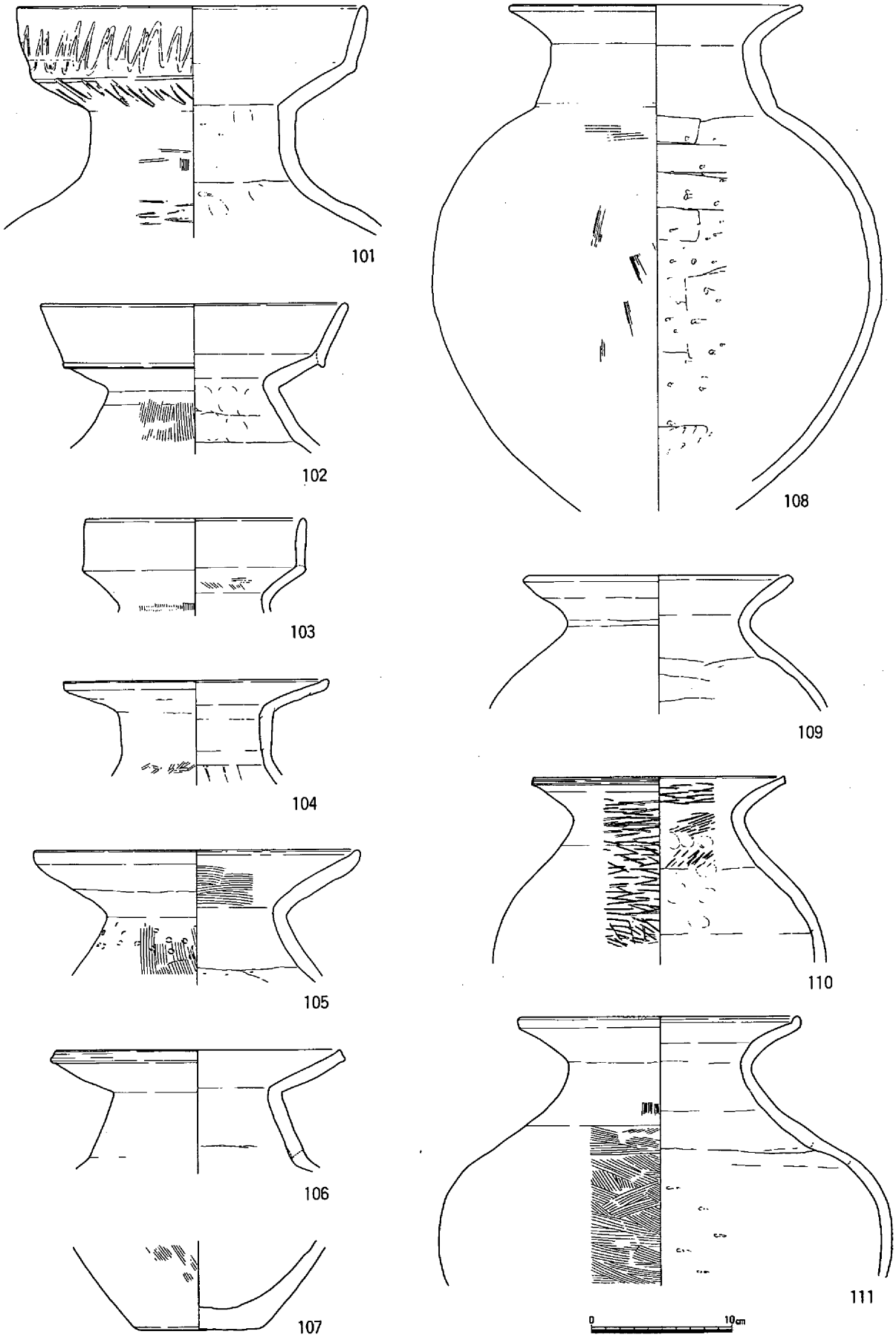

96

0　10cm

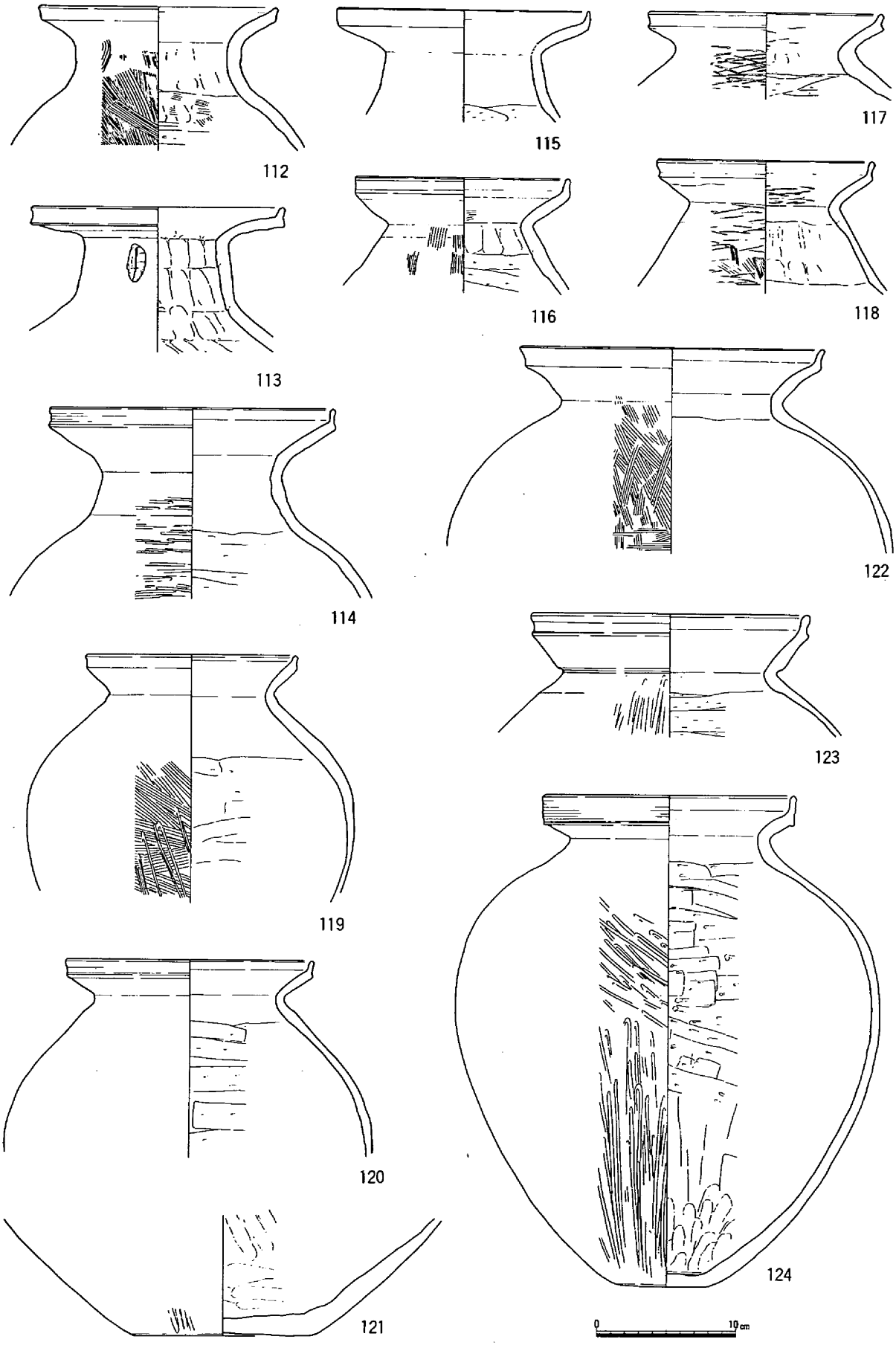


1．黒褐灰色粘質微砂（粗砂多含）（溝-7）
2．褐灰色粘質微砂（粗砂含）
3．暗褐灰色粘質微砂
4．灰色粘質微砂
5．オリーブ灰色粘質微砂（粗砂多含）
5'．褐灰色粘質微砂（粗砂多含）
6．暗褐灰色粘質微砂（粗砂含）
7．暗褐灰色微砂（粗砂含）
7'．暗褐灰色細砂
8．褐灰色微砂
9．灰色細砂（下層は粗砂）
10．暗灰色粘質土
11．黒灰色粘質土
12．青灰色粘質土

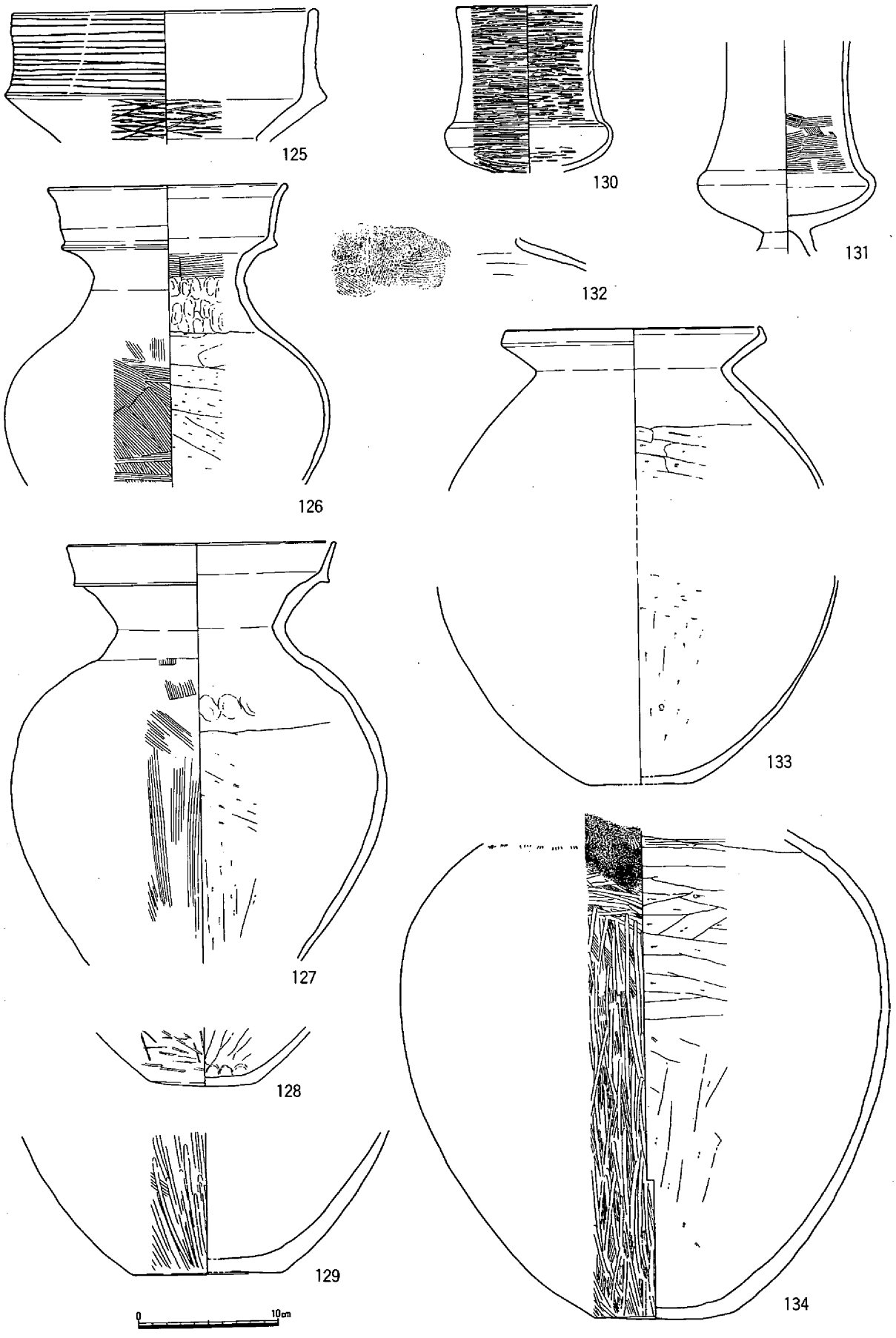
第17図　河道－４断面図（1/60）・出土遺物（１）(1/4)



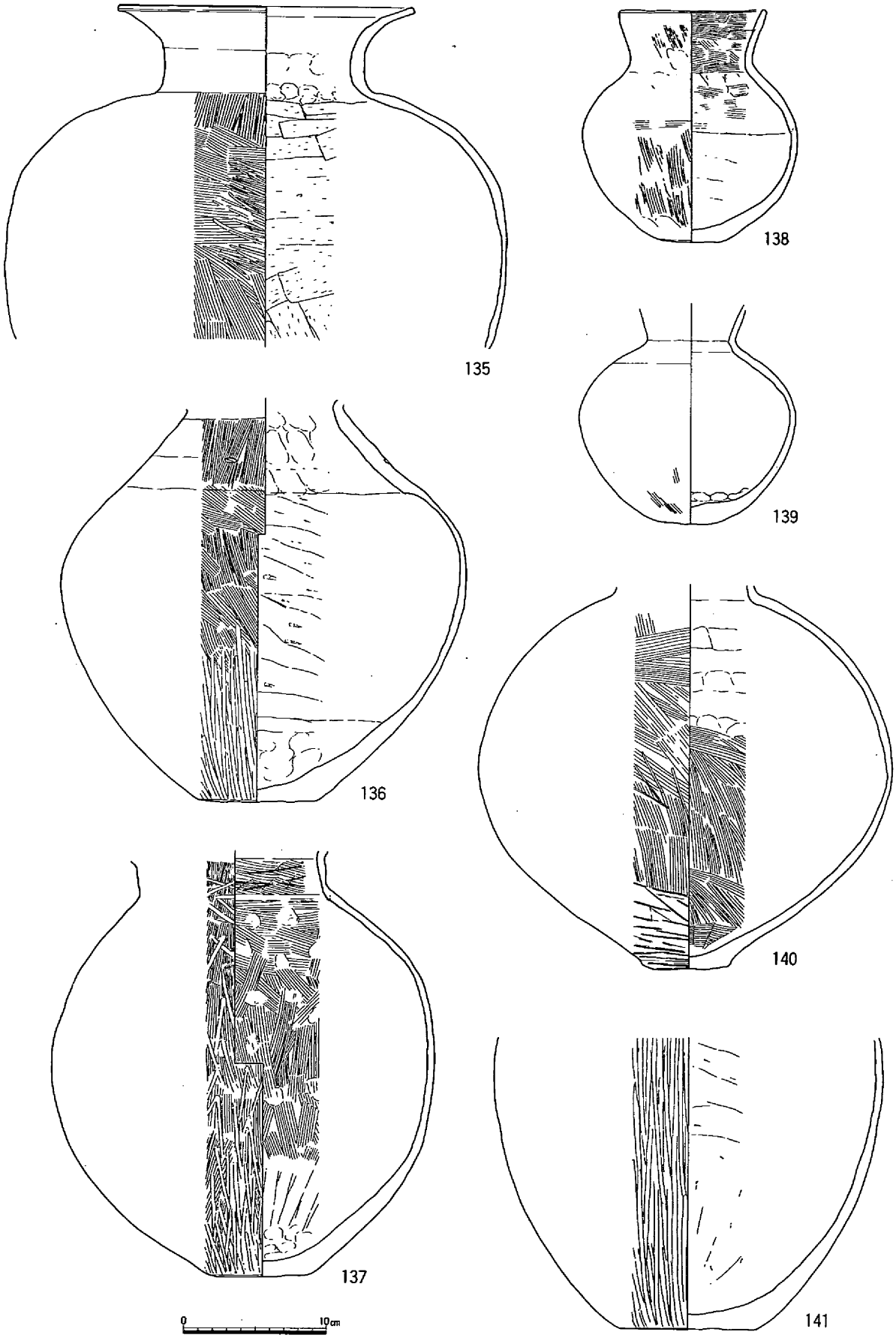
第18図　河道－４出土遺物（２）(1/4)



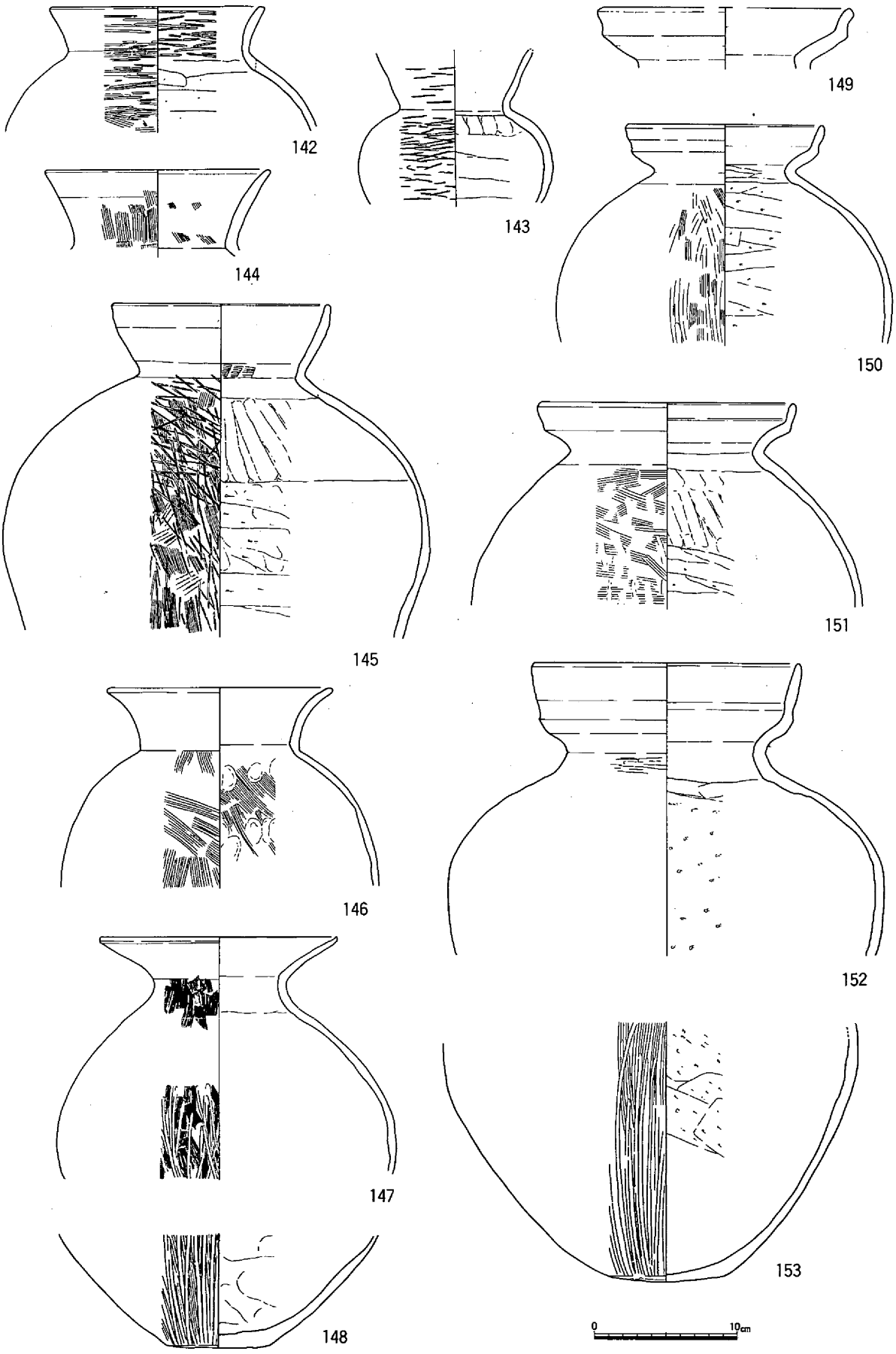
第19図　河道－４出土遺物（３）(1/4)



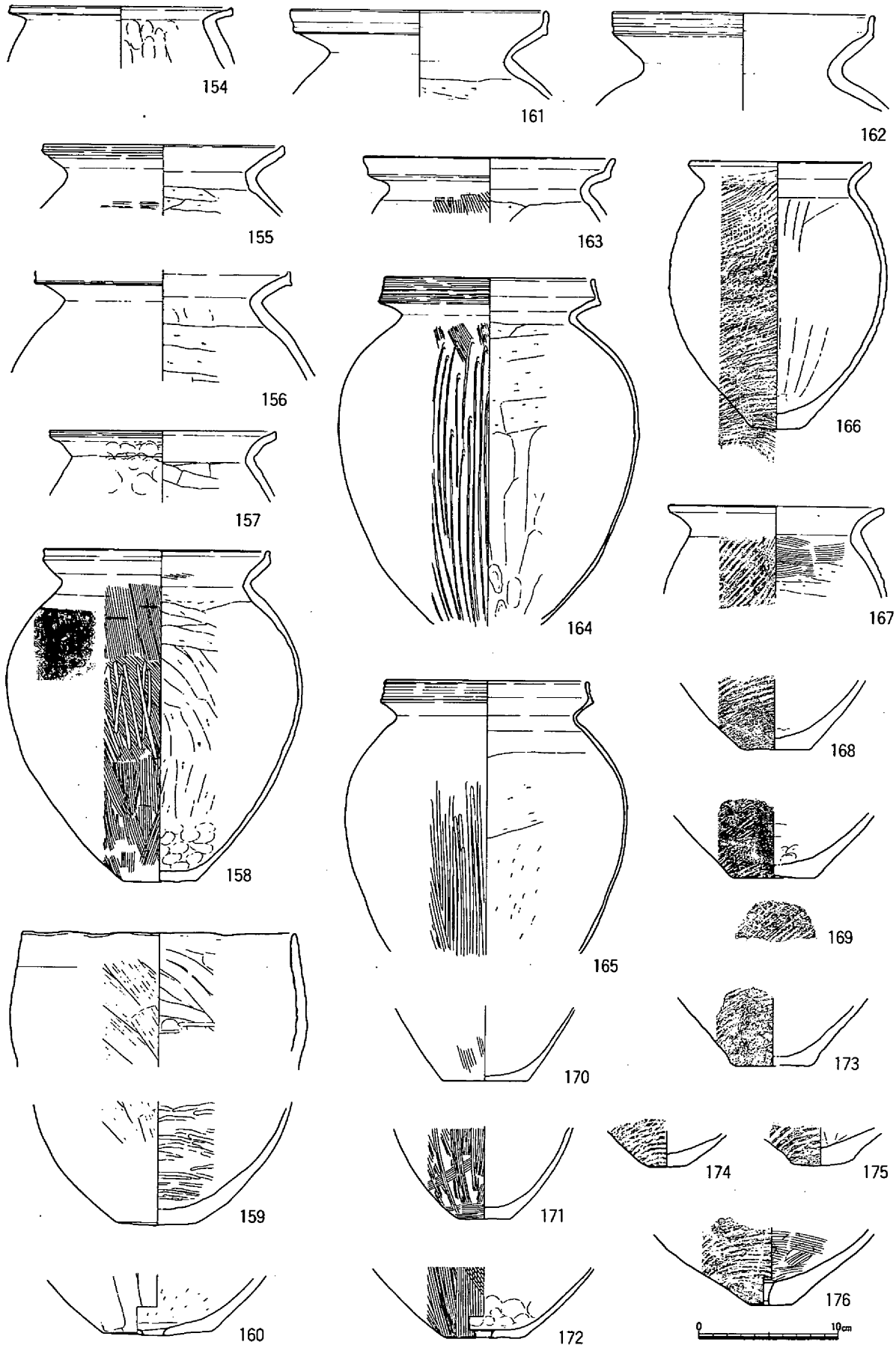
第20図　河道－４出土遺物（４）(1/4)



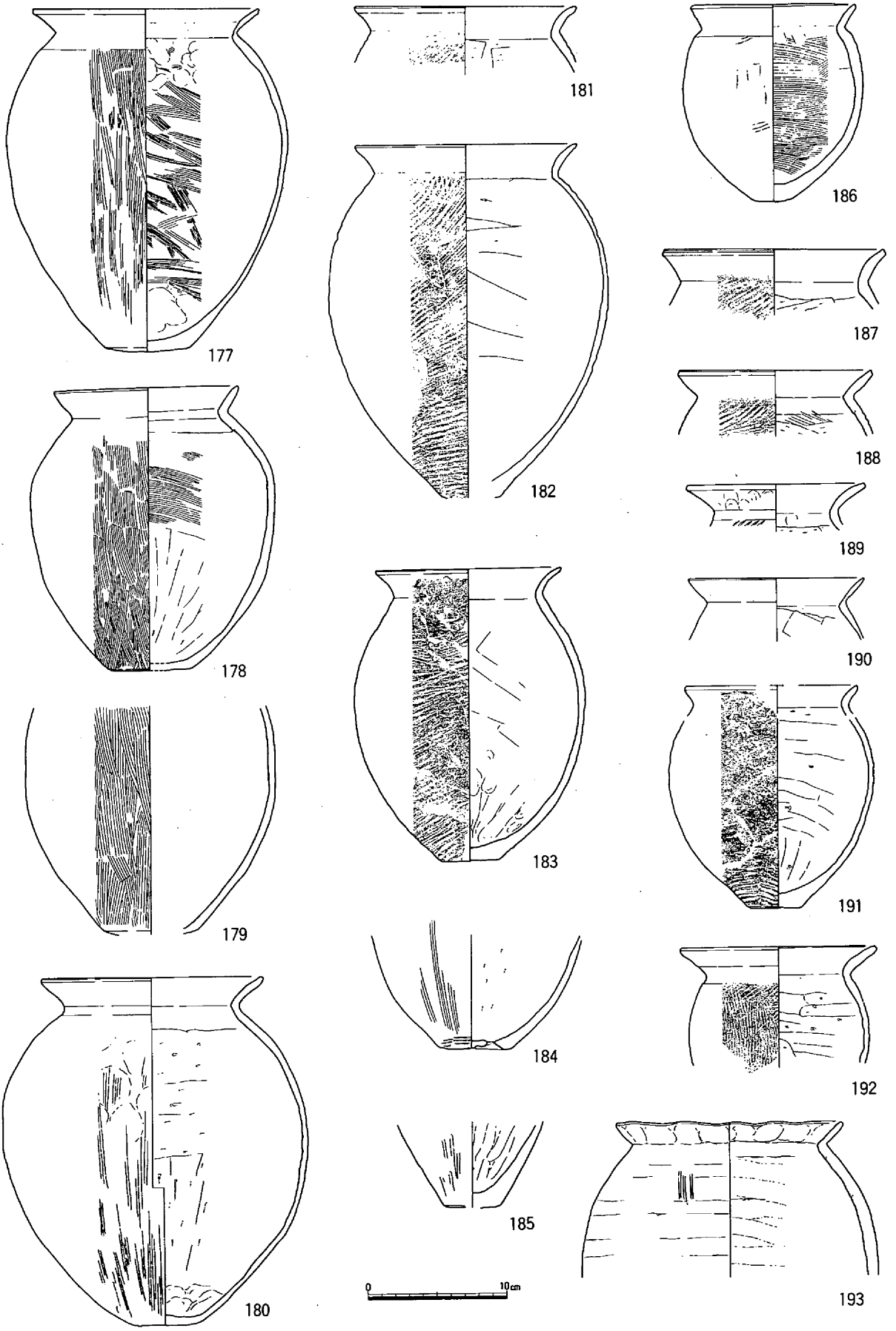
第21図　河道－４出土遺物（５）(1/4)



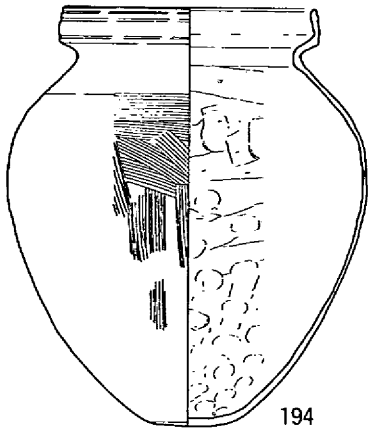
第22図　河道－４出土遺物（６）(1/4)

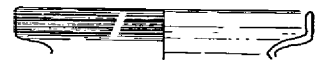


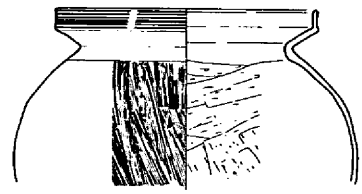
第23図　河道－４出土遺物（７）(1/4)

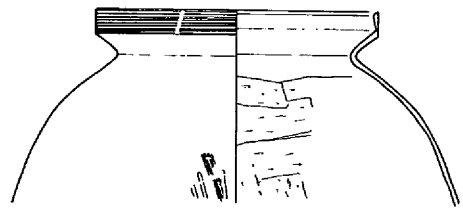


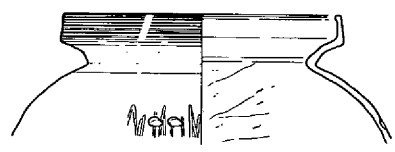
第24図　河道－４出土遺物（８）(1/4)

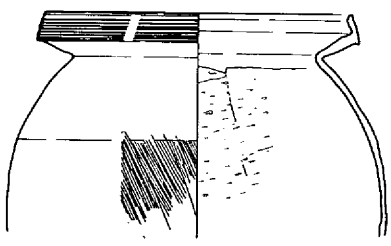


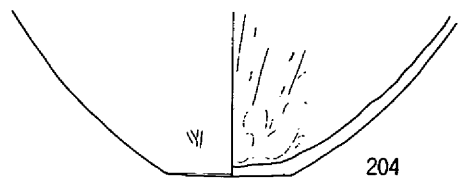


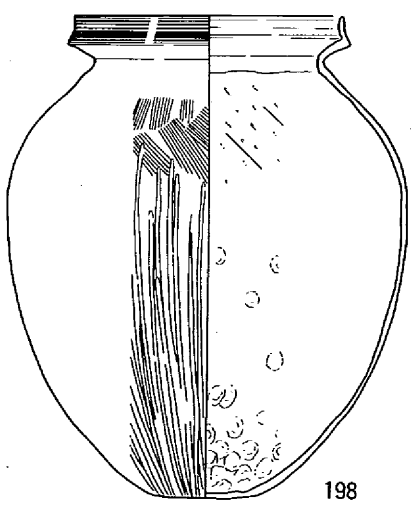


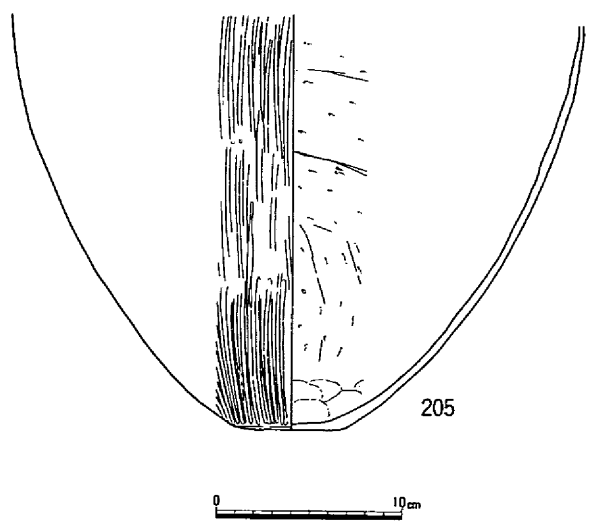




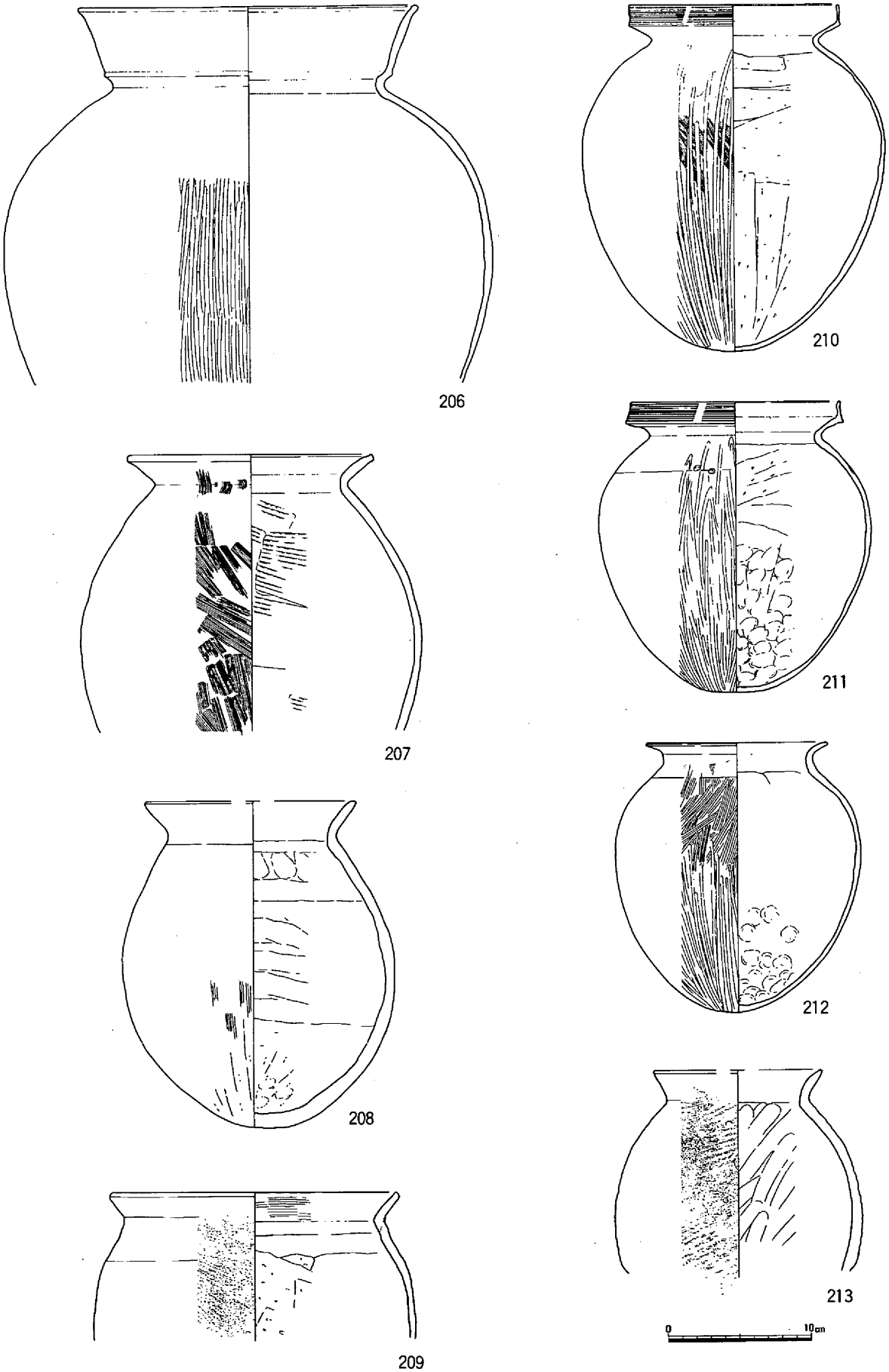




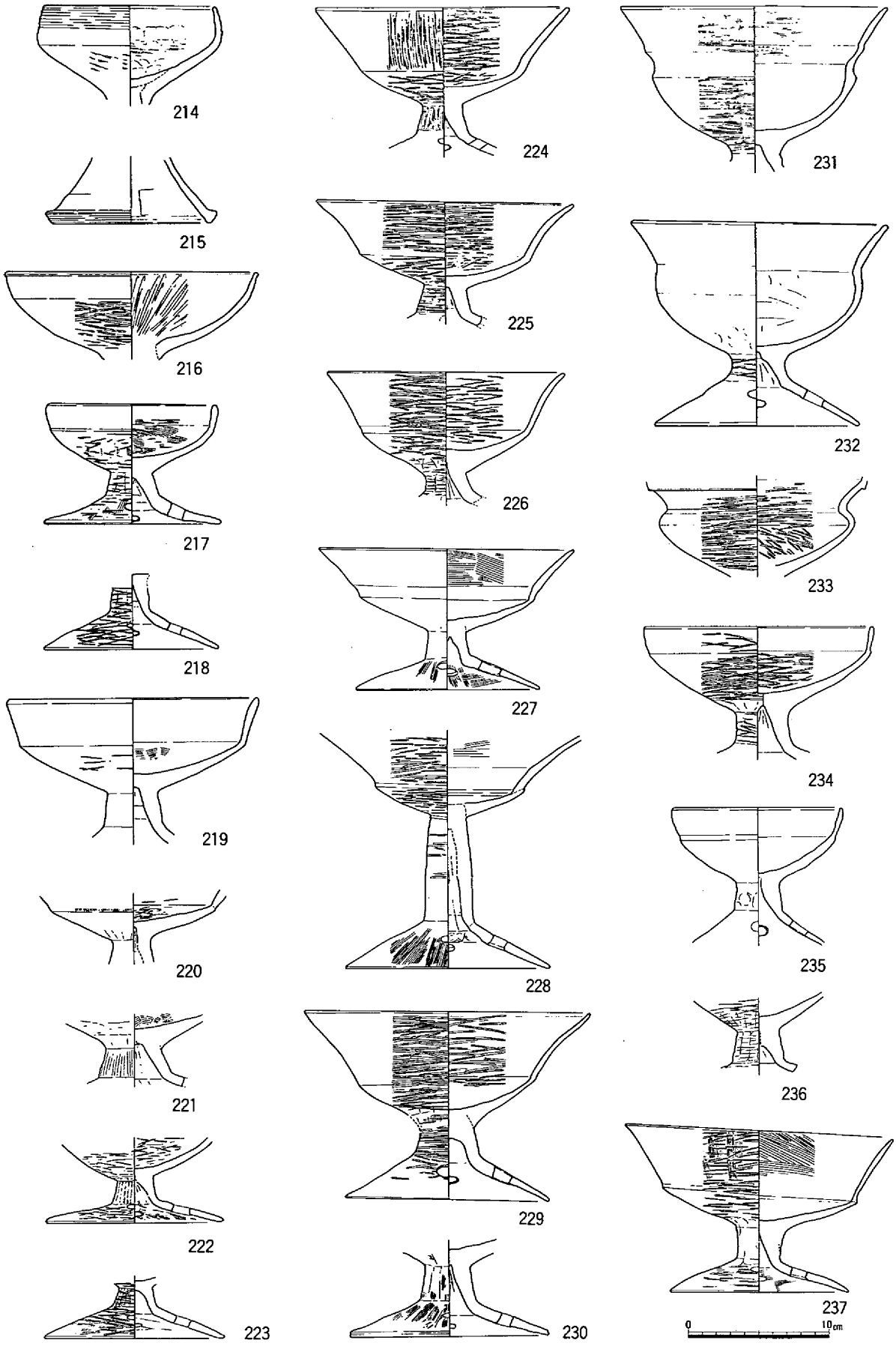




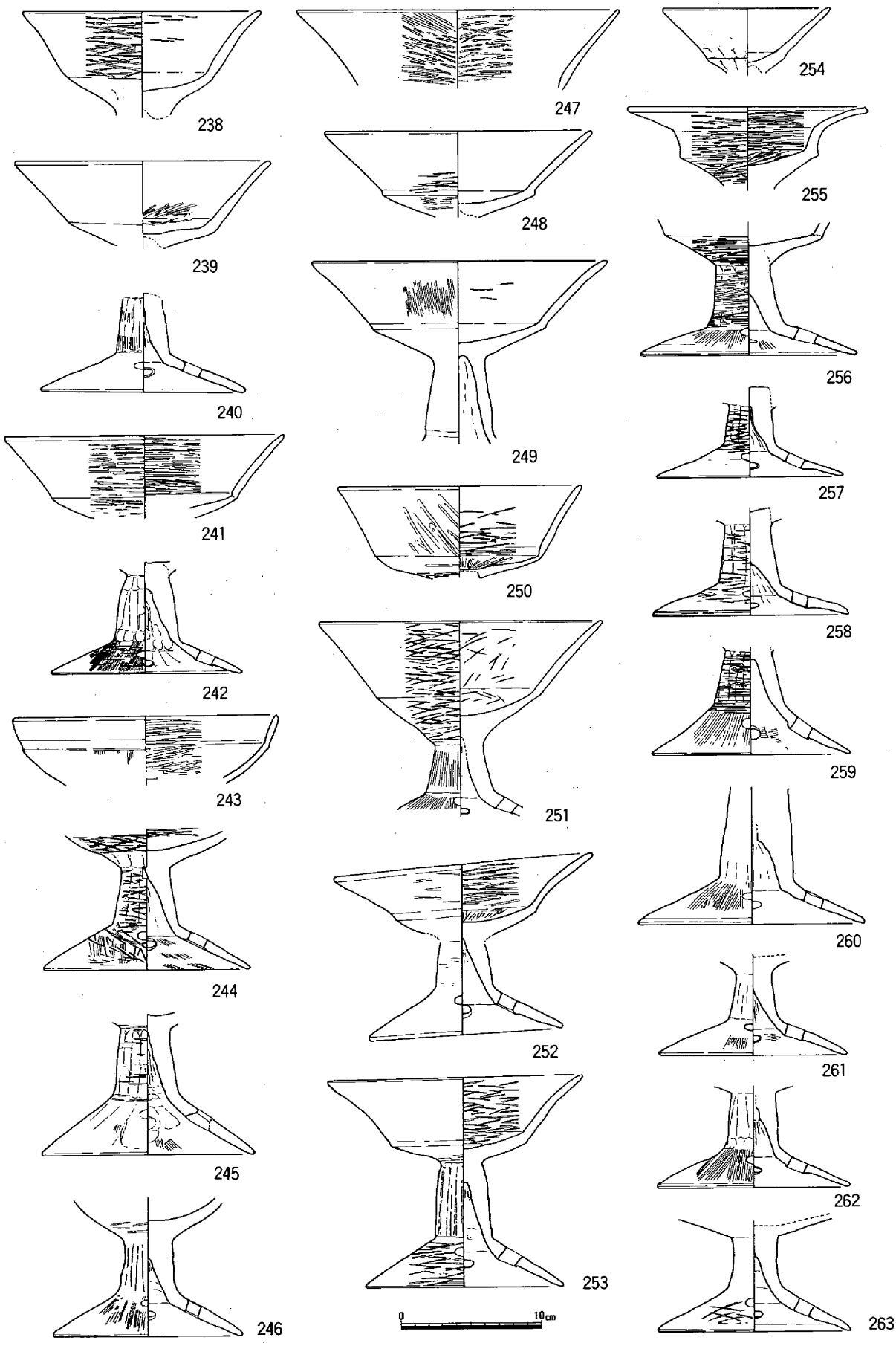
第25図　河道－４出土遺物（９）(1/4)



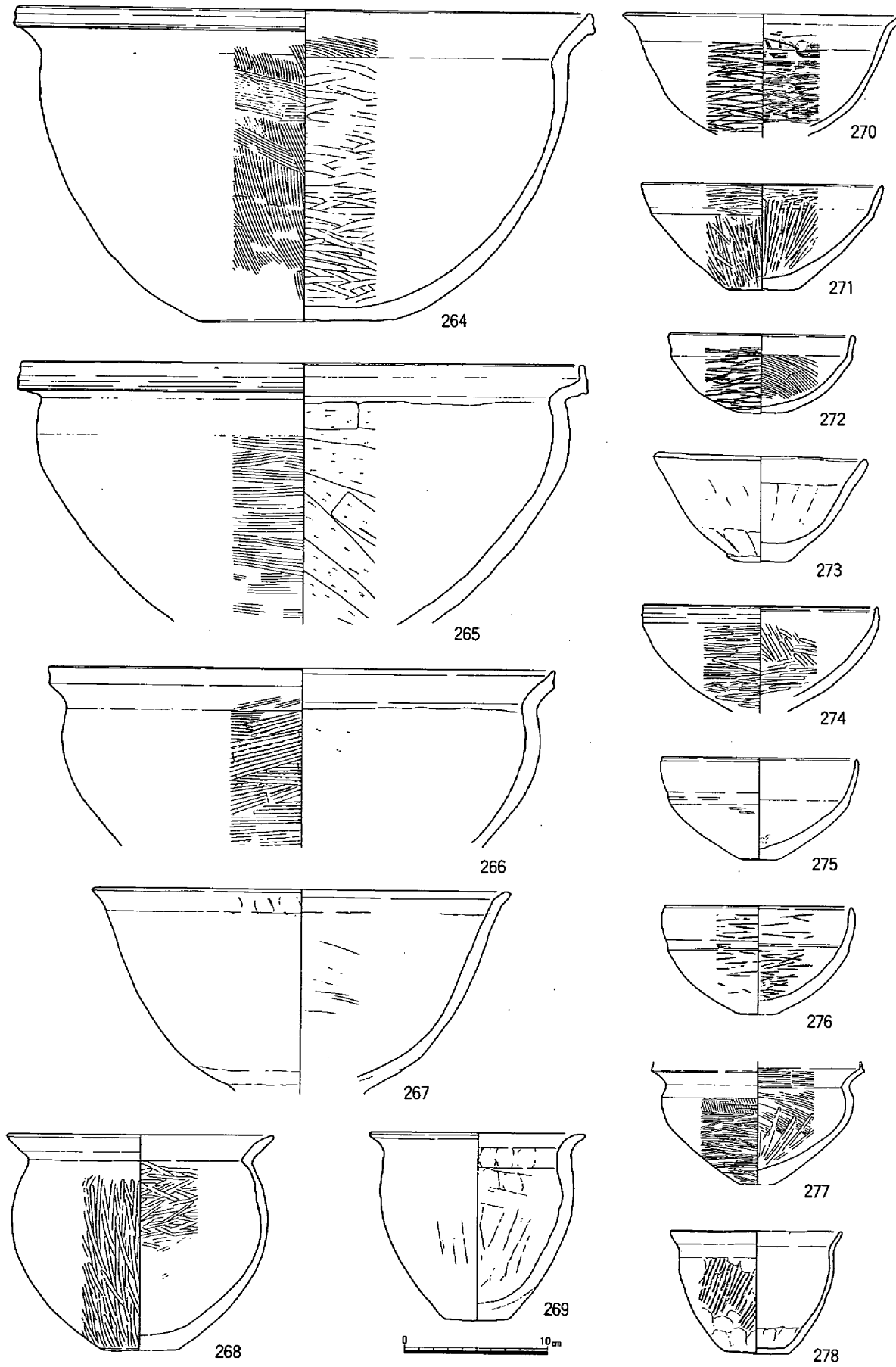
第26図　河道－４出土遺物（10）（1/4）



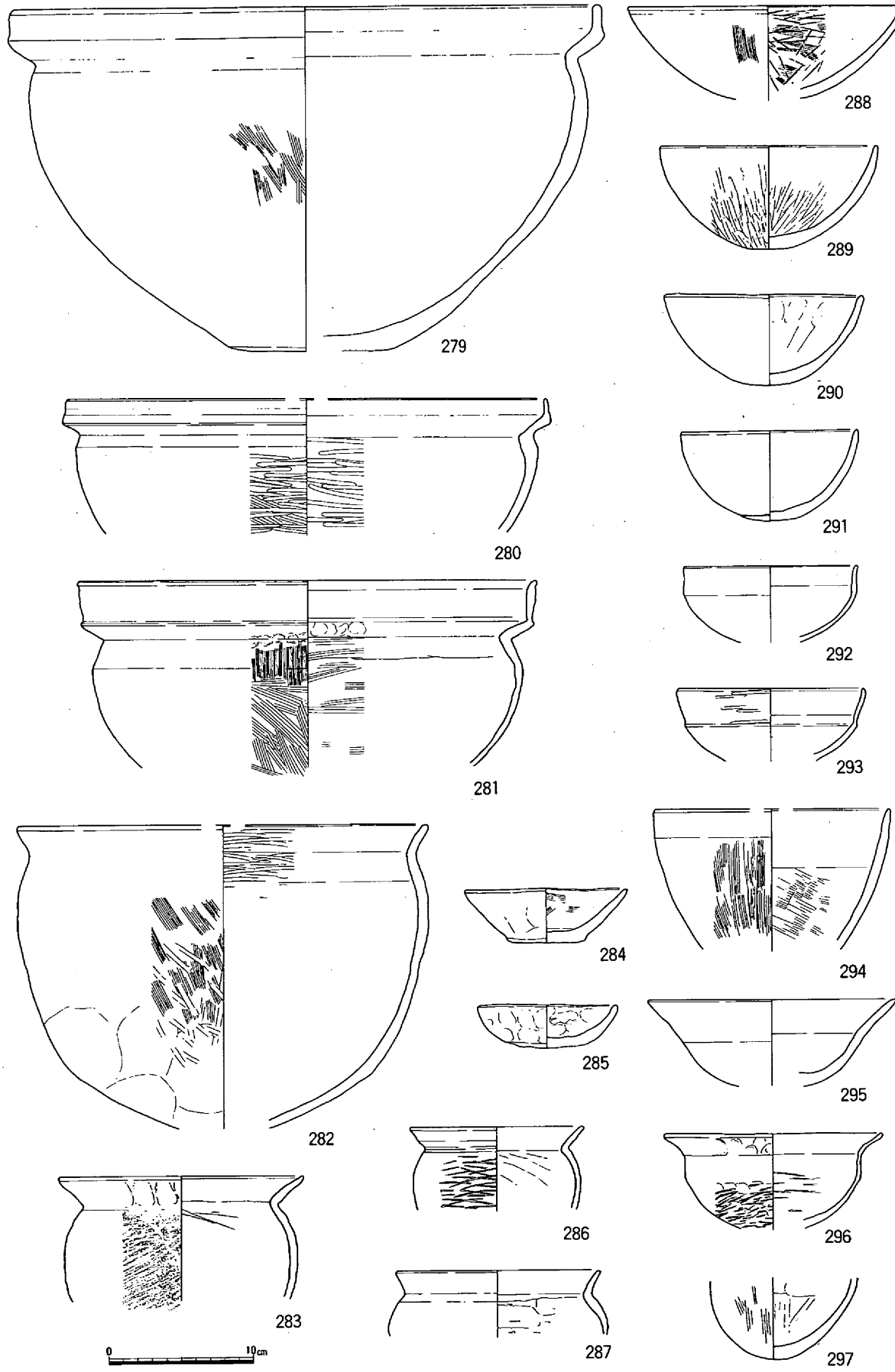
第27図　河道－４出土遺物（11）(1/4)



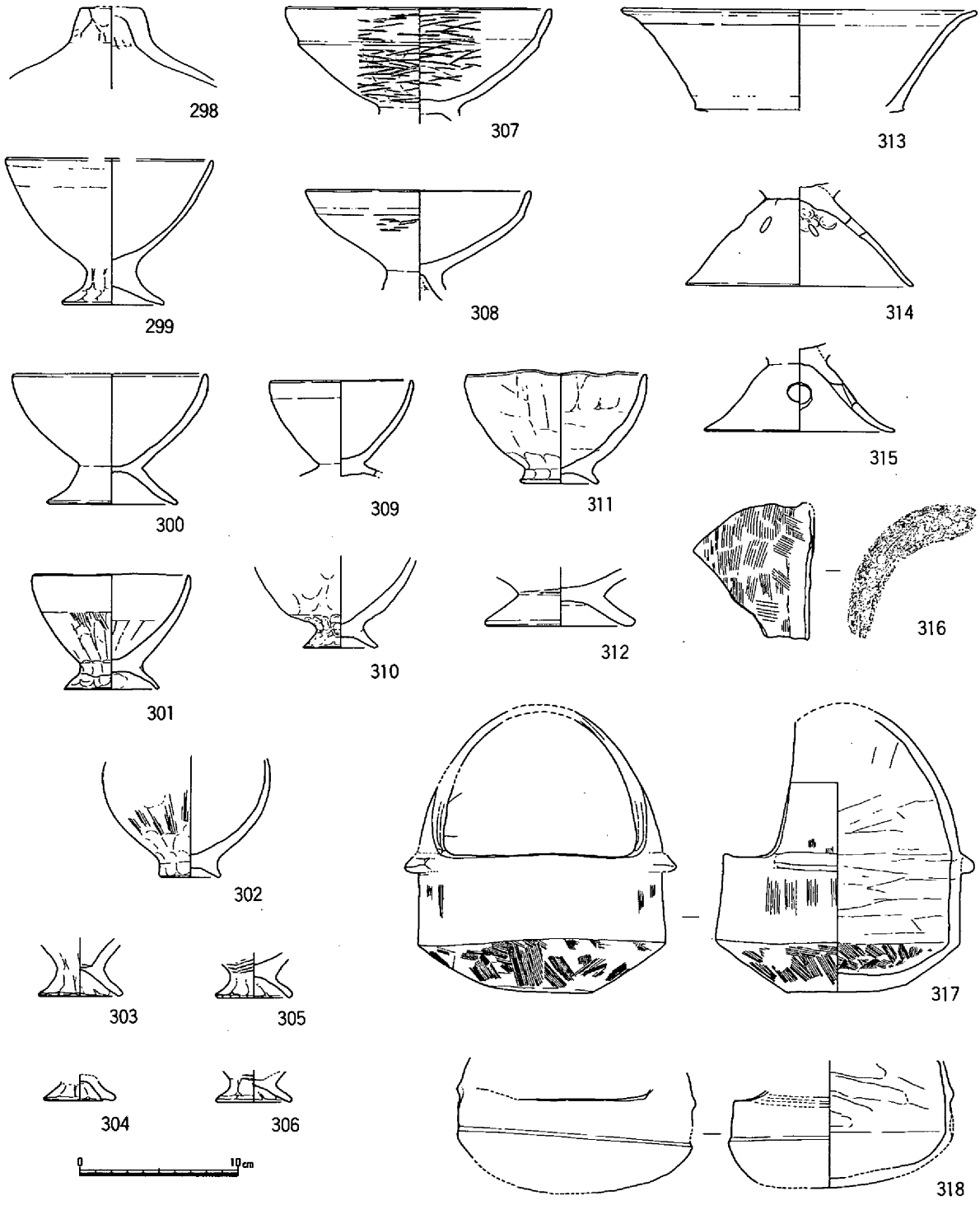
第28図　河道－４出土遺物（12）（1/4）



第29図　河道－４出土遺物（13）（1/4）

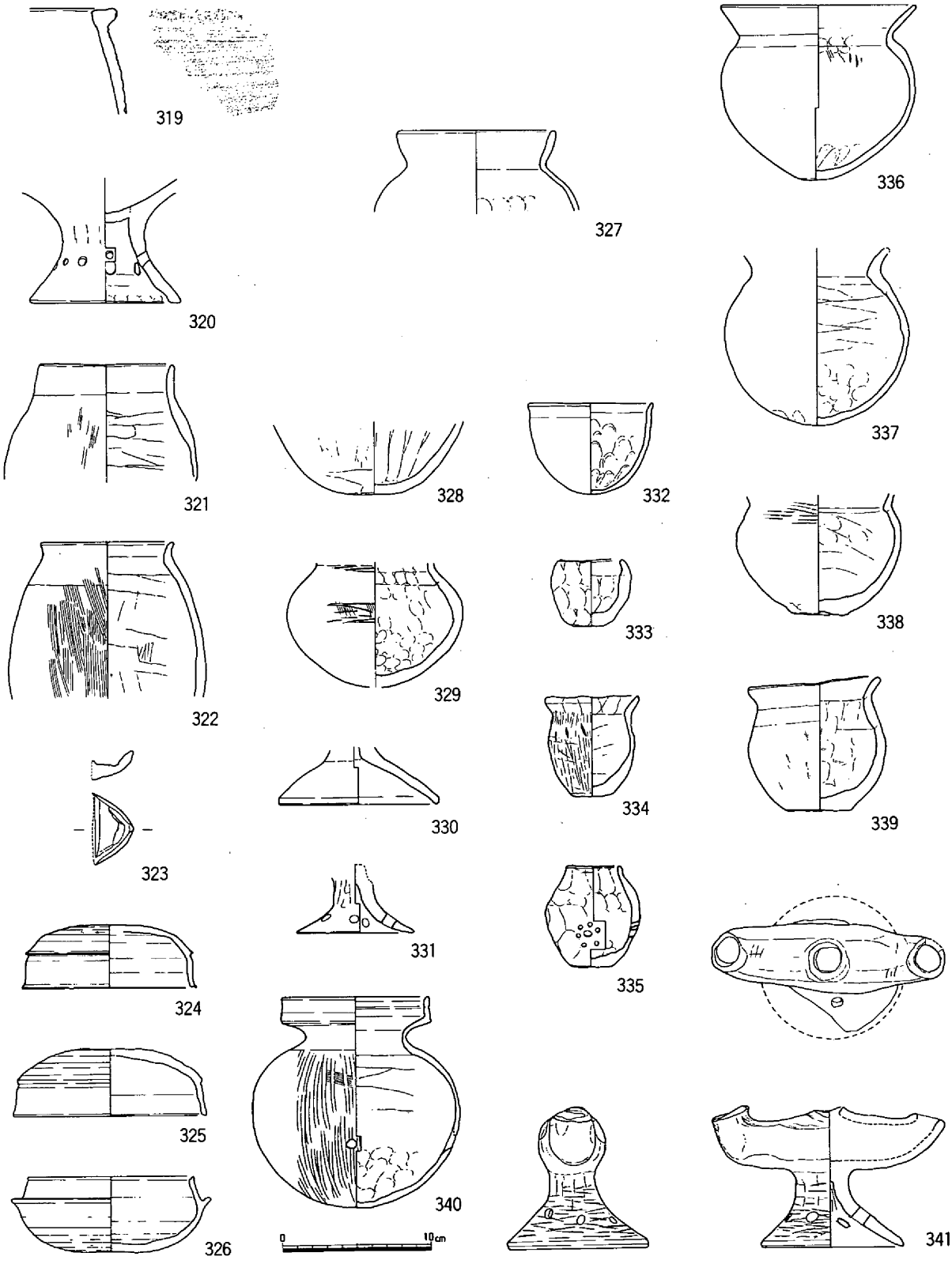


第30図　河道－４出土遺物（14）（1/4）



第31図　河道－４出土遺物（15）(1/4)

214～263は高杯形土器、264～279・307～312は鉢形土器である。また、298は蓋形土器である。299～302は台付鉢形土器・303～306はいわゆる製塩土器である。313は器台314・315は小形の器台、316～318は手焙り形土器である。このほかに、319・320は第９層から出土した土器である。323～340は、第２層の暗褐灰色粘質微砂から出土している。333～335は手捏ね土器とみられ、335は体部に７個の孔が穿たれている。341は鳥形土器である。342は全長4.8cm・高さ3.6cm・最大幅3.6cmを測り、一部が欠



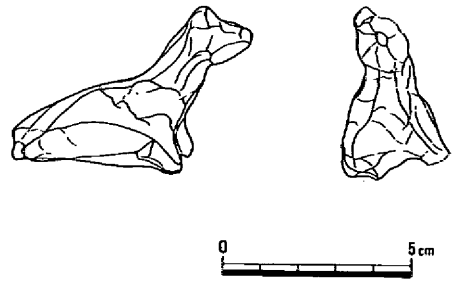
第32図　河道－４出土遺物（16）（1/4）

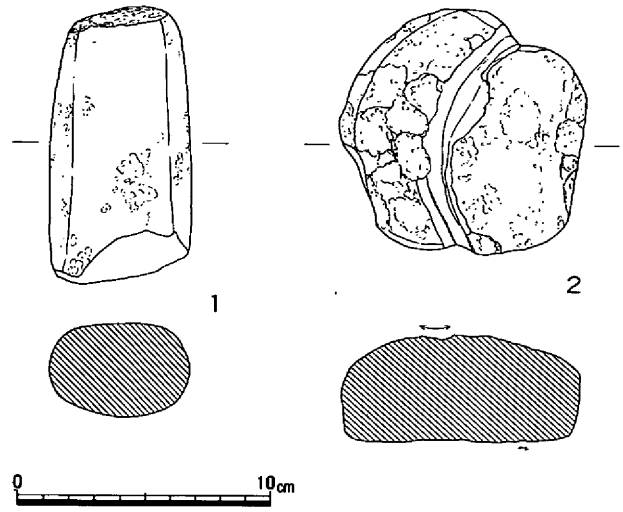
損しているものの犬とみられる動物形土製品である。

第33図の１は、敲石に転用したとみられる太型蛤刃石斧で、一部が欠損しているものの残存全長

11.2cm・最大幅5.6cm・最大厚さ3.8cmを測る。２は途中に抉り紐をかける石錘である。最大長9.8cm・最大幅9.8cm・最大厚さ4.5cmを測る。

この河道は、河道－２・３を明らかに切って検出されたもので、今回検出された河道のうち最後に流走していたものとみられる。河道としての最終埋没時期は、古墳時代初頭と考えられる。





第33図　河道－４出土遺物（17）（1/2・1/3）

２．溝

溝－１

２－Ｄ区南西部において検出された溝で、北東から西に流走するものとみられるが、西側は河道－４に削平され、北東側は用地外にいたる。また、検出されている溝の中央部は、河道－３によりさらに寸断されて、検出できたのは僅か数ｍである。溝の規模は、よく残存していれば、幅２ｍ以上あったものとみられるが、北東側の用地境の検出面では幅40cm・深さ34cm程が確認され、断面はＵ字形を呈する。埋土は、上層に褐灰色微砂、下層に灰色細砂が堆積している。

遺物は出土していないが、埋没状況などから弥生時代前期に比定される。

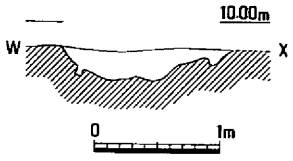
溝－２（第34図）

４－Ｃ区と４－Ｄ区の境において検出された溝で、南東から北西に流走していたものとみられる。北西側は溝－３に切られ、検出したのは僅か３ｍ足らずのみで、詳細は不明である。検出した溝の規模は、幅130cm・深さ25cm程で、断面は緩やかな傾斜で底面にいたる。底面は凹凸をもつ。埋土は褐灰色細砂が一層である。

時期は、遺物は出土していないが、埋土・検出状況などから弥生時代前期と思われる。

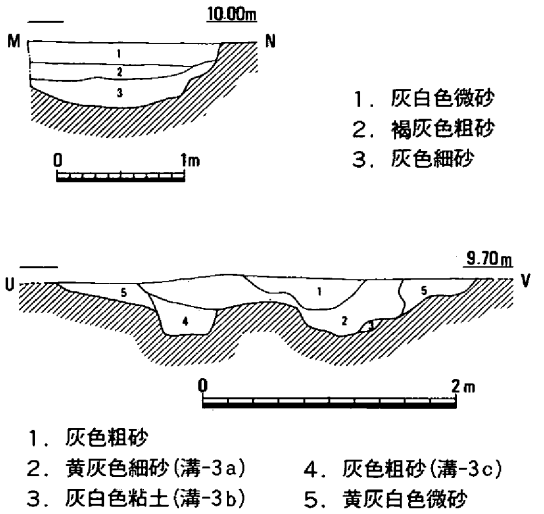
溝－３（第35図）

Ｄラインのほぼ西側を蛇行しながら、北から南へ流走していたとみられる溝であるが、河道などに寸断され、検出できたのは１－Ｃ区の南東部から２－Ｃ区の北東部にかけてと、３－Ｃ区の北東部それに、３－Ｃ区の南東部から４－Ｃ区の北東部にかけてである。この溝は、概ね同じ場所を流れているものの、複数の流路が確認されている。１－Ｃ区から２－Ｃ区にかけての北部においては、ほぼ同じ流路をとっているが、３－Ｃ区の南東部から４－Ｃ区の北東部にかけての南部にいたり、各時期によりやや流路を変え、蛇行気味に流走している。これらの流路が一つにまとまって検出された溝である。



第34図　溝－２断面図（1/60）

溝の規模は、ほぼ同じ流路をとっている北部では、検出面での幅が180cm・深さは50cm程である。断面は緩やかなＵ字形を呈する。一方やや流路を変え、蛇行気味に流走している南部では、検出面での幅が溝全体で約330cmを測る。深さは50cm程で、断面は緩やかな傾斜で底面にいたる。



第35図　溝－３断面図（1/60）

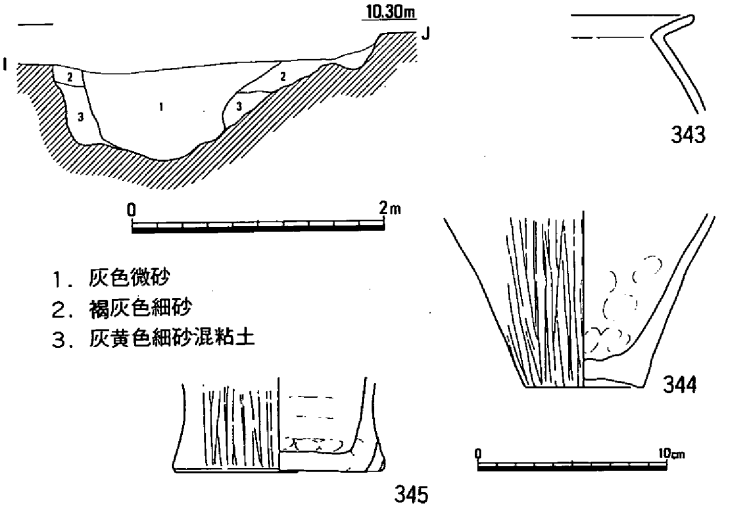
溝の埋土は、北部（Ｍ－Ｎ）では底に灰色細砂が堆積し、その上に褐灰色粗砂が、上層に灰白色微砂が堆積している。一方南部（Ｕ－Ｖ）では、溝の埋積土として第４層の灰色粗砂が最初の溝（溝－３ａ）である。次に第３層の灰白色粘土を埋土とする溝（溝－３ｂ）が埋まり、最後にこれらの溝の埋土を大きく抉って第２層の黄灰色細砂を埋土とする溝（溝－３ｃ）が堆積している。出土遺物としては、若干の土器片が認められたものの、図示できるものはなかった。

時期は、出土遺物や検出状況などから弥生時代中期以前とみられる。

溝－４（第36図、図版５－３・４）

１－Ｄ区の東部から２－Ｃ区の中央部にかけて流走している溝で、両端は河道－２により切られている。東から流れ、途中折れ曲がって南西に流れを変え、溝－５に合流する。規模は、幅170cm・深さ72cmを測る。埋土は、灰色微砂が堆積している。

出土遺物としては、土器が若干認められた。343は細片で口径は不明であるが、甕形土器の口縁片である。344は甕形土器の底部片で底径6.2cmを測る。345はジョッキ形土器の底部片で、底径10.8cmを測り、横に孔が２個並んで穿たれている。時期は、出土遺物等から弥生時代中期とみられる。

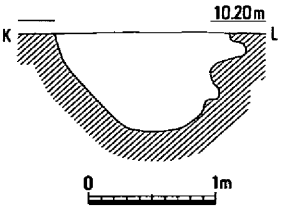


第36図　溝－４断面図（1/60）・出土遺物（1/4）

溝－５（第37図、図版５－３）

２－Ｃ区の北東部において検出された、北東から南西に流走する溝である。北東側は河道－２に削平され、南西側は溝－４に合流している。検出全長は約17ｍで、規模は検出面において幅140cm・深さ79cmを測り、断面はＵ字形を呈している。埋土は溝－４と同じ灰色微砂が一層堆積している。出土遺物としては、土器が若干認められたが、いずれも細片で図示できるものはなかった。

時期は、検出状況等から弥生時代中期とみられる。

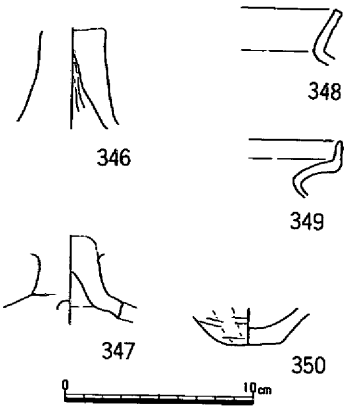


第37図　溝－５断面図（1/60）

溝－６（第５・38図、図版３－３）

５－Ｂ区から５－Ｃ区にかけて検出された、東から西に流走する溝である。西端は調査区外におよび、東端は後世の削平を受けている。検出全長は約25ｍで、規模は幅97㎝・深さ42㎝を測る。断面はＵ字形を呈し、埋土は褐灰色細砂一層が堆積している。

出土遺物としては、土器片が若干認められる。346は高杯形土器の脚柱片であるが、摩滅していて調整等は不明である。時期は、出土遺物等から弥生時代末とみられる。



第38図　溝－６・７出土遺物（1/4）

溝－７（第17・38図、図版３－３）

３－Ｃ区から５－Ｂ区にかけて検出された、北東から南に向かって流走している溝である。両端は後世の削平を受けているが、遺存状態の良好なところでは、検出面から幅128㎝・深さ20㎝を測り、断面は皿形を呈している。埋土は粗砂を多く含む黒褐灰色粘質微砂である。５－Ｂ区において溝－６を切っているが、それほど時期差はないものとみられる。

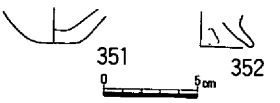
出土遺物としては、若干の土器片が認められるが、いずれも細片である。348・349は口縁部の破片で、径は不明である。350は甕形土器の底部片で、底径4.6㎝を測る。外面はタタキにより調整されている。

時期は、出土土器や検出状況等から弥生時代末とみられる。

溝－８（第39図）

４－Ｄ区の調査区隅で検出された、北東から南西に流走する溝で、検出全長は僅か２ｍ程である。検出面からの規模は、幅80㎝・深さ49㎝を測り、断面はＵ字形を呈する。

出土遺物としては、土器の細片が僅かに認められる。351は底径2.5㎝を測る底部片で、にぶい黄橙色を呈する。352は製塩土器の台部片であるが、細片で径等は不明である。灰褐色を呈する。時期は、出土土器等から弥生時代末とみられる。



第39図　溝－８出土遺物（1/4）

溝－９（第40図、図版５－１・２）

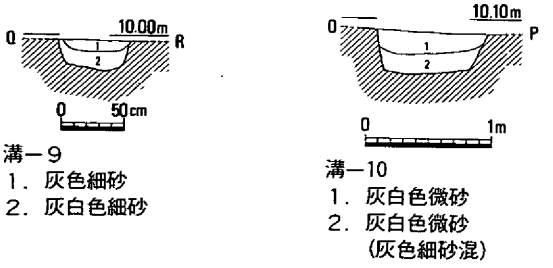
０－Ｃ区の東端において検出された、北東から南西に流走し、南西端で溝－10に合流する溝で、北東端は河道－１により削平されている。検出面からの規模は、幅67㎝・深さ24㎝を測り、断面は浅いＵ字形を呈する。埋土は上層に灰色細砂、下層に灰白色細砂の二層が堆積している。

時期は、検出できたのが僅かで、出土遺物もないため判然とはしないが、弥生時代末頃とみられる。

溝－10（第40図、図版５－１・２）

０－Ｃ区の東端において検出された、北から南西に流走する溝で、南西端で溝－９を合流している。検出面からの規模は、幅92㎝・深さ33㎝を測り、断面は浅いＵ字形を呈する。埋土は上層に灰白色微砂が、下層には白色微砂の混じった灰白色微砂が堆積している。

時期は、検出できたのが僅かで出土遺物もないため判然とはしないが、弥生時代末頃とみられる。



第40図　溝－９・10断面図（1/60）

３．土壙

土壙－１（第41図、図版７－３）

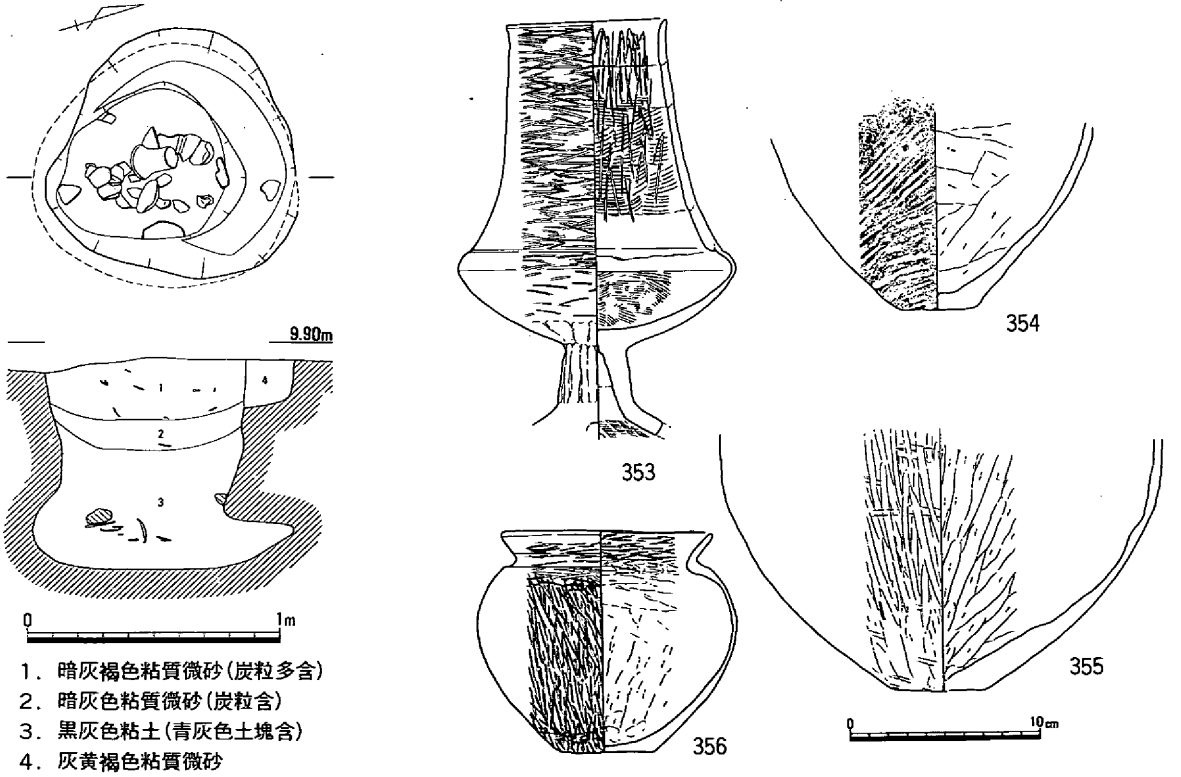
２－Ｂ区の中央北寄りにおいて検出された土壙である。検出面における平面形は不整円を呈する。規模は、径98×100cm・深さ84cmを測り、底の高さは海抜9.0mである。掘り方はほぼ垂直に掘り下げられている。なお、底面近くは砂層の地山面が抉られ少し袋状を呈している。埋土は三層が埋積している。第３層の黒灰色粘土層中からは完形の土器も出土している。第２層には暗灰色粘質微砂が、第１層には暗灰褐色粘質微砂が埋積し、第１層でも土器片が出土している。

出土遺物のうち図示できたのは、第３層から出土した土器である。353は口縁部がすぼまり気味に立ち上がっている台付直口壺である。直口部分の外面は丁寧に横方向のヘラミガキが、内面はハケで調整された後、縦方向にヘラミガキされている。台部に４か所円孔が穿たれている。354は外面がタタキで調整された、355は縦方向にヘラミガキされた底部片で、内面はヘラケズリされている。煤の付着が認められる。356は「く」の字状の口縁をもつ鉢形土器で、口縁部の内外面は横方向の、体部外面は縦方向の細かいヘラミガキ、体部内面はヘラケズリ後ナデられている。にぶい黄橙色を呈し、下半に黒斑が認められる。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期末と考えられる。

土壙－２（第42図、図版７－４）

４－Ｂ区の北西部河道－２の肩部において検出された土壙で、北側３分の１の上半は河道－２により削平されている。検出された平面は、長径101cm・短径85cmの楕円形を呈し、深さは72cmを測る。掘り方はほぼ垂直に下がる。埋土は下層が第３層の暗灰色粘土と第４層の黄灰色粘質微砂で、それぞれ



第41図　土壙－１（1/30）・出土遺物（1/4）

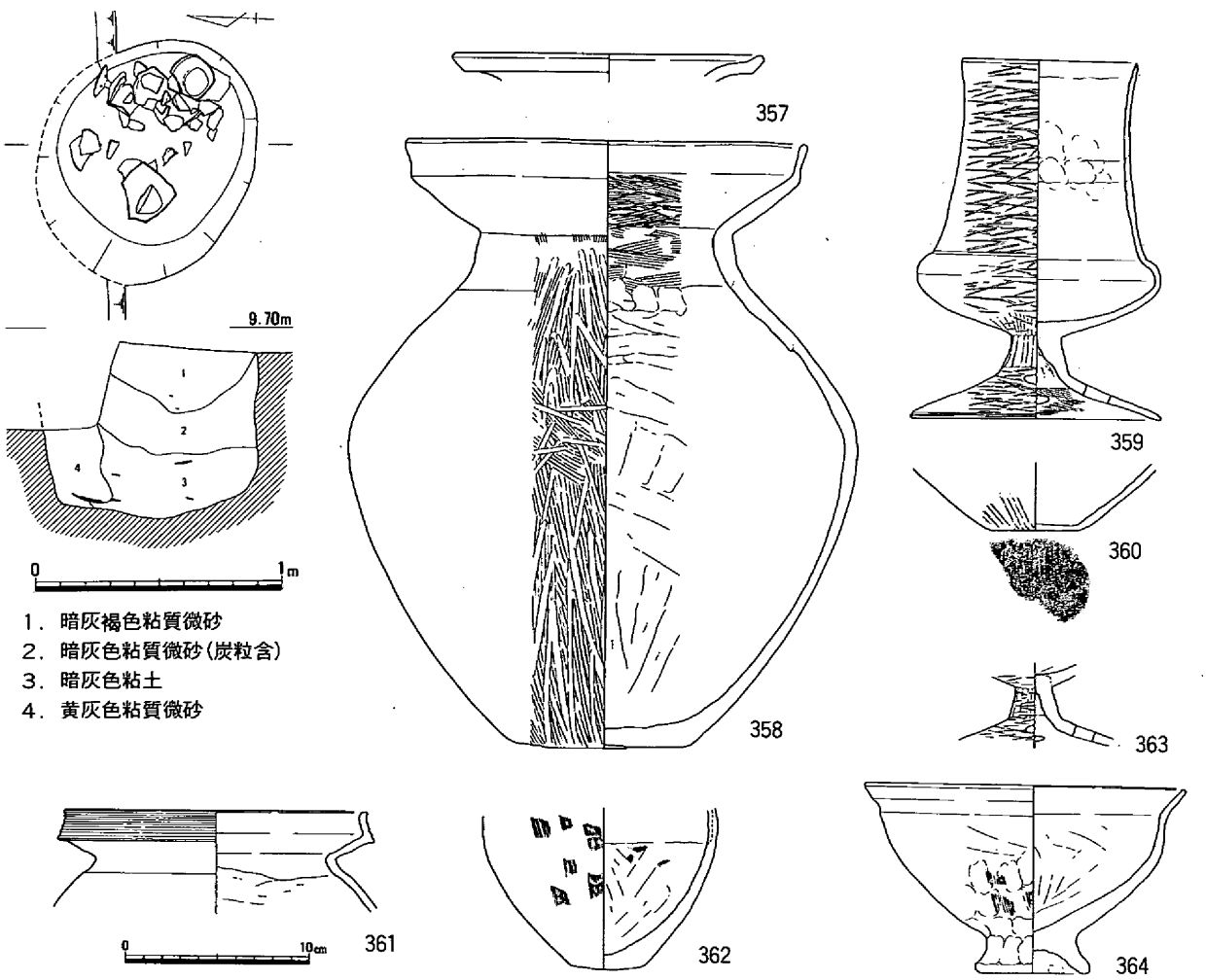
土器片が出土している。中層には暗灰色粘質微砂が、上層には暗灰褐色粘質微砂が埋積している。第３層では、ほぼ完形に復元できる土器を含み、多くの土器片が出土している。

出土土器のうち図示したものは、第３層から出土したものである。358は口縁端部がやや斜め上方に拡張された壺形土器で、体部外面と口縁部内面はハケメ後ヘラミガキされている。頸部内面は横方向のハケメ、体部内面はヘラケズリされている。にぶい黄橙色を呈し、煤が付着している。359は口縁部がすぼまり気味に立ち上がっている台付直口壺である。外面は丁寧にヘラミガキされ、直口部内面には指頭圧痕が残る。台部に４か所円孔が穿たれている。360は外面のタタキ調整が底面におよぶ土器の底部片である。361は上方に拡張された口縁部外面に５条の櫛描き沈線が施された甕形土器である。灰黄色を呈し、外面に煤が付着している。364は口縁を外方に少し折り曲げた台付鉢形土器で、体部外面はケズリの後工具によるナデおよび指オサエで調整されている。

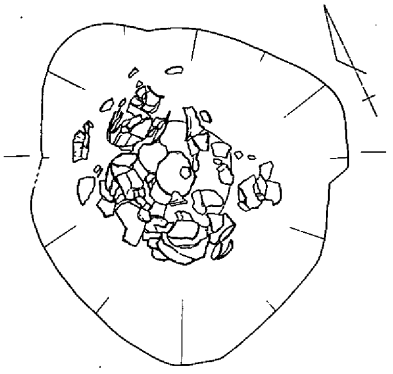
時期は、出土遺物などから弥生時代後期末と考えられる。

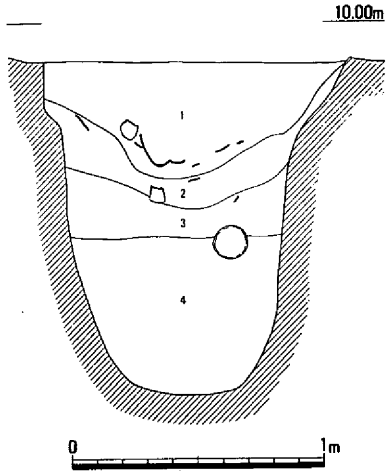
土壙－３（第43図、図版７－７・８）

４－Ｂ区北東部において検出された土壙で、検出された平面形は、長径134cm・短径125cmの不整円を呈し、深さは133cmを測る。底の高さは海抜8.51ｍである。掘り方は途中で軽く段をもつ。最下層の第４層は暗灰色粘土と青灰色粘質微砂が互層となっている。第３層は灰色粘質微砂の混じった明黄灰色粘質微砂が、第２層には褐灰色粘質微砂が、最上層の第１層には黄褐色粘質微砂の混じった灰褐色

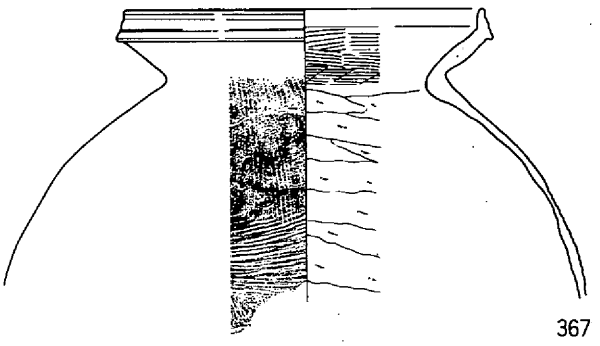


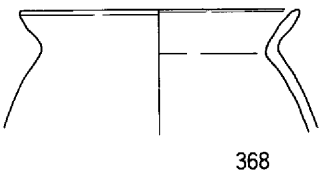
第42図　土壙－２（1/30）・出土遺物（1/4）

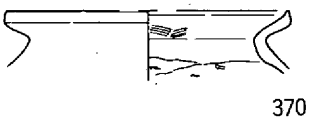


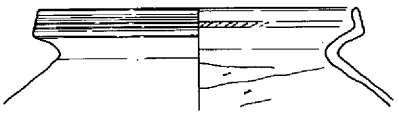


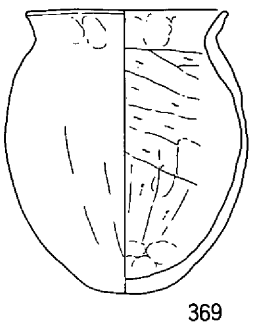
1．灰褐色粘質微砂（黄褐色粘質微砂塊混）
2．褐灰色粘質微砂
3．明黄灰色粘質微砂（灰色粘質微砂塊混）
4．暗灰色粘土，青灰色粘質微砂互層

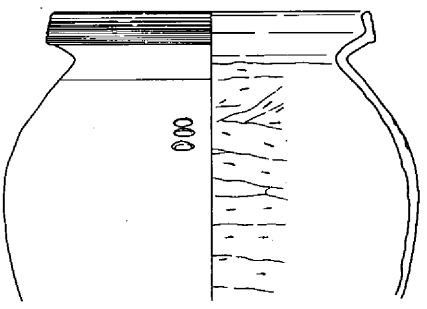


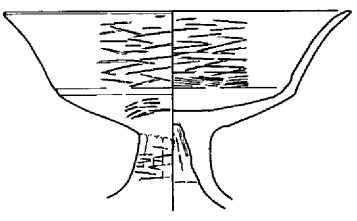


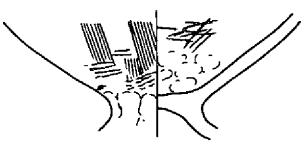


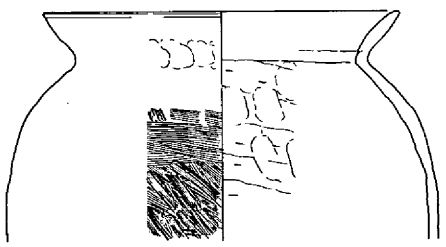


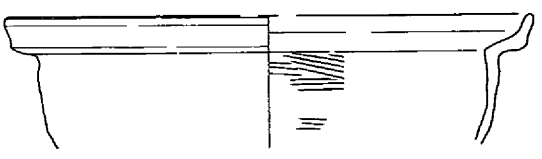


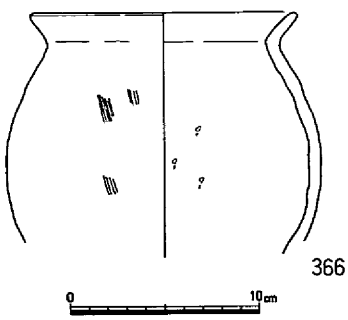


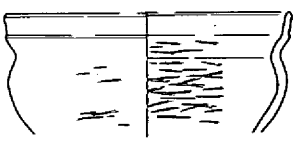


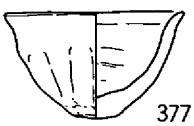




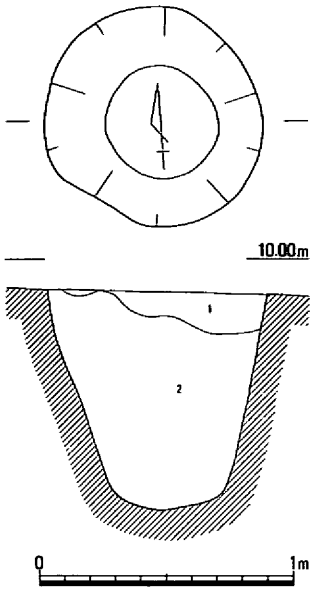




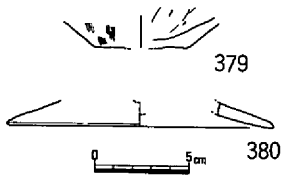




第43図　土壙－３（1/30）・出土遺物（1/4）



1．暗褐灰色粘質微砂
2．灰黄色粘質微砂
（灰色粘質微砂混）



第44図　土壙－４（1/30）・
出土遺物（1/4）

粘質微砂が埋積している。

出土遺物としては、ほぼ完形のものも含む多くの土器がある。その大半は、第１層から出土している。367はやや内傾気味に立ち上がり口縁端面に凹線の巡る甕形土器で、体部はタタキ後ハケメ調整されている。煤の付着が認められる。369は「く」の字状に外反する口縁の甕形土器で、体部外面はナデ、内面はヘラケズリ後指ナデされている。煤の付着が認められる。

土壙－４（第44図）

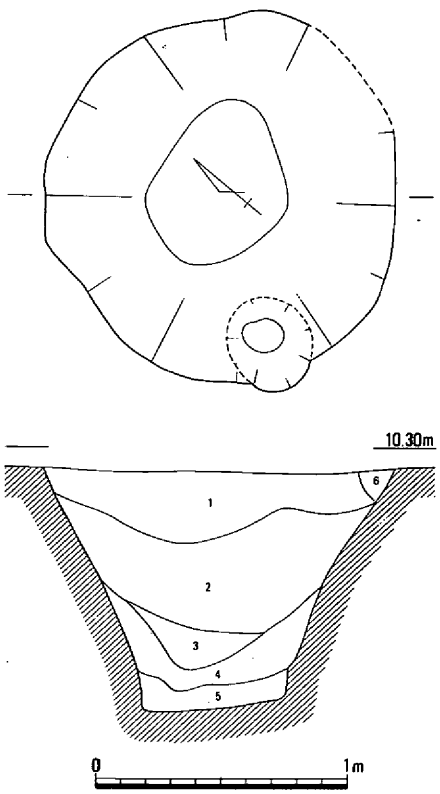
３－Ｃ区南端部において検出された土壙で、検出された平面は、直径85cm程のほぼ円形を呈し、深さは88cmを測る。底の高さは海抜8.9mである。掘り方は少しすぼまりながらも、真直ぐに掘り込まれ、底面は少し丸みを帯びる。埋土は下層に青灰色粘質微砂、上層に明黄灰色粘質微砂が埋積している。

出土遺物として、土器の細片が若干認められる。379は外面をハケメ、内面をヘラケズリされた甕形土器の底部片である。380は高杯形土器の脚裾部片である。

土壙－５（第45図）

１－Ｃ区の南東部において検出された土壙で、溝－４の北側で溝－３の西に位置している。検出された平面形は、長径145cm・短径140cmの不整円を呈し、深さは96cmを測る。底面の高さは、海抜9.25mである。掘り方は少し緩やかな傾斜で掘り込まれ、底面は平らである。埋土は、最下層の第５層は少しグライ化して、明緑灰色を呈している。その上の第４層は暗灰色を呈し、いずれも粘質土である。

中層の第３層は褐灰色、第２層は灰黄色の粘質微砂が、上層の第１層は黄色土塊の混じった、少し黒っぽい暗灰褐色粘質微砂が埋積している。



1．暗灰褐色粘質微砂（黄色土塊混）
2．灰黄色粘質微砂（灰褐色粘質微砂混）
3．褐灰色粘質微砂
4．暗灰色粘質土
5．明緑灰色粘質土
6．褐灰色粘質微砂

第45図　土壙－５（1/30）

土壙－６（第46図）

４－Ｄ区の西部、溝－２の東側において検出された土壙である。検出された平面は、直径70cm程の円形で、深さは75cmを測る。底面の高さは海抜9.19mである。掘り方はほぼ真直ぐに掘り込まれ、底面は平らである。埋土は、明灰黄色粘質土の第３層と第５層の間に、灰色粘質土の第４層が帯状に埋積している。最上層の第１層は、炭・粗砂を多く含む灰褐色粘質微砂が埋まっている。土器の大半は、こ

の第１層中から出土しているものである。383の頸部はハケメ後外面は横方向にヘラミガキし、内面は指ナデしている。また肩部内面をヘラケズリしている壺形土器である。387～389は体部外面をタタキで、内面をヘラケズリしている甕形土器で、388と389はにぶい黄橙色を呈し、煤が付着している。同一個体の可能性がある。390は体部外面を丁寧にヘラケズリした鉢形土器である。391は外面および杯部内面を丁寧にヘラミガキした水漉し粘土風の高杯形土器である。これらは、二次的に埋没したものと考えられる。

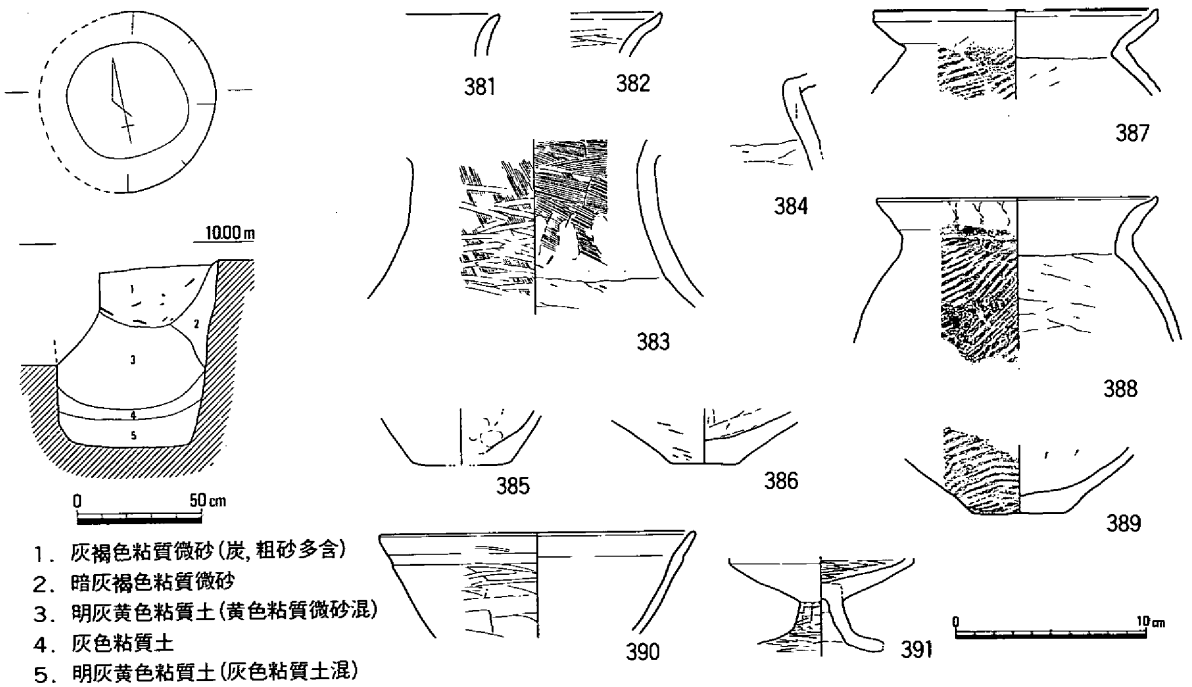
この土壙は、井戸状を呈するものであるが、規模的に少し浅く、底の高さも幾分高く、井戸と断定することはできない。時期は、弥生時代末と考えられる。

土壙－７（第47図）

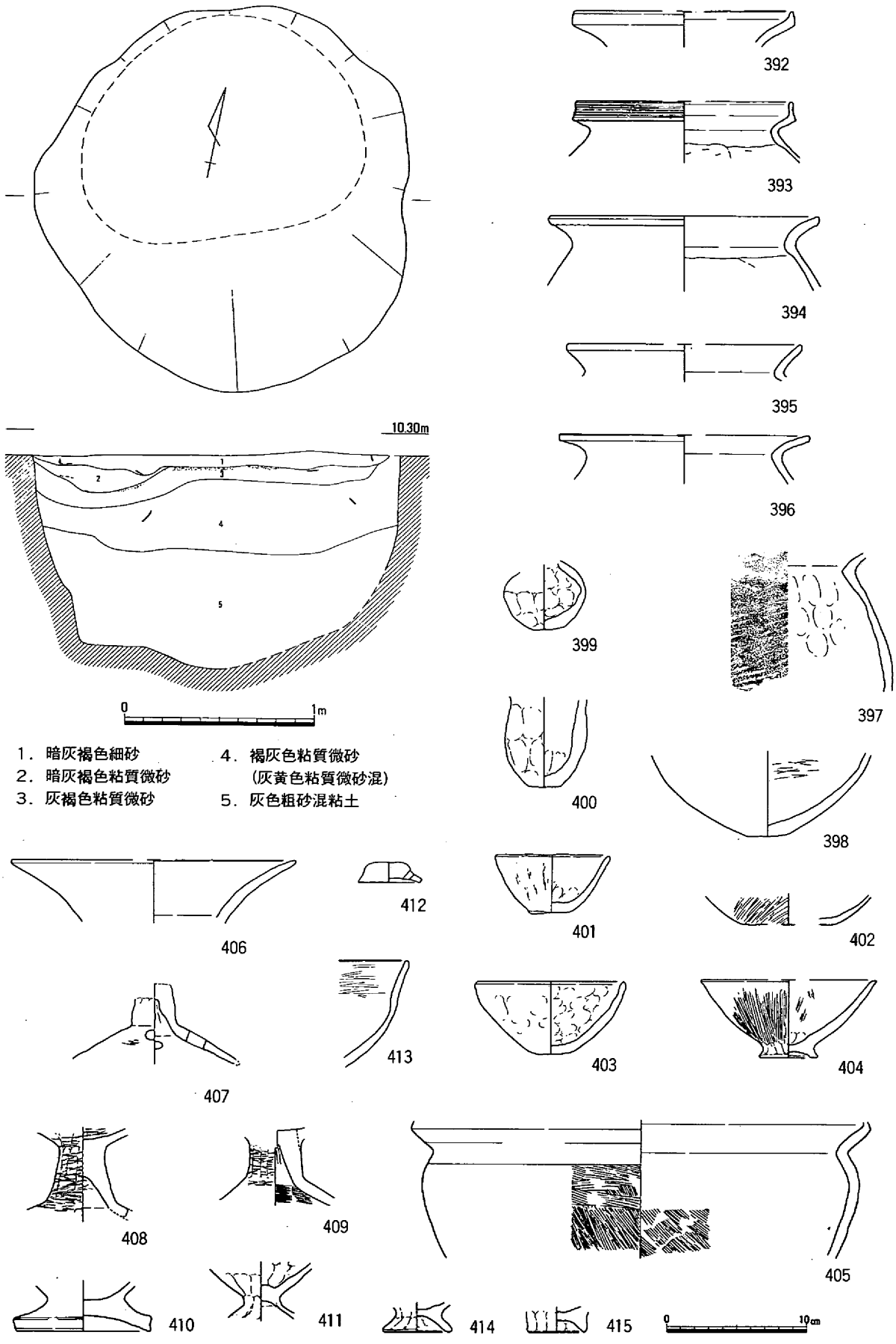
０－Ｃ区の南東端において検出された土壙である。検出された平面形は、長径204cm・短径198cmの不整円を呈し、深さは114cmを測る。底面の高さは、海抜9.01ｍである。掘り方はほぼ真直ぐに掘り込まれ、底面は中央部で丸みをもつ。埋土は、最下層の第５層は灰色の粗砂が混じった粘土で埋まっている。第３・４層は褐灰色および灰褐色の粘質微砂が埋積し、第３層の上面には鉄分の沈着層が認められる。最上層の第１層には暗灰褐色細砂が埋積している。

遺物としては第４層から上で土器が出土している。393は口唇部がやや内傾して立ち上がり、外面に６条の櫛描き沈線を巡らせる甕形土器である。393～397は「く」の字状に外反する口縁の甕形土器で、体部外面はタタキで調整されている。399・400は、いずれも口縁部を欠いた手捏ね土器である。401・402は指ナデによる手捏ね風の鉢形土器で、402は黒斑が認められる。404は内外面をハケメ調整している台付の鉢形土器である。細片で径等は推定である。408・409は外面を面とり後、横方向にヘラミガキしている高杯形土器の脚柱部片、414は製塩土器の台部片である。

時期は弥生時代末と考えられる。



第46図　土壙－６（1/30）・出土遺物（1/4）



第47図　土壙－７（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙－８（第48図）

１－Ｄ区の西部において検出された土壙である。検出された平面形は、長径200cm・短径170cmの不整円を呈し、深さは164cmを測る。底面の高さは、海抜8.51mである。掘り方はほぼ真直ぐに掘り込まれているが、途中で段をもつ。底部近くは次第にすぼまり、底面は平坦である。埋土は、下層の第３層は黄灰色粘土の塊を含む灰色粘質微砂が、第２層には暗灰色粘質微砂が、上層の第１層には炭粒を多く含む暗灰褐色微砂が埋積している。第１層と第２層の下部には、鉄分の沈着が認められる。

遺物は、第１層および第２層からいずれも土器片が出土している。416は杯部の先端外面に１条の沈線を巡らし、内外面とも丁寧にヘラミガキした高杯形土器である。時期は、古墳時代初頭である。

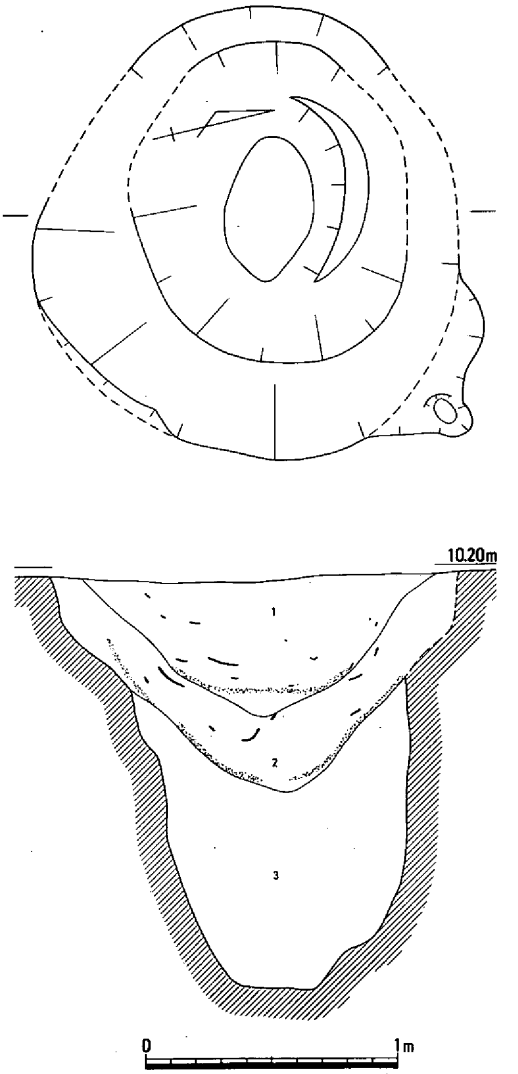
土壙－９（第49図）

０－Ｃ区のほぼ中央、調査区の北端部において検出された土壙である。検出された平面は、直径135cm程の円形を呈し、深さ107cmを測る。底面の高さは、海抜9.23mである。掘り方は、僅かにすぼまりながら真直ぐ掘り込まれ、底面は少し丸みをもつ。埋土は、最下層にグライ化し、粗砂および細砂を含む黒青灰色粘質土が埋積し、その上の第５層・第６層には粗砂を含む灰色および黄灰色の細砂が、さらにその上の第３層・第４層は暗灰色および褐灰色の粘質微砂が埋積している。第４層の下半は、粘質が強くなっている。第２層には暗褐灰色の粘質微砂が、最上層の第１層は粗砂および礫を多く含む暗灰褐色粘質微砂が埋積している。第１層の下部に粘質の強い帯状の層が認められる。

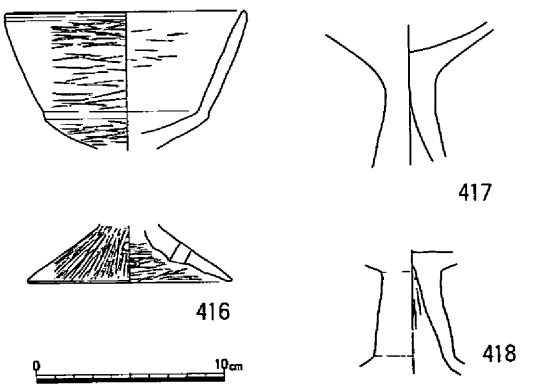
遺物は、土器片が僅かに出土している。いずれも細片で図示した土器も残存状態が悪く、調整等は明瞭でない。検出状態ではやや浅い土壙で、底面の高さもやや高目であるが、井戸状とみられる遺構である。時期は、出土遺物等から古墳時代初頭である。

土壙－10（第50図）

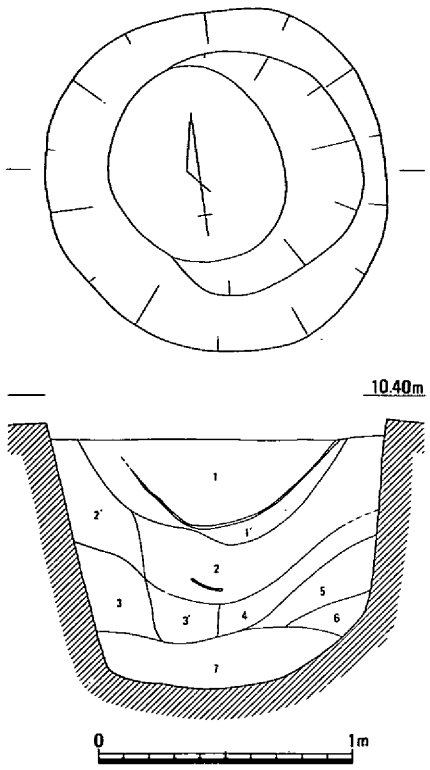
１－Ｄ区の南西部、調査区の東端部において検出された土壙で、上面は河道－２により削平されてい

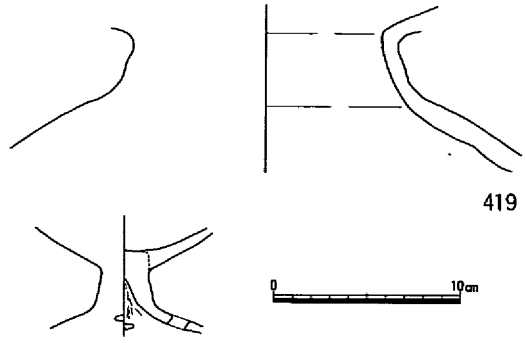


1．暗灰褐色微砂（炭粒多含）
2．暗灰色粘質微砂
3．灰色粘質微砂（黄灰色粘土塊含）



第48図　土壙－８（1/30）・
出土遺物（1/4）





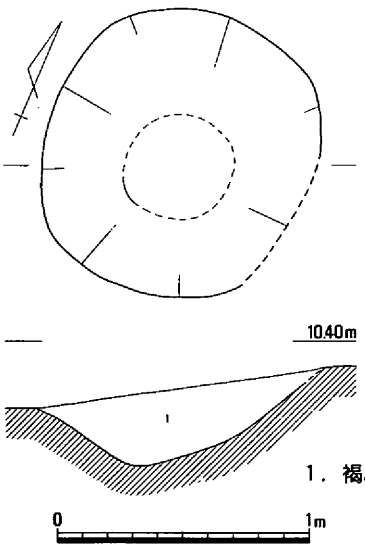
1．暗灰褐色粘質微砂(粗砂,礫多含)
1'：暗灰褐色粘質微砂
2．暗褐灰色粘質微砂(粗砂,礫多含)
2'：暗褐灰色粘質微砂
3．暗灰色粘質微砂(細砂,粗砂多含)
3'：暗灰色粘質微砂(粗砂多含)
4．褐灰色粘質微砂
5．灰色細砂(粗砂含)
6．黄灰色細砂(粗砂含)
7．黒青灰色粘質土(粗砂,細砂含)

第49図　土壙－９（1/30）・出土遺物（1/4）

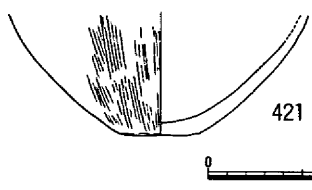
る。検出された平面は、直径110cm程のほぼ円形を呈し、深さは38cmを測る。底面の高さは、海抜9.91mである。断面は皿状を呈し、底面は平坦であるが、少し斜面となっている。埋土は、褐灰色粘質微砂が一層であるが、上層部は細砂を含み下層部は砂っぽくなる。

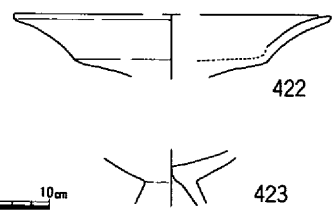
遺物は、土器片が僅かに出土している。422は高杯形土器の杯部片であるが、細片で口径等は推定である。にぶい黄橙色を呈す。423も杯部から脚部にかけての高杯形土器の細片である。水簸し粘土風の胎土で、にぶい黄橙色を呈する。

遺構の性格については不明であるが、時期は弥生時代後期末と考えられる。



1．褐灰色粘質微砂



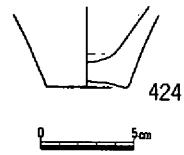


第50図　土壙－10（1/30）・出土遺物（1/4）

４．その他の遺構

下がり（第51図）

５－Ｃ区から６－Ｄ区にかけて検出された弥生時代の下がりである。全体に北西から南東に向かっての斜面であるが、斜面堆積を伴わず、遺物はほとんどない。424は、少し上げ底気味の甕形土器の底部片である。



第51図　下がり出土遺物(1/4)

(2)　河道埋没後の遺構・遺物

１．溝

溝－12（第54図）

１－Ｃ区の西端から中央にかけて断続的に検出された溝状の遺構である。西端から８ｍ程東で南西に屈曲している。底面の高さは海抜10.0ｍを測り、西側がやや低い。西端付近で溝－13に切られている。検出面での規模は、幅29cm・深さ20cmを測り、断面はＵ字状を呈する。

埋土は暗灰褐色粘質微砂が堆積しているが、下層は砂っぽくなっている。遺物は、土器片が若干出土している。425は肩部の外面を縦方向のハケメ、内面は横にヘラケズリされている甕形土器で、径は推定である。426は外面を縦方向のヘラミガキ、内面ヘラケズリされた平底の底部片で、一部に黒斑が認められる。いずれもにぶい黄橙色を呈する。427は灰白色を呈する蓋形土器、428は水漉し粘土を用い、浅黄橙色を呈する高杯形土器であるが、器面が剝離していて調整ははっきりしない。

溝－12'

１－Ｃ区の東端部において４ｍ程検出された東－西方向の溝状遺構である。中央部がやや北に湾曲している。溝－12の続きと考えられる遺構で、埋土は暗灰色微砂が堆積し、遺物は出土していない。

溝－13（第54図）

１－Ｃ区の西端から調査区の北東隅に向かい、蛇行して流走する溝状遺構である。西端近くで溝－14・15・17に切られ、溝－12を切っている。検出面での規模は、幅138cm・深さ21cmを測り、断面はＵ字状を呈する。底の高さは海抜10.0ｍを測り、東側がやや低い。

埋土は灰色細砂が堆積し、土器片が若干出土している。429は口唇部がやや内傾して立ち上がる甕形土器の口縁部片で、にぶい橙色を呈する。430は僅かに平底の部分を残している底部片で、にぶい黄橙色を呈する。いずれも器面は摩滅していて調整は不明である。

溝－14

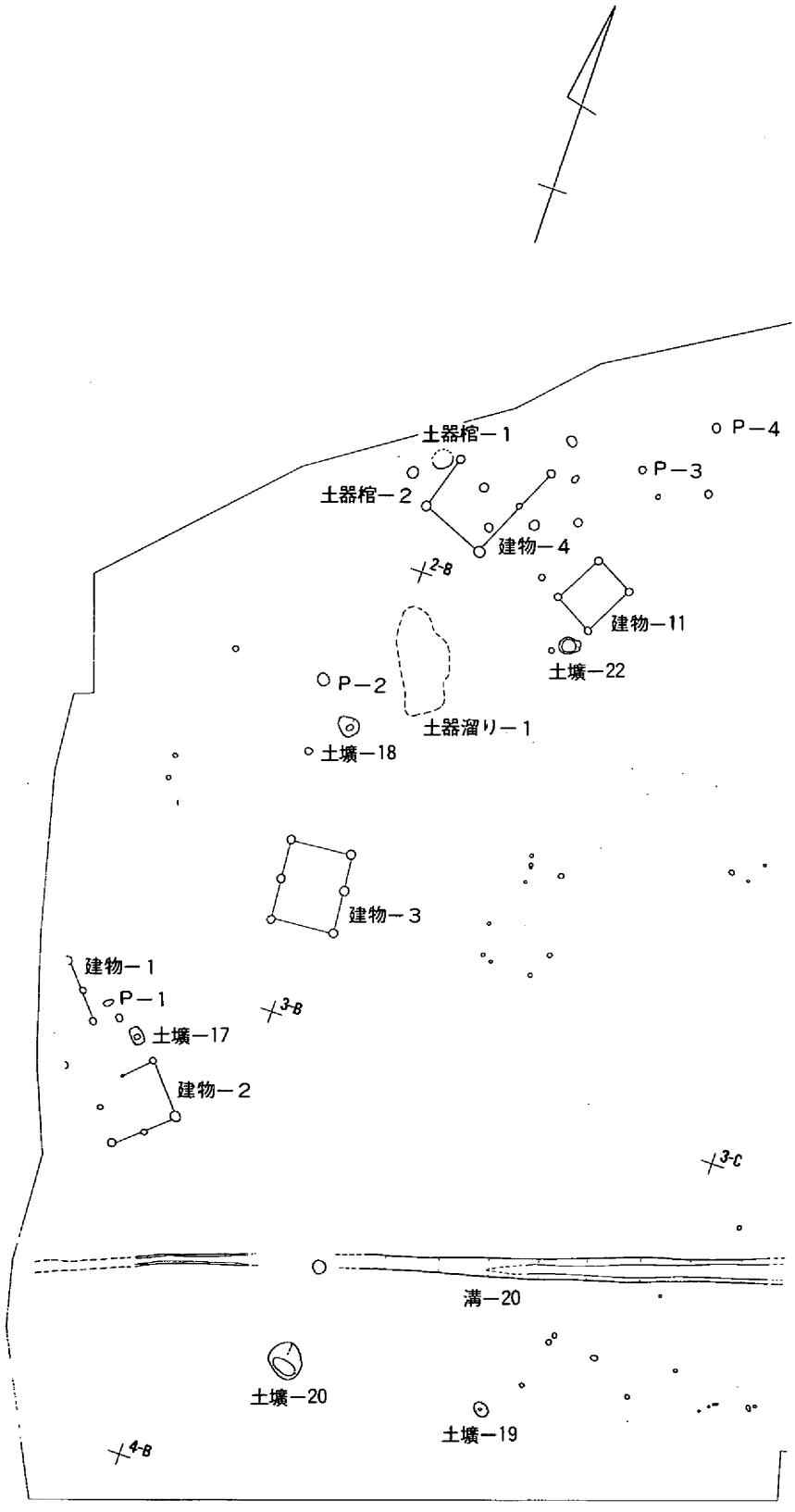
調査区の北東隅から１－Ｂ区の東部にかけて少し蛇行気味に流走する溝状遺構である。調査区の北東隅から南西に向かい、湾曲して南に向かう。溝－12・13および土器溜り－２を切り、土壙－12に切られている。検出面での規模は、幅93cm・深さ20cmを測り、断面はＵ字状を呈する。底の高さは海抜10.1ｍ前後を測り、流走方向は不明である。埋土は二層で、上層には検出面から６cm程暗褐灰色粘質微砂が、下層には暗灰色細砂が堆積している。遺物は土器の細片が僅かに出土している。

溝－15

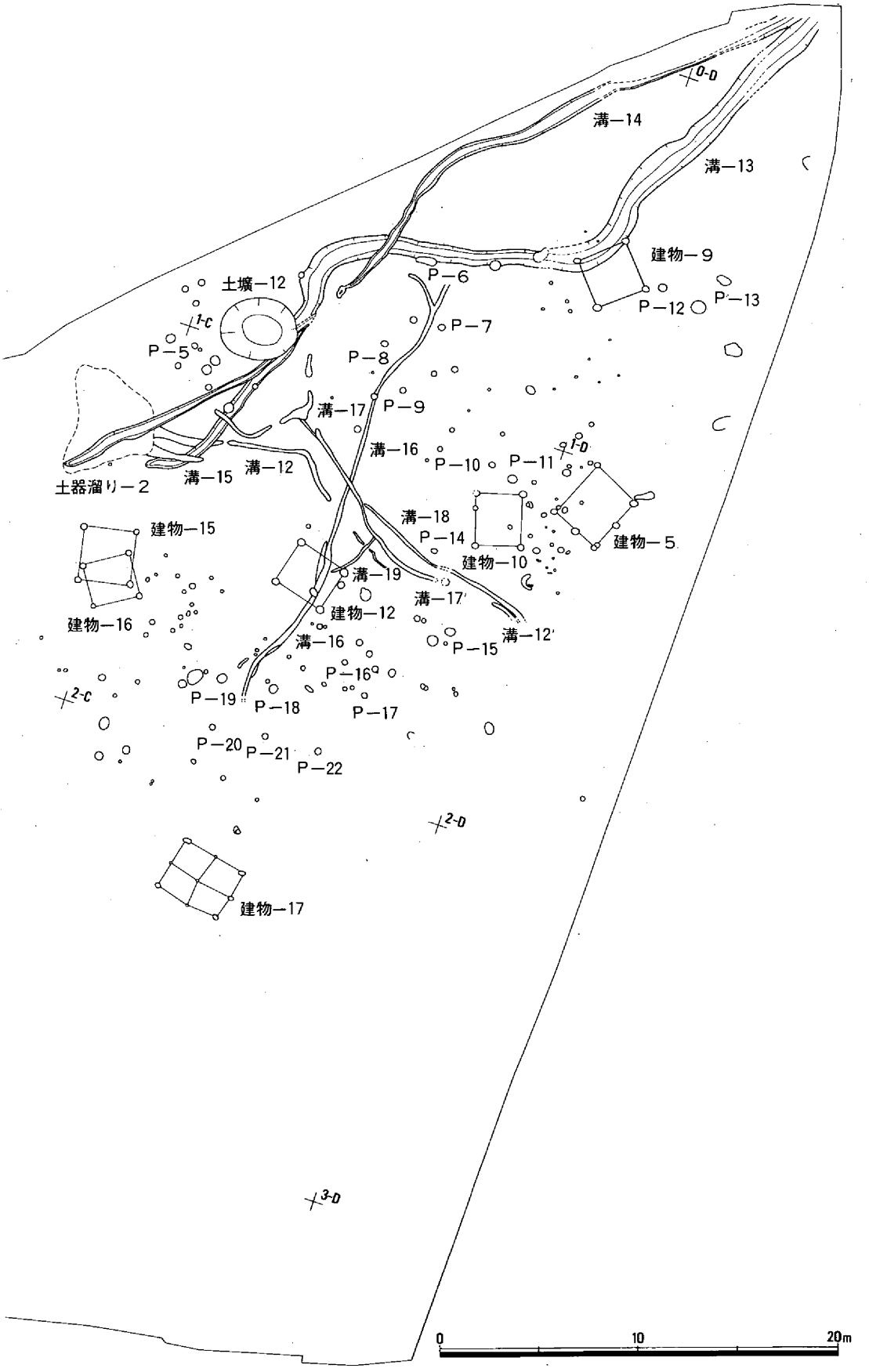
１－Ｃ区の西端から東に2.5ｍ程のみ検出された溝状の遺構である。底面の高さは海抜10.1ｍ程で、東側がやや高くなる。溝－13を切り、土器溜り－２に切られている。検出面での規模は、幅29cm・深さ16cmを測り、断面はＵ字状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質微砂が一層である。

溝－16（第54図）

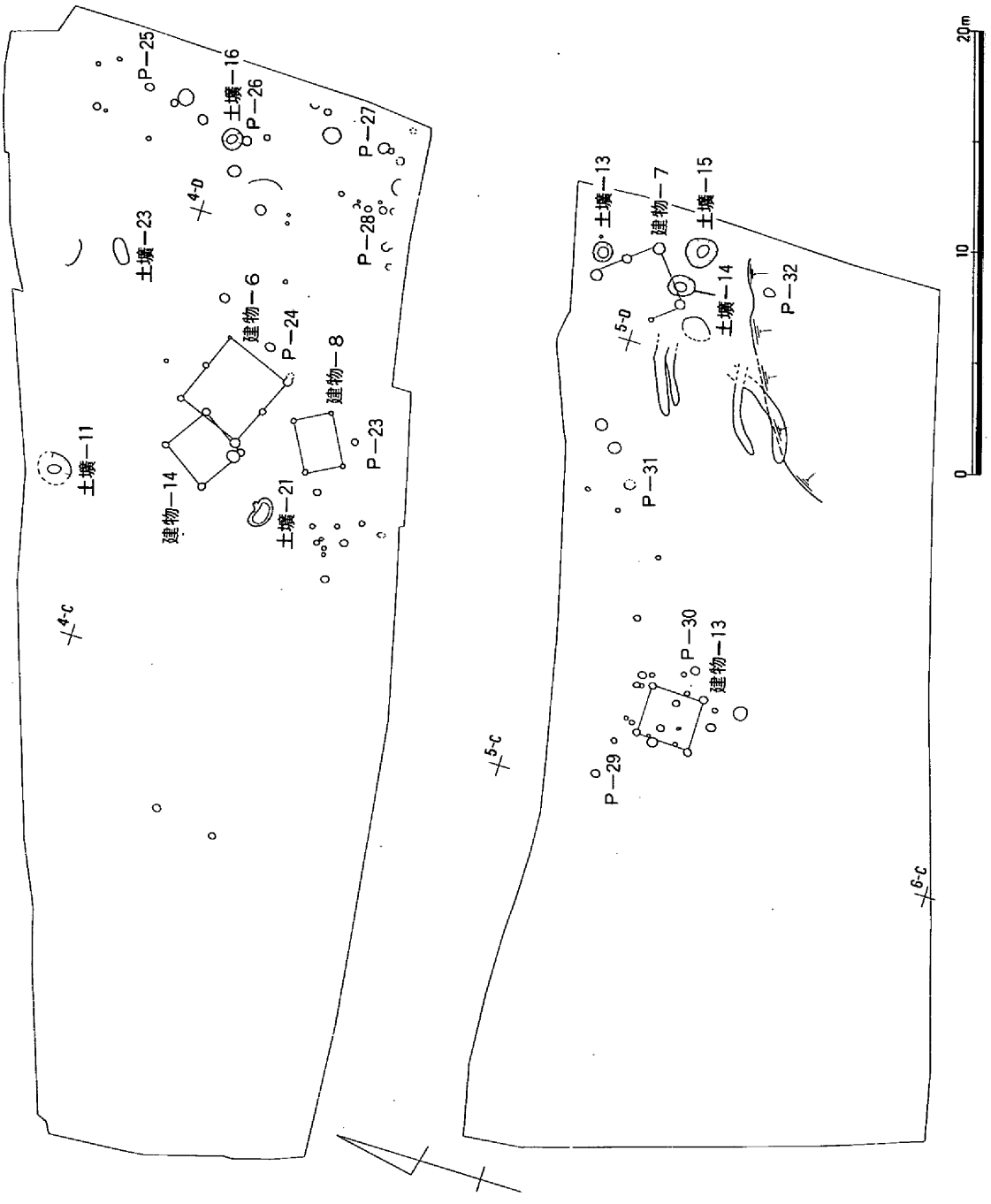
０－Ｃ区の南部から１－Ｃ区の南部かけて検出された、北から南へ流走する溝状遺構である。０－Ｃ区の南部で２条の溝が合流し、僅かに蛇行して南流している。中央部で溝－17'に切られている。底面の高さは北側が海抜10.2ｍ、南端が10.05ｍを測る。検出面での規模は、幅18cm・深さ10cmを測り、断面はＵ字状を呈する。埋土は上層に黄灰色粘質微砂、下層に灰色細砂が堆積している。



第52図　河道埋没後の遺構


0-D
溝−14
溝−13
建物−9
P−6
P−12
P−13
土壙−12
1-C
P−7
P−5
P−8
溝−17
P−9
溝−16
P−10
P−11
1-D
土器溜り−2
溝−15
溝−12
溝−18
P−14
建物−5
建物−15
建物−10
溝−19
溝−17'
建物−12
建物−16
溝−16
P−15
溝−12'
P−16
2-C
P−19
P−18
P−17
P−20
P−21
P−22
2-D
建物−17
3-D
0
10
20m

配置図（１）(1/300)



第53図　河道埋没後の遺構配置図（2）(1/300)

遺物は、土器の出土はないが、３のサヌカイト製の石鏃が出土している。先端部を欠いているが、残存全長1.50cm・最大幅1.00cm・最大厚0.25cm・重さ0.5ｇを測る。

溝－17

１－Ｃ区の北西部において断続的に検出された溝状の遺構である。西端で溝－13を切っている。底面の高さは、海抜10.15m程を測り、流走方向は不明である。検出面での規模は、幅33cm・深さ７cmを測り、断面は皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質微砂が一層で、遺物は出土していない。

溝－17'

１－Ｃ区の北西部から東部にかけて検出された溝状遺構である。溝－17の中央付近から南東に向かい、僅かに蛇行して流れている。西部で溝－16を切っている。底面の高さは、海抜10.1mを測り、流走方向は不明である。検出面での規模は、幅13cm・深さ６cmを測り、断面はＵ字状を呈する。埋土は褐灰色粘質微砂が一層で、遺物は出土していない。

溝－18（第54図）

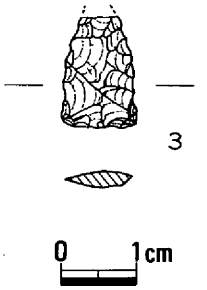
１－Ｃ区の中央部から東端にかけて検出された溝状遺構である。溝－17'の途中から分流して南東に流れている。底面の高さは南東がやや低く、海抜10.0mを測る。検出面での規模は、幅26cm・深さ29cmを測り、断面はＵ字状を呈する。埋土は灰褐色粘質微砂が一層である。

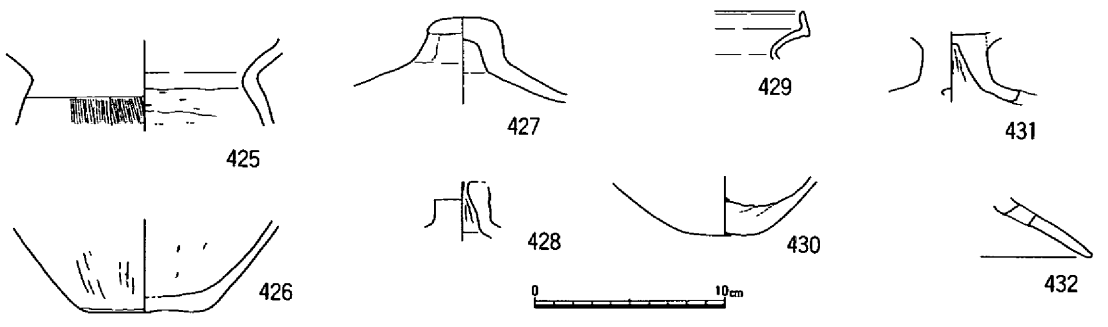
遺物は、土器片が若干出土している。431・432はいずれも高杯形土器で、431は橙色を呈する脚柱部片、432はにぶい灰白色を呈する脚裾部の細片である。431の裾部には４か所円孔が穿たれている。器面はいずれも摩滅していて、調整は不明である。

溝－19

１－Ｃ区の中央部において約３m程検出された溝状遺構である。溝－16から溝－17'の間で、南西から北東に向かって検出された。底面の高さは概ね10.15m程で、流走方向は不明である。検出面での規模は、幅７cm・深さ５cmを測り、断面はＵ字状を呈する。埋土は灰色細砂混じりの黄灰色粘質微砂が一層である。遺物としては、土器の細片とサヌカイトのチップが僅かに出土している。

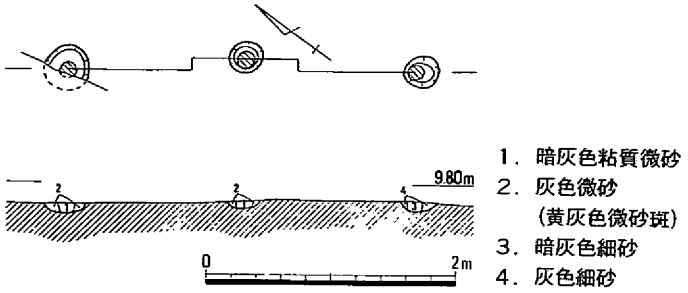
これら溝－12～19の溝状遺構は、いずれも調査区北東部において検出されたもので、河道－１の埋没後、そこに生じた撓みに水が流れてできた自然流路的なものとみられ、出土遺物も流入してきたものと思われる。溝状遺構の時期はそれほど時期差がなく、古墳時代初頭と考えられる。





第54図　溝－12・13・16・18出土遺物（1/2・1/4）

２．建物



第55図　建物－１（1/60）

建物－１（第55図）

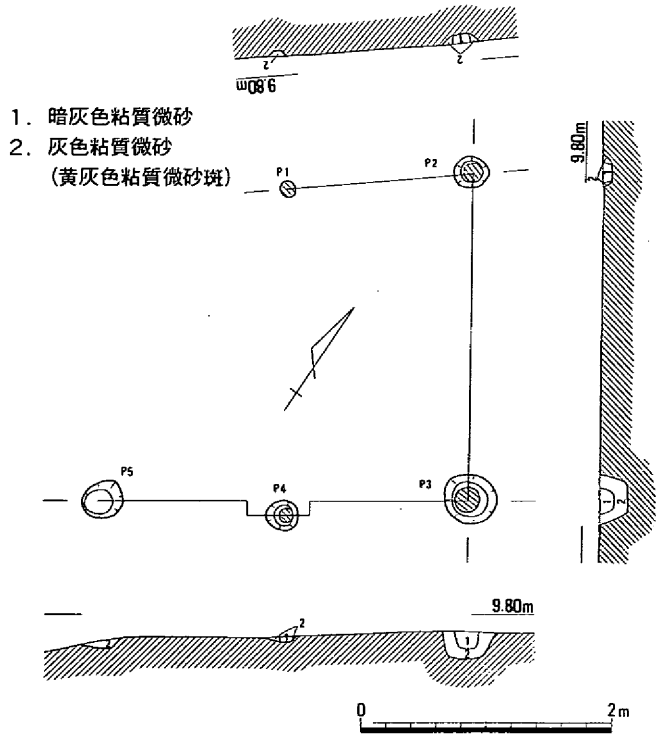
３－Ａ区北部の調査区西端、建物－２から約２ｍ北西において検出された建物である。西側が調査区外もしくは側溝にあたり、検出できなかったため、梁間は不明であるが、柱間は２間×１間で、桁行2.75ｍを測る。柱穴の規模は、直径30㎝前後の円形であるが、深さは10㎝程を残すのみである。柱穴にはそれぞれ直径15㎝前後の柱痕が残っていた。

建物の軸線は南東―北西方向で、建物－２と直交する配置にあり、同時存在の可能性がある。柱穴埋土中には遺物がなく、時期の決定は困難であるが、河道－１の埋没後に建てられたもので、古墳時代初頭頃と推定される。

建物－２（第56図、図版６－１）

３－Ａ区の北東部、調査区の西端近くで建物－１から約２ｍ南東において検出された建物である。西角の柱穴は、削平されていて検出できなかったが、柱間は２間×１間で、桁行3.00ｍ・梁間2.60ｍを測る。柱穴の規模は、最も残りの良い東端のＰ－３で直径42㎝・深さ20㎝を測り、直径18㎝の柱痕が確認された。検出面での平面形は、いずれも円形である。Ｐ－６は柱痕が削平されて確認できなかったが、他の柱穴ではすべて確認され、Ｐ－１は柱痕のみが残存していた。

建物の軸線は南西―北東方向で、建物－１と直交する配置となっている。柱穴埋土中に遺物などはなく、時期の決定は困難であるが、河道－２の埋没後に建てられたもので、埋没状況などから古墳時代初頭頃と推定される。

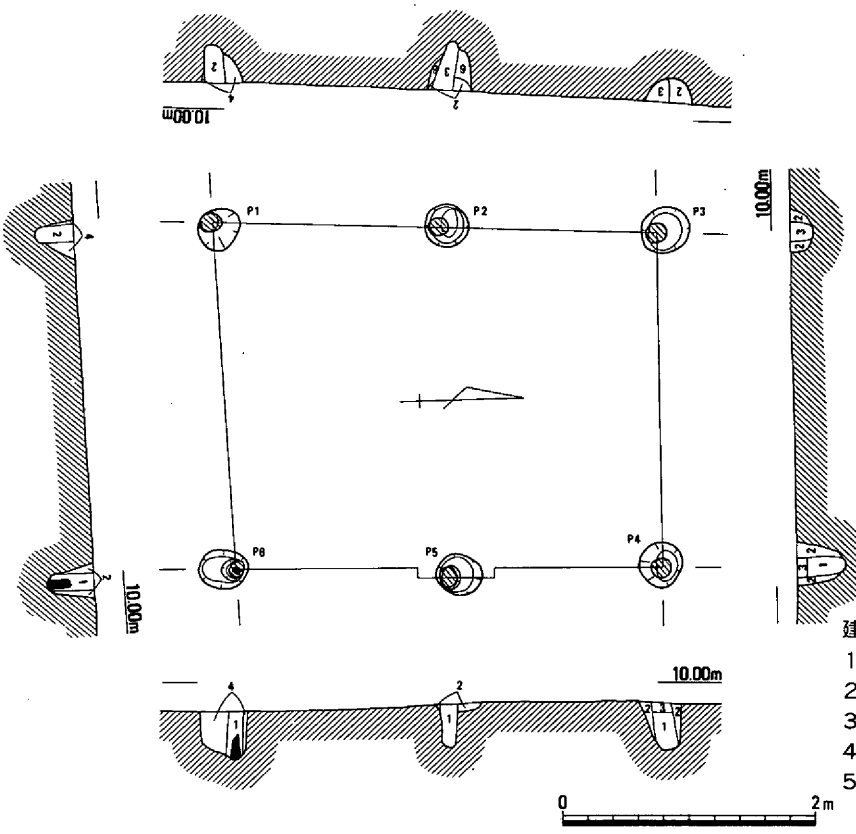


第56図　建物－２（1/60）

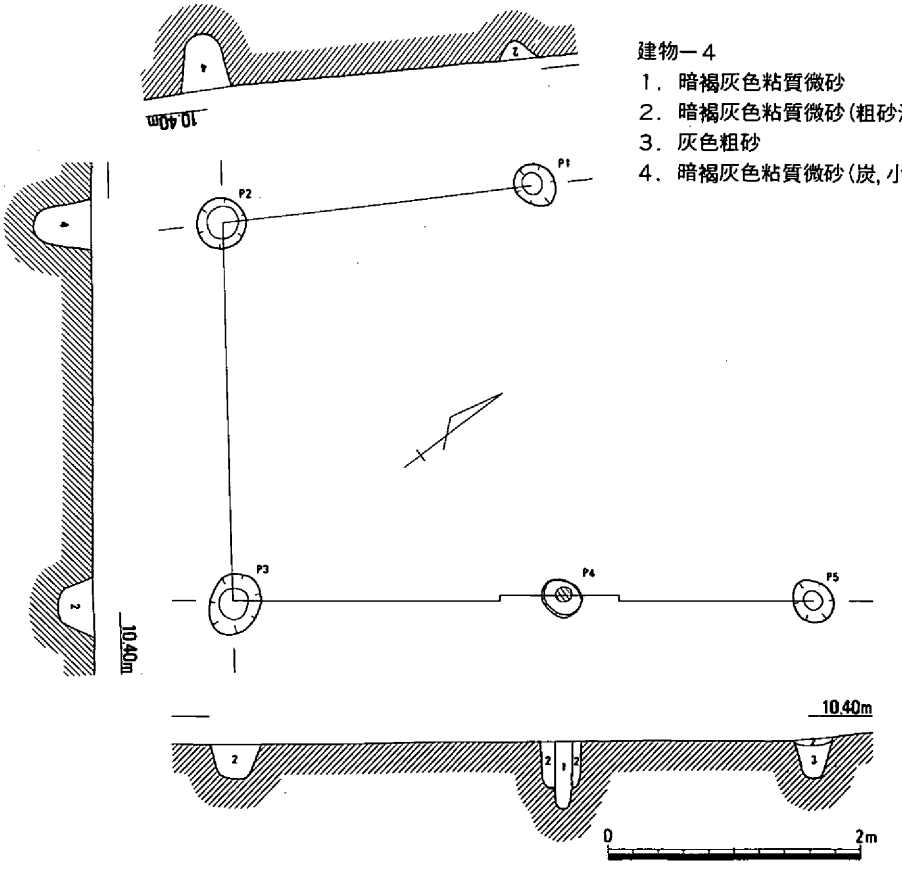
建物－３（第57図）

２－Ｂ区のＢライン上南部、建物－１から９ｍほど離れたところで検出された建物である。検出された６本の柱穴から柱間は２間×１間で、桁行約3.50ｍ・梁間2.70ｍを測る。柱穴の平面形はいずれも円形で、直径40㎝程を測る。直径15㎝程の柱痕が検出された。Ｐ－６では底に柱根が残存していた。柱穴の深さはそれぞれ異なり、最も深いＰ－６で40㎝・一番浅いＰ－３は18㎝である。

建物の軸線は南―北方向で、建物１・２とは方位が異なっている。柱穴埋土中に遺物などはなく、時期の決定は困難であるが、河道－１の埋没後に建てられた



建物－３
1．暗灰色粘質微砂
2．褐灰色粘質微砂
3．灰色粘質微砂
4．褐灰色細砂
5．暗灰色粘質微砂
（黄色土混）



建物－４
1．暗褐灰色粘質微砂
2．暗褐灰色粘質微砂（粗砂混）
3．灰色粗砂
4．暗褐灰色粘質微砂（炭，小礫含）

第57図　建物－３・４（1/60）

もので、建物－１・２と多少前後しても古墳時代初頭頃と推定される。

建物－４（第57図）

１－Ｂ区のＢライン上南部の調査区北端、建物－11から約４ｍ北西において検出された遺構である。北西端の柱穴は確認されていないが、柱間２間×１間の建物と推定される。桁行4.60ｍ・梁間3.00ｍを測る。柱穴の規模は、直径40㎝程の円形で、Ｐ－４のみ直径13㎝程の柱痕が検出された。柱穴の深さはそれぞれ異なり、最も深いＰ－４では検出面から55㎝を測る。

建物の軸線は、南西－北東方向で建物－11とほぼ平行している。柱穴埋土中に遺物などはなく、時期の決定は困難であるが、河道－１の埋没後に建てられたもので、古墳時代初頭頃と推定される。

建物－５（第58図）

１－Ｄ区の北西部、建物－10から1.5ｍ程東において検出された遺構である。北西側と北東側の間の柱穴は検出されていないが、柱間２間×２間の建物と推定され、桁行3.20ｍ・梁間2.70ｍを測る。柱穴の規模は、直径40㎝程の円形で、南東側の間の柱穴以外は、直径15㎝程の柱痕が検出された。柱穴の深さはそれぞれ異なり、深いものは検出面から30㎝を測る。間の柱穴は、隅のものより浅い。

建物の軸線は、南西－北東方向で建物－10とは方位が異なっている。柱穴埋土中に遺物などはなく時期の決定は困難であるが、検出状況などから古墳時代初頭頃と推定される。

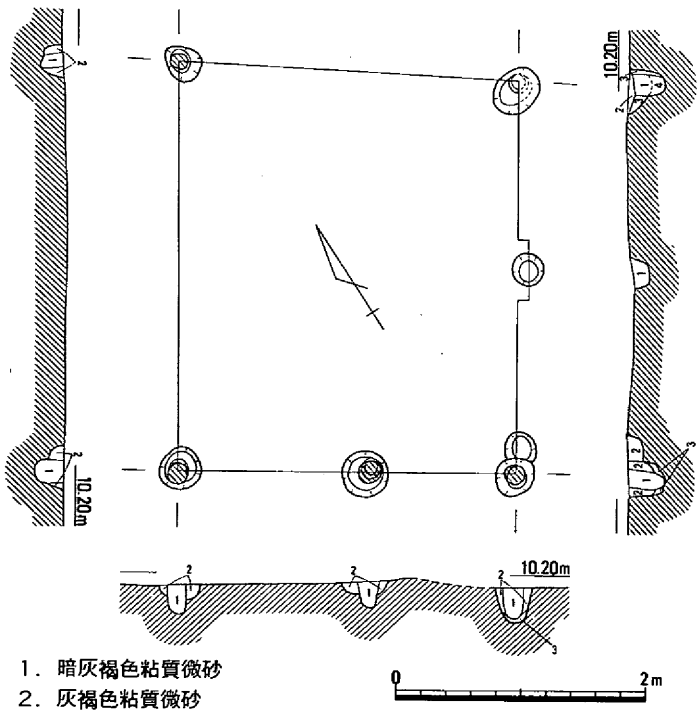
建物－６（第59図）

４－Ｃ区の北部、建物－８から１ｍ程北において建物－14と切り合う位置に検出された建物である。柱間２間×１間で、桁行3.50ｍ・梁間3.20ｍを測る。柱穴の規模は、最も残りの良好なＰ－６では直径43㎝の円形で、深さが34㎝を測る。柱痕は直径15㎝程で、Ｐ－１・２・４・６で検出された。間の柱穴のうち、Ｐ－５は浅く規模が小さいが、Ｐ－２はＰ－１とほとんど差がない。

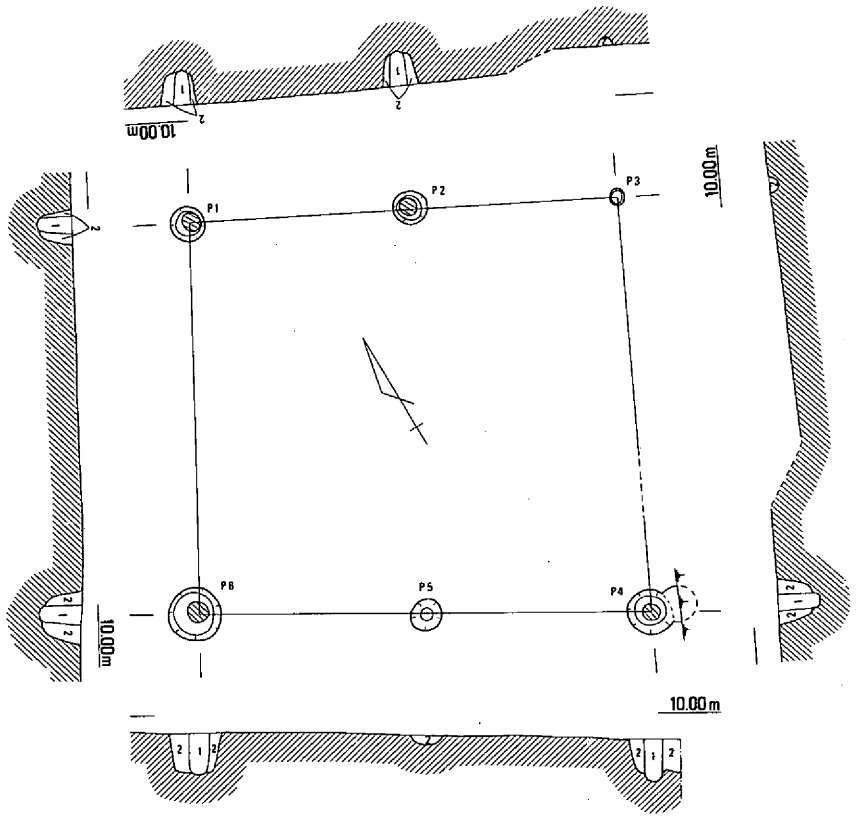
建物の軸線は、南東－北西方向で建物－８・14とは方位が異なっている。433はＰ－６の埋土中から出土した、にぶい赤褐色を呈する製塩土器の台部片である。この他に出土遺物はなく、時期の決定は困難であるが、検出状況などから古墳時代初頭頃と推定される。

建物－７（第59図）

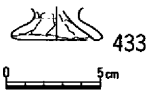
５－Ｄ区のＤライン上の西部において検出された建物である。北西側の柱穴が検出されていないが、柱間２間×１間で、桁行3.20ｍ・梁間2.95ｍを測る。柱穴の規模は、それぞれに異なるが、隅の柱穴は、直径40㎝前後の円形に近いもので、深さは検出面から30㎝を測る。いずれの柱穴からも柱痕が確認されているが、大きさは少し異なる。Ｐ－１は直径が23㎝あるが、Ｐ－４は14㎝で



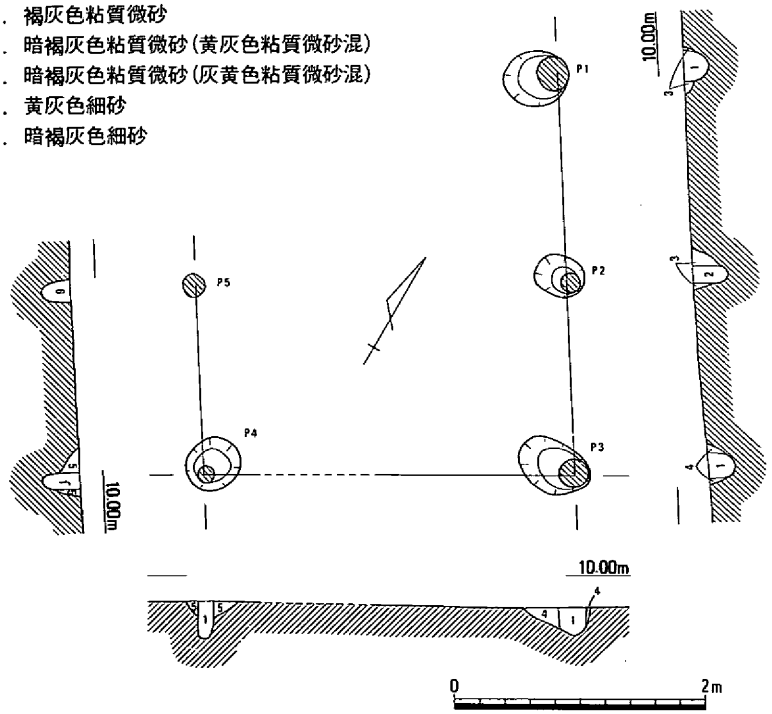
第58図　建物－５（1/60）



建物－６
1．褐灰色粘質微砂
2．灰褐色粘質微砂(灰黄色粘質微砂塊混)



建物－７
1．暗褐灰色粘質微砂
2．褐灰色粘質微砂
3．暗褐灰色粘質微砂(黄灰色粘質微砂混)
4．暗褐灰色粘質微砂(灰黄色粘質微砂混)
5．黄灰色細砂
6．暗褐灰色細砂



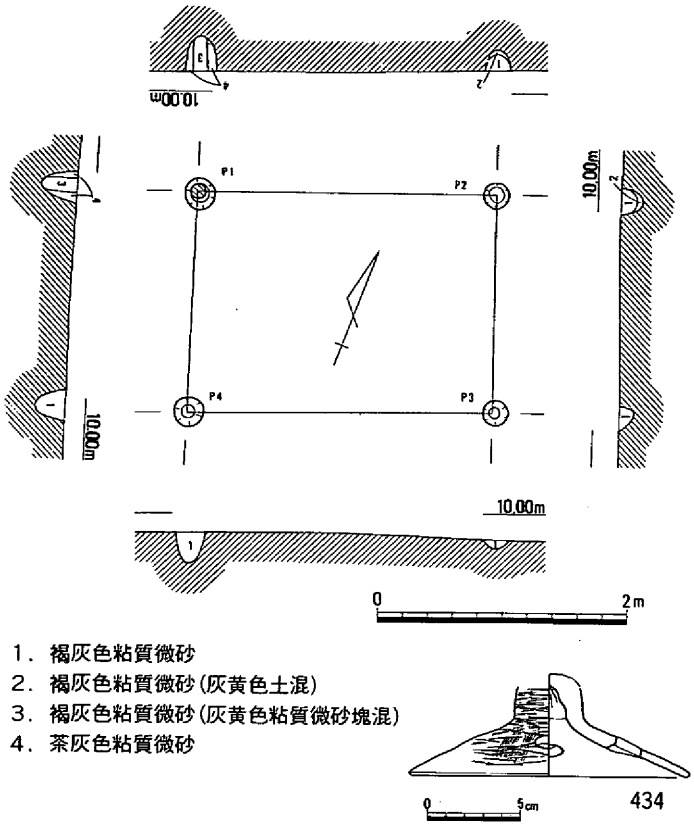
第59図　建物－６・７（1/60）・建物－６出土遺物（1/4）

ある。

建物の軸線は、南東―北西方向である。柱穴埋土中に遺物がなく、時期の決定は困難であるが、検出状況などから古墳時代初頭頃と推定される。

建物－８（第60図）

４－Ｃ区の中央部、建物－６から１ｍ程南において検出された建物である。柱間１間×１間で、桁行2.40ｍ・梁間1.75ｍを測る。柱穴の規模は小さく直径24㎝程の円形で、深さは残りの良好なもので、検出面から27㎝を測る。Ｐ－１は直径10㎝程の柱痕が確認されている。



第60図　建物－８（1/60）・出土遺物（1/4）

建物の軸線は、東―西方向から少し北に振っている。隣接している建物－６・14とは方向が異なっている。434はＰ－２の埋土中から出土した高杯形土器の脚部片である。水漉し粘土で、にぶい黄橙色を呈する。脚柱部外面は丁寧にヘラミガキされている。裾部外面は、縦方向のハケメ後横方向にヘラミガキされ、４か所に円孔が穿たれている。この他に遺物は出土していない。時期は、検出状況等から古墳時代初頭と推定される。なお、この遺構は４本柱で、規模がやや小さいことから、竪穴住居の上面が削平され、柱穴のみが検出されたものとも考えられる。

建物－９（第61図）

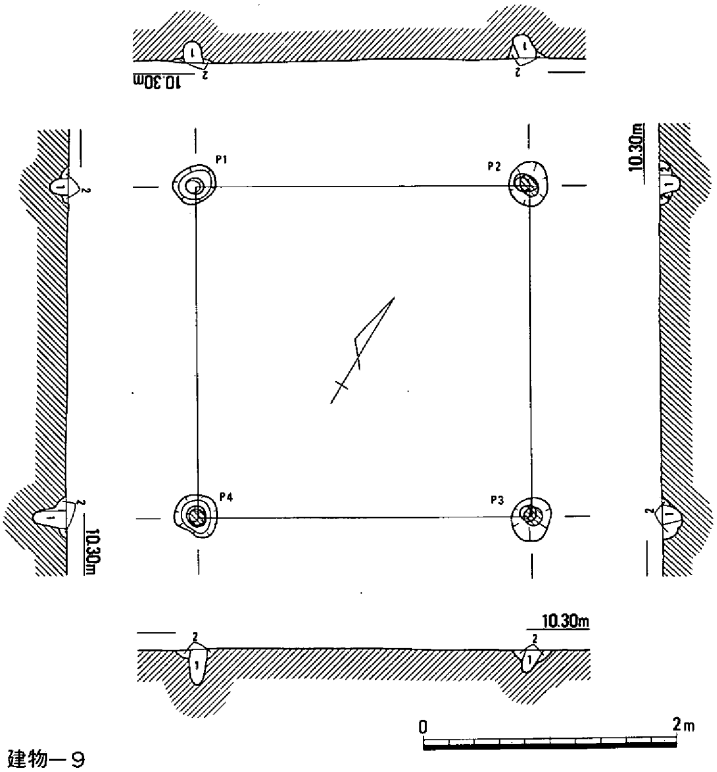
０－Ｄ区のＤライン上の中央部において検出された建物である。柱間１間×１間で、桁行2.60ｍ・梁間2.60ｍを測る。柱穴の規模は直径35㎝程の円形で、深さは残りの良好なもので30㎝程である。Ｐ－２・３・４では直径10㎝程の柱痕が確認されている。

建物の軸線は、南西―北東方向である。柱穴埋土中に遺物等はなく、時期決定は困難であるが、河道－１埋没後に生じた溝－13を切って建てられていることなどから、古墳時代初頭頃と推定される。この遺構は、４本柱で構成され、規模も小さいことから、竪穴住居の上面が削平されたものとも考えられる。

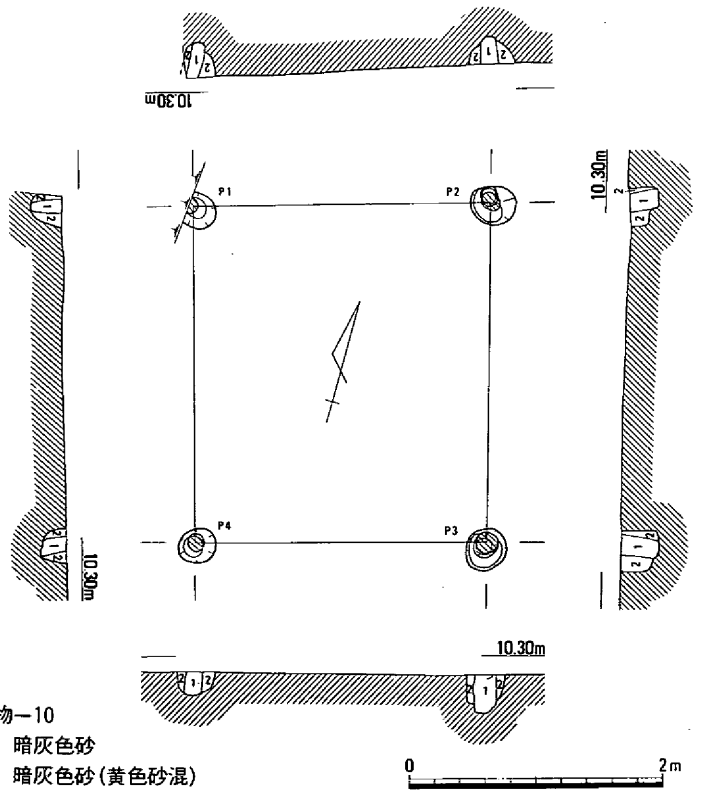
建物－10（第61図）

１－Ｃ区の北西部、建物－５から1.5ｍ程西において検出された建物である。柱間１間×１間で、桁行2.70ｍ・梁間2.35ｍを測る。柱穴の規模は直径30㎝程の円形で、深さは残りの良好なもので検出面から約30㎝を測る。いずれの柱穴も直径10㎝程の柱痕が確認されている。

建物の軸線は、南―北方向で建物－５とは方向が違っている。柱穴埋土中に遺物はなく、時期決定は困難であるが、検出状況などから古墳時代初頭と推定される。この遺構は４本柱で構成されるもの



建物－９
1．暗灰色砂
2．暗灰色砂（黄色砂混）



建物－10
1．暗灰色砂
2．暗灰色砂（黄色砂混）

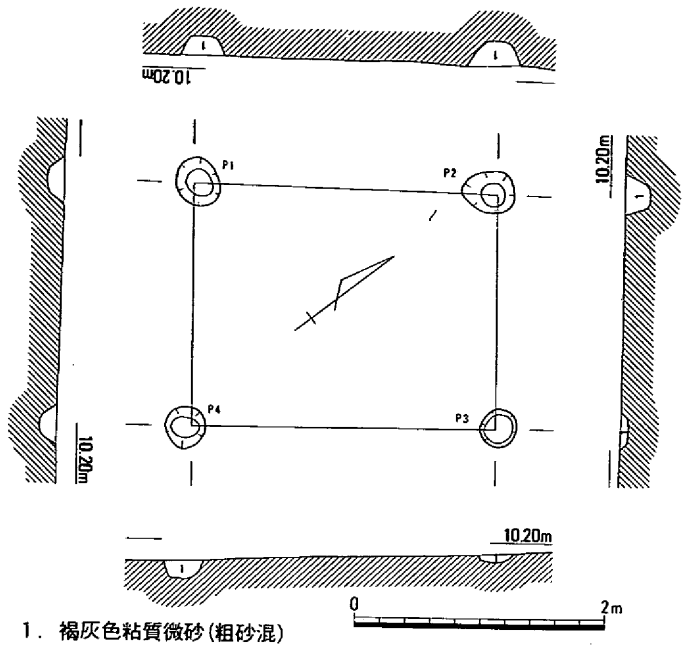
第61図　建物－９・10（1/60）

で規模も小さく、竪穴住居の上面が削平されたものとも考えられる。

建物－11（第62図）

1－B区の南部、建物－4から約4m南東において検出された建物である。柱間1間×1間で、桁行2.40m・梁間1.90mを測る。柱穴の規模は直径30cm程の円形で、深さは残りの良好なもので、検出面から約20cmを測る。柱痕は残存していない。

建物の軸線は、南西－北東方向で、建物－4とほぼ平行している。柱穴埋土中に遺物がなく、時期決定は困難である。この遺構は建物－4と同様、河道－1を切って建てられていることなどから、古墳時代初頭頃と推定される。この遺構は4本柱で構成されるもので規模も小さく、竪穴住居の上面が削平されたものとも考えられる。

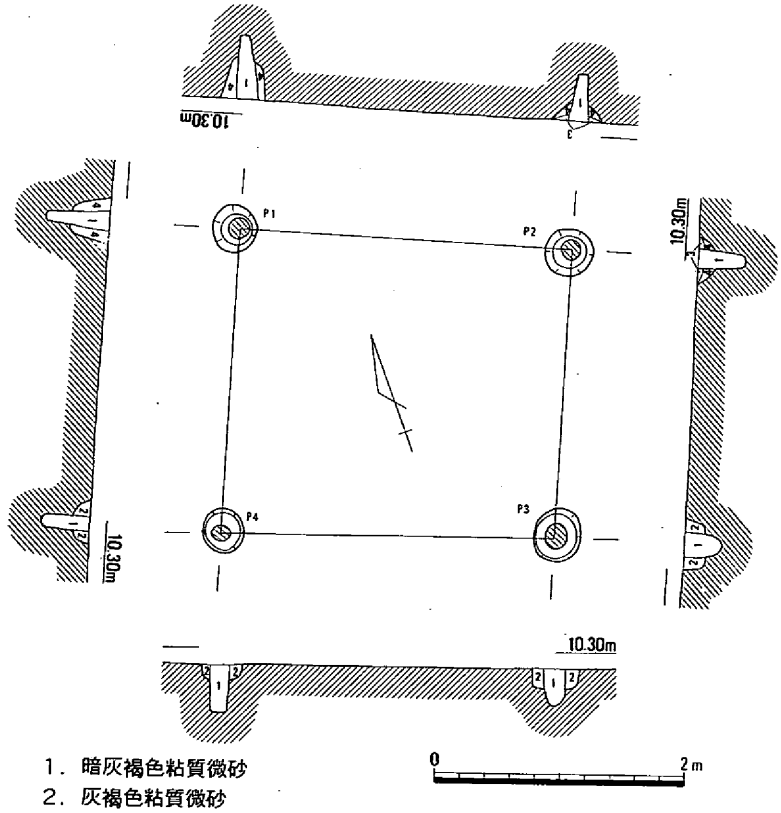


第62図　建物－11（1/60）

建物－12（第63図、図版6－2）

1－C区の中央部において検出された建物である。柱間1間×1間で、桁行2.65m・梁間2.35mを測る。柱穴の規模は、直径30cm程の円形で、深さは残りの良好なもので、検出面から約50cmを測る。いずれも直径15cm前後の柱痕が確認されている。

建物の軸線は、南東－北西方向である。柱穴埋土中に遺物はなく、時期決定は困難であるが、検出状況などから古墳時代初頭と推定される。この遺構は4本柱で構成されるもので規模も小さく、竪穴住居の上面が削平されたものとも考えられる。



第63図　建物－12（1/60）

建物－13（第64図）

5－C区の中央部において検出された建物である。柱間1間×1間で、桁行2.40m・

梁間2.30ｍを測る。柱穴の規模は直径30㎝程の円形で、深さは残りの良好なもので検出面から約40㎝を測る。いずれも直径15㎝前後の柱痕が確認されている。

建物の軸線は、南―北方向である。柱穴埋土中に遺物はなく、時期決定は困難であるが、検出状況などから古墳時代前期と推定される。この遺構は４本柱で構成されるもので規模も小さく、竪穴住居の上面が削平されたものとも考えられる。

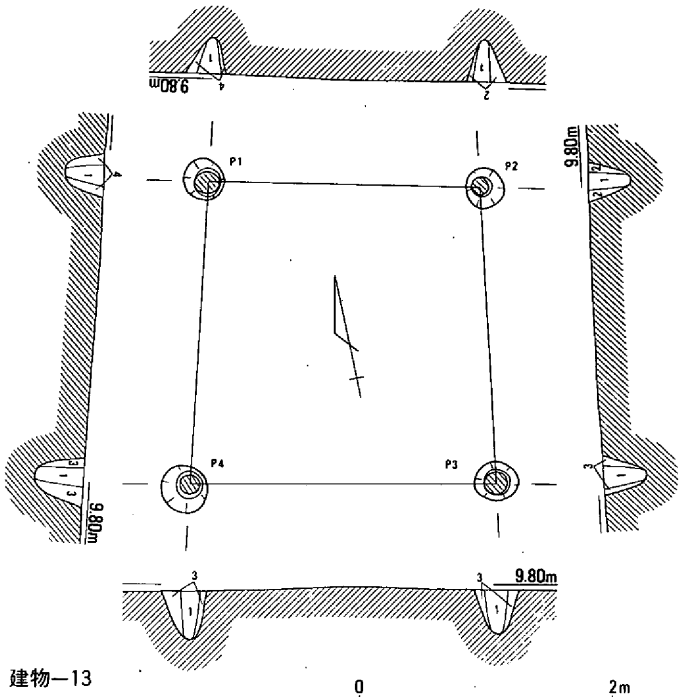
建物―14（第64図）

４－Ｃ区の北部、建物－８から３ｍ程北西において、建物－６と切り合う位置に検出された建物である。柱間１間×１間で、桁行2.45ｍ・梁間2.30ｍを測る。柱穴は直径30㎝前後の円形で、深さは残りの良好なもので検出面から30㎝を測る。いずれの柱穴も直径15㎝程の柱痕が確認されている。

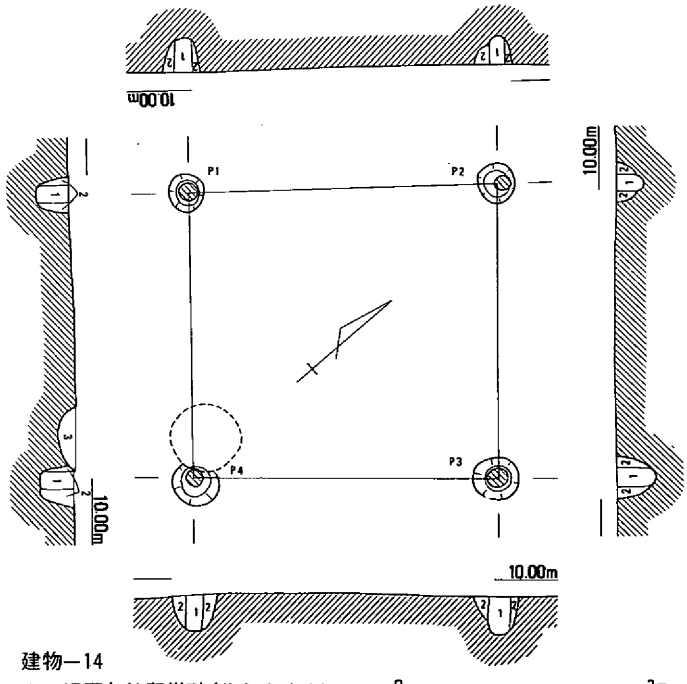
建物の軸線は、南西―北東方向で隣接している建物－６・14とは方向が異なっている。柱穴埋土中に遺物はなく、時期決定は困難であるが、検出状況などから古墳時代初頭頃と推定される。この遺構は４本柱で構成されるもので規模も小さく、竪穴住居の上面が削平されたものとも考えられる。

建物―15（第65図、図版６－３）

１－Ｃ区のＣライン上の中央部において、建物―16と切り合う位置に検出された建物である。柱間１間×１間で、桁行2.70ｍ・梁間2.65ｍを測る。柱穴は直径30㎝前後の円形で、深さは残りの良好なもので検出



建物―13
1．灰色粘質微砂
（P-1・2・3柱根残）（暗灰色，暗褐灰色）
2．暗灰色粘質微砂
3．灰色細砂
4．褐灰色粘質微砂



建物―14
1．褐灰色粘質微砂（黄色土塊含）
2．灰黄色粘質微砂（褐色土含）
3．黒褐灰色粘質微砂（粗砂含）

第64図　建物―13・14（1/60）

面から40cmを測る。いずれの柱穴も直径15cm程の柱痕が確認されている。

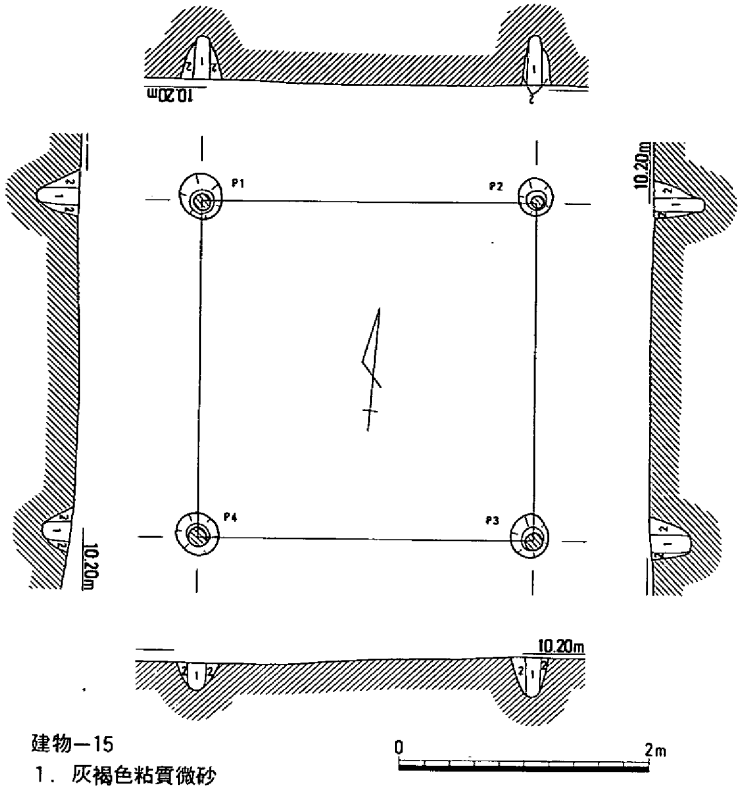
建物の軸線は、南―北方向で切り合っている建物―16とは方位が異なっている。柱穴の埋土中に遺物はなく、時期の決定は困難であるが、検出状況などから古墳時代初頭頃と推定される。

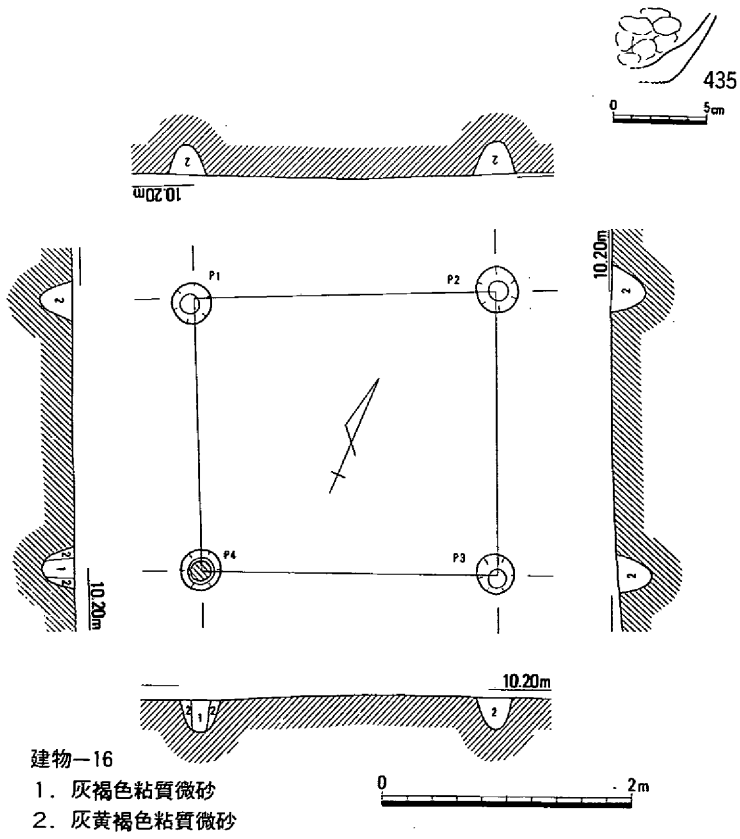
この遺構は４本柱で構成され、しかもそれぞれの柱間がほとんど等間隔である。規模的にも建物とするよりも、竪穴住居の柱穴だけを掘り出した状況にふさわしいものである。

建物―16（第65図、図版６―３）

１―Ｃ区のＣライン上の中央部において、建物―15と切り合う位置に検出された建物である。柱間１間×１間で、桁行2.40m・梁間2.20mを測る。柱穴は直径30cm前後の円形で、深さは残りの良好なもので検出面から30cmを測る。Ｐ―４では、直径17cmの柱痕が確認された。

建物の軸線は、南西―北東方向で切り合っている建物―15とは方位が異なっている。435は水漉し粘土風の底部片であるが、細片で時期等は判然としない。この他時期を決定するような遺物もないが、検出状況などから古墳時代初頭頃と推定される。この遺構は４本柱で構成されるもので規模も小さく、竪穴住居の上面が削平されたものとも考えられる。





第65図　建物―15・16（1/60）・建物―16出土遺物（1/4）

３．土器棺

土器棺－１（第66図、図版７－１）

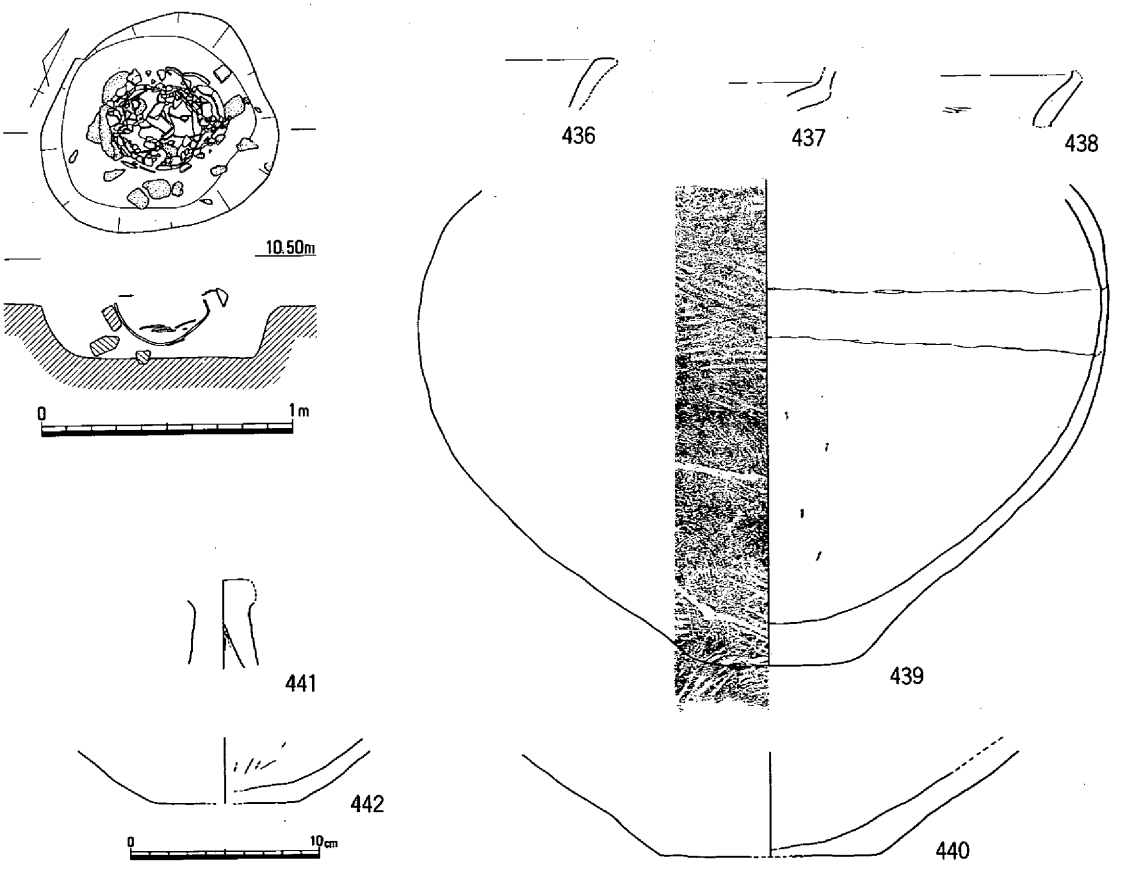
１－Ａ区の東南部、調査区の北端において、建物－４のすぐ西に接して検出された土器棺である。検出面での規模は、長径93cm・短径83cmの不整楕円形を呈し、深さは検出面から28cmを測る。断面は比較的急に下がり、底面は平坦である。埋土中に石を置き、その上に口縁部を打ち欠いた壺を寝かせて埋めている。この土器棺の上半部は、後世の削平により遺存していない。埋土は小礫を含む灰色粘質微砂が埋積していた。

埋土中からは土器棺に使用された壺のほか、若干の土器が出土している。436・437・438はいずれも壺形土器もしくは鉢形土器の口縁部片とみられるが、細片で器面も剥離しているなど遺存状態が悪く、詳細は不明である。439は土器棺の身として使われている壺形土器の体部である。外面は、横および斜め方向のタタキ後、一部ハケメ調整されている。底部径は8.6cmを、胴部最大径は36.5cmを測る。にぶい橙色を呈し、黒斑が認められる。441は水漉し粘土風の高杯形土器の脚柱部片、440・442は平底の底部片であるが、細片で遺存状態も悪く、詳細は不明である。土器片以外に土壙内から副葬品等は出土していない。

時期は、土器棺の土器などから古墳時代初頭と考えられる。

土器棺－２（第67図）

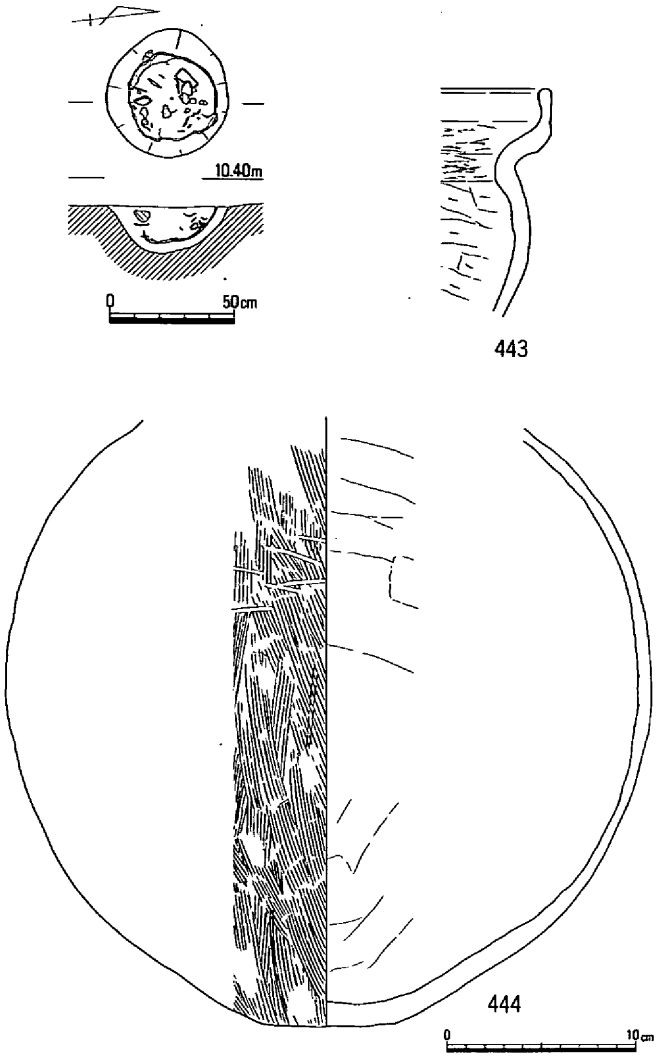
１－Ａ区の東南部調査区の北端において、土器棺－１の南西に並んで検出された土器棺である。検



第66図　土器棺－１（1/30）・出土遺物（1/4）

出面での規模は、長径52cm・短径49cmのほぼ円形を呈し、深さは検出面から19cmを測る。断面は緩やかに下がり、底部はやや北側が高くなっている。埋土は小礫を含む暗灰色粘質微砂が埋積し、土壙壁面とそれほど隙間をおかないで、頸部から上を打ち欠いた壺を、北側を少し起こし斜めに寝かせて埋めていた。土器棺の上半部は、後世の削平を受けているため詳細は不明であるが、埋土中から鉢形土器の破片が出土していることから、これが蓋として使われていたものとみられれる。

443は細片のため大きさ等は明らかでないが、土器棺の蓋に使用されたとみられる鉢形土器である。口縁部はヘラミガキされ、体部は内面を横および斜め上方にヘラケズリしている。444は、土器棺の身として使われた、ほとんど球形をなす体部をもつ壺形土器である。外面は縦および斜め方向のハケメの後、一部横方向にヘラミガキされている。底部に黒斑があり、底部周辺を中心に赤色顔料が認められる。この他に副葬品等の遺物は出土していない。



第67図　土器棺－２（1/30）・出土遺物（1/4）

時期は、土器棺の土器などから古墳時代初頭とみられる。

４．土壙

土壙－11（第68図）

３－Ｃ区の南西部、建物－14から４ｍ程北西において検出された土壙である。規模は、検出面で長径159cm・短径136cmを測り、平面は楕円形を呈する。掘り方は検出面から緩やかにすぼまるもので、底は河道－４の堆積土である軟らかい砂層に至り、崩落して確認することができなかった。深さは、検出面から140cm以上を測る。埋土は、暗灰褐色粘質微砂などが埋積していた。

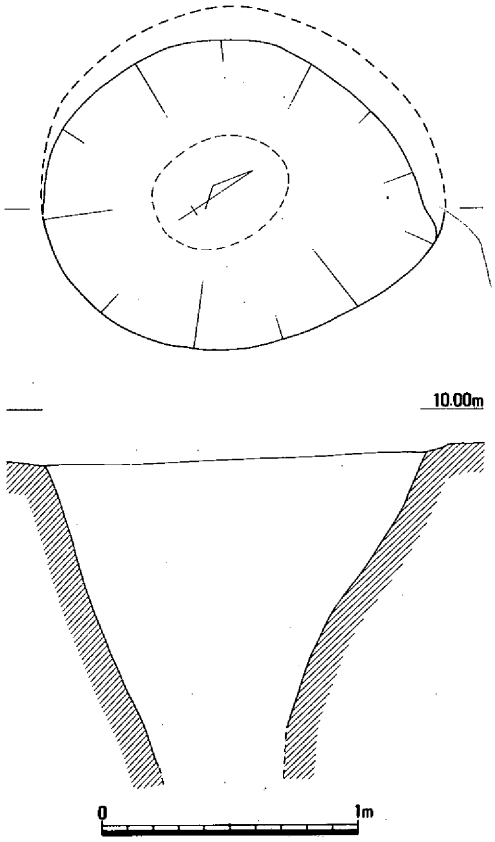
出土遺物としては、甕・高杯などの土器がある。445・446は甕形土器の口縁部とみられるが、いずれも細片で詳細は不明である。447は卵形の胴部に、平底の甕形土器である。外面には指オサエの痕が残り下部に１つ粘痕が認められる。内面は中・下部が上方に向かうヘラケズリ、上部が横および斜めのヘラケズリである。448は「く」の字状に外反してのびる口縁の甕形土器で、体部外面は右上がりのタタキメが確認される。内面は上方に向かうヘラケズリで、肩部内面は指オサエされている。煤の付着が認められる。449は皿状の手捏ね土器で内外面に指頭痕が残る。にぶい黄橙色を呈する。450は口

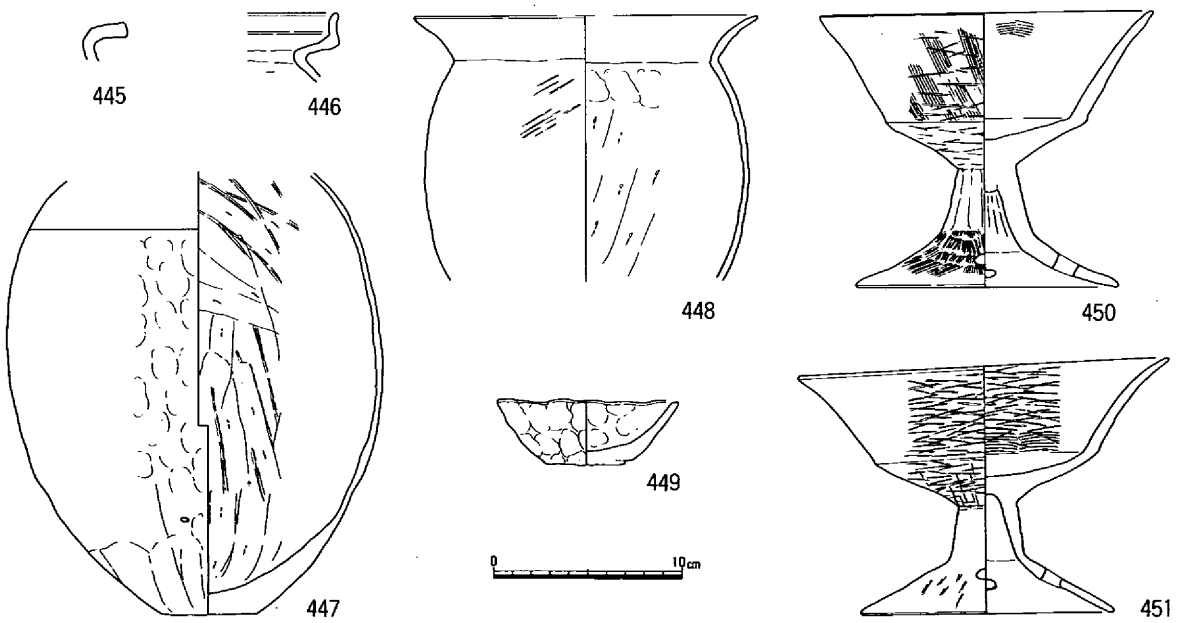
縁部が斜め外方にほぼ真直ぐにのびる高杯形土器で、外面は縦方向のハケメ後、横方向にヘラミガキされている。内面は一部にハケメが認められる。杯部下半はヘラミガキ、脚柱部から湾曲気味に開く脚裾部には、細かくハケメ調整されている。裾部には４か所円孔が穿たれている。口径17.4cm・器高14.6cmを測る。451は口縁部が外半気味に開く杯部の高杯形土器で、内外面とも細かくヘラミガキされている。脚柱部から屈曲気味に開く脚裾部に、４か所円孔が穿たれている。口径19.3cm・器高13.5cmを測る。

遺構の性格については、この土壙は規模などから、井戸とみられる。時期は、出土遺物や検出状況などから古墳時代初頭と考えられる。

土壙－12（第69図）

０－Ｃ区西部南端、調査区の北端近くにおいて溝－13・14の埋没後に掘られた土壙である。規模は、長径392cm・短径317cmを測り、平面は楕円形を呈する非常に大きな土壙である。掘り方は検出面から緩やかに下がり、途中で少し急になって底面にいたる。底面は平坦である。検出面から底までの深さは117cmで、底面の高さは海抜9.03mである。埋土は、上層の第１層から第４層が、粗砂や礫を含む黒灰色・暗灰色のほとんど黒っぽい粘質土あるいは微砂である。第５層は黒褐灰色粘質微砂、第６層は暗灰色微砂がレンズ状に埋積している。下層の第７層・第８層・第９層は、いずれも細砂が埋まっている。第７層は灰色、第８層は暗灰





第68図　土壙－11（1/30）・出土遺物（1/4）

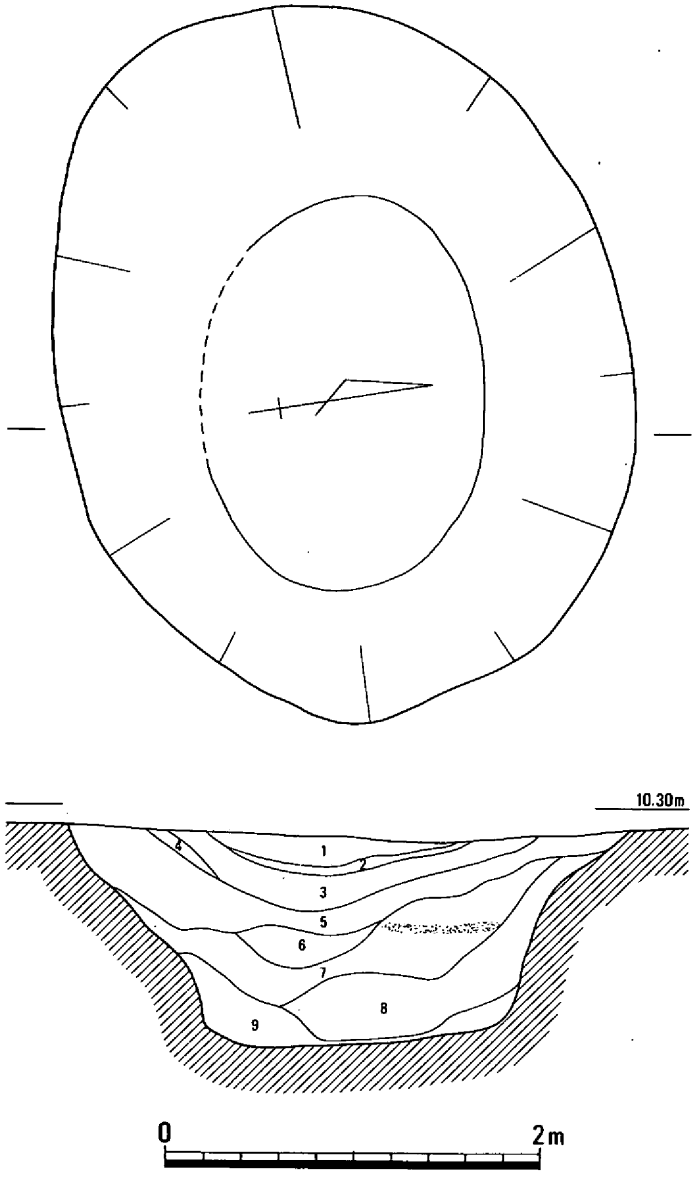
色、第９層は少しグライ化した青灰色で第８・９層には粘質土が混じっている。

遺物は非常に少なく、しかもいずれも細片である。452は「く」の字状に外反する口縁をもつ壺形土器で、外面にハケメが認められる。453は平底の底部片で外面にハケメが認められる。いずれも煤の付着が認められる。454・455は外反した口縁端部が上方に立ち上がり、その外面に櫛描きの沈線が巡る甕形土器であるが、細片で詳細は不明である。456は「く」の字状に外反する口縁部片である。457は甕形土器の体部上半部分で、外面は縦方向のハケメが、内面は横方向にヘラケズリされている。黒斑が認められる。458はいわゆる製塩土器の台部片である。

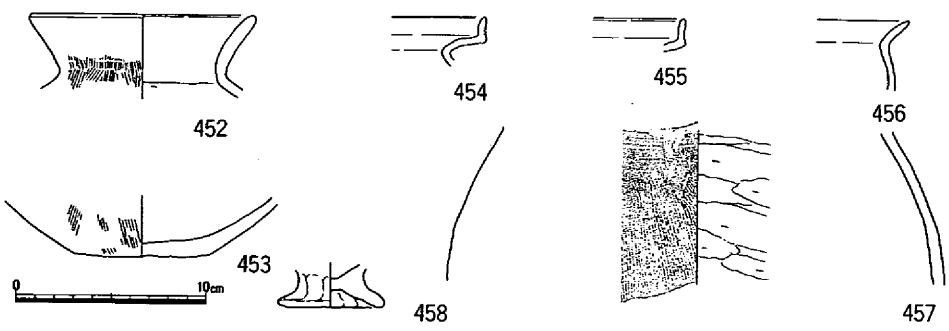
遺構の性格については、深さが充分にあり井戸と考えられるものであるが、規模があまりに大きく、断定できない。時期は、遺物から判断するには材料に乏しいが、埋没状況などから古墳時代初頭と考えられる。

土壙－13（第70図）

４－Ｄ区の南西部、建物－７のすぐ東側に接して検出された土壙であ



1．暗褐灰色粘質微砂（粗砂多含）
2．黒灰色粘質土（粗砂含）
3．黒灰色粘質微砂（粗砂多含，礫を含）
4．暗灰色微砂（粗砂多含，礫を含）
5．黒褐灰色粘質微砂
6．暗灰色微砂（暗灰色粘質土混）
7．灰色細砂（粗砂含）
8．暗灰色細砂（暗灰色粘質土混）
9．青灰色細砂（青灰色粘質土混）

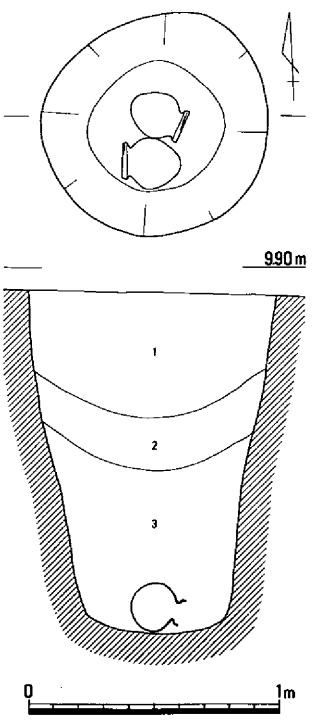


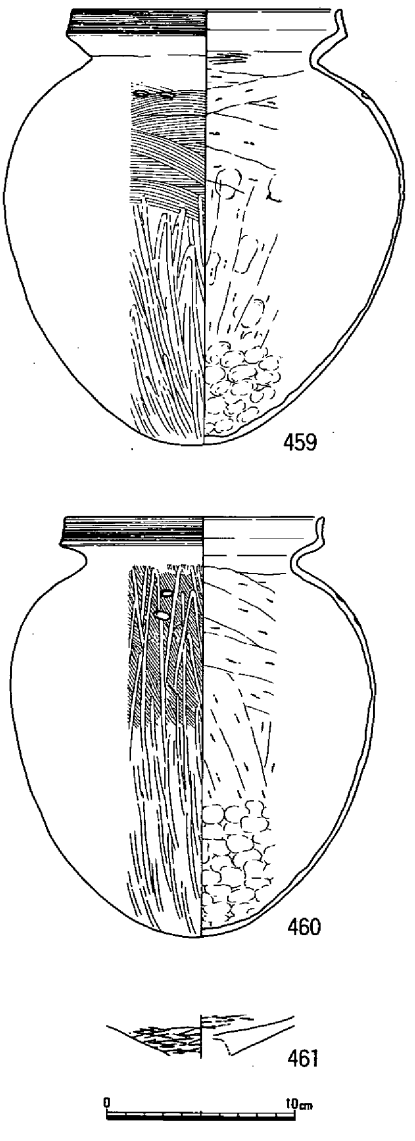
第69図　土壙－12（1/40）・出土遺物（1/4）

る。規模は、86×90cmのほぼ円形を呈する平面形で、深さは検出面から136cmを測る。掘り方は検出面からややすぼまるものの、ほとんど真直ぐに掘り下げられている。底面は、ほぼ平坦で中央がやや低く、海抜9.23mを測る。埋土は、上層の第１層に暗褐灰色粘質微砂が、第２層に灰黄色粘質微砂が埋積している。下層の第３層は若干グライ化した暗緑灰色粘質土で、底には完形の甕２点が並べて埋められていた。

出土遺物は、底に埋められた完形の土器以外にはほとんどなく、僅かに土器の細片が認められたにすぎない。459・460の甕形土器が底の２つの土器で、459が南側に、460が北側に置かれていたものである。459は「く」の字状に外反した口縁端部が少し内傾して立ち上がり、端面外面に８条の櫛描き沈線が巡る。体部は外面上半が横方向のハケメ、下半が縦方向のヘラミガキで調整され、肩部にヘラ先による刺突が２個横に並んでいる。内面の肩部以下はヘラケズリされている。上半は横方向の、下半は縦方向のヘラケズリで、底部付近は指頭圧痕が残る。胴部中央より少し上で最大径を測り、底部はほとんど丸底化している。内外面とも煤が付着している。口径14.2cm・最大径21.1cm・器高23.2cmを測る。460は「く」の字状に外反した口縁端部が上方に立ち上がり、端面外面に７条の櫛描き沈線が巡る。体部外面は上半に縦および斜めのハケメが認められるが、全体に縦方向のヘラミガキにより調整されている。肩部にヘラ先による刺突が２個縦に並んでいる。内面は、肩部以下上半は横方向に、下半は縦方向にヘラケズリされ、底部付近には指頭圧痕が残る。胴部は卵形を呈し、中央より少し上で最大径を測る。底部はほとんど丸底化している。内外面とも煤が付着している。口径13.6cm・最大径19.3cm・器高22.2cmを測る。461は高杯形土器の杯部の細片で、内外面にヘラミガキが認められるが、詳細は不明である。

この遺構は井戸と考えられるもので、時期は、底より出土した土器から古墳時代初頭である。



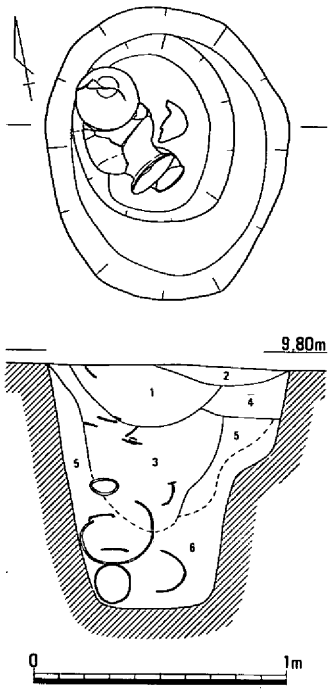


第70図　土壙－13（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙－14（第71図、図版７－５・６）

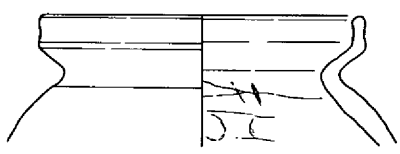
５－Ｄ区の北西部、建物－７の南部と切り合っ

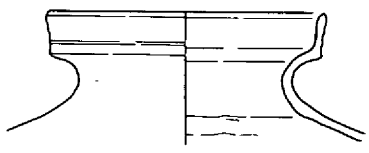
て検出された土壙である。規模は、長径117cm・短径96cmを測り、南北方向に長い楕円形呈する平面形で、深さは検出面から97cmを測る。掘り方は検出面からほぼ真直ぐに掘り下げられ、東側は途中で段をもつ。底面はほぼ平坦で、海抜8.77mを測る。埋土は、上層の第１層は暗灰褐色粘質微砂で、上部は粗砂を含んでいる。その上の第２層褐灰色粘質微砂は、二次堆積の埋土と考えられる。第３層の暗

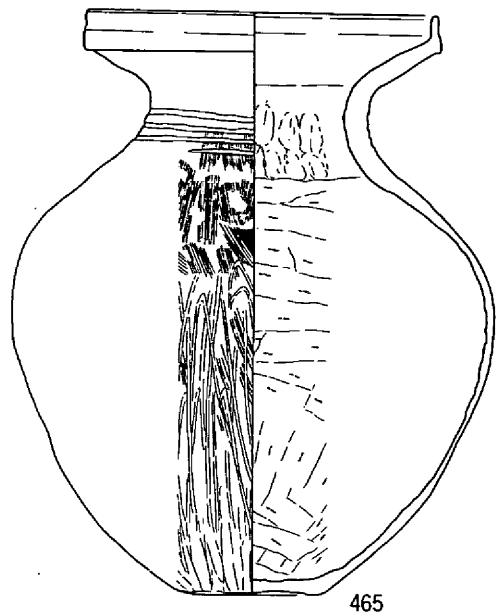


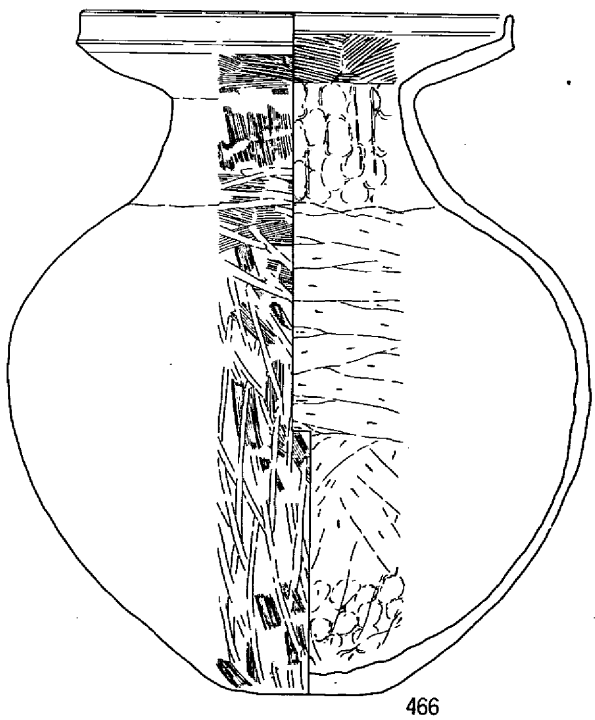
1．暗灰褐色粘質微砂（上層部は粗砂含）
2．褐灰色粘質微砂
3．暗灰色粘質微砂（炭多含）
4．灰褐色砂質土
5．褐灰色砂質土
6．灰色細砂

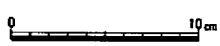
462


463


464

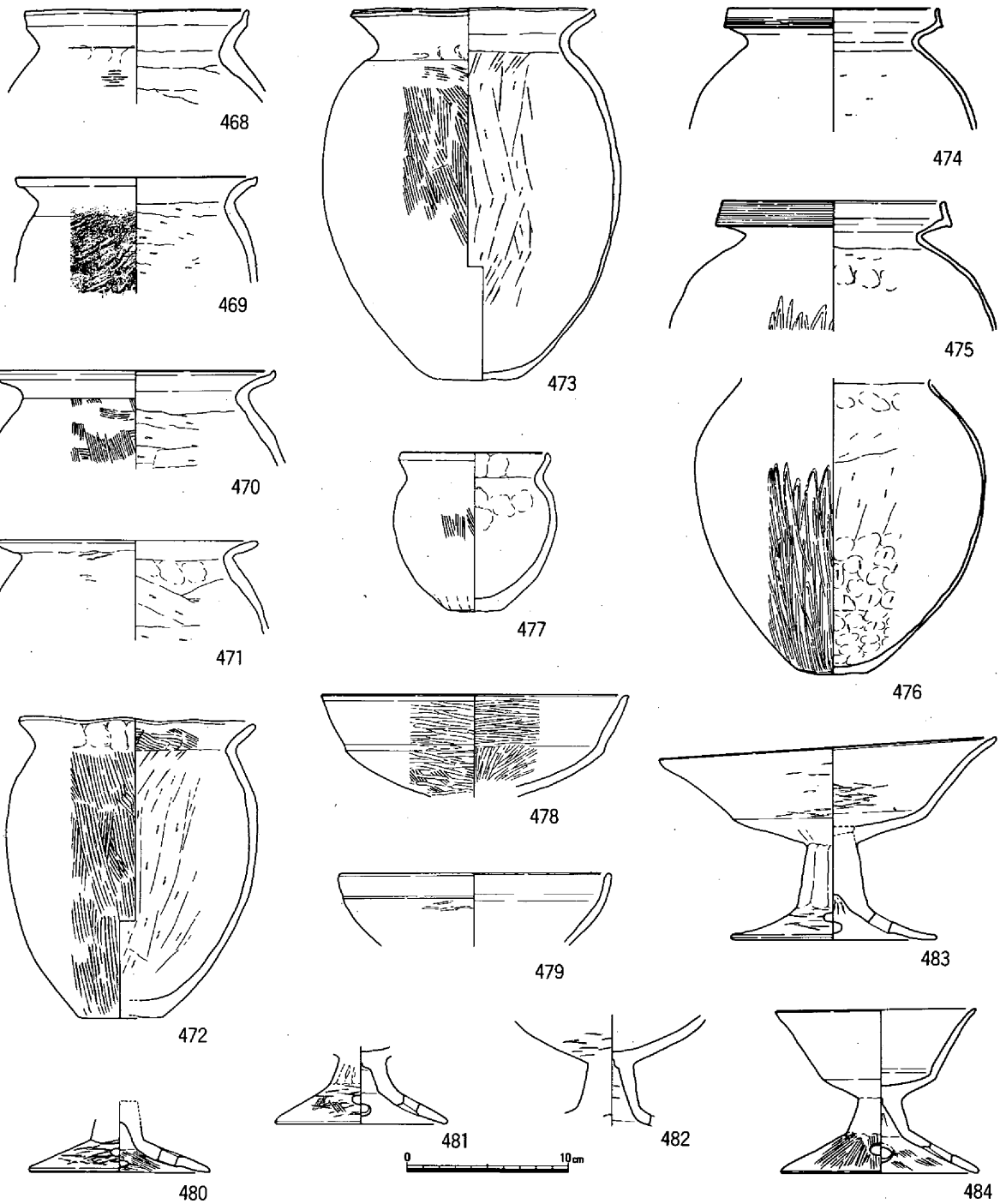

465


466



467

第71図　土壙－14（1/30）・出土遺物（１）(1/4)



第72図　土壙－14出土遺物（２）(1/4)

灰色粘質微砂は、多量の土器・炭を含んでいる。下層の第５・６層は灰色細砂で、上部の第５層は、上層の影響をうけて少し褐色を呈している。底には完形に近い甕形土器や壺形土器が埋まっていた。

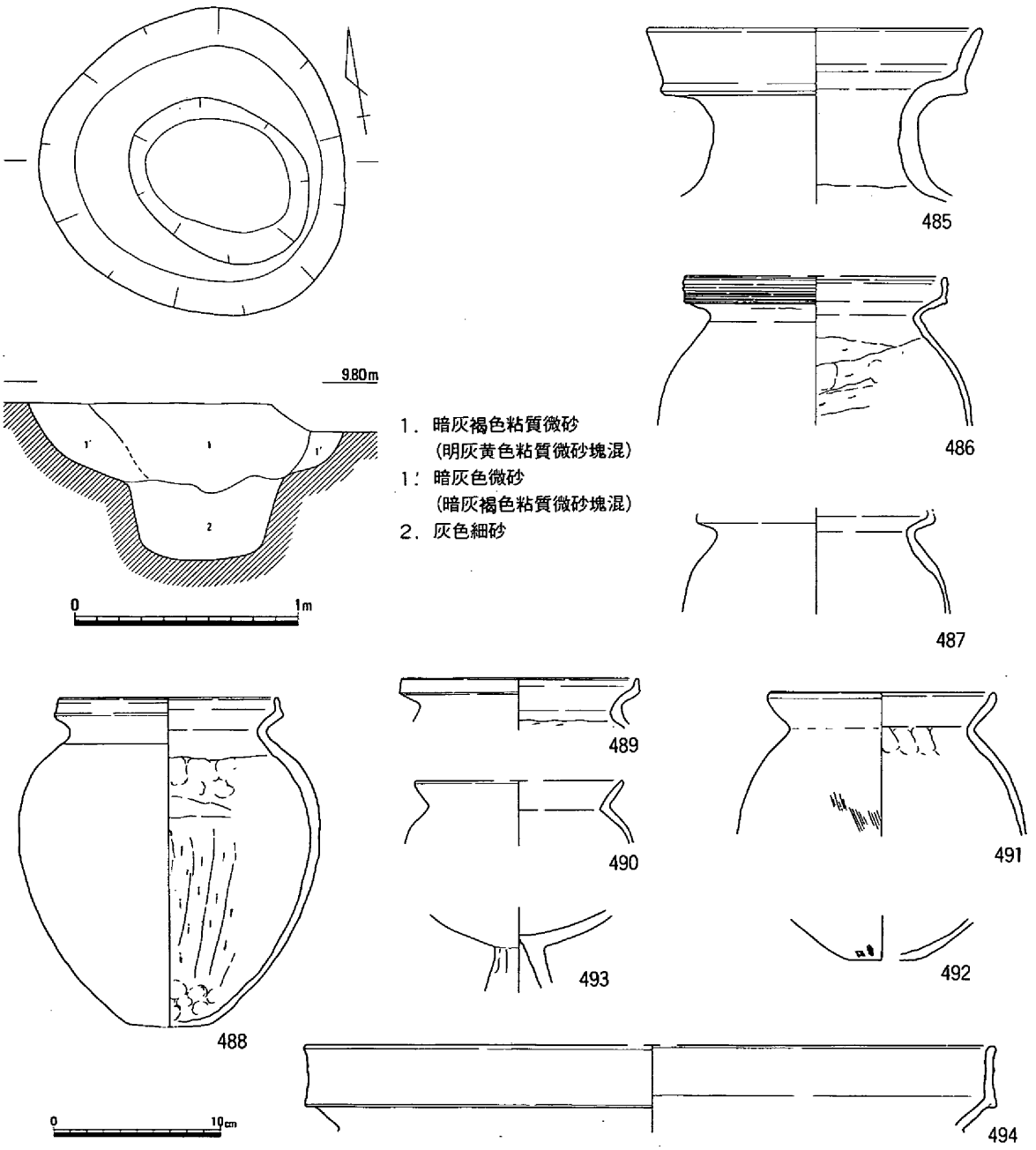
465・466は底に重なっていた壺形土器である。465は口縁端部が上方に立ち上がり、頸部には螺旋状に３～４段ヘラ先による沈線が巡っている。体部外面は上半が縦方向のハケメ、下半はハケメ後縦方向にヘラミガキされている。体部下半に黒斑が認められる。内面は頸部が指オサエ、肩部以下ヘラケズリされている。胴部中央より少し上で最大径を測り、底部は平底である。口径18.3cm・底径7.6cm・器高31.0cm・最大径25.7cmを測る。466は口縁端部が上方に立ち上がり、口縁部および頸部外面はハケメが残る。胴部外面はハケメ後縦方向にヘラミガキされている。頸部内面は指ナデ、胴部内面

は肩部以下ヘラケズリされている。底部付近には指頭圧痕が認められる。ほぼ胴中央部で最大径を測り、底部は平底である。口径22.8cm・底径8.3cm・器高36.1cm・最大径32.1cmを測る。462は口縁端面に櫛描きによる波状文が施された壺形土器の口縁部片である。473は「く」の字状に外反する口縁部の甕形土器で、口縁端に一条沈線が巡る。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリされている。口縁端面および胴部に煤が付着している。

この土壙は、規模・形状等から井戸と考えられ、時期は弥生時代末とみられる。

土壙－15（第73図）

５－Ｄ区の北西部、土壙－15の東側に並んで検出された土壙である。規模は、135cm×140cmのほぼ円形呈する平面形で、深さは検出面から71cmを測る。掘り方は検出面から緩やかに下がり、途中で段をもち底面にいたる。底面は中央が僅かに低いが、ほぼ平坦である。底の高さは海抜8.99mである。



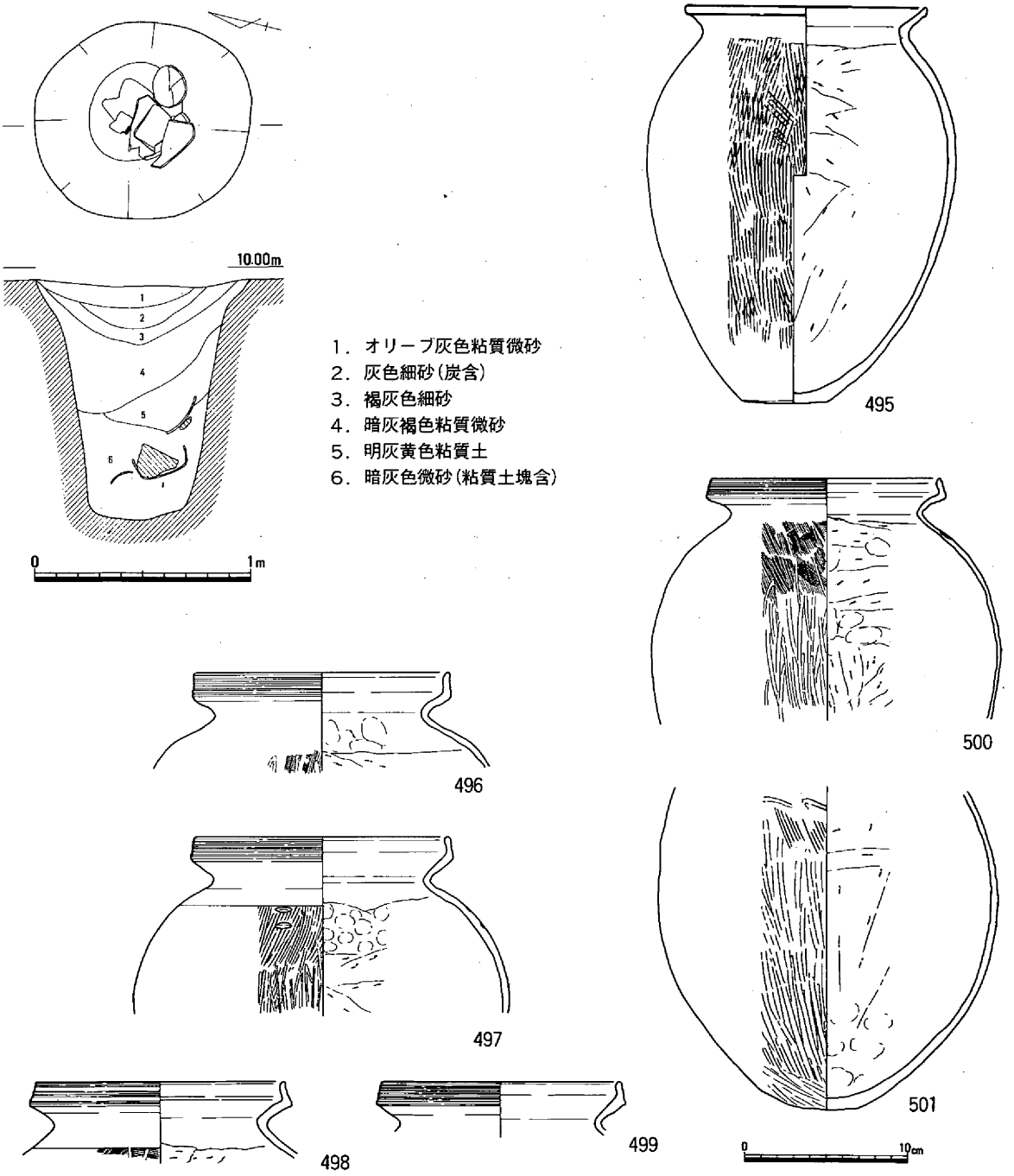
第73図　土壙－15（1/30）・出土遺物（1/4）

埋土は、段までの上層が暗灰褐色粘質微砂および暗灰色微砂で、下層は灰色細砂である。出土遺物はそれほど多くない。488は口縁端部がやや内傾気味に立ち上がる甕形土器である。器面は剝離していて調整等は明瞭でない。体部全体に黒斑が認められる。

この土壙は井戸状を呈するものであるが、隣の土壙―14に比べて底が20cmほど高く、井戸と限定することはできない。時期は、出土遺物などから古墳時代初頭と考えられる。

土壙―16（第74図）

４－Ｄ区の西部北端で、調査区の東端近くにおいて検出された井戸状の土壙である。規模は、92cm



第74図　土壙―16（1/30）・出土遺物（1/4）

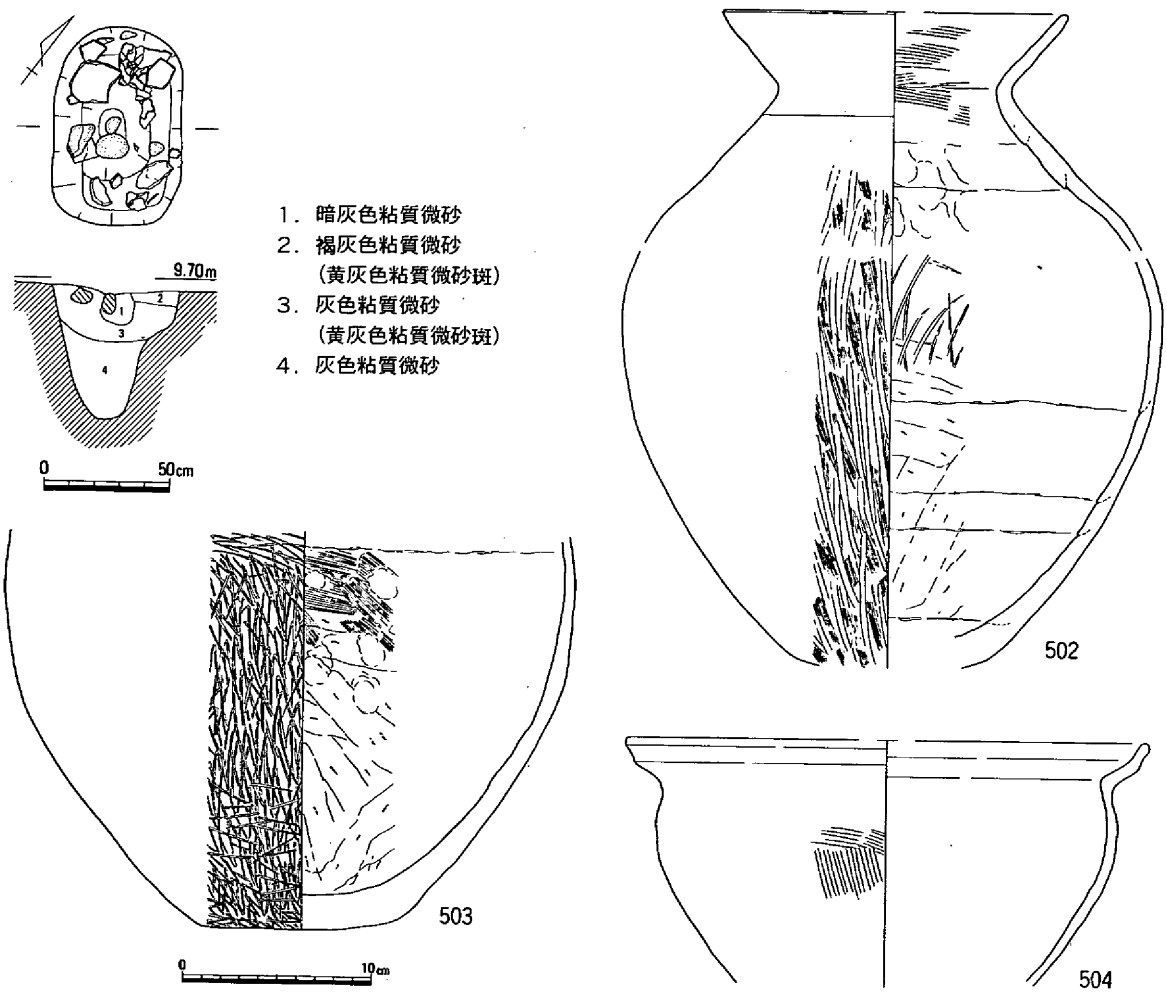
×102cmのやや南北に長い楕円状を呈する平面形で、深さは検出面から111cmを測る。掘り方は検出面下で少し段をもち、わずかにすぼまりながら真直ぐに下がり底面にいたる。底面は中央が僅かに低いが、ほぼ平坦である。底の高さは海抜8.83mである。埋土は、第１層から第３層はレンズ状に埋積しているが、第１層のオリーブ灰色粘質微砂は二次堆積とみられる。上層の第２・３層は灰色細砂および褐灰色細砂が、中層の第４・５層には暗灰褐色粘質微砂・明灰黄色粘質土がそれぞれ埋積している。下層の第６層は暗灰色微砂層で、埋土中に多くの土器片が認められている。

図示できたのはいずれも甕形土器である。495は「く」の字状に外反する口縁部で、体部外面は縦および斜めのハケメ、内面は肩部までヘラケズリされている。胴部中央より上で最大径を測り、底部は平底を呈する。外面の肩部より下と内面の底部付近に煤が付着している。496～500は「く」の字状に外反する口縁端部が真直ぐあるいは内傾気味に上方に立ち上がり、外面に５～７条の櫛描き沈線を施す。体部外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はヘラケズリされている。497は肩部にヘラ先による刺突が２個縦に、500は貝の先端部による刺突が２個横に並んでいる。

この土壙は、規模・形状等から井戸と考えられ、時期は古墳時代初頭とみられる。

土壙－17（第75図、図版７－２）

３－Ａ区の北東部、調査区の西端近くにおいて検出された土壙で、建物－２の北側、建物－１から



第75図　土壙－17（1/30）・出土遺物（1/4）

１ｍ程東に位置している。規模は、長さ79cm・幅50cmの隅丸長方形状を呈する平面形で、北西一南東方向に長い。掘り方は比較的急な傾斜で底面にいたる。検出面からの深さは22cmを測り、底面はほぼ平坦である。土壙の上面には暗灰色・褐灰色の粘質微砂が認められるが、これは二次堆積土とみられるもので、第３層の灰色粘質微砂が土壙の埋土と考えられる。

遺物としては、礫とともに土器片が出土している。502は「く」の字状に外反する口縁部をもつ壺形土器で、胴部中央やや上方で最大径を測る。胴部外面はハケメ後ヘラミガキされている。内面の胴部はヘラケズリ、肩部には指頭圧痕が残り、口縁部にハケメがみられる。504は大形の鉢形土器であるが、細片で口径等は推定である。器面が剝離していて調整等は判然としないが、外面にハケメが残る。一部に黒斑が認められる。

この土壙の性格等は不明であるが、時期は出土した土器などから古墳時代初頭と推定される。

なお、この土壙の真下から土壙とほぼ同様の灰色粘質微砂が埋積している柱穴状の遺構が確認された。平面形は土壙を一回り小さくしたような隅丸長方形状を呈し、規模は27×40cmを測る。深さは土壙の底面から31cmである。遺物はなく、詳細は不明であるが、土壙一17はこの遺構の埋没後に掘り込まれたものとみられる。

土壙一18（第76図）

２一Ａ区の東端部、建物一３から５ｍ程北において検出された土壙である。規模は、長径97cm・短径82cm程の不整楕円を呈す平面形で、検出面からの深さは56cmである。掘り方は少し段をもちながら緩やかに下がり、底面は平坦である。埋土は三層からなる。第１層は灰褐色粘質微砂で礫を含む。第２層は暗灰色の微砂混じり粘土層、第３層は灰色の粘土混じり細砂層である。

遺物は、主に第１層から出土しているが、いずれも細片である。図示した土器はいずれも高杯形土器とみられるが、器面等が剝離していて調整等は不明である。505は水漉し粘土風の胎土である。

この土壙の性格等については不明であるが、時期は古墳時代初頭と推定される。

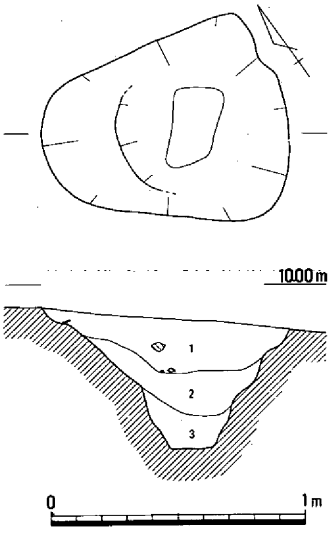
土壙一19（第77図）

３一Ｂ区の南東部、土壙一20から８ｍ程東において検出された土壙である。規模は、長径68cm・短径50cmの楕円形を呈す平面で、検出面からの深さは40cmである。掘り方は検出面から緩やかに下がり、底にいたる。埋土は、褐灰色粘質微砂が一層である。

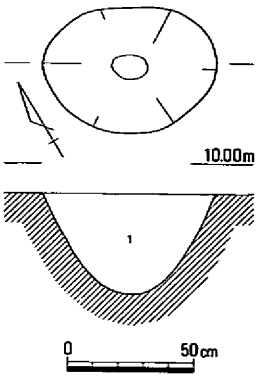
出土遺物としては、土器の細片のみで、性格等は不明である。時期は検出状況などから古墳時代前期と推定される。

土壙一20（第77図）

３一Ｂ区の南西部、土壙一19から８ｍ程西において検出された土壙である。規模は、長径155cm・短径135cm程の不整円を呈す平面形で、検出面からの深さは26cmである。検出面からの掘り方は、南側が真直ぐ下がっているが、北側は非常に緩やかな斜面で、そのまま



第76図　土壙一18（1/30）・出土遺物（1/4）



土壙－19
1．褐灰色粘質微砂

底になり、底面は多少凹凸が認められる。埋土は、上層の第１層に暗灰褐色細砂が、下層の第３層に灰色粘質微砂が埋積している。

出土遺物としては、図示した508～512などの土器があるが、いずれも細片である。508は「く」の字状に外反した口縁端部が上方に立ち上がる甕形土器である。器面が剝離していて調整等は明瞭でないが、内面は肩部までヘラミガキされている。509は口縁部付近、510は底部のいずれも壺形土器とみられる細片である。511・512は高杯形土器の脚柱部を中心とした土器片であるが、器面が剝離していて調整等は不明である。512の裾部には円孔が４個穿たれている。

この土壙は、河道－２の埋没後に掘り込まれた遺構であるが、性格等は不明である。時期は、出土遺物などから古墳時代前期と推定される。

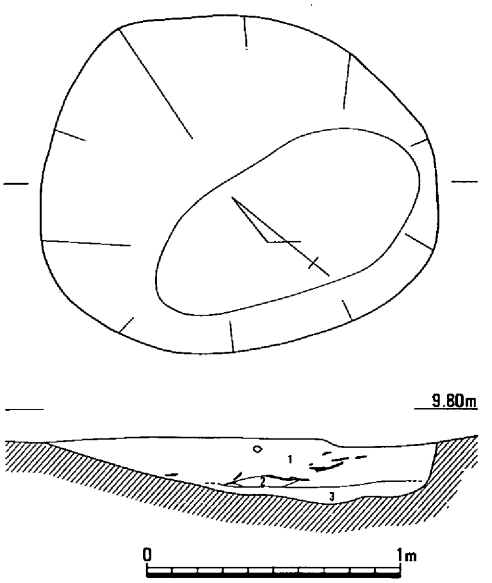
土壙－21（第78図）

４－Ｃ区の中央部、建物－14から南へ、建物－８から西へそれぞれ２ｍ程の所において検出された土壙である。規模は、長径140cm・短径78cm程の東西に長い不整楕円の平面形を呈し、検出面からの深さは18cmを測るのみの浅い土壙である。掘り方は検出面から東側はやや急に、西側は少し緩やかに下がり、底面は平坦である。埋土は第１層・第２層とも褐灰色粘質微砂が埋積しているが、第１層には多くの粗砂が含まれている。

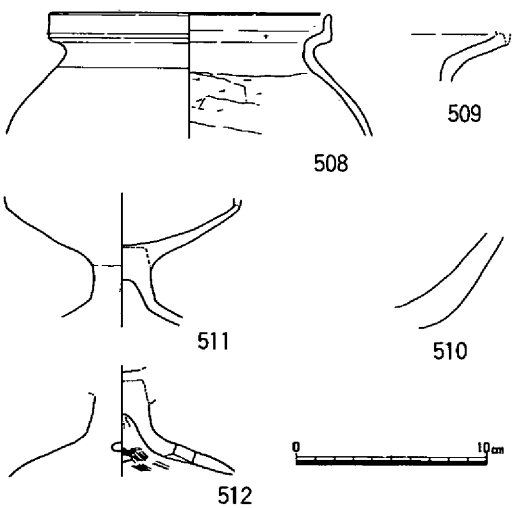
出土遺物は土器の細片のみで、性格等は不明である。時期は、検出状況などから古墳時代頃と推定される。

土壙－22（第79図）

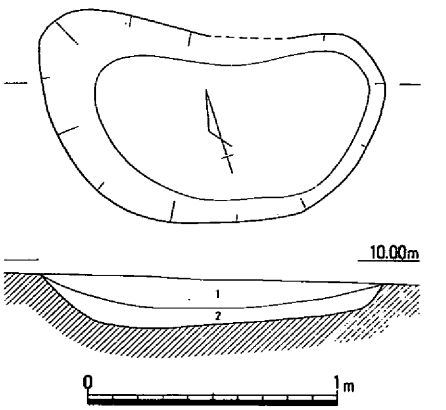
２－Ｂ区の北部、建物－11のすぐ南において検出された遺構である。規模は長径93cm・短径71cmで東



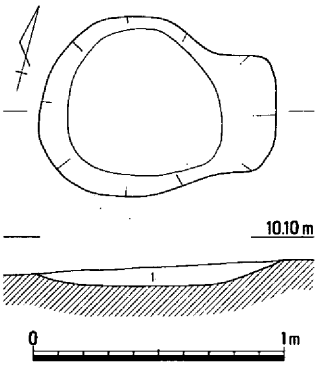
土壙－20
1．暗灰褐色粘土混細砂
2．黄灰白色土
3．灰色粘質微砂



第77図　土壙－19・20（1/30）・
土壙－20出土遺物（1/4）

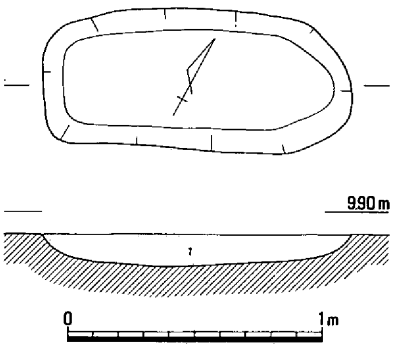


第78図　土壙－21（1/30）



第79図　土壙－22（1/30）

側に張り出しがついた不整円の平面形を呈し、深さは検出面から12cm程のごく浅い土壙である。掘り方は検出面から非常に緩やかに下がり、そのまま平坦な底面になる。埋土は粗砂混じりの暗褐灰色粘質微砂の一層だけである。出土遺物は土器の細片のみで、性格等は不明である。



第80図　土壙－23（1/30）

時期は、検出状況などから古墳時代頃と推定される。

土壙－23（第80図）

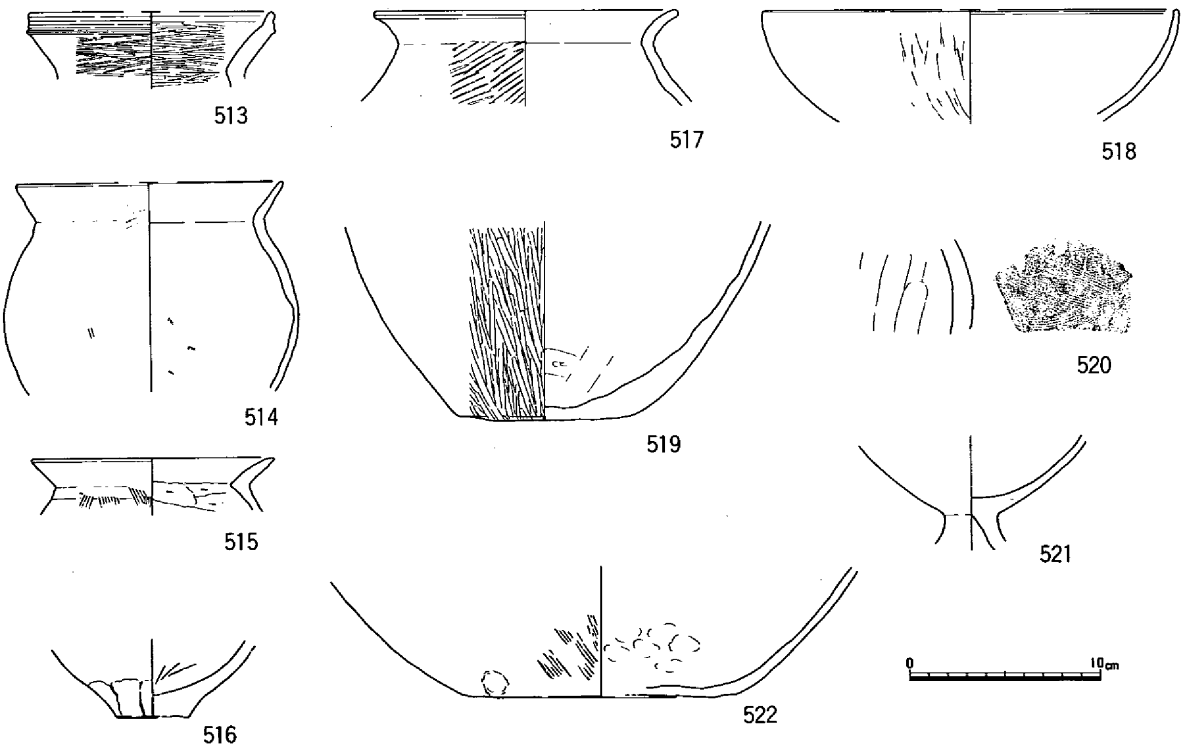
３－Ｃ区の南東部、建物－６の北６ｍ、土壙－16から７ｍ程西において検出された遺構である。規模は、長径122cm・短径56cm程を測り、東西に細長い土壙状を呈するもので、深さは検出面から13cmを測るのみである。掘り方は肩部がやや急に下がり、比較的平坦な底面にいたる。

埋土は暗灰色微砂が一層である。出土遺物としては、土器の細片のみで、性格等は不明である。

時期は、検出状況などから古墳時代頃と推定される。

５．柱穴

柱穴出土遺物（第81図）



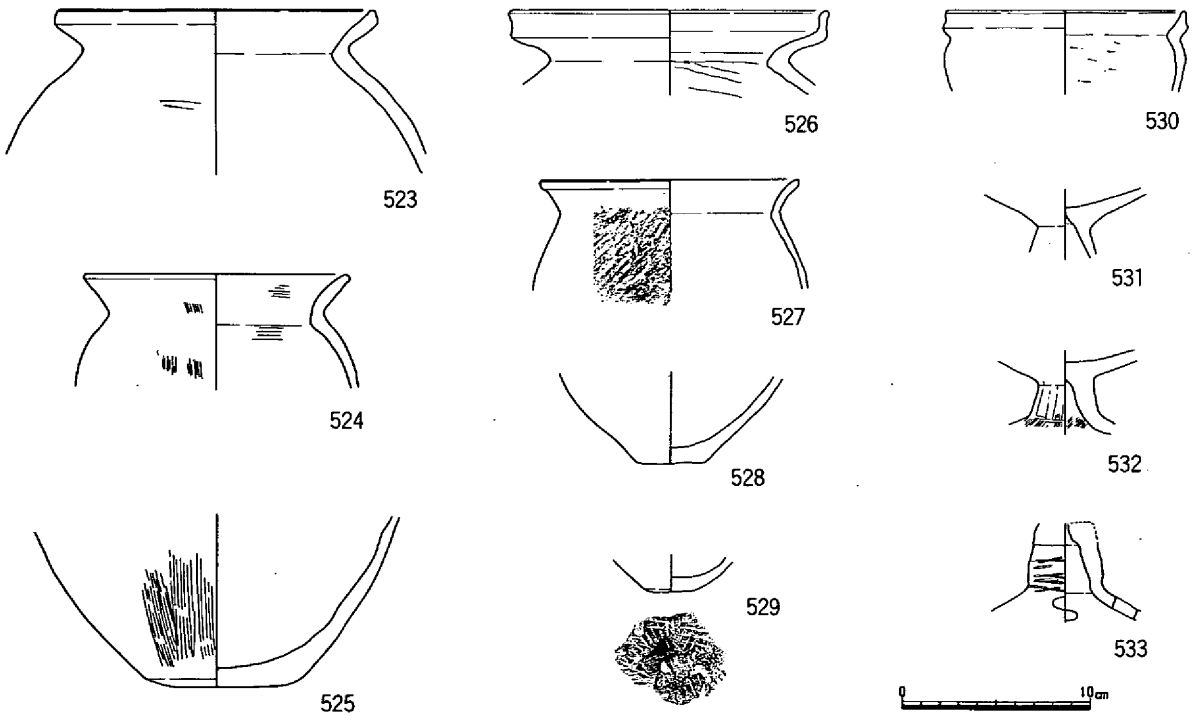
第81図　柱穴出土遺物（1/4）

調査区の北部および南東部などの建物や土壙が検出された周辺部では、柱穴などのピットが少し集中して検出されている。それらのうちには、柱痕が認められるものの対応する柱穴が検出されず、建物などにならなかったものもある。柱穴など小規模なピットから遺物が出土することはまれで、時期も判然としないものが多い。柱穴の規模も様々であるが、埋土は古代以降の新しい時期のものを除き、灰褐色粘質微砂と黒褐灰色粘質微砂のいずれかである。513・514はＰ－19から出土したもので、513は少し上方に拡張した口縁端面に２条の沈線を巡らせる壺形土器で、内外面ともヘラミガキされている。514は「く」の字状に外反する口縁の甕形土器で、外面はタタキ、内面はヘラケズリが一部認められる。515はＰ－24から517はＰ－27から出土した、「く」の字状に外反する口縁の甕形土器である。515は外面にハケメが認められる。517の外面はタタキで調整され、水漉し粘土が使われている。516はＰ－26、519はＰ－４、522はＰ－６からそれぞれ出土した平底の底部片である。516・519は底に黒斑が認められる。518はＰ－28、521はＰ－32から出土した高杯形土器であるが、器面は摩滅していて調整は不明である。520はＰ－30から出土した壺形土器で、外面はハケメの後線刻が認められる。これら柱穴から出土している土器はいずれも細片で、詳細は不明である。

６．土器溜り

土器溜り－１（第82図）

２－Ｂ区の北西部、建物－４の南３ｍ程において南北4.5ｍ・東西２ｍの範囲で、黒褐灰色粘質微砂中に土器が多く出土している土器溜りである。出土した土器は細片が多く、図示できたものはそれほど多くない。また、器面が摩滅していて調整等は判然としない。523・524・527は「く」の字状に外反する口縁の、526はその口縁端部が上方に立ち上がる甕形土器である。530は鉢形土器で、外面に丹塗りが認められる。531～533は高杯形土器の脚柱部片で、533は水漉し粘土風の胎土である。



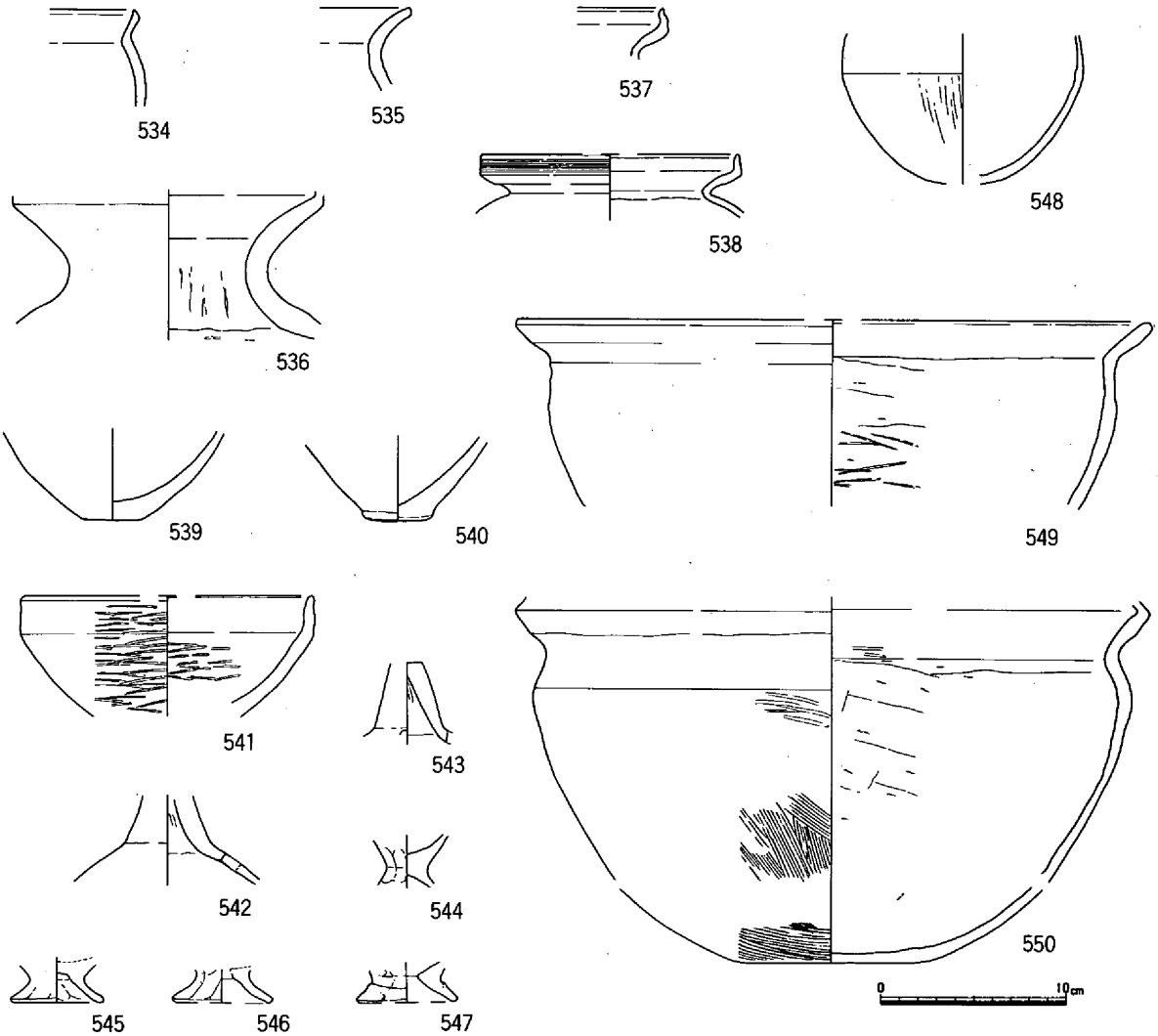
第82図　土器溜り－１出土遺物（1/4）

出土している土器の時期は、弥生時代末から古墳時代初頭である。

土器溜り－２（第83図）

１－Ｂ区の北東部、建物－15の北３ｍ程において南北5.5ｍ・東西４ｍの範囲で検出された土器溜りで、溝－12・14・15と切り合っている。埋土は黒褐灰色粘質微砂で、出土した土器は細片が多く、図示できたものはそれほど多くない。また、土器の器面が剝離していて、調整等も判然としないものが多い。544～547は製塩土器の台部片、549・550は大形の鉢形土器である。550の体部外面は下半がハケメ、上半はヘラミガキ、内面はヘラケズリされ、少しナデが残る。

出土している土器の時期は、古墳時代初頭である。



第83図　土器溜り－２出土遺物（1/4）

(3)　古代・中世の遺構・遺物

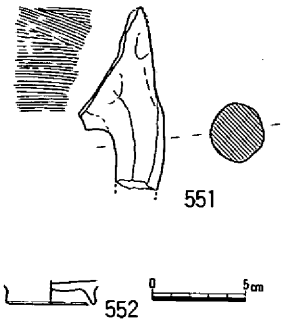
田益新田遺跡において、古代・中世の遺構と確認できたものはほとんどなく、僅かに溝１条と建物１棟それに小ピット数個のみである。このうち小ピットは、３－Ｂ区から３－Ｃ区にかけてごく浅いものが確認されたが、性格等は不明である。また、時期も確定できないものである。

１．溝

溝―20（第５・84図）

３－Ａ区の調査区西端から３－Ｃ区の北西部にかけて検出された溝である。東北東から西南西に向かい、ほぼ真直ぐに流走するもので、規模は、検出面から幅105cm・深さ16cmを測る。断面は皿状を呈し、埋土は灰白色粘質土である。埋土中から551・552などの土器片が出土している。いずれも細片である。551は灰白色を呈する土鍋の脚部片である。552はいわゆる「早島式土器」と称される灰白色を呈する土師椀の高台部片である。

時期は、鎌倉時代（13世紀）頃と推定される。



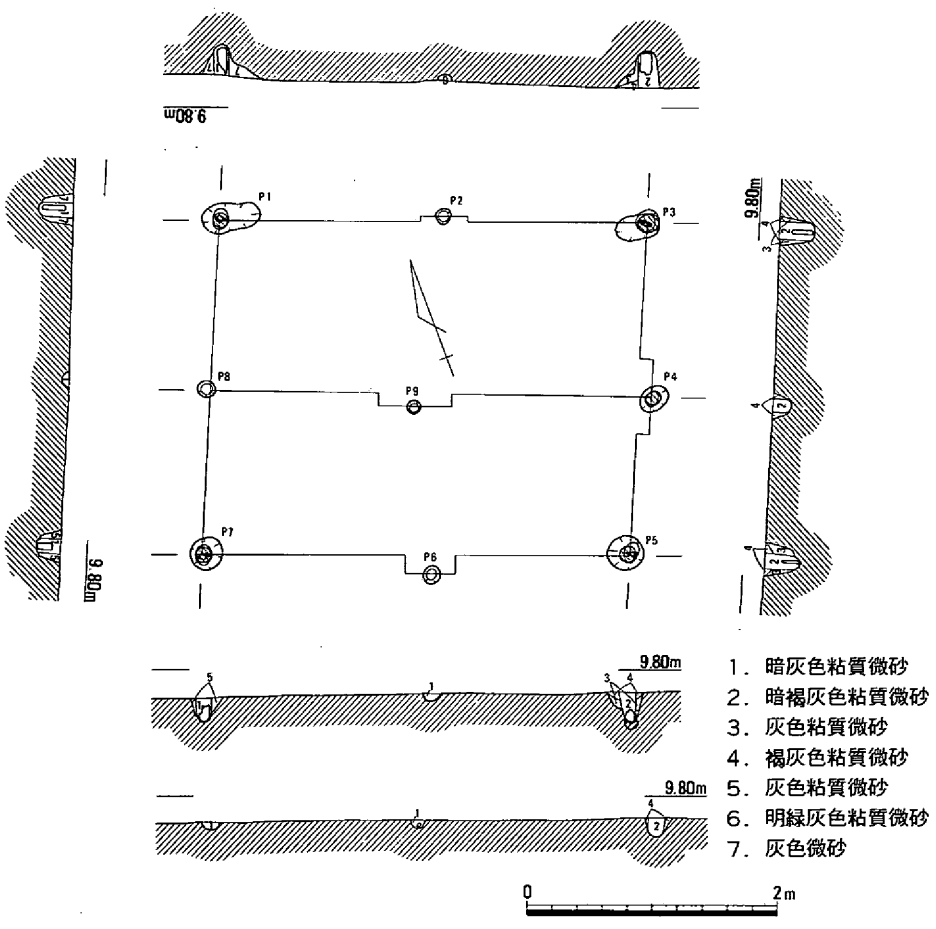
第84図　溝―20出土遺物（1/4）

２．建物

建物―17（第85図、図版６－４）

２－Ｃ区の中央部において検出された遺構である。溝―４・５の埋没後に建てられた柱間２間×２間の総柱の建物で、桁行3.40m・梁間2.65mを測る。また、柱間は1.5m前後である。柱穴の規模は、隅の柱が直径30cm程の平面形を呈し、深さは残りの良好なＰ―５で検出面から30cmを測る。いずれも直径15cm程の柱痕が検出された。隅の柱４本（Ｐ－１・３・５・７）とＰ－４・６には柱根が確認されている。

建物の軸線は、ほぼ東－西方向である。柱穴埋土中に出土遺物がなく、時期の決定は困難であるが、検出状況や柱穴の埋土などから、古代末あるいは中世の建物と推定される。



第85図　建物―17（1/60）

第3節　小　　結

河道について

田益新田遺跡では、弥生時代前期から中世にいたる遺構が検出され、縄文時代後期から中世の遺物が出土している。しかし、調査区の3分の1程は旧河道が占めており、さらに、中世以降の段階には全体的な削平が行なわれているようで、遺構などの遺存状態が良好とはいえない。また、異なる時期の遺構であってもほぼ同一の面において検出され、層序からの時期の検討をすることは困難であった。

検出された4本の旧河道のうち、河道－3については検出できたのが僅かで、遺物も少なく性格など詳細に検討することはできないが、残りの3本の河道について若干の考察を加える。

河道－1・2および河道－4は、いずれも調査区の北東から南西に向かい蛇行して流走していた。

河道－1の埋土は、粗砂や細砂がレンズ状に堆積しているもので、その堆積にある程度時間の経過が考えられる。また、西南部で分流した一部は河道－2に流れ込んでいる。埋土中から出土している遺物は少ないが、最下層の灰色礫混じり粗砂中から、いずれも細片で器面は摩滅している縄文時代晩期や弥生時代前期の土器が出土している。また、中層の灰色細砂層などからは弥生時代中期の土器が出土している。なお、最上層の暗褐灰色粘質微砂中には、古墳時代初頭の土器が出土しているが、これは河道埋没後に生じた窪みに堆積したものである。河道－1の埋没後には弥生時代後期末の集落が営まれはじめていたとみられ、この時期、すでに安定した地盤になっていたと推定される。このような状況から河道－1は、弥生時代前期以前に生じたが、その後次第に埋まりはじめ、弥生時代中期頃までにほぼ埋没していたと考えられる。

河道－2は、幅17m・深さ2.5m以上におよぶ大河道である。埋土は、概ね灰色の粗砂および細砂の一層のみであり、最下層には流木などが礫と伴に埋まっていたことから、大量の洪水砂により一時期に埋没したものと推定される。河道埋土の砂層中からは主に弥生時代後期の土器が、最下層の礫混じり粗砂層からは弥生時代中期末の土器が出土している。最下層では縄文時代後期の土器片も出土しているが、非常に摩滅したものである。なお、最上層には二次堆積の暗褐灰色粘質微砂が堆積し、古墳時代初頭の土器が出土している。また、河道－2は古墳時代初頭の遺構に切られている。このような状況から河道－2は、弥生時代中期頃に生じ、弥生時代後期末までに埋没したと考えられる。

河道－4の底には、灰色細砂が70cm程堆積していた。特に、底に近い方には粗砂が堆積し、この堆積層が上流からの土砂によりかなり短時間のうちに埋まっていることを推測させる。その上には、褐灰色微砂層が40cm程の厚さで堆積し、最上層には河道埋没後の二次堆積とみられる暗褐灰色粘質微砂が堆積していた。底部付近に遺物はほとんどみられず、器面の非常に摩滅した241・215など弥生時代中期の土器が若干認められたのみである。しかし、流路が北東から西に方向を変える4－C区では、左岸側のテラス状を呈する部分からは、主に弥生時代後期の土器などが比較的多く出土している。その上の褐灰色微砂層中からは、弥生時代後期末および古墳時代初頭の土器が大量に出土している。ここでは、ほとんど毀れていない完形の土器がごろごろという状況で埋まっていた。これらの土器は遠くから流されてきて埋没したとは思えないものである。田益新田遺跡では、河道－1あるいは河道－2の埋没後の弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて集落が営まれていたとみられ、この集落が洪

水に見舞われ、土器などが土砂とともにこの河道に埋没したものではないかと推定される。このような状況から河道－４は、弥生時代後期頃に生じ、古墳時代初頭には埋没したと考えられる。

田益新田遺跡では、弥生時代前期に河道－１があったものの、次第に埋まりはじめ、弥生時代中期には河道－２が新たにでき、河道－１は完全に埋没する。弥生時代後期末に至り、河道－２は洪水により一度に埋没し、新たに河道－３ができるが、古墳時代初頭にはこれも埋没している。その後の河道は、今回の田益新田遺跡の調査では明らかにされていない。

集落について

田益新田遺跡の調査で、弥生時代後期から古墳時代前半期頃とみられる建物は16棟検出され、井戸および井戸状を呈する遺構は15基確認されている。建物のうち９棟は、遺構上面が後世の削平を受けていることや、１×１間で構成されていること、検出された規模などから、竪穴住居の床面などが削平され、柱穴のみが遺存している遺構と考えられるものである。また、建物としてまとめることはできないものの、柱痕が遺存しているなど明らかに柱穴とみられる遺構も検出されており、２本柱の竪穴住居の存在を考えれば、さらに何軒かの竪穴住居の存在を窺わせる。

建物および竪穴住居の柱穴からは、遺物がほとんど出土しないため、それぞれの時期を確定することは困難であるが、これらの建物および竪穴住居は、検出状況などから大きく、三つのグループに分かれる。調査区の北部に位置する、建物－５・９・10・11・12・14・15など(A)、調査区の北西部に位置する、建物１・２・３など(B)、調査区の南東部に位置する、建物－６・７・８・13・14など(C)である。しかし、これらが時期差を示すものとは断定できず、グループ内においても棟方向などはそれぞれ異なり、遺構同志切り合いが認められるなど、すべてが同時存在しているものでもない。

(A)は、建物－５は掘立柱建物の可能性もあるが、ほかはすべて竪穴住居とみられる。このうち、建物－９・11・15・16は河道－１の埋没後に建てられたもので、そのほかの建物もほぼ同時期頃と推定される。しかし、建物－15・16は先後関係が不明な（柱痕の遺存状況から建物－16が先行していた可能性がある。）ものの、互いに切り合い同時存在は不可能である。また、建物－５と建物－10は近接しすぎていて、同時存在は困難であり、すべてが一時期に建てられていたものではない。建物の周辺部からは、土壙－１など弥生時代後期末頃の井戸が検出されている。また、古墳時代初頭の土器が出土している土壙－12は検出された規模は大きすぎるが、河道－１の堆積土である砂層を掘り込んでいることから、壁面が崩れて広がった井戸と推定される。以上のことから(A)には、少なくとも弥生時代後期末と古墳時代初頭の二時期に集落が営まれていたと考えられる。

(B)は、さらに西に広がるとみられるが、検出されているのはいずれも２×１間の掘立柱建物と推定され、(A)とは性格が異なっている。建物－１と建物２の隣接する２棟は直交する配置に建てられ、同時存在の可能性がある。建物の柱穴内に出土遺物はなく、これらの建物に伴う井戸も特定できないが、いずれも河道－１および河道－２の埋没後に建てられ、柱穴の埋土が隣接して検出された、古墳時代初頭の土壙－17の埋土に似ていることから、(B)はそれ程時期差がないと考えられる。

(C)は、掘立柱建物が二棟と竪穴住居の推定されるもの三軒とが検出されている。このうち建物－６と竪穴住居とみられる建物－14は、先後関係が不明であるが、切り合い関係にあり、同時期に建てられていたものではない。この周辺では、土壙－６・11・13など古墳時代初頭の井戸が検出されているが、建物－13は河道－３の埋没後に建てられているものである。以上のことから(C)には、古墳時代初頭および古墳時代前半期の集落が営まれていたと考えられる。

田益新田遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけて、河道が流路を変えながら流れ込み、河道になる以前の遺構は遺存していない。また、後世の削平などにより古墳時代後期以降の遺構もほとんど遺存していない。このため、遺跡の全容を知ることはできなかったが、今回の調査により、弥生時代後期末から古墳時代初頭の時期には、かなり大きな集落が営まれていたことが明らかとなった。

遺物について

田益新田遺跡においては、井戸などの土壙および河道の埋土を中心に、整理箱にして150箱を越える土器などの遺物が出土している。出土した遺物は壺・甕・高杯・鉢・蓋・器台などの土器のほか、手焙り形土器や手捏ね土器・鳥形土器・動物形土製品などがある。遺物は摩滅したものではあるが、縄文時代後・晩期や弥生時代前期の土器片が、河道の底から出土しているのをはじめとして、弥生時代中・後期、古墳時代および中世にいたる土器が溝や土壙・河道などから出土している。特に、河道－4の細砂および微砂の砂層中からは、弥生時代終末から古墳時代初頭期を中心に、完形やほぼ完形のものを含みおびただしい数量の土器などの遺物が出土し、最上層の二次堆積土からは、5世紀代の須恵器なども出土している。しかし、これらは土層ごとに分離して取り上げることができず、一括の遺物として取り扱うことはできない。なお、土壙などの出土遺物については可能な限り図示したが、河道の出土遺物については遺存状態の良好なものを中心に図示するにとどまり、未掲載の土器を多く残している。弥生時代終末期の土器は、土壙－1～3・10及び河道－2・4の埋土中などから出土した、いわゆる酒津式の土器で、川入・上東遺跡の才ノ町式、高橋編年のⅨ期にあたる。一方、古墳時代初頭の土器は、土器棺－1・2や土壙－6～9・11～17および河道－2・4の埋土中などから出土したもので、雄町遺跡の13類、高橋編年のⅩ期にあたる。しかし、これら田益新田遺跡から出土した土器の中には、一般に岡山南部平野地域においてあまり見慣れない器形・胎土の土器も存在している。弥生時代終末期では、126の二重口縁の壺形土器や228の非常に長い筒状の脚柱部をもつ高杯形土器などは、県北部や畿内地方のなどの影響が窺われる。古墳時代初頭の231や233などは杯部に段をもつ高杯形土器で、山陰などの影響が窺われる。また、270・296の鉢形土器などは、胎土に多くの角閃石を含み、他地域から搬入されている可能性がある。278は、外面をタタキで、内面はナデにより調整したとみられる底部が平底の鉢形土器で、軟質土器などの影響が窺われる。

このほか、手焙り形土器が3個体出土しているほか、祭祀的要素を窺わせる手捏ね土器や鳥形土器が出土している。鳥形土器は、砂粒を含む胎土で作られ、にぶい黄橙色を呈し、体部は頭部と尾部を折り曲げ、上方に開口したままのものである。また、中央部は僅かに摘み上げ上方に開口している。この穴は少し歪んでいるが、方形を意図したものとみられる。脚部は外面をヘラミガキし、6個の円孔を穿っている。このような鳥形土器は、県下でも数例出土しており、山手村の天満遺跡の出土例(註)などは、規模などよく類似している。335は用途などは不明であるが、体部に直径4㎜の円孔が1個とそれを囲み、直径3㎜の円孔6個が穿たれた手捏ね土器である。

これらの遺物は、この集落の土器製作などに他地域からの強い影響などが考えられるもので、人や物の交流など田益新田遺跡の特異性が窺われる。

(註) 日野浦弘幸氏の御教示による。山手村教育委員会により平成元年に発掘調査された。

表－1　溝・溝状遺構一覧表

（単位cm）

遺構番号	地　区	幅×深さ	断面形	流走方向	出土遺物	時期	備　考	調査地区（旧番号）	
1	2－D	40× 34	U	NE→W	なし	弥生時代前期		C－東区 工道3区	16 2
2	4－C・D	130× 25	Ⅲ	SE→NW	なし	弥生時代前期		工道2区	3
3	1～4－C	330× 50	U	N→S	弥生土器細片	弥生時代中期？	溝－1と同時期？	工道2区 工道4区	2 3
4	1・2－C	170× 72	U	NE→S	343・344・345	弥生時代中期	溝－3を切る 溝－5と同時期？	C区 工道4区	12 2
5	2－C	140× 79	U	NE→SW	弥生土器細片	弥生時代中期	溝－3を切る 溝－4と同時期？	C区 工道4区	13 4
6	5－B・C	97× 42	U	E→W	346	弥生時代後期		E区	20
7	3・4－C 5－B	128× 20	Ⅲ	NE→S	347·348·349·350	弥生時代後期	溝－6を切る	E区 B－南区 D区	19 2 21
8	4－D	80× 49	U	NE→SW	351・352	弥生時代後期末		D－東区	21
9	0－C	67× 24	U	NE→SW	なし	弥生時代後期末	溝－10に合流	工道5区	6
10	0－C	92× 33	U	N→SW	なし	弥生時代後期末	溝－9を合流	工道5区	5
11	4－C	27× 7	Ⅲ	SW→NE	なし	弥生時代後期末	溝状遺構	D区	22
12	1－C	29× 20	U状	SE→W	425·426·427·428	古墳時代初頭	溝状遺構	C区	5
12'	1－C	29× 20	U状	E→W	なし	古墳時代初頭	溝状遺構	工道5区	2
13	0－C・D	138× 21	U状	W→NE	429・430	古墳時代初頭	溝－12を切る 溝状遺構	C区 C区 C－東区 工道5区	3 4 15
14	0・1－C	93× 20	U状	NE→SW	土師器細片	古墳時代初頭	溝－12・13を切る 溝状遺構	C区 工道5区 C－東区	2 3 14
15	1－C	29× 16	U状	E→W	なし	古墳時代初頭	溝－13を切る 溝状遺構	C区	6
16	0・1－C	18× 10	U状	N→S	サヌカイト石鏃	古墳時代初頭	溝状遺構	C区	8
17	1－C	33× 7	Ⅲ	N→NW	なし	古墳時代初頭	溝－13を切る 溝状遺構	C区	7
17'	1－C	13× 6	U状	NW→E	なし	古墳時代初頭	溝－16を切る 溝状遺構	C区	9
18	1－C	26× 29	U状	NW→SE	431・432	古墳時代初頭	溝－17から分流 溝状遺構	C区 工道5区	10 1
19	1－C	7× 5	U状	SW→NE	土師器細片 サヌカイトチップ	古墳時代初頭	溝状遺構	C区	11
20	3－A・B	105× 16	Ⅲ	E→W	551・552	鎌倉時代		A・B区	1

表2　建物一覧表

遺構番号	地　区	規　模	桁　行（柱間寸法）	梁　間（柱間寸法）	棟方向	柱穴掘方	柱穴底の高さ（単位m）	床面積（単位㎡）	時　期	備　考	調査地区旧遺構番号
1	3－A	2×1以上	2.75 1.40		南東 －北西	円	9.62～ 9.56		古墳時代初頭		A区 1
2	3－A	2×1	3.00 1.45～1.50	2.60 2.60	南西 －北東	円	9.61～ 9.53		古墳時代初頭		A区 2
3	2－A・B	2×1	3.40・3.55 1.70～1.80	2.65・2.75 2.65・2.75	南－北	円	9.67～ 9.38	9.383	古墳時代初頭		A・B区 3
4	1－A・B	2×1	4.60 2.00～2.60	3.00 3.00	南西 －北東	円	10.16 ～9.64		古墳時代初頭		B区 4
5	1－D	2×2 ？	3.10・3.25 1.50～1.60	2.65・2.70 1.15・1.55	南西 －北東	円	9.94～ 9.82	8.493	弥生時代末？ 古墳時代初頭		工道-5区 3
6	4－C	2×1	3.40・3.60 1.65～1.80	3.10・3.25 3.10・3.25	東－西	円	9.75～ 9.46	11.112	弥生時代末～ 古墳時代前？		D区 12
7	4・5－D	2×1	3.20 1.50・1.65	2.95 2.95	南東 －北西	円	9.60～ 9.51		弥生時代末～ 古墳時代前？		E東区 14
8	4－C	1×1	2.35・2.45 2.35・2.45	1.75 1.75	東－西	円	9.67～ 9.56	4.183	弥生時代末～ 古墳時代前？		D区 13
9	0－C・D	1×1	2.60 2.60	2.60 2.60	南東 －北西	円	10.04 ～9.89	6.760	古墳時代初頭	竪穴住居？	工道-5区 1
10	1－C	1×1	2.65・2.70 2.65・2.70	2.35 2.35	南－北	円	9.98～ 9.85	6.345	弥生時代末？ 古墳時代初頭	竪穴住居？	工道-5区 2
11	1－B	1×1	2.35・2.50 2.35・2.50	1.85・1.95 1.85・1.95	南西 －北東	円	10.05 ～9.88	4.608	弥生時代末？	竪穴住居？	B区 5
12	1－C	1×1	2.65 2.65	2.30・2.40 2.30・2.40	東－西	円	9.87～ 9.67	6.228	弥生時代末？ 古墳時代初頭	竪穴住居？	C区 6
13	5－C	1×1	2.40 2.40	2.20・2.45 2.20・2.45	南－北	円	9.46～ 9.36	5.463	古墳時代前期	竪穴住居？	E区 10
14	4－C	1×1	2.40・2.50 2.40・2.50	2.30・2.35 2.30・2.35	南西 －北東	円	9.59～ 9.64	5.635	弥生時代末～ 古墳時代前？	竪穴住居？	D区 11
15	1－B・C	1×1	2.70 2.70	2.65・2.70 2.65・2.70	南－北	円	9.88～ 9.76	7.223	弥生時代末？ 古墳時代初頭	竪穴住居？	C区 8
16	1－B・C	1×1	2.35・2.45 2.35・2.45	2.10・2.25 2.10・2.25	南西 －北東	円	9.91～ 9.84	5.280	弥生時代末？	竪穴住居？	C区 9
17	2－C	2×2	3.40 1.60～1.90	2.65 1.25～1.50	南東 －北西	円	9.55～ 9.29	9.296	古代末、 中世？		C区 7

表－３　土壙・土器棺一覧表

（単位cm）

遺構番号	地　区	長さ×幅×深さ	平面形	底の高さ	時　　期	備　　考	旧番号	調査地区
土壙－１	２－Ｂ	100×　98×　84	不整円	900	弥生時代後期末	井戸	2	Ｂ区
土壙－２	４－Ｂ	101×　85×　72	楕円	892	弥生時代後期末	井戸	9	Ａ・Ｂ－南区
土壙－３	４－Ｂ	134×125×133	不整円	851	弥生時代後期末	井戸	10	Ｂ－南区
土壙－４	３－Ｃ	87×　85×　88	円	890	弥生時代後期末？	井戸状土壙	14	Ｄ区
土壙－５	１－Ｃ	145×140×　96	不整円	925	弥生時代後期末？	井戸状土壙	19	Ｃ区
土壙－６	４－Ｄ	71×　69×　75	円	919	古墳時代初頭	井戸状土壙	21	Ｄ－東区
土壙－７	０－Ｃ	204×198×114	不整円	901	古墳時代初頭	井戸	23	工道５区
土壙－８	１－Ｄ	200×170×164	不整円	851	古墳時代初頭	井戸	24	工道5･C-東区
土壙－９	０－Ｃ	138×136×107	円	923	古墳時代初頭	井戸状土壙	13	Ｃ区
土壙－10	１－Ｄ	113×107×　38	円	991	弥生時代後期末		15	Ｃ－東区
土壙－11	３－Ｃ	159×136×140＋	楕円	850－	古墳時代初頭	井戸	11	Ｂ－南・Ｄ区
土壙－12	０－Ｃ	392×317×117	円	903	古墳時代初頭	井戸状土壙	12	Ｃ区
土壙－13	４－Ｄ	90×　86×136	円	845	古墳時代初頭	井戸	16	Ｅ－東区
土壙－14	５－Ｄ	117×　96×　97	楕円	877	古墳時代初頭	井戸	17	Ｅ－東区
土壙－15	５－Ｄ	140×135×　71	円	899	古墳時代初頭	井戸状土壙	18	Ｅ－東区
土壙－16	４－Ｄ	102×　92×111	楕円	883	古墳時代初頭	井戸	20	Ｄ－東区
土壙－17	３－Ａ	79×　50×　54	隅丸長方	914	古墳時代初頭		1	Ａ区
土壙－18	２－Ａ	97×　82×　56	不整楕円	935	古墳時代初頭		3	Ａ・Ｂ区
土壙－19	３－Ｂ	68×　50×　40	楕円	948	古墳時代初頭		4	Ｂ区
土壙－20	３－Ｂ	155×135×　26	不整円	942	古墳時代前期？		8	Ｂ区
土壙－21	４－Ｃ	140×　78×　18	不整楕円	973	古墳時代？		7	Ｂ－南区
土壙－22	２－Ｂ	93×　71×　12	不整円	990	古墳時代？		22	Ｂ区
土壙－23	３－Ｃ	122×　56×　13	隅丸長方	968	古墳時代？		25	工道２区
土器棺－１	１－Ａ	93×　83×　28	不整楕円	1010	古墳時代初頭	壺棺	5	Ｂ区
土器棺－２	１－Ａ	52×　49×　19	円	1010	古墳時代初頭	壺棺	6	Ｂ区

第4章　西山古墳群

西山古墳群の所在地は、現在の国道53号から西へ約500m離れた岡山市栢谷（かいだに）の地点で、香橋（こうばし）池に面した丘陵の斜面に所在する。『岡山市埋蔵文化財分布地図』によると、横穴式石室を埋葬施設とする円墳を主体に箱式石棺も認められる14基の古墳からなる古墳群であるが、一般国道53号（岡山北バイパス）の路線内に位置する4基の古墳（西山1～4号墳）が調査の対象になった。

第1節　調査の経過

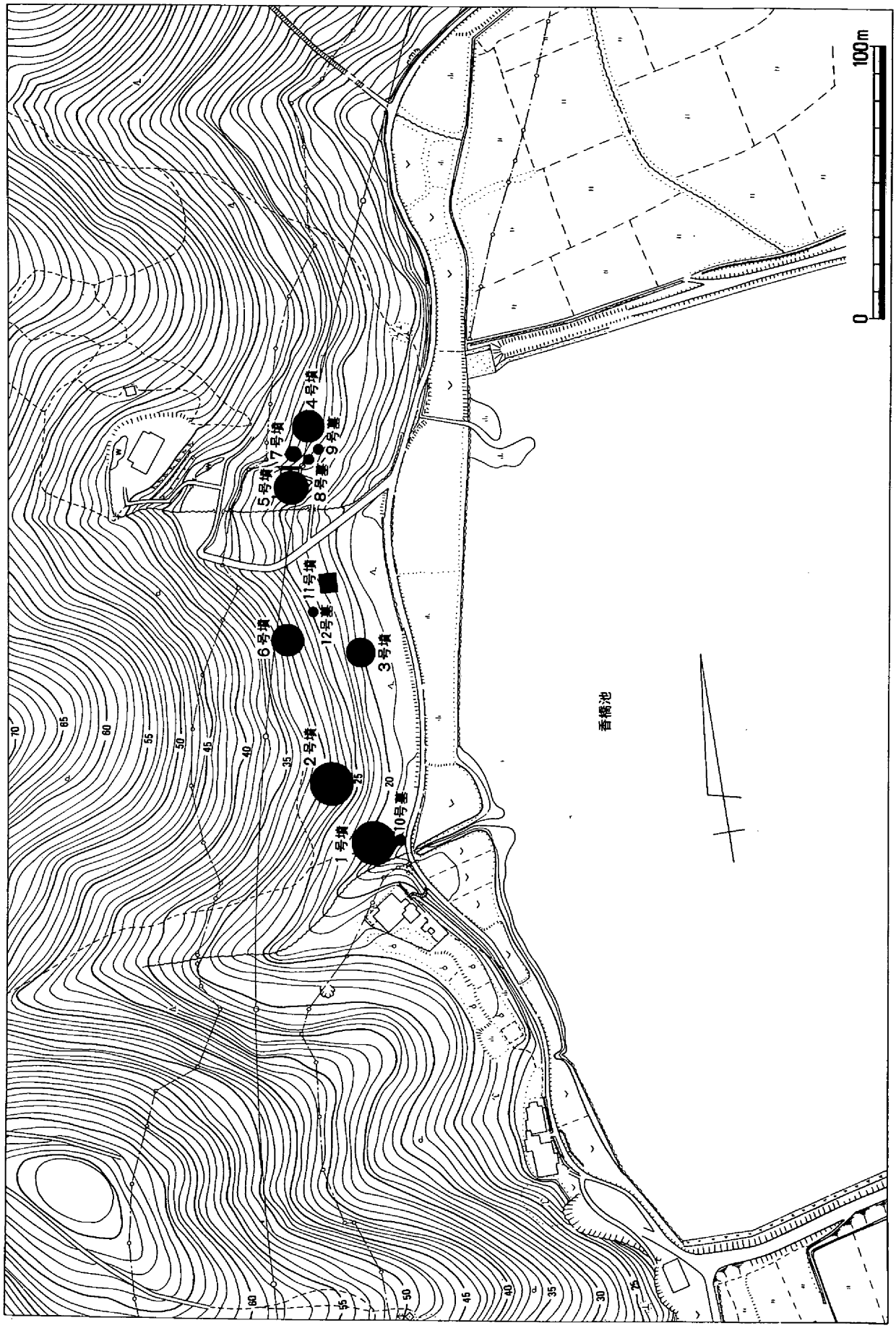
西山古墳群の所在する地点へ足を踏み入れてみると、雑木が生い茂って身動きができない場所や、別荘として使われていた家が壊されて家財道具が散乱した部分などがあって、調査対象の各古墳を確認するのは極めて困難であった。やっと各古墳を発見したものの、このような状態では発掘調査を実施することができないので、まず下草や雑木を作業員に刈り取ってもらい、各古墳周辺の大きな木は調査依頼者を通じて専門業者に切り倒してもらった。

古墳の周辺に存在した立木伐採作業が終了すると、古墳が所在した周辺の地形が明らかになり、調査の対象になった4基の古墳以外にも古墳の墳丘と推定される高まりが新しく発見され、別荘の庭に使われている石にも古墳の石室に用いていた石材と考えられるものがあったため、一般国道53号（岡山北バイパス）路線の広い範囲にわたって綿密な分布調査を行った。しかも1号墳から4号墳が確認されている周辺については、先行して専門業者に路線内全体の立木伐採作業をしてもらい、未知の古墳や墳墓の所在確認に努力した。

別荘の庭にトレンチを設定して確認調査を行ったところ、横穴式石室を埋葬施設とする古墳を検出したため、「5号墳」とした。3号墳の西側に位置する地形の高い部分に、古墳の墳丘ではないかと思われる高まりが認められたから、トレンチによる確認調査を実施したところ、竪穴式石室の埋葬施設と版築状を呈する墳丘の盛土を検出したため、「6号墳」とした。また4号墳と5号墳の中間地点では、小規模な墳丘を有する箱式石棺を検出したので、「7号墳」とした。この4号墳と5号墳の周辺には別の古墳が存在する可能性が考えられたため、全面調査を行ったところ2基の埋葬施設を検出したので、「8号墓」と「9号墓」にした。1号墳の発掘調査によって東側の地点に1基の埋葬施設を発見したので、「10号墓」とした。3号墳と5号墳の中間地点に浅い窪地が存在したから、トレンチを設定して確認調査を行ったところ、竪穴式石室の埋葬施設を検出したので、「11号墳」とした。3号墳から11号墳にかけての部分は、須恵器片や弥生土器片が散布していたこともあって、全面調査を行った。その結果、4点の須恵器が伴う土壙墓を検出したので、「12号墓」とした。

西山古墳群の発掘調査は、当初横穴式石室を埋葬施設とする4基の古墳を調査対象として1992年11月1日から1993年3月31日までの期間が予定されていたが、このように新しく8基の古墳や墳墓が発見されたため、1993年7月31日まで調査期間が延長されたのである。

なお『岡山市埋蔵文化財分布地図』によると、路線内に片山1号墳と2号墳が記載されていたが、トレンチによる確認調査を行ったところ、どちらも自然の高まりで古墳ではないことが判明した。

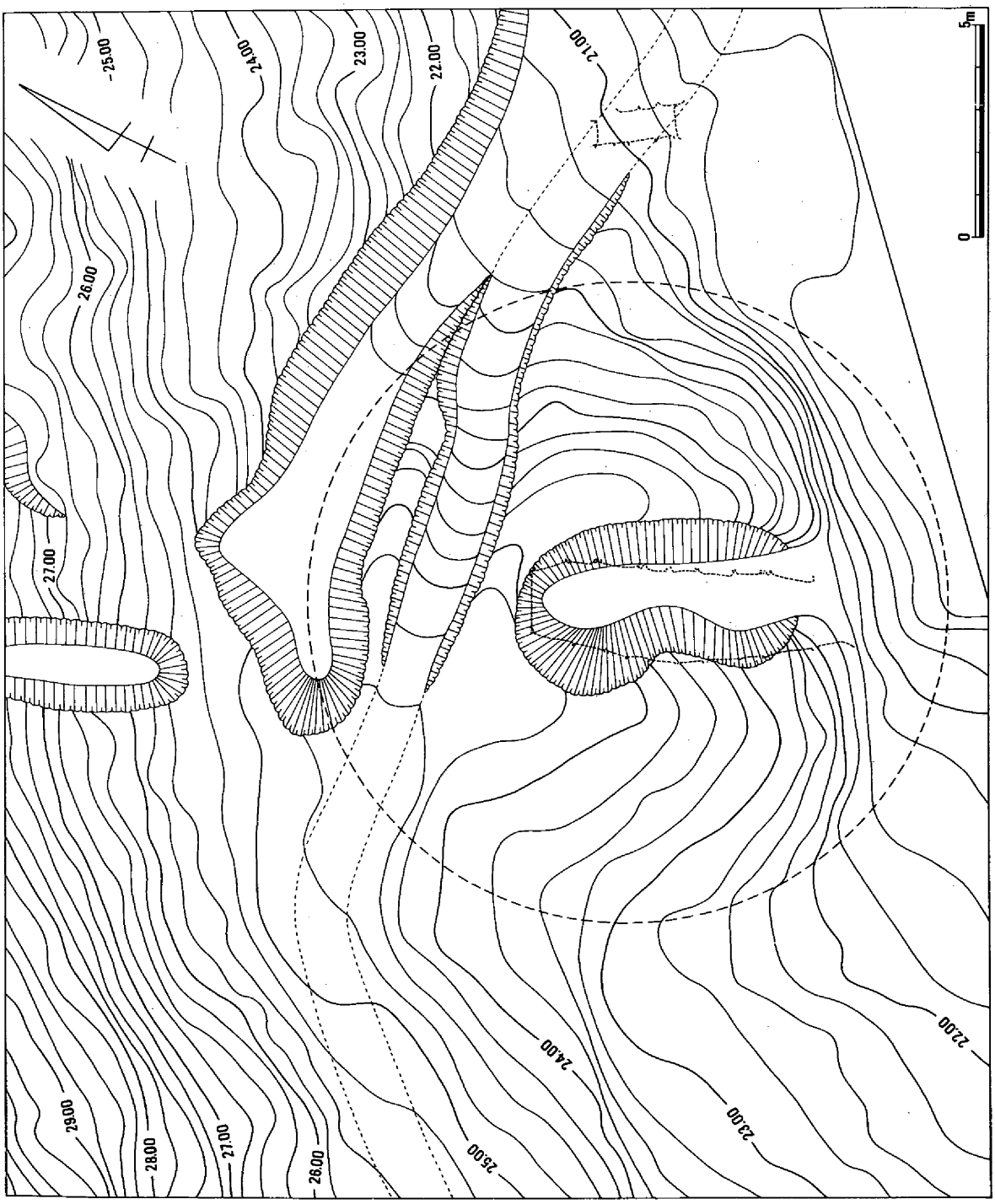


第1図　西山古墳群全体図（1/2,000）

第２節　調査の概要

1)　各古墳および墳墓と出土遺物

『岡山市埋蔵文化財分布地図』によると、西山古墳群の各古墳はどの古墳が１号墳であるのか明記されていないため、路線内に所在して調査対象になっているもので、南側に位置する古墳から北側へ向かって、１号墳から４号墳にした。続いて新しく発見したものを、５号墳から12号墓に命名した。

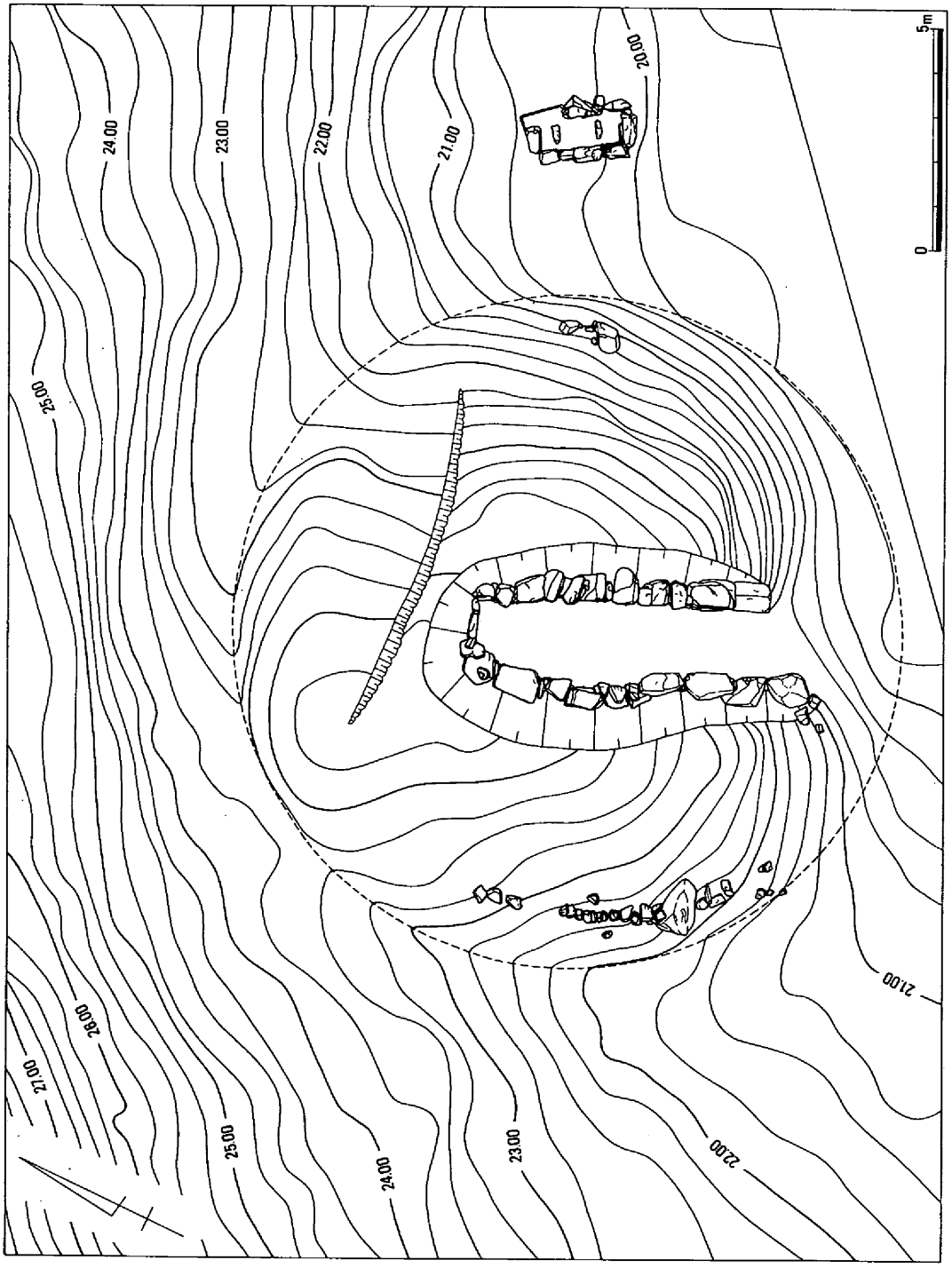


第２図　１号墳・10号墓調査前周辺地形測量図（1/150）

(1)　1号墳

調査前の状況（第2図）

1号墳が所在したのは谷地形の底部付近で、埋葬施設である横穴式石室前面の南側には、香橋池に流入する小川が存在した。墳丘の北側には、西方向の山林に通じる小道が認められ、墳丘盛土の一部を削平していた。また地形の高い北側の墳端部分は、溝状に細長く掘り窪められて、産業廃棄物が埋められていた。墳丘の中央部は、隅丸長方形に陥没しており、横穴式石室の壁面が確認できた。その底部には、壁面に使われていたと推定される石材が散在し、扁平で大きな天井石も転落していた。



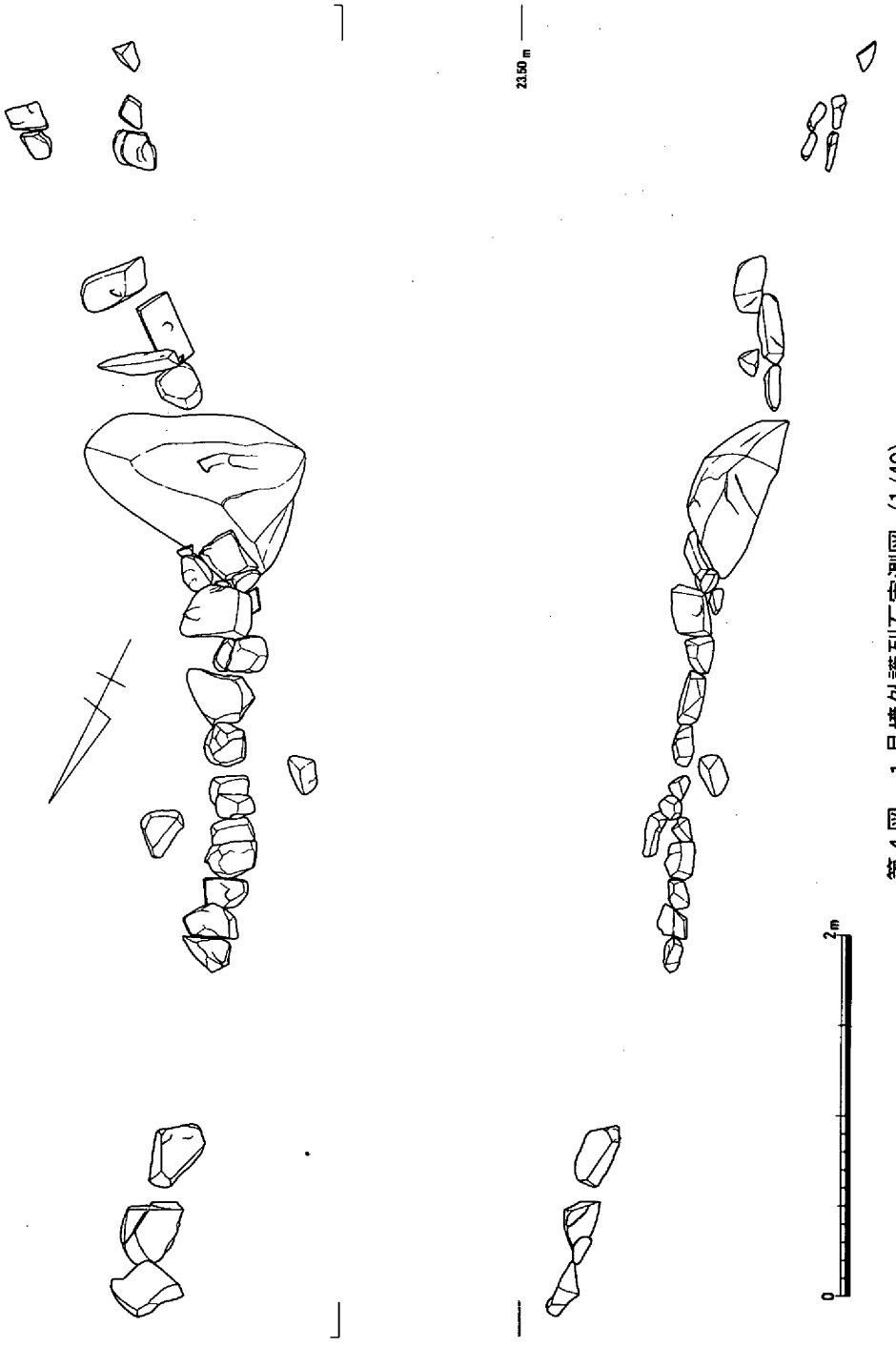
第3図　1号墳・10号墓調査後周辺地形測量図（1/150）

墳丘と周溝（第３・６図、図版17—３・18—３）

１号墳の墳丘は、北側地点が山林に通じる小道によって部分的に削平されていたものの、比較的良好な状態で築造された当時の形態を保持していた。埋葬施設の横穴式石室は、地山を削平した平坦な面に築造されていたため、地形の高い奥壁北側の一部分を除いて、墳丘には大量の土砂が盛り上げられていた。奥壁の裏側は、下位部分が横方向に縞模様の版築状を呈する黄褐色土と暗黄灰褐色土を交互に積み重ね、上位部分に灰黄褐色土や黒褐色土が認められた。両側壁の裏側の下位には、黒黄褐色土、暗黄灰褐色土、黒褐色土が水平に存在し、部分的には暗褐色を呈する旧表土も確認された。中間部分には横方向に縞模様を呈する黄灰褐色土や黄褐色土などが積み上げられ、東側では帯状の灰褐色土も認められた。上位には灰黄褐色土の上面に広い範囲にわたって暗黄褐色土が存在し、墳丘表面の形態を整えていた。

この１号墳の墳丘は、直径約15mの円墳である。残存する墳丘の高さについては、地形の高い北側の墳端から測ると約1.20m、石室入口の床面からでは約3.20mになっていた。

１号墳の周溝については、地形の高い北側から東西両方向にかけて、馬蹄形の状態に検出された。この周溝は地山面を掘り窪めたもので、検出面での幅は奥壁に面した部分が最も狭く、断面形は浅い「U」字形を呈していた。



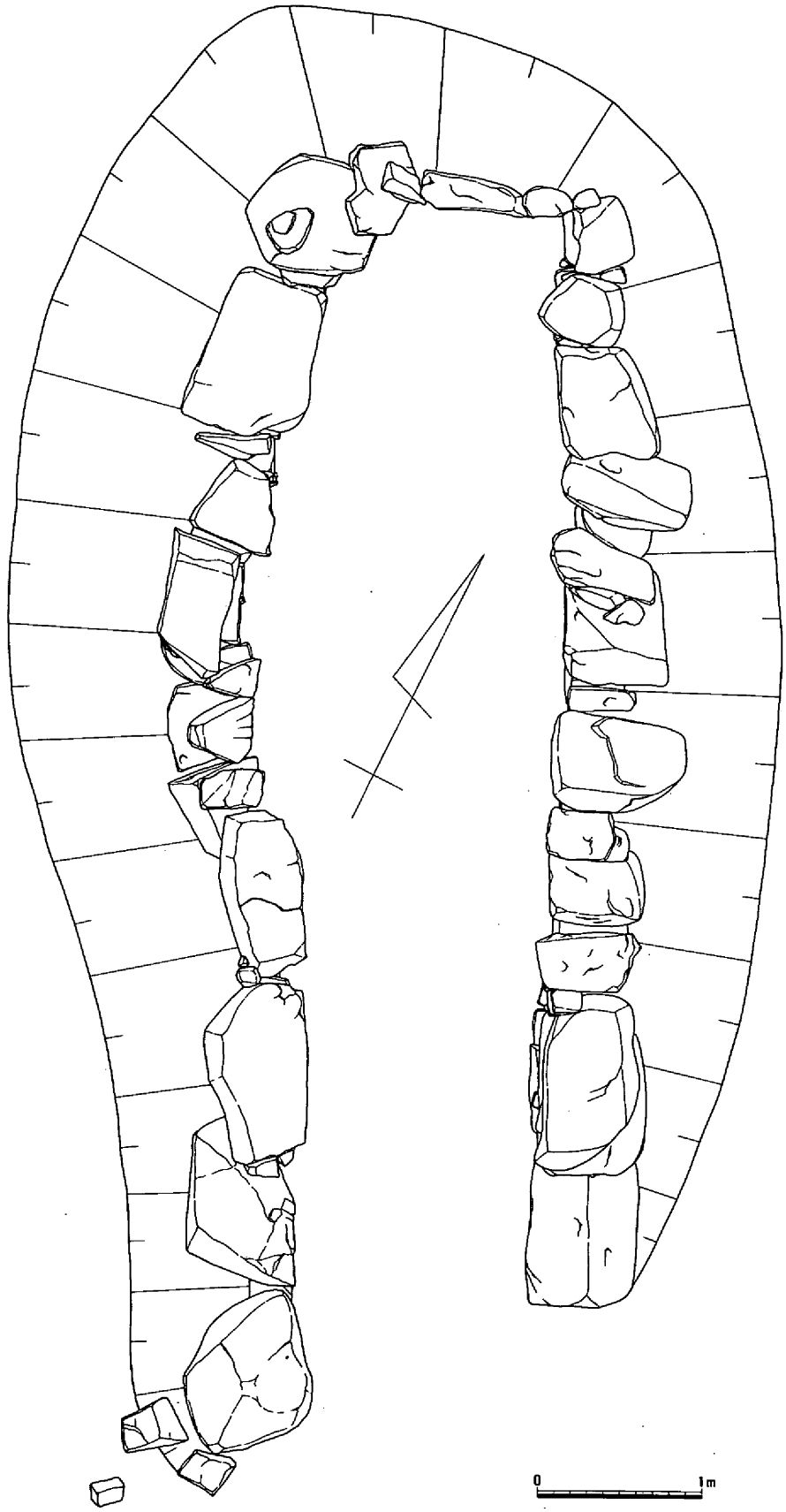
第４図　１号墳外護列石実測図（1/40）

外護列石（第3・4図、図版17－3）

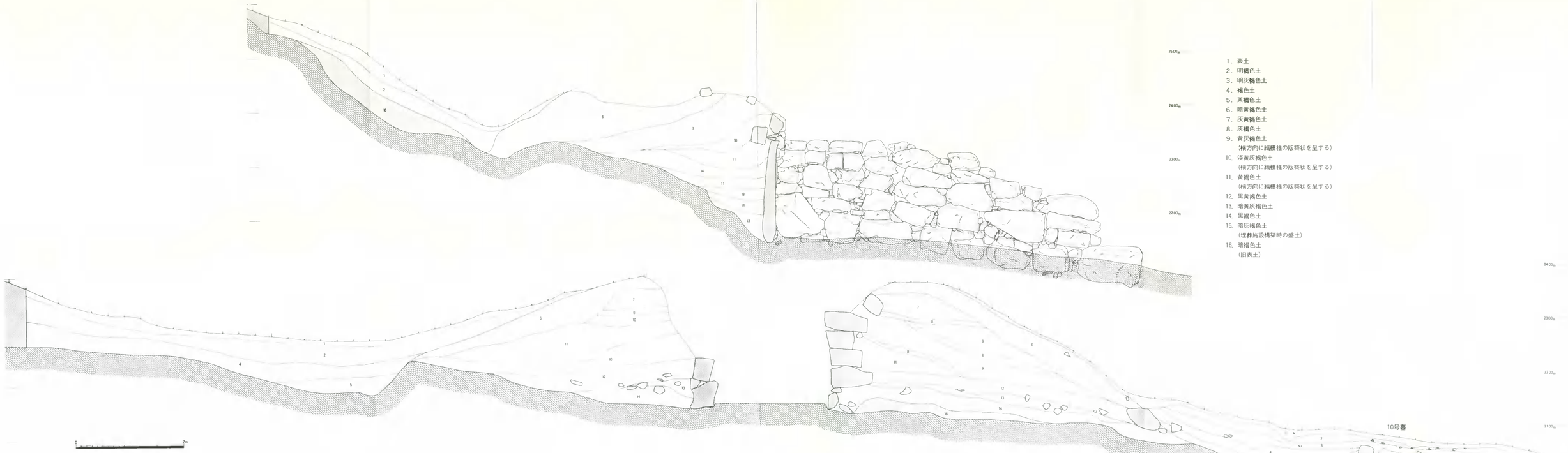
1号墳の墳丘裾部には、人工的に石を並べて置いたと考えられる外護列石が存在した。墳丘の東側と西側に認められたが、地形の高い北側や石室入口に面した南側には検出できなかった。

東側には大小4個の石が残存しただけで、この古墳が築造された当時からこの状態であったのか、墳丘の盛土が流出して本来は存在していた多くの石が後世に崩壊してしまったのか、把握することができなかった。

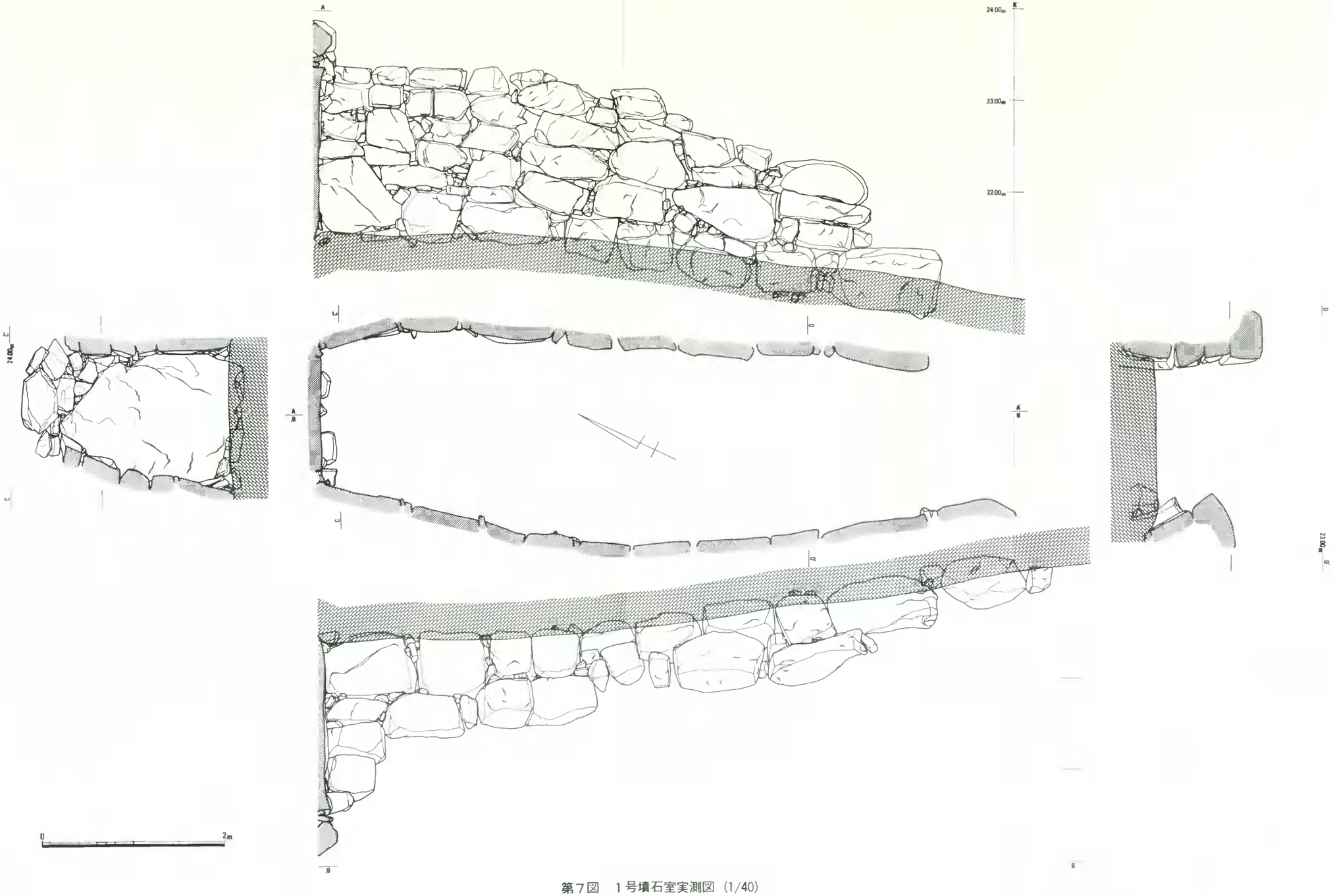
西側に面した墳丘裾部には、約30個の石が墳端に沿って曲線を描いた状態で存在した。部分的には石が転落して残存しない所や、石そのものが築造当時の位置から移動しているものも認められた。ほとんどの石はほぼ人頭大の大きさであったけれども、やや石室入口に近い部分には大規模なものも存在した。これらの外護列石は、古墳が立地した地形に沿うように、南方向へ緩やかに傾斜していた。



第5図　1号墳石室上面実測図（1/40）



第６図　１号墳墳丘土層断面（1/40）



第７図　１号墳石室実測図（1/40）

埋葬施設（第6～8図、図版17—4・18—1・18—2）

この1号墳の埋葬施設は、無袖の横穴式石室である。

右側壁の壁面は、奥壁に接する部分を除いて、基底部の石またはその上位の2段目までの石がわずかに残存していただけで、著しく崩壊していた。また残存状態が比較的良好な左側壁も、石室入口部分の基底部やその上位の石が存在しなかった。このような状態であったから、残存する天井石は1枚もなく、築造された当時の様相をうかがい知ることができなかった。

この石室の奥壁底部には、石室内の表面が高さ約1.90m・底部径約1.20mの角が取れた将棋の駒に似ている厚みのない1枚の板石を据え、両側壁との間に生じた空間には、小規模な石を詰めていた。この大きな石の石室内に面した底部には、板状を呈する4個の小さな石材を詰め込み、内側に倒れないようにしていた。天井石に接する上位部分は、比較的小さな石を2段から5段に積み上げていたものの、上位の中央に大きな石が存在するため、不安定な状況を呈していた。

残存状態が比較的良好な左側壁は、奥壁に接する基底部に石室内の表面が台形を呈する大きな石を据え、床面との空間に長方形の小さな石を詰めていた。この奥壁に接する基底部の石より南側の石室入口にかけて、基底部に大きな石が7個だけ残存したが、これらはいずれも石室内の表面が長方形を呈する横口の状態に置かれ、石室入口から奥壁の方向に向かって順番に据えられていた。この石室が築造された当時には、左側壁の石室入口の基底部に少なくとも1個以上の石が存在したと思われた。2段目の石は、奥壁に接して据えられた基底部の石の高さに、石を積み上げることによって生じる横方向の目地が揃うように並べていたが、奥壁に近い部分で目地のラインが乱れていた。3段目から上位の範囲は、上方へ移行するにしたがって使われている石の規模が小さくなり、横方向を示す目地のラインが直線的に通らなくて多くの石が無造作に積み上げられた状態が認められ、いかにも不安定な様相を呈していた。また奥壁から約1.50mも石室入口方向に寄った位置の左側壁は、基底部から天井石に接する部分まで石積みによる縦方向を示す直線的な目地のラインが看取でき、その地点の壁面全体がわずかに屈曲していた。

残存状態が極めて悪い右側壁は、前述した左側壁とは異なり、基底部の石を据える順序が違っていた。すなわち奥壁に接するものから石室入口に向かって存在する4個の石は、奥壁側から順番に並べられていたが、それより南側の石室入口に面した6個の石は、逆に石室入口側から奥壁方向に据えられていた。しかも前者の4個の石は立てた状態になっていたが、後者の6個の石はいずれも横口の状態に置かれていた。この石を据える方法が相違した境界地点で石室内の幅が最大になり、壁面全体が緩やかに弧を描いて湾曲していた。基底部より上位の石がほとんど残存しないが、左側壁と同様に上方へ移行するにしたがって使われた石の規模が小さくなるようである。また壁面に石を積み上げることによって生じる横方向の目地は、基底部と2段目である程度は直線的なラインが存在するものの、さらにその上方については複雑になって石積みの状態が不安定であったと推定される。

奥壁に近い位置で石室の断面を観察すると、左右両側壁とも緩やかに内傾して立ち上がる「持ち送り」の形態になっていた。また左側壁の基底部のラインはほぼ直線的になっていたが、右側壁のそれは中央部が極端に湾曲して幅が広くなる「胴張り」の様相を呈していた。さらに地山を掘り窪めただけの床面は、奥壁と石室入口の部分で約80cmもの高低差があり、入口に向かって急傾斜していた。

1号墳の埋葬施設である横穴式石室の計測値は、全長7.50m・奥壁幅1.40m・石室最大幅2.10m・石室入口幅約1.20mを測り、床面から天井石までの高さは、奥壁部分で約2.30mになるであろう。

遺物出土状況（第８図、巻頭図版１－１）

１号墳の埋葬施設である横穴式石室は、天井石が１枚も存在しなかっただけでなく、右側壁は奥壁に接する部分を除いて、わずかに基底部の石が残存していただけであった。

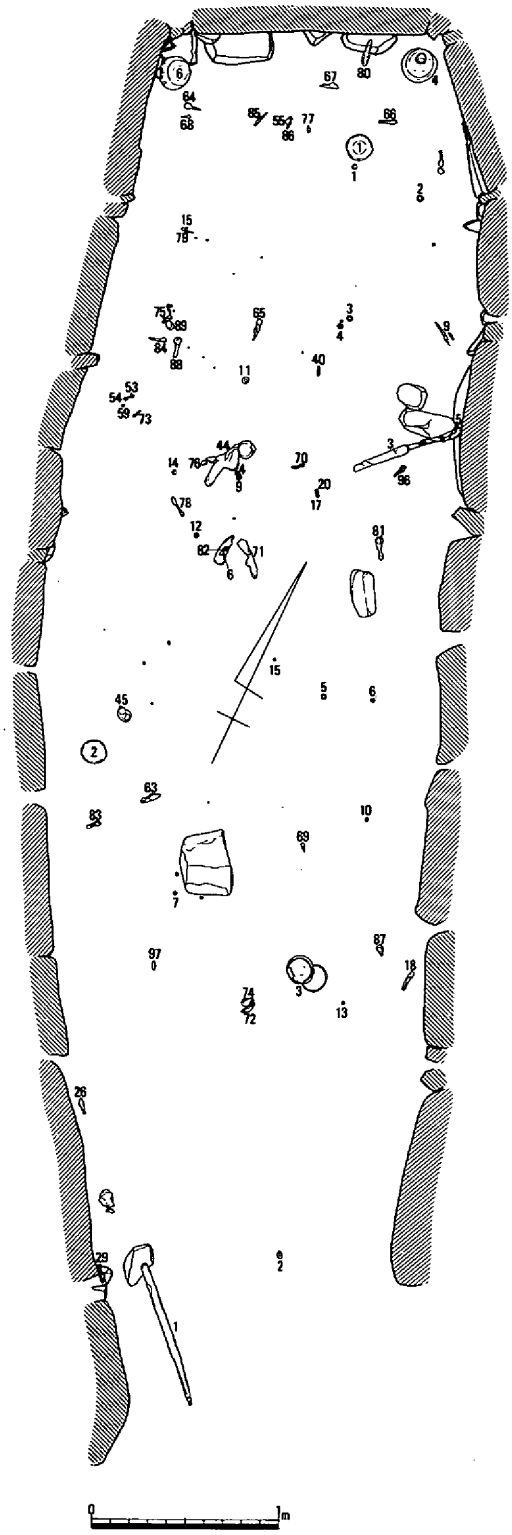
石室内に転落していた側壁の石や天井石をチェーン・ブロックを使って取り出し、石室内に堆積していた土砂をフルイにかけて遺物の検出作業を行ったところ、比較的多くの鉄器片に混在して須恵器の破片も出土した。木棺痕跡を把握しようと思い、石室内に土層断面を観察する畦を残して作業を進めた結果、２個の耳環が近くに並んで出土した左側壁に近接した地点の一部分は、埋葬された当時の土砂の堆積状況を残していたが、それ以外の広い範囲については、追葬が行われて副葬されていた遺物を片付けたり後世に二次的な撹乱が加えられたりして、堆積した土砂の層序が乱れていた。このようなことから、石室内に遺骸とともに副葬されて当時の位置から移動していない遺物は、極めて少ないと考えられた。

なお鉄器のうち鏃と釘は、石室内のあらゆる地点からくまなく出土したが、欠損しているものが多かった。２振の大刀は、奥壁に近い左側壁に接する地点と、右側壁に沿った石室入口付近から出土した。馬具については、石室のほぼ中央部からまとまって出土した。

装身具の耳環は15点も副葬されていたが、石室内の広い範囲から片寄ることなく分散して出土した。１体の埋葬された遺骸に２個の耳環が着装されていたと単純に計算するならば、この１号墳の石室内には少なくとも８体以上の遺骸が存在していたことになる。

このように考えるならば、石室内から出土した土器は杯身２点・平瓶２点・提瓶１点の合計５点だけで、８体以上の遺骸が埋葬されていたと仮定すると、後述する２号墳や３号墳などと比較しても、あまりにも量的に少ない。おそらく多くの土器が、石室内から持ち出されたのであろう。

その他に特筆すべき遺物として、石室の入口付近から採集された多量の鉄滓がある。



第８図　１号墳遺物出土状況（1/40）

出土遺物

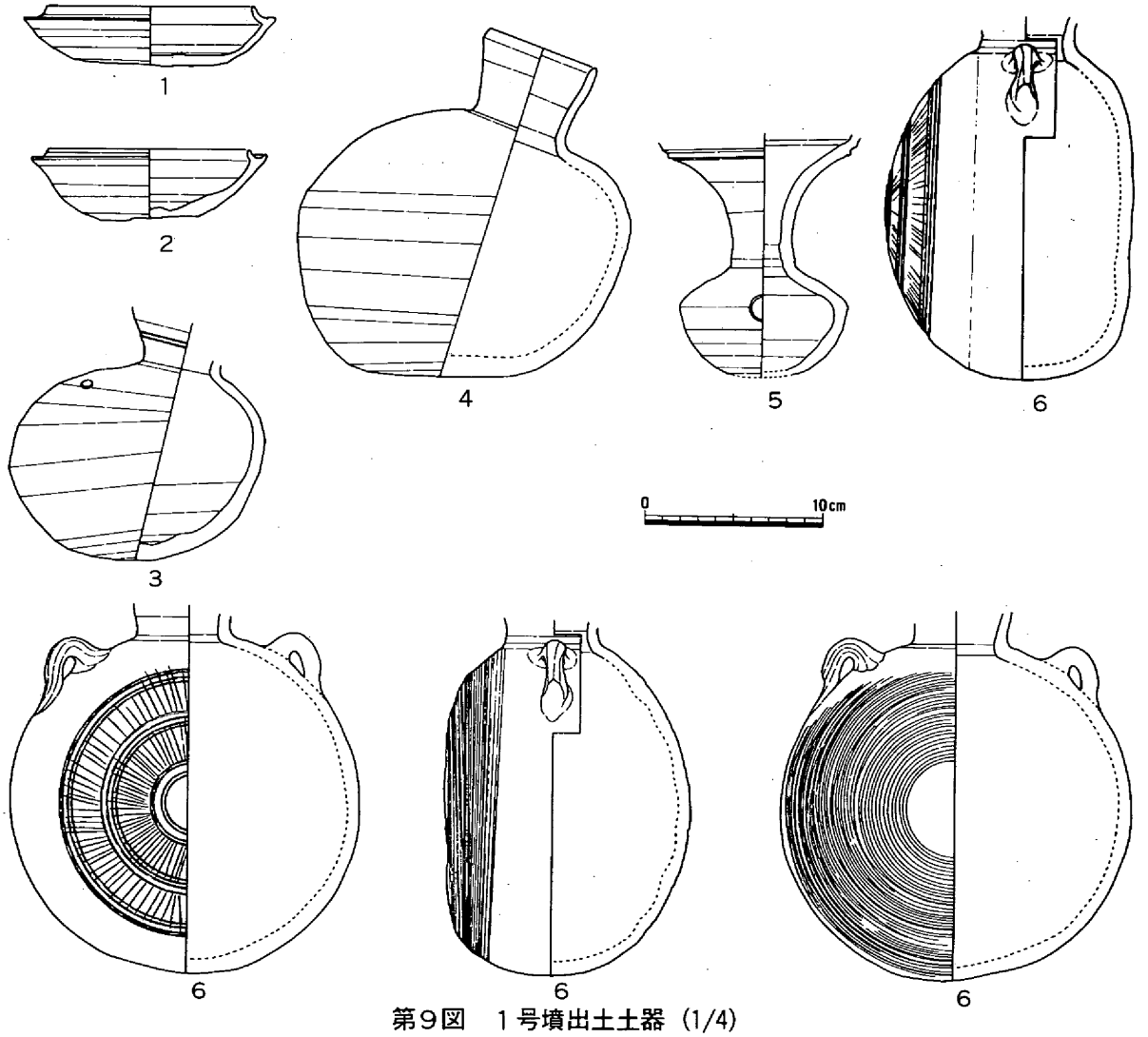
須恵器（第９図、図版32）

杯身　２点の杯身は、奥壁に面した地点と石室中央部の右側壁に近い所から出土した。前者（１）は口径11.7cm・器高3.4cmで、口径に比して器高が低く、口縁端部は丸く仕上げている。外面底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、内面底部に仕上げナデを加えている。後者（２）は口径11.5cm・器高4.1cmで、口縁端部は内傾して短く立ち上がり、外面底部はヘラ切り未調整である。外面に自然釉が、内面底部に有機物が付着している。

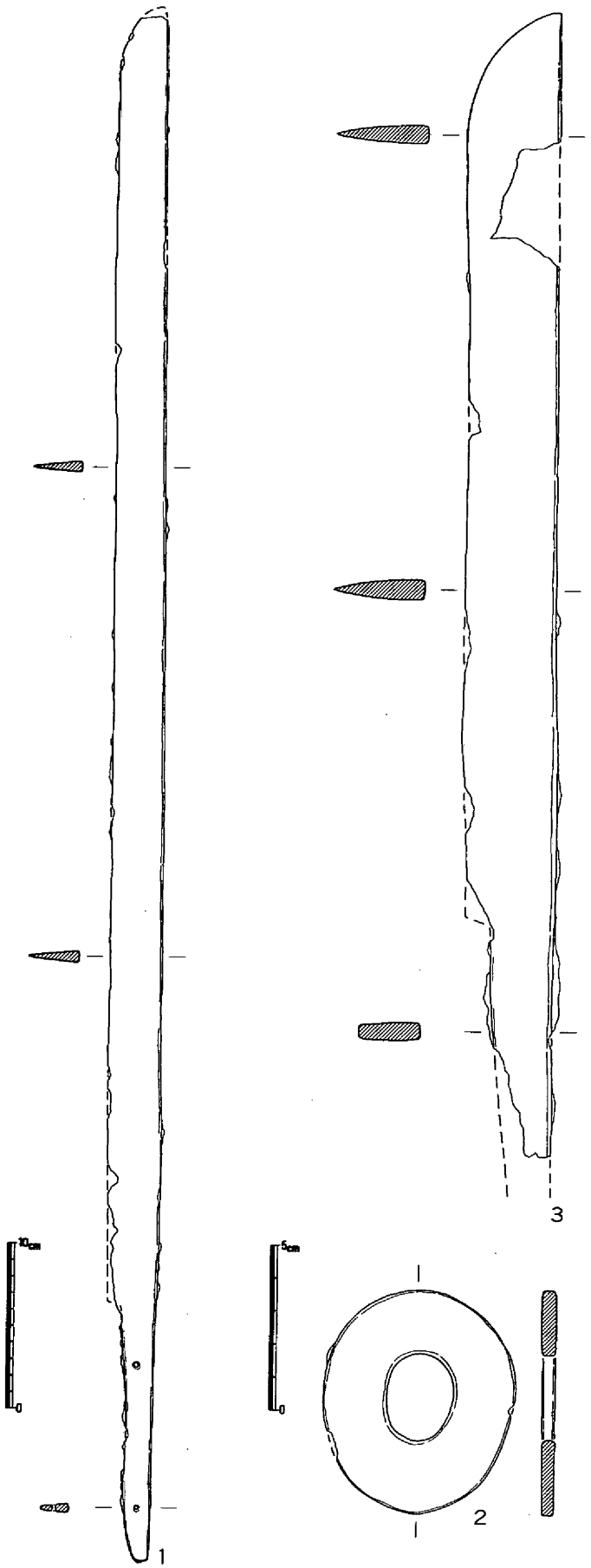
平瓶　小形のもの（３）と大形のもの（４）がある。前者は肩部に２個の円板が存在し、後者は口径6.7～7.0cm・器高19.5cm・胴部径18.5cmの完形品である。どちらも外面底部はヘラケズリを行い、外面の口縁部から体部にかけてと内面全体はヨコナデを施している。

甕　胴部径9.5cm・頸部径3.7cmで口縁部と底部を欠損した甕（５）は、10号墓に近い東側の墳端から出土した。外面底部はヘラケズリを行い、それ以外の部分は全体にヨコナデを施している。

提瓶　奥壁と右側壁が接する隅の部分から出土した提瓶（６）は、鉤形の耳を有し、最大径19.6cm・最大厚13.9cmで口縁部を欠損している。外面胴部の正面には同心円に交差する放射線状の文様を美しく描き、背面にはカキメが認められ、その中間部分はヨコナデを施している。



第９図　１号墳出土土器（1/4）



第10図　１号墳出土鉄器（１）(1/4, 1/2)

鉄器（第10～15図、図版44～48）

大刀　１の大刀は、推定全長94.5cm・推定刀身長79.5cm・茎長15.0cmである。関部分を欠損するが、片側のみに段を有するものと考えられる。刀身最大幅3.3cm・茎最大幅2.1cmで、茎尻は若干細くなり、直線的に切り落とされた形態をなしている。茎には２か所に目釘穴が認められる。

鍔　２の鍔は、１の大刀に付属する。平面形は楕円形を呈し、長径6.8cm・短径5.9cmを測り、透しは認められない。

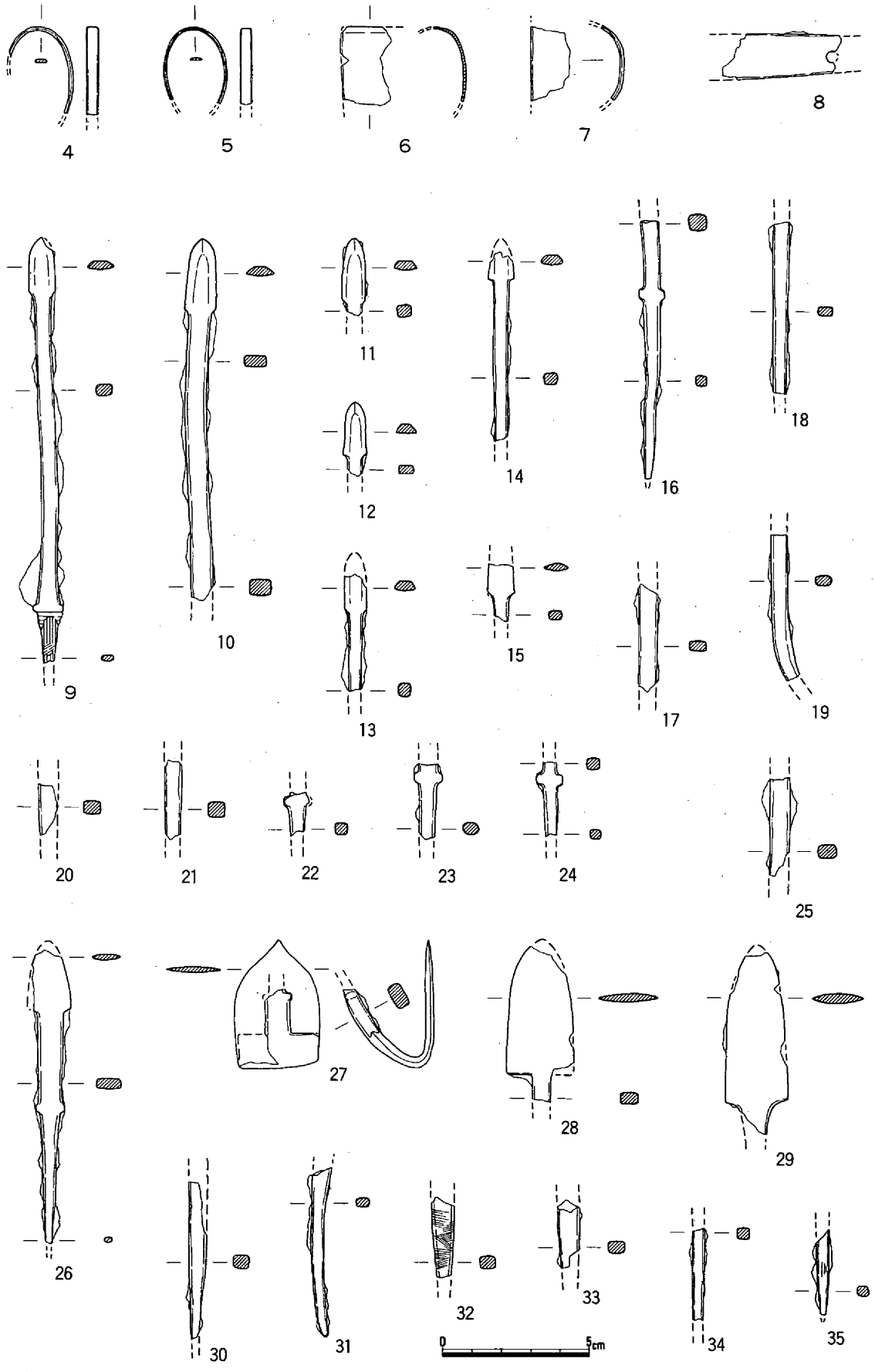
刀　３は推定刀身長28.0cmの小形の刀である。刀身が１尺に満たないから、日本刀の分類では刀子となる。刀身最大幅2.8cm・茎幅1.9cmで、茎は欠損している。

責金具　４と５は金銅製の責金具である。径が小さいので、１の大刀に付属するとは考えにくい。

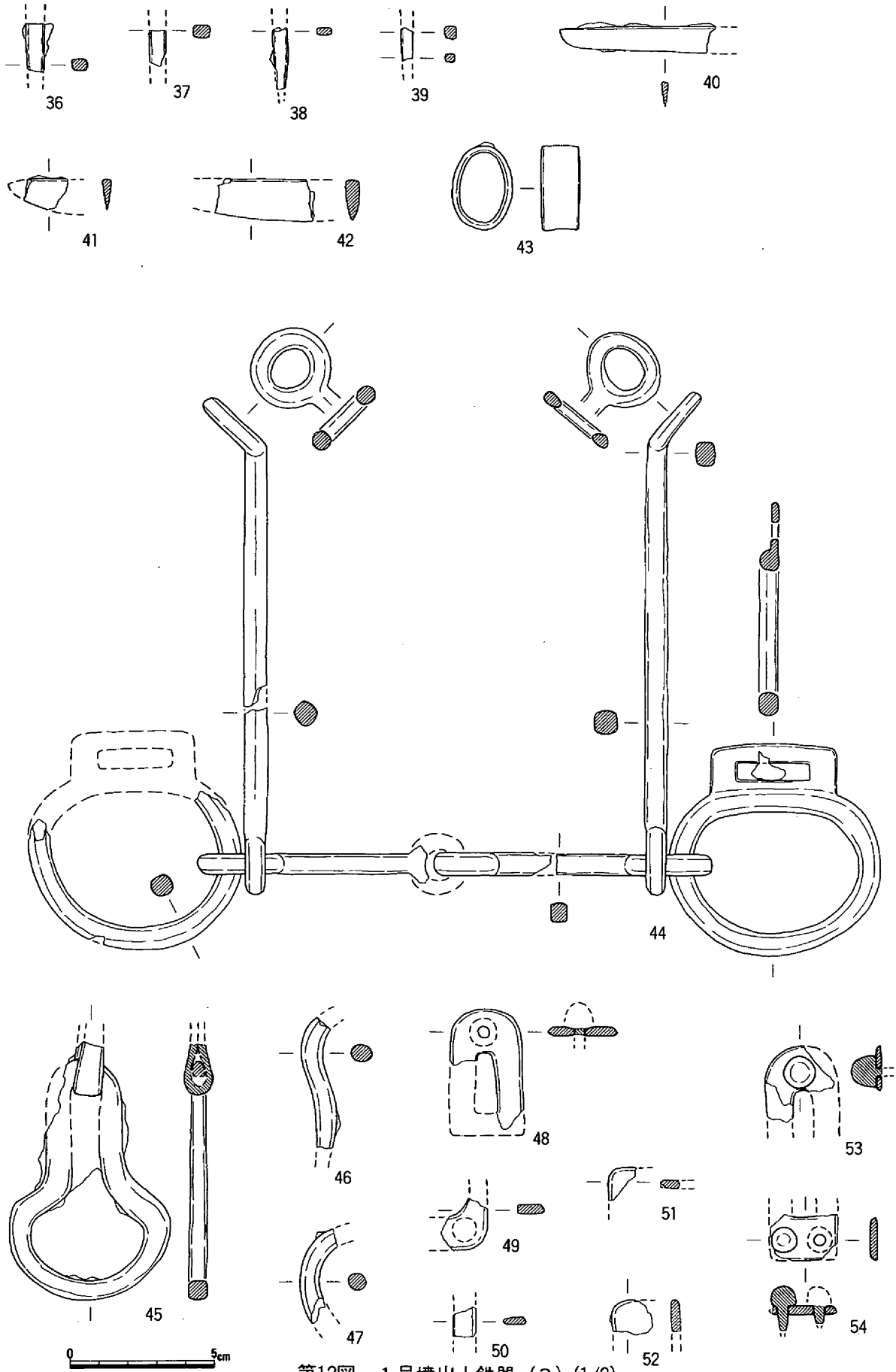
鞘金具　６と７は鉄製の鞘金具である。いずれも破片となっているが、鞘口あるいは鞘尻の金具であろう。

茎　８は刀または刀子の茎と思われる。錆による剝離が著しく、１か所だけ目釘穴と推定される部分がある。

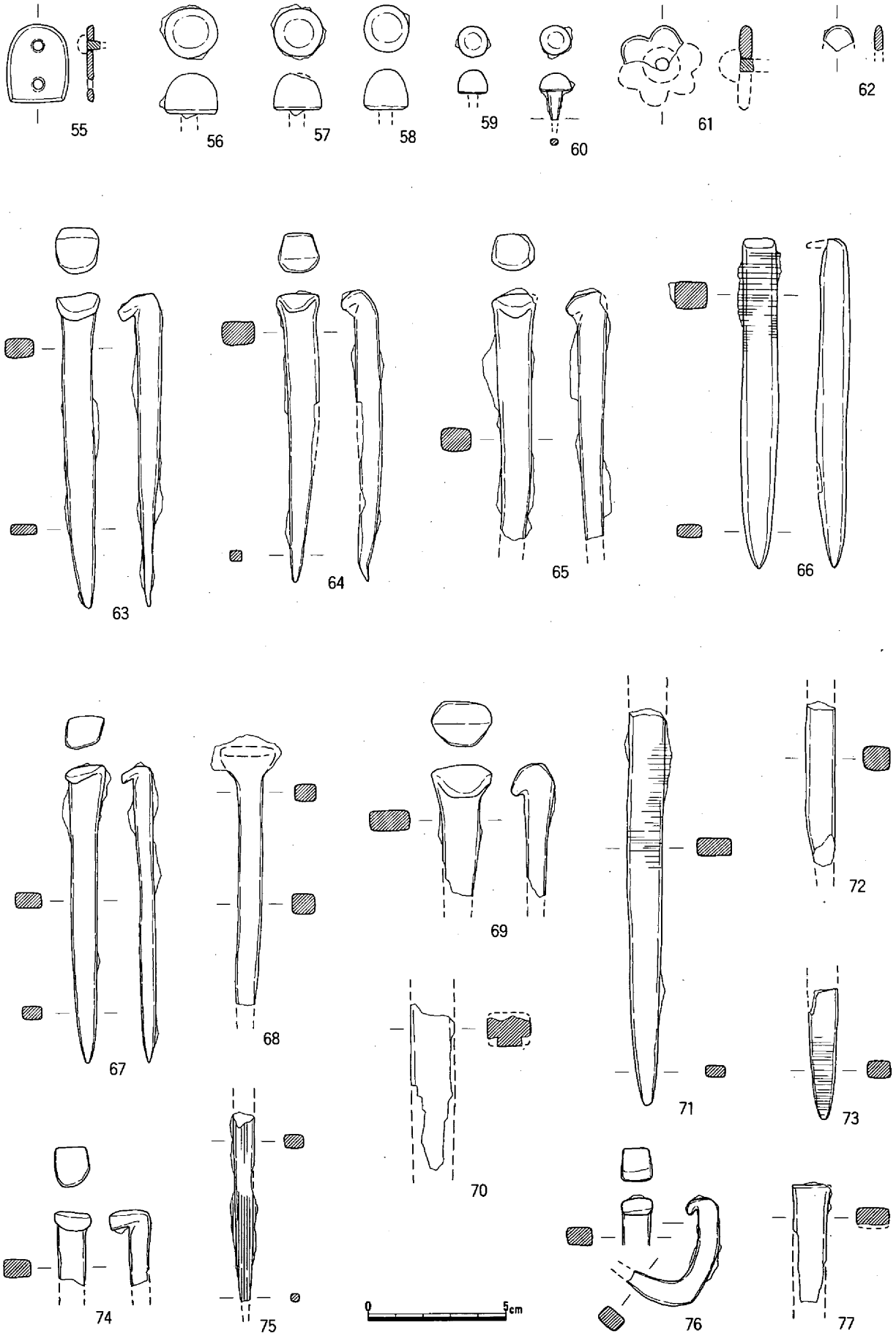
鉄鏃　９～39は鉄鏃で、４種類に分けられる。１類（９～15）は長頸の柳葉式鉄鏃である。鏃身の造りは片切刃造であるが、15は不明である。篦被関には棘状突起を有している。16～25はこれらの鉄鏃の頸部から茎の破片である。２類（26）は短頸の尖根式鉄鏃である。鏃身は柳葉形の両丸造で、断面形はレンズ形を呈している。篦被関には棘状突起を有する。３類（27・28）は平根の長三角形式鉄鏃である。27の方が28よりやや大きい鏃身部を持っている。27は篦被関に棘状突起を有している。27は鏃身部の途中で大きく折り曲げられている。４類（29）は平根の柳葉式鉄鏃である。鏃身関



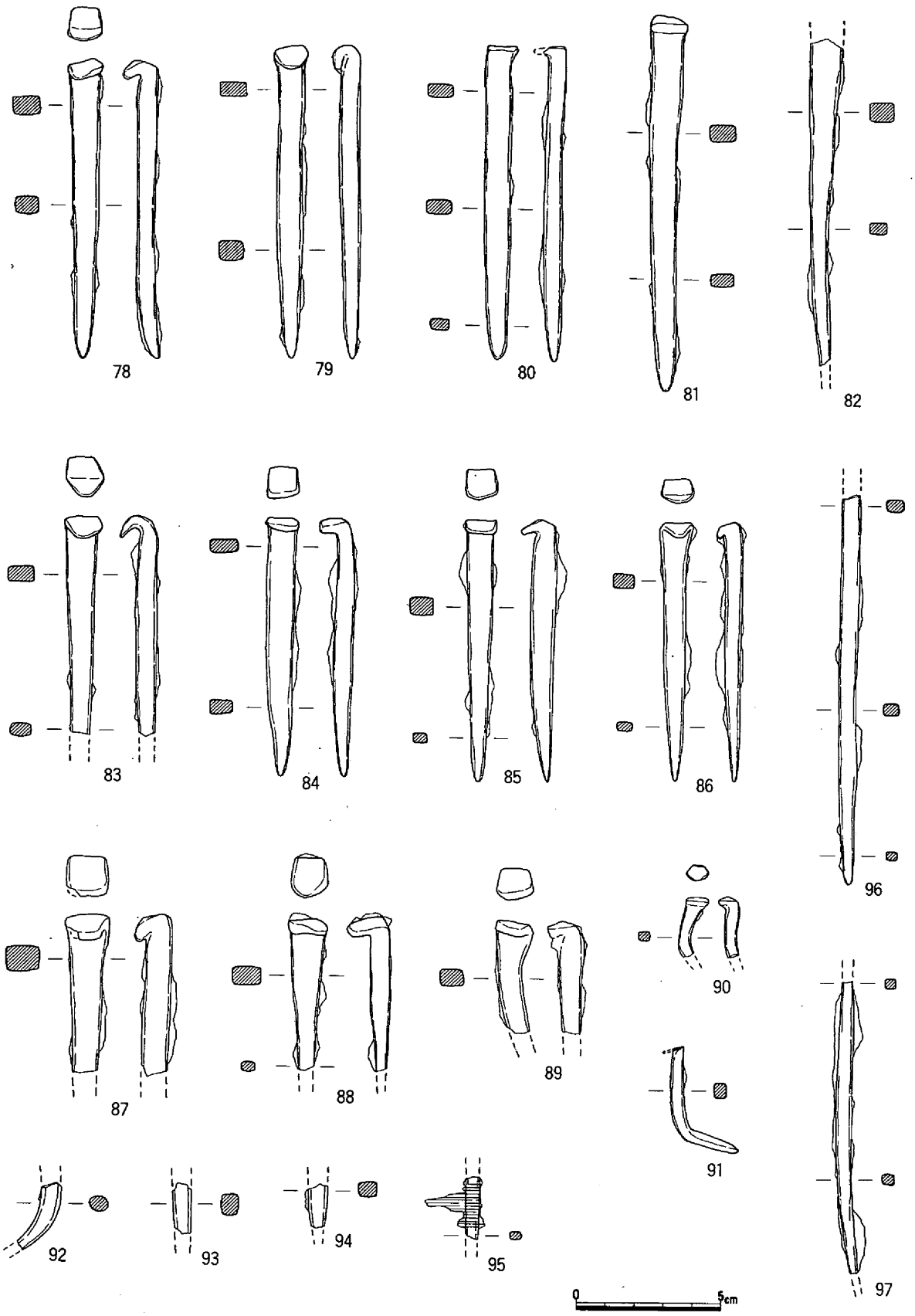
第11図　１号墳出土鉄器（２）(1/2)



第12図　1号墳出土鉄器（3）(1/2)



第13図　１号墳出土鉄器（４）(1/2)



第14図　１号墳出土鉄器（５）(1/2)

は内湾する弧を描いて、緩やかに頸部へ移行する。30～39はどの型式の鉄鏃のものか不明であるが、いずれも茎の破片である。32には糸巻きの痕跡が存在し、35には木質が認められる。

刀子　40～42は刀子の破片で、少くとも２個体がある。40は非常に細身のものである。

鎚　43は刀子に付属していたと思われる鎚で、楕円形を呈している。

44～62は**馬具**である。

轡　44の轡は、環状の鏡板を持つ円環轡である。鏡板には方形の立聞がついている。右側の鏡板で幅7.5cm・高さ7.5cmを測る。引手と銜は直接に連結され、銜の端環に鏡板と引手を同時に連結している。引手は先端を「く」字状に折り曲げ、引手壺を形成している。右側の引手長は17.7cmである。

鞍　45の鞍は、先端を環状にした形態のもので、刺金はない。基部には細い鉄帯を曲げた脚がついている。鞍は１点しか出土していない。

鉸具　46と47は鉸具であるが、わずかな部分の破片である。

留金具　48～55は留金具で、いずれも鉄地金銅貼である。やや長い爪形を呈するもので、裏面には革が付着している。48～54は中央に透し穴を有し、３か所に鋲を打って固定するものである。鋲の頭部は鉄地金銅貼である。55は48～54に比べてやや小形である。透し穴はなく、２か所の鋲で固定するようになっている。

鋲　56～60は鋲で、頭部は鉄地金銅貼になっている。留金具類に付属していたものと思われる。大形のもの（56～58）と小形のもの（59・60）がある。

花弁形飾金具　61と62は花弁形飾金具で、鉄地金銅貼になっている。61には中央に鋲が打たれていた痕跡が認められる。

鉄釘　63～95の鉄釘は、いずれも頭部を打ちのばし、「L」字形に折り曲げて形成している。頭部の形状は不整形なものが多いが、概して方形を呈している。これらの鉄釘には、縦位または横位の木目を残すものが認められる。76は釘自体が大きく曲がっており、90～95は非常に小形のものである。

不明鉄器　96～101は不明鉄器である。

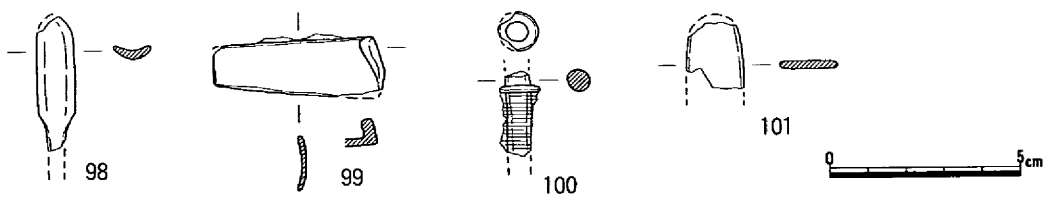
96と97は非常に細長い鉄器で、先端は釘のように尖っている。釘の一種であろうか。

98は不明確だが、鉋と思われる。鎌身形の身部はスプーン状に湾曲している。ただし、刃部は明瞭ではない。

99は方形を呈する鉄板の一端を「L」字形に折り曲げている。折り曲げた部分は鎌の基部にも似ており、鎌のミニチュア品であろうか。いずれの辺にも刃はつけられていない。

100は断面が円形の鉄棒を木質に打ち込んでいるらしく、横位の木目が顕著に残る。一部に小さい円盤状のものがつけられており、そこを境にして上側には木質が付着していない。座金の役割を果たす円盤であろう。

101は薄い帯状の鉄器で、上端は丸く終るようである。刀子の茎とも考えられるが、やや薄い。



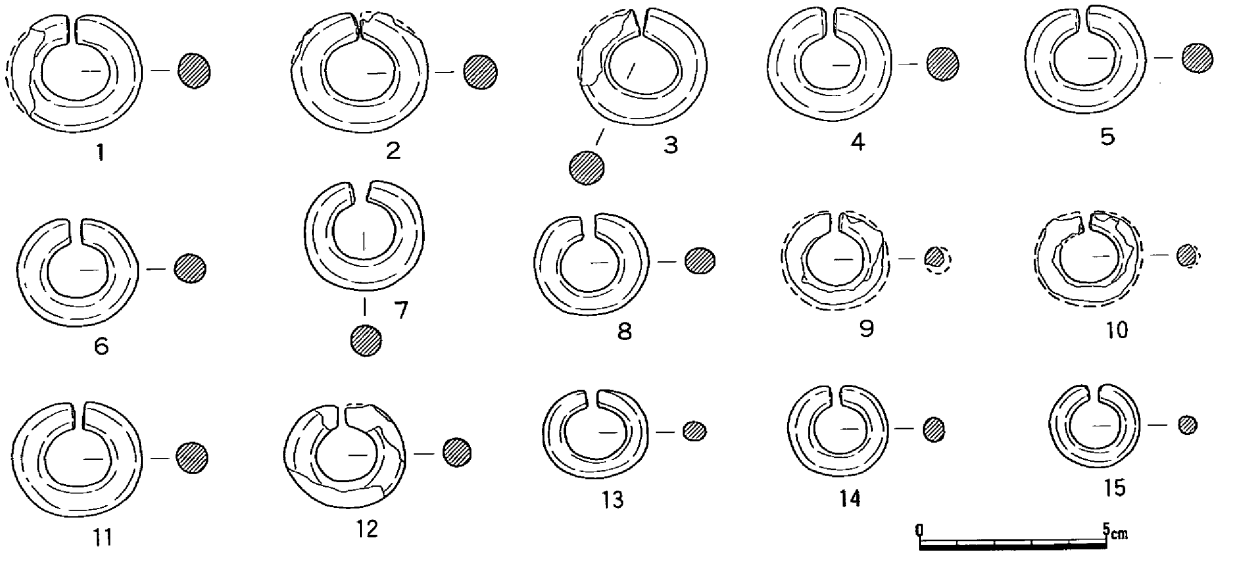
第15図　１号墳出土鉄器（６）(1/2)

装身具（第16・17図、図版38・43－2）

耳環　1号墳から出土した15点の耳環は、石室の入口付近を除く広い範囲から土器や鉄器に混在して出土したが、遺骸とともに石室内へ副葬された当時の位置から動いていないと推定されるものもあったが、繰り返し追葬が行われたために場所を移動していると考えられるものも存在した。

これらの耳環は、石室内で出土した位置と全体の形態や重さなどから、1と2、3と4、5と6、7と8、9と10がセットになると判断でき、11～15は精査したにもかかわらず片方を見つけることができなかった。遺骸の両耳に耳環を着装して埋葬されたと考えるならば、この1号墳の横穴式石室には少なくとも10体は入れられていたことになる。

1は外径3.14～3.42cm・内径1.53～1.73cm・断面径0.88～0.95cm・切れ目幅0.9mm・重さ31.21ｇを測り、銅地銀貼であるが、表面の銀箔は著しく剝離している。2は外径3.17～3.59cm・内径1.60～1.84cm・断面形0.88～0.91cm・切れ目幅0.9mm・重さ30.67ｇを測り、銅地銀貼で、表面の銀箔は約半分の面積が剝離している。3と4も前述した1と2に酷似しているが、全体の形態が2点ともわずかに小さくなっている。5と6は銅地銀貼の耳環で、表面の銀箔の残存状態は極めて良好である。5は外径2.89～3.18cm・内径1.42～1.68cm・断面径0.75～0.78cm・切れ目幅1.5mm・重さ20.68ｇを測る。6は外径2.84～3.16cm・内径1.42～1.66cm・断面径0.74～0.80cm・切れ目幅1.9mm・重さ21.60ｇを測る。7と8も前述した1と2や3と4に酷似しているが、どちらも表面の銀箔が今にも剝離するような状態で、全体の規模もより小さくなっている。9は外径2.38～2.59cm・内径1.38～1.52cm・断面径0.52～0.53cm・切れ目幅1.6mm・重さ9.62ｇを測り、金銅製で、表面全体の金箔残存状態は悪い。10は外径2.32～2.61cm・内径1.36～1.55cm・断面径0.47～0.59cm・切れ目幅1.9mm・重さ9.20ｇを測り、前述した9と同様に金銅製で、表面全体の金箔残存状態は悪い。11は外径3.09～3.38cm・内径1.51～1.75cm・断面径0.81～0.84cm・切れ目幅1.8mm・重さ31.40ｇを測り、銅地銀貼で表面の銀箔残存状態は極めて良好である。12も銅地銀貼の耳環であるが、表面の銀箔の残存状態は悪く、外径2.64～3.07cm・内径1.44～1.61cm・断面径0.72～0.73cm・切れ目幅1.7mm・重さ16.49ｇを測る。13は外径2.20～2.83cm・内径1.20～1.68cm・断面径0.50～0.58cm・切れ目幅2.2mm・重さ8.94ｇを測り、金銅製であ



第16図　1号墳出土耳環（1/2）

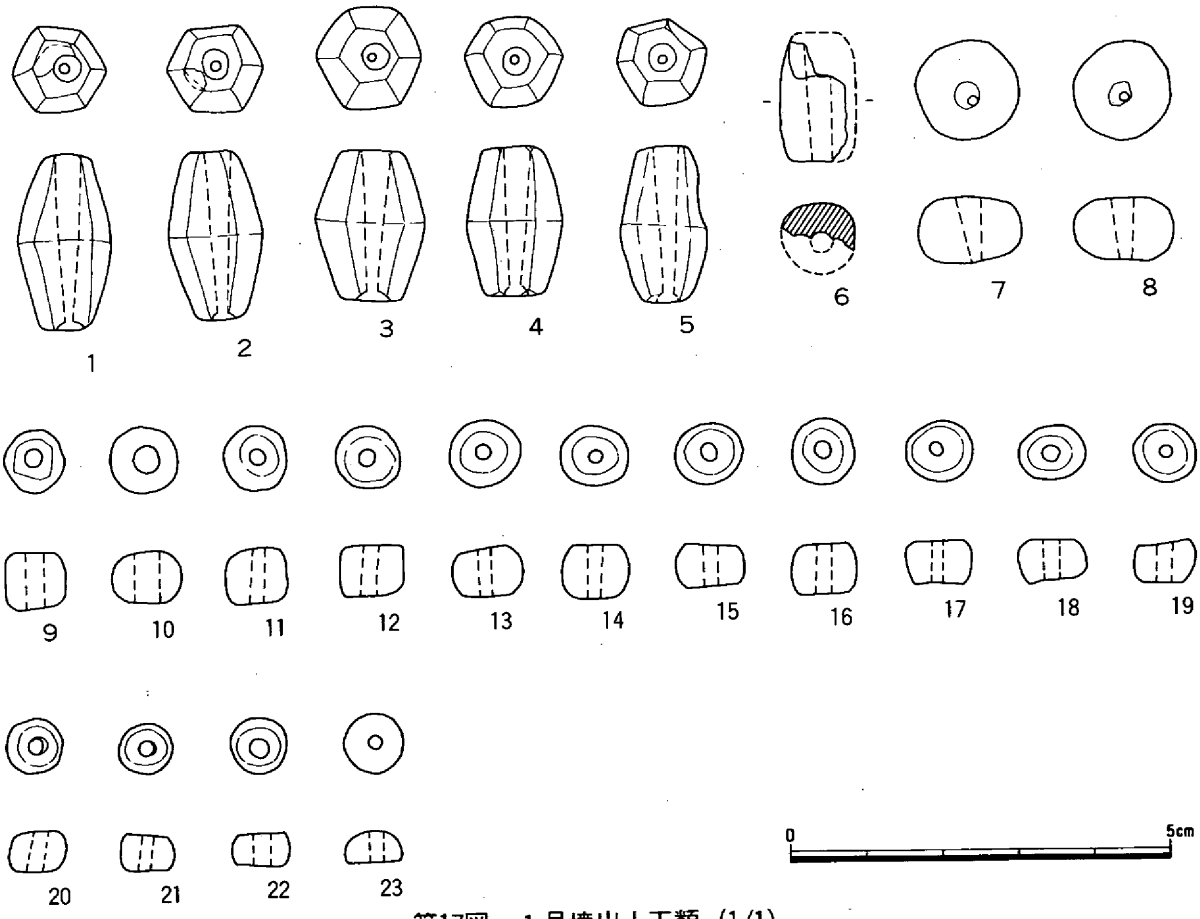
り、表面の金箔は著しく剝離している。14も金銅製と思われ、表面の金箔の残存状態が悪いが、外径2.40～2.69cm・内径1.27～1.48cm・断面径0.58～0.67cm・切れ目幅2.5mm・重さ8.03ｇを測る。15は外径2.18～2.38cm・内径1.21～1.37cm・断面径0.50～0.51cm・切れ目幅2.4mm・重さ7.47ｇを測るやや小形の耳環であるが、銅地銀貼で表面の銀箔は著しく剝離している。

玉類　１～５は切子玉である。材質はいずれも水晶で透明になっているが、表面が研磨によってやや白色を帯びるもの（２～３）も認められる。これらの切子玉はすべてが６面加工で、中央の円孔は片面穿孔が施され、反対側には若干の抉りが存在する。法量が最大である１の計測値は、長さ23.2mm・径12.5mm・孔径上3.5mm・下0.9mm・重さ4.14ｇである。大きさがほぼ中間である３の計測値は、長さ19.5mm・径14.5mm・孔径上3.0mm・下1.0mm・重さ4.97ｇである。出土した切子玉で法量が最小である５の計測値は、長さ20.0mm・径11.6mm・孔径上3.2mm・下1.1mm・重さ3.70ｇである。

６は材質が琥珀の棗玉であるが、約半分を欠損している。表面は黄褐色を呈し、破断面は赤褐色になっている。この棗玉の計測値は、径9.5mm・孔径下2.4mmである。

７と８は瑪瑙製の丸玉であるが、８の穿孔部分は欠損している。完形品の７は高さ8.1mm・径13.5mm・孔径上3.0mm・下1.2mm・重さ2.12ｇを測り、一部に褐色部分が認められるものの、全体が半透明で淡褐色を呈している。

９～23は群青色を呈するガラス製の小玉で、いずれも片面穿孔が施されている。９の計測値は、高さ7.7mm・径7.9mm・孔径1.8mm・重さ0.66ｇである。22の計測値は、高さ4.3mm・径7.3mm・孔径2.0mm・重さ0.34ｇを測る。

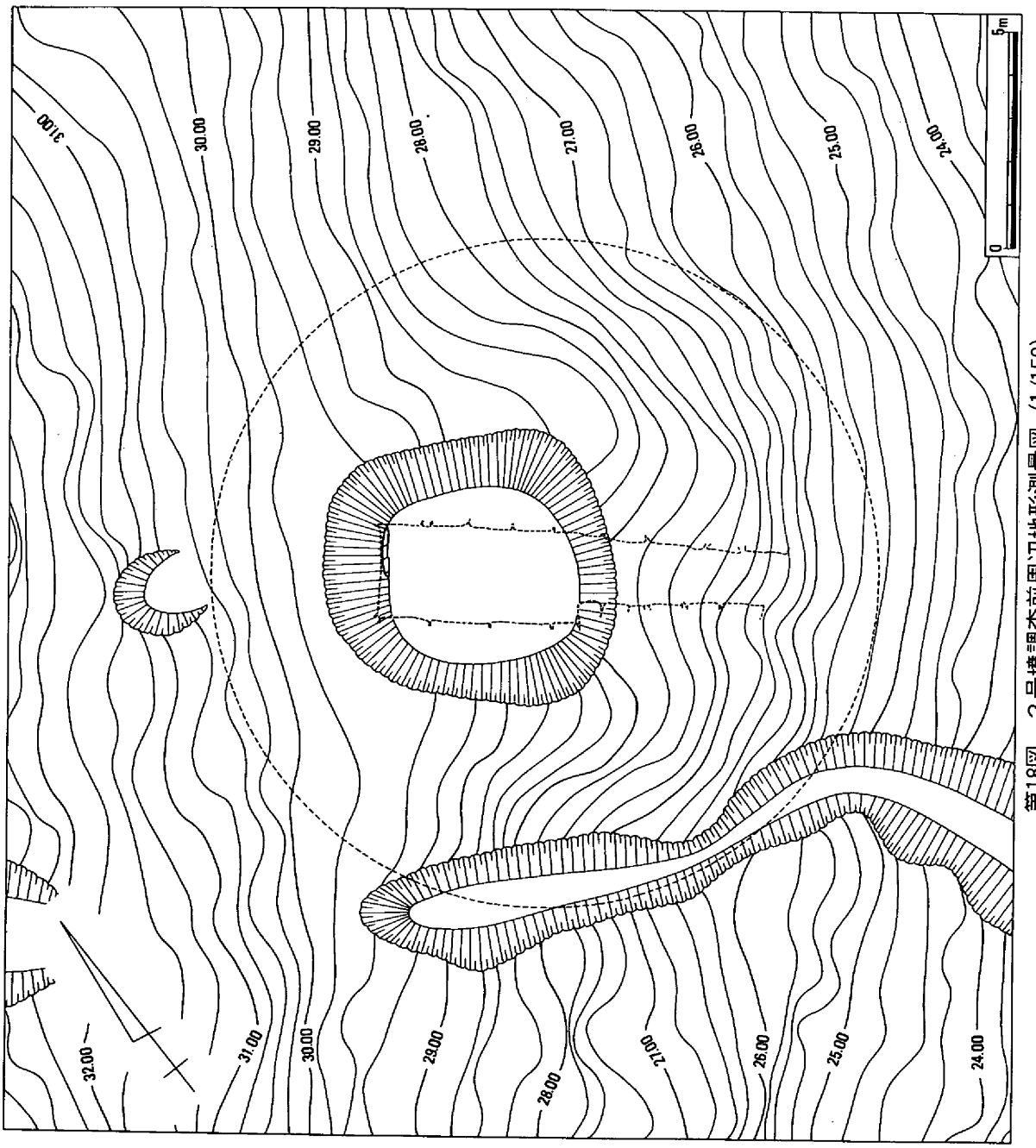


第17図　１号墳出土玉類（1/1）

(2)　２号墳

調査前の状況（第18図）

２号墳が所在した地点は、直線距離にして１号墳の北西方向約30ｍの所で、海抜高20ｍから24ｍを測る丘陵の斜面であった。埋葬施設である横穴式石室の前面には香橋池が存在し、そのさらに東側の遠方には横井上や栢谷の新興住宅地を望むことができた。この古墳の南側や西側の周辺には、自然の巨石が数多く露出しており、崩壊した古墳との識別が困難であった。南西側の墳端部分には、自然の雨水によって生じた溝状の深い筋が存在した。墳丘の中央部には擂鉢状を呈する大きくて深い穴が認められ、横穴式石室の壁面の一部を確認することができた。また石室内の底部には、壁面に使われていたと思われる石が散在し、扁平で幅の広い天井石も転落していた。



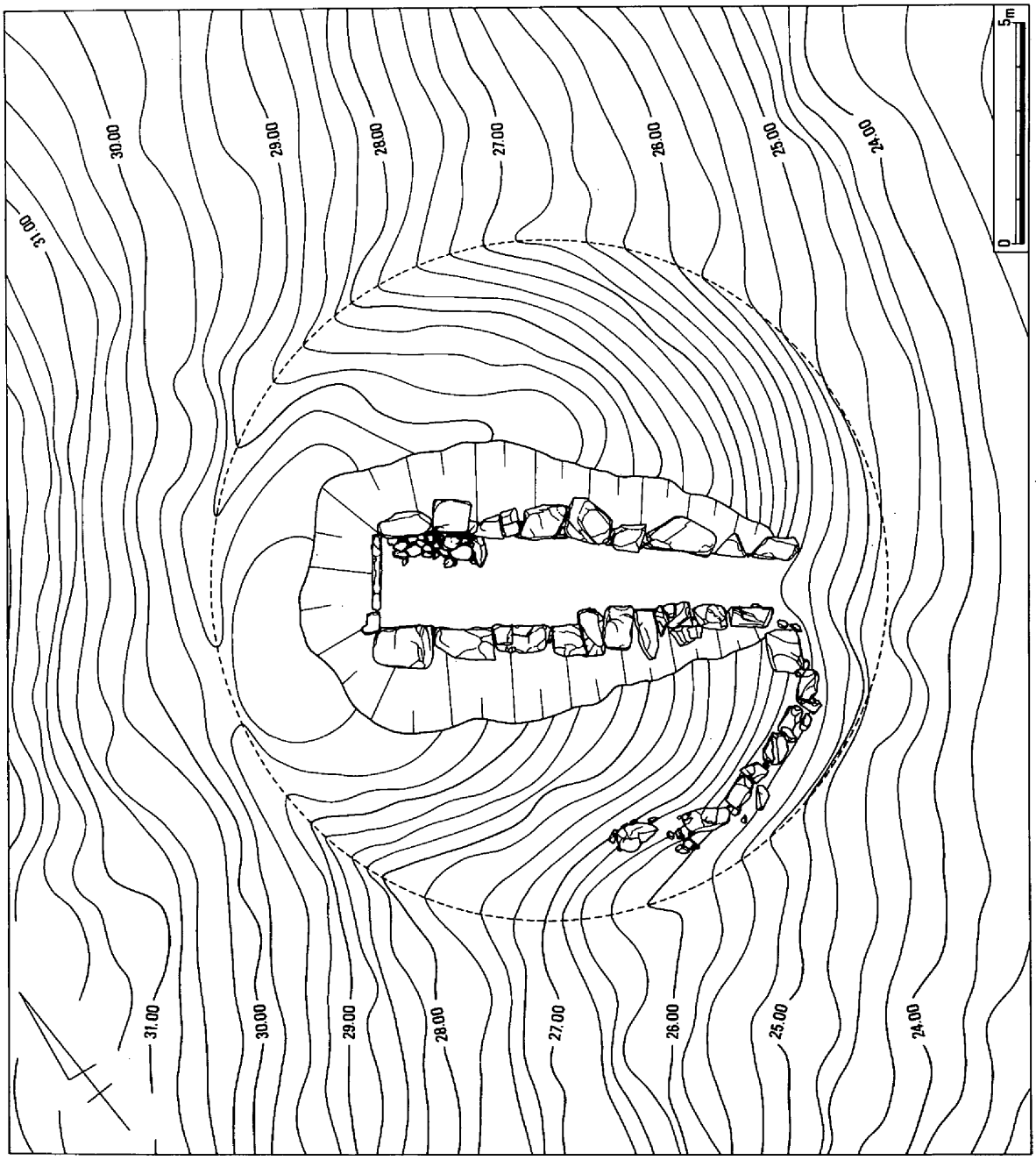
第18図　２号墳調査前周辺地形測量図（1/150）

墳丘と周溝（第19・22図、図版19－１・20－３）

２号墳の墳丘は、中央部に築造されていた横穴式石室が、基底部の石がわずかに残存するまでに著しく破壊されていたため、多量の盛土が流出して残存しなかった。またこの大規模な横穴式石室が急斜面に位置していたこともあって、奥壁部分は地山を大きく削平して平坦面を造成していたから、奥壁裏側の北西部分である墳丘には、自然の地山が広い範囲に残存し、盛土が極端に少なかった。

この２号墳の墳丘は、直径約15.50ｍの円墳である。残存する高さについては、地形の高い北西側の墳端から測ると約0.50ｍ、石室入口の床面からでは約4.00ｍになっていた。

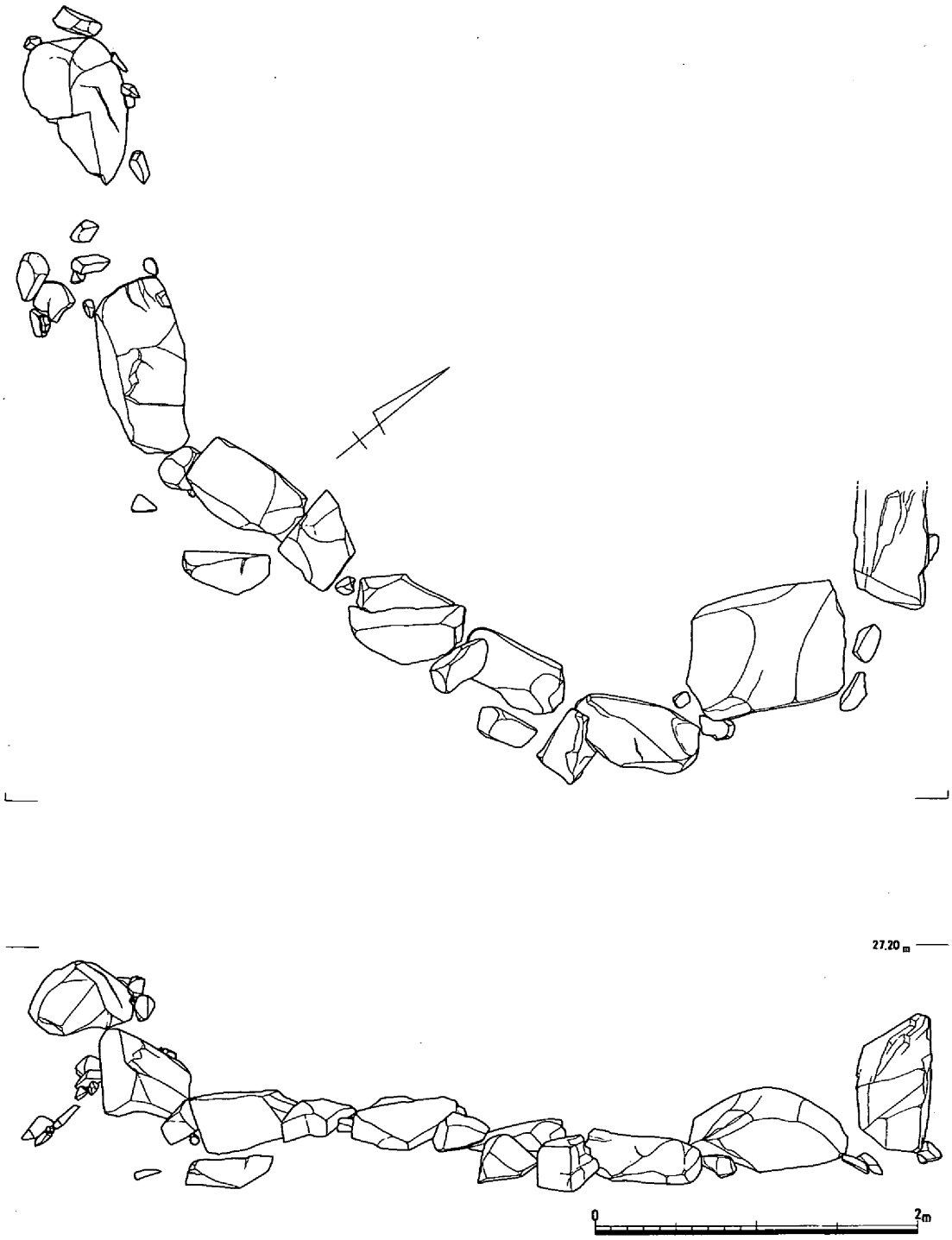
２号墳の周溝については、地形の高い北西側から北東や南西の方向にかけて、馬蹄形の状態に検出された。この周溝は地山面を掘り窪めたもので、検出面での幅は奥壁に面した北西部分が最も狭く、地形の低くなった北東や南西方向の石室入口に近い付近が広くなり、断面形は「Ｕ」字形であった。



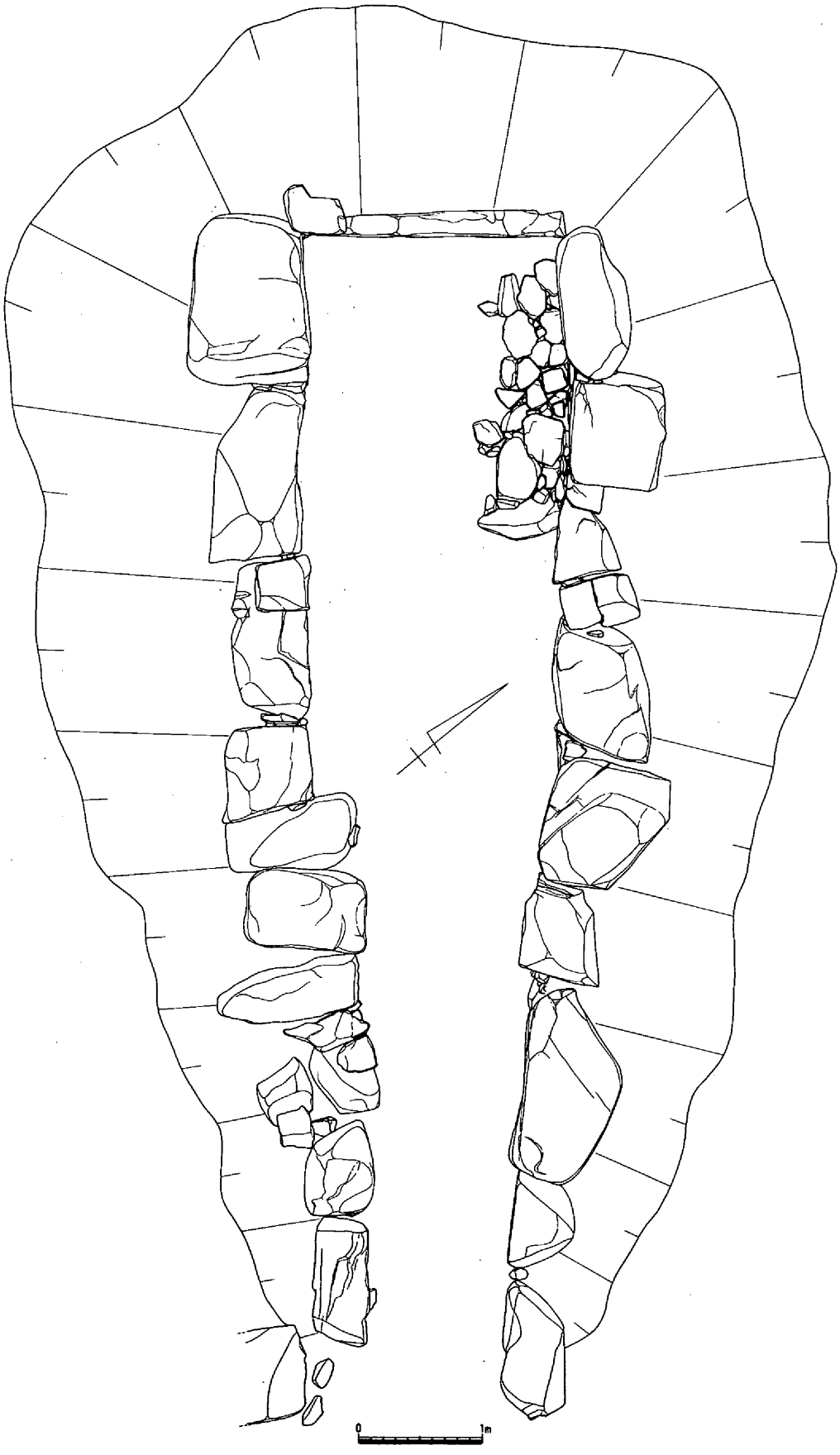
第19図　２号墳調査後周辺地形測量図（1/150）

外護列石（第19・20図、図版19－１）

２号墳の石室入口に面した南側の墳丘裾部には、人工的に石を並べて置いたと考えられる外護列石が存在した。東端部分は石室入口の基底部に据えられた石と接続していたが、西端部分は途中で跡切れていた。これらは比較的大きくて安定した８個の石が、墳端に沿って緩やかな曲線を描いた状態で検出された。それぞれの石は、墳端より約１ｍだけ墳丘の内側に墳端から約１ｍも高い位置に連続して据えられていたが、この２号墳そのものが急斜面に築造されていたため、石室入口に接する東端の石と西端に存在した石では、据えられた位置のレベルに約１ｍの高低差が認められた。



第20図　２号墳外護列石実測図（1/40）



第21図　２号墳石室上面実測図（1/50）

埋葬施設（第21～24図、図版20－１）

この２号墳の埋葬施設は、右片袖を有する大形の横穴式石室である。

右側壁の壁面は、玄室部分も羨道部分も基底部の石のみが残存していただけで、袖の石は抜き取られて存在しなかった。左側壁は右側壁よりも残存状態が良好であったが、基底部に据えた石と部分的に２段目の石が認められたにすぎなかった。このように石室の壁面が悲惨な状態であったから、残存する天井石は１枚もなく、築造された当時の様相をうかがうことはできなかった。

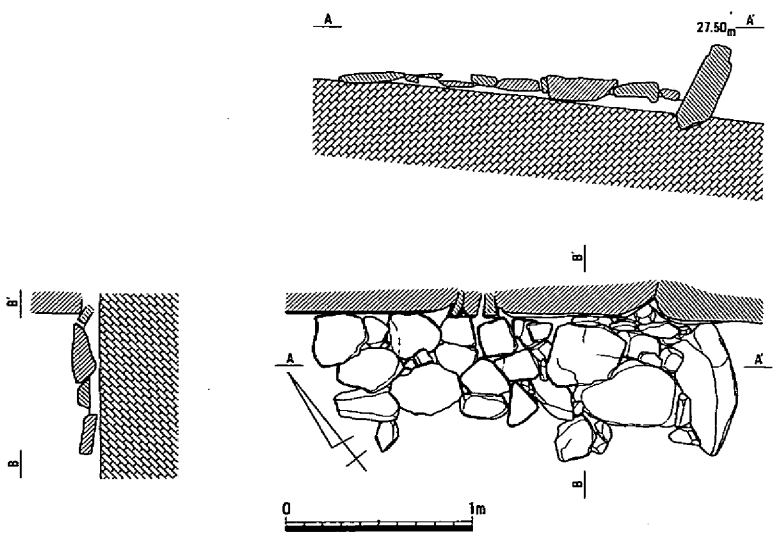
この石室の奥壁には、厚みのない１枚の幅が広い板石が据えられていた。この板石は、発掘調査に着手した当初には床面から約2.40mの高さまで確認することができたが、横方向にひびが入って今にも落下する寸前であったため、危険な状態だと判断されたので、上位の部分を意図的に壊したのである。右側壁と接する位置の底部には、空間に小さな石を詰めていた。向かって左側部分の床面から約１mの高さの所には、別の小規模な石が１個だけ残存していたから、築造された当時にはこれより上位にも石が積み上げられていたのであろう。

部分的に２段目の石も残存していた左側壁は、奥壁に接する部分の基底部に比較的大きくて安定した石を据え、それと同時に石室入口から４番目の正方形に近い形をした石を基底部に置いていた。羨道部分の基底部は、石室入口側からその４番目の石に向かって並べ、玄室部分の基底部は、４番目の石の手前から奥壁に向かって順番に置き、最後に奥壁から２番目の石を据えていた。この左側壁の基底部に据えた石の上面レベルは不揃いで、石を積み上げることによって生じた横方向の基底部と２段目の石の目地は、ジグザグ状態になっていた。

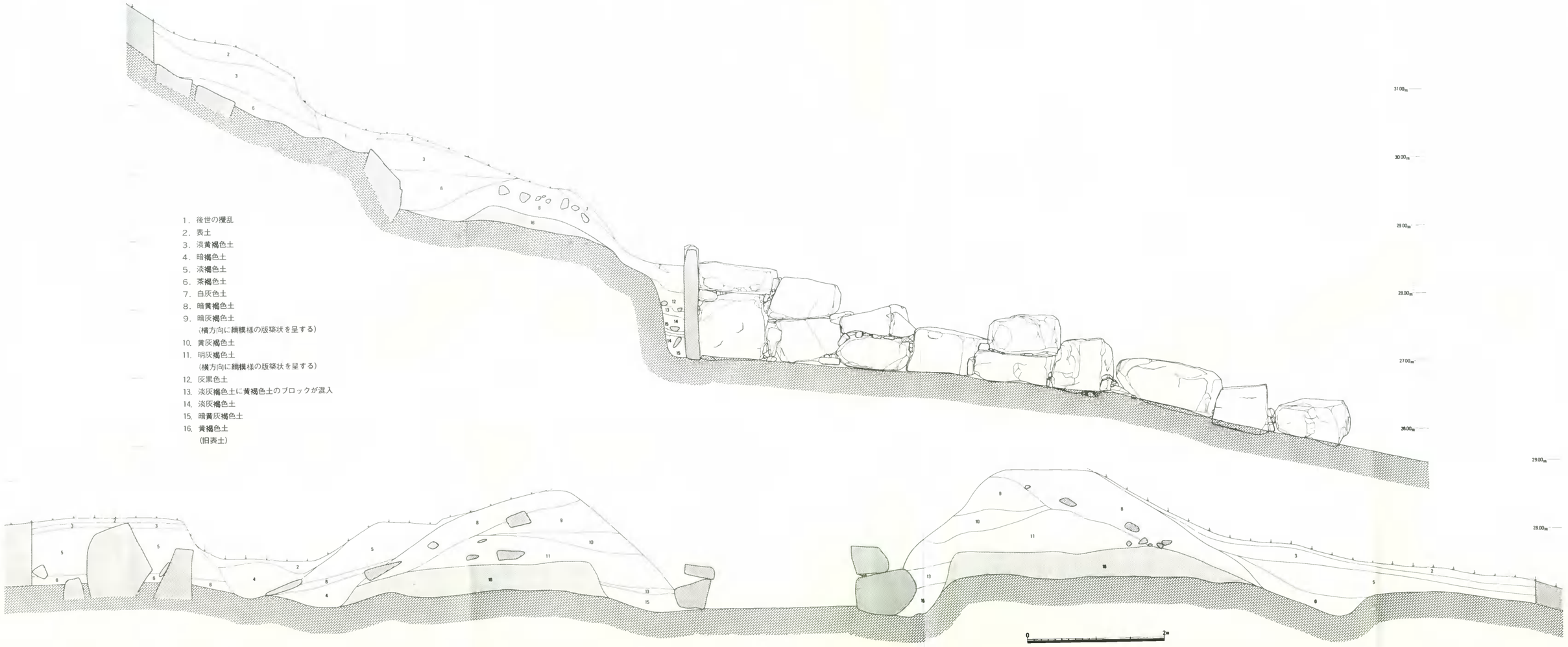
これに対して右側壁は、奥壁に接する部分の基底部には左側壁と同様に比較的大きくて安定した石を据え、それと同時に抜き取られて残存しなかった袖の石を置いていた。羨道部分の基底部は、石室入口側から袖の石に向かって順番に並べ、玄室部分の基底部は、袖の石の手前から奥壁に向かって２個の石を置き、最後に奥壁から２番目の石を据えていた。この右側壁の基底部に据えられた石の上面レベルは、羨道部分はほぼ高さが揃っていたが、玄室部分は使われていた石の大きさが一定の規模でないこともあって不揃いになっていた。

２号墳の埋葬施設である横穴式石室は、比較的急斜面に築造されていたため、床面は奥壁と石室入口の部分で約1.50mもの高低差があり、奥壁から石室入口に向かって急勾配に傾斜していた。なおこの横穴式石室の床面は、前述した１号墳と同様に地山を掘り窪めただけのものであった。

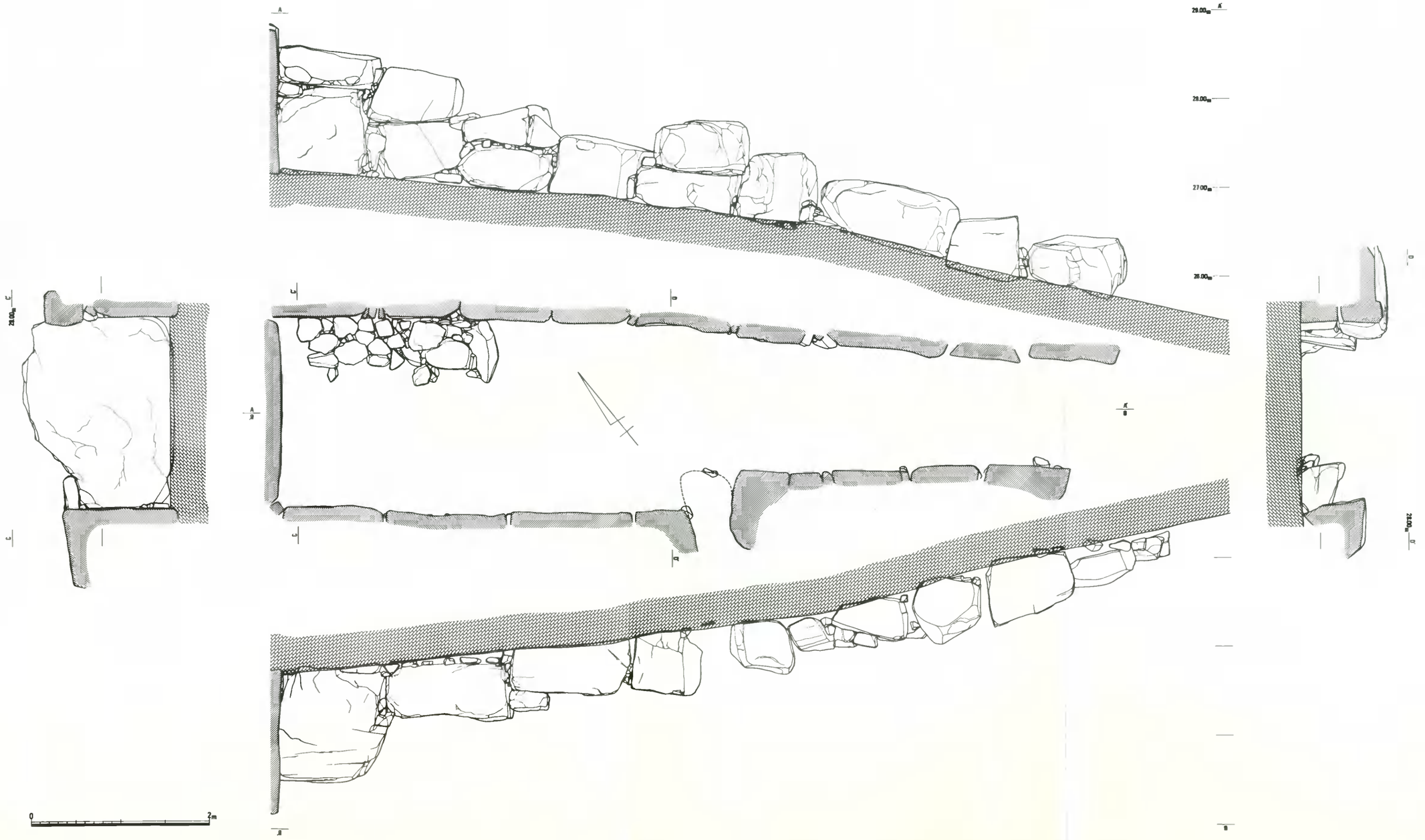
２号墳の横穴式石室の計測値は、玄室長4.40m・羨道長4.90mになる全長が9.30m・奥壁幅2.15m・玄門の玄室幅2.05m・玄門での羨道幅1.60m・石室入口での羨道幅1.20mを測り、床面から天井石までの高さは、調査着手当初に奥壁部分で計測して約2.40m以上であった。



第22図　２号墳石室内箱式石棺実測図（1/40）



第23図　２号墳墳丘土層断面（1/40）



第24図　２号墳石室実測図（1/40）

石室内箱式石棺（第19・21・22・24図、図版19―２・20―１・20―２）

２号墳の横穴式石室の内部床面には、奥壁に面した地点に左側壁と接した状態で、造り付けの箱式石棺と推定される埋葬施設が存在した。

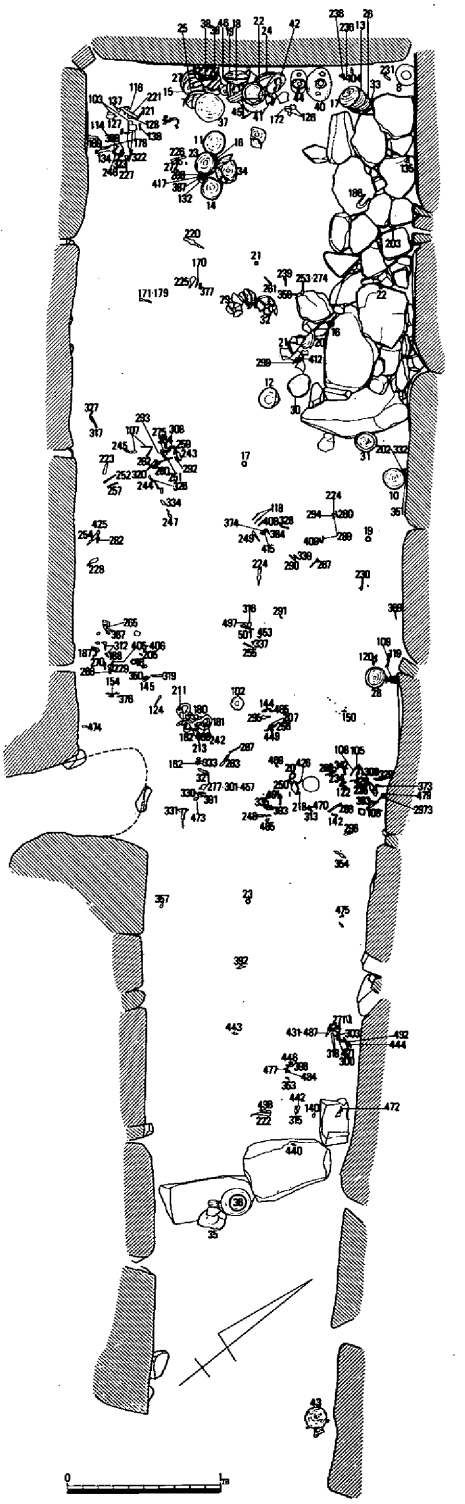
北東側の側壁は横穴式石室の左側壁の壁面を利用していたが、南東側の側壁には石が残存しなかった。小口部分については、石室入口に面した方向には斜めに傾いた石が存在したが、奥壁に面した方向には石が認められなかった。発掘作業を行っている段階に精査したが、側壁や小口部分に石が検出できなかった部分は、横穴式石室の内部床面にこの埋葬施設が造り付けられた当初から石が置かれていなかったのか、あるいは後世に置かれていた石が持ち去られたのか、確認することができなかった。この施設の床面には板石が貼り付けられ、残存した長さは約2.00m・幅は0.75mになるであろう。

箱式石棺と推定されるこの埋葬施設の床面には、対になる２個の耳環がやや離れた位置から検出されたから、遺骸が埋葬されていたのは確実である。

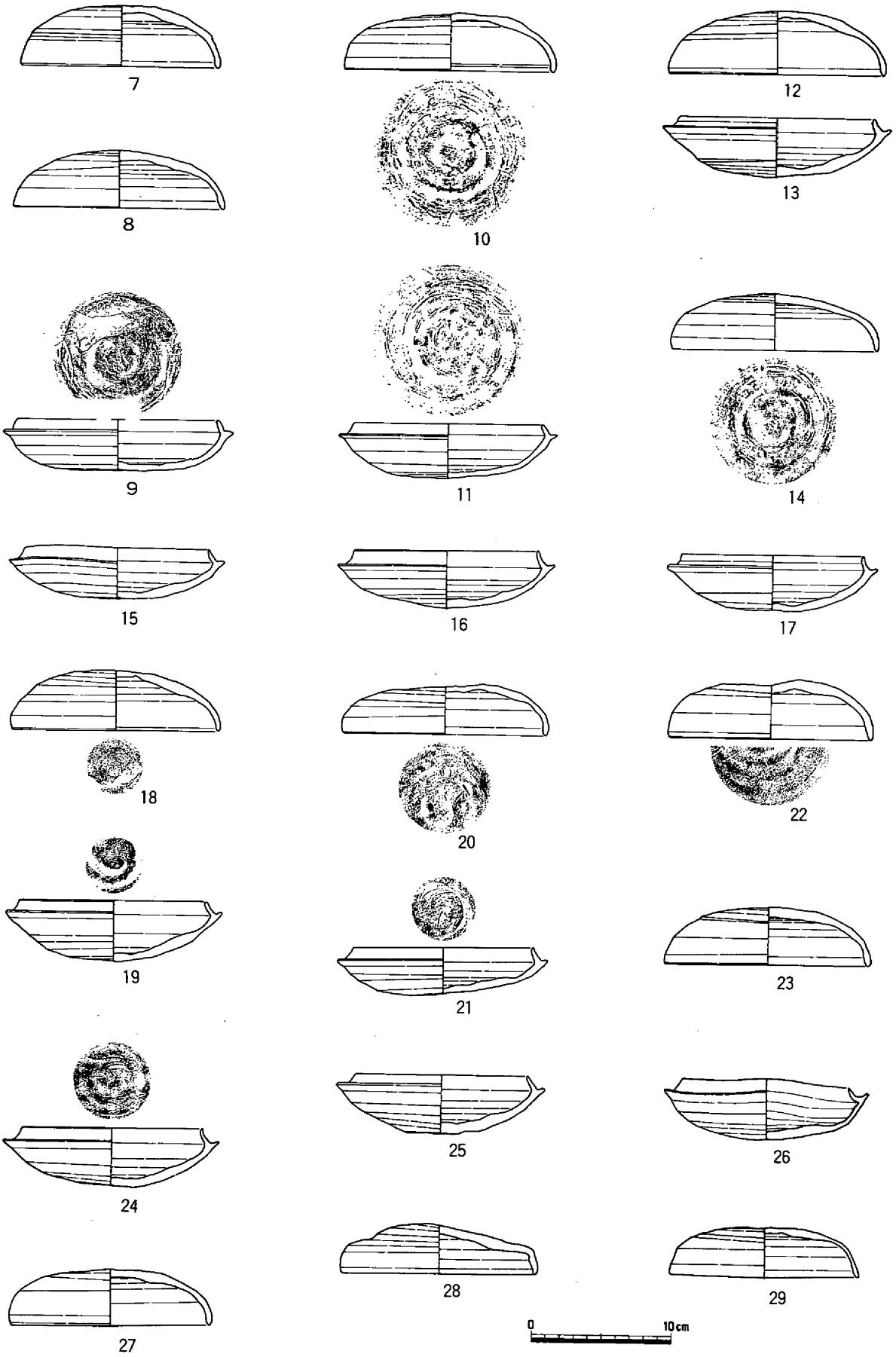
遺物出土状況（第25図、図版19―２・19―３）

２号墳の埋葬施設である横穴式石室は、天井石が１枚も存在しなかっただけでなく、袖の石も抜き取られて残存しなかったが、意外にも石室内の床面まで撹乱が及んだ形跡はなく、埋葬された当時の様相を良好な状態で留めていた。

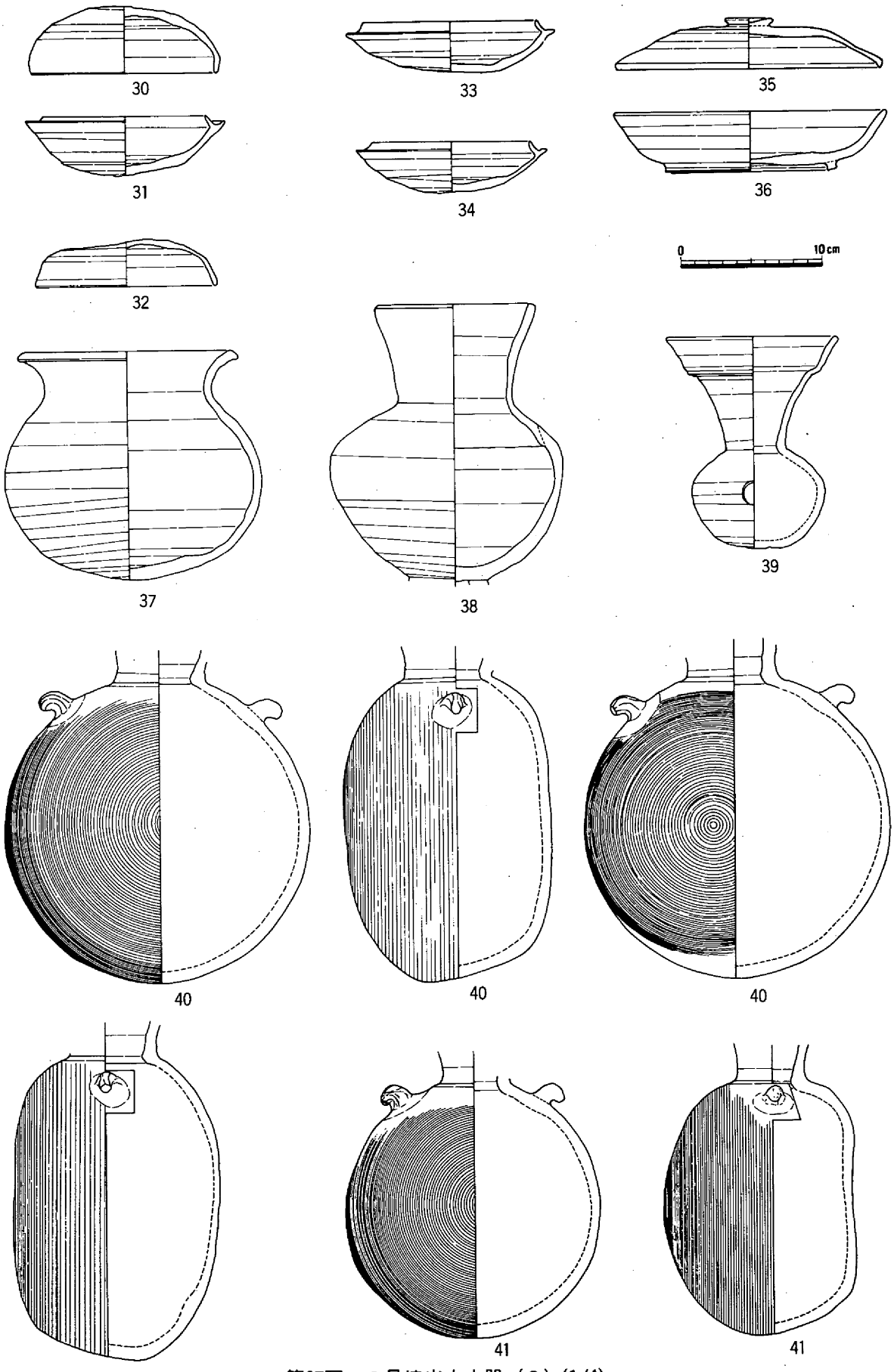
奥壁に面した部分には、追葬によって片付けられたと推定される多くの須恵器が、複雑に重なって出土した。造り付けの埋葬施設で箱式石棺と推定されるものの周辺には、数点の杯身や杯蓋が存在した。石室入口の左側壁に沿った位置には、鉤形の耳を有する１点の提瓶が、無造作に置かれていた。また羨道のほぼ中央部分で検出した閉塞石の一部と考える石の上には、後世の奈良時代後半の時期に属すると思われる杯身（36）と杯蓋（35）のセットが存在した。鉄器の鏃や釘は石室の広い範囲から出土したが、馬具は玄門付近のやや右側壁に寄った地点にまとまって副葬されていた。レントゲン撮影によって象嵌が施されているのが判明した鍔（102）は、馬具の北側に存在した。装身具の玉類は、奥壁に面した右側壁に近い所と、玄門付近の左側壁に寄った地点から、集中して出土した。古墳の副葬品としては比較的珍しいと思われる砥石（１）は、袖に近い位置から検出された。



第25図　２号墳遺物出土状況（1/50）



第26図　２号墳出土土器（１）(1/4)



第27図　２号墳出土土器（２）(1/4)

出土遺物

須恵器（第26～28図、図版32・33）

杯身・杯蓋　この2号墳の横穴式石室に伴う古墳時代に属する杯身と杯蓋の法量や色調を精査した結果、6組12点（10～13・18～21・30・31・35・36）のセット関係が認められた。杯身は口径10.8～13.8cm・器高3.4～4.3cmで、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の底部に仕上げナデを加えているものが多いが、外面の底部がヘラ切り未調整のもの（31）もある。内面の底部は丁寧に仕上げているものが多いが、同心円のタタキ痕跡が残存しているもの（9・11・19・21・24）もある。杯蓋は口径12.7～15.5cm・器高3.3～4.8cmで、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の天井部と体部の境に稜を有するもの（7）が1点だけ存在し、全体の器形が著しく歪んだもの（28）も認められる。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行っているものが多いが、ヘラ切り未調整のもの（30）もある。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の天井部に仕上げナデを加えているものが多い。また内面の天井部に刺突痕跡を有するもの（22）や、同心円の当て具痕跡が残存しているもの（10・14・18・20）もある。

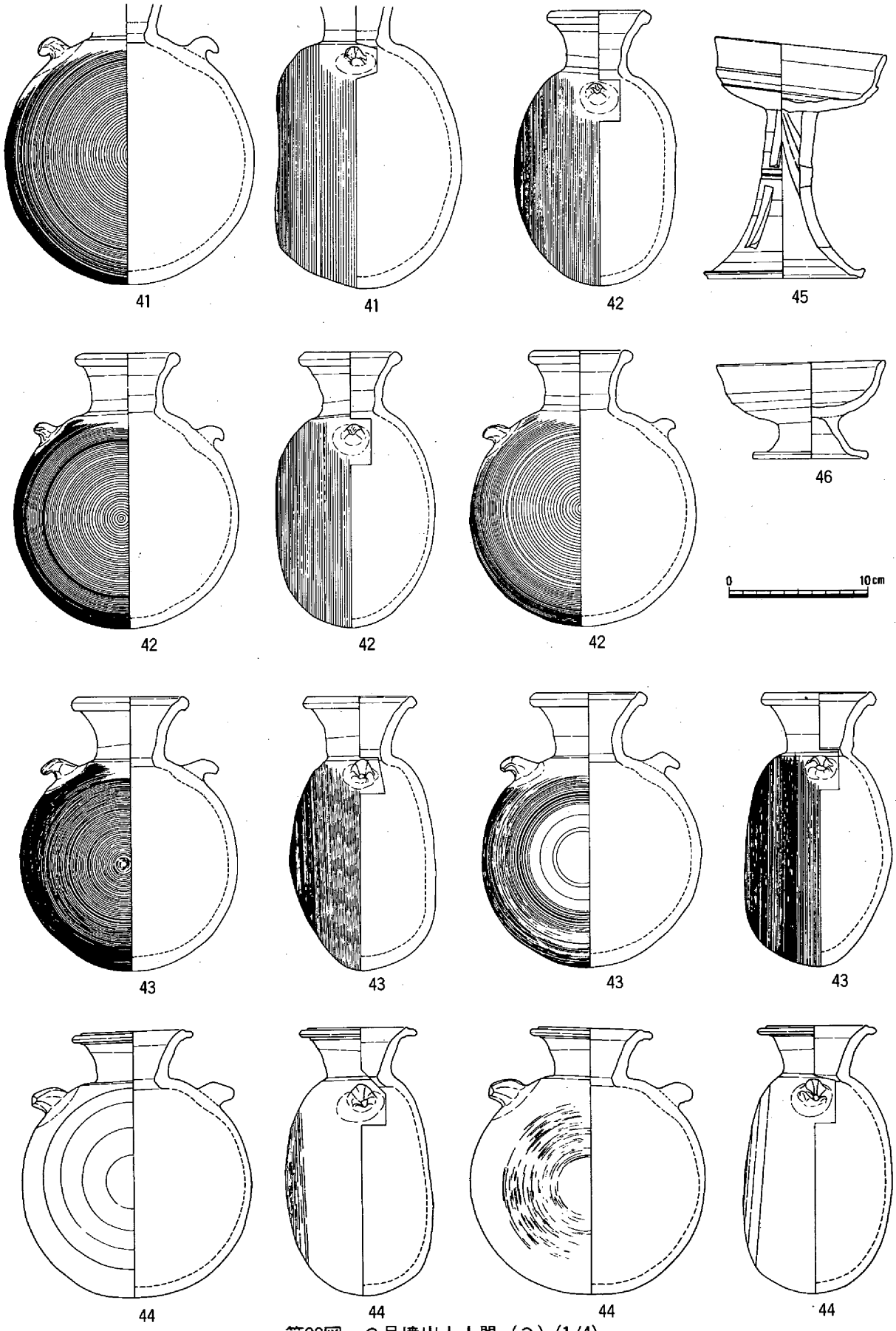
奈良時代後半の時期と推定される杯身（36）と杯蓋（35）のセットは、どちらも焼成がやや不良で灰白色を呈している。前者の杯身は、口径19.2cm・器高4.3cmを測り、口縁端部は斜め上方に立ち上がって全体を丸く仕上げ、底部に低い貼り付けの高台が存在する。内外面とも全体にヨコナデを施しているが、内面の底部には仕上げナデを加えている。後者の杯蓋は、口径18.8cm・器高3.6cmで、口縁端部は下方へ短く屈曲して先端に鈍い稜を有し、外面の天井部には中央部が浅く窪んだ扁平なつまみが存在する。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。

壺　緩やかに外湾して立ち上がる口縁部を有するもの（37）と、脚部を欠損しているもの（38）が出土した。前者は口径14.5cm・器高16.0cm・胴部最大径18.2cmを測り、ほぼ完形品で青灰色を呈している。後者は口径10.6cm・胴部最大径16.4cmを測り、焼成がやや不良で暗褐色を呈している。どちらも外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。

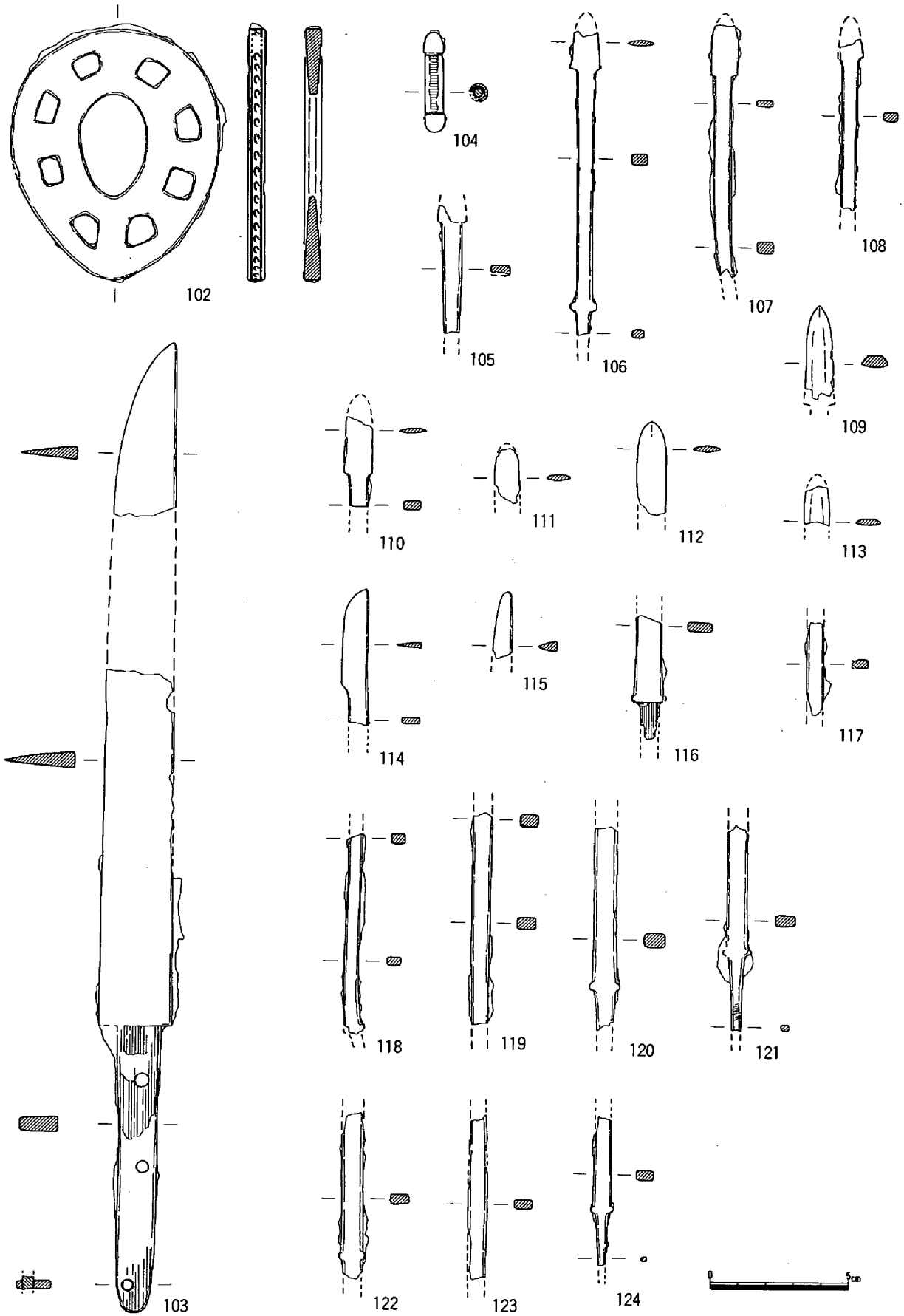
甕　この完形品である甕（39）の計測値は、口径16.7cm・器高14.9cm・胴部径9.3cm・頸部径4.5cmである。頸部から口縁部にかけてはラッパ状に開き、口縁端部はやや肥厚して丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、その他の部分は全体にヨコナデを施している。

提瓶　2号墳からは5点の提瓶（40～44）が出土したが、耳の形態はすべて鉤形である。口径6.4～7.6cm・器高19.2～20.2cm・胴部径15.7～21.6cm・胴部厚10.6～14.7cmを測り、外面の胴部にはカキメが認められる。内面全体と外面の口縁部から頸部にかけてはヨコナデを施し、外面全体に自然釉が付着しているものが多い。

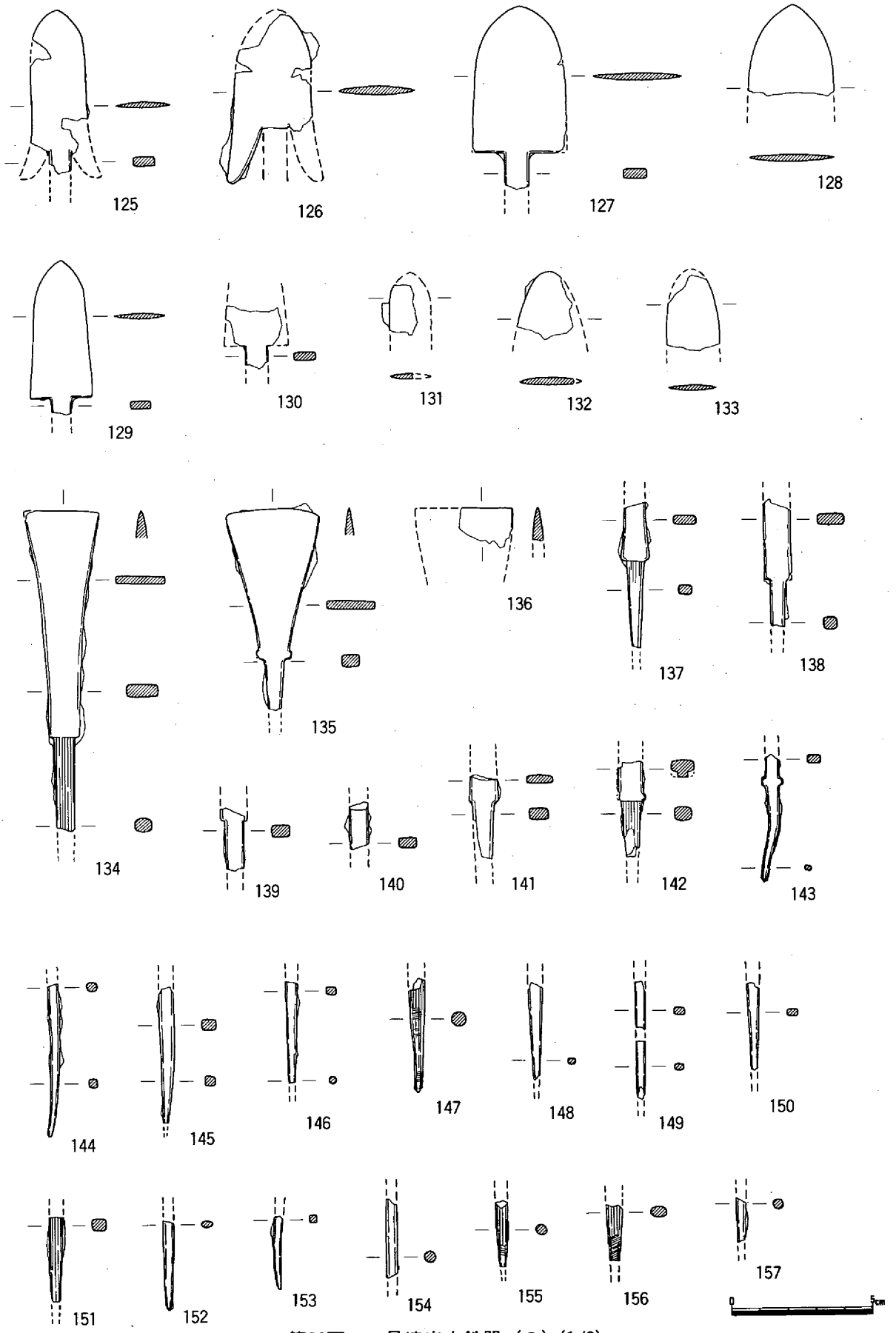
高杯　長脚無蓋高杯（45）と短脚無蓋高杯（46）は、どちらも完形品である。前者は口径11.9～12.3cm・器高17.0cm・脚底径11.5cmを測り、脚部には3方向で2段の長方形透しが認められる。外面脚部の中位には、2条の凹線が存在し、脚の内面にはシボリ痕跡が残っている。後者は口径11.8cm・器高6.9cm・脚底径8.2cmを測り、器壁が厚くて比較的深い杯部を有している。外面の杯底部はヘラケズリを行い、その他はすべてヨコナデを施しているが、内面の杯底部には仕上げナデも加えている。



第28図　２号墳出土土器（３）(1/4)



第29図　２号墳出土鉄器（１）(1/2)



第30図　２号墳出土鉄器（２）(1/2)

鉄器（第29～41図、図版49～55）

鍔　102は平面形が倒卵形の鍔である。長径9.1cm・短径7.4cmを測り、8窓の透しを有する。縁の面には銀象嵌が施され、2条の線の間に「C」字形の文様が並んでいる。

刀　103の刀は刀身を欠損しており、全長は不明である。茎長10.2cm・刀身最大幅2.6cm・茎最大幅1.6cmを測り、茎尻は丸く終わる形態である。茎には3か所の目釘穴が認められるが、一直線に並んでおらず、偏った位置にあけられているものもある。茎には柄の木質が残っている。

弓飾金具　104は弓飾金具で、断面形が円形の棒状部の両端に、半球形の頭部がついている。棒状部は鉄管の中に鉄芯が通っている構造で、鉄芯の両端に頭部がついている。棒状部の外面には、横位の木目が付着している。

鉄鏃　105～168は鉄鏃で、7種類に分けられる。1類（106～108・110・111）は長頸の柳葉式鉄鏃で、鏃身部がやや小形の片丸造のものである。2類（109・113）は長頸の柳葉式と思われ、鏃身部が片切刃造である。3類（112）は長頸の柳葉式鉄鏃で、鏃身部が片鎬造でやや大形のものである。4類（114・115）は長頸の片刃箭式である。5類（125・126）は平根の腸抉柳葉式である。6類（127・129・130）は平根の長三角形式である。127はずんぐりした鏃身形態を持つのに対して、129は細身である。7類（134～136）は平根の方頭式である。134が細身の鏃身部を有し、関に棘状突起を持たないのに対して、135はやや幅広い逆三角形の鏃身部で、関には棘状突起が存在する。ところで116～124は、長頸式鉄鏃（1類～4類）の主として頸部の破片である。128・131～133は平根式鉄鏃の鏃身先端部の破片で、5類または6類のものと思われるが、形態的なバリエーションは多いようである。137～168はどの型式の鉄鏃のものか判断できないが、茎を中心とする破片である。矢柄の木質を残すものが多く、147・155・156には糸巻きの痕跡が認められる。

刀子　169～177は刀子である。いずれも破片で、全体の大きさがわかるものはない。170は細身の刀身を有し、173は茎の糸巻きや柄の木質が残存している。

鞘金具　178は鞘金具である。その大きさから、刀子に付属するものと思われる。鞘尻金具の可能性が高い。鉄板を曲げて筒状につくられており、下側にはその合わせ目が観察できる。内面には木質が顕著に残っている。

鎹　179は楕円形の環状のものであり、鎹と思われる。その大きさから刀子に付属すると考えられるが、半分以上を欠損している。

180～219は馬具である。

轡　180の轡は、環状の鏡板を持つ円環轡である。鏡板には方形の立聞がついており、右側の鏡板は幅8.5cm・高さ9.2cm、左側の鏡板は幅8.2cm・高さ9.0cmである。銜、引手、鏡板の連結には、楕円形の遊環を介在させている。引手は先端を「く」字状に折り曲げて、引手壺を形成している。右側の引手長16.7cm、左側の引手長16.0cmである。銜は二連式のもので、長さ15.8cmを測る。

1号墳のもの（44）に比べて、鏡板の環体が大きく、立聞も高いことなどに加えて、銜、引手、鏡板の連結に遊環を用いている点など、古い要素が看取できる。

鞍　181と182の鞍は、先端が環状に仕上げられたもので、181には鉄帯を折り曲げてつくった脚がついており、その端部はほぼ直角に折り曲げられている。

鞍座金具　183と184は鞍座金具で、ほぼ正円形を呈するものと思われる。前述した181と182の鞍に付属するものかどうかは不明である。

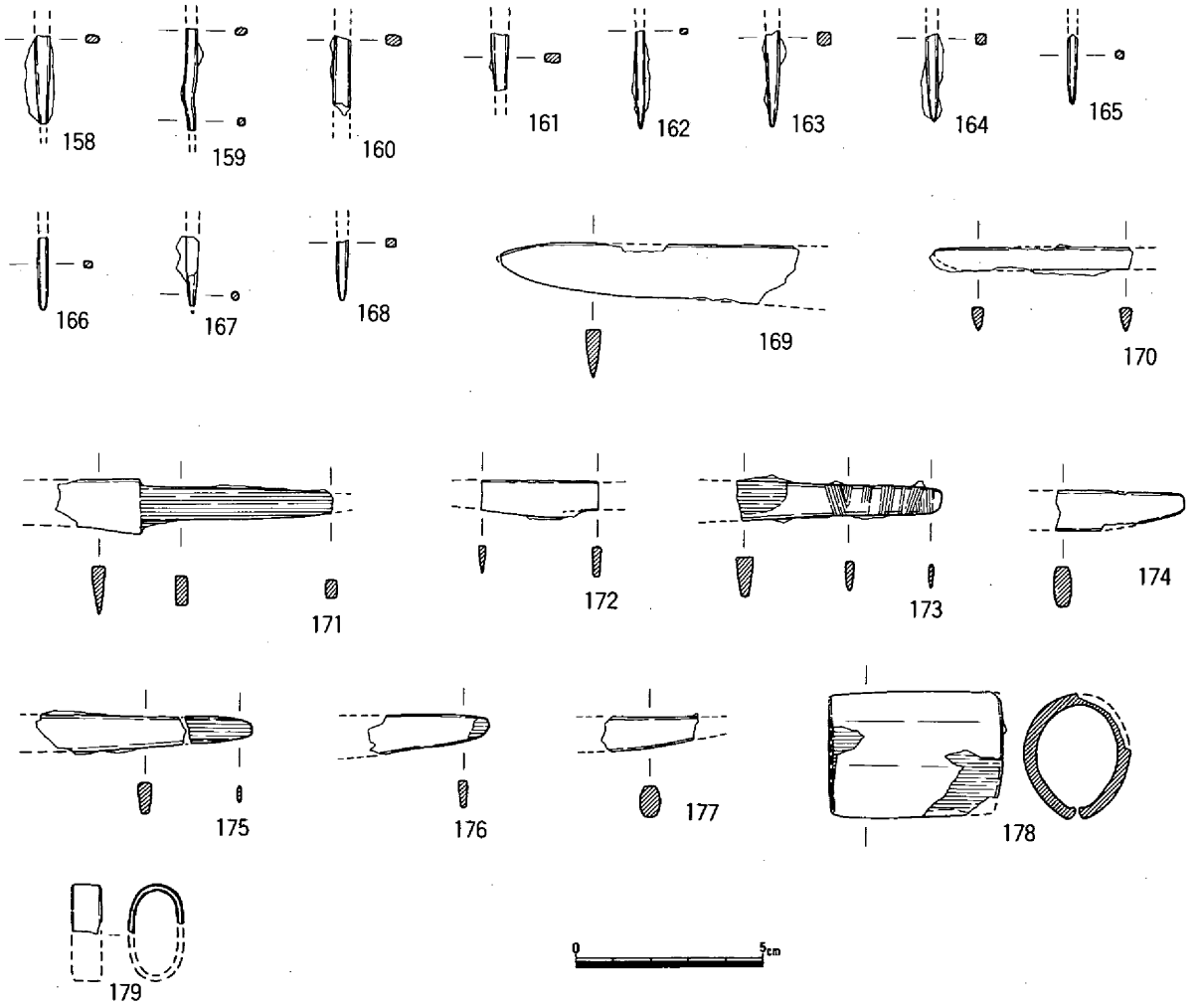
鐙金具　185の鐙金具は、鉄帯に穴をあけて鋲で固定したもので、確実ではないが、木製壺鐙の金具ではないかと思われる。２か所に認められる鋲は、鋲足のみ残存しており、その断面形は長方形を呈している。

鉸具　186～190は鉸具である。186は長方形に近いもの、187は「８」字形に近いもので、188～190はわずかな部分の破片である。190には刺金がついている。

留金具　191～202の留金具は、いずれも鉄地金銅貼である。長い菱形のもの（191・192）、短い菱形のもの（193～195）、長方形のもの（196・197）、爪形のもの（198～202）の４種類に分けられる。

鋲　203～216の鋲は、203～209と210～216の２種類に分けられる。前者はいずれも頭部鉄地金銅貼であり、後者はいずれも鉄製である。203には円形で小形の座金が伴っている。203～209は、前述した留金具に付属していたものが多いと思われる。210～216は扁平な笠形の頭部を持つ鋲で、鋲足には革と思われる有機質のものが付着しており、頭部直下約２～３㎜の所で単位が認められる。厚さ２～３㎜の革製品を、何かに打ちつけて固定するのに用いられたと思われる。

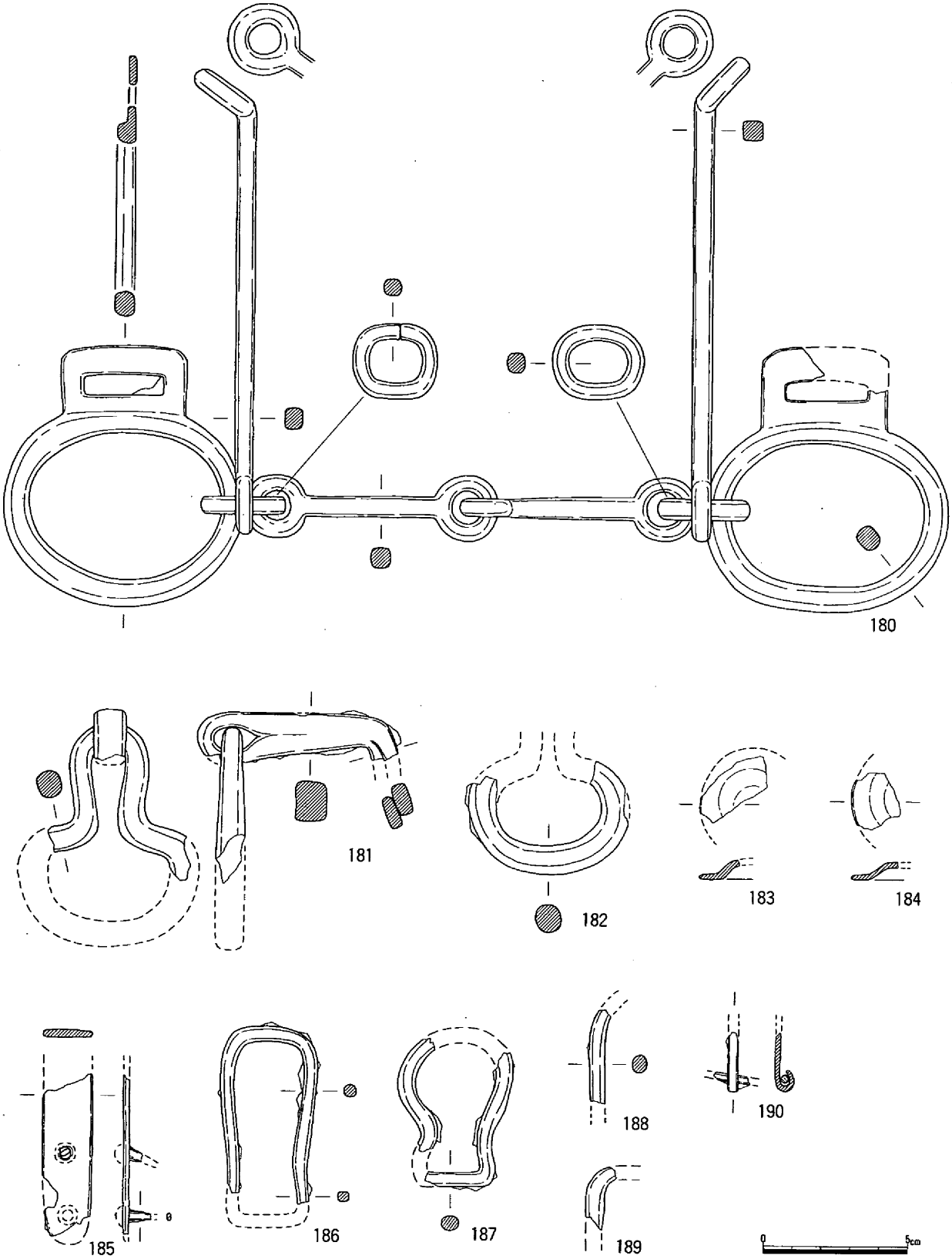
環座金具　217～219の環座金具は鉄製である。径1.5cm前後の環を自由に動くように取りつけたもので、径1.5cm強の円形座金が伴っている。馬具の一部か棺金具の用途が考えられるが、この２号墳の場



第31図　２号墳出土鉄器（３）(1/2)

合は馬具の一部であろう。

以上のように、２号墳から出土した馬具はいずれも破損しているにもかかわらず、副葬されていたものの全容は明らかで、１号墳や６号墳から出土した馬具との比較検討が可能である。



第32図　２号墳出土鉄器（４）(1/2)

鉄釘　220～489は鉄釘である。大形のものから小形のものまで様々であるが、基本的には頭部を打ちのばして「L」字形に折り曲げることで形成している。頭部の形状は不整形なものが多いが、概ね方形であり、縦位または横位の木目を残すものが多い。

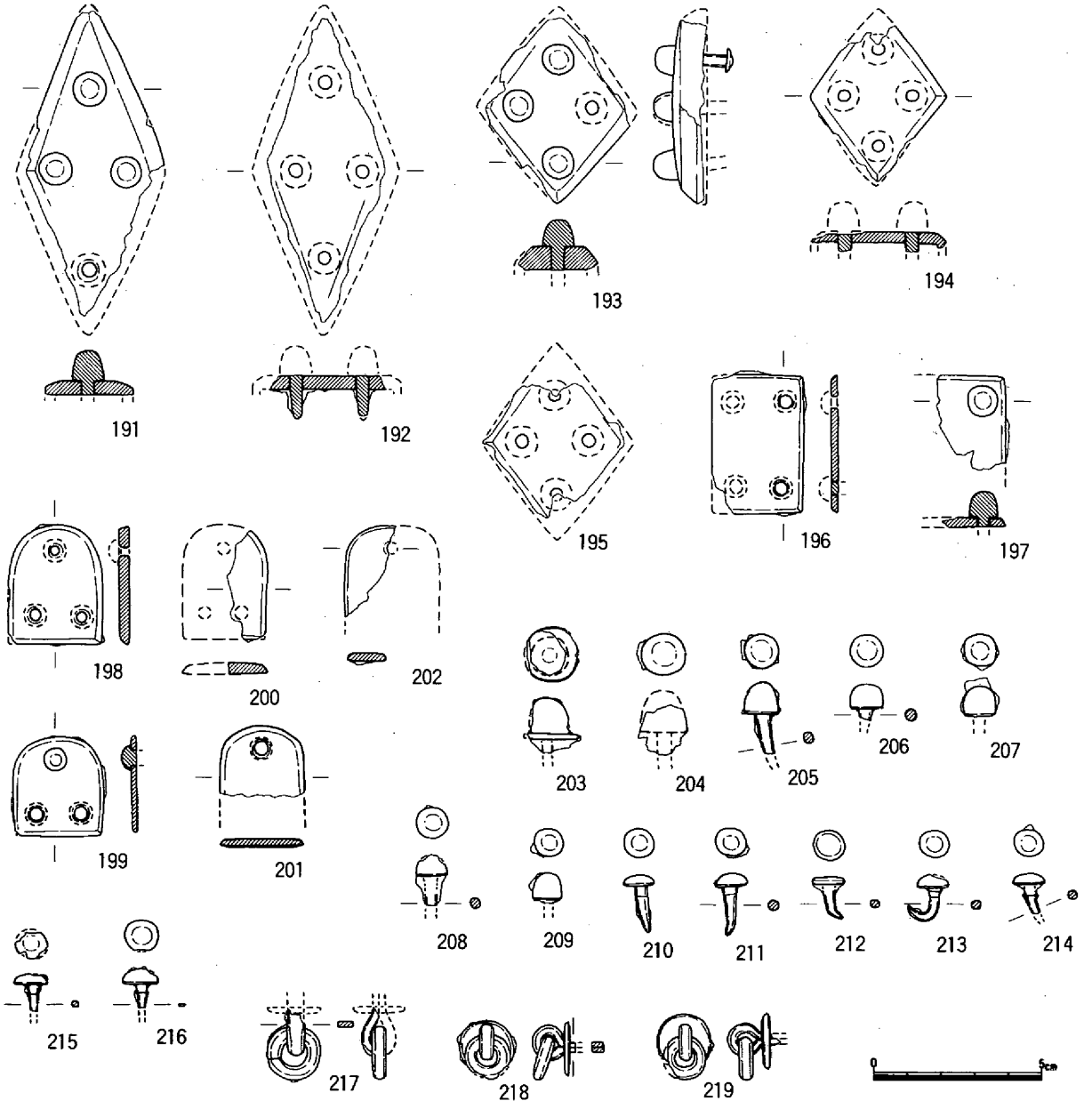
以下に特殊な形態なものを挙げる。

289は頭部を欠損しているが、頭部に向かって細くなり、打ちのばされた形跡が認められない。

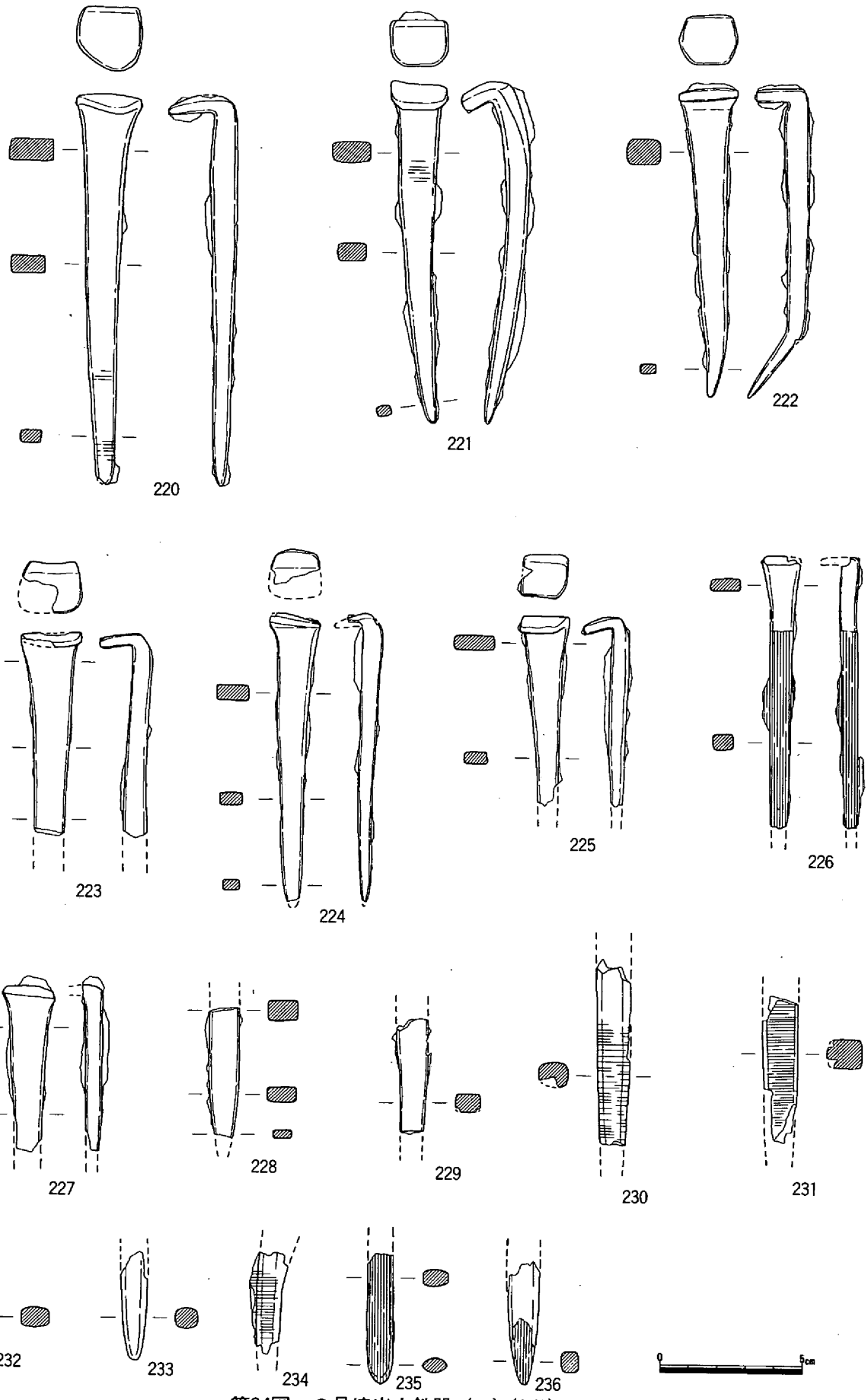
308・315・351は、頭部を打ちのばさないまま「L」字形に曲げて頭部にしている。

310は鉄鏃を転用したもので、棘状の篦被関が明瞭に観察できる。横位の木目が顕著に残っていることから、釘として使用されたことが理解できる。

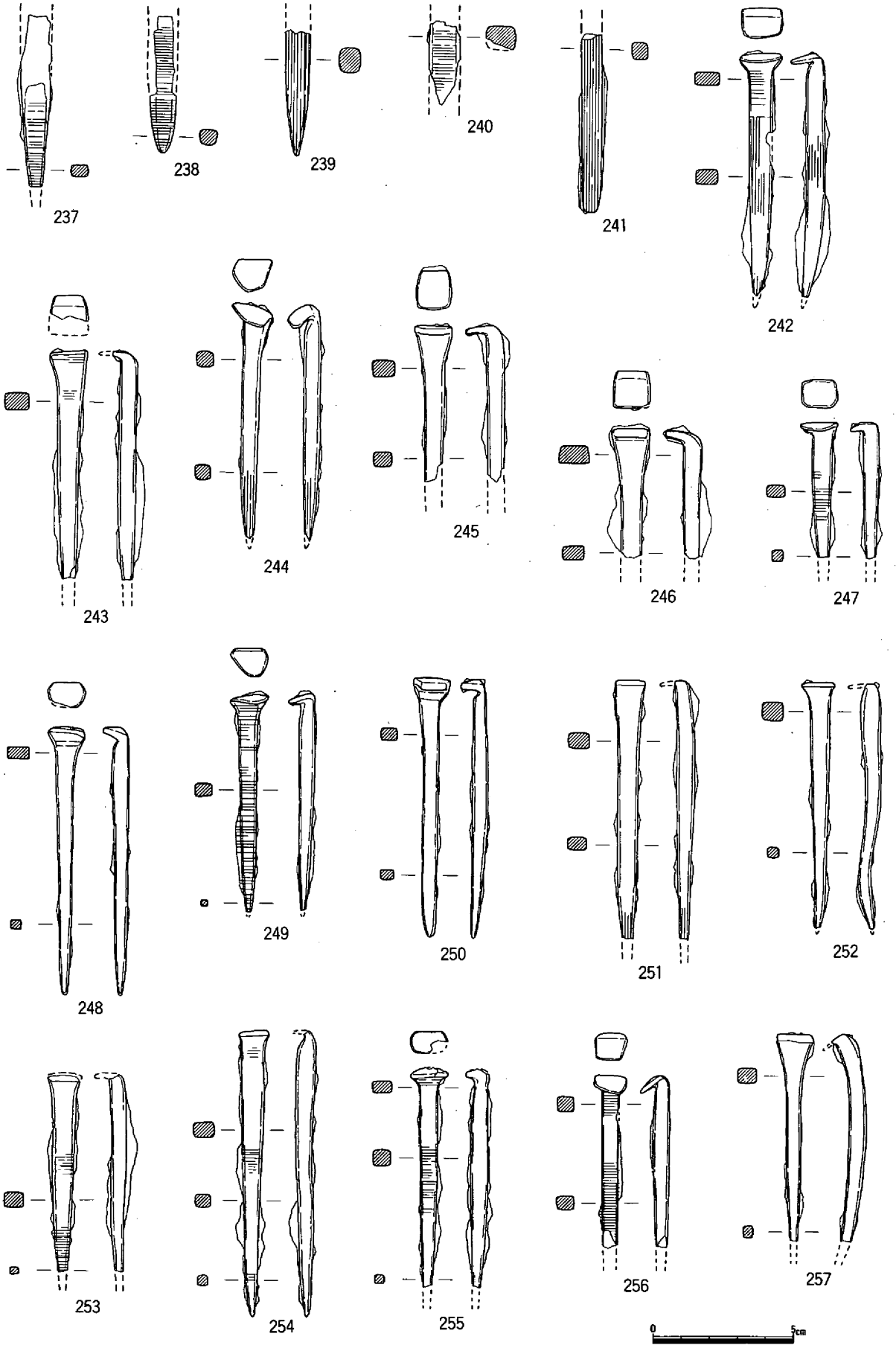
343と371は、どちらも極めて小さな破片であるが、斜め方向に木目がついている。斜め方向に打ち込まれていたと考える。



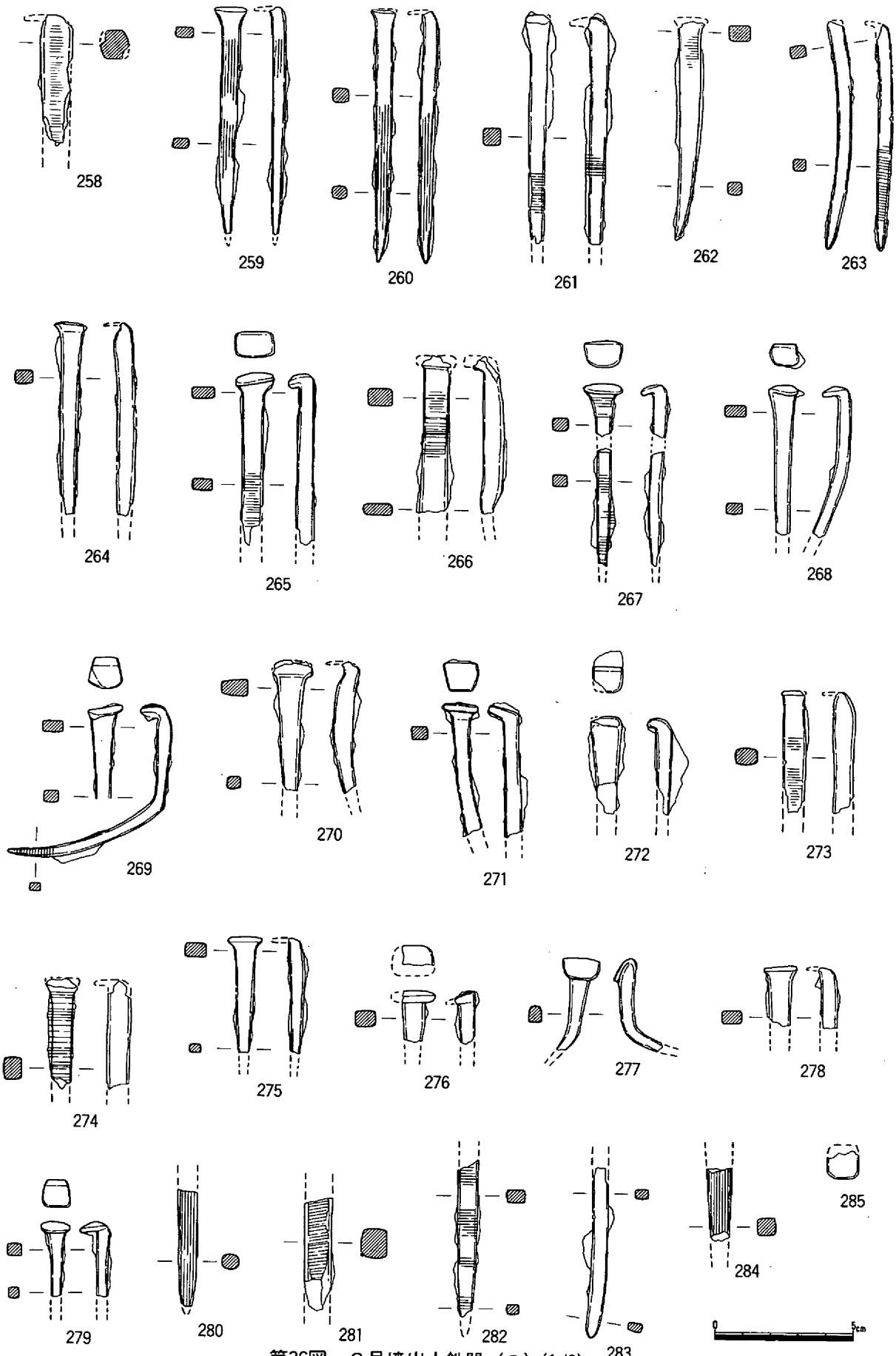
第33図　２号墳出土鉄器（５）(1/2)



第34図　2号墳出土鉄器（6）(1/2)

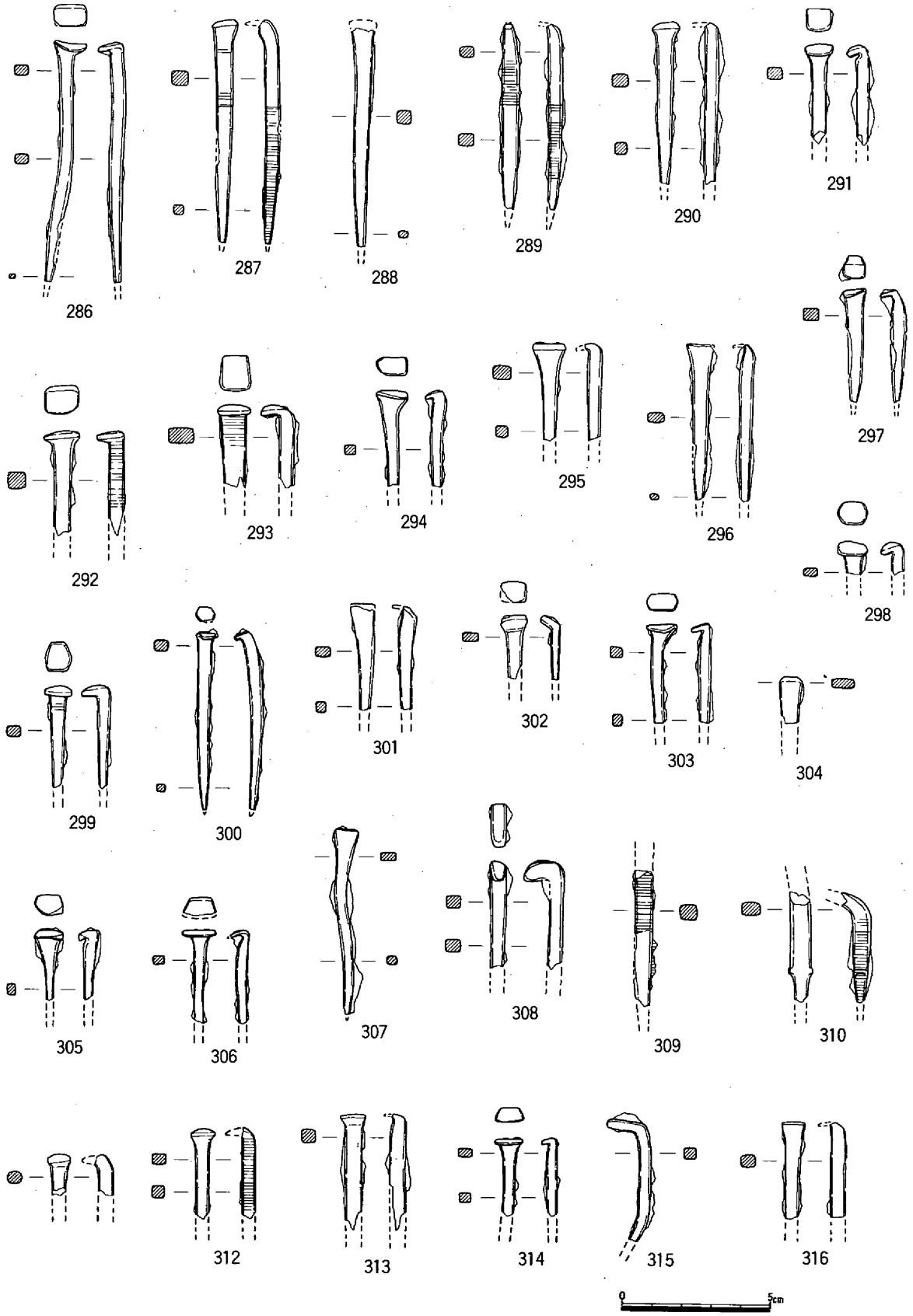


第35図　２号墳出土鉄器（７）(1/2)

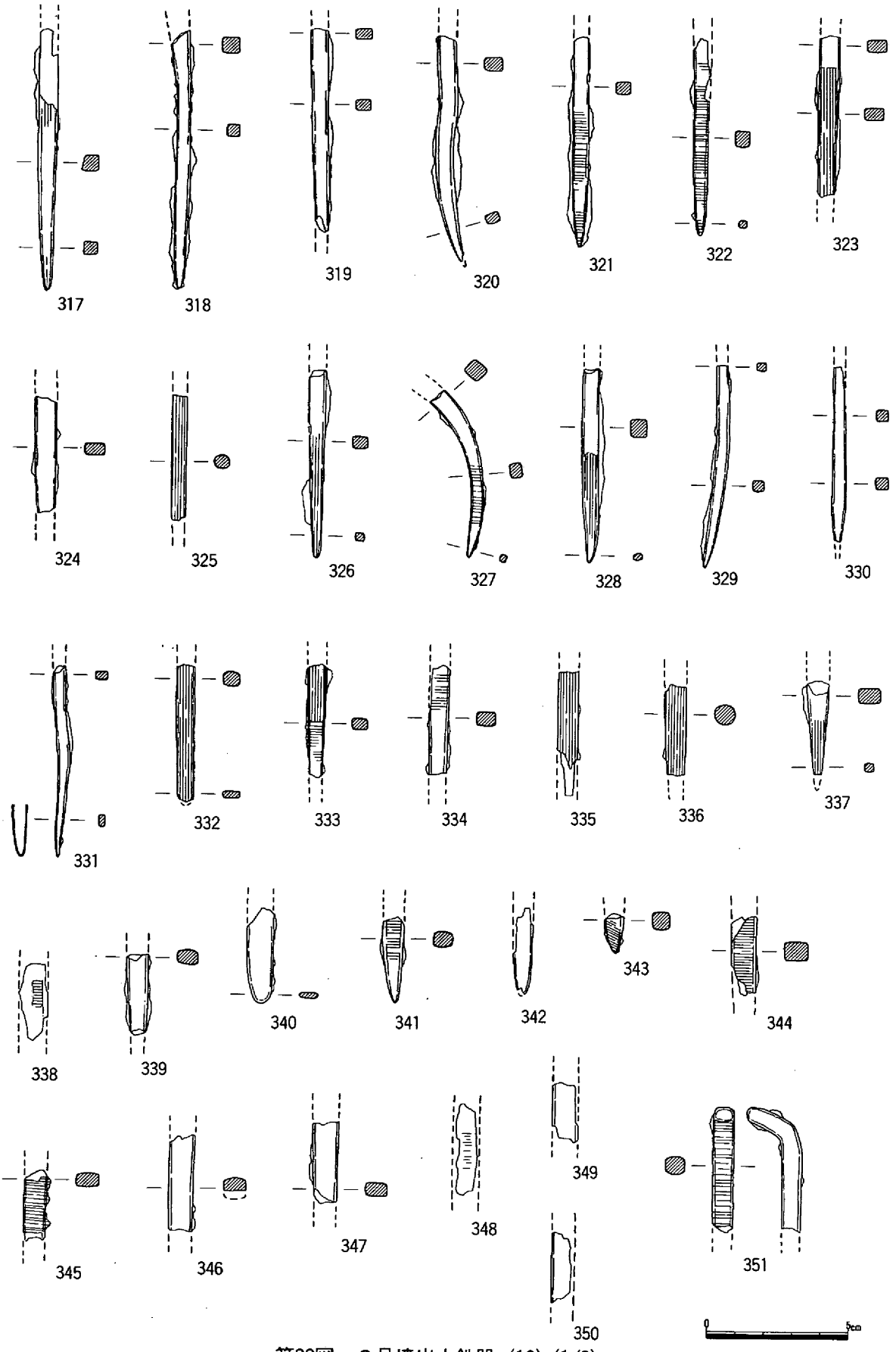


第36図　２号墳出土鉄器（８）(1/2)

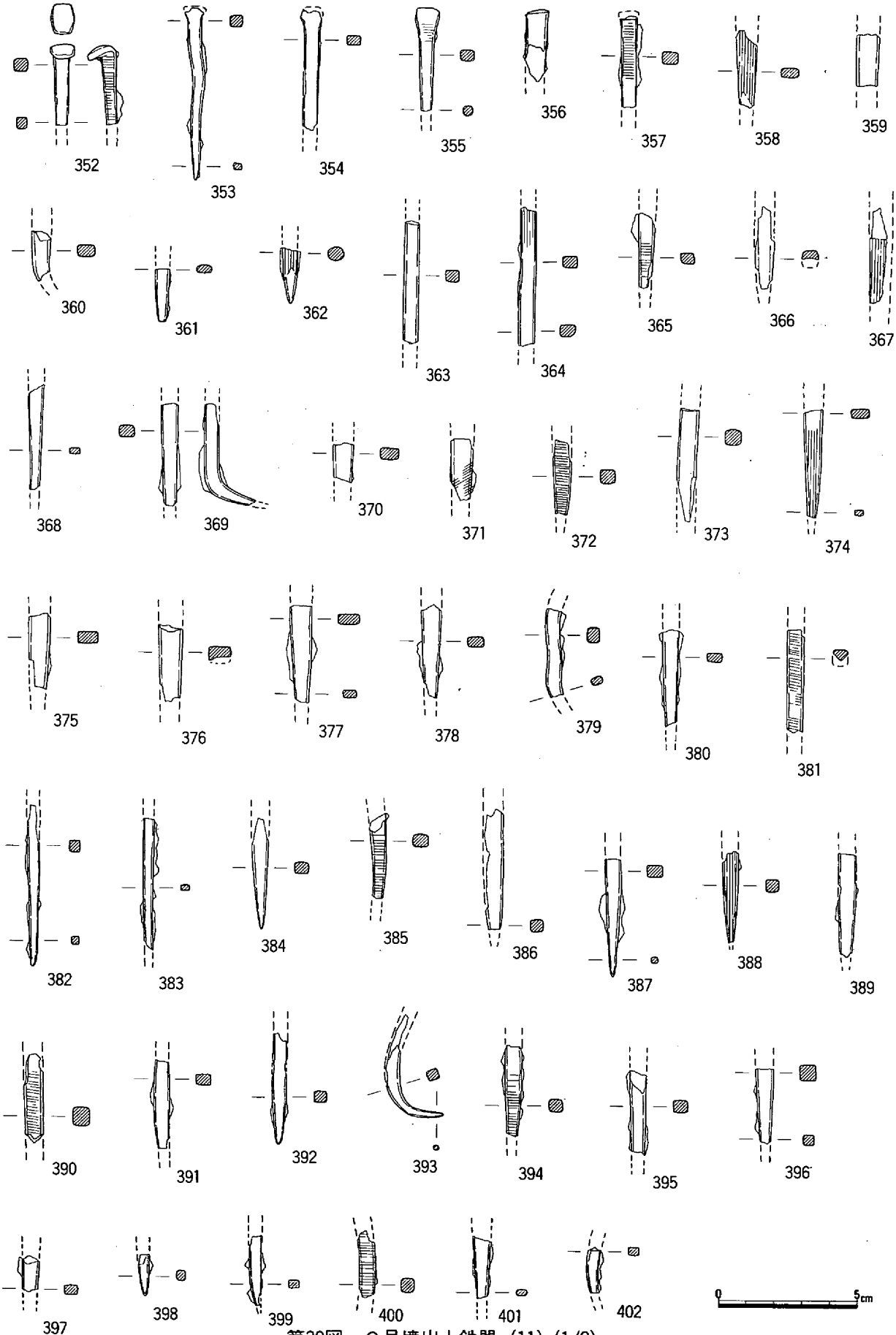
不明鉄器　491～499は、不定方向で不定角度に折り曲げられている鉄棒で、釘の一種であろうか。491と498には、釘のような尖った先端が認められる。498は鎹の可能性がある。



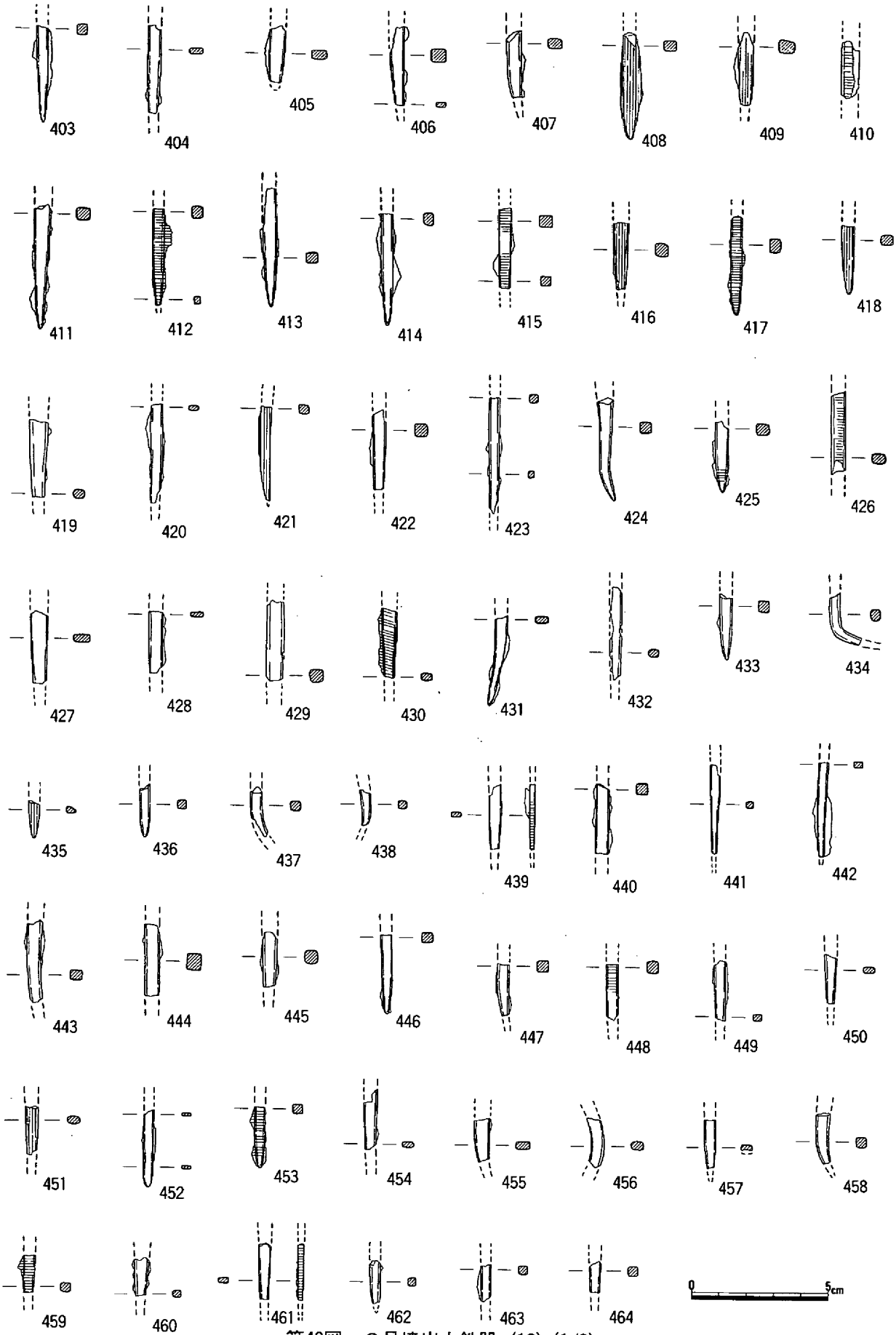
第37図　２号墳出土鉄器（９）(1/2)



第38図　２号墳出土鉄器（10）（1/2）



第39図　２号墳出土鉄器（11）(1/2)



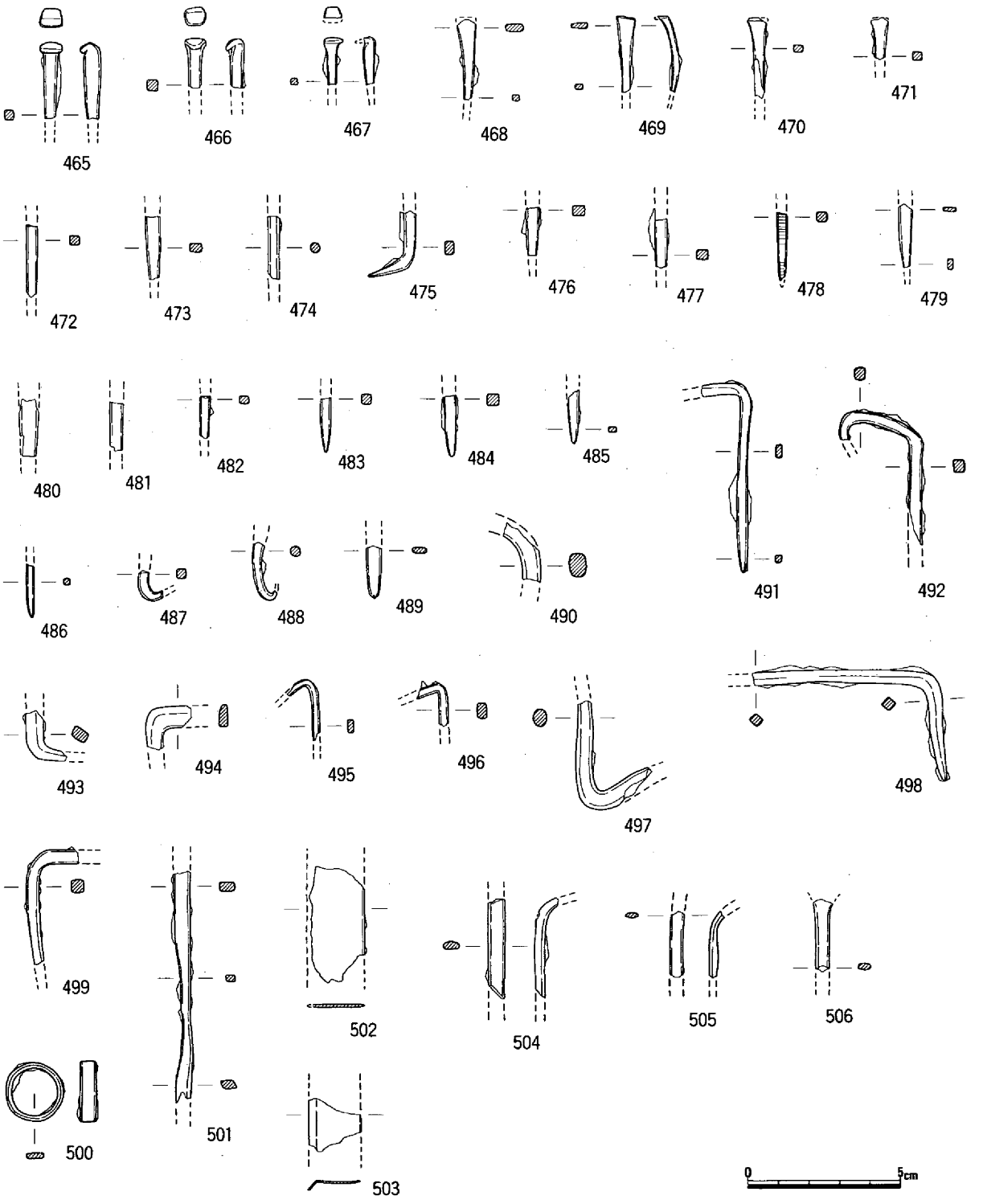
第40図　２号墳出土鉄器（12）(1/2)

500は直径約1.8cmの鉄製の環で、断面は薄い板状を呈している。用途は不明である。

501は太さが一定しない断面形が方形を呈する鉄棒で、用途は不明である。

502と503は薄くて細長い鉄帯で、503は一側辺を折り曲げている。革帯を装飾する革金具ではないかと思われる。

504～506は鉄地金銅貼の製品である。刀装具であろうか。



第41図　２号墳出土鉄器（13）(1/2)

石器（第122図）

砥石　１の砥石は、２号墳の横穴式石室の右側壁に存在した袖に近い位置から出土したが、石室の床面から約10cmほど浮いた状態で検出された。西山古墳群の各古墳や墳墓の埋葬施設から副葬品として石器が出土したのはこの２号墳だけで、極めて珍しい遺物と考える。

砥石の石材は泥岩で、最大長9.1cm・最大幅2.8cm・最大厚2.7cmを測り、断面形は台形を呈して４面とも使用している。

装身具（第42・43図、図版38・40―１）

装身具の玉類については、奥壁に面した右側壁に近い所と玄門付近の左側壁に寄った地点から、集中して出土したが、８点の耳環は、玄室や羨道の広い範囲から、１点だけが単独に検出された。この２号墳に繰り返し追葬が行われたために、耳環は当初の場所から移動していると考えられた。

耳環　８点の耳環の形態や重さなどを精査したが、いずれもセット関係が認められず、すべてが単独の耳環であることが判明した。

16は外径3.04～3.42cm・内径1.42～1.77cm・断面径0.84～0.89cm・切れ目幅2.3mm・重さ27.44ｇを測り、銅地銀貼であるが表面の約半分の銀箔が剝離している。22は外径1.52～1.76cm・内径0.81～0.95cm・断面径0.38～0.41cm・切れ目幅2.2mm・重さ2.79ｇを測り、極めて小形の銅地銀貼の耳環で表面の銀箔の残存状態は良好である。23は外径2.74～2.91cm・内径1.33～1.52cm・断面径0.71～0.94cm・切れ目幅2.2mm・重さ5.25ｇを測る中空の耳環で、銅板を管状にした上面に銀箔を重ねている。

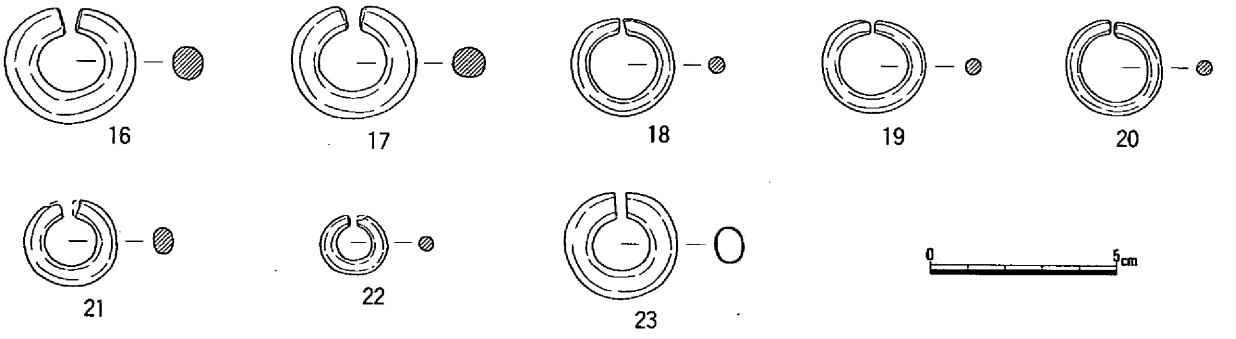
玉類　24～30は碧玉製の管玉で、濃緑色または深緑色を呈していずれも片面穿孔が施されている。25の計測値は、長さ30.1mm・径10.1mm・孔径上3.5mm・下1.2mm・重さ5.62ｇである。

31～33は切子玉である。材質はいずれも水晶で透明になっているが、表面が研磨によってやや白色を帯びるもの（31）も認められる。これらの切子玉は３点とも６面加工で、中央の円孔は片面穿孔が施され、反対側に若干の抉りが入っているもの（31・32）も存在する。31の計測値は、長さ15.9mm・径10.5mm・孔径上3.8mm・下1.1mm・重さ2.40ｇである。

34と35は比較的大きなガラス製の小玉で全体に群青色を呈している。34の計測値は、高さ7.2mm・径8.4mm・孔径上1.9mm・下1.2mm・重さ0.65ｇである。

36と37も前述した34や35と同様に群青色を呈するガラス製の小玉である。36の計測値は、高さ3.5mm・径4.5mm・孔径1.1mm・重さ0.09ｇである。

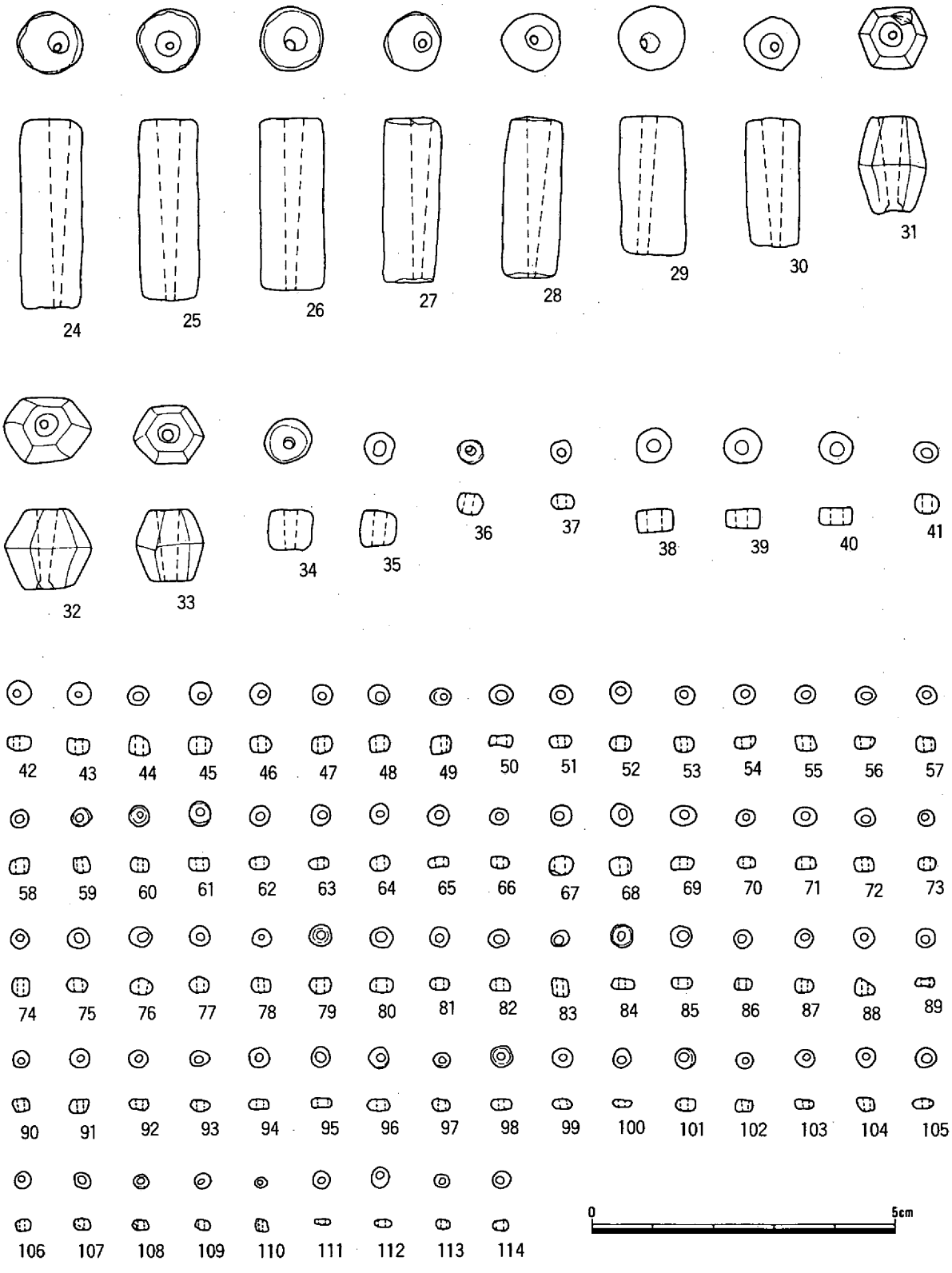
38～40は灰白色を呈した蛇紋石の臼玉である。39の計測値は、高さ3.5mm・径6.3mm・孔径2.0mm・重さ0.19ｇである。



第42図　２号墳出土耳環（1/2）

41～66は緑色または黄緑色をしたガラス製の小玉である。平均的な法量である53の計測値は、高さ2.9㎜・径3.5㎜・孔径1.0㎜・重さ0.04ｇである。

67～114は青色、水色、藍色、紺色を呈するガラス製の小玉である。平均的な法量である92の計測値は、高さ2.0㎜・径3.4㎜・孔径1.1㎜・重さ0.02ｇである。



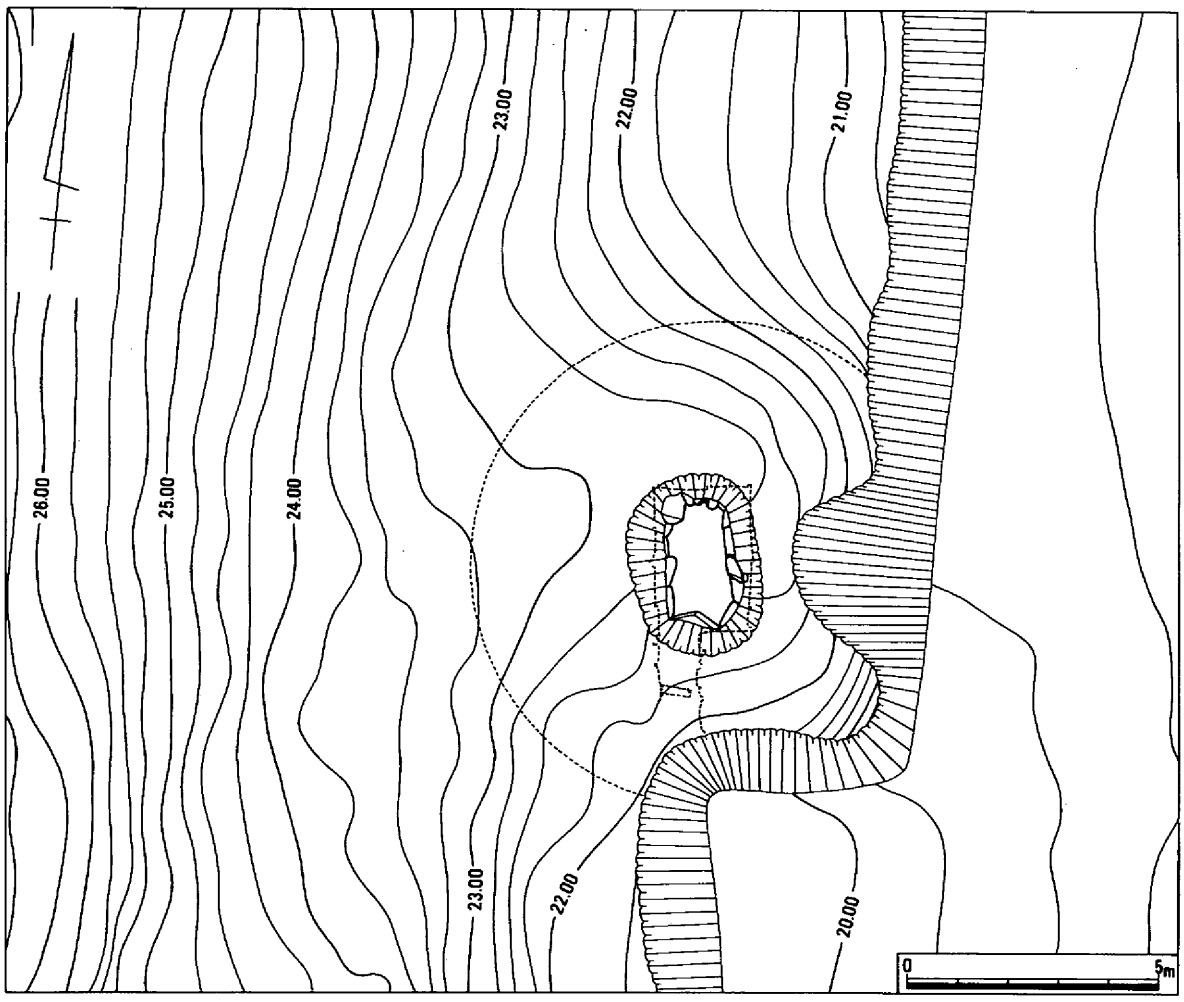
第43図　２号墳出土玉類（1/1）

(3)　３号墳

調査前の状況（第44図）

３号墳が所在した地点は、前述した２号墳から北方向へ約50m行った所で、急勾配で下降する丘陵の斜面が一変して緩やかになる変換点に位置していた。この３号墳の西側約25mの地形が高い丘陵斜面には、トレンチによる確認調査で新しく発見した６号墳が存在した。東側には香橋池の水面が展開し、多数の水鳥が戯れていた。

香橋池に面した東側の墳丘は、後述する５号墳が発見された地点の別荘に通じる曲がりくねった小道が存在したため、広い範囲が大きく削平されていた。埋葬施設である横穴式石室の入口に相当する南側の墳丘は、明治時代に尋常小学校の分校が設置されていた校舎の建設によって破壊され、版築状を呈した盛土の一部が露出していた。また石室入口に近い羨道部分は、盛土が流出していたために天井石や壁面の石を確認することができた。墳丘の中央部には隅丸長方形の大きな穴が存在し、玄室の壁面に使われていた石が認められた。その穴の内部をうかがうと、底に１枚の天井石が転落していたものの、奥壁や玄門などの上位の壁面を観察することができた。その時の印象では、玄室の大きさに比して羨道の幅が狭く、天井石の高さには玄室と羨道では極端な高低差があると考えられた。



第44図　３号墳調査前周辺地形測量図（1/150）

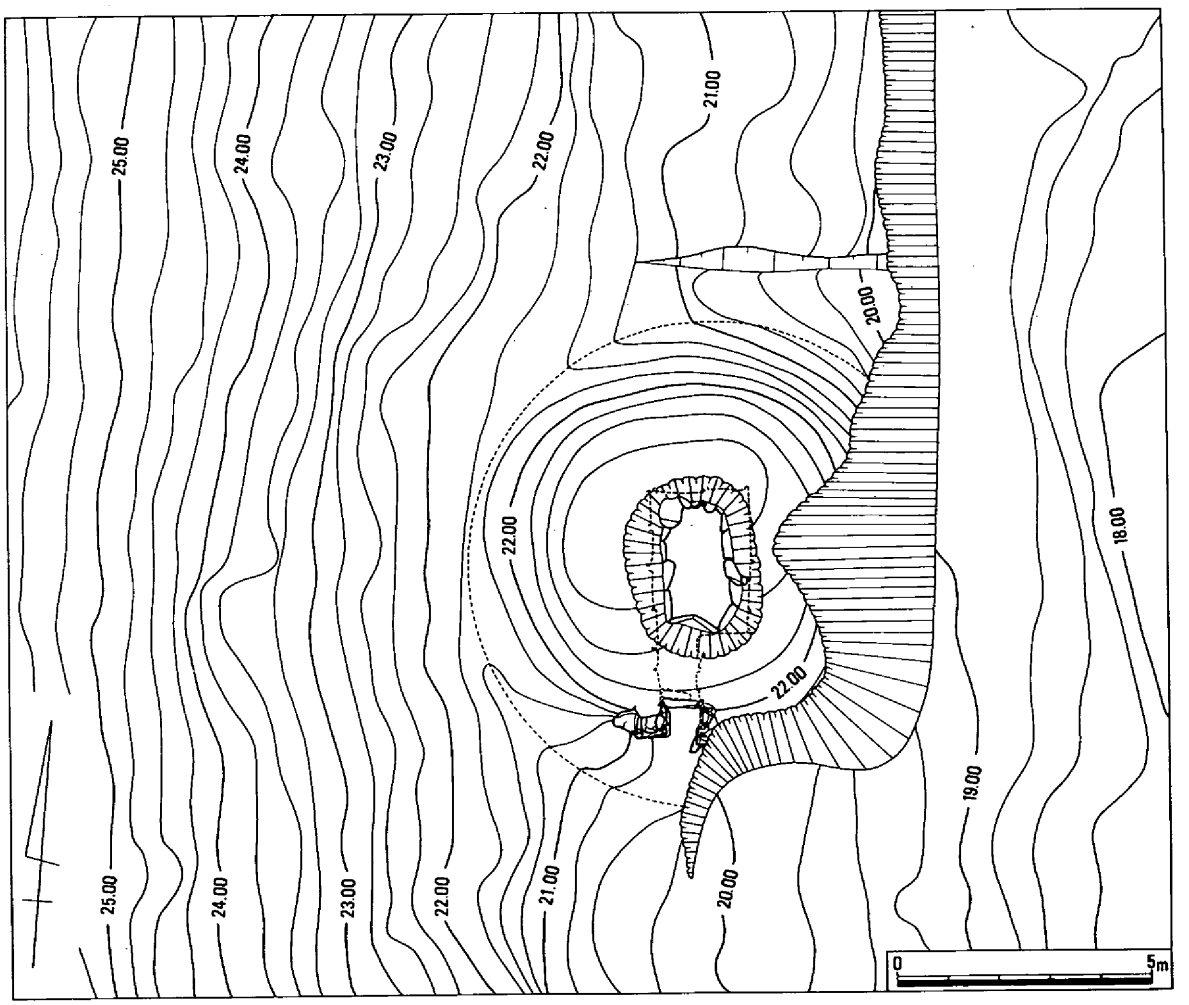
墳丘と周溝（第45・47図、図版21－１）

３号墳の墳丘は、東側と南側が部分的に削平されて版築状を呈する盛土が露出し、墳丘の中央部に玄室の天井石が持ち去られたり石室内に転落して大きな穴が存在したものの、築造された当時の小規模でこんもりとした形態を、比較的良好な状態で保持していた。

埋葬施設の横穴式石室は、急勾配で傾斜する丘陵の斜面が一変して緩やかになる変換点に築造されていたため、石室基底部の石は、地形の高い西側は地山面を削平した平坦面に、地形の低い東側は旧表土面にそれぞれ据えられていた。石室の入口付近は石室の床面より低くなっていたため、入口に面した右側壁の石は盛土の上に置かれて不安定な状態であった。玄室の天井石が残存しなかったこともあって、墳丘中央部の盛土が少なくなっていたが、地形の高い西側の斜面を削平し、墳端に比較的幅の広い周溝を形成して、生じた土砂をそのまま墳丘の盛土に使用していた。

この３号墳の墳丘は、直径約9.50ｍの円墳である。残存する墳丘の高さについては、地形の高い西側の墳端から測ると約1.30ｍ、横穴式石室の床面からでは約2.30ｍになっていた。

３号墳の周溝については、地形の高い西側から南北両方面にかけて、馬蹄形の状態に検出された。この周溝は地山面や旧表土面を掘り窪めたもので、その土砂は墳丘の盛土に使われていた。周溝の幅は右側壁に面した地形の高い西側部分が最も狭く、断面形は浅い「U」字形を呈していた。



第45図　３号墳調査後周辺地形測量図（1/150）

埋葬施設（第46・48図、図版21－２・21－３・23－１・23－２・23－３）

この３号墳の埋葬施設は、左片袖を有する古式の横穴式石室である。

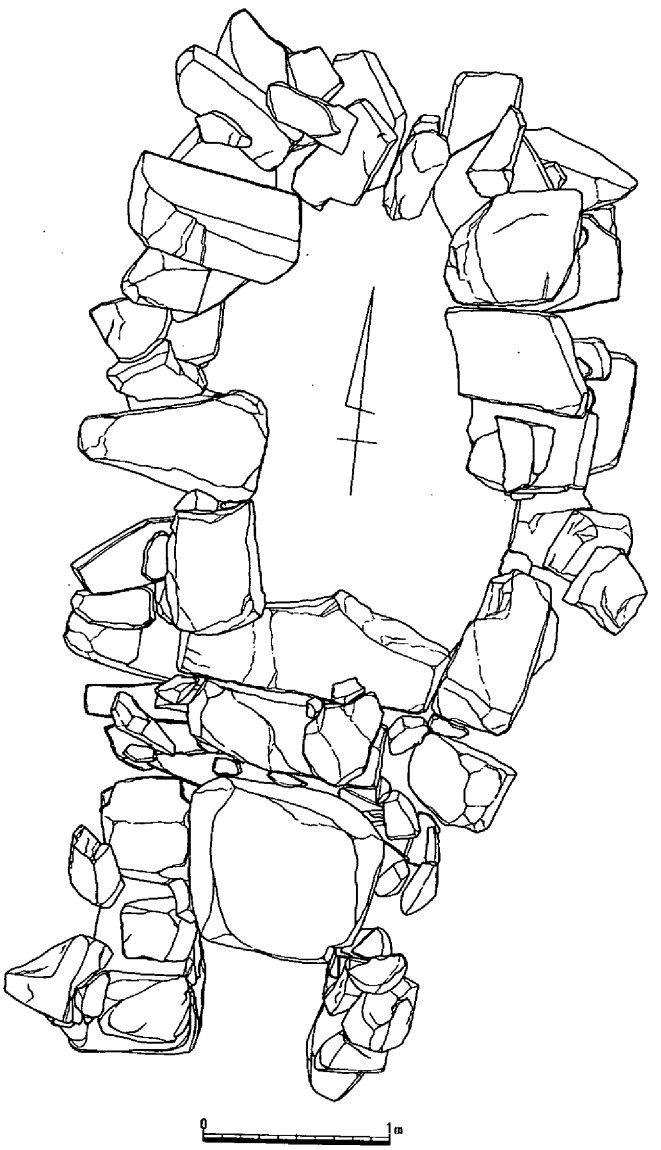
玄室の天井石が１枚も残存しなかったが、奥壁部分や玄門から羨道にかけては破壊されておらず、築造された当時の横穴式石室の様相を良好な状態で保持していた。

奥壁の石組み状況は、他の西山古墳群で検出した横穴式石室とは著しく異なっていた。すなわち、他の古墳の石室では、いずれも１個の巨大で安定した石を基底部に据えていたが、この３号墳では、側壁と同じような比較的小さい規模の石が２個並べて３段以上に積み上げられていたのである。

側壁についてはどうであろうか。玄室と羨道では天井石が乗せられた高さに約1.10ｍの高低差があったと推定され、基底部に据えられた石のレベルや壁面に使われた石そのものの大きさにも違いが認められることから、玄室と羨道はそれぞれ個別に築造されていると考えられた。玄室の側壁には６段または７段の石組みが残存したが、横方向の目地だけでなく、左側壁では基底部に据えられた奥壁から１番目と２番目の石の接点から縦方向にも目地が直線的に存在した。袖の部分には玄室の壁と同じように４個の石が積み上げられ、左側壁や天井石との空間には小さな石を詰めていた。羨道の側壁には４段または５段の石組みが認められたが、左側壁は目地が横方向にほぼ直線的になっていたが、右側壁は使われている石が小さくて無雑作に積み上げられた状態であり、目地が通らずに複雑な線を描き、不安定な様相を呈していた。

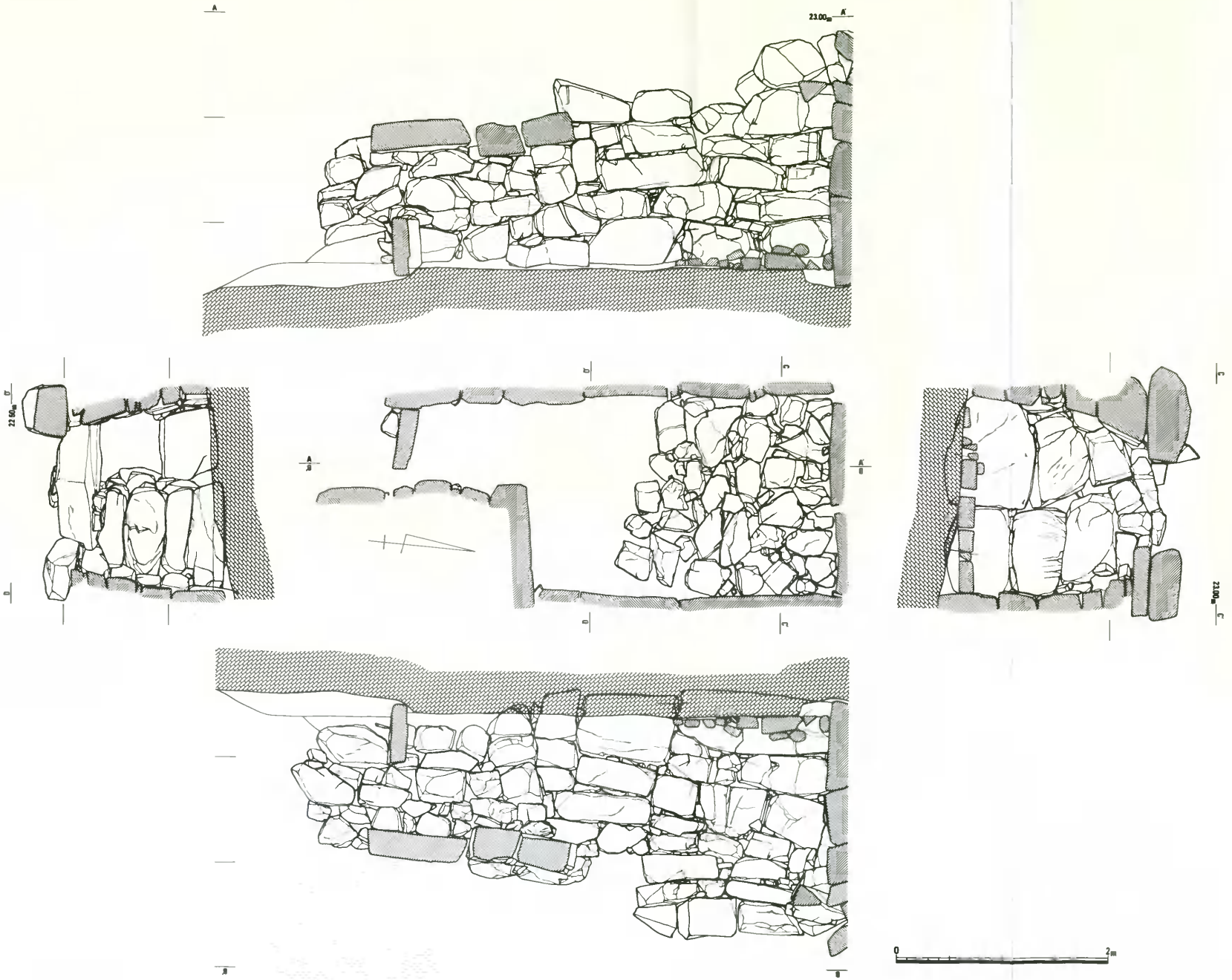
奥壁に近い位置で石室の断面を観察すると、左右両側壁とも緩やかに内傾して立ち上がる「持ち送り」の状態になっていた。また玄室の平面形は主軸方向にやや長い正方形に近い形態を呈し、それに幅が狭くて短い羨道が接続した構造であった。石室入口に近い羨道には閉塞石が立った状態で存在し、玄室床面の奥壁側には板石が敷き詰められていた。

３号墳の埋葬施設である横穴式石室の計測値は、玄室長2.80ｍ・羨道長2.00ｍになる全長4.80ｍ・奥壁幅1.90ｍ・玄門での玄室幅1.75ｍ・玄門での羨道幅0.75ｍ・石室入口での羨道幅0.80ｍを測り、床面から天井石までの高さは、玄室の奥壁部分2.30ｍ以上・羨道の玄門部分1.20ｍ・羨道入口部分1.05ｍであった。



第46図　３号墳石室上面実測図（1/40）

第47図　３号墳墳丘土層断面（1/40）



第48図　３号墳石室実測図（1/40）

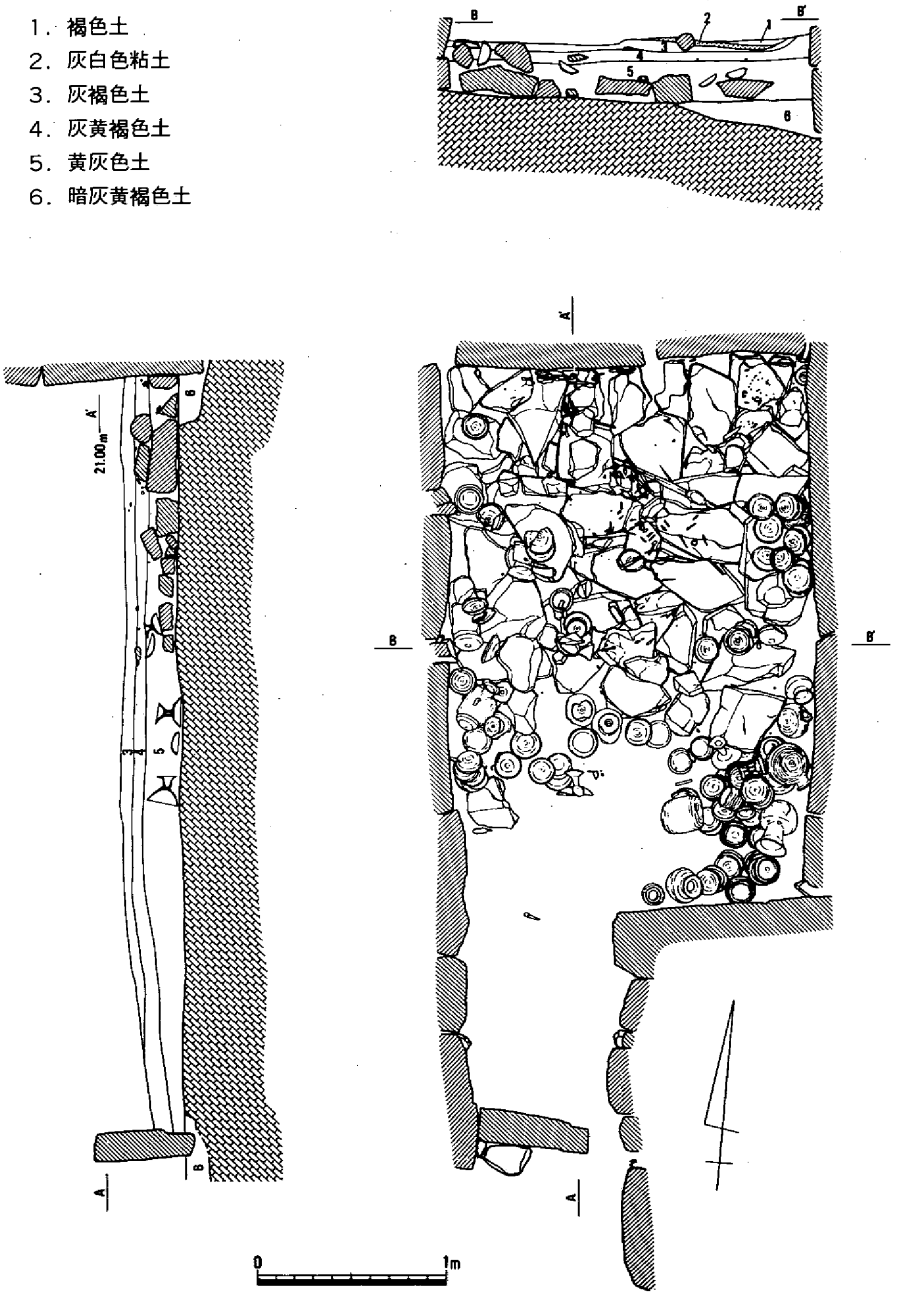
遺物出土状況（第49図、巻頭図版２－１・２－２、図版22－１・22－２・22－３）

３号墳の横穴式石室は、玄室の天井石が１枚も残存しなかったので墳丘の中央部に大きな穴が認められたが、意外にも石室内は撹乱されることなく埋葬された当時の様相を良好な状態で留めていた。

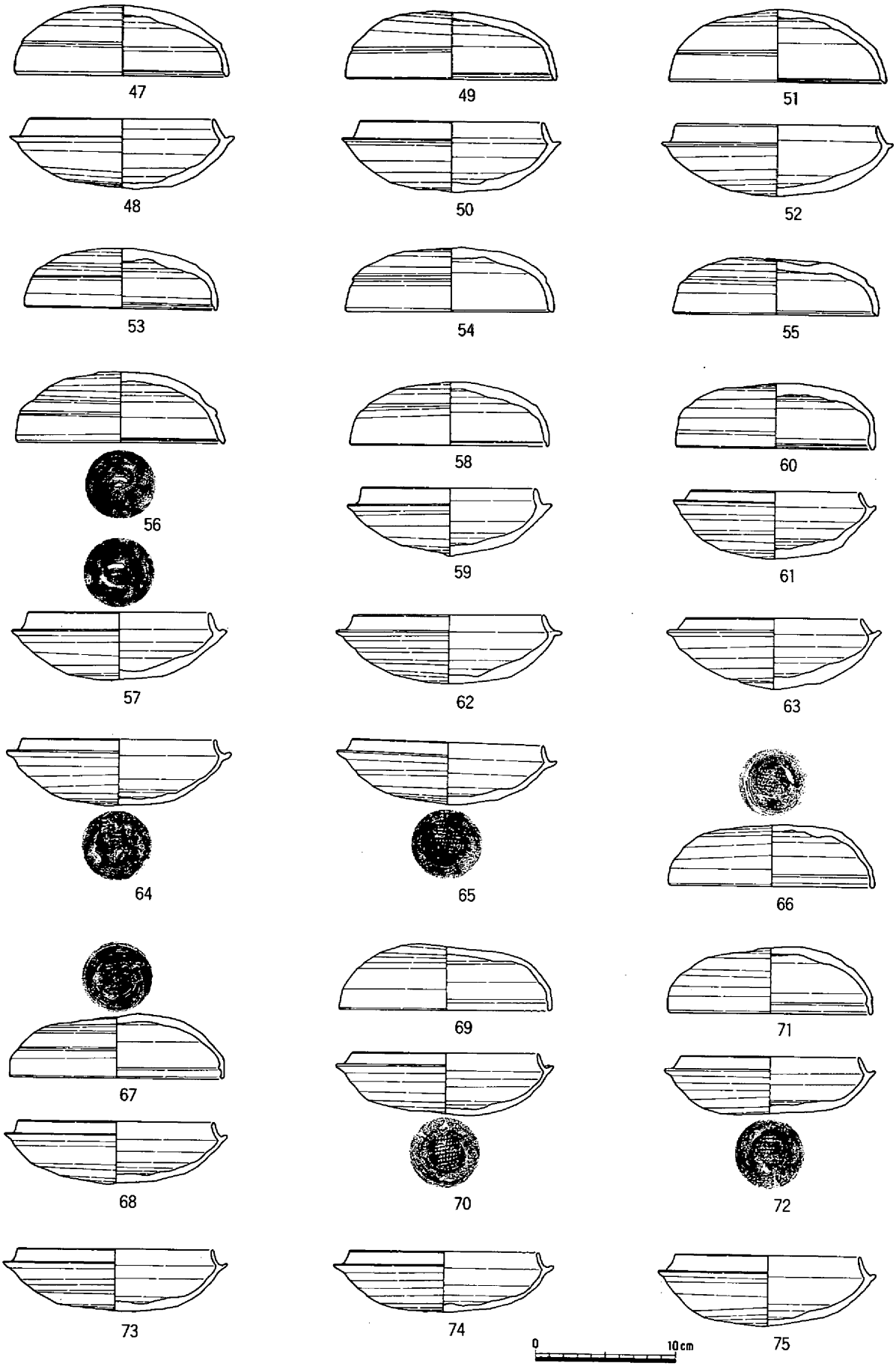
石室内に木棺痕跡を検出するために土層断面観察用の畦を残して調査を行ったところ、玄室の床面から約30cm上位の左側壁に近接した地点で、幅約80cmを測る石室の主軸と同じ方向の灰白色粘土の痕跡を確認し、杯身と杯蓋以外に大刀と２点の耳環が出土した。さらに玄室の床面を掘り下げると、奥壁に面した部分に敷き詰められた板石が存在し、その上面から土器や鉄器のみならず多量の玉類が出土した。この板石上面での遺物出土状況を記録して板石を取り除くと、床面に密着した状態で多量の玉類だけが出土した。このように３号墳の横穴式石室の玄室には、３面にも及ぶ埋葬面が層位的に検出され、多量で多種多様の遺物が出土したのである。

なおその他に玉類が集中して出土した地点は、奥壁と右側壁が接する隅の部分と、玄門から約80cm玄室に入った右側壁に近い所があった。土器は玄室の広い範囲から平均的に出土したが、裾に面した左側壁に近い位置からは、土師器の広口壺を含む多量のものが複雑に重なるようにして確認された。鉄器も土器と同様に玄室の広い範囲から出土したが、奥壁に接する地点と奥壁方向に少し寄った中央部からは、鏃が束になった状態でまとまって出土した。

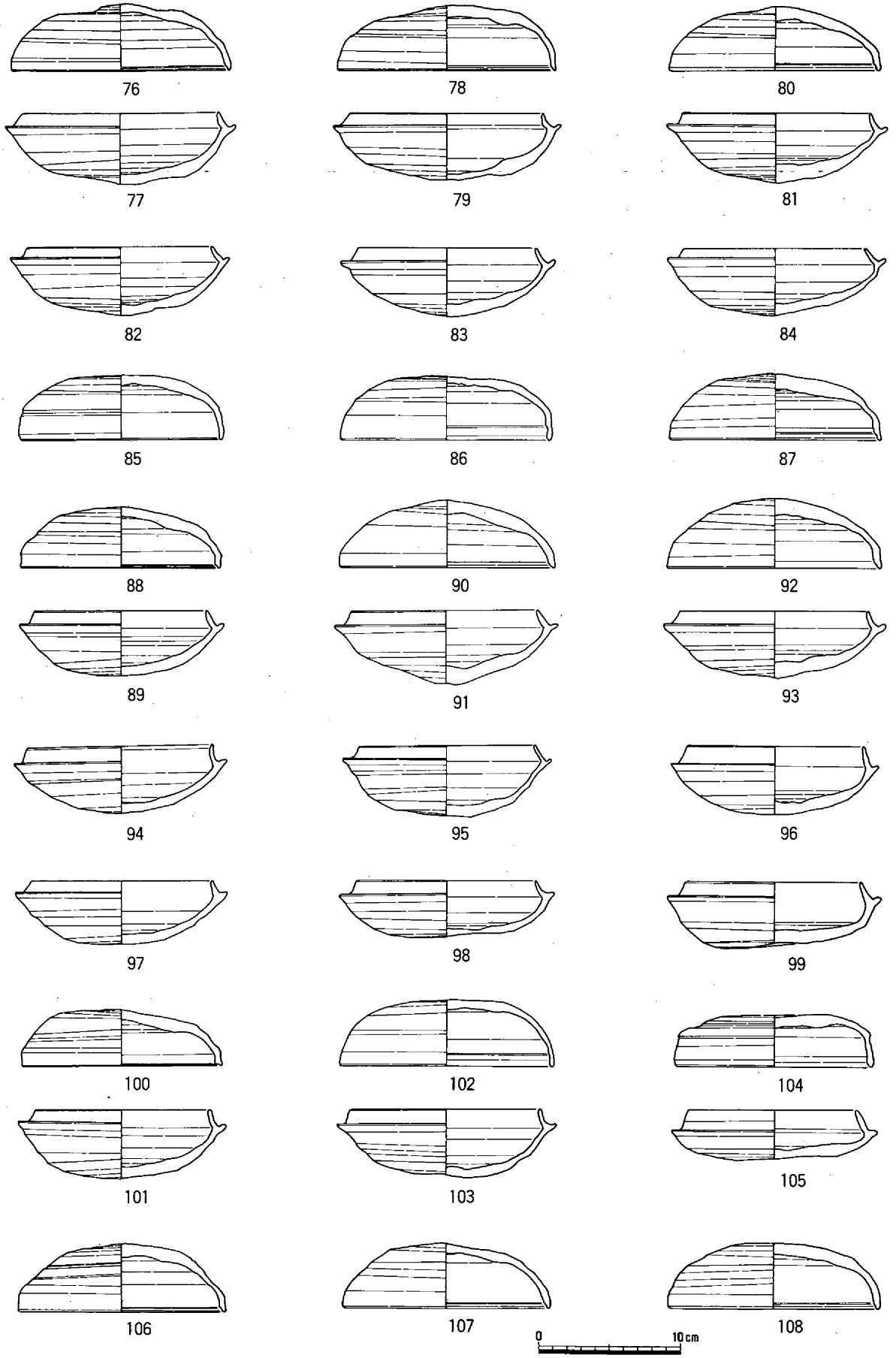
羨道部分も精査したが、遺物は何も検出できなかった。



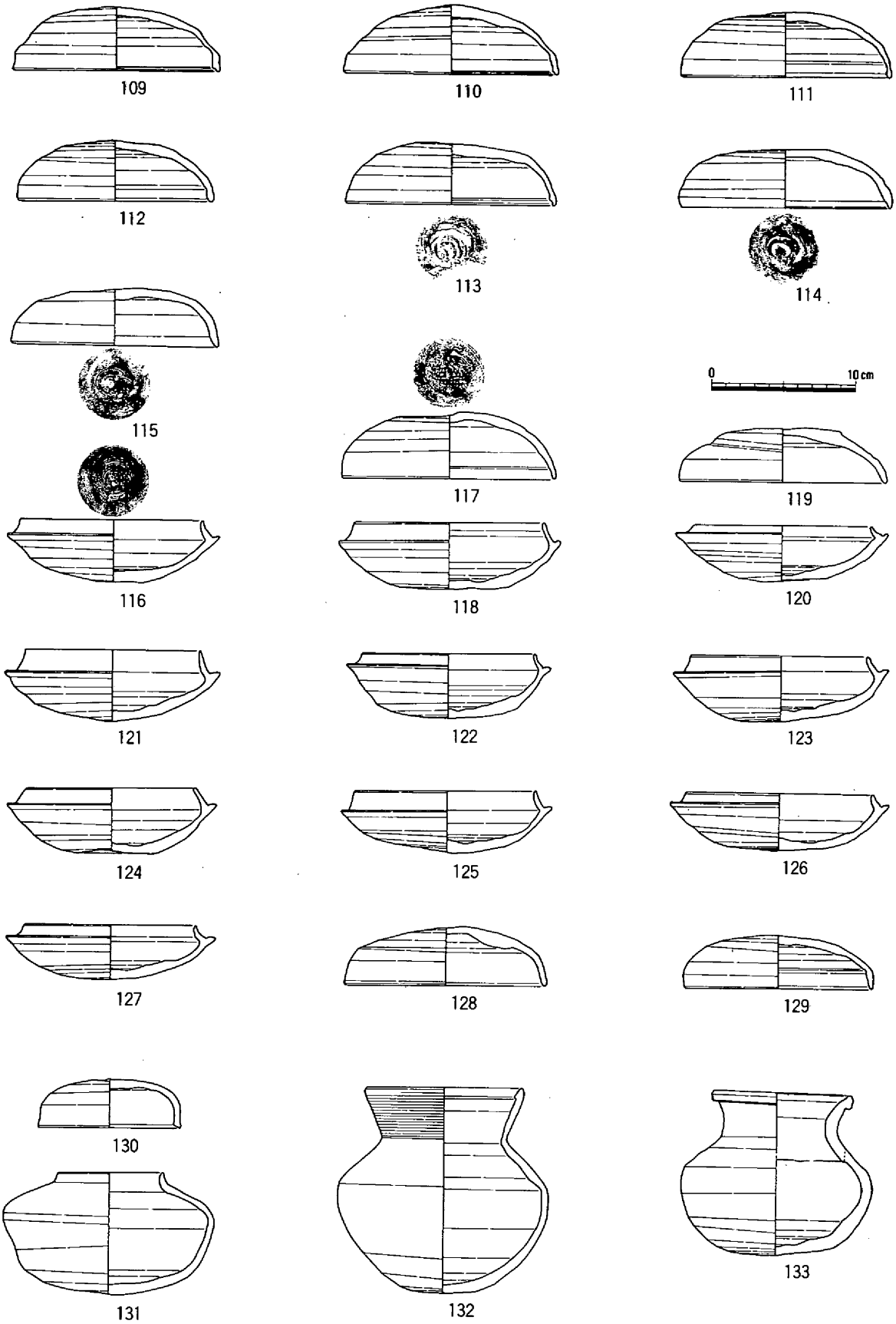
第49図　３号墳遺物出土状況（1/40）



第50図　３号墳出土土器（１）(1/4)



第51図　３号墳出土土器（２）(1/4)



第52図　３号墳出土土器（３）(1/4)

出土遺物

須恵器（第50～55図、図版33～36）

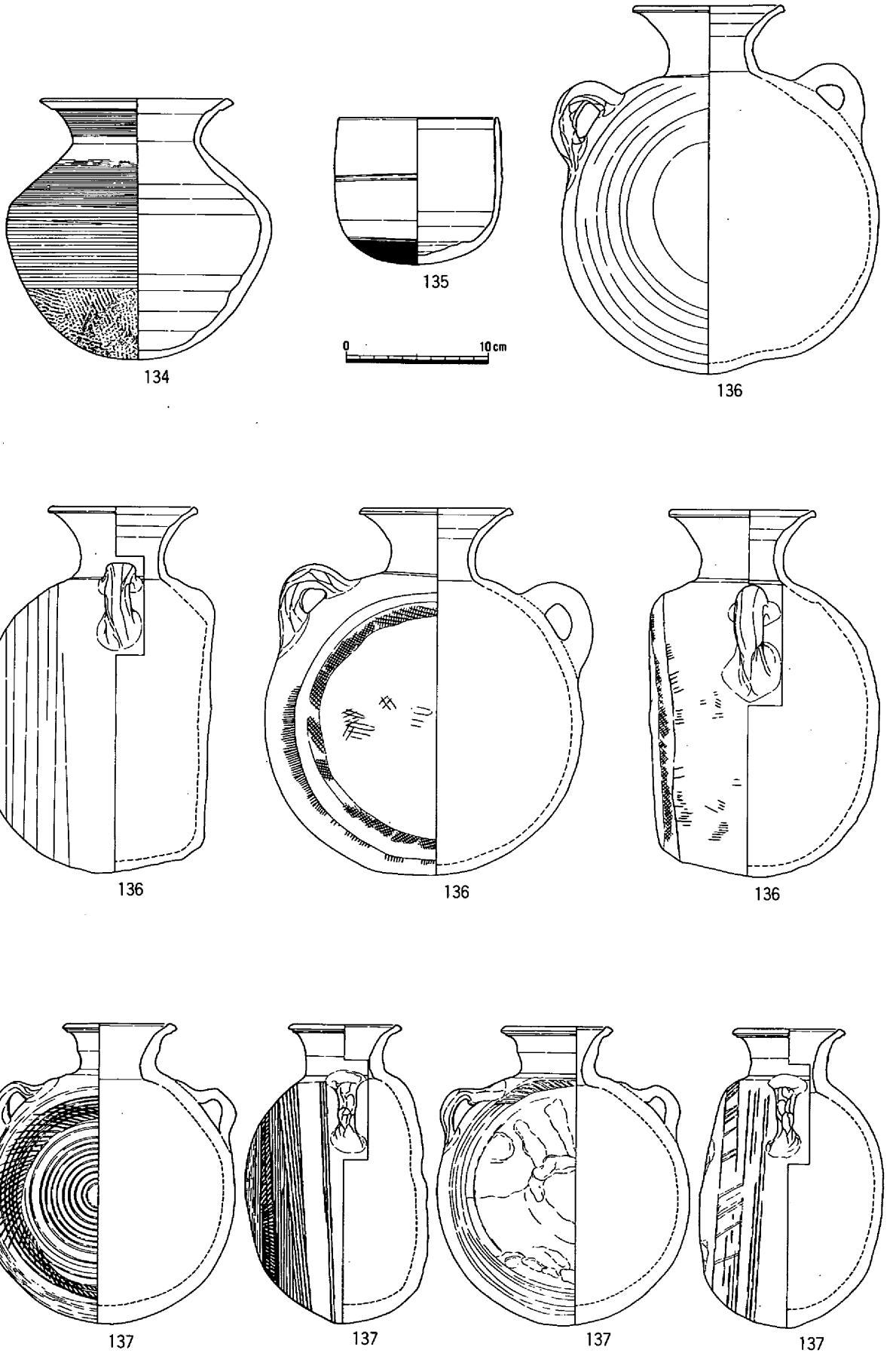
杯身・杯蓋　3号墳の横穴式石室内から出土した杯身と杯蓋は、口縁部を合わせた状態でセットになったまま出土したものや、内部に赤色顔料や有機物が入れられていたものなどが存在した。これらの出土地点および法量や色調を精査した結果、21組42点のセット関係が判明した。

杯身は口径11.7～14.1cm・器高3.5～5.2cmで、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行っているが、回転方向は法量の大きいものが右、小さいものが左である。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、法量の大きいものの内面底部には仕上げナデを加えている。また杯蓋とセットになる1点（120）だけは、外面の底部がヘラ切り未調整である。外面の底部にタタキ痕跡が残存するもの（64・65・70・72）や、内面の底部に同心円の当て具痕跡を有するもの（57・116）がある。杯蓋は口径13.2～15.5cm・器高3.7～5.2cmで、外面の天井部と体部の境に稜が認められるものや、内面の口縁端部に段を有するものが多い。外面の天井部はヘラケズリを行っているが、回転方向は法量の大きいものが右、小さいものが左である。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、法量の大きいものの内面天井部には仕上げナデを加えている。120とセットになる1点（119）だけは、外面の天井部がヘラ切り未調整である。外面の天井部にタタキ痕跡が残存するもの（66・67・117）や、内面の天井部に当て具痕跡を有するもの（56・113～115）などがあり、焼成は良好なものが多く、青灰色または灰色を呈している。

壺蓋　131の短頸壺とセットになる蓋（130）は、口径7.6cm・器高3.5cmを測り、口縁端部に面が認められる。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。この蓋は完形品で、内面の天井部に赤色顔料が付着している。

壺　完形品または復元完形品の壺が4点（131～134）出土している。蓋（130）を伴う焼成が良好で自然釉が付着している短頸壺（131）は、口径7.2cm・器高14.4cm・胴部最大径8.6cmを測り、口縁端部は丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。内面の底部には同心円の当て具痕跡が残存し、内面の肩部に有機物が付着している。口縁部が斜め上方へ直線的に立ち上がる壺（132）は、口径10.4cm・器高14.5cm・胴部最大径14.1cmを測り、口縁端部が肥厚して内面に断面が三角形の突起が認められる。外面の底部は回転方向が左のヘラケズリを行い、外面の口縁部にはカキメが施されている。内面全体と外面の頸部から体部にかけてヨコナデを行い、内面の底部には仕上げナデを加えている。全体の器壁が厚くて口縁部が緩やかに外湾して立ち上がる壺（133）は、口径9.5cm・器高13.3cm・胴部最大径11.2cmを測り、口縁端部が上下に肥厚して外側に面が認められる。外面の底部は回転方向が左のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。内面の肩部には粘土の接合部分が残存し、内外面とも有機物が付着している。134の壺は、口径12.2cm・器高18.4cm・胴部最大径18.3cmを測り、緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部が、わずかに肥厚して外側に面が認められる。外面の底部にはタタキ痕跡が存在し、外面の口縁部から体部にかけてカキメが施されている。外面の口縁端部と内面全体はヨコナデを施し、内面の底部には同心円の当て具痕跡が残存している。外面の頸部は、カキメの上面にヨコナデを加えている。

椀　口径8.3～11.2cm・器高11.7cmの椀（135）は、口縁端部を丸く仕上げ、外面の体部に1条の凹線が認められる。外面の底部はカキメを施しているが、それ以外は全体にヨコナデを行っている。

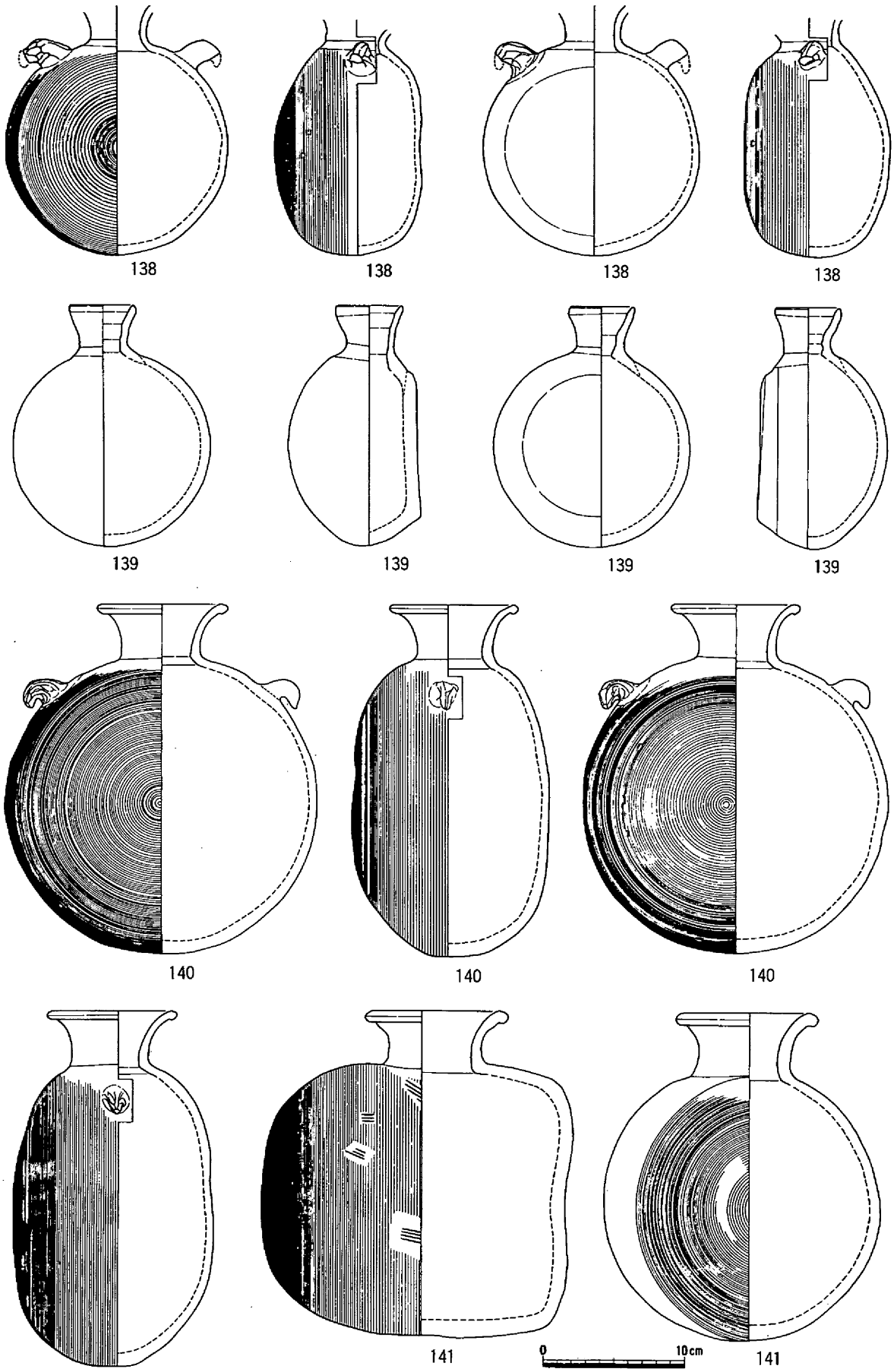


第53図　３号墳出土土器（４）(1/4)

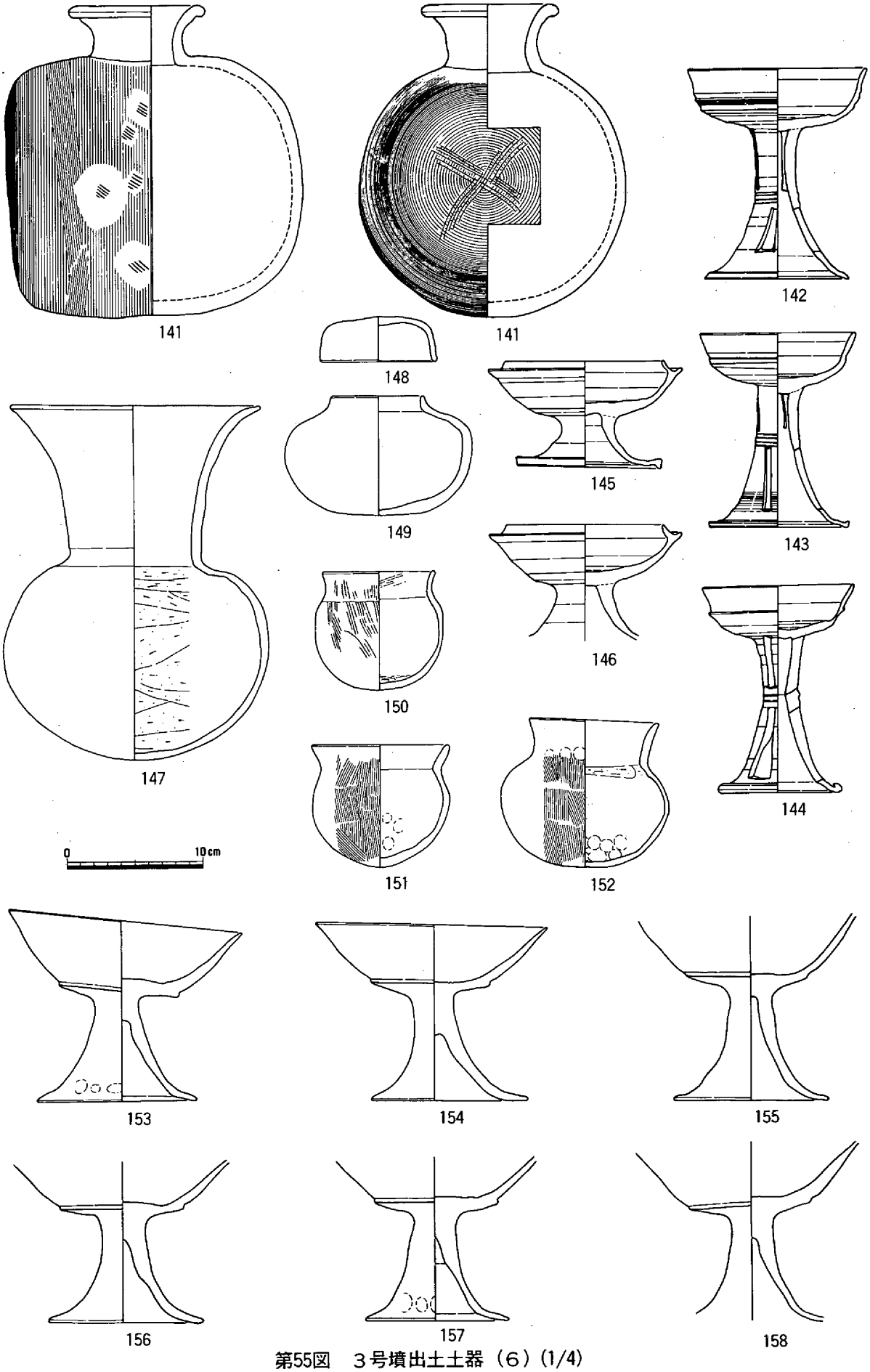
提瓶　形態の異なる5点の提瓶が出土しており、耳の形状で分類すると、環状（136・137）・鉤形（138・140）・耳なし（139）になる。環状の耳を有する提瓶には、大形のもの（136）と小形のもの（137）が認められる。前者は、口径9.9～10.2cm・器高25.9cm・胴部最大径22.3cm・胴部最大厚16.3cmを測り、焼成は極めて良好で黒褐色を呈している。胴部の正面はヨコナデを行い、胴部の背面にはタタキ痕跡が残存している。内面全体と外面の頸部から口縁部にかけてヨコナデを施し、外面全体に自然釉が付着している。後者は、口径7.2cm・器高21.0cm・胴部最大径17.9cm・胴部最大厚12.3cmを測り、片方の耳が欠損している。胴部の正面には同心円に交差する放射線状の文様を描き、胴部の背面には指頭圧痕やカキメが認められる。外面の口縁部と内面全体はヨコナデを施し、全体に灰色を呈している。鉤形の耳を有する提瓶には、小形で口縁部を欠損しているもの（138）と大形で完形品のもの（140）が存在する。前者は、胴部最大径15.2cm・胴部最大厚10.0cmを測り、外面の口縁部と内面全体はヨコナデを施している。胴部の正面には全体にカキメが認められ、胴部の背面には指頭による不定方向のナデを施している。後者は、口径8.1cm・器高24.4cm・胴部最大径21.4cm・胴部最大厚13.8cmを測り、焼成は極めて良好で自然釉が付着している。外面の胴部は全体にカキメを施し、外面の口縁部と内面全体はヨコナデを施している。小形で肩部に耳を有しない提瓶（139）は、完形品で焼成はやや不良である。外面の胴部正面と口縁部および内面全体はヨコナデを施し、外面の胴部背面にはヘラケズリが行われている。

横瓶　141の横瓶は、玄室の袖に近接した地点から出土した。口径8.7cm・器高21.8cm・胴長径21.6cm・胴短径19.4cmを測り、焼成がやや不良で灰色を呈している。斜め上方へ外反して立ち上がった口縁の端部は、肥厚して丸く仕上げている。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。外面の凸面部にはカキメが存在し、凹面部にはカキメの上面に6条から8条のクシ描きによる「X」字状の斜行文が認められる。

高杯　3号墳の横穴式石室からは、長脚無蓋高杯3点（142～144）と蓋を見つけることができなかった短脚有蓋高杯2点（145・146）が出土した。142の長脚無蓋高杯は、口径12.8cm・器高15.3cm・脚底径10.2cmを測り、脚部には3方向で2段の透しが存在する。上段の透しは幅の狭い直線状になったもので、下段のそれは細長い台形を呈している。これらは上段の透しの間に下段の透しを配した形態になり、上段と下段の透しが互い違いになっている。外面の杯部下半は回転方向が右のヘラケズリを行い、杯部の中位には波状文が認められる。外面の脚部中位には2条の浅い凹線が存在し、脚端部の器壁は薄くなって丸く仕上げている。143の長脚無蓋高杯も3方向で2段の透しを有して、上段と下段の透しが互い違いになっている。口径11.0～11.2cm・器高14.2cm・脚底径9.9～10.2cmを測り、脚端部が上下に拡張して外側に面が認められる。外面の杯部下半は右方向のヘラケズリを行い、それ以外はヨコナデを施している。全体に焼成は良好で、自然釉が付着した灰黄色を呈している。144は3方向で2段の透しを有する長脚無蓋高杯であるが、上段と下段の透しが直線状に並んで存在し、脚端部が上方へ折れ曲がっている。口径10.7～10.9cm・器高15.2cm・脚底径9.1cmを測り、内外面とも全体にヨコナデを施している。145の短脚有蓋高杯は、口径11.4～11.8cm・器高7.7cm・脚底径10.2～10.4cmを測り、口縁端部は斜め上方へ内傾して立ち上がって丸く仕上げ、脚端部は上下に拡張して外側に面を有する。外面の杯部下半は回転方向が右のヘラケズリを行っているが、その他はヨコナデを施し、内面の杯底部には仕上げナデが加えられている。口径11.1～11.5cmを測る146の短脚有蓋高杯は脚部を欠損しているが、成形や調整の手法が前述した145の完形品と同じである。



第54図　３号墳出土土器（５）(1/4)



第55図　３号墳出土土器（６）(1/4)

土師器（第55図、図版36）

壺　3号墳の埋葬施設である横穴式石室からは、土師器の壺と推定される器形の土器が3点（147・149・152）出土した。147の広口壺の形態をした大形の土器は、口径18.0cm・器高25.9cm・胴部最大径19.4cmを測り、口縁部は緩やかに外湾して斜め上方へラッパ状に開き、端部は全体に丸く仕上げている。胴部は玉ねぎ状の球形を呈し、底部は丸底である。内面の胴部はヘラケズリを行い、それ以外は全体にヨコナデを施しているが、外面の胴部にはタタキ痕跡がかすかに認められる。この壺形土器の焼成は良好で、全体に橙色を呈している。148の蓋とセットになる短頸壺（149）は、口径6.6cm・器高8.7cm・胴部最大径13.8cmを測り、口縁は短く立ち上がって端部を丸く仕上げている。内外面とも器表面が磨滅して調整が不明であるが、内面の胴部はヘラケズリ、それ以外はヨコナデを施しているようである。152の壺形土器は、口縁部の器壁が厚くて緩やかに斜め上方へ立ち上がり、端部は全体に丸く仕上げている。口径9.1cm・器高10.8cm・胴部最大径12.3cmを測り、外面の全体と内面の口縁部に丹塗りを施している。内面の胴部はヘラケズリを行い、外面の胴部には縦方向のハケメが認められる。頸部から口縁部にかけては内外面ともヨコナデを施しているが、外面の頸部には指頭圧痕が残存している。底部は丸底を呈するが、内面には指頭圧痕が顕著に認められる。

壺蓋　149の短頸壺とセットになる蓋（148）は、口径8.3cm・器高3.3cmを測り、口縁端部はわずかに外湾して丸く仕上げている。内外面とも全体にヨコナデを施し、外面の天井部には指頭圧痕がかすかに残存している。この蓋の焼成は良好で、全体に淡橙色を呈している。

甕　150の甕形土器としたものは、頸部から口縁部にかけて緩やかに外湾しながら斜め上方へ立ち上がり、口縁の端部は丸く仕上げている。口径8.0cm・器高8.7cm・胴部最大径9.4cmを測り、底部は丸底で内面に指頭圧痕が残存する。内面の口縁部は斜め方向のハケメの上面にヨコナデを施し、外面は全体に縦方向のハケメの上面にヨコナデを加えている。この土器の焼成は良好で淡橙色を呈し、外面の底部に黒斑が認められる。151の甕形土器は、頸部から口縁部にかけて「く」字状に外反し、口縁端部は全体に丸く仕上げている。口径9.9cm・器高8.9cm・胴部最大径10.2cmを測る完形品で、内面の胴部はヘラケズリを行っているが指頭圧痕も認められる。外面には縦方向のハケメが存在し、口縁部は内外面ともヨコナデを施している。

高杯　3号墳の横穴式石室からは、形態の酷似した6点の高杯（153～158）が出土した。いずれも器表面の磨滅が著しく、調整手法が観察できないものが多い。

153の高杯は、器形が著しく歪んでいる。口径17.0cm・器高12.2～15.0cm・脚底径11.3cmを測り、口縁部は器壁が薄くなって斜め上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げている。杯部の上半部と下半部の境には稜が認められ、脚部は「ハ」字状に開いて端部の全体を丸く仕上げている。内外面とも全体にヨコナデを施しているようであるが、外面の脚下端部には指頭圧痕が残存している。この土器の焼成は良好で、全体に橙色を呈している。154の高杯は、口径16.9cm・器高12.9cm・脚底径10.9cmを測り、杯部の器壁は前述した153の高杯よりも薄く、脚部の器壁は逆に厚くなっている。155～157の高杯は、いずれも口縁端部を欠損している。脚底径は、155が10.9cm、156が11.1cm、157が10.2cmである。158の高杯は、口縁端部も脚端部も欠損している。

以上に説明した出土遺物は、須恵器も土師器も3号墳の横穴式石室の内部で検出されたものばかりである。この3号墳の墳丘や周溝を調査していた時に大形の甕が墳端周辺から出土したが、6号墳から転落したことも考えられたため、西山古墳群表土出土土器（第118・119図）として取り扱った。

鉄器（第56～64図、図版44・56～61）

大刀　507の大刀は、推定刀身長55.0cmを測る小形のもので、刀身全体がわずかに内湾している。関付近での刀身幅2.8cm・茎幅2.4cmで、関は片側のみ段を有する。茎部は関に近い部分から欠損しているので、目釘穴は不明である。刀身に鞘の木質が付着し、茎には柄の木質が残っている。

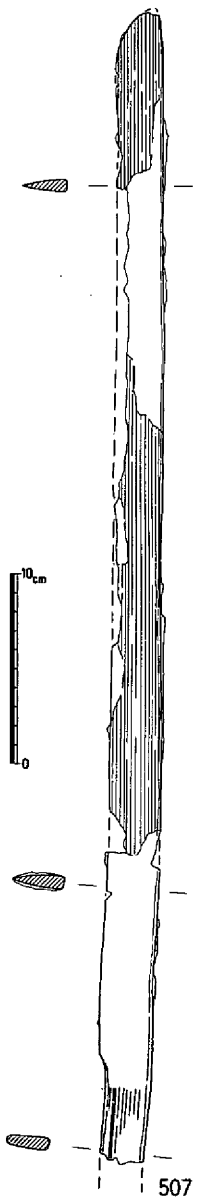
鉄鏃　508～688の鉄鏃は、９種類に分けられる。１類（508・510～537・540～545・603）は、長頸の柳葉式鉄鏃である。鏃身はややずんぐりした形態をなし、両丸造である。刃部は鈍く、明瞭な刃が研ぎ出されていない感じを受ける。２類（538・539・546・547・549～554）は、長頸の柳葉式鉄鏃であるが、鏃身は１類に比べて細長く、片切刃造である。刃部は鋭く研がれている点で、１類とは異なっている。３類（548）は長頸の柳葉式鉄鏃で、鏃身部が片鎬造のものである。４類（509）は長頸の腸抉柳葉式鉄鏃である。浅いながらも逆刺を持っている。鏃身の造りは、両丸造で１類のものに近い。５類（593・594・596～602・604～607・609）は、平根の柳葉式鉄鏃である。鏃身関は外側に突出する形態をなし、その後緩やかに湾曲して頸部につながる。６類（595・613～615）は平根の腸抉柳葉式鉄鏃で、逆刺の比較的深いものである。７類（619）は平根の腸抉柳葉式鉄鏃で、逆刺の浅いものである。８類（616）は平根の方頭式鉄鏃である。上層の撹乱土からの出土で、３号墳に伴うものかどうか疑わしく、型式的にもやや新しい。他の古墳から混入した可能性が強い。９類（618）は平根の長三角形式鉄鏃であるが、ずんぐりした形態で先端部の丸みが強い。なお617は、６類または７類に属すると思われる。

以上に説明した鉄鏃のうち、篦被関部に棘状突起を有するものは平根式鉄鏃の一部（602・613・619）のみで、その他はすべて直角あるいは台形の形態を呈するものである。非常に多数の鉄鏃が副葬されており、鏃身部で計数して長頸式鉄鏃（１～４類）が47本、平根式鉄鏃（５～９類）が21本、合計68本を数える。これらの鉄鏃の茎には、糸巻き、矢柄の木質、矢柄表面の樹皮による巻きが残存しているものが多い。また布目の付着しているもの（508～510・594）もあり、矢の束を布で包んで副葬したものと思われる。

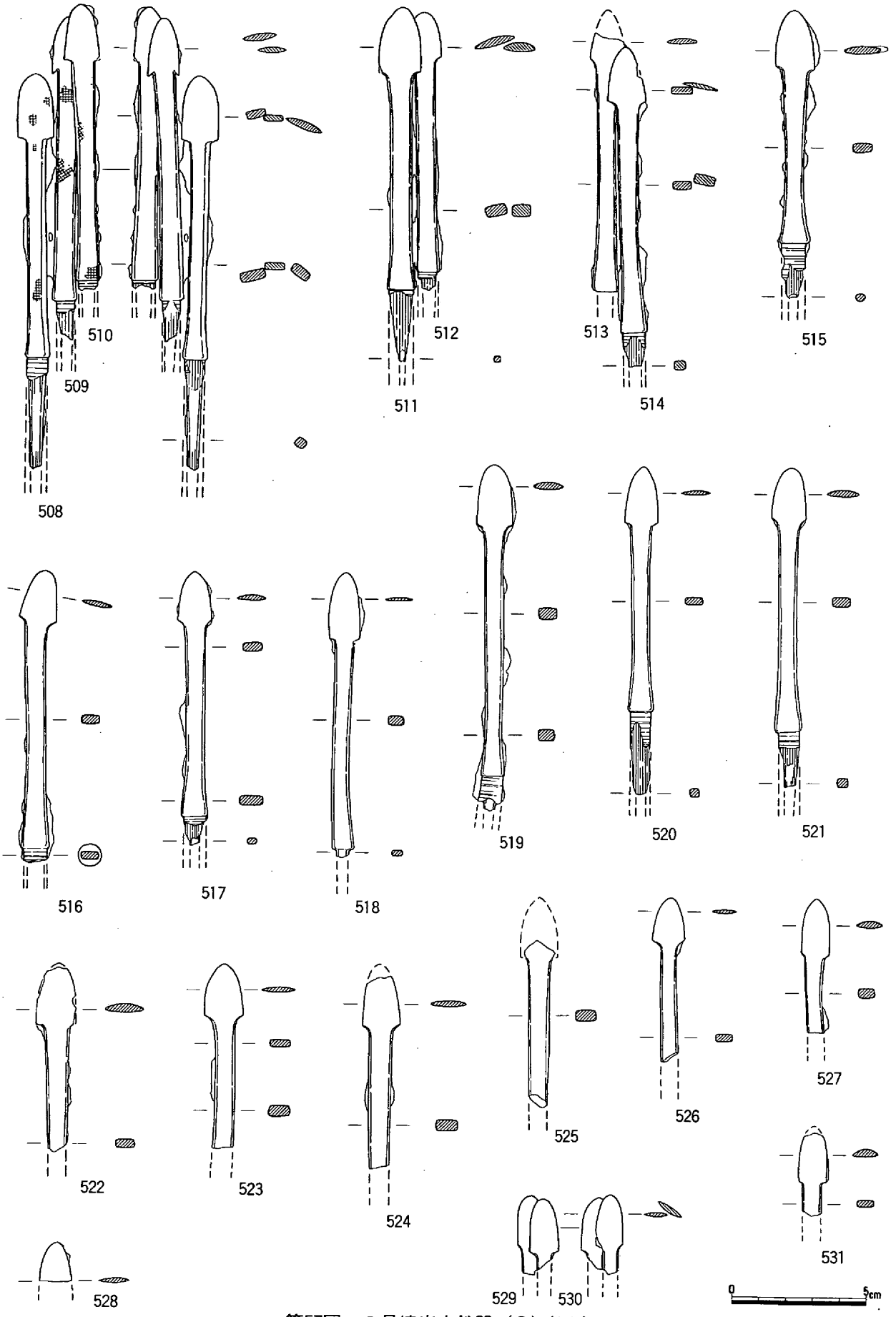
盛矢具（胡禄）金具　689～691は盛矢具（胡禄）金具である。幅約２cmの鉄製の帯に、２列に多数の鋲を打ったものである。689と691にみられるように、端部はやや斜めに切り落とされる形状をなしている。裏面には金具の下に布目が、さらにその下に革が付着している。おそらく盛矢具本体は革製または木に革を張ったもので、その上に布を張り、その上から金具を打ちつけていると思われる。なお金具の表面は黒色を呈し、光沢も見られるので、漆を塗っている可能性が考えられる。

留金具　692は鉄製の留金具である。破片だが爪形を呈すると思われ、２か所を鋲で止めるようになっている。裏面には689～691と同様に布目と革が付着しているので、これも盛矢具（胡禄）金具の一部の可能性が強い。

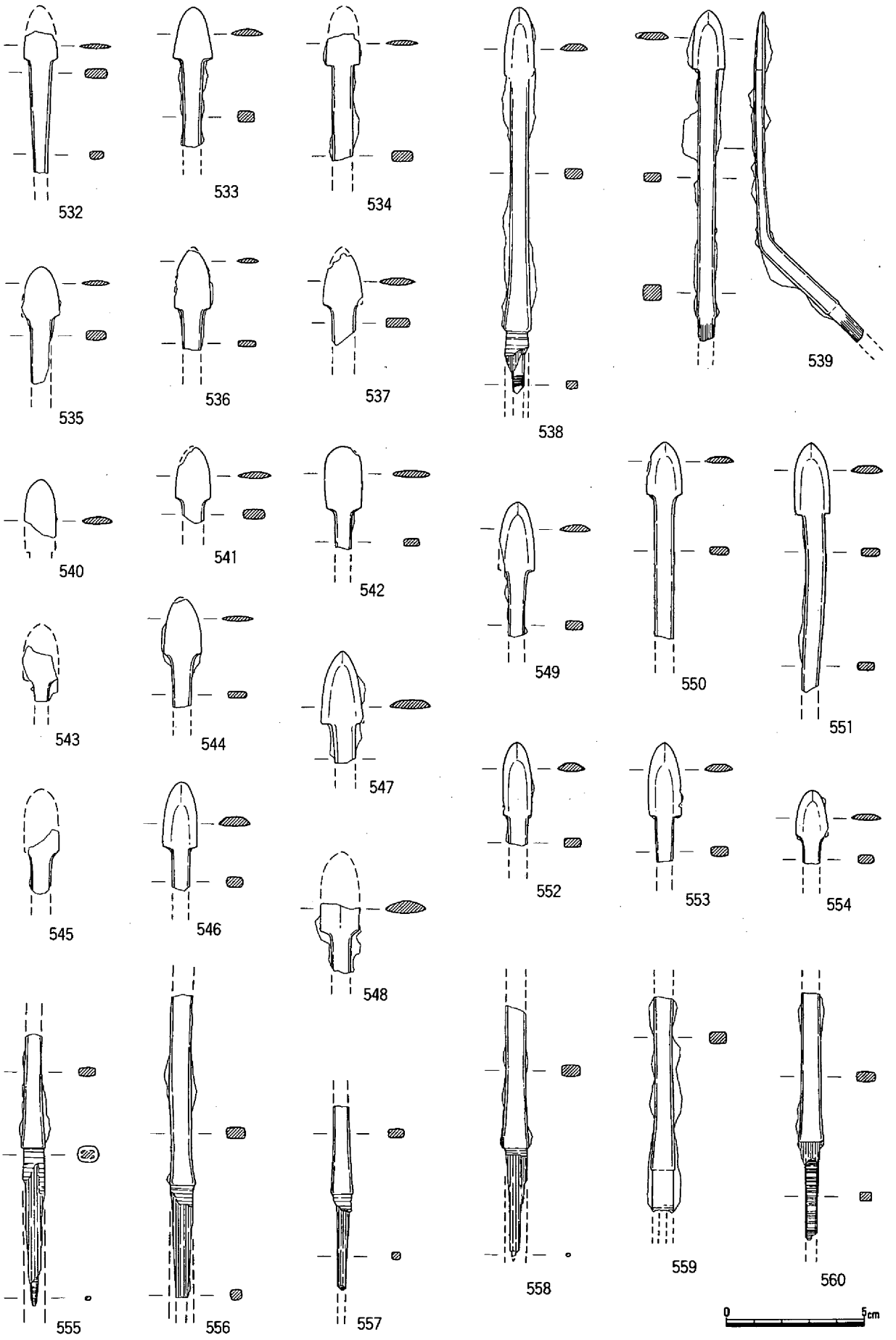
弓飾金具　693～696は鉄製の弓飾金具である。２号墳出土のもの（104）と構造的には同じだが、やや小形で中央の棒状部分の断面形は方形を呈している。これらの弓飾金具には、横位の木目が付着している。



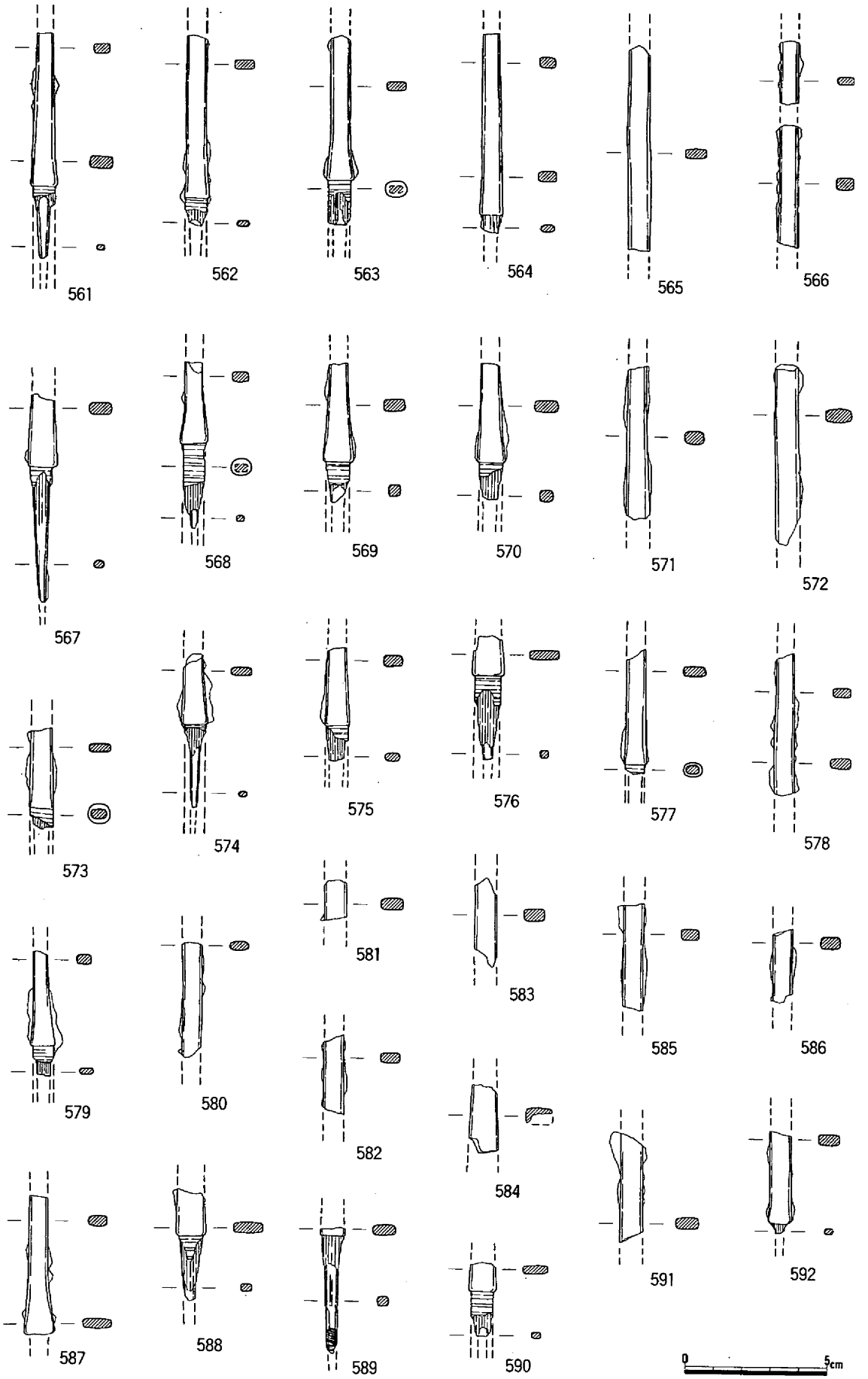
第56図　３号墳出土鉄器（１）(1/4)



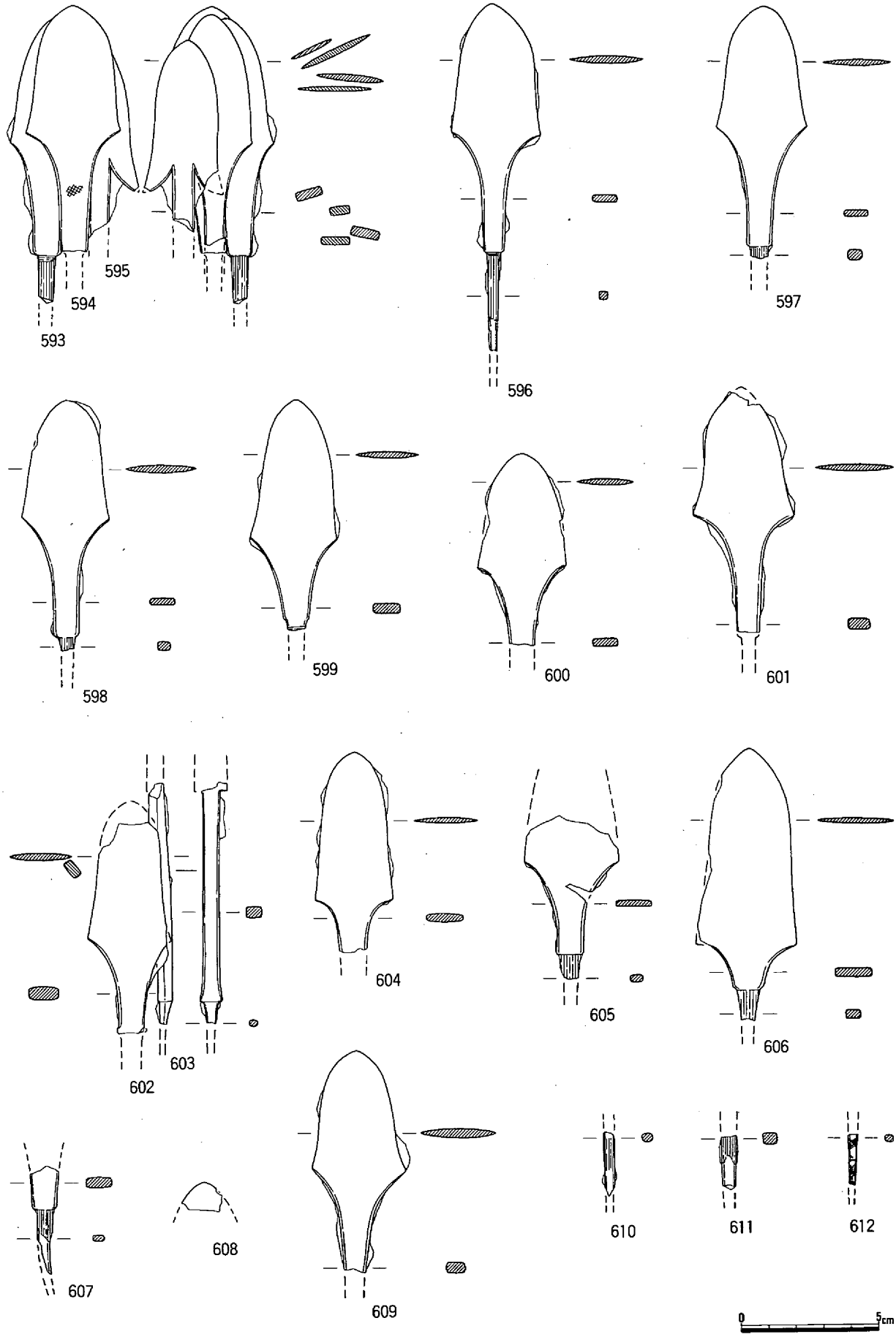
第57図　３号墳出土鉄器（２）(1/2)



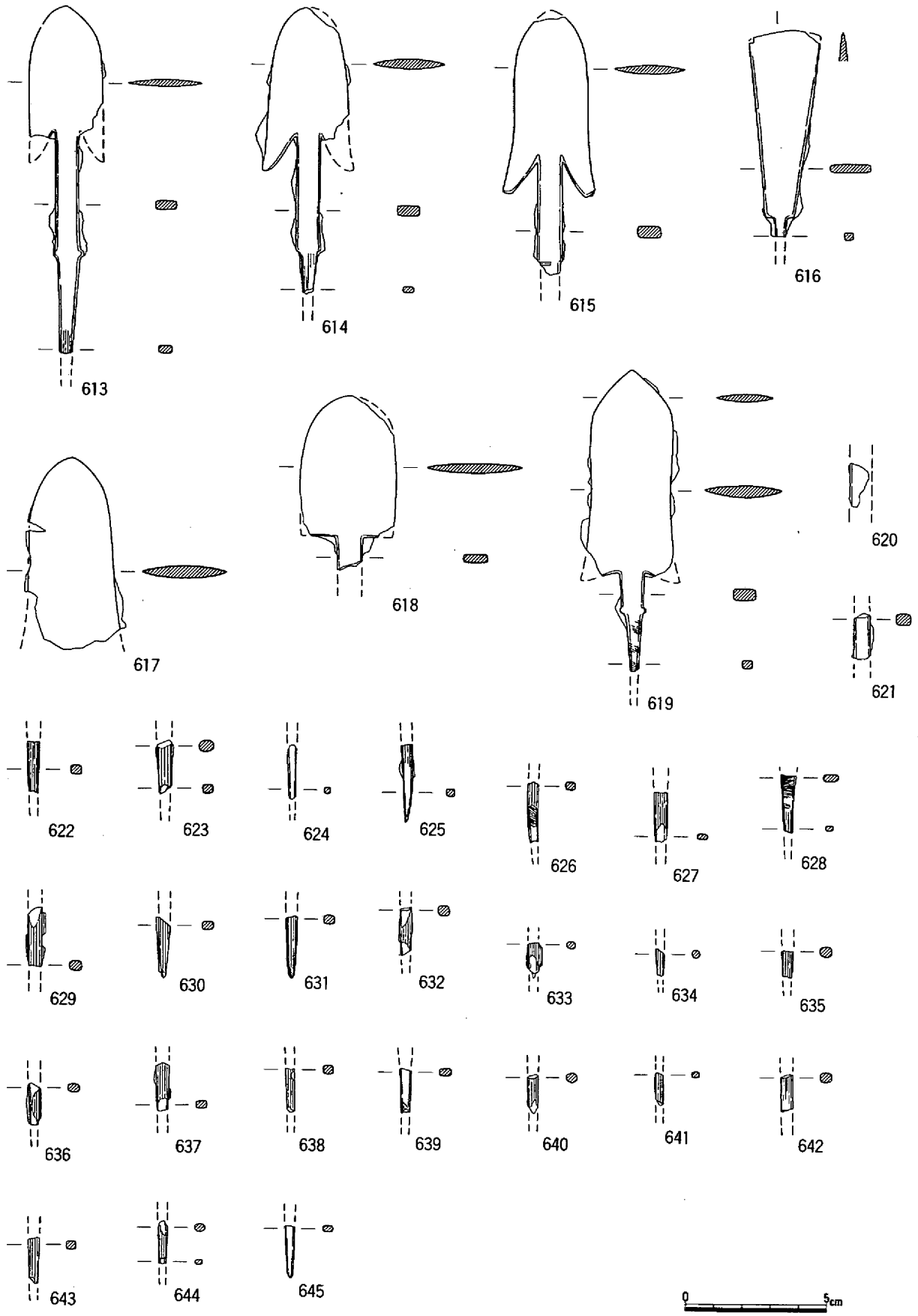
第58図　３号墳出土鉄器（３）(1/2)



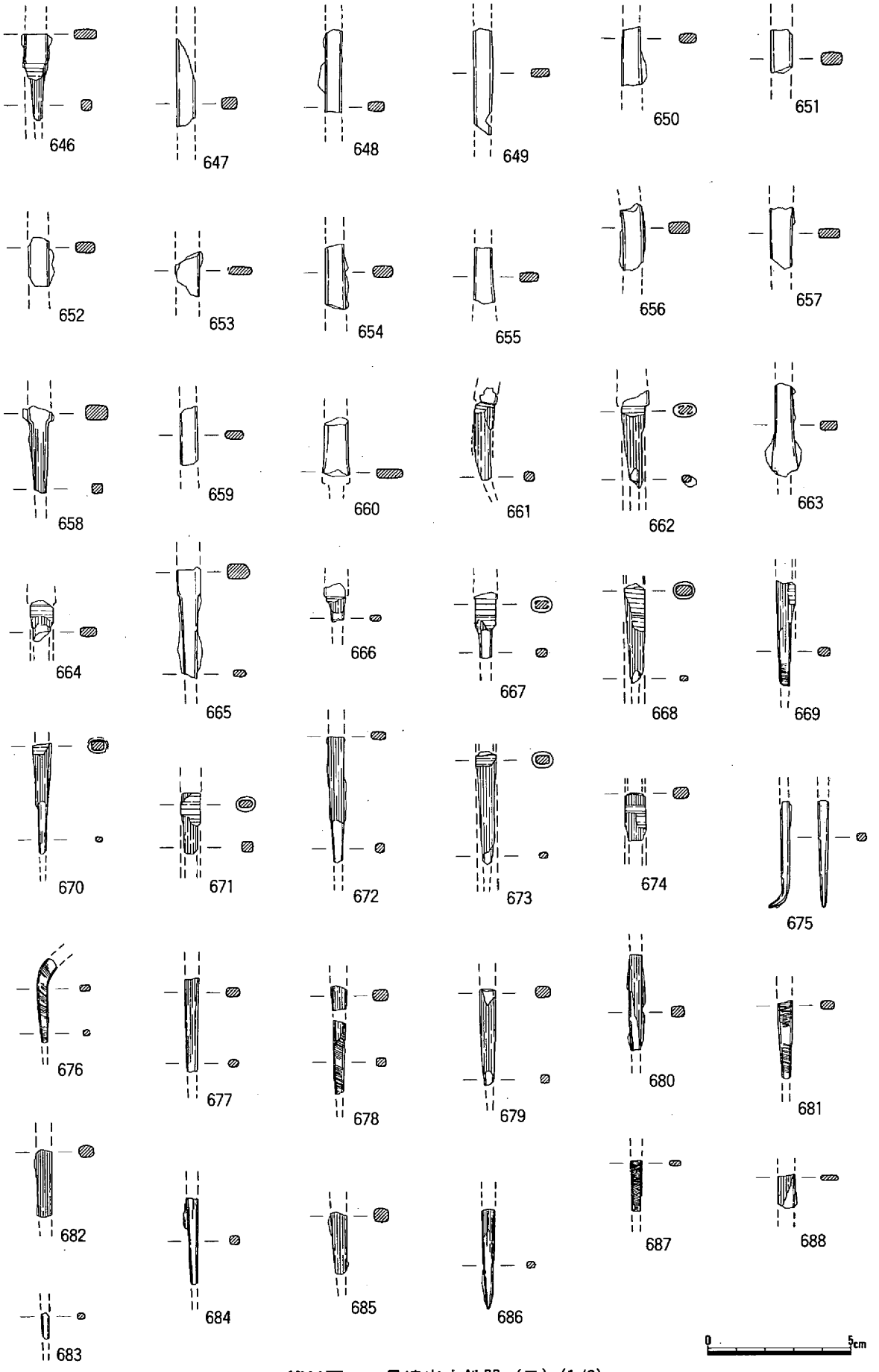
第59図　３号墳出土鉄器（４）(1/2)



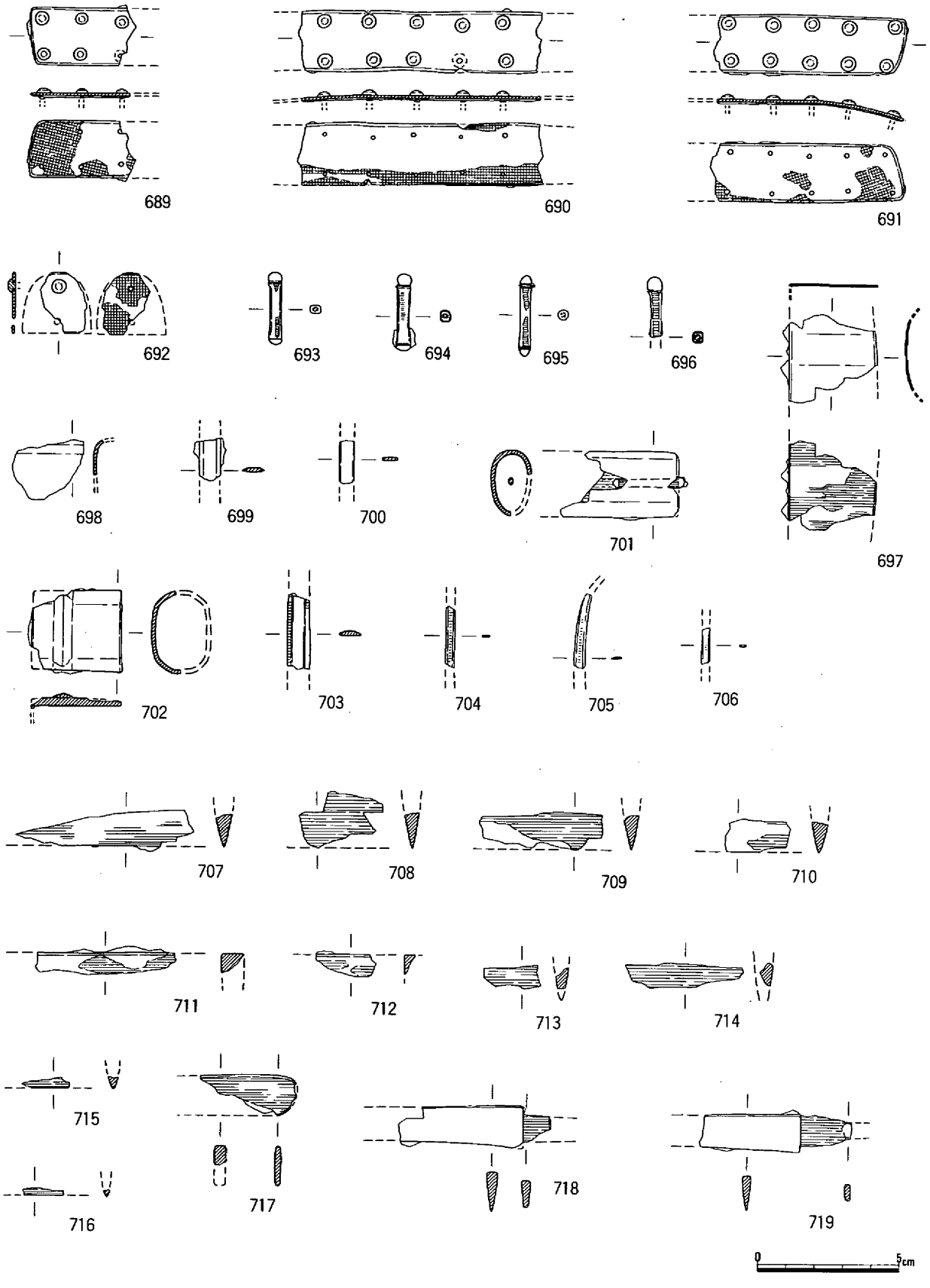
第60図　３号墳出土鉄器（５）(1/2)



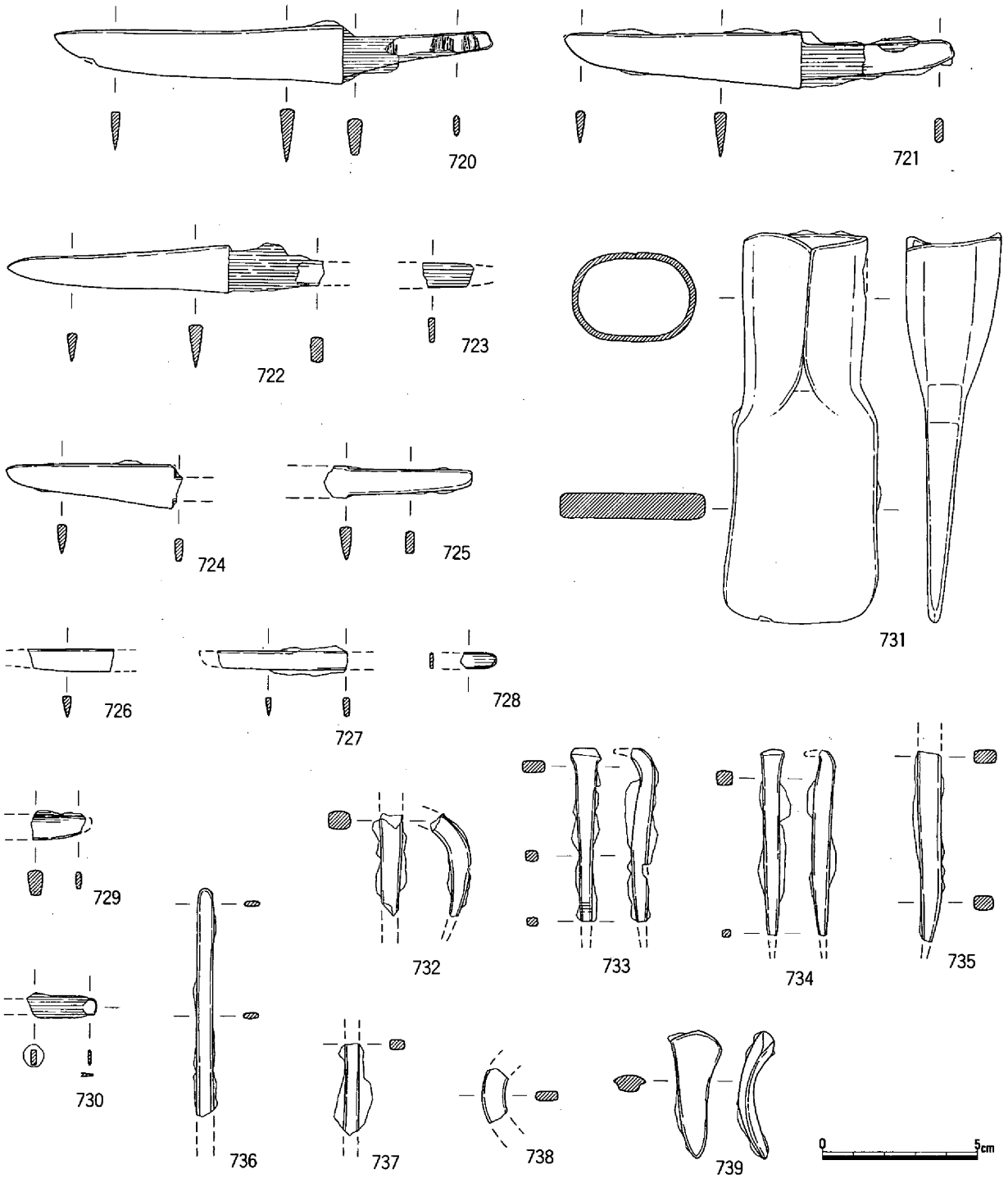
第61図　３号墳出土鉄器（６）(1/2)



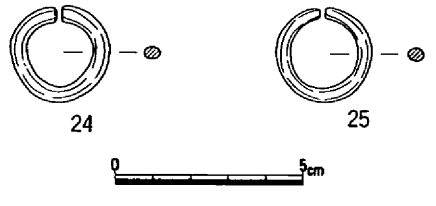
第62図　３号墳出土鉄器（７）(1/2)



第63図　３号墳出土鉄器（８）(1/2)



第64図　３号墳出土鉄器（９）(1/2)



第65図　３号墳出土耳環（1/2)

鞘金具　697・698・701は鞘金具である。697は鉄地銀貼の鞘尻金具である。698は鉄製の鞘金具である。701は鞘尻金具であるが、その大きさから判断して刀子のものと思われる。先端中央に１本の目釘が打たれている。

責金具　699・700・703～706は責金具である。699と700は鉄製である。703～706は鉄地銀貼である。703～706の表面には、毛彫りによる施文が認められる。この施文は、２条の縦線と横方向の細かい刻み目である。

鎺　702の鎺は鉄地銀貼である。断面形は楕円形というより、稜を有する八角形に近い形態を呈している。外面には断面形が三角形を呈する１条の突帯が付されている。

刀　707～717の刀は、錆割れによって破砕されている。707～716は刀身の破片であり、717は茎の破片である。

上記の刀装具より、銀装の装飾大刀が存在したことがうかがえ、それの刀身部と考えられる。

刀子　718～730は刀子であるが、大形のものから小形のものまで様々である。完存する720で、全長14.1cm・刀身長9.3cm・茎長4.8cm・刀身最大幅1.8cmを測る。また完存する721で、全長12.5cm・刀身長7.6cm・茎長4.9cm・刀身最大幅1.8cmを測る。726～728は非常に細身の刀子で、720には茎の糸巻き痕跡がよく観察できる。

有袋鉄斧　731の有袋鉄斧は、全長12.5cm・刃部幅5.0cmを測る。袋部と身部との境には、若干肩を形成している。

鉄釘　732～735は鉄釘である。他の古墳から出土しているものと同様であるが、この３号墳からは４点のみである。点数が量的に極めて少ないから、他の古墳からの混入があったのかもしれない。

不明鉄器　736～739は不明鉄器である。

736は細い棒状のもので、先端は丸くなっている。側縁および先端に、刃のつけられている様子は認められない。

737と738は棒状のもので、鏃の一部かもしれない。

739はやや湾曲した鉄片で、欠損はしていない。全く用途が不明である。

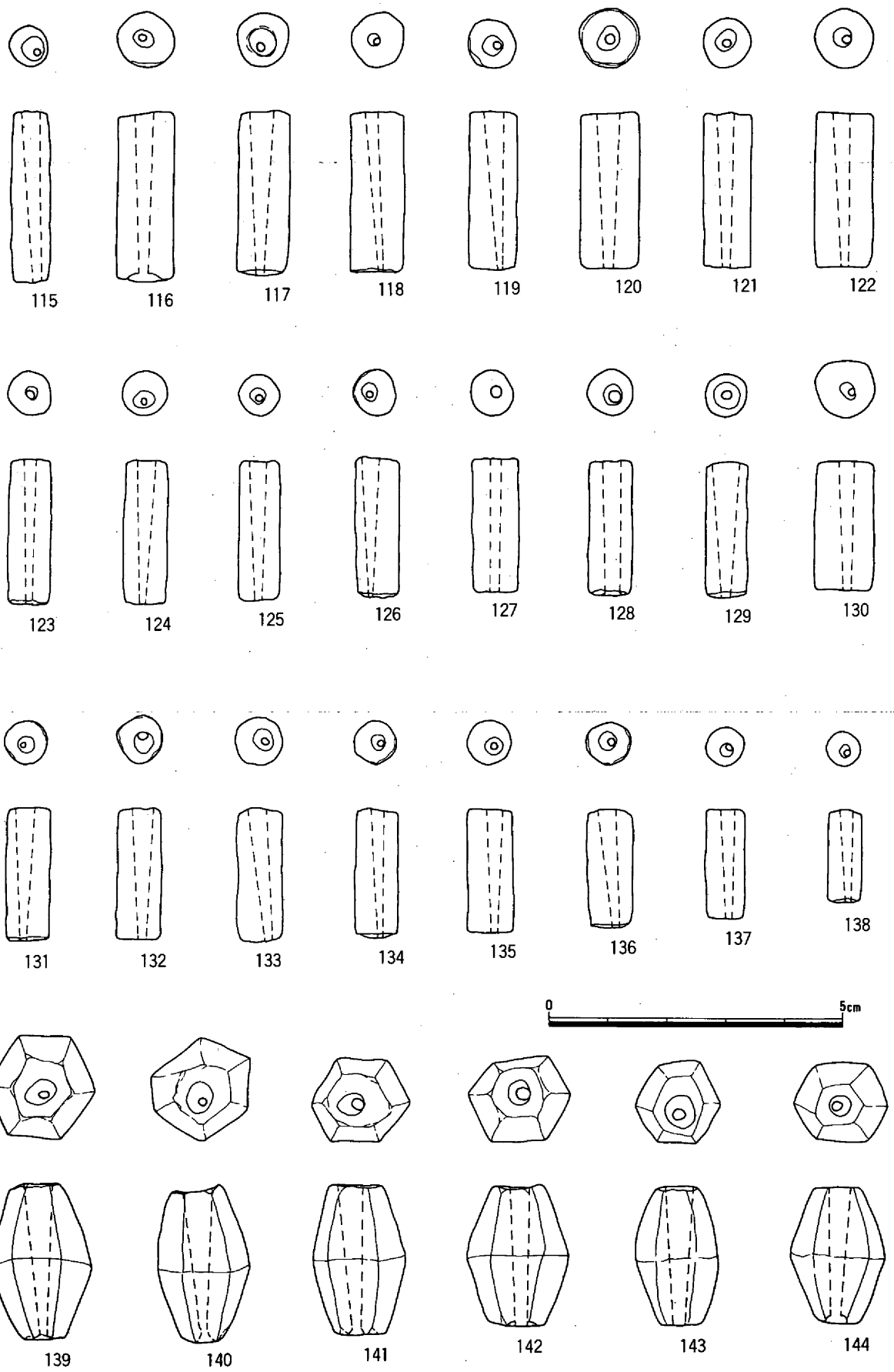
装身具（第65～71図、図版38－２・40－２～43－１）

耳環　２点の耳環（24・25）は、床面から約30cm上位で検出した灰白色粘土の木棺痕跡と推定される部分から、１振の大刀（507）などとともに出土した。出土した地点や全体の形態などから判断すれば、この２点の耳環はセットで遺骸に着装されていたと考えられた。

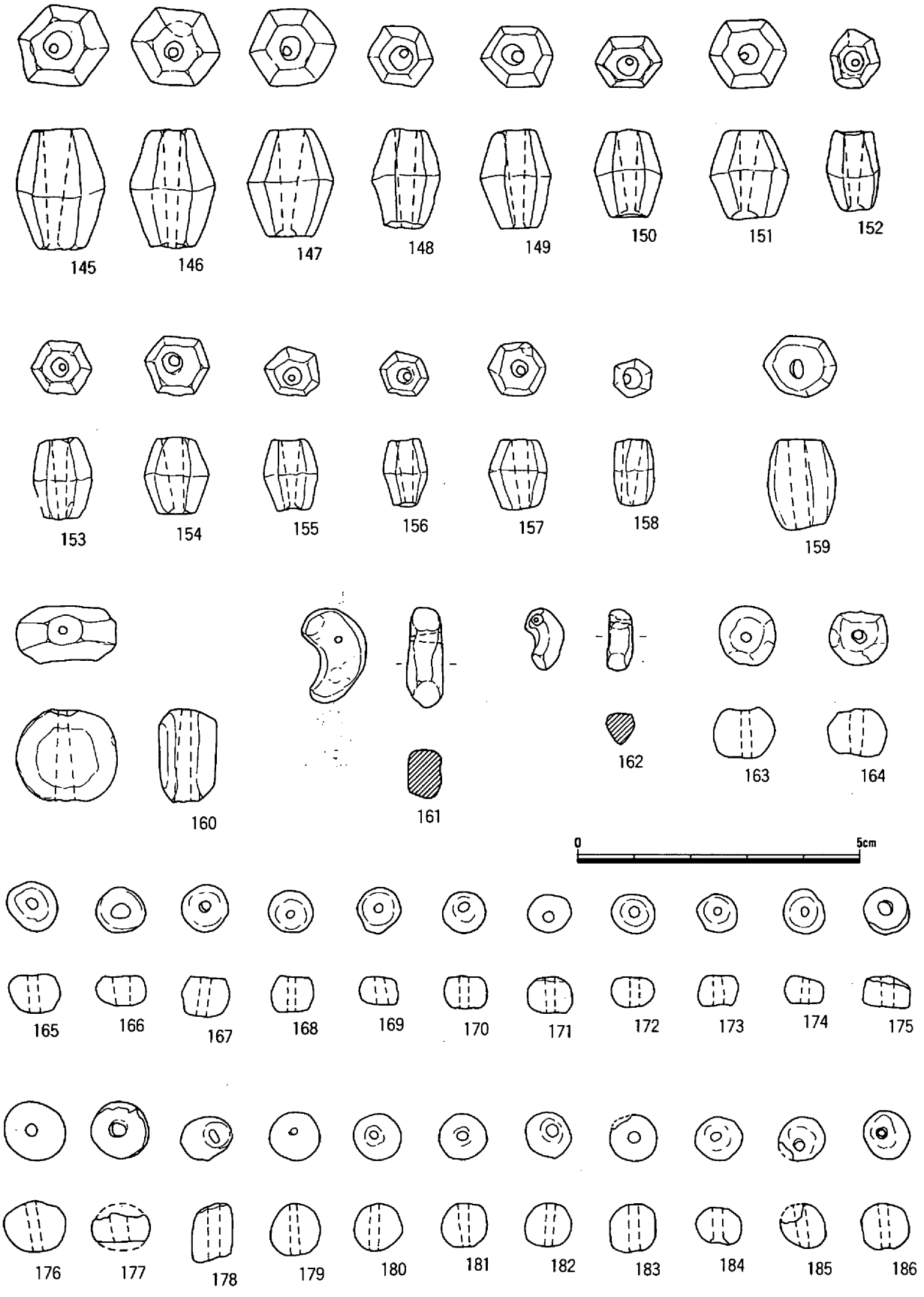
24は外径2.42～2.62cm・内径1.71～1.79cm・断面径0.36～0.42cm・切れ目幅0.4mm・重さ4.87ｇを測り、銅地銀貼で、銀箔の一部がほんのわずかだけ残存している。25は外径2.47～2.51cm・内径1.79～1.80cm・断面径0.34～0.39cm・切れ目幅0.8mm・重さ3.96ｇを測り、銅地銀貼であったと推定されるものの、銀箔は残存しなくて緑色の錆が全体に認められる。

玉類　３号墳の横穴式石室の玄室には、３面にも及ぶ埋葬面が層位的に検出され、多種多様の玉類が量的にも極めて多く出土した。

115～138は管玉である。122の材質は明緑灰色を呈する緑色凝灰岩で、長さ26.4mm・径9.9mmに片面穿孔を施し、孔径が上2.8mm・下1.1mmとなって重さは4.04ｇである。122以外の管玉の材質はいずれも碧玉であるが、濃緑色または深緑色を呈している。またいずれも片面穿孔を施しているが、反対側から若干の抉りが入っているもの（116・134）も認められる。長さが最大である115の計測値は、長さ



第66図　３号墳出土玉類（１）(1/1)



第67図　３号墳出土玉類（２）(1/1)

29.4㎜・径6.7㎜・孔径上3.5㎜・下0.9㎜・重さ2.12ｇである。径が最大である120の計測値は、長さ26.6㎜・径10.0㎜・孔径上3.6㎜・下1.3㎜・重さ4.79ｇである。長さが最小である138の計測値は長さ15.6㎜・径6.0㎜・孔径上2.1㎜・下0.7㎜・重さ1.02ｇである。

139～158は切子玉である。材質はいずれも水晶で透明になっているが、表面が研磨によってやや白色を帯びるものも認められる。これらの切子玉はすべてが6面加工で、中央の円孔は片面穿孔が施され、反対側には若干の抉りが入っているものが多い。142と150の円孔の内面には、赤色顔料が付着している。法量が最大である139の計測値は、長さ27.1㎜・径18.3㎜・孔径上5.1㎜・下0.7㎜・重さ10.14ｇである。大きさがほぼ中間である149の計測値は、長さ18.0㎜・径12.1㎜・孔径上3.4㎜・下1.1㎜・重さ2.93ｇである。法量が最小である158の計測値は、長さ11.9㎜・径7.9㎜・孔径上3.0㎜・下1.9㎜・重さ1.03ｇである。

159は棗玉である。材質は鈍い黄橙色を呈する琥珀で、長さ16.3㎜・径12.1㎜・重さ3.20ｇとなっているが、中央の孔は楕円形を呈している。

160は珍しい平玉である。材質は濃緑色を呈する碧玉で、片面穿孔を施して反対側には抉りが認められる。最大径16.1㎜・厚さ10.0㎜を測り、孔径は上2.9㎜・下1.3㎜で重さは4.62ｇである。

161と162は材質が翡翠の勾玉である。前者は長さ17.1㎜・幅7.7㎜・孔径上2.5㎜・下0.4㎜・重さ1.65ｇを測り、全体に緑灰色を呈している。後者は長さ11.1㎜・幅4.4㎜・孔径上1.8㎜・下0.6㎜・重さ0.38ｇを測る頭端部を欠損した小さなもので、青灰色と濃青灰色が混在した色調である。

163の小玉は材質が水晶で、全体に透明であるが白く濁っている。この小玉の計測値は、高さ8.1㎜・径10.8㎜・孔径上1.7㎜・下1.3㎜・重さ1.45ｇである。

164の小玉は材質が碧玉で、全体に濃緑色を呈している。この小玉は、高さ8.1㎜・径10.5㎜・孔径上2.4㎜・下1.2㎜・重さ1.00ｇを測る。

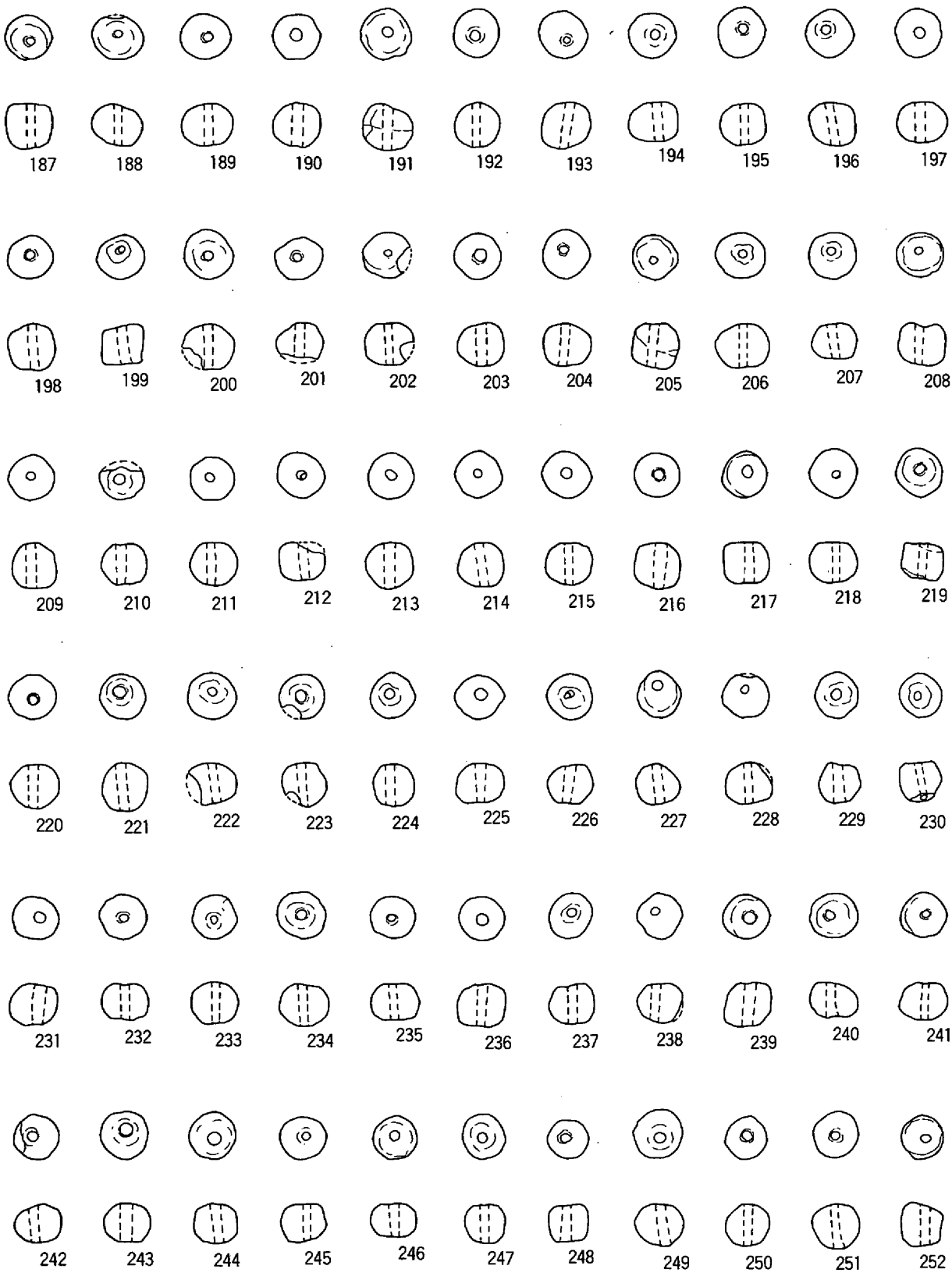
165～174はガラス製の小玉である。濃紺色を呈するもの（165～168・170・171・173）と群緑色または群青色を呈するもの（169・172・174）が認められる。法量が最大である165の計測値は、高さ6.0㎜・径8.9㎜・孔径1.8㎜・重さ0.66ｇである。法量が中間である170の計測値は、高さ5.1㎜・径7.6㎜・孔径1.6㎜・重さ0.43ｇである。法量が最小である174の計測値は、高さ4.6㎜・径7.3㎜・孔径1.2㎜・重さ0.35ｇである。

175は材質が蛇紋石の臼玉である。高さ4.9㎜・径8.0㎜・孔径2.4㎜・重さ0.53ｇを測り、全体に灰褐色を呈している。

176～367は練玉とも呼ばれる土製の小玉で、黒色、黒褐色、黒灰色、灰褐色を呈している。この土製の小玉は土砂と見極めることが非常に困難であるため、石室内全体の堆積土を篩に掛けて精査したが、何点かは検出できなかったであろう。法量が最大である176の計測値は、高さ8.5㎜・径10.6㎜・孔径1.6㎜・重さ0.89ｇである。法量が中間である270の計測値は、高さ5.8㎜・径7.3㎜・孔径1.2㎜・重さ0.31ｇである。法量が最小である367の計測値は、高さ4.3㎜・径5.4㎜・孔径1.2㎜・重さ0.13ｇである。

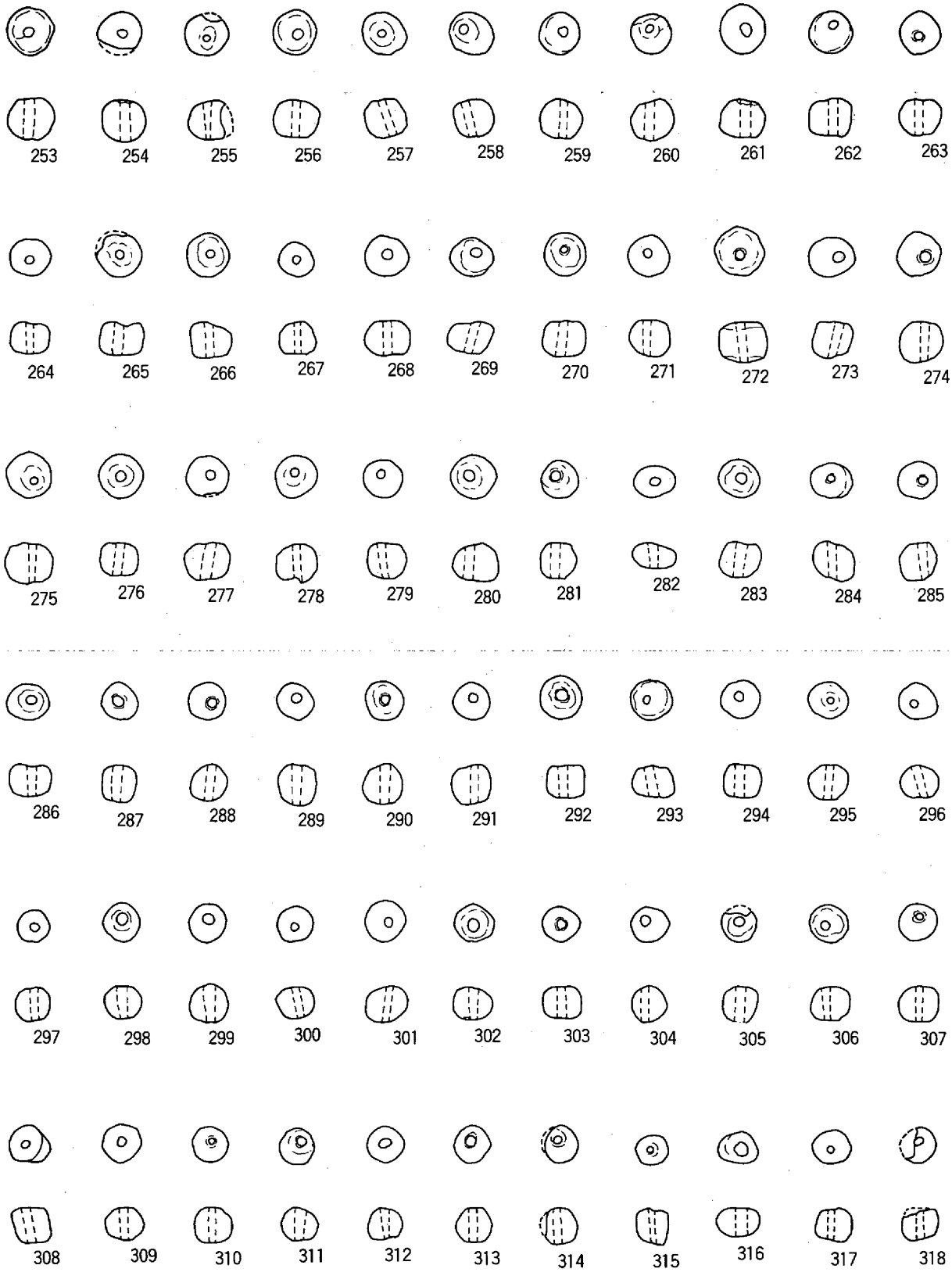
368～384はガラス製の小玉である。濃紺色を呈するもの（371・372・374～380）、透明な紺色を呈するもの（368）、透明な藍色を呈するもの（369・381）、群青色を呈するもの（370）、深みのある紺色を呈するもの（373）、透明で深い青色を呈するもの（382）、透明で濃い藍色を呈するもの（383）、透明で濃青色を呈するもの（384）がある。法量が最大である368の計測値は、高さ4.7㎜・径5.6㎜・孔径

2.0㎜・重さ0.22ｇである。法量が中間である376の計測値は、高さ2.3㎜・径4.0㎜・孔径1.2㎜・重さ0.06ｇである。法量が最小である384の計測値は、高さ2.0㎜・径2.8㎜・孔径1.1㎜・重さ0.02ｇで

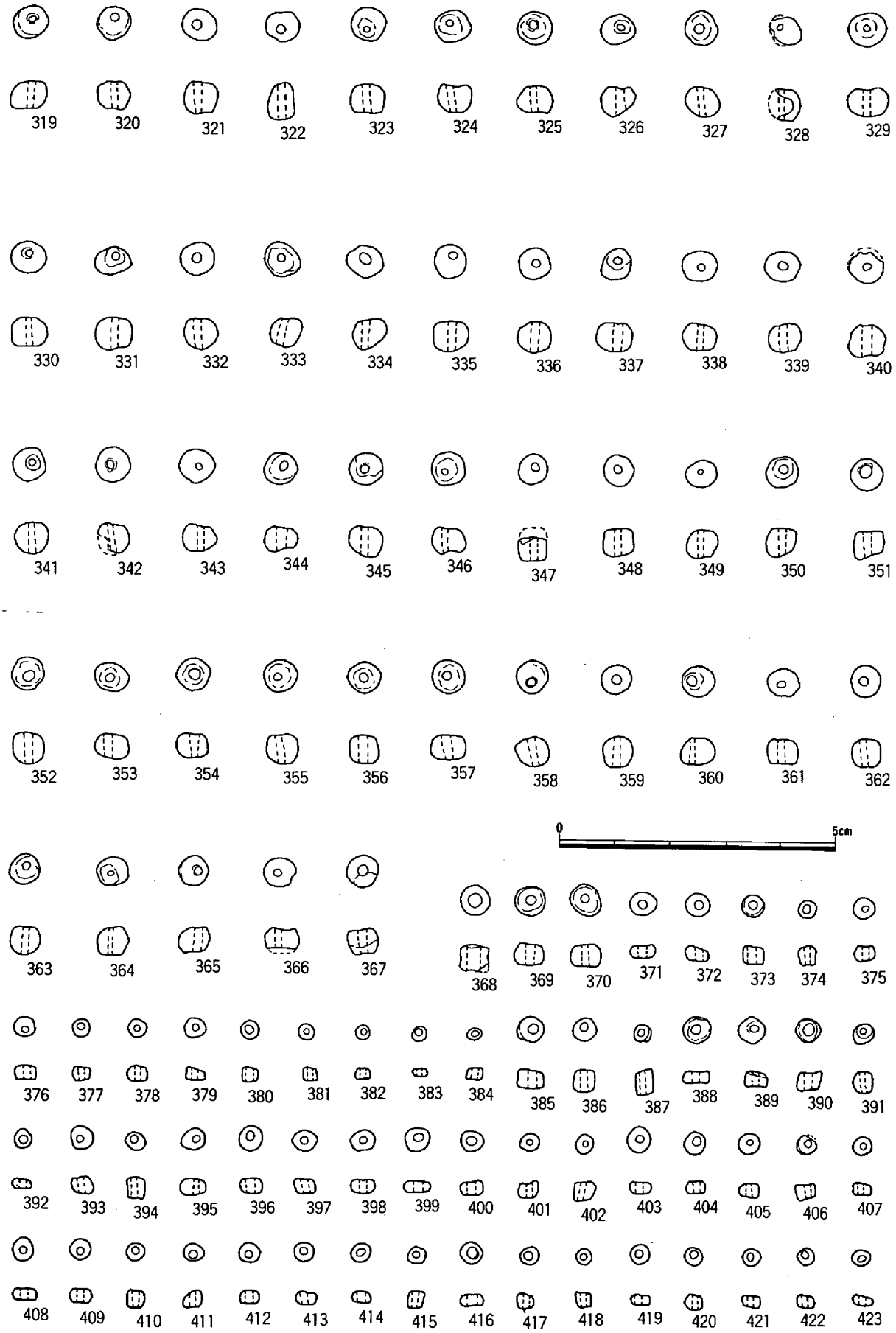


第68図　３号墳出土玉類（３）(1/1)

ある。385～390もガラス製の小玉であるが、いずれも全体に赤褐色を呈している。法量が最大である385の計測値は、高さ3.6㎜・径5.0㎜・孔径1.6㎜・重さ0.12ｇである。法量が中間値である388の計

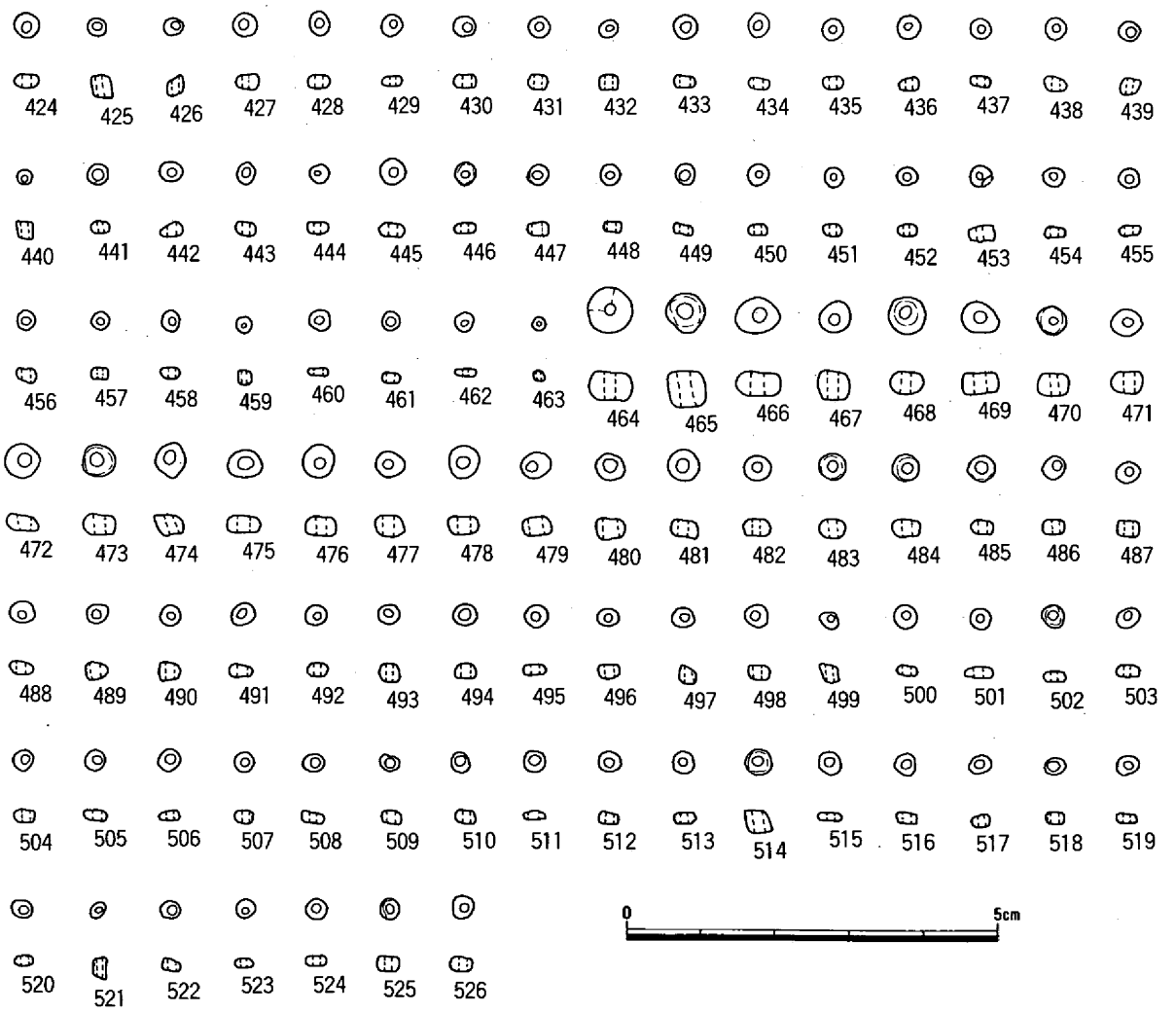


第69図　３号墳出土玉類（４）(1/1)



第70図　３号墳出土玉類（５）(1/1)

測値は、高さ2.7㎜・径5.2㎜・孔径1.8㎜・重さ0.09ｇである。法量が最小である390の計測値は、高さ3.3㎜・径4.4㎜・孔径1.9㎜・重さ0.09ｇである。385～463もガラス製の小玉である。透明なもの（392・393・396・400・401・403・407・414・418・420・423～425・427～438・440～445・447～450・452～462）、半透明なもの（391・406・416・446）、濁ったもの（394・395・397～399・402・404・405・408～413・415・417・419・421・422・426・439・451・463）に分類され、色調は黄色のもの（391・392）と緑色または黄緑色のもの（393～463）が認められる。黄色を呈する391の計測値は、高さ3.5㎜・径3.4㎜・孔径1.0㎜・重さ0.06ｇである。著しく小さい黄色を呈する392の計測値は、高さ2.1㎜・径3.8㎜・孔径1.3㎜・重さ0.04ｇである。緑色を呈する393の計測値は、高さ3.4㎜・径4.4㎜・孔径1.3㎜・重さ0.06ｇである。黄緑色を呈する法量が最小である463の計測値は、高さ1.1㎜・径1.0㎜・孔径0.5㎜・重さ0.02ｇである。464～526は薄い藍色、紺色、青色、水色を呈するガラス製の小玉で、透明または半透明のものが大多数を占め、白く濁ったものも少量だけ存在する。法量が最大である464の計測値は、高さ3.6㎜・径6.3㎜・孔径1.5㎜・重さ0.19ｇである。法量が中間である476の計測値は、高さ2.7㎜・径4.6㎜・孔径1.3㎜・重さ0.08ｇである。透明な水色を呈して法量が最小である526の計測値は、高さ1.6㎜・径1.2㎜・孔径1.0㎜・重さ0.02ｇである。



第71図　３号墳出土玉類（６）(1/1)

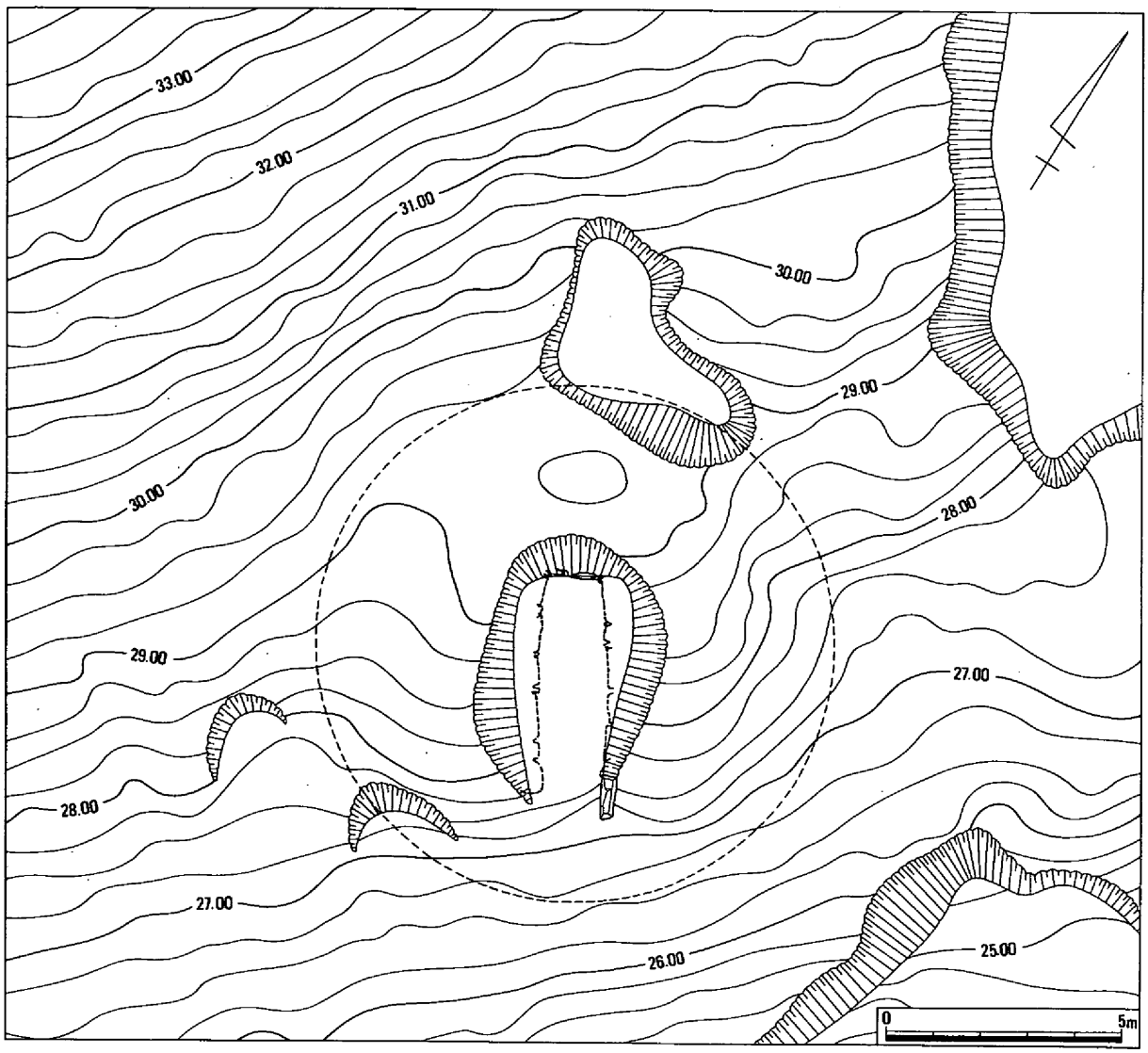
(4)　４号墳

調査前の状況（第72図）

４号墳が所在した地点は、後述する５号墳が発見された別荘地から北方向へ約25m行った所で、４号墳と５号墳の中間部分には、７号墳から９号墓まで３基の埋葬施設が存在した。４号墳は海抜高が26.00mから28.50mを測る丘陵の斜面に築造され、周辺には自然の巨石が数多く露出していた。古墳の北側と東側には、香橋池の築堤工事に使った石を切り出した大きな穴が存在した。

墳丘の中央部には隅丸長方形を呈する巨大な窪みが認められ、この古墳の埋葬施設である横穴式石室を検出することができた。奥壁と左側壁の石室入口に据えられた比較的大きな石は、上位部分が露出し、石室入口に面した斜面には、古墳に使われていたと思われる数多くの石が散乱していた。また窪みの内部には、形態の異なる人頭大から拳大の石が多量に認められ、石を打ち欠いてできた不必要なものが集められていると推定された。

このような状況であったから、横穴式石室の床面まで徹底的に撹乱され、副葬されていた遺物のみ



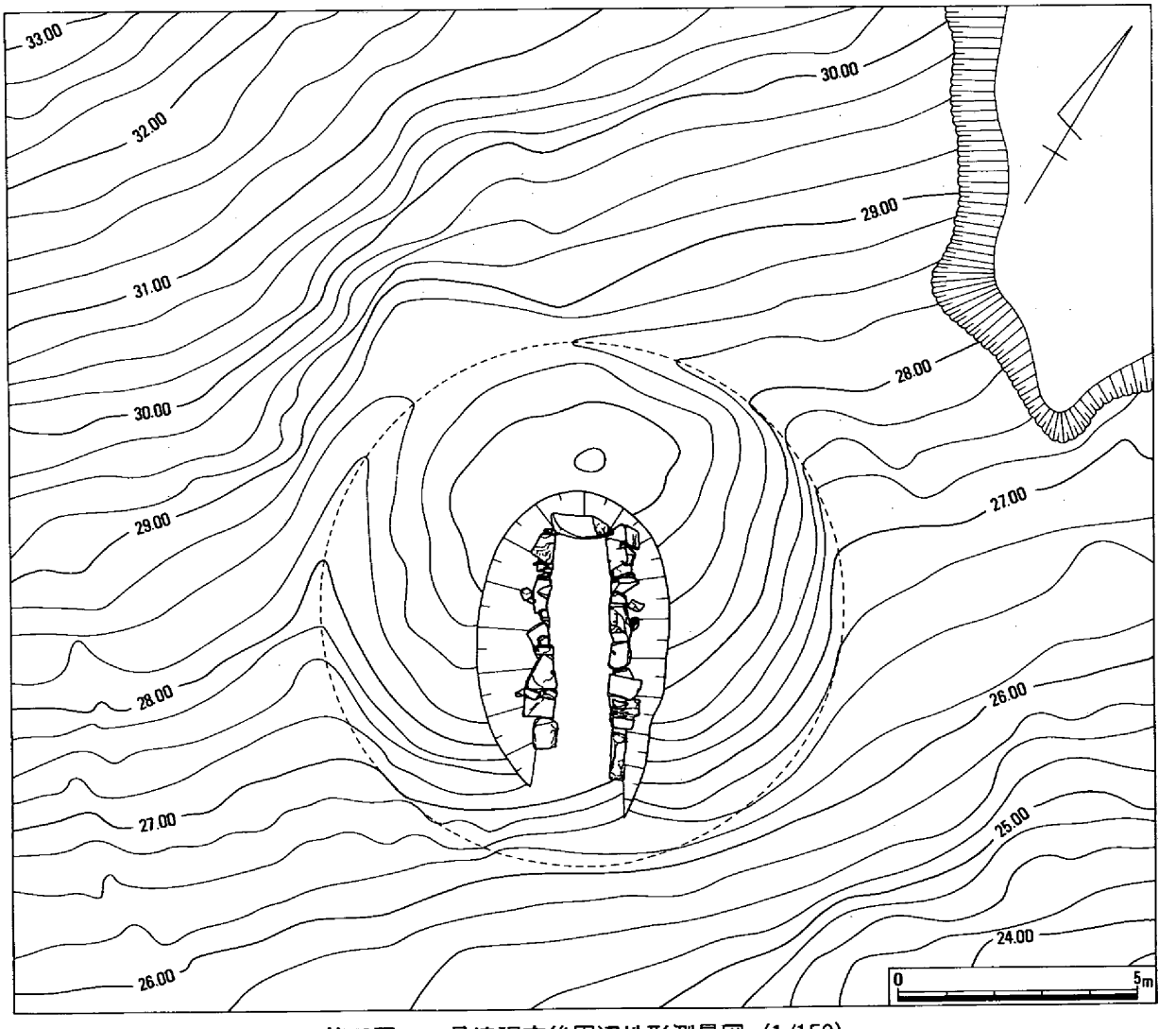
第72図　４号墳調査前周辺地形測量図（1/150）

墳丘と周溝（第73・75図、図版24―１）

４号墳の墳丘は、中央部に築造された横穴式石室が、基底部の石がわずかに残存するまでに著しく破壊されていたため、多量の盛土が流出して残存しなかった。またこの横穴式石室は丘陵の斜面に位置していたこともあって、石室を築造するのに地山を大きく削平して平坦部分を造成していたから、奥壁裏側の地形の高い北西側の墳丘には、自然の地山が広い範囲に認められ、盛土が極端に少なかった。奥壁の底部に据えられた石の裏側は、灰褐色土が存在するだけの簡素な土盛り状態であったが、墳丘中位の側壁部分では、横方向に縞模様になった版築状を呈する淡茶褐色土が認められ、墳丘の盛土が流出しないように工夫されていた。なお左側壁に面した北東側では、地山の上面に比較的大きな石が数多く存在し、明褐色を呈する旧表土も残存した。この古墳の周辺には、横穴式石室に使われていた石と同じ材質の自然石が散在していたため、墳丘の盛土にも多量の石が含まれていた。

この４号墳の墳丘は、直径約11ｍの円墳である。残存する墳丘の高さについては、地形の高い北西側の墳端から測ると約80㎝、横穴式石室の床面からでは約2.40ｍになっていた。

４号墳の周溝については、地形の高い北西側から北東と南西の両方面にかけて馬蹄形の状態に検出された。この周溝は地山面を掘り窪めて造られたもので、その土砂は墳丘の盛土に使われていた。周溝の幅は奥壁に面した地形の高い北西部分が最も狭く、断面形は浅い「Ｕ」字形を呈していた。



第73図　４号墳調査後周辺地形測量図（1/150）

埋葬施設（第74・76図、図版24－２・24－３・24－４）

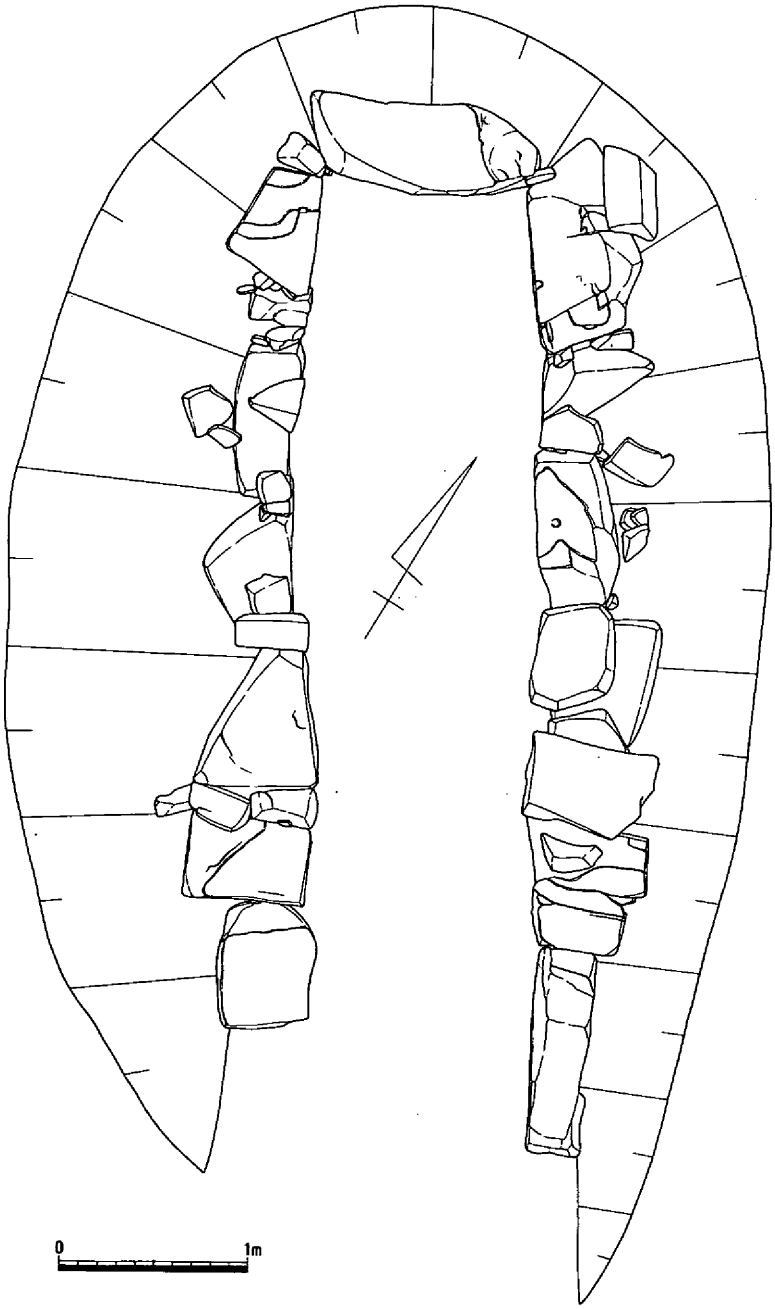
この４号墳の埋葬施設は、無袖の横穴式石室である。

奥壁も両側壁もともに基底部に据えられた石と部分的に２段目の石が残存しただけで、天井石は１枚も認められなかった。また右側壁の石室入口に面した部分は、基底部の石が少なくとも１個は抜き取られていると考えられた。

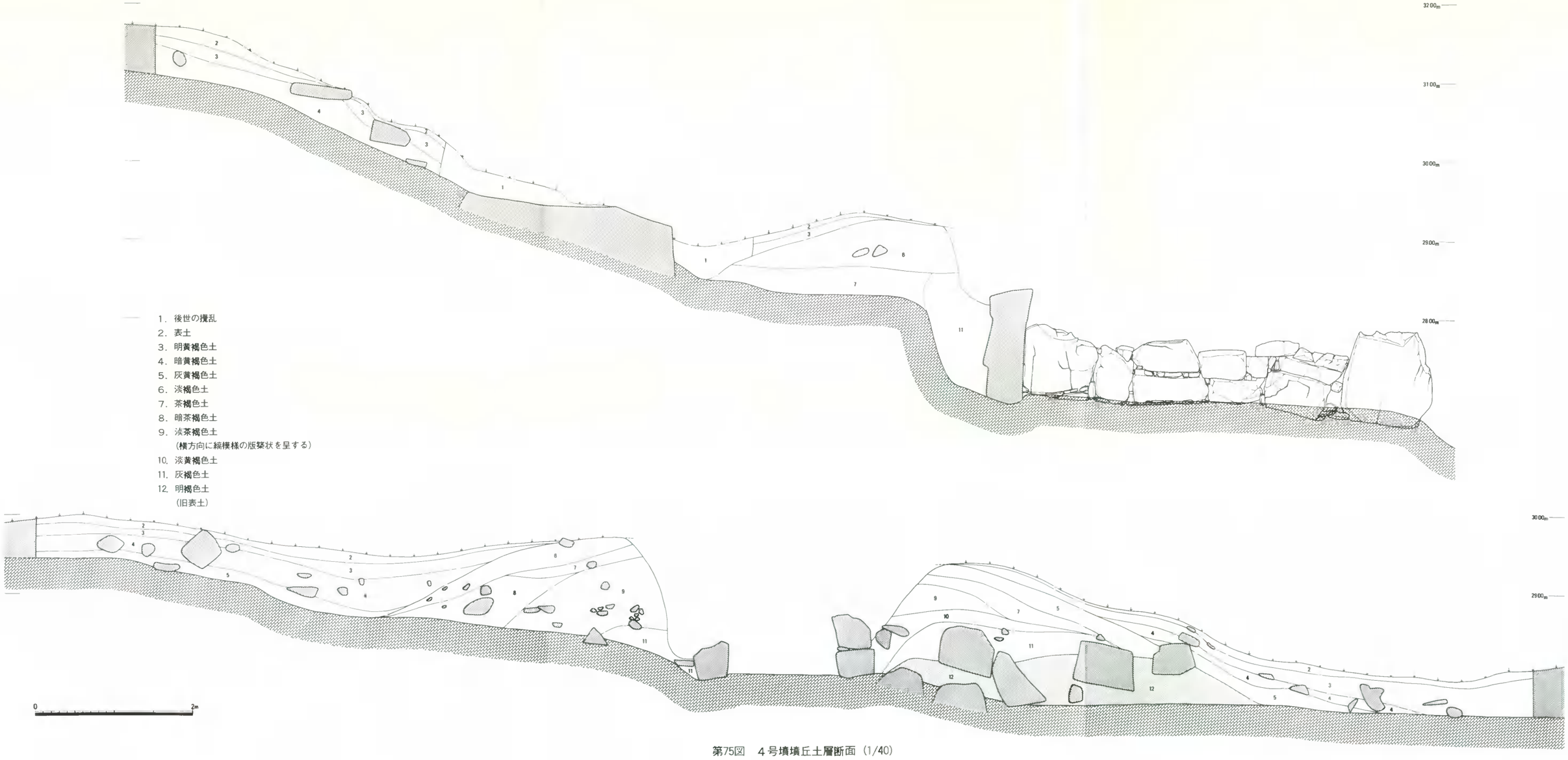
奥壁の基底部には、比較的大きくて安定した石を１個だけ据え、両側壁や床面との空間に小さな石を詰めていた。左側壁は、奥壁に接する部分にやや大きな石を据えると石室の入口に巨石を置き、奥壁側から入口の方向に向かって石を順番に並べ、最後に入口から２番目の石を据えていた。右側壁も同様である。奥壁に接する部分に大きな石を立てて置き、ほぼ同時に石室の入口にも大きな石を据えていたようである。その後に奥壁側から入口の方向に向かって３個の石を並べ、石室入口側にも辛うじて残存していた石を据え、最後に小規模な石を２段に重ねて置いていた。そして石の間に生じた空間には、小さな石を数多く詰めていた。

石室の入口に近い位置で石室の断面を観察すると、左右両側壁とも緩やかに内傾して立ち上がる「持ち送り」の形態になっていた。また両側壁の基底部に据えられた石のラインは、わずかに湾曲して中央部分の幅が奥壁や石室入口よりも広くなっている「胴張り」の様相を呈していた。さらに地山を掘り窪めただけの床面は、奥壁と石室の入口で約30cmの高低差があり、奥壁から入口に向かって次第に傾斜していた。

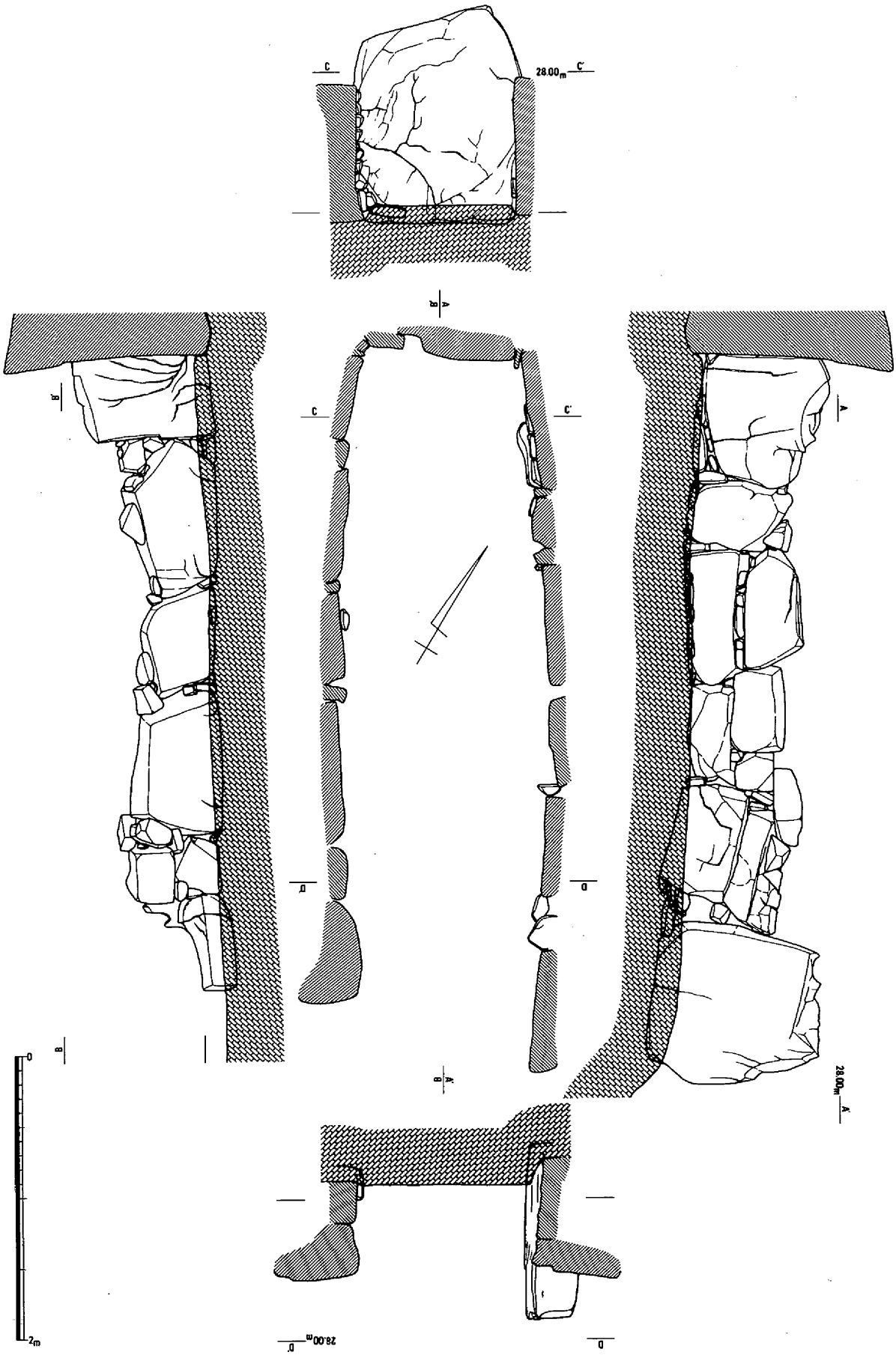
４号墳の埋葬施設である無袖の横穴式石室の計測値は、全長5.00m・奥壁幅1.10m・石室最大幅1.50m・石室入口幅1.25mを測り、床面から天井石までの高さは、奥壁部分で1.35m以上になるであろう。



第74図　４号墳石室上面実測図（1/40）



第75図　４号墳墳丘土層断面（1/40）



第76図　４号墳石室実測図（1/40）

遺物出土状況

4号墳の埋葬施設である横穴式石室は、奥壁も両側壁もともに基底部に据えられた石と部分的に2段目の石が残存していただけで、天井石は1枚も存在しなかった。4号墳が所在した地点よりも地形の低い南東側の斜面を調査したが、4号墳の横穴式石室に使用されていた天井石と推定される石は、残念ながら検出できなかった。右側壁の先端部で石室入口に面した基底部の石は、後世に大きく打ち欠かれていた。眼下に所在する香橋池の堤を築造するのに、周辺の石が大量に使われたのであろう。

このような奥壁や側壁の残存状態であったから、石室内の床面は著しく撹乱されていた。石室の主軸方向の中央部分は、「U」字形を呈して大きく窪み、到る所に深い穴が認められた。奥壁や側壁に据えられた基底部の石を安定させるために、透き間や石の下に詰められていた小さな石には、全体が露出して外れたものも存在した。石室の床面は、地山を大きく削平するまでに後世の撹乱が徹底的に行われていたのである。

したがって4号墳の出土遺物は、石室内で検出されたものは1点もなく、すべての遺物が石室入口に面した地形の低い地点である南東側の斜面から、撹乱された土砂を篩にかけて発見したのである。須恵器片は少なからず採集したが、いずれも小破片で図化することができなかった。

出土遺物

鉄器（第77図、図版62）

刀子　740～742の刀子は、いずれも破片である。740の刀身は、関から急激に細くなり、関は両側に段を持っている。茎の表面には、有機質のものと思われる柄の一部が残存している。741の関は、両側に段が認められる。742の関は、形状が明確でない。

鉄釘　743～765の鉄釘は、長さ10cm弱のものから長さ2cmにも満たないものまで、様々である。

前述した1号墳や2号墳で出土しているものと同様に、頭部を打ちのばして「L」字状に折り曲げたものである。残存する頭部の形状は、いずれも方形または台形に近い形態を呈している。釘の表面には、縦位または横位の木目が認められるものが多い。765は最も小形のもので、長さ1.7cmで頭部は0.4×0.9cmの隅丸長方形を呈している。

これらの釘は、基本的には棺釘と思われるが、764や765のように非常に小形のものの用途も、同じであったかどうかは疑問である。

不明鉄器　767と768は不明鉄器である。

767は鉄製の帯を折り曲げて環状にしたもので、用途は不明である。

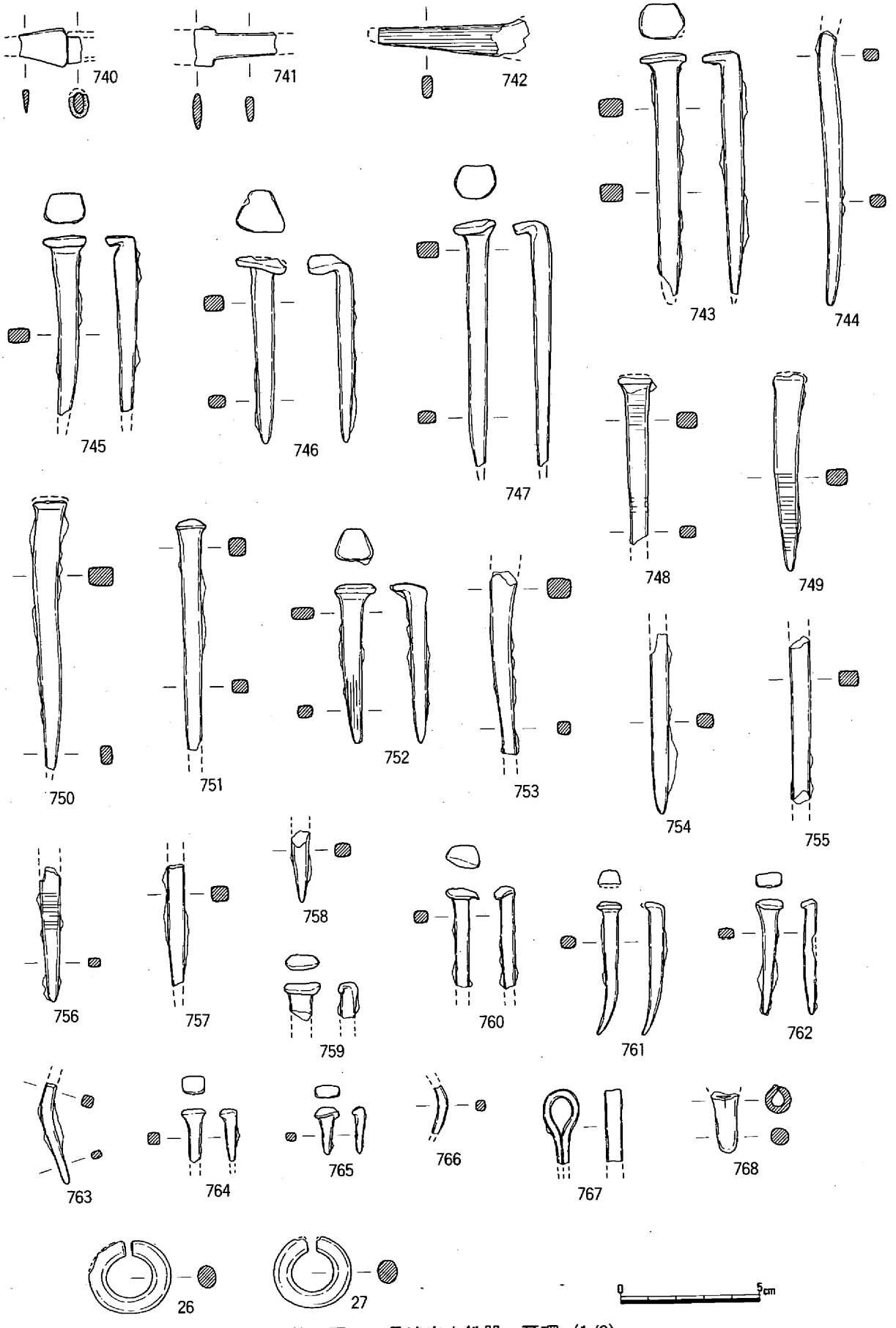
768は鉄板を曲げて作ったとみられるもので、円錐状を呈しているが先端は丸く、また太い方は袋を形成している。石突などの先端の可能性も考えられるが、他の部分や矛先も採集されていないこともあって、用途不明としておく。

装身具（第77図、図版38）

耳環　この4号墳から出土した2点の耳環は、銅地銀貼で断面形は楕円形を呈している。全体の形態や重さなどから推定して、2点の耳環はセットになると考える。

26は外径2.57～2.86cm・内径1.42～1.70cm・断面径0.56～0.76cm・切れ目幅1.4mm・重さ16.49gを測り、表面に銀箔の一部が認められる。27は外径2.51～2.81cm・内径1.40～1.55cm・断面径0.65～0.77cm・切れ目幅2.1mm・重さ14.96gを測り、26よりも全体の規模がやや小さい。

なお2点の耳環以外の装身具は、採集することができなかった。



第77図　４号墳出土鉄器・耳環（1/2）

(5)　５号墳

調査前の状況（第78図）

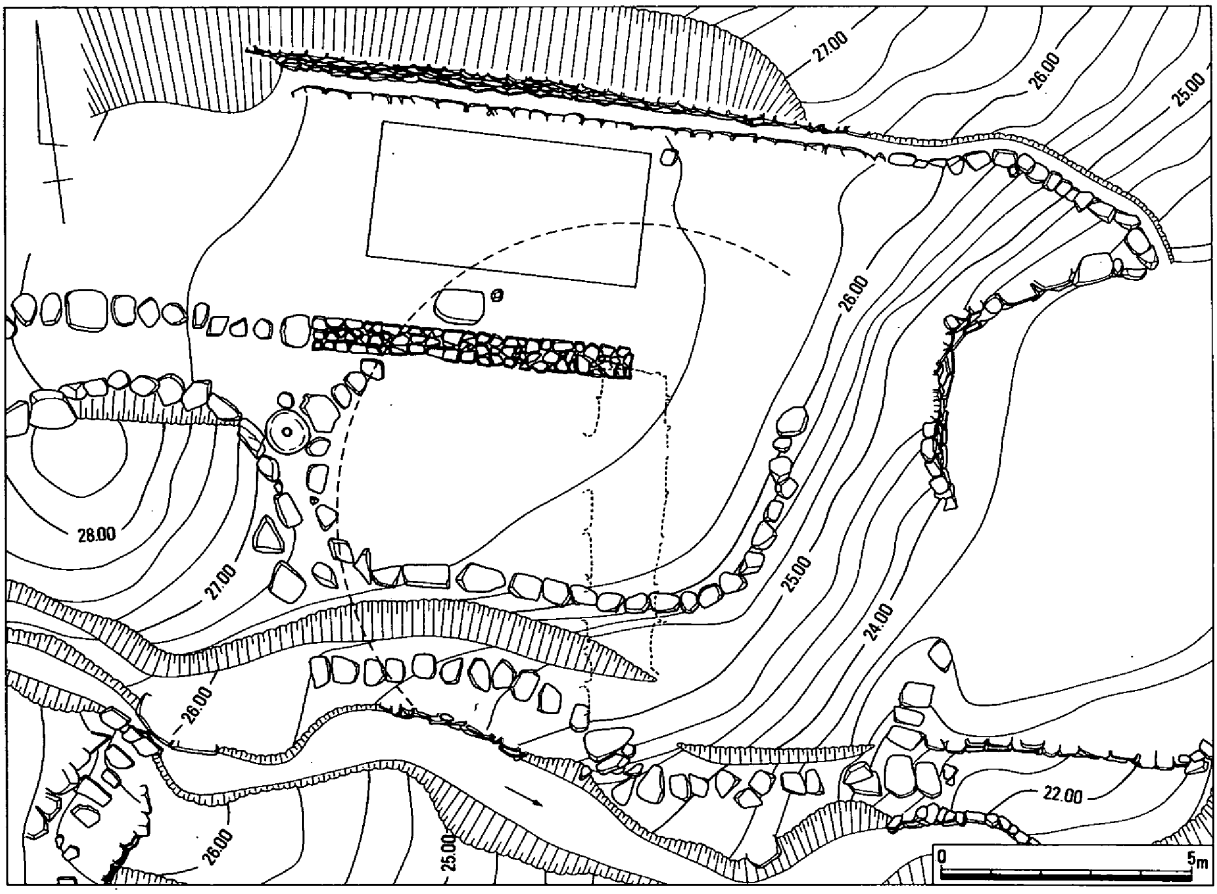
この５号墳は、『岡山市埋蔵文化財分布地図』には記載されていなかった。

西山古墳群の発掘調査に着手した時に、別荘として使われていた家が壊されて家財道具が散乱した地点へ行ってみると、築山や石垣などの石は古墳の石室に使われていたものが転用されているのではないかと考えられた。そのために、建物の基礎や庭石などが存在しない空き地に、長さ約５ｍ・幅１ｍ弱のトレンチを設定して古墳の確認調査を行ったところ、表土直下に横穴式石室の奥壁と推定される、「Ｌ」字状を呈して石が積み上げられている人工の構造物を検出したため、「５号墳」と命名して全面調査を実施することになった。

新しく発見した５号墳は、東側の眼下に香橋池を望む丘陵の斜面に位置し、北方向へ約25ｍ行った所に所在した４号墳との間に、７号墳から９号墓まで３基の埋葬施設が存在した。

５号墳が所在した地点は、別荘地の敷地に造成されていたので、古墳の墳丘はことごとく削平を受け、周囲の周溝も土砂に埋まっていると考えられた。埋葬施設の横穴式石室は著しく破壊され、基底部に据えられた石がわずかに残存する程度であろうと思われた。石室の入口に面した墳端は、西側の丘陵から東方向の香橋池へ流入する小川に削られていた。また東側の墳端については、別荘地に伴って周囲に石垣を築いた平坦地が造成されていたから、精査しても確認できないと判断された。

このような状況であったから、石室内に遺物が存在するとは、毛頭考えられなかったのである。



第78図　５号墳調査前周辺地形測量図（1/150）

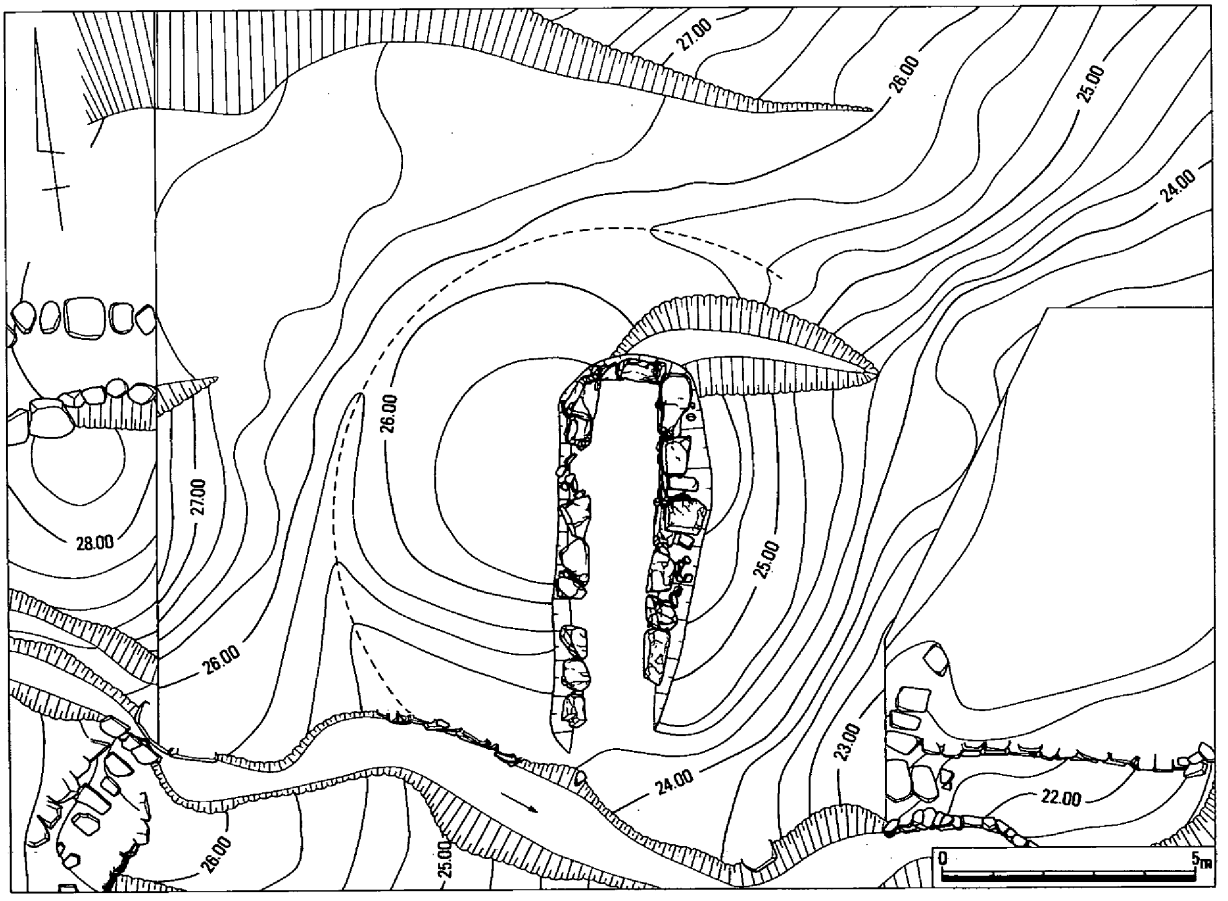
墳丘と周溝（第79・81図、図版26－２）

この５号墳は、別荘地の築山や石垣に使われていた石が、古墳の石室に用いられていたものを転用しているのではないかと考えられたため、別荘地の空き地にトレンチを掘って、新しく発見した古墳である。このような状況であったから、古墳の墳丘は別荘地の敷地に削平され、跡形もない状態であった。また別荘地の周辺には、古墳の石と推定されるものが多く認められたため、埋葬施設の横穴式石室は、極度に破壊されていると考えられた。さらに香橋池の存在する平野に面した東側の部分は、周囲に石垣を築いた平坦地が造成されていたから、古墳の墳端や周溝は検出できないと思われた。

トレンチによる古墳の確認調査を実施した結果、別荘地の表面を薄く削っただけで、横穴式石室の奥壁に据えられた石が検出され、その周辺を継続して精査すると、両側壁に積み上げられた石も確認することができた。さらに石室内を掘り下げると、極めて浅い位置から陶棺の破片が出土したから、墳丘の盛土は著しく削平され、天井石を含む横穴式石室上面の石組みまでも残存しなかった。この横穴式石室は丘陵の斜面に存在し、石室を築造するのに地山面を削平していたから、地形の高い北側と西側の墳丘には自然の地山が広い範囲に認められ、盛土は少なかったと考えられた。

この５号墳の墳丘は、直径約11.50ｍの円墳と推定された。墳丘の高さについては、別荘地が造成された時に盛土がことごとく削平されていたため、残念ながら計測することができなかった。

５号墳の周溝は、地形の高い北側と西側にかけて馬蹄形の状態に検出されたが、南側と東側は削平されて不明であった。この周溝は地山面を掘り窪めて造られたもので、その土砂は墳丘の盛土に使われていた。周溝の幅は奥壁に面した北側が最も狭く、断面形は浅い「U」字形を呈していた。



第79図　５号墳調査後周辺地形測量図（1/150）

埋葬施設（第80・82図、図版25―3・26―1・26―2）

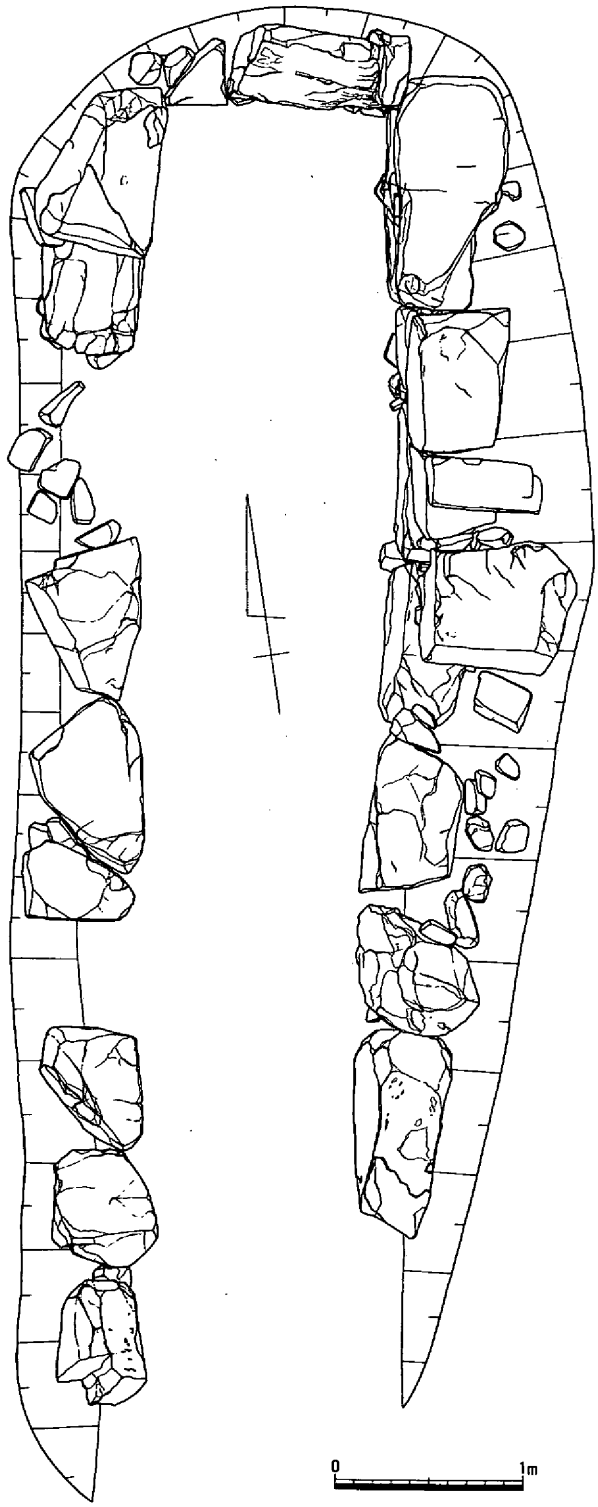
この5号墳の埋葬施設は、無袖の横穴式石室である。

横穴式石室の奥壁も両側壁も、ともに基底部に据えられた石と部分的に2段目の石が残存しただけで、天井石は1枚も認められなかった。また左側壁の石室入口に面した部分は、基底部の石が少なくとも1個は抜き取られていると考えられた。さらに右側壁の奥壁に近い位置では、基底部の石も確認できず、床面に6個の裏込めに使われた小さな石が認められた。右側壁の石室入口に近い所も、基底部の石が存在しなかった。

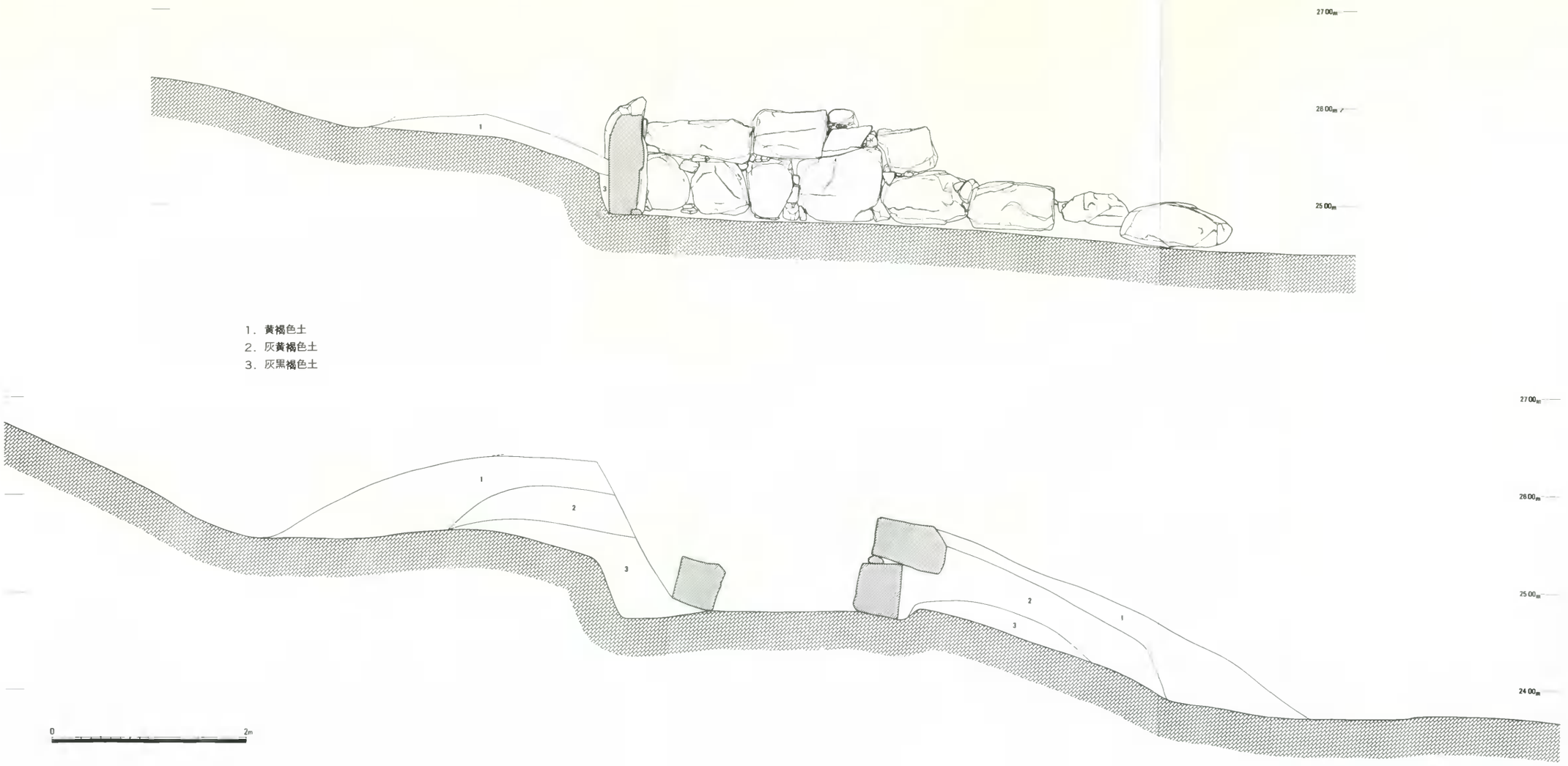
奥壁の基底部には、2個の石を並べて立てていた。そして両側壁や床面との空間には、小さな石を詰めていた。左側壁の奥壁に近い部分だけは、2段目の石も残存していた。左側壁の基底部は、奥壁に面した位置にやや小規模な3個の石を奥壁側から順番に立てて並べ、石室入口に面した所には入口側から奥壁方向に向かって順序よく石を横方向に置き、最後に奥壁側から4番目の大きくて安定した石を据えていた。左側壁の奥壁に近い2段目は、基底部に据えた2個の石にそれぞれ跨がるように石を横にして積み上げ、石の上面のレベルが揃うようになっていた。右側壁については、奥壁と接する地点にだけ2段目の石が認められたが、基底部に据えられた石の上面レベルは揃って、石を積み上げることによって生じた壁面の横方向の目地は、直線状を呈していると思われた。

なお両側壁の基底部に据えられた石の石室内のラインは、わずかに湾曲して中央部分の幅が奥壁や石室入口よりも広くなった「胴張り」の様相を呈し、石室内の床面は奥壁と石室入口では約40cmの高低差があり、奥壁から入口に向かって緩やかに傾斜していた。

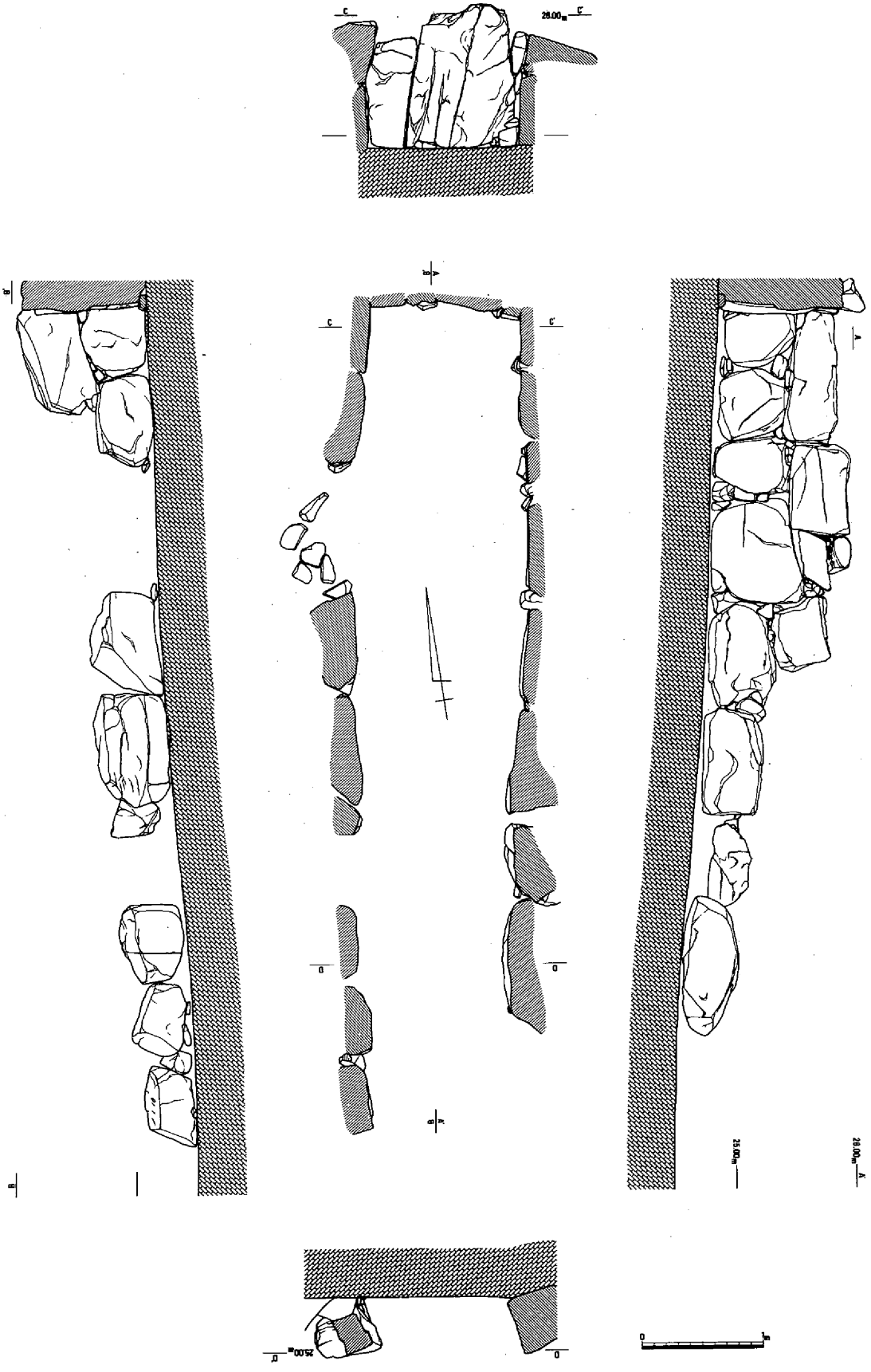
5号墳の埋葬施設である無袖の横穴式石室の計測値は、全長6.80m・奥壁幅1.25m・石室最大幅1.45m・石室入口幅1.15mを測り、床面から天井石の高さは、天井石を含む奥壁や両側壁の上位部分が残存しなかったので、計測できなかった。



第80図　5号墳石室上面実測図（1/40）



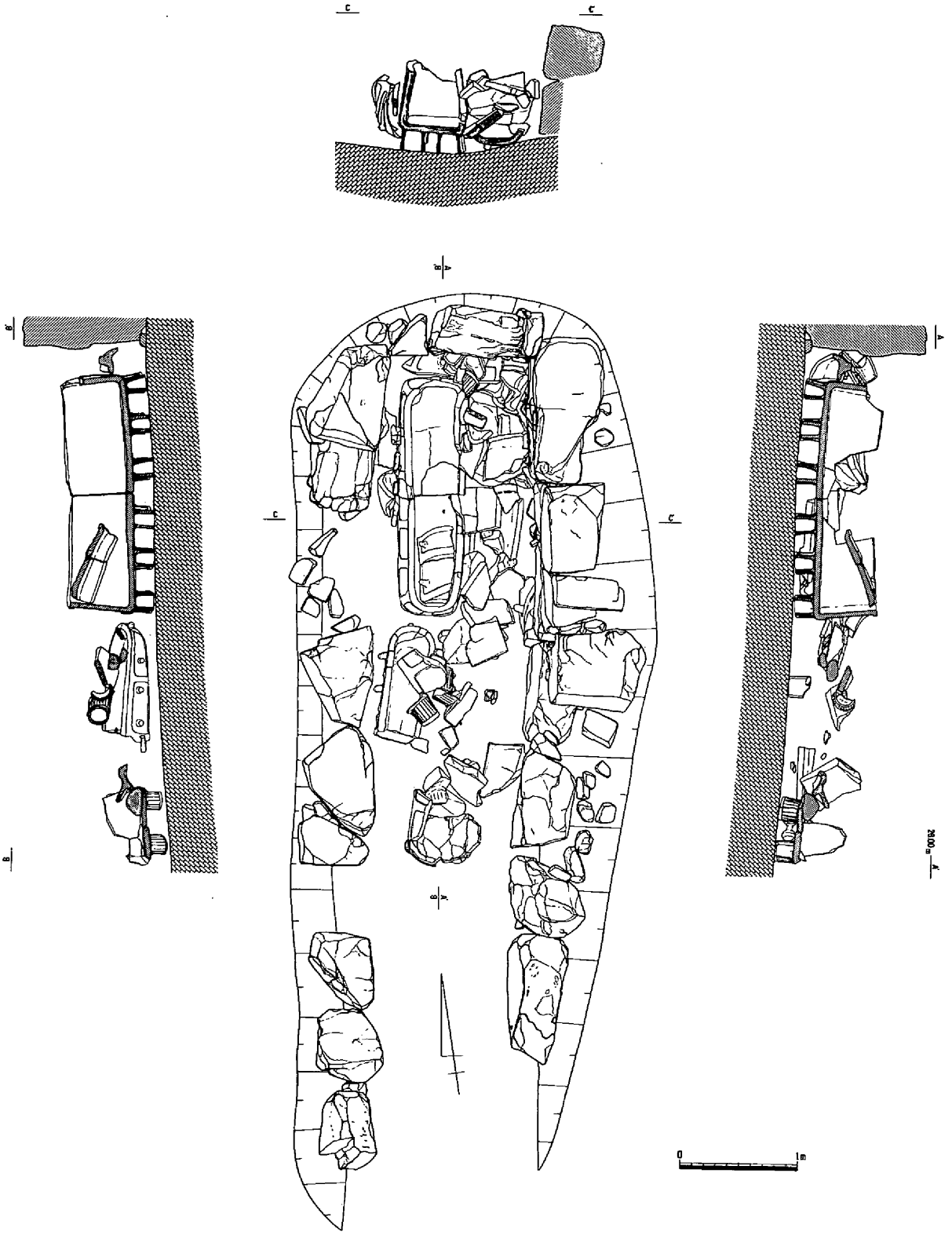
第81図　５号墳墳丘土層断面（1/40）



第82図　５号墳石室実測図（1/50）

遺物出土状況（第83図、巻頭図版３－１、図版25－１・25－２）

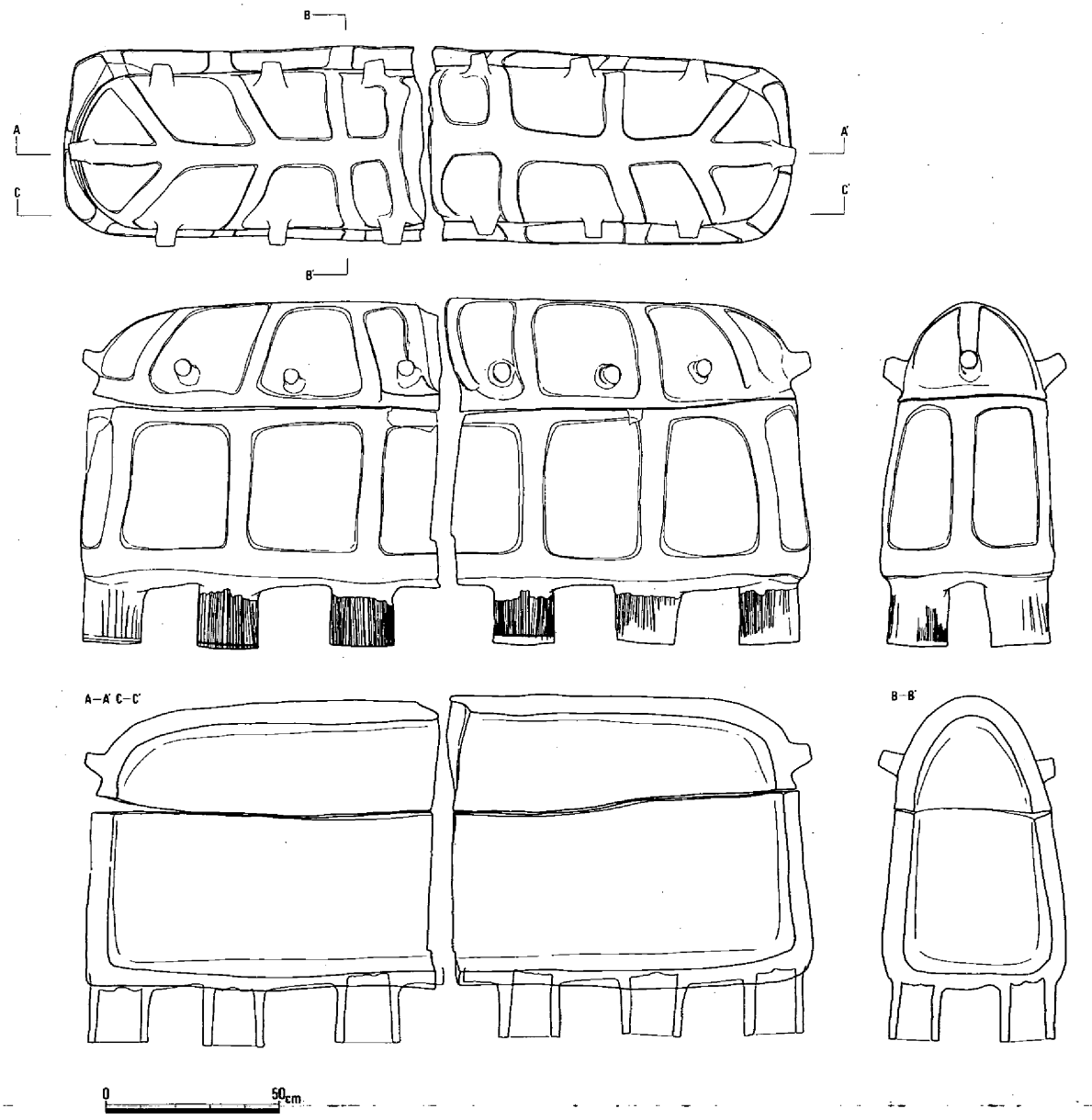
５号墳の横穴式石室は、別荘地に造成された平坦な敷地から新しく発見されたこともあって、天井石を含む奥壁や両側壁の上位部分が残存しなかったが、奇跡的にも石室内の床面は撹乱されていなかったため、埋葬された当時の様相を比較的良好な状態で留めていた。



第83図　５号墳遺物出土状況（1/50）

この５号墳の横穴式石室には、石室の主軸方向を示して直線的に並んだ２基の土師質亀甲形陶棺が存在した。奥壁に面して検出した陶棺（A陶棺）は、蓋のほとんどの部分が左側壁と身の中間地点にばらばらになって散乱し、一部分が右側壁の壁面と身の内部に転落していた。写真撮影や実測を終了してこのばらばらになった蓋の破片を取り上げたところ、破片に混在して高台を有する杯身（162）が出土したから、A陶棺の蓋が開かれたのは、その土器の形態的特徴より奈良時代前半の古い時期であったと考えられた。A陶棺の身の内部には、４点の耳環（28～31）・２点の勾玉（530・531）・各１点の切子玉（528）と小玉（533）が、ほぼ中央部に集中して存在した。A陶棺に近接して石室の中央部で検出した陶棺（B陶棺）は、前述したA陶棺よりも残存状態が悪かった。片方の蓋は口縁部を上にした状態で右側壁に近い部分に転落し、残るもう一方の蓋は精査しても確認できなかった。

陶棺外側の石室の床面から出土した遺物には、A陶棺の身の下部で検出した２点の須恵器（159・165）と３点の玉類（527・529・532）以外に、B陶棺の脚の間で検出した鎌（164）がある。



第84図　５号墳出土A陶棺実測図（1/20）

出土遺物

陶棺（第84・85図、図版39）

A陶棺　土師質亀甲形陶棺である。この陶棺の計測値は、全長209cm・最大幅53cm・最大全高99cm・身の高さ65～70cmを測る。胎土中には大きいもので4㎜大の砂粒を含み、焼成は良好で全体に黄橙色を呈している。身と蓋は、ともに各々切断により2分割されている。

蓋は、最大高が合わせ部近くで33cmを測る。下縁部を全周に巡る突帯は、製作時に身の上縁突帯と一連で作ったものであり、幅は2～4cmになっている。中央の稜線上には幅5～9cmの突帯が走り、これと直交または斜め方向に交差するように8本の突帯が付されている。この突帯は幅4～7cmで、上方と下方の幅はほぼ同じになっている。突起は両側面に各6個、両小口面に各1個の計14個が存在する。両側面の突起は、下縁部に巡る突帯に近い位置で、中央の稜線上と下端部を結ぶ突帯の中間地点に、差し込んだ状態にしている。両小口面の突起は、稜線上の突帯が下端部の突帯と接する位置に差し込んでいる。直径4.5～5.5cm・高さ4.5～6.0cmのほぼ円筒形で、先端は平坦になって磨滅している。直径約8cmの封じ孔が、かぶせ部を有する側に1か所だけ存在する。外面は平滑にしているが、内面には粘土を押し付けた跡が残っている。この蓋は、内外面ともヨコナデを施している。

身は、両側面が緩やかに内傾して上部が狭くなる格好をしており、下縁部の最大幅53cm・上縁部の最大幅45cmになる。また小口面も内傾しているが、側面よりも傾斜は鈍く、下縁部で50cm・上縁部で42cmとなり、上縁部での全長は204cmを測る。上縁部を巡る前述した蓋の下縁突帯と一連に作られた突帯は、幅が3～6cmになっている。また身の下縁部には、幅が5～8cmの突帯が巡っている。垂直方向には、幅6～8cmの突帯が両側面に各6本、両小口面の中央部に各1本の計14本が存在する。この身は、前述した蓋と同様に、内外面とも全体に丁寧なヨコナデを施している。

切断部は、ほぼ直線状になっているが、身の底部で短く屈曲している。切断面を観察すると、後に調整が加えられた痕跡は認められなかった。底部の切断部には、両側面から切断してきた時に、わずかにずれてしまった方向を修正している。

脚は、2行6列の計12本で、径16～19cm・高さ15～18cmになっている。縦方向にハケメが存在するものが多いが、3本の脚にはヘラケズリ痕跡も認められ、下端部はいずれもヨコナデを施している。

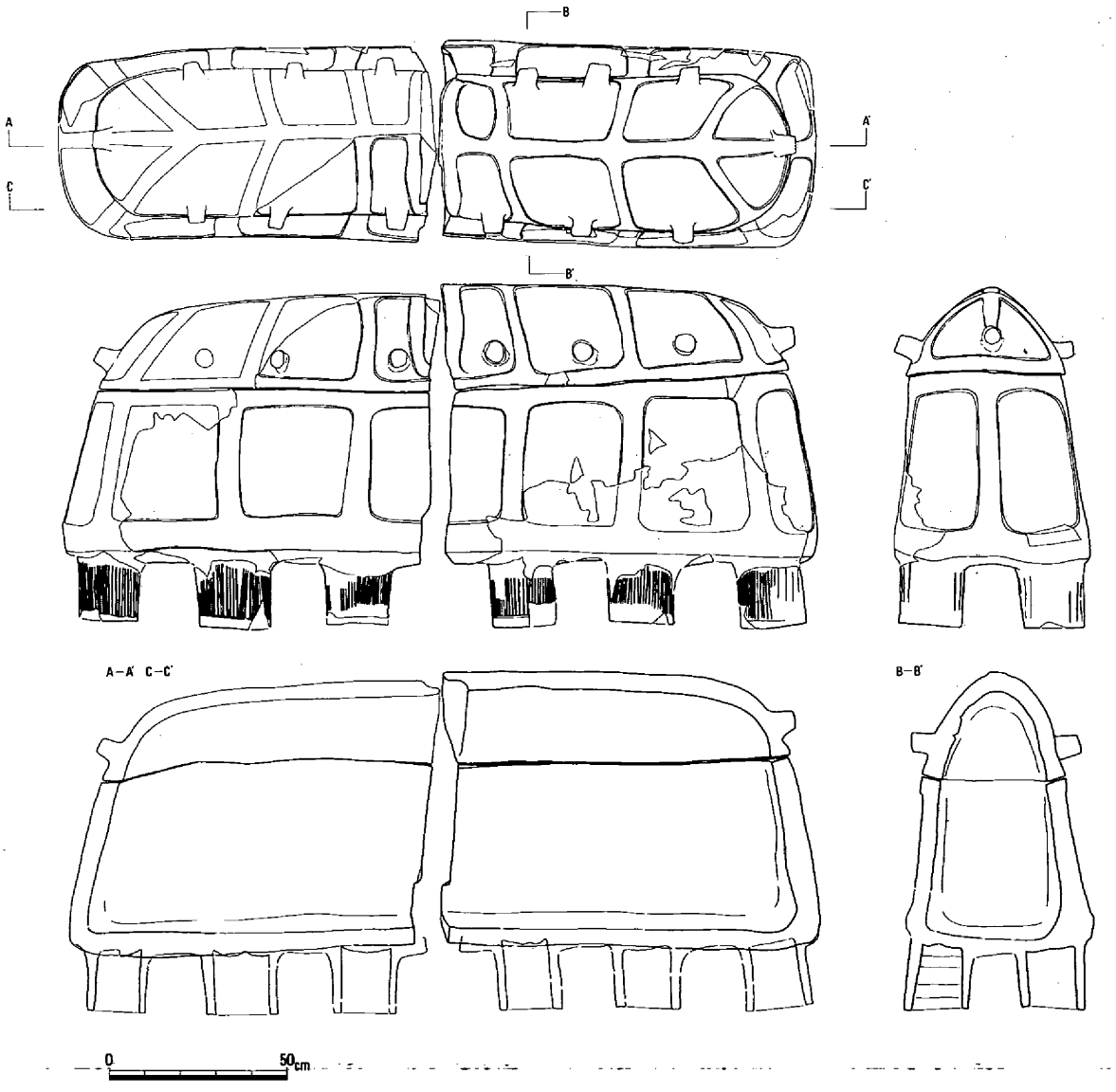
B陶棺　このB陶棺も土師質亀甲形陶棺で、前述したA陶棺に極めて酷似している。全体の規模がやや小さくて、蓋の突帯が少し細いようである。B陶棺の計測値は、全長160cm・最大幅54cm・最大全高95cm・身の高さ66～71cmを測る。胎土中には4～5㎜大の砂粒を含み、焼成は良好で黄橙色を呈している。身と蓋は、ともに各々切断により2分割されている。

蓋は、最大高が合わせ部付近で26cmを測る。下縁部を全周に巡る突帯は、製作時に身の上縁突帯と一連で作ったものであり、幅は3～5cmになっている。中央の稜線上には幅3～5cmの突帯が走り、これと交差する8本の突帯が付されているようである。この突帯も幅が3～5cmで、上下の幅がほぼ同じになっている。片方の蓋の一部を欠損しているので断定はできないが、突起は両側面に各6個、両小口面に各1個の計14個が存在するであろう。側面の突起のうちB－B'断面で図示した部分は、突帯の間に2個の突起が認められる。小口面の突起は、稜線上の突帯が下端部の突帯と接する位置に差し込んでいる。直径3.5～5.5cm・高さ3.5～6.5cmのほぼ円筒形で、先端は平坦になって磨滅している。直径約8cmの封じ孔が、かぶせ部を有する側に1か所だけ存在する。外面は平滑だが、内面には粘土を押し付けた痕跡が残っている。この蓋は、内外面とも全体にヨコナデを施している。

身は、両側面が緩やかに内傾して上部が狭くなる格好をしており、下縁部の最大幅52cm・上縁部の最大幅40cmになる。また小口面も内傾しているが、側面よりも傾斜は鈍く、下縁部で54cm・上縁部で42cmとなり、上縁部での全長は約190cmになるであろう。上縁部を巡る蓋の下縁突帯と一連に作られた突帯は、幅が４～６cmになっている。身の下縁部には、幅が６～10cmの突帯が巡っている。また垂直方向には、幅５～８cmの突帯が両側面に各６本、両小口面の中央部に各１本の計14本が存在する。この身は、前述した蓋と同様に、内外面とも全体に丁寧なヨコナデを施している。

切断面は、ほぼ直線状になっているが、A陶棺と同様に、身の底部近くで両面とも短く屈曲している。切断面には後に調整が加えられた痕跡はなく、切ったままの状態である。底部の切断部には、両側面から切断してきた時に、ずれてしまった方向を修正している。

脚は、A陶棺と同じである２行６列12本で、径11～20cm・高さ14～18cmになっている。外面に縦方向のハケメが存在し、下端部はいずれもヨコナデを施している。内面に粘土の接合痕跡が残存しているものが認められるから、脚部を成形するのに粘土帯を巻き上げたのかもしれない。



第85図　５号墳出土Ｂ陶棺実測図（1/20）

須恵器（第86図、図版36）

杯身・杯蓋　完形品の杯身（160）は、石室の入口に面した小川の法面に転落していたものである。口径9.5cm・器高3.4cmで、口縁部は内傾して短く立ち上がり、端部は丸く仕上げている。外面の底部はヘラ切り未調整で、それ以外は全体にヨコナデを施している。A陶棺の身の下部から出土した杯蓋（159）は、口径10.9cm・器高4.0cmで、天井部が高くて口縁端部を丸く仕上げている。外面の天井部はヘラ切り未調整で、それ以外は全体にヨコナデを施している。A陶棺の蓋の破片に混在して出土した高台を有する杯身（162）は、口径13.9cm・器高4.7cmで、口縁部が斜め上方へ立ち上がって端部を丸く仕上げ、内外面とも全体にヨコナデを施している。

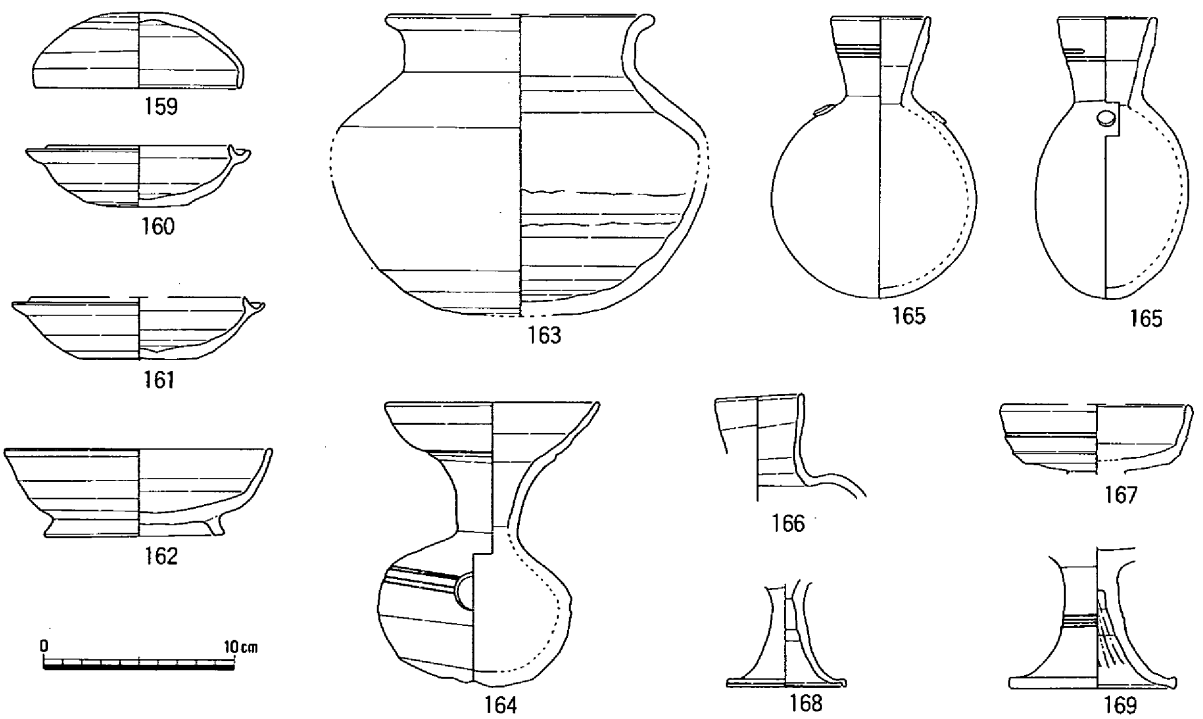
壺　口径約13.2cmを測る壺（163）は、口縁部が短く外湾して端部を丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、それ以外はヨコナデを施している。内面には粘土の接合痕跡が認められ、外面には自然釉が付着している。

甕　B陶棺の脚の間で検出した甕（164）は、口径11.0cm・器高14.7cm・胴部径10.0cm・頸部径3.1cmで、全体の器形が歪み、口縁部はラッパ状に斜め上方に開き、端部は丸く仕上げている。外面の口縁部と胴部に凹線を有し、外面の底部はヘラ切り未調整である。外面の口縁部から胴部と内面全体は、丁寧なヨコナデを施している。

提瓶　肩部に円板を有する完形品の提瓶（165）は、口径5.0cm・器高14.9cm・胴部最大径10.8cm・胴部最大厚8.1cmで、口縁部に凹線が認められる。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、外面の胴部はヘラケズリまたはカキメの上面にヨコナデを加え、内面の胴部はヨコナデを行っている。

平瓶　口径4.5cmを測る平瓶（166）は、口縁部の小破片で頸部以下の部分が不明である。

高杯　杯部（167）と脚部（168・169）の破片が、３点だけ採集されている。杯部の口縁部には１条の凹線が存在し、端部は丸く仕上げている。脚部の内面にはシボリ痕跡が残存し、外面に２条の凹線を有するもの（169）と全体に自然釉が付着しているもの（168）とがある。



第86図　５号墳出土土器（1/4）

鉄器（第88図）

刀子　769は茎の破片である。茎尻は尖る形状をなし、柄の木質が残存している。

装身具（第87・88図、図版38・43－２）

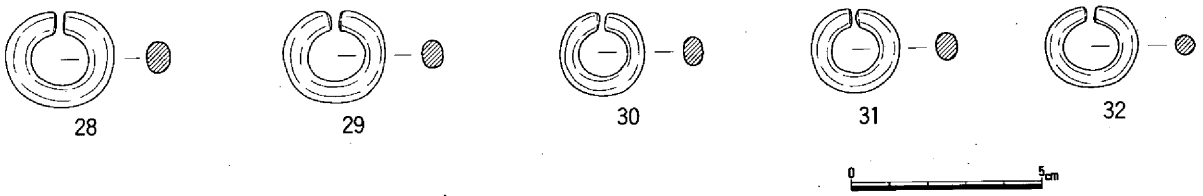
耳環　A陶棺の身の内部から出土した４点の耳環（28～31）は、出土した位置と全体の形態や重さなどから、28と29、30と31がセットになると考えられる。

28は外径2.43～2.79cm・内径1.35～1.61cm・断面形0.60～0.79cm・切れ目幅1.2mm・重さ15.46ｇを測り、銅地銀貼であるが、表面の銀箔は約半分の面積が残存しない。30は外径2.17～2.29cm・内径1.20～1.21cm・断面径0.50～0.76cm・切れ目幅1.3mm・重さ10.65ｇを測り、銅地銀貼で、表面の銀箔は剝離した部分が多い。32は銅地銀貼の耳環で、表面の銀箔の残存状態は極めて良好である。

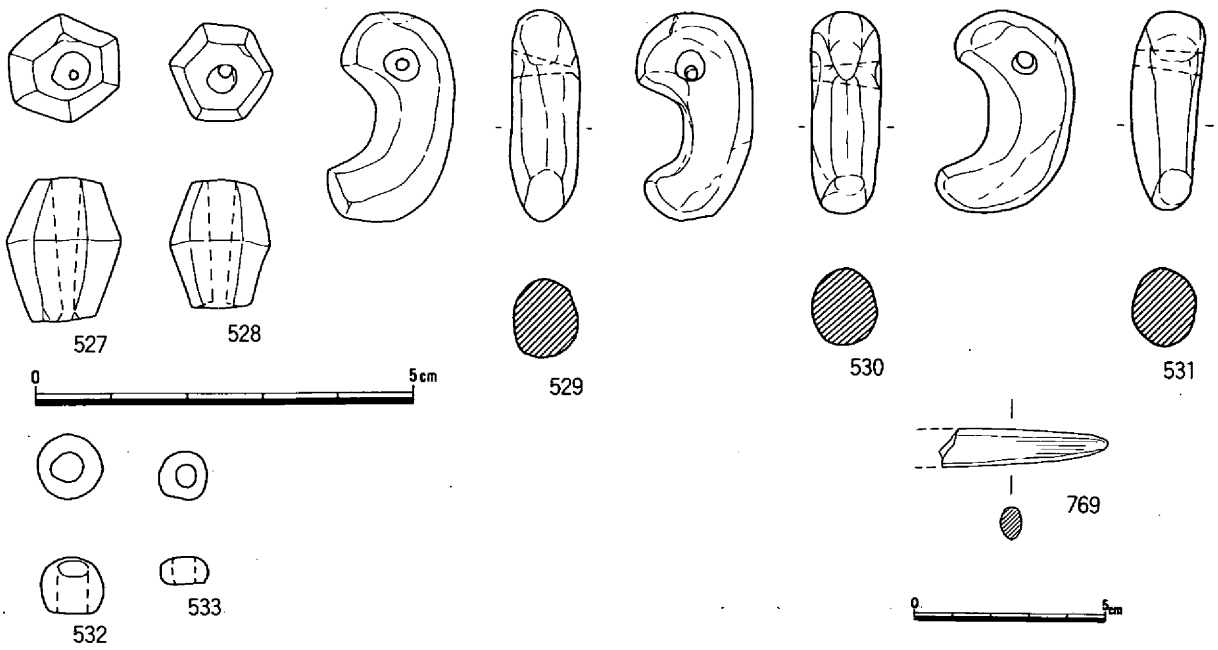
玉類　527と528は材質が水晶の切子玉で、２点とも６面加工を行って透明である。中央の円孔は片面穿孔が施され、反対側に若干の抉りが存在する。

529～531は勾玉であるが、529の材質は透明な水晶であり、530と531は碧玉で濃緑色と緑灰色が混在した色調または深緑色を呈している。円孔はいずれも片面穿孔を施しているが、529は反対側に若干の抉りが認められる。

532と533はガラス製の小玉である。どちらも片面穿孔であるが、533の表面は風化が著しく進行している。532の計測値は、高さ7.6mm・径8.1mm・孔径3.1mm・重さ1.13ｇである。533の計測値は、高さ3.7mm・径6.3mm・孔径3.1mm・重さ0.20ｇであり、532よりも法量が極めて小さい。



第87図　５号墳出土耳環（1/2）



第88図　５号墳出土玉類（1/1）・鉄器（1/2）

(6)　６号墳

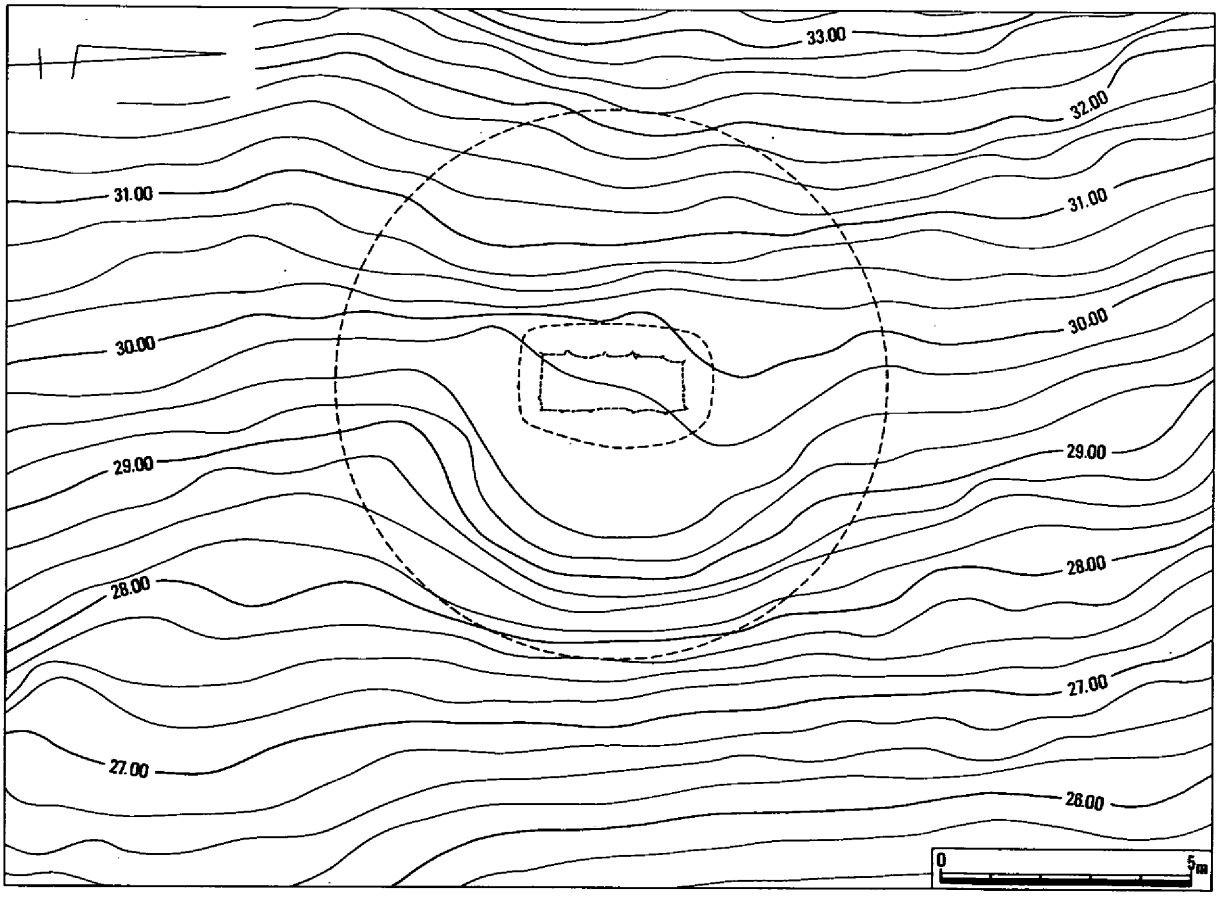
調査前の状況（第89図）

この６号墳も、『岡山市埋蔵文化財分布地図』には記載されていなかった。

古墳の周辺に存在した立木伐採作業が終了すると、古墳群が所在した範囲の地形が明らかになり、当初の時点に調査の対象になっていた４基の古墳以外にも、古墳の墳丘と推定される高まりが、数か所ほど新しく発見された。この６号墳が所在したのもこのような状態の所で、３号墳から西方向へ約25mも行った地点である。

香橋池を見下ろす東方向に面した急勾配で下降する丘陵の斜面に、不自然な状態の周辺よりもわずかに高くなった部分が認められた。地形の低い東側が急激に低くなっていたため、古墳をその地点に築造したならば、墳丘の盛土のみならず埋葬施設までも崩壊するだろうと思われる地形であった。

高まりの中心部と考えられる所に、等高線と直交するトレンチを設定して、遺構の確認調査を行った。その結果、表土面より極めて浅い位置から、約1.50mの間隔を有する石組みの遺構を検出した。この遺構は古墳の埋葬施設であると直感したが、残存する高まりの部分が非常に狭い面積であったので、横穴式石室ではないと判断した。そのためにボーリング棒を使って探査を試みたところ、箱形に囲む４方向とも石が据えられていることが明らかになり、天井石のない竪穴式石室であると考えた。また石組みの東側に位置する地形が低くなった所では、横方向に縞模様の版築状を呈する土砂を含む４層になった盛土も確認したので、新しく発見した「６号墳」と命名して全面調査を実施した。



第89図　６号墳調査前周辺地形測量図（1/150）

墳丘と周溝（第90・93図、図版26－３）

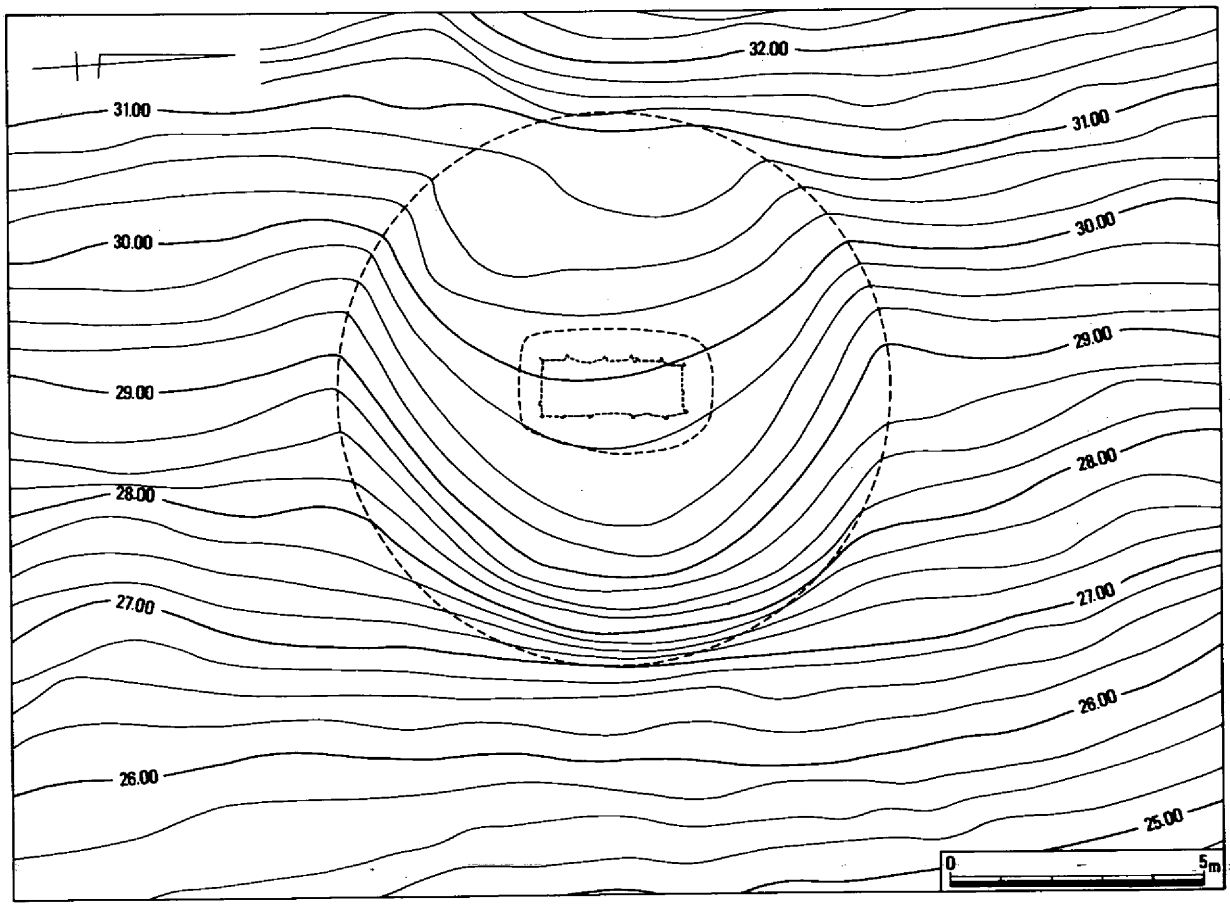
この６号墳は、不自然な状態で周辺よりもわずかに高くなった部分が存在したから、トレンチによる確認調査を行って新しく発見した古墳である。したがって、調査に着手する以前の段階に現地へ行っても、古墳が所在するとはとても考えられない状況であった。

埋葬施設の竪穴式石室は、斜面を平坦にした部分をさらに少しだけ掘り窪め、その中に石室を築造していた。天井石が１枚も残存しなかったので、石室上位の墳丘表面がわずかに陥没していた。

６号墳が発見された地点は、急勾配で下降する丘陵の斜面であったので、地形の低い東側の墳丘には、盛土が流出しないように工夫されていた。すなわち明黄褐色を呈する旧表土の上面に上位から下位にかけて、淡黄褐色土、横方向に縞模様の版築状になった灰黄褐色土、灰黒色土、暗灰黄褐色土をサンドイッチの状態で４層になるように盛り上げていた。だから地形の低い香橋池の方向から古墳を眺めると、実際よりも規模が大きく感じられたのではなかろうか。また地形の高い西側の墳丘には、地山の上面に花崗岩が風化した暗黄褐色土だけが認められた。

この６号墳の墳丘は、直径約11ｍの円墳である。残存する墳丘の高さは、地形の低い東側の墳端から測ると約2.80ｍ、石室の床面からでは約90㎝になっていた。ところが地形が高くなった西側の墳端については、墳頂部より約90㎝も高いレベルの位置であった。

６号墳の周溝は、墳丘の盛土が流出していたこともあって、明瞭な痕跡を検出することができなかった。西側の地形の高い部分は、墳端の地山面を掘り窪めていただけで、溝にはなっていなかった。北側と南側の部分も、盛土と地山の境界である墳端は確認できたが、周溝は存在しなかった。



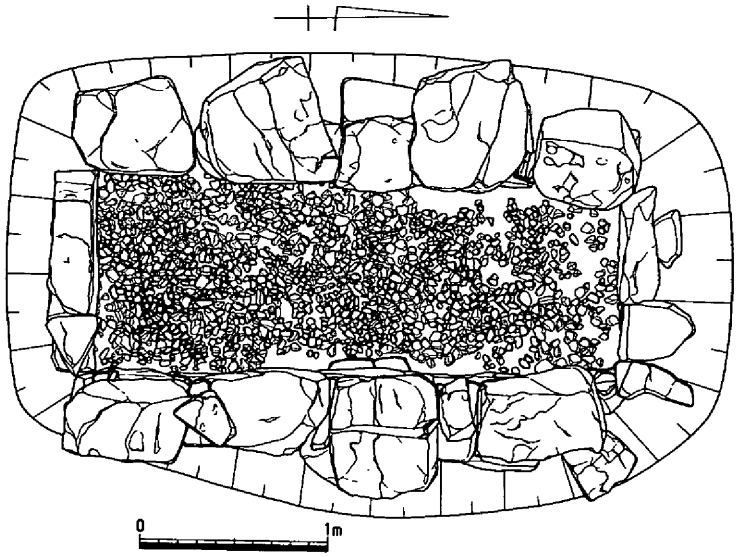
第90図　６号墳調査後周辺地形測量図（1/150）

埋葬施設（第91・92図、図版27－１）

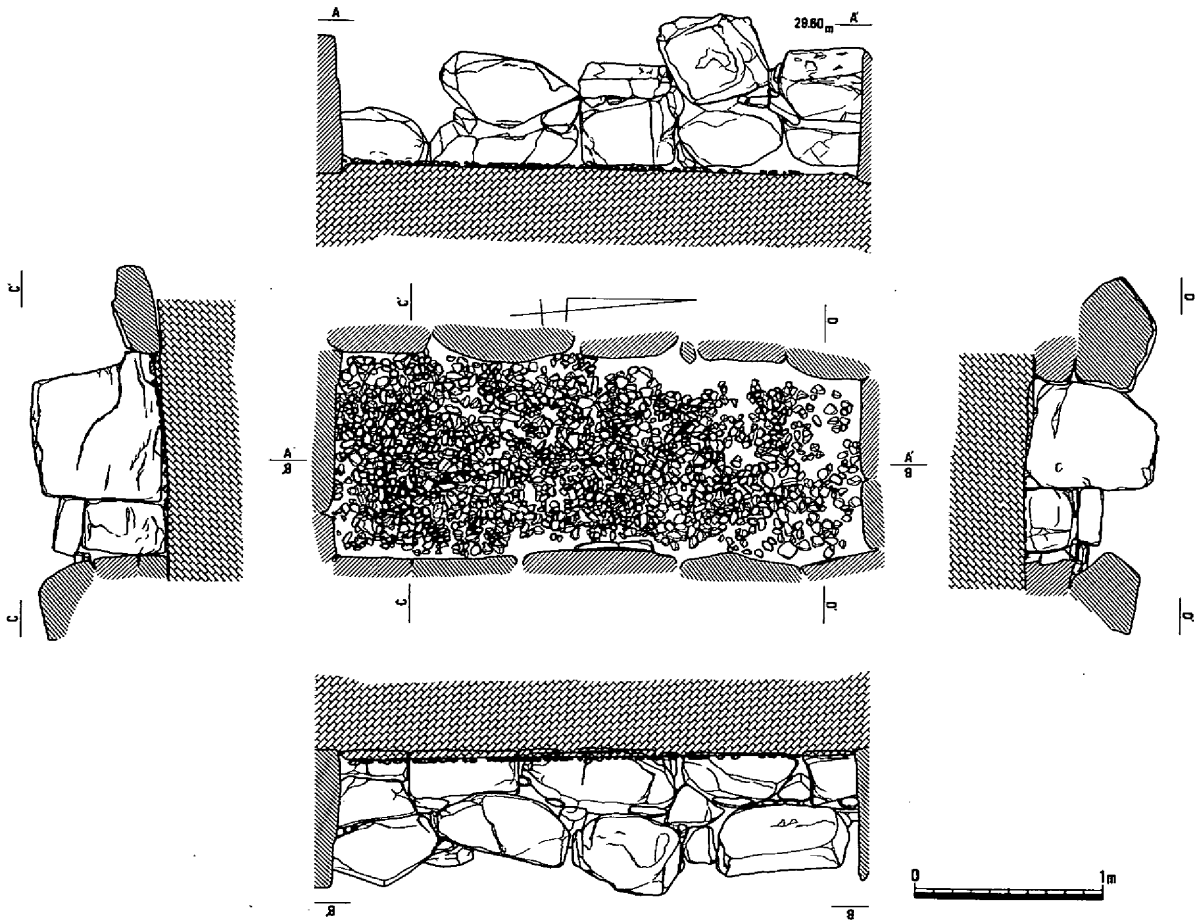
この６号墳の埋葬施設は、天井石が欠損した竪穴式石室である。

南側の小口部分は、基底部に２個の板石を立てた状態に並べて据えていた。西側の側壁に面した石は、石室内表面が上面約60cm・底面約80cm・高さ約70cmを測り、厚さは約20cmであった。東側の側壁に面した石は、短辺約30cm・長辺約45cmの小規模な長方形を呈し、上位に短辺約15cm・長辺約30cmの石を乗せていた。

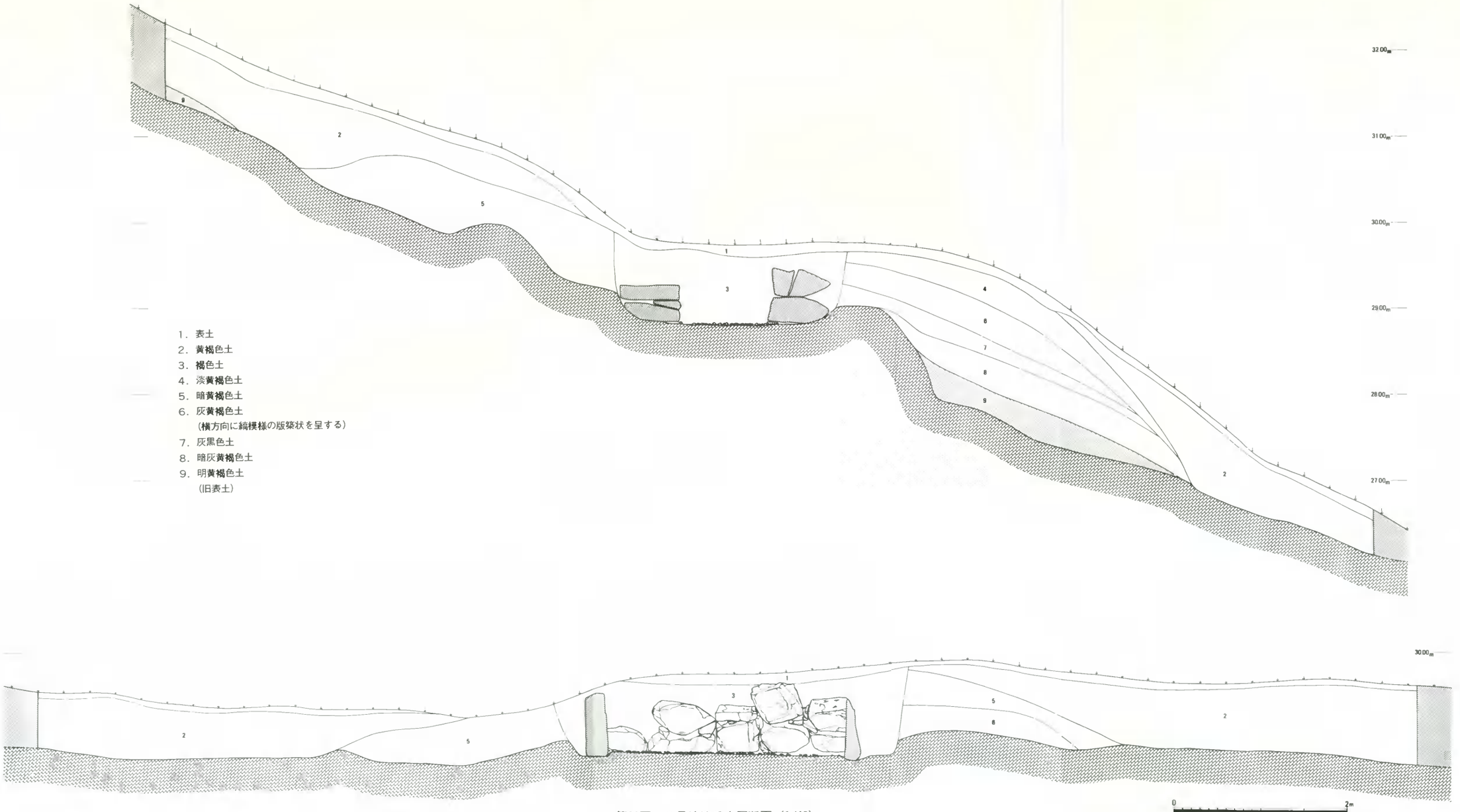
北側の小口部分も、前述した南側の小口部分と同様に、基底部に２個の板石を並べて据えていた。西側の側壁に面した石は、石室内が上面約35cm・底面約55cm・高さ約70cmで、底部の最大幅が約20cmの扁平な石であった。東側の側壁に面した石は、短辺約25cm・長辺約35cmの長方形を呈し、上位に厚



第91図　６号墳石室上面実測図（1/40）



第92図　６号墳石室実測図（1/40）



第93図　６号墳墳丘土層断面（1/40）

さ約10cmの板石を小口積みにしていた。

西側の側壁は、基底部に5個の石を据えていたが、石の規模だけでなく石を置く方法も統一されていなかった。南側の小口部分に面した所は、2段目の石が抜き取られて存在しなかった。

東側の側壁も、基底部に5個の石を据えていたが、いずれも幅の広い面を底部にして置かれていたため、西側の側壁に比して安定感があった。南側の小口部分に面した所は、基底部に据えられていた石が小さいから、残存した小口部分の高さまでに3個の石が積み上げられていた。また北側の小口部分に面した所は、基底部に据えられた石の上位に空間が認められた。

なおこの6号墳の石室には天井石が残存しなかったため、南北両小口部分および東西両側壁とも、壁面に積み上げられていた上位の石が崩壊していると考えられた。石室の床面は、南側の小口部分から北側の小口部分に向かってわずかに傾斜し、全体に小さな砂利が敷き詰められていた。

6号墳の埋葬施設である竪穴式石室の床面での計測値は、全長約280cm・南側小口幅約110cm・北側小口幅約90cmを測り、床面から天井石までの高さは85cm以上になるであろう。

ところで6号墳の石室の床面からは、南側の小口部分より杯身と杯蓋を主体にした須恵器群と鉄鏃が、北側の小口部分より土師器の壺と馬具が、それぞれ出土した。これらの遺物は、副葬された当時の位置から決して動いていないと確信できただけでなく、棺痕跡そのものは検出できなかったけれども、遺骸を安置した棺の外側に置かれていると推定された。このようなことから、石室内に埋葬されていた棺の長さは、おそらく約200cmになるであろう。

遺物出土状況（第94図、巻頭図版3－2、図版27－1・27－2・27－3）

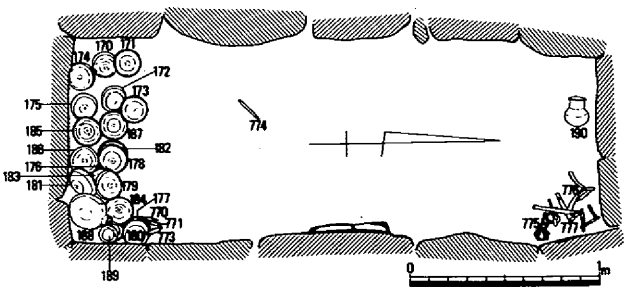
6号墳の埋葬施設である竪穴式石室は、墳丘が削平されて天井石が1枚も残存しなかったものの、意外にも石室内の床面は撹乱されることなく、埋葬された当時の様相を良好な状態で留めていた。

南側の小口部分からは、須恵器の杯身9点・杯蓋9点・提瓶1点・甕1点の合計20点の土器と、4点の鉄鏃が出土した。杯身と杯蓋は、いずれも底部や天井部を上にして口縁部が下になるように伏せた状態で置かれており、6組12点のセット関係が判明した。提瓶は東側の側壁との隅に横倒しになって存在したが、口縁部と肩部の耳を欠損していた。甕も東側の側壁との隅から出土したが、底部が上で口縁部を下にした倒立の状態になっていた。4点の鉄鏃は、東側の側壁に接して存在した杯身と杯蓋の周辺から、鏃身を北方向に向けて出土した。

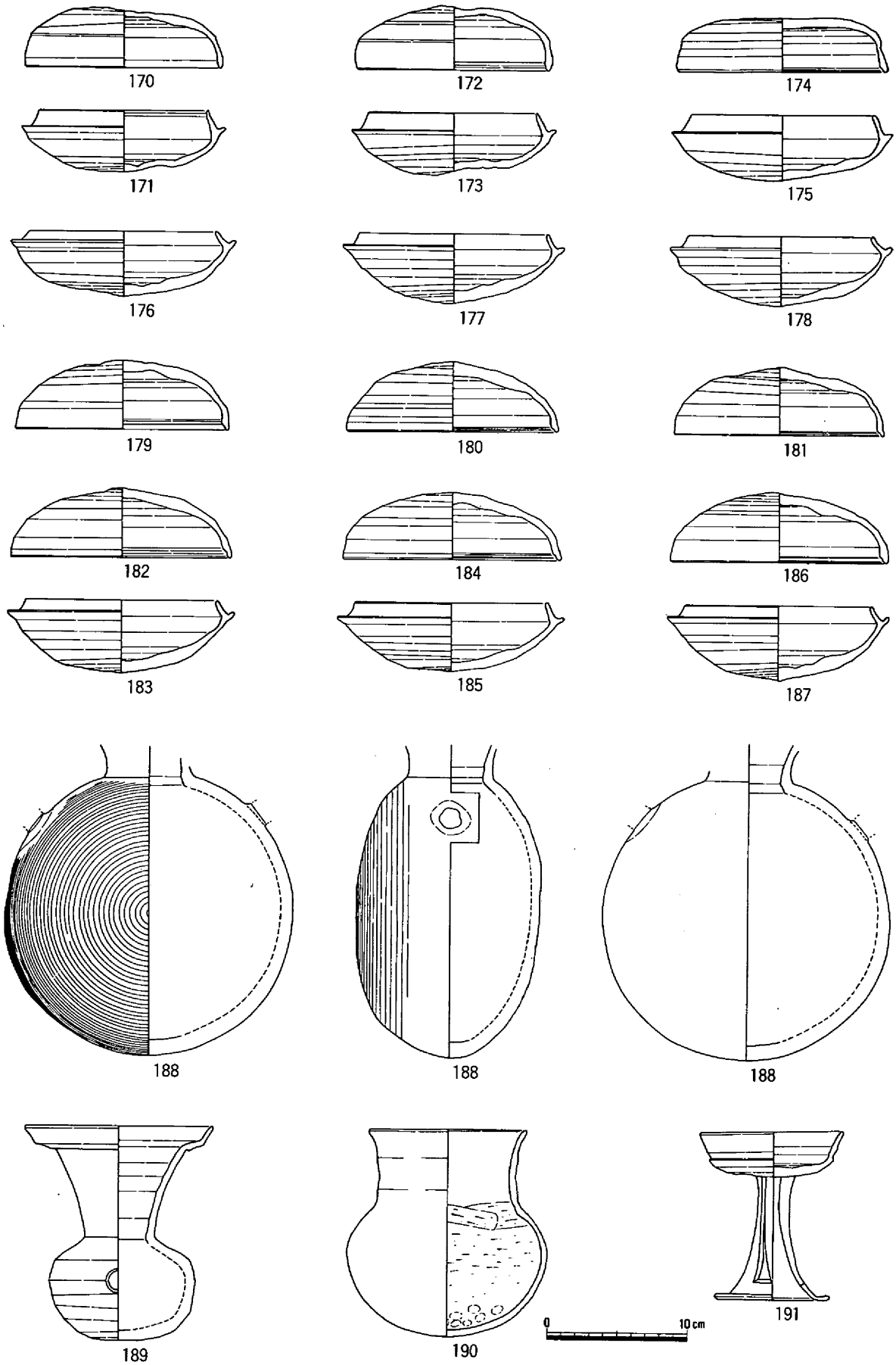
北側の小口部分からは、土師器の壺1点と、馬具の鐙金具2点・轡1点が出土した。土師器の壺は、口縁部を西方向に向けて横倒しになって出土した。馬具は、東側の側壁との隅に集中して存在したが、1点の鐙金具は立ったままの状態になっていた。轡は片方の倒れた鐙金具の下から重なって出土した。なお1点の刀子は、石室の中央部でも南側の小口部分に寄った地点で検出した。

このような遺物の出土状況や、石室の床面が南から北方向にやや傾斜して南側の小口部分が北側よりも少しだけ広いから、この6号墳の竪穴式石室に埋葬されていた遺骸の頭位は、南側になるであろう。

ところで191の須恵器の長脚無蓋高杯は、調査終了後に墳丘を断ち割って発見したもので、石室内から出土した遺物ではない。



第94図　6号墳遺物出土状況（1/40）



第95図　６号墳出土土器（1/4）

出土遺物

須恵器（第95図、図版37）

杯身・杯蓋　この６号墳の埋葬施設である竪穴式石室から出土した杯身と杯蓋の法量や色調を精査した結果、６組12点（170～175・182～187）のセット関係が判明した。杯身は口径11.8～13.6cm・器高4.3～5.3cmで、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行っているが、回転方向が右のものと左のものが認められる。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の底部に仕上げナデを加えているものもある。杯蓋は口径13.6～15.4cm・器高3.8～4.9cmで、外面の天井部と体部の境に稜が認められるもの（170・172）や、内面の口縁端部に段を有するものが多い。外面の天井部はヘラケズリを行っているが、回転方向が右のものと左のものが存在する。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、内面の天井部に仕上げナデを加えているものもある。これらの杯身や杯蓋の胎土中には砂粒が比較的多く、焼成は良好で全体に青灰色を呈している。

提瓶　口縁部と肩部の耳を欠損した提瓶（188）は、胴部最大径20.2cm・胴部最大厚12.8cmを測る。欠損した耳の形状は、その剝離した両方の痕跡から推定して鉤形であったと考える。外面の胴部正面にはカキメが認められ、胴部背面にはヘラケズリの上面に丁寧なヨコナデを加えている。外面の口縁部から頸部にかけては、全体にヨコナデを施している。内面の胴部から口縁部にかけては、全体にヨコナデを施している。外面の器表面には自然釉が薄く付着しており、焼成は極めて良好で全体に灰白色を呈している。

𤭯　倒立した状態で出土した𤭯（189）は完形品で、口径12.9cm・器高15.0cm・胴部径10.3cm・頸部径4.9cmを測る。頸部から口縁部にかけてはラッパ状に開き、口縁端部は斜め上方へ立ち上がって丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、その他の部分は全体にヨコナデを施しているが、外面の頸部にはカキメが残存している。内面の一部に有機物が付着し、外面全体には自然釉が付着している。この𤭯の焼成は良好で、青灰色を呈しているが、内面には灰白色の部分も認められる。

高杯　調査終了後に墳丘を断ち割って検出した長脚無蓋高杯（191）は、口径9.9cm・器高11.7cm・脚底径7.2cmを測り、脚部には３方向で１段の透しが存在する。杯部は浅くて口縁部は斜め上方へ開き、端部は全体に丸く仕上げている。また杯部の口縁部と底部の境には、段が存在する。脚部は細くて長く、裾部はラッパ状に開いて端部が丸くなっている。杯部の外面底部には回転方向が右のヘラケズリを行い、その他は全体にヨコナデを施している。外面の脚部には、部分的にカキメが残存している。胎土中には砂粒が少なく、焼成は良好で全体に青灰色を呈している。

この高杯は埋葬施設の竪穴式石室からの出土品ではないから、時期的にやや古くなるであろう。

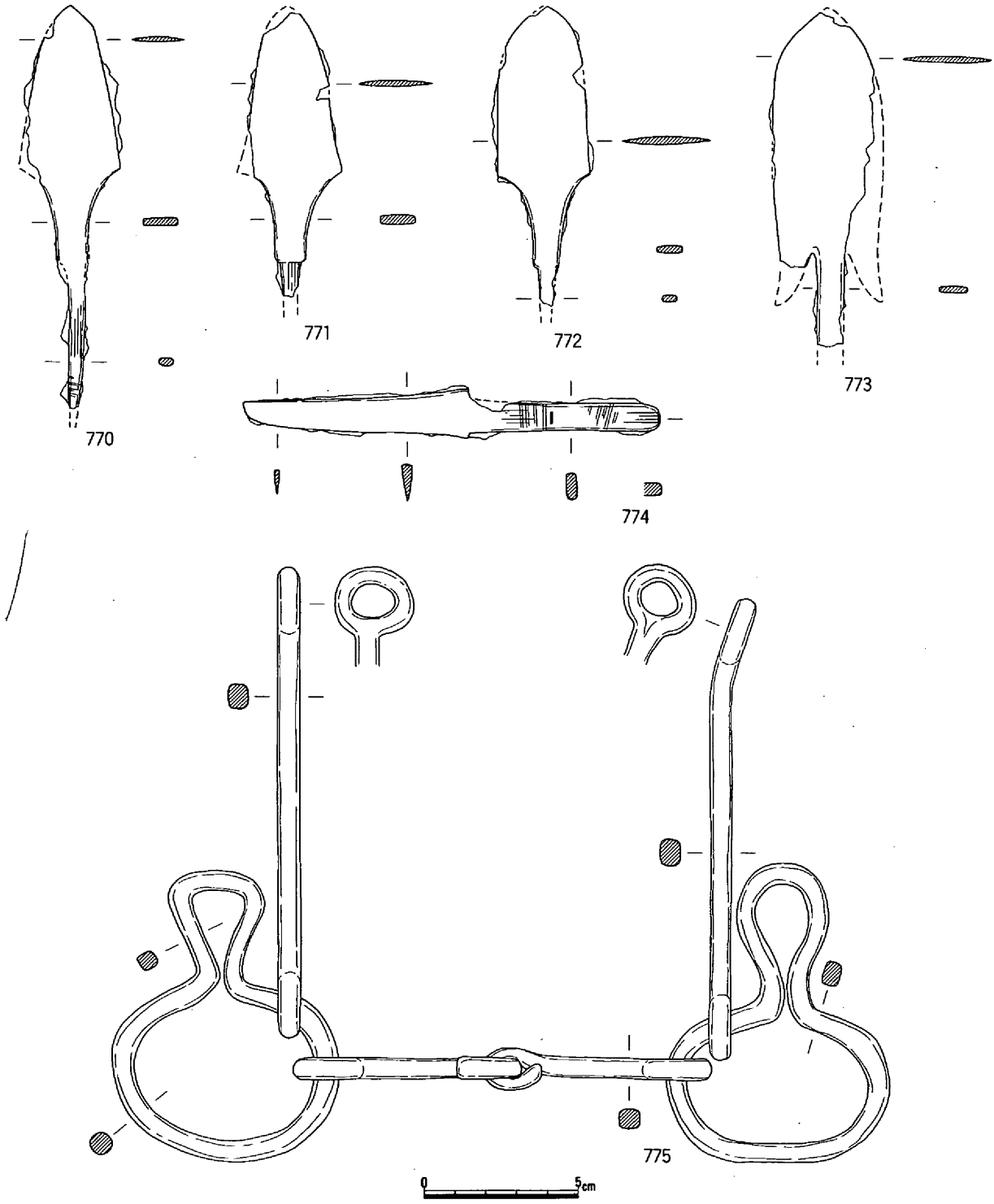
土師器（第95図、図版37）

壺　北側の小口部分から、口縁部を西方向に向けて横倒しの状態で出土した直口壺（190）は、口径10.9cm・器高14.5cm・胴部最大径14.1cmを測り、ほぼ完形品である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外湾しながら上方に立ち上がり、口縁端部は全体に丸く仕上げている。胴部は球形を呈し、底部は丸底である。内面の胴部はヘラケズリを行い、内面の底部には指頭圧痕が認められる。内面の頸部から口縁部にかけてと外面全体は、丁寧なヨコナデを施している。胎土中には砂粒が多く、内外面とも全体に橙色を呈している。

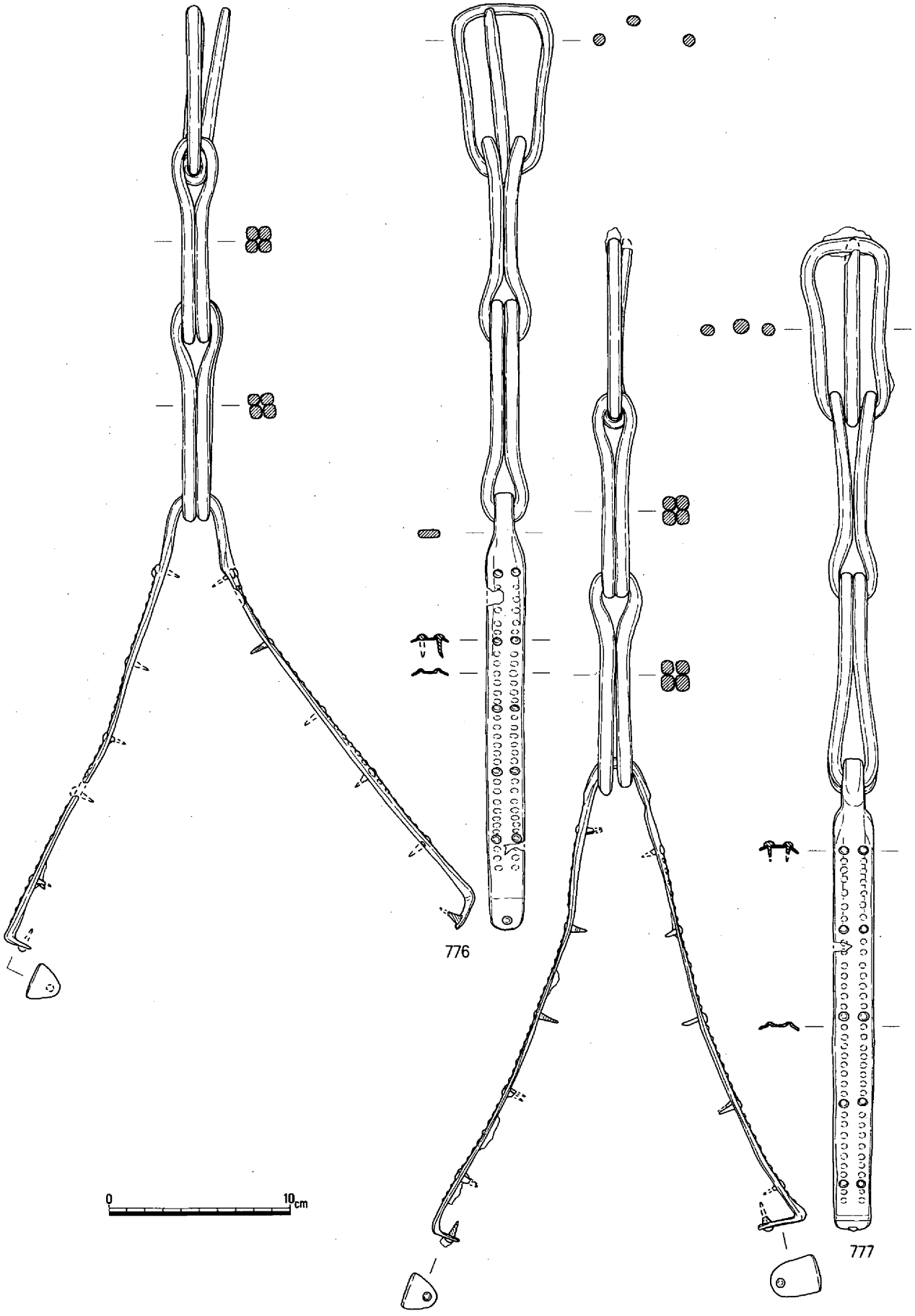
鉄器（第96・97図、図版62・63）

鉄鏃　770～773は鉄鏃で、２種類が存在する。

１類（770～772）は平根の柳葉式鉄鏃である。770・771と772では、若干鏃身の形態が異なっている。770と771は関の部分が外側に大きく突出する形態であり、772は関の部分が外側に突出しない。770～772の３本とも関は内湾する弧を描き、緩やかに頸部につながる。篦被関部はいずれも直角になっており、棘状突起は有しない。



第96図　６号墳出土鉄器（１）(1/2)



第97図　６号墳出土鉄器（２）(1/3)

２類（773）は平根の腸抉柳葉式鉄鏃である。欠損部分が多く、逆刺の形状は不明である。

以上、770～773の鉄鏃は、いずれも非常に薄いつくりで、鏃身部、頸部とも約２㎜の厚さしかない。なお770には茎に糸巻きの痕跡が、また770と771には矢柄の木質がそれぞれ認められる。

刀子　774の刀子は、全長13.5㎝・刀身長7.2㎝・茎長6.3㎝を測る。刀身は関の所で最大幅1.6㎝になっている。関は両側縁に段を有する型式で、茎尻は丸く終わる。

775～777は馬具である。

轡　775の轡は、環状の鏡板を有する円環轡である。鏡板は断面形が方形の鉄棒を曲げて瓢形に形成しており、上方に突出した部分を立聞として使用する型式である。左側の鏡板で最大幅7.2㎝・高さ9.4㎝、右側の鏡板で最大幅7.3㎝・高さ9.8㎝を測る。

銜と引手は、それぞれを別々に鏡板に連結している。銜は二連式のものである。中央のくくみ部の環は、鉄棒を曲げて形成しただけで、鍛接等の処理は行っていない。いわゆる「わらび手技法」によるものである。銜の外側の環および引手端につくられている環は、鍛接処理が行われたものである。引手は、断面形が方形の鉄棒の両端に環をつくったものである。左側の引手長15.2㎝、右側の引手長14.9㎝を測る。右側の引手のみ緩い角度ではあるが、先端を「く」字形に折り曲げている。

鐙金具　776と777は鐙金具である。三角錐形の木製壺鐙に付属するものと考えられる。鐙を吊るための鋲具と兵庫鎖および壺鐙の縁を装飾する鉄製金具からなる。鋲具は両側縁が若干内湾する隅丸方形のもので、刺金が付属する。兵庫鎖は二連である。鐙本体に付属する金具は、幅約２㎝の帯金を用いて縁を装飾するものである。踏込部の金具および鳩胸金具はない。側縁が若干内湾する二等辺三角形を呈し、下端部は折り曲げられて底面に沿うようになっている。帯金には２列に笠鋲が並べて打たれている。約５㎝の間隔で片側に５か所、２個ずつ認められる。底部に折り曲げられた部分にも、下側から１個の鋲が打たれている。鋲足は長さ１㎝前後で、木目の付着しているものが多い。この木目の在り方から推定して、縦位の木目の木材を刳り貫いて鐙本体を形成したと思われる。側縁においては、鋲と鋲の間に６～８個の疑似鋲が表現されている。これは裏面から叩き出して、表面から見ると鋲が密に打たれているように装飾したものである。

鋲具と兵庫鎖の総長は、776で50.7㎝、777で54.5㎝である。鐙本体に付属する金具の描く二等辺三角形は、金具そのものの歪みも多いが、ほぼ776で底辺25.9㎝・高さ25.0㎝、777で底辺20.5㎝・高さ26.5㎝である。

ところで、６号墳にみられる瓢形の円環轡は、全国各地に類例が知られているが、その古いタイプのものは、特徴的な分布を示している。古いタイプのものはこの６号墳のように銜と引手を別々に鏡板に連結するのに対し、新しいタイプのものは銜の端環に引手と鏡板を同時に連結している。その古いタイプの類例は岡山県内に非常に多く、今回の西山６号墳をはじめ、山陽町斎富２号墳[1]、総社市立坂北１号墳[2]、勝央町小中古墳群３区№４土壙墓[3]、津山市河辺上原２号墳[4]、岡山市津寺遺跡野上田調査区南北流路内洗掘部[5]などがある。その他の地域では、関東から九州まで広い地域に知られているものの、数は多くない。この古いタイプの瓢形円環轡は、６世紀の前葉から中葉という限られた時期にみられるものであるが、この時期の古墳の多い奈良県下にあっても、新庄町寺口忍海古墳群[6]からの１例が知られているのみである。したがって一般的な馬具とは異なる、特殊な流通経路をもつもののように思われる。また６号墳出土の鐙金具については、壺鐙の口に鉄板をめぐらすという一般的なものであるが、鐙の底部までそれが及んでいる例は多くない。

(7)　７号墳

調査前の状況（第98図）

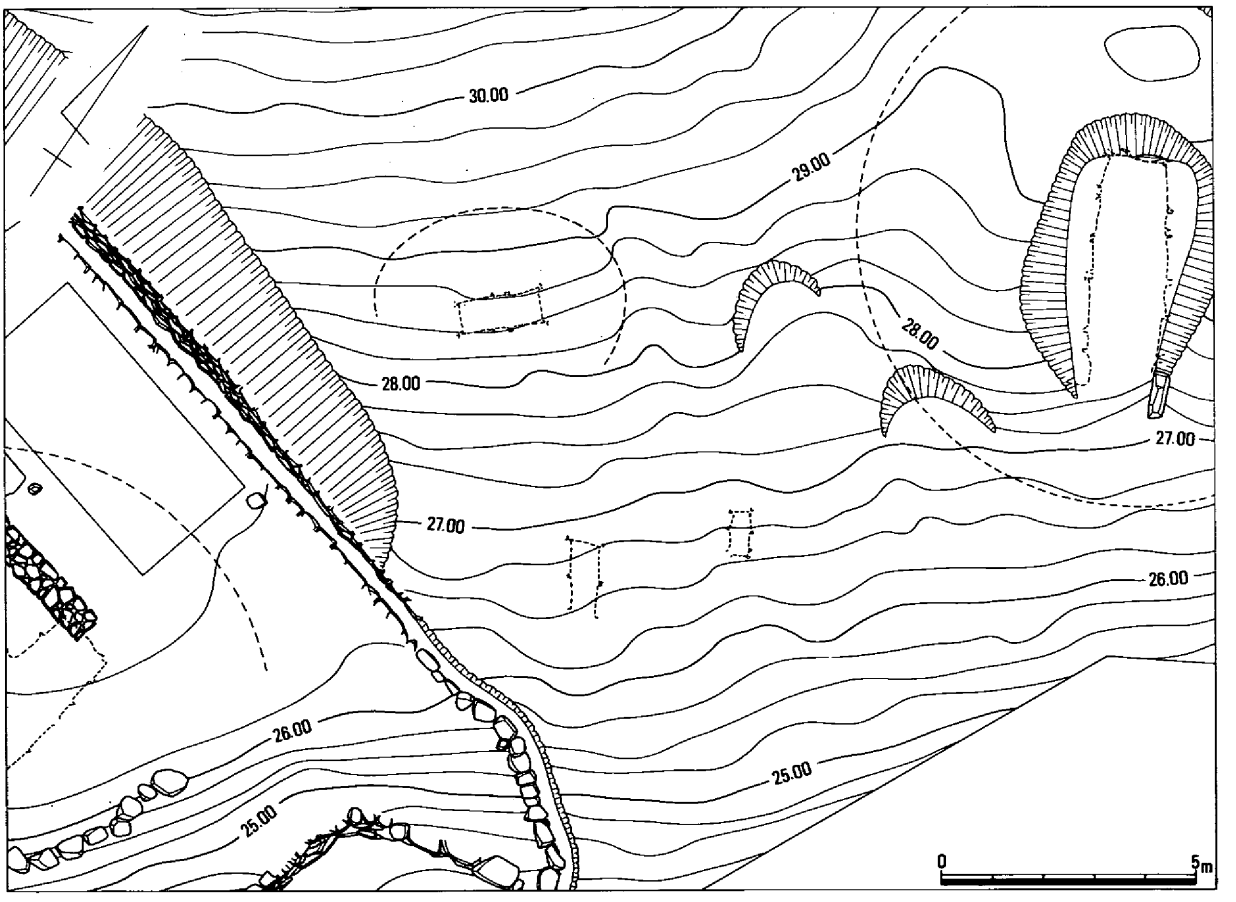
７号墳を検出した地点は、４号墳と５号墳の中間に位置する丘陵の斜面で、発掘調査に着手する以前にはその所在は知られていなかった。この周辺には、自然の石か埋葬施設に使われていた石か見極めることができないものが多く存在したため、表土を除去して全面調査を実施したのである。その結果、天井石のない箱式石棺を発見し、地形の高い西側の部分に周溝の痕跡も確認した。

墳丘と周溝（第99図、図版28―１）

この７号墳は、埋葬施設が箱式石棺で規模の小さい古墳であったから、全面調査を実施してその所在が明らかになったのである。天井石が１枚も残存しなかったこともあって、発掘調査に着手する以前の段階では、墳丘と思われる高まりは認められなかった。表土除去作業を行って長方形に石が並んだ部分を検出し、内部から須恵器や鉄器が出土したので埋葬施設と考えた。さらにその周辺を精査したところ、地形の高い部分に周溝の痕跡が存在したため、新しく発見した「７号墳」にした。

この７号墳の墳丘は、埋葬施設の主軸方向である等高線に平行するように計測すると約５ｍ、主軸に直交する斜面の方向では約４ｍの楕円形になっていた。

７号墳の周溝については、地形の高い北側から北西側にかけてその痕跡が検出されたが、地形の低い南側から南東側にかけては残存しなかった。この周溝の痕跡は地山面を掘り窪めたもので、検出面での最大幅は約1.80ｍを測り、断面形は浅い「Ｕ」字形を呈していた。



第98図　７号墳・８号墓・９号墓調査前周辺地形測量図（1/150）

埋葬施設（第101図、図版28―１・28―２）

この７号墳の埋葬施設は箱式石棺であるが、天井石が１枚も残存しなかった。

北東側と南西側の小口部分は、どちらも両側壁に挟まれた状態で、比較的大きくて安定した１個の石が据えられていた。

南東側の側壁には、基底部に３個の石を並べていたが、２段目以上の石は崩壊して認められなかった。この基底部の石は、部分的には旧表土の上に置かれていた。北西側の側壁にも、基底部に３個の石を据えていたが、石の大きさは南東側の側壁以上に不揃いであった。中央部には３段の石積みが残存していたが、極めて小規模な石を使用していた。南西側の小口部分に接する位置は、大きな石を２段に横口積みにしており、その上面のレベルが南西側の小口よりも高くなっていた。その地点の石棺内の断面形は、やや内傾して立ち上がる「持ち送り」の形態になっていた。

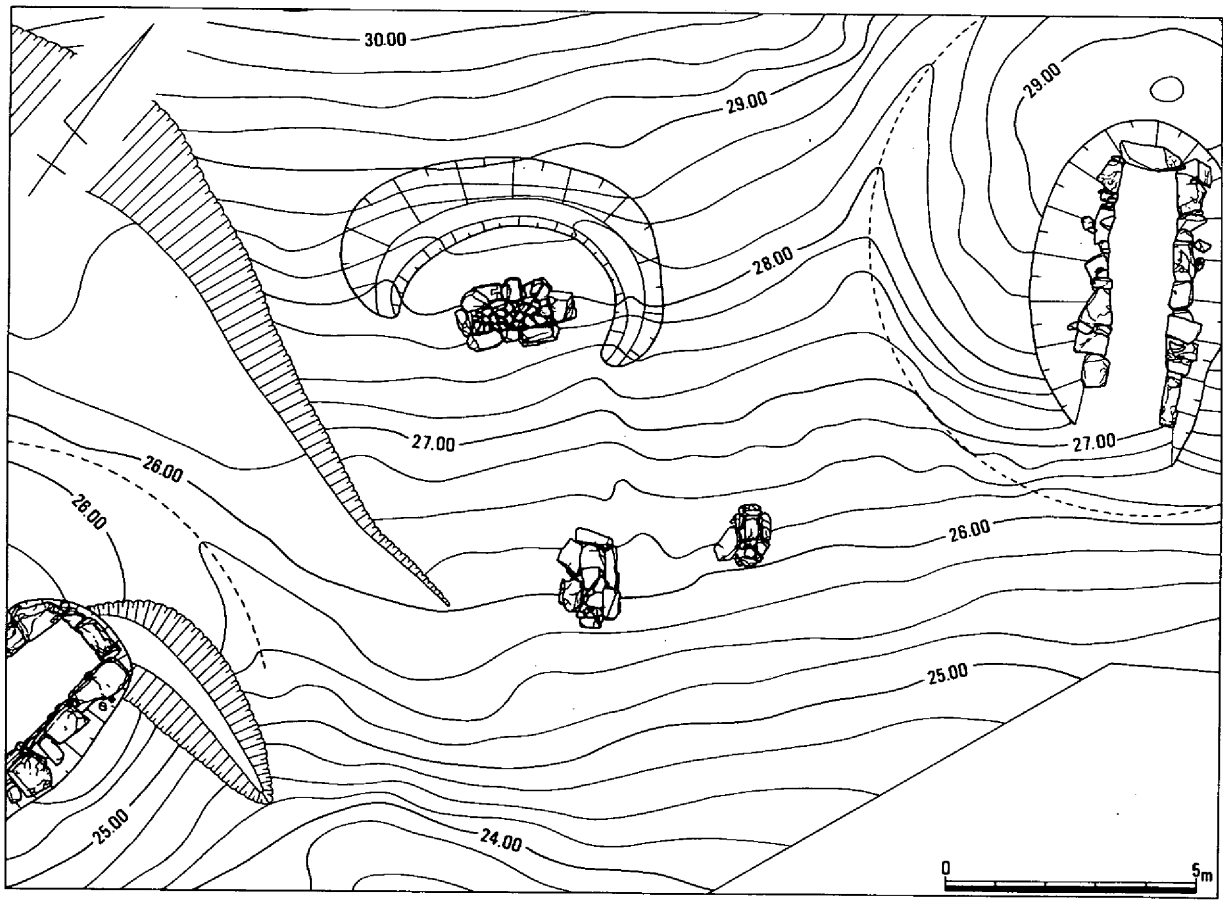
なおこの石棺内の床面には、全体に板石が敷き詰められていた。

７号墳の埋葬施設である箱式石棺の床面での計測値は、全長約160cm・北東側小口幅約70cm・南西側小口幅約60cmを測り、床面から天井石までの高さは75cm以上になるであろう。

遺物出土状況（第100図、図版28―２・28―３）

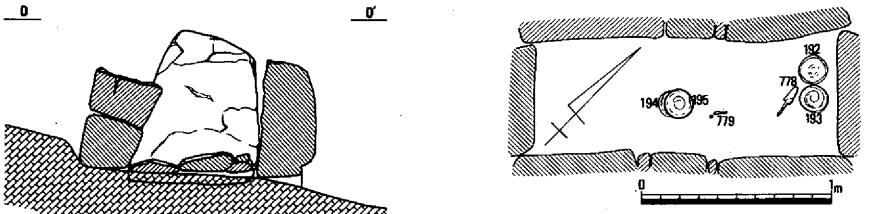
７号墳の埋葬施設である箱式石棺は、墳丘が削平されて天井石が１枚も残存しなかったものの、石棺内の床面には須恵器や鉄器の遺物が、埋葬された当時の状態で出土した。

北東側の小口部分には、セットになる杯身と杯蓋がともに口縁部を下にして並べて置かれ、近接して１点の大形の鉄鏃が出土した。中央部にはセットになる杯身と杯蓋がともに口縁部を下にして、杯

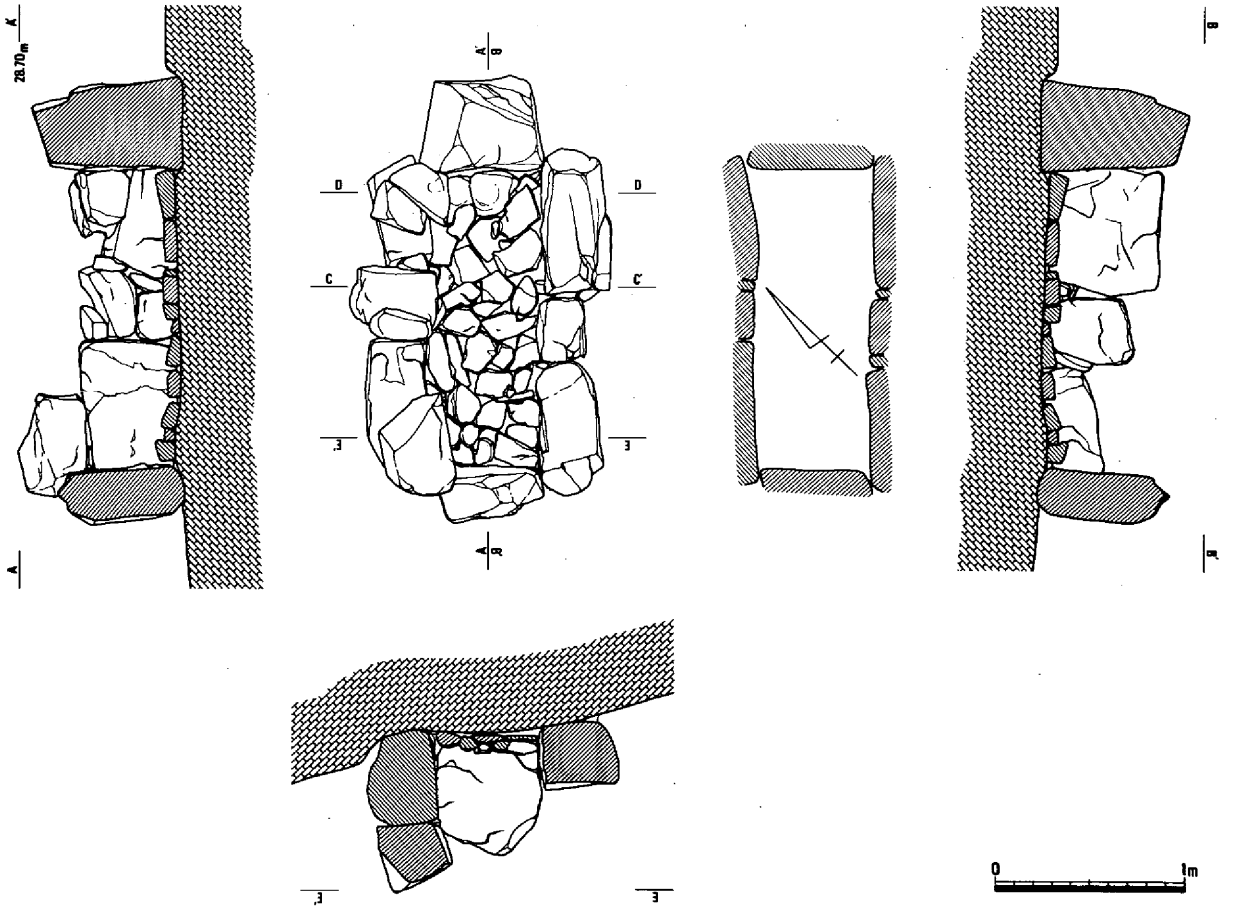


第99図　７号墳・８号墓・９号墓調査後周辺地形測量図（1/150）

蓋が下で杯身が上になるように重なった状態に置かれ、周辺から鎚の伴う刀子の破片が出土した。北東側の小口部分は南西側のそれよりも幅が広く、据えられた石の規模も厚みがあって高さが勝ることから、この石棺に埋葬された遺骸の頭位は北東側と推定され、並べて置かれて杯身と杯蓋は、頭部を支える枕の役目をしていたと考える。



第100図　７号墳遺物出土状況（1/40）



第101図　７号墳石棺実測図（1/40）

出土遺物

須恵器（第102図、図版37）

杯身・杯蓋　７号墳の箱式石棺内からは４点の杯身と杯蓋が出土したが、その法量や色調などを精査した結果、北東側の小口部分から出土した杯身（193）と杯蓋（192）、中央部に重なっていた杯身（195）と杯蓋（194）がそれぞれセットになることが判明した。前者のセットは、杯身も杯蓋も口径に比して器高が低いものである。

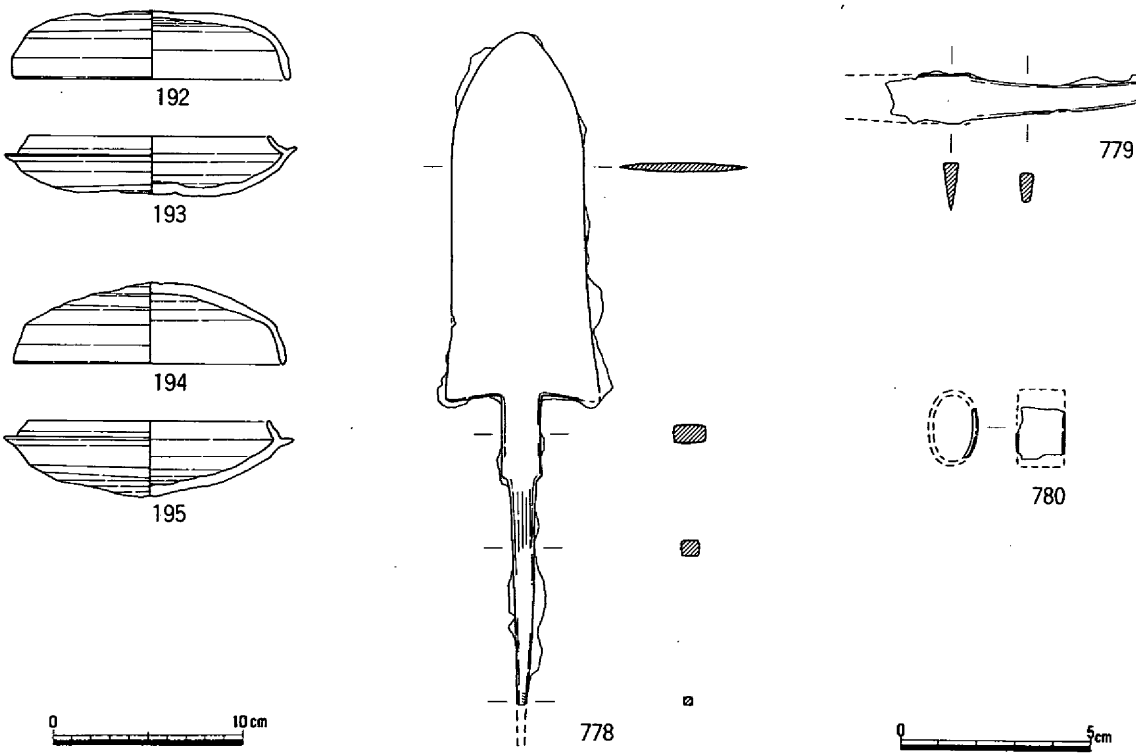
192の計測値は、口径14.3～14.7cm・器高3.6cmである。193の計測値は、口径12.2～12.6cm・器高3.2cmである。194の計測値は、口径14.2～14.4cm・器高4.3cmである。195の計測値は、口径12.2～12.6cm・器高4.0cmである。これらの杯身の口縁部は内傾して低く立ち上がり、端部は全体に丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。内面の底部には、仕上げナデを加えている。またこれらの杯蓋の口縁部は、やや器壁が厚くなって端部を丸く仕上げている。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。内面の天井部には、仕上げナデを加えている。この４点の杯身と杯蓋は、いずれも完形品である。またすべてのものが焼成は良好で青灰色を呈しているが、193は全体の器形が著しく歪んでいる。

鉄器（第102図、図版64）

鉄鏃　778は大形の平根式鉄鏃である。鏃身の型式は腸抉柳葉式で、逆刺は浅い。鏃身長9.7cm・鏃身最大幅4.1cm・頸部長2.1cmを測り、茎には矢柄の木質と糸巻きがわずかに残存する。

刀子　779は刀子の茎から刀身の一部分までの破片である。残存する茎長は4.9cmであり、関部は両側に段を有する。

鎹　780は前述した779の刀子に付属すると思われる鎹で、幅は1.3cmである。

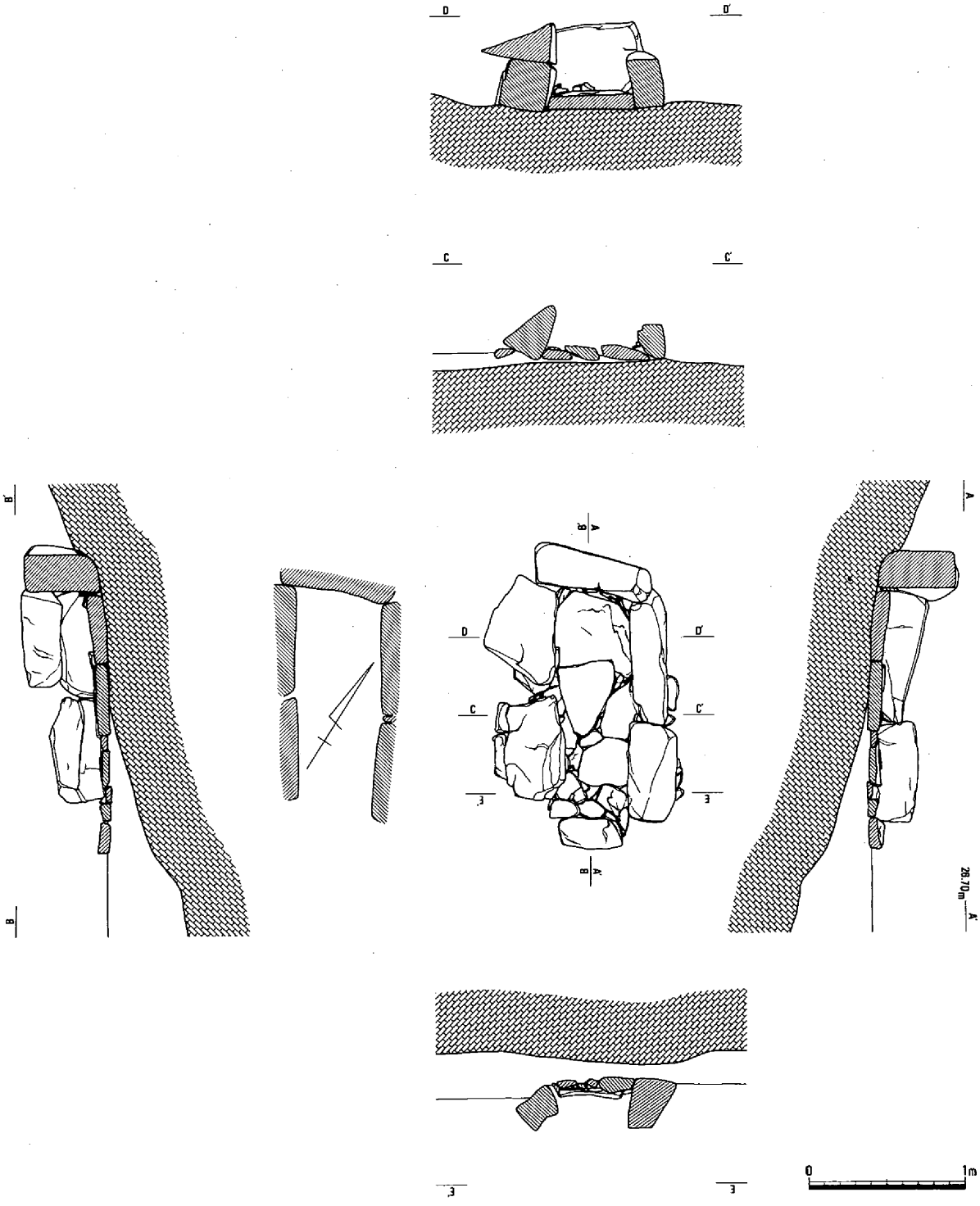


第102図　７号墳出土遺物（1/4, 1/2）

(8)　８号墓

調査前の状況（第98図）

８号墓を検出した地点は、７号墳から約５ｍ離れた地形の低い所で、東側に近接して後述する９号墓が存在した。この周辺には、自然の石が埋葬施設に使われていた石か判断できないものが多く散在したため、全面調査を実施して天井石と片方の小口がない箱式石棺を発見したのである。



第103図　８号墓石棺実測図（1/40）

墳丘と周溝（第99図）

4号墳と5号墳の中間部分に存在する緩斜面の全面調査を行っていると、7号墳から約5m下った地点で、石が「コ」字状に並べられた状態のものを検出した。石に囲まれた内部を精査したところ、3点の刀子が底面に密着して出土したため、新しく発見した埋葬施設と判断した。この周辺を丹念に調査したが、墳丘や周溝は存在しなかった。

埋葬施設（第103図、図版29—1）

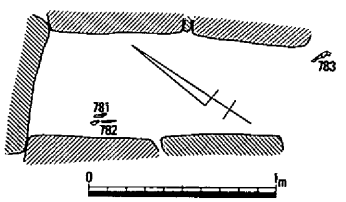
この8号墓の埋葬施設は、天井石と片方の小口部分を欠損した箱式石棺で、主軸が等高線に直交した斜面に沿う方向を示していた。残存する小口部分は、両側壁を後に塞ぐ形態になっていた。

地形の高い北西側の小口部分は、地山を掘り窪めて1個の石を立てていた。地形の低い南東側の小口部分は、崩壊して石が残存しなかった。

南西側の側壁は、基底部に2個の石が据えられ、北西側の小口部分に面した所には、2個の石が積み重ねられていた。北東側の側壁も、基底部に2個の石が据えられていたが、さらにその上に積み重ねられていたと思われる石が認められなかった。

この箱式石棺の床面には板石が敷き詰められていたが、北西側の小口部分に面した所には大きな石を使用していた。

8号墳の埋葬施設である箱式石棺の残存した床面での計測値は、全長165cm・北西側小口幅約55cmとなり、床面から天井石までの高さは45cm以上であった。



第104図　8号墓遺物出土状況（1/40）

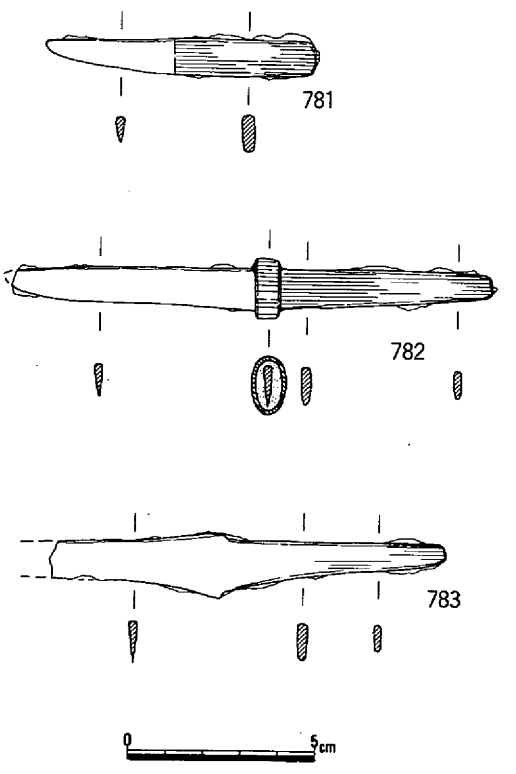
遺物出土状況（第104図、図版29—1）

出土遺物は3点の刀子であるが、2点は北西側の小口部分に近い南西側の側壁に近接した所から、残る1点は石のない南東側の小口部分に近い北東側の側壁に近接した所から、それぞれ床面に密着して出土した。

出土遺物

鉄器（第105図、図版64）

刀子　781は非常に小形で完形の刀子である。刀身長3.4cm・茎長3.8cmを測るが、その境には関を形成していない。木目の残存状況によって、刀身と茎との区別が可能である。茎は尻に向かって太さが変わらない。782の計測値は刀身長6.7cm・茎長5.6cmで、刀身の先端を欠損している。刀身と茎に太さの差がなく、その境が鏑に隠れているが、前述した781と同様に関を形成していない可能性がある。茎には柄の木質が付着している。鏑の断面の形は楕円形を呈している。鏑の表面にも木質が認められるが、鞘の木質と思われる。783の茎長は6.0cmで、刀身の先端を欠損している。刀身は関に向かって幅が広くなり、関は両側に段が存在する。茎には木質が付着している。



第105図　8号墓出土鉄器（1/2）

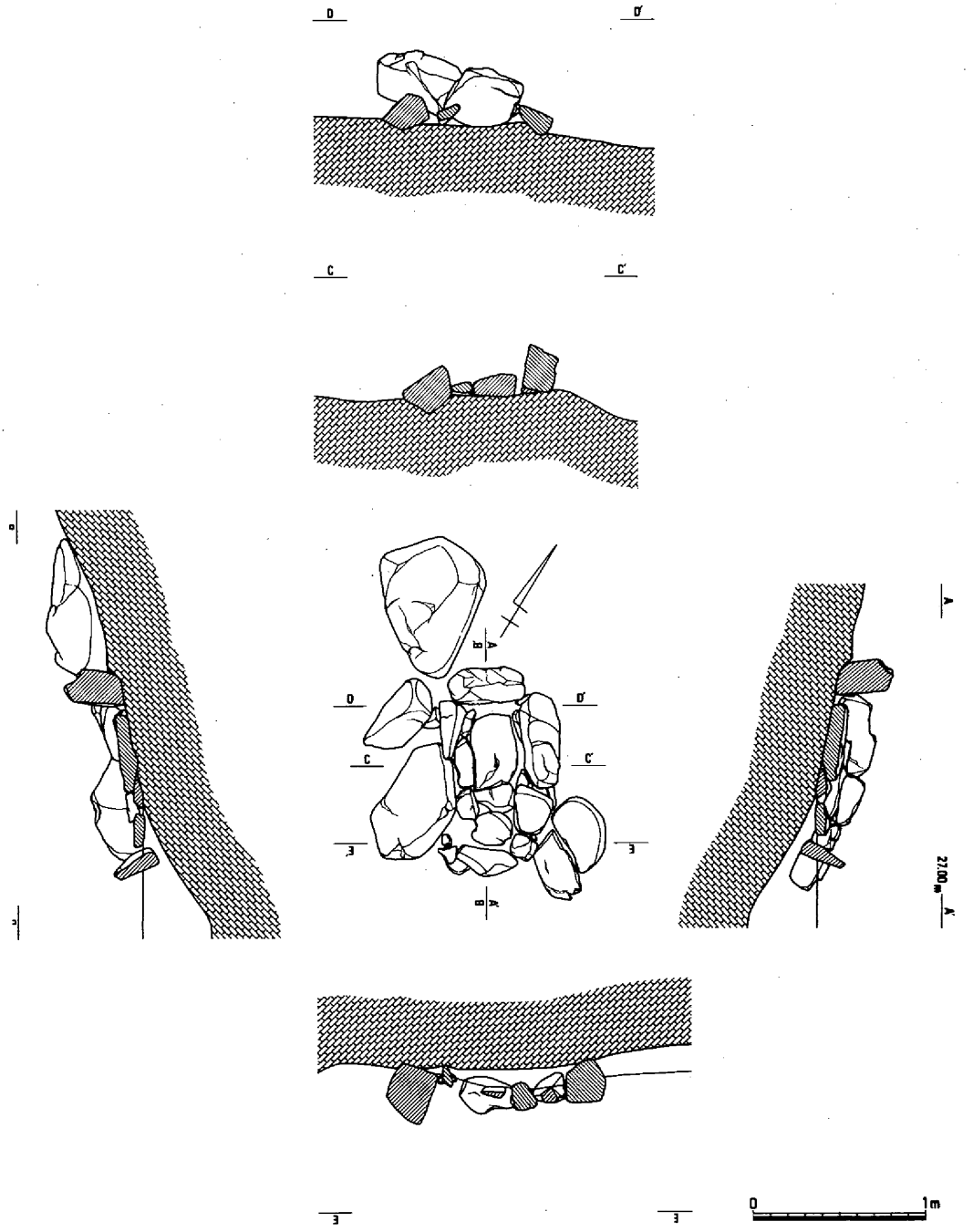
(9)　９号墓

調査前の状況（第98図）

この９号墓は、４号墳と５号墳の中間部分で、８号墓から北東方向へ約３ｍ行った地点に検出された。前述した８号墓と同様に『岡山市埋蔵文化財分布地図』には記載がなく、全面調査を実施して新しく発見した、天井石のない小規模な埋葬施設だけの墳墓である。

墳丘と周溝（第99図）

この９号墓は、小規模な箱式石棺と考える埋葬施設だけの墳墓で、周辺を精査したが、墳丘や周溝は検出できなかった。



第106図　９号墓石棺実測図（1/40）

埋葬施設（第106図、図版29―２）

この９号墓の埋葬施設は、小規模な箱式石棺である。

北西側の小口部分に面した所には、比較的大きな自然石が存在し、南西側の側壁には、自然石そのものの小口を壁面に利用していた。南東側の地形の低い小口部分は、旧表土の上に石を置いていたため、極めて不安定な状態になっていた。

北西側の小口部分には、石棺内の面が平らな最大幅約45cm・高さ約35cmを測る石を１個だけ立てていた。南東側の小口部分には、最大幅約35cm・高さ約20cmの比較的小さな石が存在したが、底部が地山に到達していなかったので、斜めに傾いていた。

北東側の側壁で南東側の小口部分に近い所は、２個の石を積み重ねていた。また北西側の小口部分に接する基底部の石は、底部の透き間に小さな石を詰めていた。南西側の側壁で南東側の小口部分に近い所は、自然石の小口を壁面にしていた。北西側の小口部分と接する所は、基底部に１個の石が残存するだけで、上に積まれていた石は認められなかった。

石棺内の床面には、扁平な石が敷き詰められていたが、敷き詰めた石の間に透き間が存在した。床面の平坦部分は、地形と同じように北西側の小口から南東側の小口に向かって傾斜していた。

この石棺の天井石については、北西側と南東側の小口部分に据えられた石の上面レベルに約30cmもの高低差があるから、築造された当時から天井石が乗せられていたかどうか不明である。

９号墓の埋葬施設である小規模な箱式石棺の残存した床面での計測値は、全長約90cm・北西側小口幅約35cm・中央の石棺幅約40cmを測り、石棺内から遺物は何も出土しなかった。

⑽　10号墓

調査前の状況（第２図）

10号墓が検出されたのは１号墳に近接した谷地形の底部付近で、西方向の山林に通じる小道が存在した。１号墳の周溝を検出するために、墳端周辺の表土除去作業を行っていて発見した埋葬施設が箱式石棺の墳墓で、天井石は１枚も残存しなかった。また北東側の側壁基底部の石も、北西側の小口部分に面した所が抜き取られていた。

この10号墓が検出されたことが端緒になって、墳丘や周溝のない埋葬施設だけの小規模な墳墓が、別の地点にも存在する可能性が考えられたため、そのような所は全面調査を実施して、その発見に努力することになった。その結果、前述した４号墳と５号墳の中間に存在した８号墓や９号墓と、後述する６号墳と11号墳の中間に存在した12号墓を、新しく確認することができたのである。

墳丘と周溝（第３・６図）

１号墳の墳丘の土層断面を観察するために設定した畦が、都合よく10号墓の埋葬施設の上に架かることとなり、１号墳と10号墓の関係を把握することができた。土層断面や周辺を精査したところ、１号墳と10号墓は同時に築造され、10号墓には小口や側壁の部分が隠れるだけのわずかな土砂を有し、径が約８ｍで断面形が浅い「Ｕ」字形を呈する周溝も認められた。

埋葬施設（第107図、図版29―３）

この10号墓の埋葬施設は箱式石棺であるが、天井石は１枚も存在しなかった。

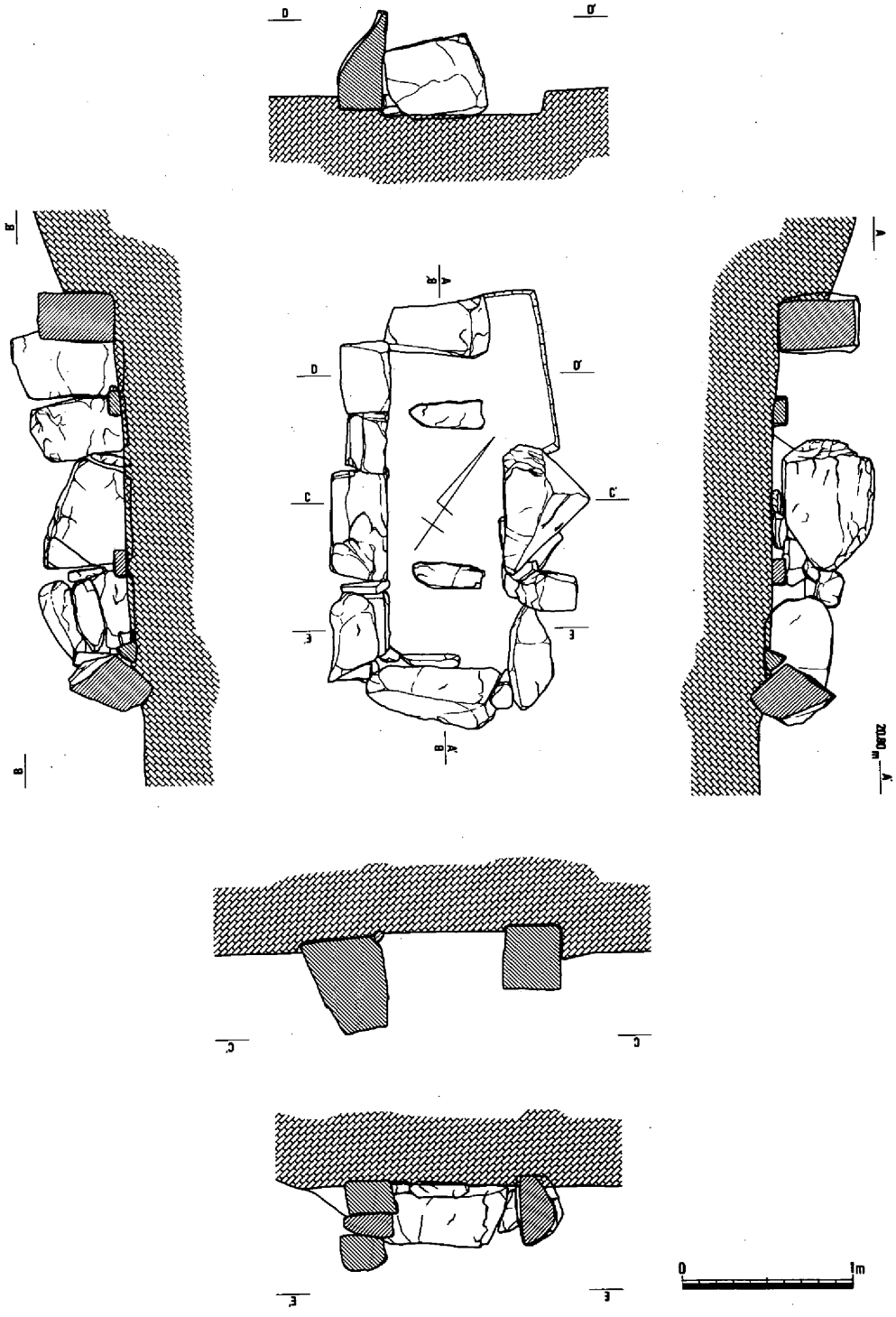
南東側の小口部分には１個の石が存在したが、石棺内の壁面は斜めに傾斜し、底部には小さな石を詰めていた。また両側壁と接する部分は、透き間を埋めるように小さな石を詰めていた。北西側の小

口部分にも1個の石を立てていたが、北東側の側壁と接する所は、石がなくて不明であった。この両小口部分の高さは残存する側壁よりも低いため、上位に別の石が存在した可能性がある。

南西側の側壁の基底部には4個の石が据えられていたが、南東側の小口部分に面した所には3個の石が積み重ねられていた。北東側の側壁の基底部には2個の石が残存していたが、北西側の小口部分に面した所には、少なくとも1個の石が抜き取られていた。ほぼ中央部に位置した石は造成土の上に置かれていたため、底部の透き間に小さな石を詰めていた。天井石が存在しなかったので床面からの高さは不明であるが、残存した最も高い側壁を計測すれば、約60cmの高さになるのではなかろうか。

石棺内の床面には、主軸方向に直交して長さ42～43cm・幅13～17cm・高さ6～7cmの石2個が据えられていたから、板か木棺が存在したのかもしれない。

10号墓の埋葬施設である箱式石棺の床面での計測値は、全長180cm・南東側小口幅75cm・中央部での石棺幅70cmで、石棺内から遺物は何も出土しなかった。



第107図　10号墓石棺実測図（1/40）

(11)　11号墳

調査前の状況（第108図）

一般国道53号（岡山北バイパス）の路線内に所在する各古墳の周辺に存在した立木や雑木の伐採作業が終わると、当初の時点に調査対象になっていた４基の古墳以外にも、古墳の墳丘と推定される高まりが新しく発見された。この11号墳も『岡山市埋蔵文化財分布地図』には記載されていなかった古墳で、伐採作業が終了して新しく発見したのである。

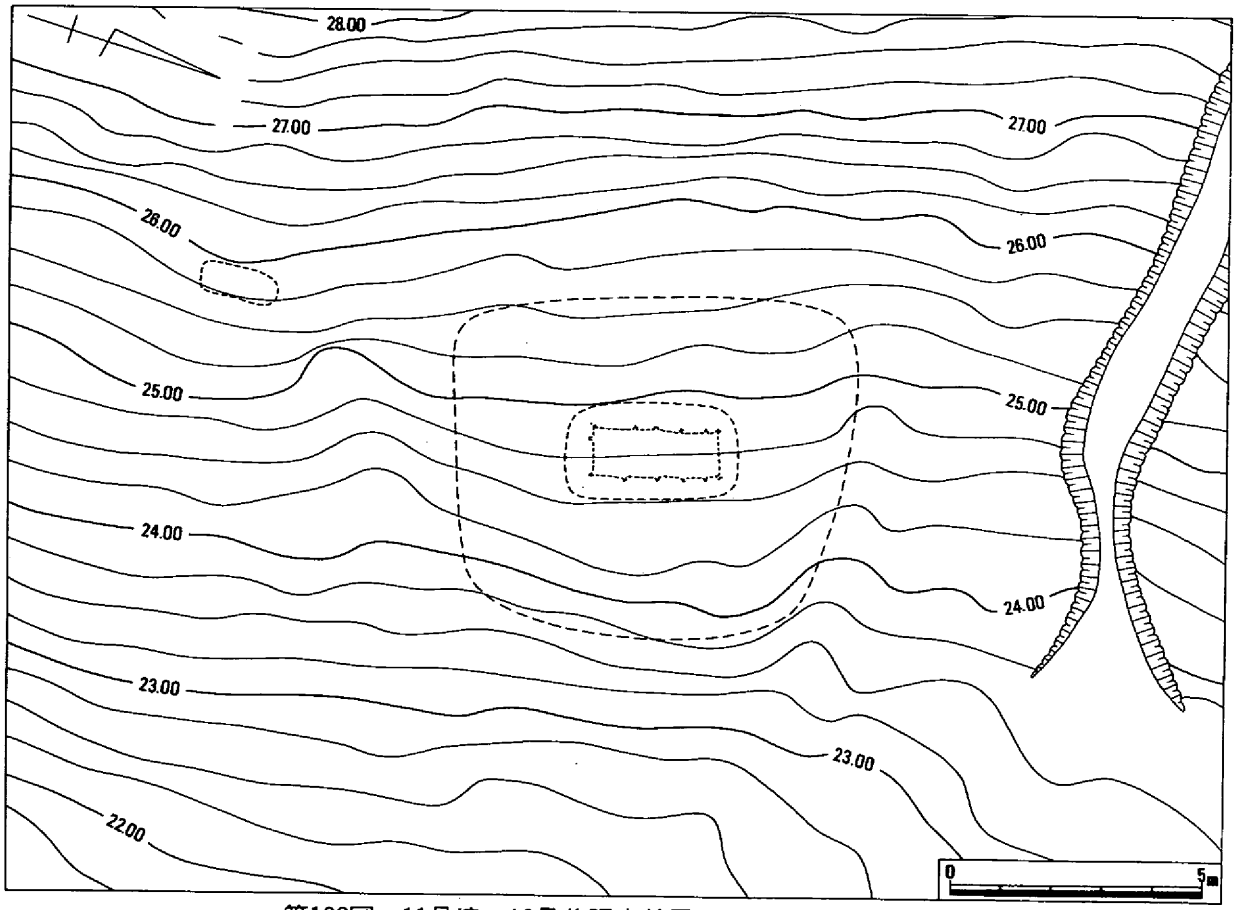
11号墳が所在したのは緩やかに傾斜する斜面で、周辺よりも少し高くなった部分の中央が、隅丸長方形の形態に陥没していた。トレンチを設定してその部分を掘り下げると、小口や側壁の石組みが認められ、内部から土器や鉄器の遺物が出土したので、「11号墳」と命名して発掘調査を実施した。

墳丘と周溝（第109図、図版30－１）

11号墳の埋葬施設である竪穴式石室は、天井石が１枚も残存しなかったので、墳丘の中央部分が陥没していた。この古墳は斜面に築造されていたこともあって、墳丘を断ち割って土層断面を観察した結果、旧表土の上面に黄褐色を呈する粘質土を置き、その上位は灰や炭化物を含む灰褐色土と花崗岩の風化土を交互に積み重ねて、サンドイッチ状になるようにしていた。

この11号墳の墳丘は、埋葬施設の主軸方向である南北方向が約８ｍ、それに直交する東西方向が約７ｍの方墳に近い形態を呈し、部分的に外護列石が存在した。

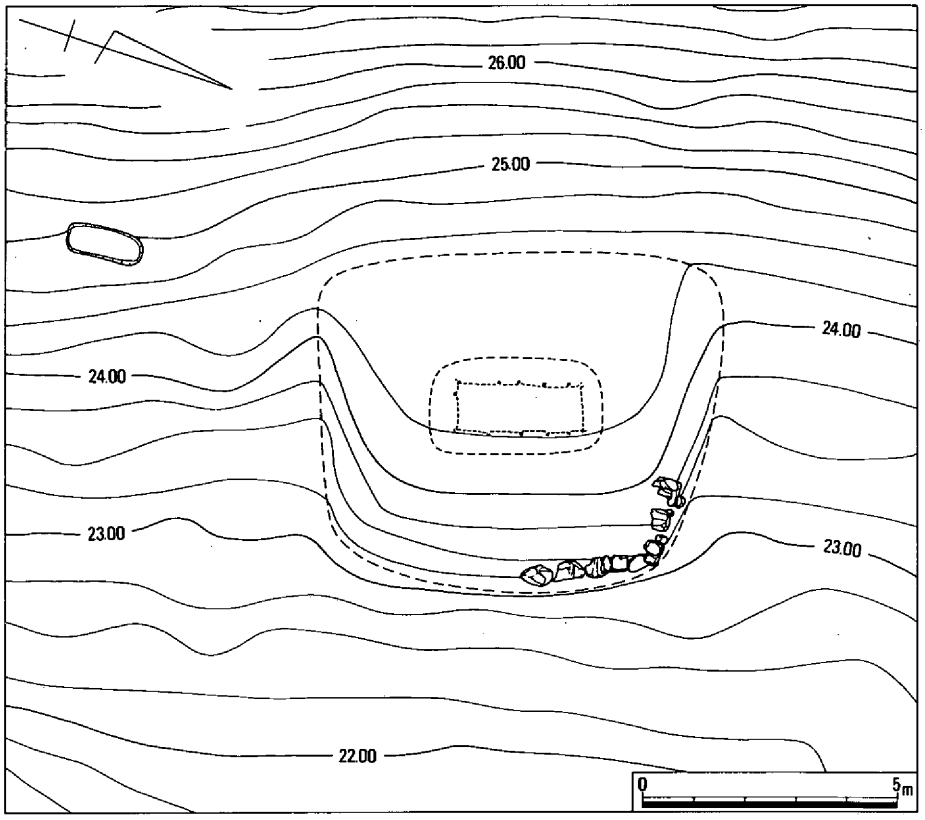
周溝は認められなかったが、各方面の墳端を把握するのは容易であった。



第108図　11号墳・12号墓調査前周辺地形測量図（1/150）

外護列石（第109・110図、図版30－１）

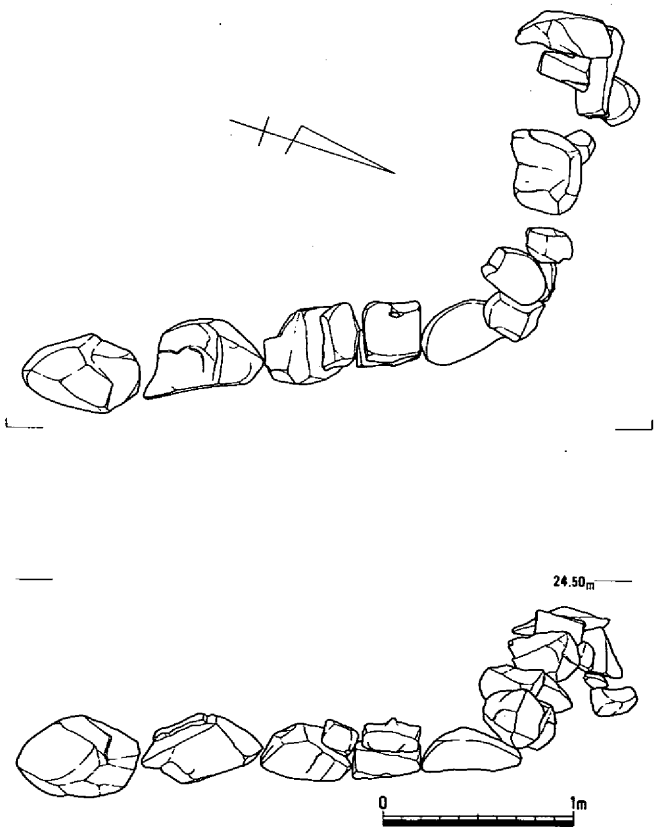
11号墳の北東側に位置する墳丘の端部には、人工的に石を並べて置いたと考えられる外護列石が部分的に認められた。発掘作業を行っていると、地形の低い東側や南側にも同じような石が数多く転落していたから、この古墳が築造された当初には、地形の高い西側を除く３方向のすべての墳端に石を並べていたと考えられた。



第109図　11号墳・12号墓調査後周辺地形測量図（1/150）

残存した外護列石は、外側に向けられた小口の部分が面的に揃うように据えられ、上位に比較的小さな石を積み上げていた所も存在した。この部分的に残存した外護列石の平面形が中位で屈曲した状態になっていたので、11号墳の墳丘は方墳に近い形態になると即座に判断できたのである。

地形の低い東側に面した列石は、上面のレベルがほぼ一定に揃って水平で直線的な状態になっていたが、屈曲してそれに続く北側に面した列石は、斜面の傾斜と同じように地形の高い西側へ移行するにしたがって据えられた位置のレベルが高くなり、東側に面した列石と北側に面した先端の石では、約70cmの高低差が認められた。また北側に面した列石は、使われていた石そのものの大きさが、東側に面したものよりも小さかった。



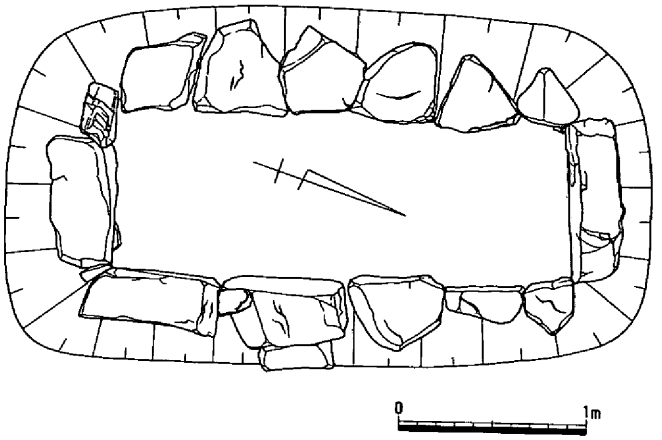
第110図　11号墳外護列石実測図（1/40）

埋葬施設（第111・112図、図版30－2）

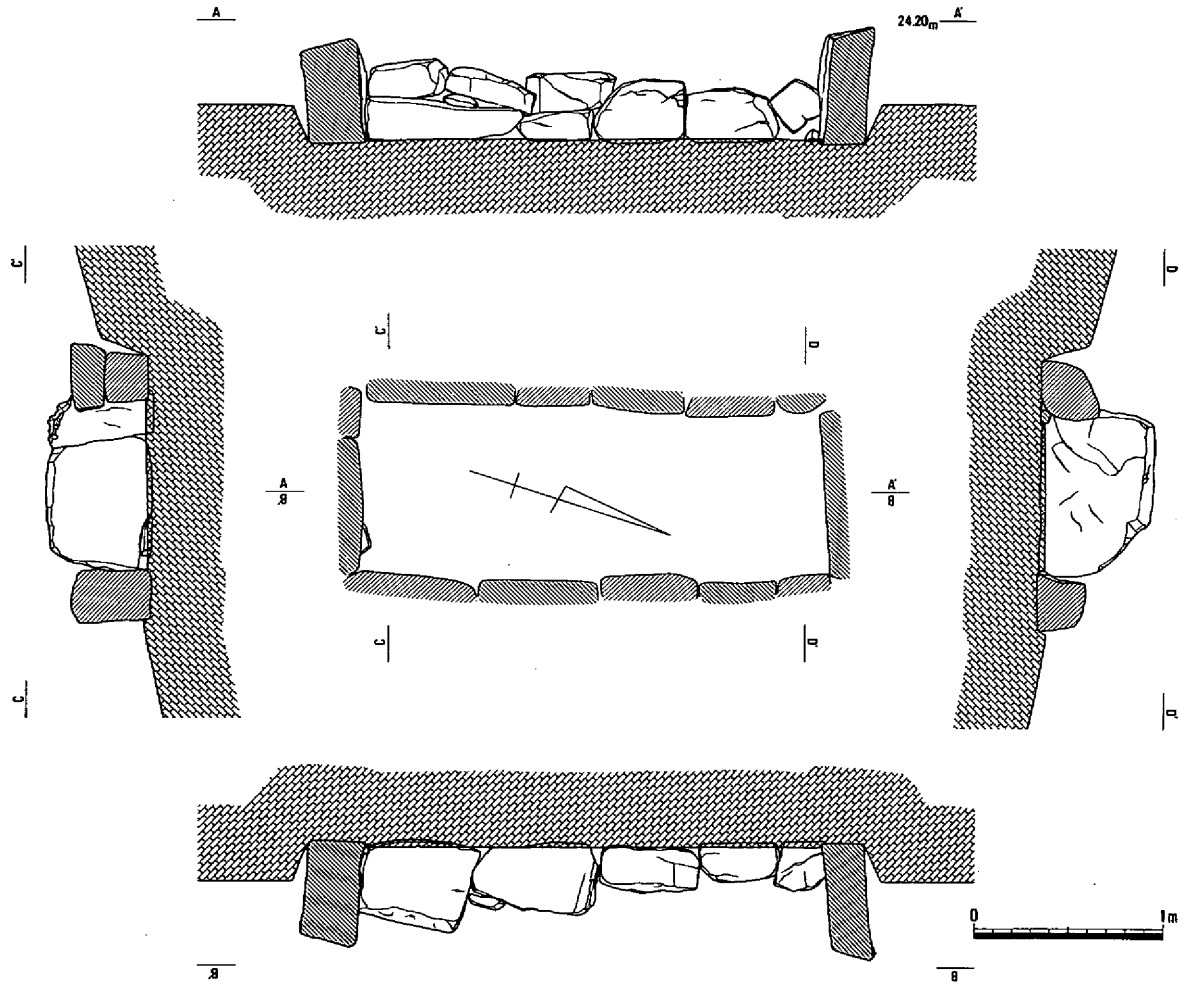
この11号墳の埋葬施設は、天井石が欠損した竪穴式石室である。

南側の小口部分は、基底部に2個の石を立てた状態に並べて据えていた。東側の側壁に面した側の石は、石室内表面が上面約60cm・底面約70cm・高さ約50cm・厚さ約30cmを測り、床面の透き間に小さな石を詰めていた。西側の側壁に面した側の石は、上面と底面が約20cm・高さ約55cmを測り、厚さは約15cmであった。北側の小口部分は、基底部に1個の石だけを据えていた。上面約55cm・底面約85cm・高さ約60cmの台形に近い形態を呈し、厚さは約30cmであった。西側の側壁に接する部分は、床面との透き間に小さな石を詰めていた。

東側の側壁には、基底部に5個の石を据えていたが、それより上位の部分は石が残存しなかった。南側の小口部分から北側の小口部分へ向かうにしたがって、側壁の基底部に使われていた石の規模が



第111図　11号墳石室上面実測図（1/40）



第112図　11号墳石室実測図（1/40）

小さくなっていた。西側の側壁にも、基底部に５個の石を据えていたが、中位から南側の小口部分にかけては、２段に石を積み上げた状態で残存していた。北側の小口部分に接する所は、最後の段階に石を置いた状態で、床面に石が届かなくて不安定な様相を呈していた。

この11号墳の石室には天井石が残存しなかったため、東西両側壁とも壁面に積み上げられていた上位の石が崩壊していると考えられた。床面からの高さが最も高い北側の小口部分の計測値から推定すると、11号墳の竪穴式石室の床面からの高さは約60cmになるであろう。石室の床面はほぼ水平で、地山面を削平して平坦にしただけであったが、棺台ではないかと思われる人頭大から拳大の石が10個以上も認められた。

11号墳の埋葬施設である竪穴式石室の床面での計測値は、全長約240cm・南側小口幅約90cm・北側小口幅85cmで、築造された当時の床面から天井石までの高さは約60cmになるであろう。

ところで11号墳の石室の床面からは、南側の小口部分に面した所より須恵器の杯身１点と多くの鉄鏃が、北側の小口部分に面した所より土師器２点を含む須恵器群が、東側の側壁に面した所より土師器や須恵器以外に１振の大刀が、それぞれ出土した。これらの遺物は、副葬された当時の位置から動いていないと考えられるので、遺骸を安置した木棺は西側の側壁に密着して南側の小口に近接した状態に埋葬され、その木棺の規模は長さ約180cm・幅約60cmになると推定される。

遺物出土状況（第113図、巻頭図版３－３、図版30－２・30－３）

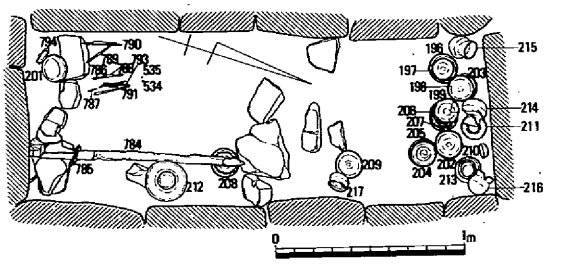
11号墳の埋葬施設である竪穴式石室は、天井石が１枚もなく側壁の石も部分的に抜き取られていたが、意外にも石室内の床面は撹乱されることなく、埋葬された当時の様相をそのままの良好な状態で留めていた。

南側の小口部分からは、須恵器の杯蓋１点と10本以上の鉄鏃が出土した。１点の杯蓋は、口縁部を下にして棺台と思われる石の上に存在した。鉄鏃はいずれも鏃身を南側の小口部分に向けた状態で検出されたが、例外なくすべてのものが床面から浮いていたから、木棺の上面に副葬されていたのかもしれない。

北側の小口部分からは、須恵器の杯身６点・杯蓋５点・壷蓋１点・壷３点と、土師器の壷１点・甕１点が出土した。これらの須恵器や土師器は、いずれも床面に密着した状態に置かれていたから、木棺と北側の小口部分との間にあった空間に副葬していると考えられた。杯身と杯蓋はすべてが口縁部を上にした状態で出土し、５組10点のセット関係が判明した。短頸壷とセットになる壷蓋（210）を除いて、残る須恵器の壷や土師器の甕は、口縁部を上にしたものと横倒しのものとが存在した。

東側の側壁に面した中央部から南側の小口部分にかけては、須恵器の杯身１点・杯蓋１点・蓋のない短頸壷１点、土師器の甕１点、鍔の伴った大刀１振が出土した。須恵器の３点はいずれも口縁部を上にして存在したが、土師器の甕は横倒しの状態になっていた。大刀は側壁とほぼ平行する方向に置き、茎部が南側の小口部分に近接していた。この大刀も床面から浮いた状態で出土したから、木棺の上に乗せられていたのかもしれない。

なお２点の小玉が、南側の小口部分に面した多数の鉄鏃の近くで検出されたから、この11号墳の竪穴式石室に埋葬された遺骸の頭位は、前述した６号墳と同様に南側になるであろう。

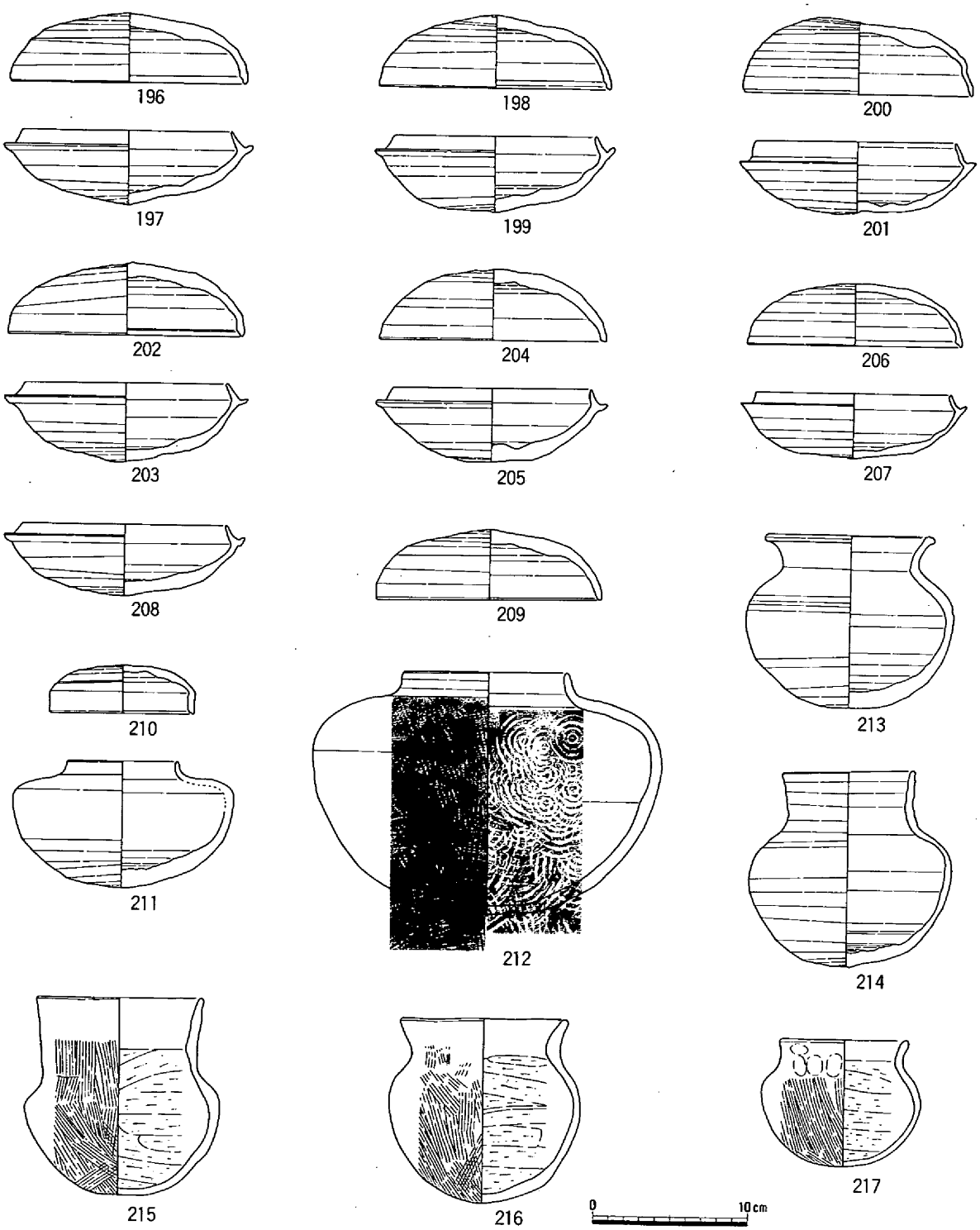


第113図　11号墳遺物出土状況（1/40）

出土遺物

須恵器（第114図、図版37・38）

杯身・杯蓋　この11号墳の埋葬施設である竪穴式石室から出土した杯身と杯蓋の法量や色調を精査した結果、6組12点（196～207）のセット関係が判明した。杯身は口径12.3～13.2cm・器高4.5～5.0cmで、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行っているが、回転方向が右



第114図　11号墳出土土器（1/4）

のものと左のものが認められる。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の底部に仕上げナデを加えているものもある。杯蓋は口径13.7～14.8cm・器高4.0～4.8cmで、外面の天井部と体部の境に稜が認められるものは存在しないが、内面の口縁端部に段を有するものがほとんどである。外面の天井部はヘラケズリを行っているが、回転方向が右のものと左のものがある。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、内面の天井部に仕上げナデを加えているものも存在する。これらの杯身や杯蓋の胎土中には砂粒が多く、焼成は良好で青灰色または灰白色を呈し、外面に自然釉が付着しているものが多い。

壷蓋　211の短頸壷とセットになる蓋（210）は、口径8.9cm・器高3.1cmを測り、口縁部が直立して外面の天井部と体部の境に稜が認められ、内面の口縁端部に段が存在する。外面の天井部には回転方向が左のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。内面の天井部には仕上げナデを加え、外面全体に自然釉が付着している。

壷　前述した蓋（210）とセットになる完形の短頸壷（211）は、口径6.8cm・器高8.0cm・胴部最大径13.8cmを測る。口縁部は短く立ち上がり、端部は全体に丸く仕上げている。底部の器壁は厚く、肩部が著しく張り出している。外面の底部は回転方向が左のヘラケズリを行い、口縁部はヨコナデを施している。外面の肩部から胴部にかけてはヨコナデを施しているが、カキメの痕跡がかすかに認められる。内面は全体にヨコナデを施し、外面には自然釉が付着している。この短頸壷は210の蓋を被せたまま窯で焼成されたらしく、外面の口縁部に自然釉が付着していない円形の部分が認められる。212の短頸壷は、全体の形態が211の短頸壷に酷似している。口径10.2cm・器高15.4cm・胴部最大径22.1cmを測り、完形である。底部から頸部にかけて内湾しながら立ち上がり、肩部が大きく外側に張り出して胴部の最大径が存在する。頸部で屈曲した器壁は内傾して短く立ち上がり、口縁端部へ移行する。口縁部の器壁は全体に薄く、端部を丸く仕上げている。内面の底部から胴部にかけては同心円のタタキ痕跡が認められ、内面の胴部上位はタタキ痕跡の上面にヨコナデを加えている。頸部から口縁部にかけては内外面とも全体にヨコナデを施し、外面の頸部から底部にかけては全体にタタキ痕跡が存在する。この短頸壷の外面には自然釉が付着し、口縁部の一部には蓋の小破片も付着している。213の壷は、口径10.3cm・器高11.0cm・胴部最大径13.2cmを測り、底部の器壁が厚い。底部から頸部にかけて内湾して立ち上がり、胴部の最大径は中位よりやや上位に存在する。頸部で「く」字状に外反した口縁部は斜め上方へ外傾して立ち上がり、端部は肥厚して丸く仕上げられている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、外面の頸部から胴部にかけてはヨコナデを施している。外面の胴部には2条の浅い凹線が存在し、口縁部は内外面とも全体にヨコナデを施している。内面の頸部から底部にかけても全体にヨコナデを施しているが、内面の底部には仕上げナデを加えている。胎土中には大きな砂粒が多く、焼成は良好で青灰色を呈している。214は口縁部がやや開いて上方へ立ち上がる直口壷で、口径8.2cm・器高12.3cm・胴部最大径12.8cmを測る。全体の器壁は、底部が最も厚くて肩部が著しく薄くなっている。外面の肩部には1条の浅い凹線が存在し、口縁の端部は全体に丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面の底部には同心円のタタキ痕跡がかすかに残存している。内面全体と外面の口縁部から胴部にかけては全体にヨコナデを施しているが、内面の底部には仕上げナデを加えている。胎土中には砂粒が少なく、焼成は良好で内外面とも全体に青灰色を呈している。この広口壷は、口縁部の一部を欠損しており、全体の器形は著しく歪んで左右対称になっていない。

土師器（第114図、図版38）

壷　215は頸部が長いので直口壷になると考える。口径12.0cm・器高12.4cm・胴部最大径12.3cmで、口縁部の一部を欠損しているもののほぼ完形である。丸底の底部から頸部にかけて内湾して立ち上がり、肩部が外側に著しく張り出している。頸部の器壁は薄くなって湾曲し、口縁部は少し開いて上方へ大きく立ち上がる。口縁端部は全体に丸く仕上げている。内面の頸部から底部にかけては、横または斜め方向のヘラケズリを行っている。外面の頸部には縦方向のハケメが存在し、外面の胴部から底部にかけては斜め方向のハケメが認められる。内面の底部と外面の頸部には指頭圧痕がかすかに残存しているのが確認され、外面の胴部には黒斑が存在する。胎土中には砂粒を比較的多く含み、焼成は良好で全体に浅黄橙色を呈している。

甕　216の甕は、口径10.2cm・器高11.7cm・胴部最大径12.1cmを測る。丸底の底部から頸部にかけて内湾して立ち上がり、口縁部は斜め上方へ短く外反する。口縁部の器壁は厚くなり、端部は丸く仕上げている。口縁部から頸部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。内面の胴部から底部にかけては横方向のヘラケズリを行い、外面の胴部から底部にかけてはハケメが存在する。外面の頸部には指頭圧痕がかすかに残存し、外面の胴部には黒斑が認められる。217は口縁部の短い小形の甕で、底部が丸底の完形品である。口径7.8cm・器高8.0cm・胴部最大径10.0cmを測り、全体の器形が著しく歪んでいる。底部から頸部にかけて器壁が肥厚しながら内湾して立ち上がり、口縁部は斜め上方へ短く張り出して端部を丸く仕上げている。内面の頸部から底部にかけては横方向のヘラケズリを行い、外面の頸部から底部にかけてはハケメが存在する。口縁部は内外面とも全体にヨコナデを施しているが、外面には指頭圧痕が認められる。胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良好で全体に黄橙色を呈しているが、外面の胴部には黒斑も認められる。

鉄器（第115図、図版44・64）

大刀　全長108.9cmの大刀（784）は、刀身長87.4cm・茎長21.5cmである。関付近での刀身幅4.2cm・茎幅3.1cmで、関は片側にのみ段を有する。茎には3か所に目釘穴が存在する。茎尻はやや斜めに直線的に切り落とされた形状を呈している。関の付近には、鎺と鍔がある。

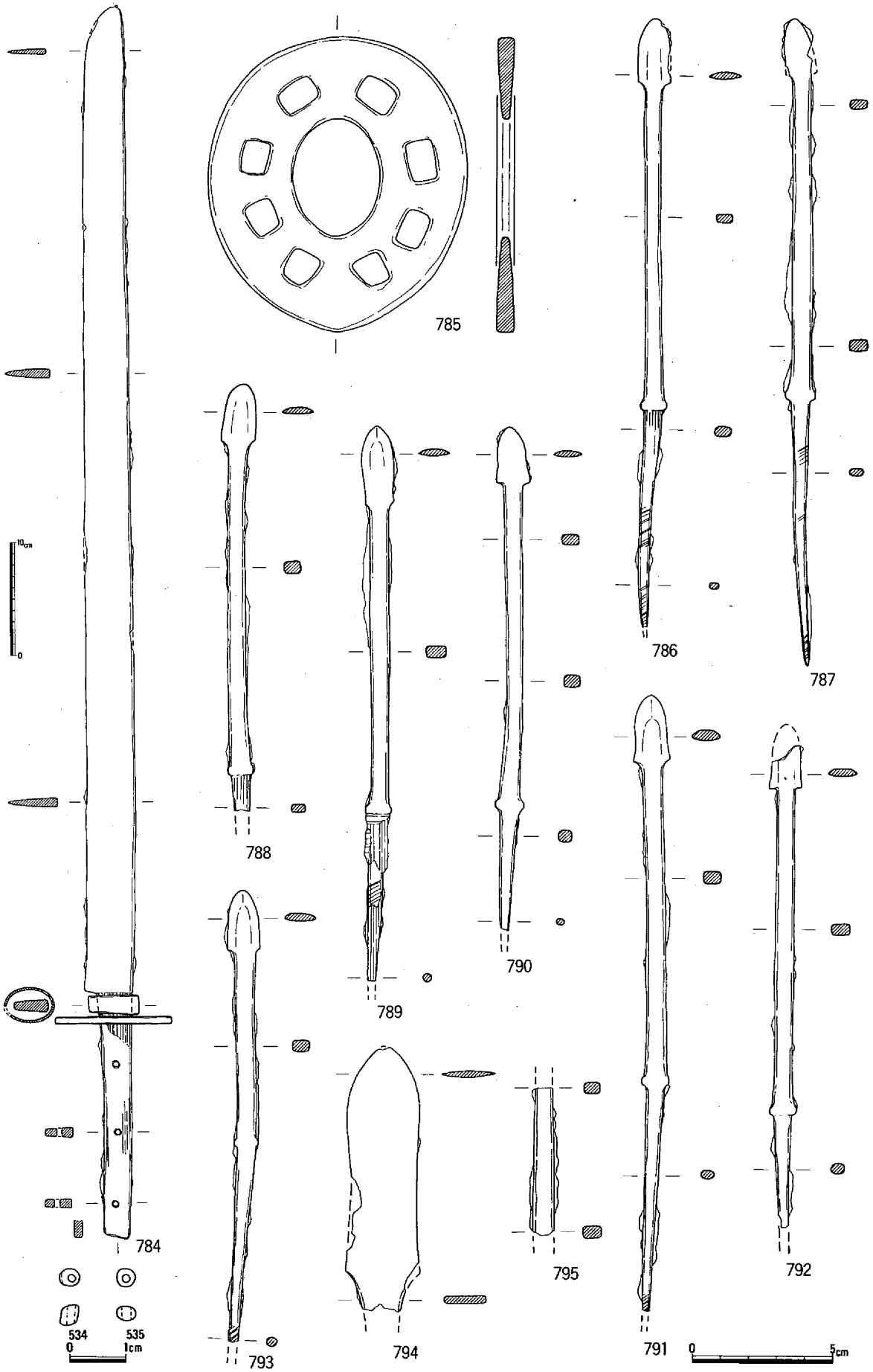
鍔　785の鍔は、784の大刀に付属しているものである。平面形は倒卵形を呈し、8窓の透しを有している。レントゲン撮影を行ったが、象嵌は施されていなかった。

鉄鏃　786～795は鉄鏃である。786～793は長頸式鉄鏃で、すべて同型式の長頸柳葉式になる。不明瞭なものもあるが、鏃身の造りはすべて片切刃造と思われる。すべての篦被関には、棘状突起を有する。786～792は、鏃身長と頸部長がともに類似した大きさである。793だけは頸部がやや短い。茎には、糸巻き、矢柄木質、矢柄表面の樹皮巻きが残存するものが認められる。794だけは平根系の鉄鏃で、柳葉式である。頸部の途中以下を欠損している。795は長頸式鉄鏃の頸部の小破片である。786～793には頸部を欠損したものがないので、別の個体と思われる。したがってこの11号墳の竪穴式石室には、少なくとも合計10本の鉄鏃が副葬されていたことになる。

装身具（第115図、図版43－2）

玉類　2点の玉類は、南側の小口部分に面した多数の鉄鏃の近くで検出された。

534と535はガラス製の小玉で、どちらも片面穿孔で白く濁った青色を呈している。前者は細長くて歪んだ形を呈しているが、長さ3.6mm・径3.2mm・孔径1.1mm・重さ0.05ｇを測る。後者は通常の形態のもので、長さ2.2mm・径3.4mm・孔径1.1mm・重さ0.05ｇを測る。



第115図　11号墳出土鉄器（1/5, 1/2）・玉類（1/1）

⑿　12号墓

調査前の状況（第108図）

この12号墓は、６号墳と11号墳の中間地点に検出された。発掘調査に着手する以前の段階ではその所在は全く不明で、『岡山市埋蔵文化財分布地図』にも記載されていなかった。６号墳と11号墳の調査後地形測量を行うのに、両古墳の地形的なつながりを把握しようと思って、中間部分の表土除去作業を実施して発見したのである。

墳丘と周溝（第109図）

この12号墓は埋葬施設だけの墳墓で、墳丘や周溝は存在しなかった。

埋葬施設

（第116図、図版31－１）

この12号墓の埋葬施設は、地山を掘り窪めた土壙である。

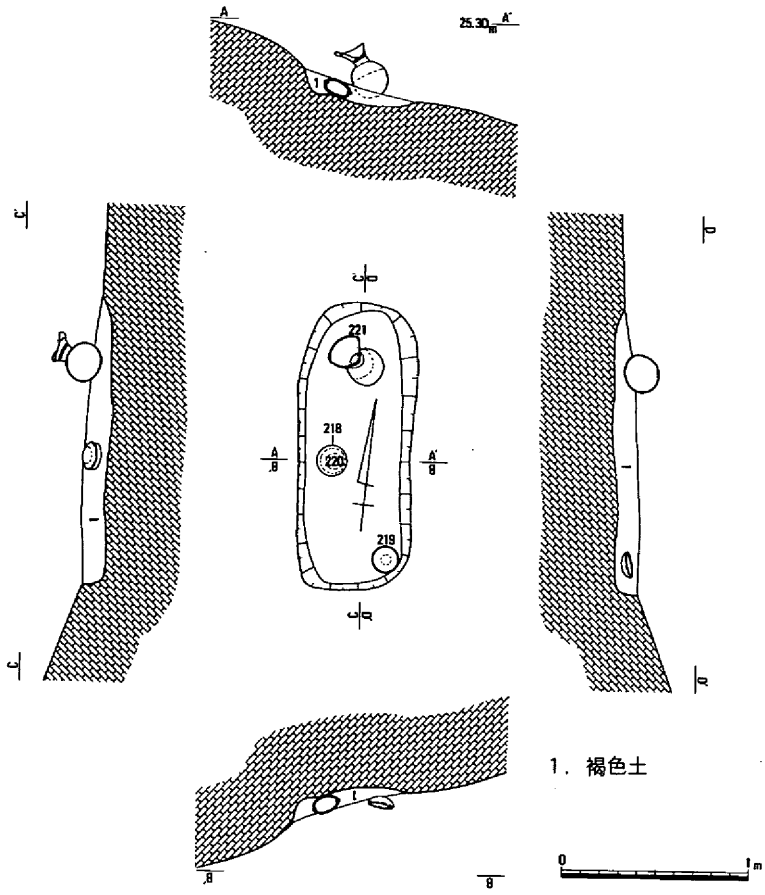
検出面での規模は、長径153㎝・短径59～63㎝の隅丸長方形に近い形態を呈し、検出面から床面までの深さは12㎝と極めて浅くなっていた。

遺物出土状況

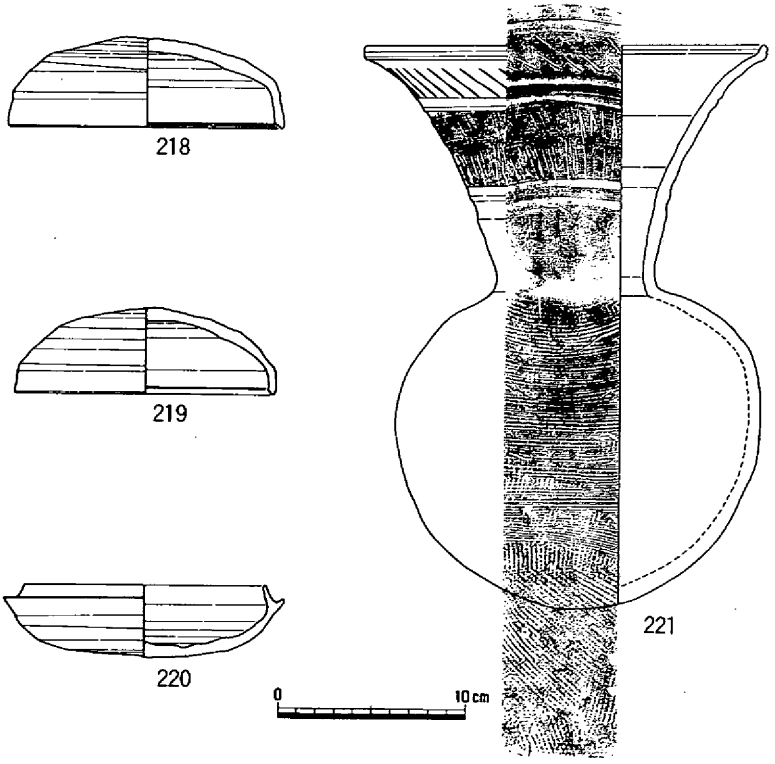
（第116図、図版31－１）

12号墓の埋葬施設内からは、須恵器の杯身１点、杯蓋２点、広口壷１点が出土した。

南側の小口部分と東側の側壁が交差する南東の隅からは、口縁部を上にした状態で１点の杯蓋が検出された。この杯蓋は完形品で、土壙の床面から浮いていた。



第116図　12号墓埋葬施設および遺物出土状況（1/40）



第117図　12号墓出土土器（1/4）

埋葬施設の中央部で西側の側壁に寄った位置からは、杯身と杯蓋が口縁部を合わせた状態で、床面に密着して出土した。ところがこの２点の杯身と杯蓋は、杯身が上で杯蓋が下の逆転した状態に置かれていた。また個々の法量や色調などを精査したところ、口縁部を合わせて出土したけれども、本来のセット関係のものではないことが判明した。

北側の小口部分に近い所からは、斜めに横たわって１点の広口壷が存在した。この広口壷も、前述した南東隅から出土した杯蓋同様に、土壙の床面から浮いていた。

出土遺物

須恵器（第117図、図版38）

杯身・杯蓋　218の杯蓋は、一見したところ時代的に古い様相を呈する土器である。口径14.4cm・器高4.8cmを測る完形品で、外面の天井部と体部の境には稜を有し、内面の口縁端部には段が認められる。外面の天井部は回転方向が左のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。内面の天井部には、仕上げナデを加えている。219も完形品であるが、口径13.6cm・器高4.5cmを測り、前述の218よりもやや法量が小さい。外面の天井部と体部の境に存在する稜は鈍く、内面の天井部に仕上げナデを加えていない。外面の天井部のヘラケズリは回転方向が右であり、外面全体に自然釉が付着している。220の杯身は、口径12.6cm・器高3.8cmを測り、口縁部が斜め上方に内傾して立ち上がって端部を丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。内面の底部には、仕上げナデを加えている。内面の一部には有機物が付着し、内外面とも全体に青灰色を呈している。

壷　221の広口壷は、口径20.8cm・器高29.5cm・胴部最大径19.7cmを測り、発掘調査作業によって口縁部の一部を破損している。斜め上方へラッパ状に開いた口縁の端部は、短く上方に屈曲して端部を丸く仕上げている。外面の口縁部には２条の凹線が２段に認められ、その間にクシ状工具による波状文を描いている。またその上位の端部に近い部分には、連続した斜め方向の刺突文を巡らせている。外面の頸部はヨコナデを施し、外面の胴部はタタキ痕跡の上面にカキメが認められる。外面の底部にはタタキ痕跡が存在し、内面全体はヨコナデを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で全体に青灰色を呈している。

２）遺構に伴わない遺物

(1)　古墳時代の遺物

遺構に伴わない古墳時代の遺物には、須恵器と土師器を採集している。ところが土師器はいずれも小破片で、努力したにもかかわらず実測することができなかった。須恵器は大形の甕ばかりで、完形品に復元できたものもある。これらの甕は、２号墳の墳端に近い表土中と３号墳と11号墳の中間地点の表土から出土したのである。

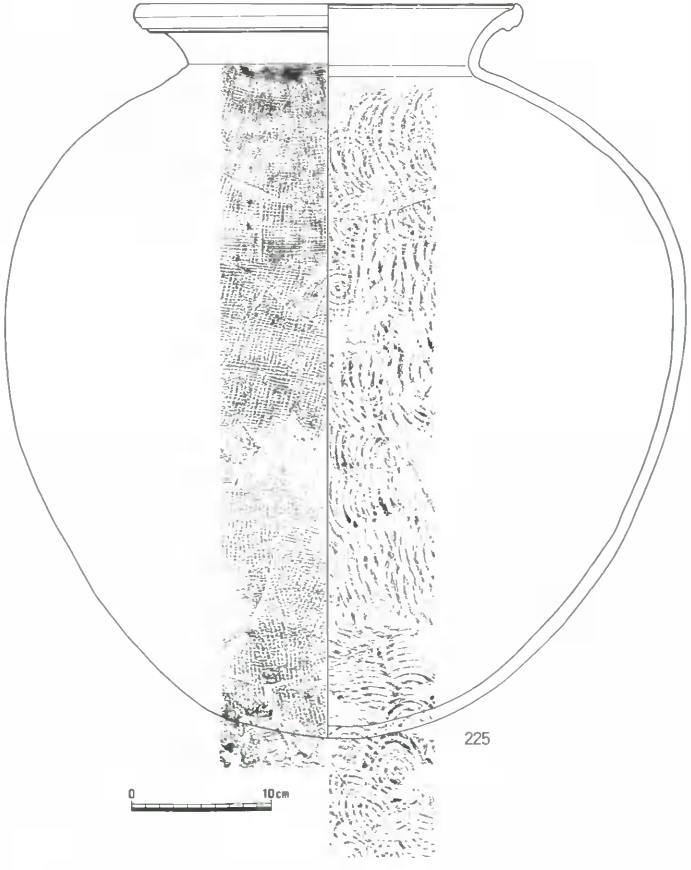
須恵器（第118・119図、図版38）

甕　222の甕の口縁部は、11号墳に近い地点から出土した。胴部から肥厚しながら内湾して立ち上がった器壁は、頸部で屈曲して斜め上方へ張り出し、口縁端部に移行する。口縁端部はわずかに外湾して先端部が肥厚し、全体に丸く仕上げている。外面の胴部には縦方向のタタキ痕跡の上面にカキメ

が認められ、内面の胴部には同心円のタタキ痕跡が全体に存在する。頸部から口縁部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。胎土中には砂粒が非常に少なく、焼成は極めて良好で灰色または灰黄色を呈している。外面の器表面には、全体に自然釉が付着している。223の甕の口縁部破片も、11号墳に近い地点より採集されたものである。全体の器形が前述した222の破片と酷似しているが、同一個体ではない。器壁の比較的薄い胴部から頸部にかけては内湾して立ち上がり、頸部で「く」字状に屈曲して口縁部が斜め上方へ外反している。口縁端部はわずかに肥厚し、全体に丸く仕上げている。外面の胴部には縦方向のタタキ痕跡の上面にカキメが認められ、

第118図　西山古墳群表土出土土器（1）(1/4)

内面の胴部には同心円のタタキ痕跡が存在する。頸部から口縁部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。この甕も焼成は極めて良好で、全体に灰色または灰黄色を呈している。224は3号墳の墳端に近い地点から出土したもので、完形品に復元することができた。口径23.2cm・器高49.2cm・胴部最大径48.8cmを測り、肩部が著しく張り出している。口縁部の器壁は胴部よりも厚くなって短く外反し、端部はわずかに肥厚している。外面の底部にはタタキ痕跡が存在し、外面の胴部には縦方向のタタキ痕跡の上面にカキメが認められる。内面の底部から胴部にかけては、同心円のタタキ痕跡が顕著に存在する。頸部から口縁部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。内外面の器表面には、胎土中の空気によって焼成した時に生じたと推定される瘤状の膨らみを、数多く確認することができる。外面の肩部には自然釉が付着し、焼成は良好で灰色または灰黄色を呈している。225の甕は2号墳の墳端に近い表土中から出土したもので、ほぼ完形品に復元することが可能であった。口径26.5cm・器高48.0cm・胴部最大径51.8cmを測り、胴部の断面形は卵形になっている。頸部で「く」字状に屈曲した口縁部は、端部が著しく肥厚して外側に湾曲した面が認められる。外面の底部にはタタキ痕跡が顕著に存在し、外面の胴部には縦方向のタタキ痕跡の上面に部分的なカキメを施している。内面の底部から胴部にかけては、同心円のタタキ痕跡が存在する。頸部から口縁端部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。この甕も焼成は良好で、内面は青灰色、外面は灰色を呈している。外面の器表面には自然釉が付着し、部分的に瘤状になって隆起した膨らみも認められる。胎土中には砂粒が少なく、水簸しした粘土を使用している。



第119図　西山古墳群表土出土土器（2）(1/4)

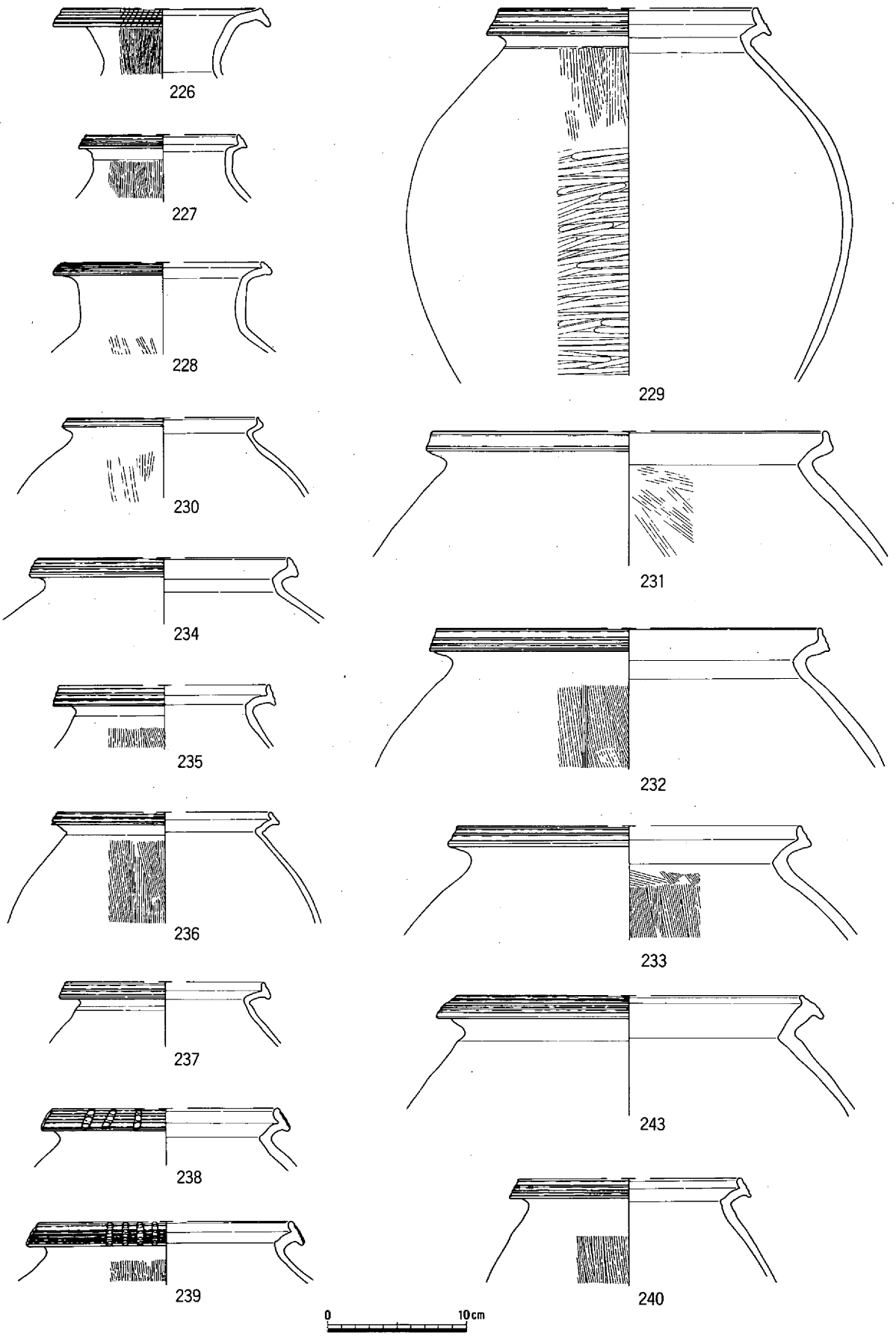
(2)　弥生時代の遺物

遺構に伴わない弥生時代の遺物には、弥生土器と石斧や石包丁の石器を採集している。これらの遺物は6号墳の南東側の斜面に出土したもので、周辺を精査したが遺構は何も検出できなかった。

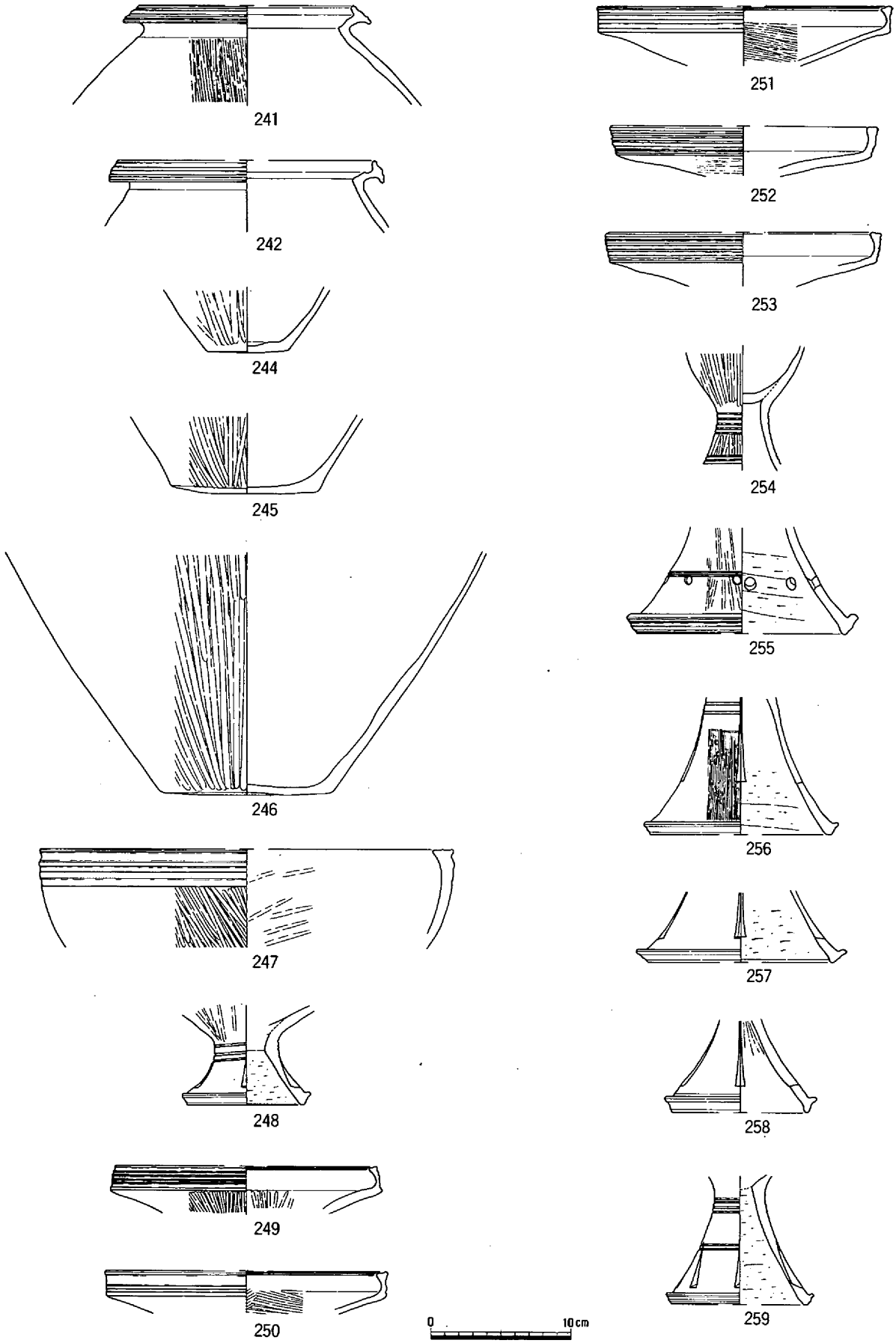
弥生土器（第120・121図）

壷　壷の口縁部と推定される破片が3点だけ存在する。226の口縁部は、緩やかに外湾して斜め上方へ立ち上がり、端部は斜め下方に拡張している。口縁端部の外面には3条の凹線が認められ、斜め方向の刺突文が全体に巡らされている。外面の頸部には縦方向のハケメが存在し、口縁端部と内面にはヨコナデを施している。227の口縁端部は、斜め上方へ拡張している。外面には3条の凹線が認められ、内外面ともヨコナデを施している。外面の頸部には縦方向のハケメが存在し、内面の頸部はヨコナデを施している。228の頸部は直立して立ち上がり、口縁端部は短く折れ曲がっている。口縁端部の外面には4条の幅が狭い凹線が認められ、外面の胴部にはハケメが存在する。頸部から口縁部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。この3点の壷は、いずれも焼成が良好で、全体に淡橙色または淡黄色を呈している。

甕　229は大きな破片で、器形や外面の調整手法を観察するのが容易である。上下に長い胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、頸部で「く」字状に短く屈曲して口縁部となる。胴部の最大径は中位よりやや上方に存在し、口縁端部は斜め上方へ大きく拡張して断面形が「T」字状を呈している。口縁端部の外面には5条の凹線が認められ、内外面とも全体にヨコナデを施している。外面の胴部上位には縦方向のハケメが存在し、胴部中位は横方向の丁寧なヘラミガキを行っている。内面の頸部から胴部にかけては、磨滅が著しくて調整手法は不明である。胎土中には細かい砂粒を含み、焼成は良好で淡黄橙色を呈している。230は法量が比較的大きいのに器壁の薄い個体で、口縁端部が上方へ短く立ち上がっている。口縁端部の外面には1条の凹線を有し、全体にヨコナデを施している。外面の胴部にはかすかに縦方向のハケメが認められるが、内面の胴部の調整は観察できない。231は口径や器高が大きくて器壁の厚い土器で、口縁部は上方へ立ち上がって端部を丸く仕上げている。口縁部の外面には幅の広い1条の凹線が認められ、内面の胴部上位には斜め方向のハケメが存在する。232は器壁の比較的厚い土器で、内湾して立ち上がった胴部は頸部で「く」字状に屈曲して口縁部となる。口縁端部は斜め上方へ拡張し、外側に3条の凹線が認められる面が存在する。外面の胴部には縦方向のハケメがあり、内面の胴部下位は縦方向のヘラケズリを行っているようである。233も前述した232に酷似した形態であるが、口縁端部の外面には2条の凹線が認められ、内面の胴部にハケメが存在する。234の内面頸部には平坦面が認められ、口縁端部の外面は蒲鉾のように丸くなって3条の凹線が存在する。235は口径が小さいが、口縁端部が上下に大きく拡張して断面形が「T」字状を呈している。口縁端部の外面には3条の凹線が認められ、外面の胴部には縦方向のハケメが存在する。236は法量の大きな土器であるにもかかわらず、器壁が薄くなっている。緩やかに大きく内湾して立ち上がった胴部は、頸部で「く」字状に鋭く屈曲して口縁部に移行し、端部はさらに折れ曲がって斜めの上方へ立ち上がる。口縁部の外面には2条の凹線が認められ、外面の胴部には交差した縦方向のハケメが存在する。237も頸部が「く」字状に屈曲し、口縁端部が「T」字状に大きく拡張している。頸部から口縁部にかけては内外面ともヨコナデを施しているが、胴部は内外面とも縦方向のナデを行っている。238と239は、口縁部の外面に棒状浮文が存在する。上下に大きく拡張した口縁部は内外面とも全体に



第120図　西山古墳群出土弥生土器（１）(1/4)



第121図　西山古墳群出土弥生土器（2）(1/4)

ヨコナデを施し、239の外面胴部には縦方向のハケメが存在する。240は胴部が上下に長い土器である。内湾して立ち上がった胴部は、頸部で「く」字状に屈曲している。口縁部は上下に大きく拡張して断面形が「T」字状を呈し、外面には3条の凹線が認められる。頸部から口縁部にかけては内外面ともヨコナデを施し、外面の胴部には縦方向のハケメが存在する。241の胴部は、図化した部分ではほぼ直線的に斜め上方へ立ち上がっている。頸部で「く」字状に屈曲した口縁の端部は、斜め上下に大きく拡張して断面形が「T」字状を呈している。口縁部の外面には3条の凹線が認められ、内外面ともヨコナデを施している。外面の胴部には縦方向のハケメが存在し、内面の胴部は縦方向のハケメを縦方向のナデによって消している。242も前述した241と酷似した形態になっているが、上下に大きく拡張した口縁の外面が蒲鉾のように丸くなり、3条の凹線が認められる。頸部から口縁部にかけては、内外面とも全体にヨコナデを施している。

244から246は、壷または甕の底部である。大きさは同じでないが、いずれも平底で外面の接地部分はナデを施している。外面の胴部下位は縦方向のヘラミガキを行い、内面の胴部下位から底部にかけては磨滅して観察できなかったが、おそらくヘラケズリをしていると思われる。

鉢　247の口径の大きな破片は、鉢の口縁部と考える。緩やかに内湾して立ち上がった口縁端部は、器壁が肥厚して上位に2条の凹線が認められる面が存在する。外面の上位には浅い凹線が認められ、下位には斜め方向のヘラミガキが行われている。内面にもヘラミガキが行われているが、後にヨコナデが施されてその痕跡がかすかに認められるだけになっている。胎土中には砂粒が少なく、焼成は良好で全体に橙色を呈している。

248は鉢または壷か甕の台と考える。「ハ」字状に広がった端部は、斜め上方へ拡張して外側に面が存在する。上位には3条の凹線が認められ、中位には長い三角形の透しが6個も配されている。外面はヨコナデを施し、内面は横方向のヘラケズリが行われている。

高杯　高杯の杯部または脚部の破片が、比較的多く採集されている。249の上部の破片は、内傾して立ち上がった口縁部の器壁は薄く、外面に5条の凹線が認められる。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、杯部は内外面ともヘラミガキを行っている。250の口縁部はほぼ直立して立ち上がり、端部は肥厚して中央部が窪んだ面が存在する。外面には凹線が少なく、内面の杯部には多角形を描いたヘラミガキを行っている。251から253は外面の口縁部に多くの凹線が認められるもので、杯部から屈曲して立ち上がった口縁の端部は、肥厚して中央部が窪んだ面が存在する。口縁部は内外面ともヨコナデを施しているが、杯部は器表面の磨滅したものが多い。254は深い椀形の杯部を有する高杯の破片である。外面の杯部は縦方向のヘラミガキを行い、内面の杯部はヨコナデを施している。外面の脚部には上位と下位に数条の凹線が認められ、その中間部分は縦方向のヘラミガキを行っている。胎土中には砂粒が少なく、焼成は良好で全体に橙色を呈している。255の「ハ」字状を呈してラッパ状に開いた脚の端部は、斜め上方へ拡張して外側に3条の凹線が認められる面が存在する。中位には2条の凹線と円形の透しが存在し、端部は全体にヨコナデを施している。外面には縦方向のヘラミガキを行っているが、内面には横方向のヘラケズリ痕跡が認められる。256から259は、長い三角形の透しを有する脚部の破片である。「ハ」字状に開いた脚の端部は、いずれも斜め上方へ拡張して外側に面が存在する。外面に凹線が認められるもの（256・259）や、内面にシボリ痕跡を有するもの（258）がある。脚端部はヨコナデを施し、内面は横方向のヘラケズリを行っている。

これらの弥生土器は中期後葉の時期に属するが、新しいものと古いものが混在している。

石器（第122図）

太型蛤刃石斧　２点を採集したが、どちらも破片である。３は刃部先端の小破片で、刃面は両面とも滑らかに仕上げられ、刃縁はシャープである。この石斧の石材は安山岩で、表面が部分的に風化している。４は刃部と基部の一部を欠損しており、残存長11.3cm・最大幅6.0cm・最大厚4.3cmを測る。両側縁に敲打を施し、表面は滑らかに仕上げられている。この石斧の石材も安山岩である。

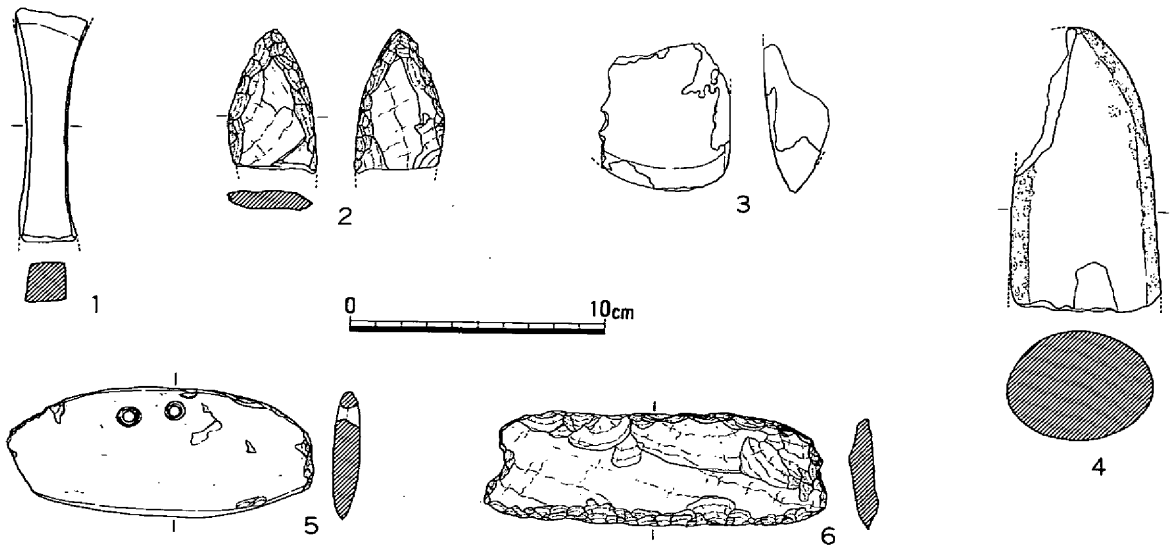
石包丁　粘板岩製の磨製石包丁（５）とサヌカイト製の打製石包丁（６）がある。前者は、長さ12.0cm・幅5.1cm・厚さ1.1cmを測り、両端部は丸くならないで直線的な面が認められる。紐部の円孔は両面から穿孔され、最大径が0.4cmで、図化した左側の円孔はやや下がった位置に穿たれている。刃縁はシャープで、背部は丸く仕上げられている。両面とも全体が丁寧に磨かれ、製作過程の擦痕も認められる。後者は、長さ13.6cm・幅4.5cm・厚さ1.5cmを測り、両端部に抉りが存在するが、図化した右側の抉りは浅い。刃部は両面から刃がつけられてシャープになっているが、背部から両端部にかけては敲打痕が認められる。

(3)　縄文時代の遺物

遺構に伴わない縄文時代の遺物としては、１点の尖頭器を採集しただけである。この遺物は６号墳の南東側斜面から弥生土器や石包丁などに混在して出土したもので、当然のことながら周辺を精査したにもかかわらず遺構は何も検出できなかった。なぜ縄文時代の遺物と推定される石器が弥生時代の遺物に混在していたのか、また縄文土器の小片すらないのにこの石器だけが単独に採集されたのか、ともに理解することができなかった。

石器（第122図）

尖頭器　２の尖頭器はサヌカイト製で、基部を欠損して先端部だけである。残存する長さ5.7cm・幅3.5cm・厚さ0.8cmを測り、先端から側辺にかけの一部を新しく欠損している。側辺は両面から刃がつけられてシャープになっているが、両面とも内側の部分が局部的に磨かれている。



第122図　西山古墳群出土石器（1/3）

第3節　結　　語

発掘調査に着手する以前の段階では、西山古墳群は横穴式石室を埋葬施設とする円墳を主体に箱式石棺も認められる14基の古墳からなる古墳群で、一般国道53号（岡山北バイパス）の路線内に位置する4基の古墳（西山1～4号墳）が調査の対象になっていた。

ところが西山古墳群の所在する地点を訪れて周辺を丹念に踏査してみると、調査の対象になっている4基の古墳以外にも古墳の墳丘と推定される高まりが数か所に新しく発見され、廃屋の別荘の庭に使われている石にも古墳の石室に用いられていた石材と考えられるものがかなり認められたため、路線内の広い範囲にわたって綿密な分布調査を行うとともに、トレンチによる試掘を本格的に実施して未知の古墳や墳墓の所在確認に努力した。

その結果、当初は4基の古墳が調査対象であったけれども、最終的には8基の古墳と、墳丘を有しない埋葬施設だけの4基の墳墓の発掘調査を行ったのである。

検出した遺構や遺物とその時代について

西山古墳群が所在する丘陵の斜面へ、人間が最初に足を踏み入れたのは、縄文時代と考えられる古い時代である。

6号墳の南東側斜面から、弥生土器や石包丁などに混在して1点の尖頭器（第122図2）が採集されている。基部を欠損した先端部だけのものであるが、両面とも内側部分が局部的に磨かれている。

続いて人間の活動が確認されるのは、弥生時代中期後葉の時代である。

6号墳の南東側斜面から、比較的多くの弥生土器（第120・121図）と石斧（第122図3・4）や石包丁（第122図5・6）の石器が採集されている。これらの遺物や前述した尖頭器が出土した地点を精査したが、遺構は何も存在しなかった。

古墳時代の後半期である6世紀中葉から7世紀前葉の時期になると、西山古墳群の所在する丘陵の斜面は最盛期を迎えることとなり、一般国道53号（岡山北バイパス）の路線内だけでも8基の古墳と4基の墳墓が築造されていた。

この西山古墳群の各古墳や墳墓は、眼下に存在する香橋池の護岸工事用の石材として埋葬施設上部の天井石や側壁の石が部分的に抜き取られていたものの、ほとんどのものが偶然にも床面に近い部分は撹乱を受けておらず、埋葬された当時の様相を良好な状態で保持していた。

発掘調査を実施した8基の古墳のうち、墳丘形態が方形を呈するものは1基（11号墳）だけで、残る7基はいずれも円形であり、全体の規模には大小の差が歴然と認められた。

各古墳や墳墓の埋葬施設は一様でなく、土壙（木棺直葬）1基（12号墓）、箱式石棺4基（7号墳、8～10号墓）、竪穴式石室2基（6・11号墳）、横穴式石室5基（1～5号墳）を検出し、副葬された遺物が1点も存在しなかったものから、須恵器や土師器の土器のみならず鉄器や装身具も大量に出土したものまで、遺物の出土状況は著しく異なっていた。

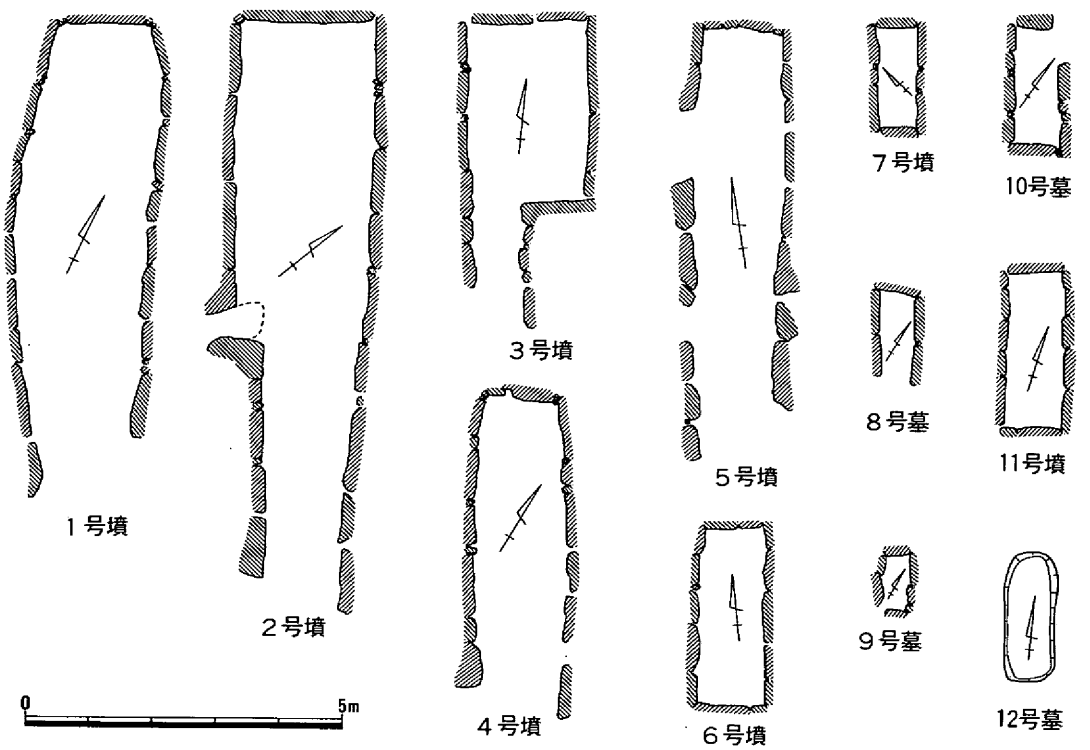
3号墳の横穴式石室の玄室には、3面の埋葬面が層位的に重なった状態で検出され、多種多様の遺物が数多く出土したのである。また5号墳の横穴式石室には2基の土師質亀甲形陶棺が存在し、奥壁に近い陶棺の内部からは、中央に集中した状態で4点の耳環（28～31）・2点の勾玉（530・531）・各1点の切子玉（528）と小玉（533）が出土した。

各古墳や墳墓が築造された時期と追葬が行われた期間について

それぞれの古墳や墳墓で、副葬品として須恵器が出土した埋葬施設について、築造された時期や追葬が行われた期間を考えてみたい。

丘陵の斜面に位置する一般国道53号（岡山北バイパス）の路線内には、１～７号墳、11号墳の古墳８基と、墳丘を有しない埋葬施設だけの８～10号墓、12号墓の墳墓４基が存在したが、８～10号墓の３基の墳墓からは、築造された時期を推定することが可能な須恵器が出土しなかったので、８～10号墓の３基の墳墓を除く９基の古墳や墳墓を対象に、発掘調査によって得られた成果に基づいて、若干の考察を行ってみたい。

一般国道53号（岡山北バイパス）の建設に伴って発掘調査を実施した西山古墳群のうち、須恵器が出土した９基の古墳や墳墓の中で最初に築造されたのは、埋葬施設が横穴式石室の３号墳であろう。この３号墳では３面にも及ぶ埋葬面が層位的に検出され、初葬に伴って副葬されたと推定される須恵器や土師器の土器は、玄門の袖に面した左側壁に近い地点で、片付けられた状態で複雑に重なるようになって検出されたのである。その須恵器の中でも全体の形態や成形の手法が古い様相を呈して、セット関係と断定できる杯身（48）と杯蓋（47）に注目したい。前者は口径12.9～13.2cm・器高4.7cmを測り、口縁部の立ち上がりは斜め上方へ長く張り出し、端部は全体に丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。内面の底部には仕上げナデを加え、内面は青灰色を呈するが外面は自然釉が付着して灰黄色になっている。後者は口径14.9cm・器高5.0cmを測り、外面の天井部と体部の境に稜が認められ、内面の口縁端部に段が存在する。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。内面の天井部には仕上げナデを加え、内面は青灰色を呈するが外面は自然釉が付着して灰黄色になっている。この杯身と杯蓋の形態的特徴や成形手法を陶邑



第123図　各古墳や墳墓の埋葬施設規模（1/120）

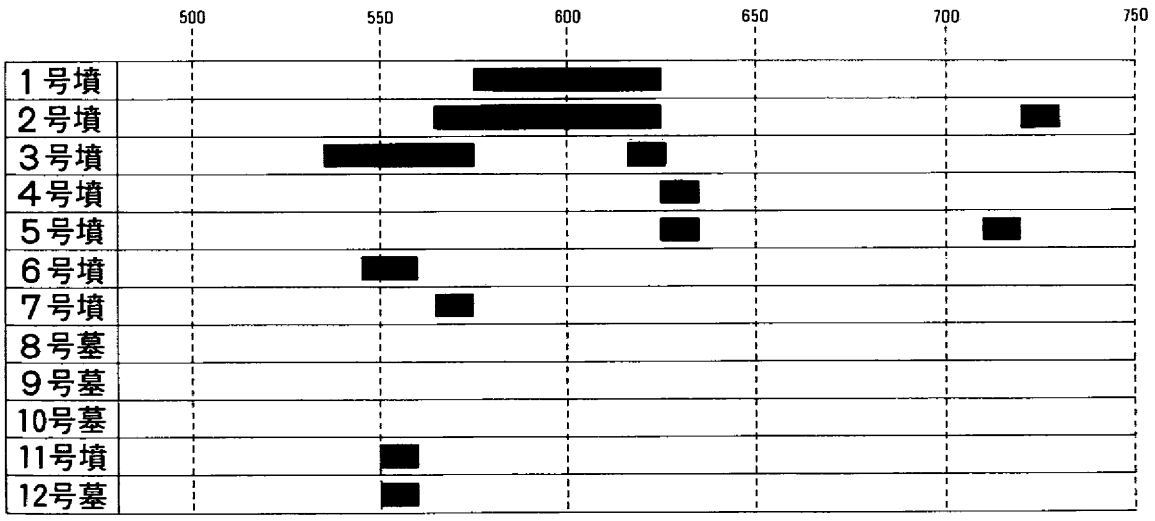
古窯址群における須恵器の編年[7]と比較検討すれば、3号墳から出土した古い様相を呈する個体は、TK10の古い段階のものに酷似し、6世紀中葉でも前葉に近い時期に属するのではなかろうか。

このように考えるならば、西山3号墳は岡山県内における埋葬施設が横穴式石室またはそれに類似した竪穴系横口式石室の古墳のうちでも比較的古いもので、現時点では総社市三輪の三輪山6号墳[8]と倉敷市児島塩生の金浜古墳[9]との中間の時期に属する古墳と推定しておきたい。

3号墳に続いて築造されたのは、埋葬施設が竪穴式石室の6号墳であろう。調査した結果と埋葬施設の性格から考えて、この6号墳は横穴式石室とは異なる一度だけの埋葬と推定された。須恵器は南側の小口部分から出土し、杯身と杯蓋はいずれも底部や天井部を上にして口縁部が下になるように伏せた状態に並べて置かれ、法量と焼成や色調を精査したところ、6組12点のセット関係が判明した。杯身は口径11.8～13.6cm・器高4.3～5.3cmを測り、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行っているが、回転方向が右のものと左のものが認められる。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の底部に仕上げナデを加えているものもある。杯蓋は口径13.6～15.4cm・器高3.8～4.9cmを測り、外面の天井部と体部の境に稜が認められるものや、内面の口縁端部に段を有するものが多い。外面の天井部はヘラケズリを行っているが、回転方向が右のものと左のものが存在する。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、内面の天井部に仕上げナデを加えているものもある。この6号墳から出土した杯身と杯蓋を陶邑編年に対照すれば、相対的にTK10のものに近い形態や成形手法の特徴が認められるから、6世紀中葉の時期に属すると考える。

さらに6号墳に続いて築造されたのは、埋葬施設が竪穴式石室の11号墳と土壙（木棺直葬）の12号墓であろう。前者は北側の小口部分に多くの須恵器や土師器が集中して副葬されていたが、須恵器の杯身と杯蓋はいずれも口縁部を上にした状態で出土し、6組12点のセット関係が判明した。後者からは須恵器の杯身1点、杯蓋2点、広口壺1点を検出したが、220の杯身と218の杯蓋は口縁部を合わせた状態で出土した。

11号墳から出土した杯身は、口径12.3～13.2cm・器高4.5～5.0cmを測り、口縁端部はいずれも丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行っているが、回転方向が右のものと左のものが認められ



西山古墳群築造・追葬期一覧表

る。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の底部に仕上げナデを加えているものもある。杯蓋は口径13.7～14.8cm・器高4.0～4.8cmを測り、外面の天井部と体部の境に稜が認められるものは存在しないが、内面の口縁端部に段を有するものがほとんどである。外面の天井部はヘラケズリを行っているが、回転方向が右のものと左のものがある。内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、内面の天井部に仕上げナデを加えているものも存在する。12号墓から出土した218の杯蓋は、杯蓋そのものを単独で一見したならば全体の形態や成形の手法が時代的に古い様相を呈しているが、220の杯身と口縁部を合わせた状態で検出されたこともあって、11号墳から出土した一群の須恵器とほぼ同時期のものと考えている。この218の杯蓋は、口径14.4cm・器高4.8cmを測る完形品で、外面の天井部と体部の境には稜を有し、内面の口縁端部には明瞭な段が認められる。外面の天井部は回転方向が左のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の天井部には仕上げナデを加えている。219も完形品であるが、口径13.6cm・器高4.5cmを測り、前述の218よりもやや法量が小さい。外面の天井部と体部の境に存在する稜は鈍く、内面の天井部に仕上げナデは加えていない。220の杯身は口径12.6cm・器高3.8cmを測り、口縁部が斜め上方に内傾して立ち上がって端部を丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、内面の底部には仕上げナデを加えている。この11号墳と12号墓から出土した須恵器は、陶邑編年でＴＫ10の新しい段階のものの特徴が認められるから、６世紀中葉でも後葉に近い時期に属するであろう。

７号墳の埋葬施設は箱式石棺で、それぞれがセット関係になる杯身２点（193・195）と杯蓋２点（192・194）が出土している。193の杯身の計測値は口径12.2～12.6cm・器高3.2cm、195の杯身の計測値は口径12.2～12.6cm・器高4.0cmで、口縁部は内傾して低く立ち上がり、端部は丸く仕上げている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の底部には仕上げナデを加えている。192の杯蓋の計測値は口径14.3～14.7cm・器高3.6cm、194の杯蓋の計測値は口径14.2～14.4cm・器高4.3cmで、口縁部はやや器壁が厚くなって端部を丸く仕上げ、外面の天井部と体部の境に稜が認められるものは存在しない。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施し、内面の天井部には仕上げナデを加えている。この７号墳から出土した杯身と杯蓋を陶邑編年に対照すれば、ＴＫ43の古い様相を呈するものに酷似し、６世紀後葉でも中葉に近い時期に属するであろう。

以上に説明した古墳や墳墓の埋葬施設は一様でなく、土壙（木棺直葬）、箱式石棺、竪穴式石室、横穴式石室と様々であるが、埋葬施設の主軸はいずれも地形の等高線と平行する方向を示している。ところがこれから説明を加える古墳は、埋葬施設のすべてが横穴式石室で、主軸は地形の等高線と直交する方向に変化している。すなわち６世紀後葉でも中葉に近い時期になると、西山古墳群における古墳の埋葬施設は横穴式石室に画一化され、送葬儀礼そのものに大きな画期を迎えることとなる。

２号墳は、発掘調査を実施した西山古墳群の古墳で、最大の規模であった。奥壁に面した部分に、追葬によって片付けられたと推定される多くの須恵器が、複雑に重なって出土した。その中でも杯身と杯蓋の法量や色調などを精査した結果、６組12点のセット関係が判明した。それで比較的古い形態や成形手法が認められる11の杯身と10の杯蓋に注目した。11の杯身は口径13.2cm・器高3.9cmを測り、口縁部は内傾して斜め上方へ短く立ち上がっている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。内面の底部には仕上げナデを

加えているが、同心円の当て具痕跡が鮮明に残存している。10の杯蓋は口径14.9cm・器高4.1cmを測り、口縁端部は丸く仕上げている。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。内面の天井部に仕上げナデを加えているが、11の杯身と同様に同心円の当て具痕跡が鮮明に残存している。この2号墳から出土した11の杯身と10の杯蓋のセット関係のものを陶邑編年と対照すれば、前述した7号墳から出土した杯身や杯蓋より法量がやや大きいものの、その7号墳から出土した須恵器とほぼ同時期のTK43の古い様相を呈するものに酷似し、6世紀後葉でも中葉に近い時期に属するであろう。また比較的新しい形態や成形手法を有する31の杯身と30の杯蓋のセット関係に注目した。31の杯身は口径11.0～12.8cm・器高4.2cmを測り、口縁部は内傾して斜め上方へ極めて短く立ち上がっている。外面の底部はヘラ切り未調整で、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。30の杯蓋は口径13.9～14.5cm・器高4.8cmを測り、口縁端部はわずかに内傾して丸く仕上げている。外面の天井部はヘラ切り未調整で、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。この2号墳から出土した31の杯身と30の杯蓋のセット関係のものを陶邑編年と対照すれば、TK209の新相のものに酷似しており、7世紀前葉の時期になるであろう。そこで2号墳から出土した須恵器を、杯身と杯蓋を中心に概観すると、時間的な経過が途中で断絶することなく古いものから新しいものまで、出土遺物が連綿と継続して揃っており、6世紀後葉から7世紀前葉にかけての長期間にわたって、追葬が繰り返し行われたことが知られるのである。

なお羨道の中央部分に位置した閉塞石の一部と考える石の上から出土した36の杯身と35の杯蓋は、2号墳が使用されなくなった後に何らかの経緯で持ち込まれたもので、8世紀前葉の奈良時代後半の時期に属するであろう。

1号墳から出土した須恵器は、杯身2点、平瓶2点、提瓶1点の合計5点だけであった。1の杯身は口径11.7cm・器高3.4cmを測り、口径に比して器高が低い。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施し、内面の底部には仕上げナデを加えている。2の杯身は口径11.5cm・器高4.1cmを測り、口縁部の立ち上がりは極めて短い。外面の底部はヘラ切り未調整で、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。1と2の杯身を陶邑編年に対照すれば、前者はTK43のものと共通点が多くて6世紀後葉の時期に属すると推定され、後者はTK209の新相のものに酷似して7世紀前葉の時期になると考える。この1号墳から出土した土器は5点だけで少なかったが、耳環は15点も検出され、1体の遺骸に2個の耳環が着装されていたと単純に計算するならば、少なくとも8体の遺骸が埋葬されていたことになる。このように考えるならば土器の点数があまりにも少量で、おそらく多くの土器が石室内から持ち出されたのであろう。したがって1号墳は、6世紀後葉から7世紀前葉にかけての期間に、追葬が繰り返し行われたと考えられるのである。

ところで3号墳には3面にも及ぶ埋葬面が層位的に重なった状態になって検出され、最上面で最後に埋葬されたと推定される灰白色を呈する粘土の木棺痕跡が存在し、セットになる杯身（120）と杯蓋（119）以外に大刀（507）と対になる2点の耳環（24・25）が出土した。120の杯身は口径12.6～12.8cm・器高3.8cmを測り、口縁部の立ち上がりは短くて低い。外面の底部はヘラ切り未調整で、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。119の杯蓋は口径14.3～14.5cm・器高4.0cmを測り、外面の天井部はヘラ切り未調整で、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコ

ナデを施している。この3号墳から出土した120の杯身と119の杯蓋のセット関係のものを陶邑編年と対照すれば、TK209の新相のものに酷似して7世紀前葉の時期に属すると考えられ、前述した1号墳や2号墳に最後に遺骸が埋葬された時期と一致している。

別荘地の庭から新しく発見された5号墳の横穴式石室からは、2基の土師質亀甲形陶棺以外に、石室の入口付近や陶棺の身の下部などから須恵器も出土した。法量や色調などを精査した結果、160の杯身と159の杯蓋はセット関係であることが判明した。160の杯身は口径9.5cm・器高3.4cmを測る小形のもので、斜め上方へ張り出した口縁部の立ち上がりは短くて低い。外面の底部はヘラ切り未調整で、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。159の杯蓋は口径10.9cm・器高4.0cmを測り、外面の天井部はヘラ切り未調整で、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。この5号墳から出土した160の杯身と159の杯蓋のセット関係のものを陶邑編年と対照すると、TK209の最も新しい様相を呈するものかTK217の古相のものに形態や成形の手法が酷似しており、7世紀前葉でも中葉に近い時期に属するであろう。

なお土師質亀甲形陶棺の蓋の破片を取り上げていて検出した高台を有する杯身（162）は、8世紀前葉の奈良時代後半の時期に属するであろう。

4号墳は石室内から出土した須恵器は1点もなかったが、石室の入口に面した地形の低い南東側斜面に堆積していた土砂の中から、図化することが不可能な小破片の須恵器を採集した。その須恵器片は、前述した5号墳から出土したものと類似した破片で、おそらく7世紀前葉でも中葉に近い時期のものと考えられる。

このような調査結果から、1号墳、2号墳、3号墳の3基の古墳に追葬が行われなくなった段階になって、北側の地点に所在した4号墳と5号墳の2基の古墳が新しく築造されているのである。

西山古墳群の特徴について

西山古墳では、6世紀中葉から7世紀前葉の時期に属する古墳8基と墳墓4基の発掘調査を実施したが、埋葬施設は一様でなく、土壙（木棺直葬）、箱式石棺、竪穴式石室、横穴式石室が存在した。埋葬施設上部の天井石や側壁の石が部分的に抜き取られていたが、偶然にも床面に近い部分は撹乱を受けていないものが多く、埋葬された当時のままの状態で保持され、大量の遺物が出土しただけでなく、埋葬の方法や人数なども推定できる貴重な資料を得ることができた。

一般的に6世紀の中葉になると、単数埋葬を目的とする竪穴式石室や箱式石棺などから、一度古墳を築造すれば複数の遺骸の追葬が可能である横穴式石室に変化し、その後広く普及するようになっているが、この西山古墳群はまさに両者の接点の時期の古墳群として重要であり、特に3号墳の横穴式石室の形態や大量の出土遺物は注目される。（福田）

註

1　福田正継「斎富古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　1995年
2　高田明人「立坂北古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9　1991年
3　栗野克己・高畑知功「小中古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7　1975年
4　小郷利幸「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第54集　1994年
5　光永真一ほか「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98　1995年
6　千賀久編「寺口忍海古墳群」『新庄町文化財調査報告』第1集　1988年
7　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
8　西川宏「備中三輪山第6号墳」『古代吉備』第5集　1963年
9　間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・小野一臣「金浜古墳」『倉敷考古館研究集報』第14号　1979年

表－1　西山1号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表

番号	口径	器高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
1	11.7	3.4	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	外面全体に自然釉が付着している。
2	11.5	4.1	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ(底部ヘラ切り未調整)	内　灰白色 外　灰黄色	左	ほぼ完形	内面底部に有機物が付着している。 外面全体に自然釉が付着している。

表－2　西山1号墳出土須恵器平瓶観察表

番号	口径	器高	胴長径	胴短径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
3	—	—	14.7	14.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	左	約4/5	外面に自然釉が付着している。 肩部に2個の円板が存在する。
4	6.7 ～ 7.0	19.5	18.5	18.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	完形	外面器表面に凹凸が存在する。

表－3　西山1号墳出土須恵器𤭯観察表

番号	口径	器高	胴部径	頸部径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
5	—	—	9.5	3.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	約1/2	外面に自然釉が付着している。 口縁部に凹線が存在する。

表－4　西山1号墳出土須恵器提瓶観察表

番号	口径	器高	最大径	最大厚	耳形状	技法	色調	回転方向	残存率	備考
6	—	—	19.6	13.9	鉤形	内　ヨコナデ 外　放射線状文様　カキメ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	約4/5	口縁部を欠損している。 自然釉が付着している。

表－5　西山2号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表

番号	口径	器高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
7	13.9	4.3	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	ほぼ完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 外面に自然釉が付着している。
8	14.5 ～ 14.7	4.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　青灰色	右	完形	器形が歪んでいる。 外面全体に自然釉が付着している。
9	(14.0)	3.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	約1/2	内面底部に当て具痕跡が残存する。 外面全体に自然釉が付着している。
10	14.9	4.1	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	内面天井部に当て具痕跡が残存する。 №11とセット。
11	13.2	3.9	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	内面底部に当て具痕跡が残存する。 №10とセット。
12	15.5	4.5	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	復元完形	外面全体に自然釉が付着している。 №13とセット。
13	13.8	4.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	ほぼ完形	外面全体に自然釉が付着している。 №12とセット。
14	14.6	4.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　青灰色	右	ほぼ完形	内面天井部に当て具痕跡が残存する。 外面全体に自然釉が付着している。
15	13.0 ～ 13.2	3.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　暗青灰色	右	完形	器形が歪んでいる。 外面全体に自然釉が付着している。
16	13.0	4.1	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	外面全体に自然釉が付着している。
17	13.0	3.9	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	外面全体に自然釉が付着している。
18	14.5	4.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　青灰色	右	完形	内面天井部に当て具痕跡が残存する。 №19とセット。
19	13.2	4.3	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	内面底部に当て具痕跡が残存する。 №18とセット。
20	14.4	3.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　灰黄色	右	復元完形	内面天井部に当て具痕跡が残存する。 №21とセット。
21	12.8	3.4	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　暗青灰色	右	復元完形	内面底部に当て具痕跡が残存する。 №20とセット。
22	14.5	4.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　暗青灰色	右	復元完形	内面天井部に刺突痕跡が残存する。
23	14.6	4.1	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰色	右	完形	外面全体に自然釉が付着している。

番号	口径	器高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
24	12.7 ～ 12.8	4.1	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	器形が歪んでいる。 内面底部に当て具痕跡が残存する。
25	12.2 ～ 12.6	4.0	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　灰黄色	右	完形	器形が歪んでいる。 外面全体に自然釉が付着している。
26	12.1 ～ 12.6	4.3	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　青灰色	右	完形	器形が著しく歪んでいる。 外面全体に自然釉が付着している。
27	14.1	4.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	外面に自然釉が付着している。
28	13.7	3.5	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	器形が著しく歪んでいる。
29	13.2 ～ 13.4	3.5	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　青灰色	右	復元完形	器形が歪んでいる。
30	13.9 ～ 14.5	4.8	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ（天井部ヘラ切り未調整）	内　青黒色 外　青黒色	左	完形	器形が著しく歪んでいる。 №31とセット。
31	11.0 ～ 12.8	4.2	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ（底部ヘラ切り未調整）	内　青黒色 外　青黒色	左	完形	器形が著しく歪んでいる。 №30とセット。
32	12.7	3.3	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　暗青灰色	右	復元完形	外面に自然釉が付着している。
33	11.6 ～ 12.2	3.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	器形が歪んでいる。
34	10.8 ～ 11.2	3.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	復元完形	器形が歪んでいる。
35	18.8	3.6	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	約3/4	焼成やや不良。 №36とセット。
36	19.2	4.3	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗赤褐色 外　灰白色	右	完形	焼成やや不良。 №35とセット。

表－6　西山2号墳出土須恵器壺観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
37	14.5	16.0	18.2	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	ほぼ完形	内面に有機物が付着している。 外面全体に自然釉が付着している。

表－7　西山2号墳出土須恵器脚付壺観察表

番号	口径	最大径	器高	脚底径	脚部高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
38	10.6	16.4	—	—	—	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰褐色 外　暗褐色	右	約2/3	脚部を欠損している。 焼成やや不良。

表－8　西山2号墳出土須恵器𤭯観察表

番号	口径	器高	胴部径	頸部径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
39	16.7	14.9	9.3	4.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　暗青灰色	右	完形	内面に有機物が付着している。

表－9　西山2号墳出土須恵器提瓶観察表

番号	口径	器高	最大径	最大厚	耳形状	技法	色調	回転方向	残存率	備考
40	—	—	21.6	14.7	鈎形	内　ヨコナデ 外　カキメ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	約4/5	口縁部を欠損している。 自然釉が付着している。
41	—	—	18.1	13.8	鈎形	内　ヨコナデ 外　カキメ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　暗青灰色	右	約4/5	口縁部を欠損している。 自然釉が付着している。
42	6.4	20.0	16.2	11.5	鈎形	内　ヨコナデ 外　カキメ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	ほぼ完形	焼成やや不良。
43	7.6	19.6	15.7	10.6	鈎形	内　ヨコナデ 外　カキメ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	ほぼ完形	自然釉が付着している。
44	7.2	19.2	16.8	10.7	鈎形	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　灰黄色	右	完形	自然釉が付着している。

※表－10　西山2号墳出土須恵器長脚無蓋高杯観察表

番号	口径	器高	脚底径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
45	11.9 ～ 12.3	17.0	11.5	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	右	完形	外面脚部の中位に2条の凹線が存在する。 脚内面にシボリ痕跡が存在する。

表－11　西山2号墳出土須恵器短脚無蓋高杯観察表

番　号	口　径	器　高	脚底径	技　　法	色　　調	回転方向	残　存　率	備　　考
46	11.8	6.9	8.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　灰黄色	右	完形	胎土中に大きな砂粒が多い。

表－12　西山3号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表

番　号	口　径	器　高	技　　法	色　　調	回転方向	残　存　率	備　　考
47	14.9	5.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	復元完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 No.48とセット。
48	12.9 ～ 13.2	4.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	外面全体に自然釉が付着している。 No.47とセット。
49	14.5	4.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	内面天井部に赤色顔料が付着している。 No.50とセット。
50	13.1	4.9	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	外面全体に自然釉が付着している。 No.49とセット。
51	15.0 ～ 15.3	5.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 No.52とセット。
52	13.2 ～ 13.5	5.1	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	外面底部に有機物が付着している。 No.51とセット。
53	13.5	4.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	右	完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 内面口縁端部に段を有する。
54	14.6 ～ 14.8	4.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 内面口縁端部に段を有する。
55	14.4 ～ 14.6	4.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　青灰色	右	完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 外面天井部に未調整部分が存在する。
56	14.5 ～ 14.7	5.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	内面天井部に当て具痕跡が残存する。 No.57とセット。
57	12.9	4.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	内面底部に当て具痕跡が残存する。 No.56とセット。
58	14.0 ～ 14.2	4.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　仕上げナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	内面口縁端部に段を有する。 No.59とセット。
59	12.5 ～ 12.9	4.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	外面全体に自然釉が付着している。 No.58とセット。
60	14.1	4.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 No.61とセット。
61	12.1 ～ 12.5	4.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	内面底部に赤色顔料が付着している。 No.60とセット。
62	12.5 ～ 13.5	5.0	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　淡青灰色	左	完形	器形が歪んでいる。 胎土中に大きな砂粒が多い。
63	12.6 ～ 13.1	5.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	器形が歪んでいる。 胎土中に大きな砂粒が多い。
64	13.6 ～ 13.8	4.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	左	完形	外面底部にタタキ痕跡が残存する。 外面底部に有機物が付着している。
65	13.0 ～ 13.6	4.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面底部にタタキ痕跡が残存する。 内面底部に有機物が付着している。
66	14.7	4.3	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面天井部にタタキ痕跡が残存する。 内外面に有機物が付着している。
67	14.9	4.6	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	左	復元完形	内面口縁端部に段を有する。 No.68とセット。
68	13.8	4.4	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　灰黄色	左	完形	外面全体に自然釉が付着している。 No.67とセット。
69	14.9	4.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	左	復元完形	内面口縁端部に段を有する。 No.70とセット。
70	13.3	4.3	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	左	完形	外面底部にタタキ痕跡が残存する。 No.69とセット。
71	14.5	4.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	復元完形	内面口縁端部に段を有する。 No.72とセット。
72	12.8	4.1	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	左	完形	外面底部にタタキ痕跡が残存する。 No.71とセット。

番　号	口　径	器　高	技　　法	色　　調	回転方向	残　存　率	備　　考
73	13.7	4.4	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	左	完形	外面全体に自然釉が付着している。 内面底部に有機物が付着している。
74	13.6	4.2	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	左	完形	外面全体に自然釉が付着している。 内面底部に有機物が付着している。
75	13.5	5.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	外面全体に自然釉が付着している。 外面底部に有機物が付着している。
76	15.5	4.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　灰黄色	左	ほぼ完形	内面口縁端部に段を有する。 №77とセット。
77	14.0	5.0	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　灰黄色	左	完形	焼成やや不良。 №76とセット。
78	15.2 ～ 15.4	4.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　暗青灰色	左	復元完形	内面口縁端部に段を有する。 №79とセット。
79	13.8 ～ 14.1	4.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　暗青灰色	左	完形	胎土中に大きな砂粒が多い。 №78とセット。
80	14.7	4.6	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 №81とセット。
81	13.2	4.9	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	ほぼ完形	内外面に有機物が付着している。 №80とセット。
82	12.8 ～ 13.5	4.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	器形が歪んでいる。 外面全体に自然釉が付着している。
83	13.0 ～ 13.3	4.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	器形が歪んでいる。 内面に有機物が付着している。
84	13.0 ～ 13.2	4.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　暗青灰色	左	完形	器形が歪んでいる。 胎土中に大きな砂粒が多い。
85	14.0 ～ 14.3	4.5	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	左	復元完形	器形が歪んでいる。 外面全体に自然釉が付着している。
86	14.8 ～ 15.0	4.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 内外面に有機物が付着している。
87	14.7	4.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　淡青灰色	左	ほぼ完形	内面口縁端部に段を有する。 内外面に有機物が付着している。
88	13.9 ～ 14.3	4.4	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 №89とセット。
89	12.2 ～ 12.5	4.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面全体に自然釉が付着している。 №88とセット。
90	14.9	4.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	ほぼ完形	内面口縁端部に段を有する。 №91とセット。
91	13.0 ～ 13.6	5.2	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	ほぼ完形	胎土中に大きな砂粒が多い。 №90とセット。
92	14.9	4.9	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　淡青灰色	左	復元完形	焼成やや不良。 №93とセット。
93	13.2	4.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　淡青灰色	左	約4/5	焼成やや不良。 №92とセット。
94	12.7 ～ 13.1	4.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	内面口縁端部に段を有する。 外面全体に自然釉が付着している。
95	12.6 ～ 13.1	4.9	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	器形が歪んでいる。 内面底部に有機物が付着している。
96	12.6	4.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　灰黄色	左	完形	外面に須恵器片が付着している。 外面全体に自然釉が付着している。
97	13.1	4.4	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面全体に自然釉が付着している。 内面底部に有機物が付着している。
98	12.8	4.0	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　青灰色	右	完形	底部にヒビワレが認められる。 外面全体に自然釉が付着している。
99	12.5 ～ 12.7	4.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	器形が歪んでいる。 内面に赤色顔料が存在した。
100	14.2 ～ 14.4	3.9	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 №101とセット。

番号	口径	器高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
101	12.4 ～ 12.7	4.9	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面底部に有機物が付着している。 №100とセット。
102	15.2	4.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	左	復元完形	内外面に有機物が付着している。 №103とセット。
103	13.7	4.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	左	完形	外面全体に自然釉が付着している。 №102とセット。
104	14.0 ～ 14.2	3.6	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	右	復元完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 №105とセット。
105	11.9 ～ 12.1	3.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	右	完形	器形が歪んでいる。 №104とセット。
106	14.7	4.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 胎土中に大きな砂粒が多い。
107	14.5	4.6	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　淡青灰色	左	復元完形	内面口縁端部に段を有する。 胎土中に大きな砂粒が多い。
108	14.6 ～ 15.0	4.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 外面全体に自然釉が付着している。
109	14.2	4.4	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 内面天井部に有機物が付着している。
110	14.3 ～ 14.9	4.9	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　淡青灰色	左	ほぼ完形	器形が歪んでいる。 内面口縁端部に段を有する。
111	14.2 ～ 14.5	4.4	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	左	完形	外面全体に自然釉が付着している。 内外面に有機物が付着している。
112	13.5	4.2	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	左	完形	外面全体に自然釉が付着している。 胎土中に大きな砂粒が多い。
113	14.3 ～ 14.8	4.3	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　暗青灰色 外　暗青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 内面天井部にタタキ痕跡が残存する。
114	14.6 ～ 14.8	5.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 内面天井部にタタキ痕跡が残存する。
115	14.2	4.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　灰黄色	右	完形	内面天井部にタタキ痕跡が残存する。 №116とセット。
116	12.8	4.3	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　灰黄色	右	完形	内面底部にタタキ痕跡が残存する。 №115とセット。
117	14.7	4.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面天井部にタタキ痕跡が残存する。 №118とセット。
118	12.9 ～ 13.3	4.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	器形が歪んでいる。 №117とセット。
119	14.3 ～ 14.5	4.0	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ（天井部ヘラ切り未調整）	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	胎土中に大きな砂粒が多い。 №120とセット。
120	12.6 ～ 12.8	3.8	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ（底部ヘラ切り未調整）	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	胎土中に大きな砂粒が多い。 №119とセット。
121	12.2 ～ 12.7	4.9	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　青灰色	左	完形	器形が歪んでいる。 外面全体に自然釉が付着している。
122	11.9	4.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面底部にヒビワレが認められる。 内面に赤色顔料が存在した。
123	12.5	4.5	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	左	完形	外面全体に自然釉が付着している。 内面底部に有機物が付着している。
124	11.7 ～ 12.0	4.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面底部に有機物が付着している。 内面に赤色顔料が存在した。
125	12.4 ～ 12.7	4.3	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	左	復元完形	外面全体に自然釉が付着している。 内面に赤色顔料が存在した。
126	12.9 ～ 13.3	4.6	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	左	完形	外面全体に自然釉が付着している。 内面に赤色顔料が存在した。
127	11.9 ～ 12.2	3.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　灰黄色	右	完形	焼成やや不良。 器形が歪んでいる。
128	14.0 ～ 14.2	4.1	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	左	完形	器形が歪んでいる。 胎土中に大きな砂粒が多い。

番号	口径	器高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
129	13.2	3.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　淡青灰色	右	復元完形	焼成やや不良。 胎土中に大きな砂粒が多い。

表－13　西山3号墳出土須恵器壺蓋観察表

番号	口径	器高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
130	7.6	3.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	内面天井部に赤色顔料が付着している。 №131とセット。

表－14　西山3号墳出土須恵器壺観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
131	7.2	14.4	8.6	内　タタキ　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	完形	外面全体に自然釉が付着している。 №130とセット。
132	10.4	14.5	14.1	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　カキメ ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	復元完形	内面口縁端部に段を有する。 外面口縁部にカキメが存在する。
133	9.5	13.3	11.2	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	復元完形	内面頸部に粘土接合部分が残存する。 内外面に有機物が付着している。
134	12.2	18.4	18.3	内　タタキ　ヨコナデ 外　タタキ　カキメ ヨコナデ	内　淡青灰色 外　淡青灰色	右	完形	外面口縁部に段を有する。 外面に有機物が付着している。

表－15　西山3号墳出土須恵器椀観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
135	8.3 ～ 11.2	11.7	10.3	内　ヨコナデ 外　カキメ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	器形が著しく歪んでいる。 外面胴部に1条の凹線が存在する。

表－16　西山3号墳出土須恵器提瓶観察表

番号	口径	器高	最大径	最大厚	耳形状	技法	色調	回転方向	残存率	備考
136	9.9 ～ 10.2	25.9	22.3	16.3	環形	内　ヨコナデ 外　タタキ　ヨコナデ	内　黒褐色 外　黒褐色	右	ほぼ完形	焼成極めて良好。 自然釉が付着する。
137	7.2	21.0	17.9	12.3	環形	内　ヨコナデ 外　タタキ　カキメ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	右	ほぼ完形	片方の耳を欠損する。 指頭圧痕が残存する。
138	—	—	15.2	10.0	鈎形	内　ヨコナデ 外　カキメ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	約4/5	自然釉が付着する。 有機物が付着する。
139	4.4	16.9	13.9	9.3	耳なし	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	左	完形	焼成やや不良。 耳が存在しない。
140	8.1	24.4	21.4	13.8	鈎形	内　ヨコナデ 外　カキメ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　灰黄色	右	完形	焼成極めて良好。 自然釉が付着する。

表－17　西山3号墳出土須恵器横瓶観察表

番号	口径	器高	胴長径	胴短径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
141	8.7	21.8	21.6	19.4	内　ヨコナデ 外　タタキ　カキメ　ヨコナデ	内　灰色 外　灰色	右	ほぼ完形	焼成やや不良。 タタキ痕跡が残存している。

表－18　西山3号墳出土須恵器長脚無蓋高杯観察表

番号	口径	器高	脚底径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
142	12.8	15.3	10.2	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ 波状文	内　青灰色 外　青灰色	右	ほぼ完形	焼成極めて良好。 外面脚部に2条の凹線が存在する。
143	11.0 ～ 11.2	14.2	9.9 ～ 10.2	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰黄色 外　灰黄色	右	完形	全体に自然釉が付着している。 外面脚部に2条の凹線が存在する。
144	10.7 ～ 10.9	15.2	9.1	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　黒灰色 外　黒灰色	右	完形	上下の透し窓が直線状に並ぶ。 脚端部が折れ曲がっている。

表－19　西山3号墳出土須恵器短脚有蓋高杯観察表

番号	口径	器高	脚底径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
145	11.4 ～ 11.8	7.7	10.2 ～ 10.4	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰色 外　青灰色	右	完形	器形が歪んでいる。 胎土中に大きな砂粒が多い。
146	11.1 ～ 11.5	—	—	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄色	右	約4/5	器形が歪んでいる。 外面全体に自然釉が付着している。

表—20　西山3号墳出土土師器壺形土器観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	残存率	備考
147	18.0	25.9	19.4	内　ヘラケズリ　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　橙色 外　橙色	復元完形	外面胴部にタタキ痕跡が残存する。 内外面に有機物が付着している。
149	6.6	8.7	13.8	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　淡橙色 外　淡橙色	復元完形	器表面が磨滅して調整が不明である。 №148とセット。
152	9.1	10.8	12.3	内　ヘラケズリ　ヨコナデ 外　ハケメ　ヨコナデ	内　橙色 外　赤褐色	ほぼ完形	内面底部と外面頸部に指頭圧痕が残存する 外面全体と内面口縁部に丹塗りが施されている。

表—21　西山3号墳出土土師器壺蓋観察表

番号	口径	器高	技法	色調	残存率	備考
148	8.3	3.3	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　淡橙色 外　淡橙色	復元完形	外面天井部には指頭圧痕が残存する。 №149とセット。

表—22　西山3号墳出土土師器甕形土器観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	残存率	備考
150	8.0	8.7	9.4	内　ハケメ　ヨコナデ 外　ハケメ　ヨコナデ	内　淡橙色 外　淡橙色	復元完形	外面底部に指頭圧痕が残存する。 外面底部に黒斑が認められる。
151	9.9	8.9	10.2	内　ヘラケズリ　ヨコナデ 外　ハケメ　ヨコナデ	内　淡橙色 外　淡橙色	完形	外面底部に指頭圧痕が残存する。 外面頸部に指頭圧痕が残存する。

表—23　西山3号墳出土土師器高杯形土器観察表

番号	口径	器高	脚底径	技法	色調	残存率	備考
153	17.0	12.2 ～ 15.0	11.3	内　ヨコナデ 外　タテナデ　ヨコナデ	内　橙色 外　橙色	復元完形	器形が著しく歪んでいる。 外面脚部に指頭圧痕が残存する。
154	16.9	12.9	10.9	内　ヨコナデ 外　タテナデ　ヨコナデ	内　橙色 外　橙色	約4/5	器表面の磨滅が著しくて調整が不明である。
155	—	—	10.9	内　ヨコナデ 外　タテナデ　ヨコナデ	内　橙色 外　橙色	約4/5	外面脚部に指頭圧痕が残存する。
156	—	—	11.1	内　ヨコナデ 外　タテナデ　ヨコナデ	内　橙色 外　橙色	約4/5	器表面の磨滅が著しくて調整が不明である。
157	—	—	10.2	内　ヨコナデ 外　タテナデ　ヨコナデ	内　橙色 外　橙色	約4/5	外面脚部に指頭圧痕が残存する。
158	—	—	—	内　ヨコナデ 外　タテナデ　ヨコナデ	内　橙色 外　橙色	約4/5	器表面の磨滅が著しくて調整が不明である。

表—24　西山5号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表

番号	口径	器高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
159	10.9	4.0	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ（天井部ヘラ切り未調整）	内　灰白色 外　灰白色	左	復元完形	№160とセット。
160	9.5	3.4	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ（底部ヘラ切り未調整）	内　灰白色 外　灰白色	左	完形	外面に自然釉が付着している。 №159とセット。
161	(11.2)	(3.3)	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ（底部ヘラ切り未調整）	内　灰白色 外　灰白色	右	約1/2	外面に自然釉が付着している。
162	13.9	4.7	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	左	完形	焼成著しく不良。 高台を有する。

表—25　西山5号墳出土須恵器壺観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
163	(13.2)	—	—	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	約1/5	内面に粘土接合痕跡が残存する。 外面に自然釉が付着している。

表—26　西山5号墳出土須恵器聴観察表

番号	口径	器高	胴部径	頸部径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
164	11.0	14.7	10.0	3.1	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ（底部ヘラ切り未調整）	内　灰白色 外　灰白色	左	ほぼ完形	胴部と口縁部に凹線が存在する。

表—27　西山5号墳出土須恵器提瓶観察表

番号	口径	器高	最大径	最大厚	耳形状	技法	色調	回転方向	残存率	備考
165	5.0	14.9	10.8	8.1	円板	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　淡青灰色	右	完形	口縁に凹線を有する。 カキメが残存する。

表—28　西山5号墳出土須恵器平瓶観察表

番　号	口　径	器　高	胴長径	胴短径	技　　法	色　　調	回転方向	残存率	備　　考
166	4.5	—	—	—	内　ヨコナデ 外　カキメ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	—	—	口縁部の小破片である。

表—29　西山5号墳出土須恵器高杯観察表

番　号	口　径	器　高	脚底径	技　　法	色　　調	回転方向	残存率	備　　考
167	(9.7)	—	—	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　黄緑色 外　黄緑色	—	約1/5	口縁部の小破片である。 全体に自然釉が付着している。
168	—	—	(6.2)	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	—	約1/3	内面にシボリ痕跡が残存する。 全体に自然釉が付着している。
169	—	—	(8.7)	内　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　黄緑色 外　黄緑色	—	約1/3	内面にシボリ痕跡が残存する。 外面脚部に2条の凹線が存在する。

表—30　西山6号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表

番　号	口　径	器　高	技　　法	色　　調	回転方向	残存率	備　　考
170	13.6	4.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 No.171とセット。
171	14.2	4.3	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	内面口縁端部に段を有する。 No.170とセット。
172	13.7	4.5	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 No.173とセット。
173	11.8	4.4	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	内面に有機物が付着している。 No.172とセット。
174	14.8	3.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	復元完形	内面口縁端部に浅い段を有する。 No.175とセット。
175	13.0	4.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	器形が歪んでいる。 No.174とセット。
176	13.5	4.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	胎土中に大きな砂粒が多い。
177	13.3	4.9	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	ほぼ完形	内外面の器表面に凹凸が存在する。
178	13.2	5.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　青灰色	左	復元完形	焼成やや不良。
179	14.8	4.9	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　青灰色	左	復元完形	内面口縁端部に段を有する。 内面に粘土接合痕跡が残存する。
180	14.8	4.9	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。
181	14.8	4.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 胎土中に大きな砂粒が多い。
182	15.4	4.9	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	復元完形	内面口縁端部に段を有する。 No.183とセット。
183	13.5	5.1	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　青灰色	左	完形	No.182とセット。
184	15.3	4.7	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	復元完形	内面口縁端部に段を有する。 No.185とセット。
185	13.6	4.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	No.184とセット。
186	15.3	4.9	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 No.187とセット。
187	13.1 ～ 13.5	5.3	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	器形が歪んでいる。 No.186とセット。

表—31　西山6号墳出土須恵器提瓶観察表

番　号	口　径	器　高	最大径	最大厚	耳形状	技　　法	色　　調	回転方向	残存率	備　　考
188	—	—	20.2	12.8	鉤形	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　カキメ ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	約4/5	口縁と耳を欠損する。 自然釉が付着する。

表―32　西山６号墳出土須恵器𤭯観察表

番　号	口　径	器　高	胴部径	頸部径	技　法	色　調	回転方向	残存率	備　考
189	12.9	15.0	10.3	4.9	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　カキメ ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	内面に有機物が付着している。 外面に自然釉が付着している。

表―33　西山６号墳出土土師器壺形土器観察表

番　号	口　径	器　高	最大径	技　法	色　調	残存率	備　考
190	10.9	14.5	14.1	内　ヘラケズリ　ヨコナデ 外　ヨコナデ	内　橙色 外　橙色	ほぼ完形	内面の底部に指頭圧痕が残存している。

表―34　西山６号墳出土須恵器長脚無蓋高杯観察表

番　号	口　径	器　高	脚底径	技　法	色　調	回転方向	残存率	備　考
191	9.9	11.7	7.2	内　ヨコナデ 外　カキメ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	約4/5	これだけが墳丘盛土中から出土している。 透し窓は１段である。

表―35　西山７号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表

番　号	口　径	器　高	技　法	色　調	回転方向	残存率	備　考
192	14.3〜14.7	3.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	内面に粘土の接合痕跡が残存する。 №193とセット。
193	12.2〜12.6	3.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	器形が歪んでいる。 №192とセット。
194	14.2〜14.4	4.3	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	外面全体に自然釉が付着している。 №195とセット。
195	12.2〜12.6	4.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	胎土中に大きな砂粒が多い。 №194とセット。

表-36　西山11号墳出土須恵器杯身・杯蓋観察表

番　号	口　径	器　高	技　法	色　調	回転方向	残存率	備　考
196	14.8	4.4	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 №197とセット。
197	13.2	4.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面に自然釉が付着している。 №196とセット。
198	14.6	4.6	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 №199とセット。
199	12.8	4.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	復元完形	№198とセット。
200	14.6	4.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	約3/4	外面に自然釉が付着している。 №201とセット。
201	12.8	4.6	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　灰黄褐色	右	完形	内面に有機物が付着している。 №200とセット。
202	14.5	4.6	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 №203とセット。
203	12.8	5.0	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面に自然釉が付着している。 №202とセット。
204	14.3	4.5	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	完形	内面口縁端部に段を有する。 №205とセット。
205	12.5	4.7	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　灰白色 外　灰白色	右	復元完形	№204とセット。
206	13.7	4.0	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	復元完形	内面口縁端部に段を有する。 №207とセット。
207	12.3	4.1	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	復元完形	外面に自然釉が付着している。 №206とセット。
208	12.9	4.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面に自然釉が付着している。
209	14.2	4.5	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	内面口縁端部に段を有する。 外面に自然釉が付着している。

表―37　西山11号墳出土須恵器壺蓋観察表

番　号	口　径	器　高	技　法	色　調	回転方向	残存率	備　考
210	8.9	3.1	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面に自然釉が付着している。 №211とセット。

表－38　西山11号墳出土須恵器壺観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
211	6.8	8.0	13.8	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　カキメ ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面に自然釉が付着している。 №210とセット。
212	10.2	15.4	22.1	内　同心円タタキ　ヨコナデ 外　平行タタキ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	口縁部に蓋の一部が付着している。 外面に自然釉が付着している。
213	10.3	11.0	13.2	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	完形	胴部に2条の凹線が存在する。 胎土中に大きな砂粒が多い。
214	8.2	12.3	12.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	復元完形	肩部に凹線が存在する。 内面底部にタタキ痕跡が残存する。

表－39　西山11号墳出土土師器壺形土器観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	残存率	備考
215	12.0	12.4	12.3	内　ヘラケズリ　ヨコナデ 外　ハケメ　ヨコナデ	内　浅黄橙色 外　浅黄橙色	完形	内面底部に指頭圧痕が残存する。 外面頸部に指頭圧痕が残存する。

表－40　西山11号墳出土土師器甕形土器観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	残存率	備考
216	10.2	11.7	12.1	内　ヘラケズリ　ヨコナデ 外　ハケメ　ヨコナデ	内　黄橙色 外　浅黄橙色	復元完形	外面胴部に黒斑が存在する。 外面頸部に指頭圧痕が残存する。
217	7.8	8.0	10.0	内　ヘラケズリ　ヨコナデ 外　ハケメ　ヨコナデ	内　黄橙色 外　黄橙色	完形	外面胴部に黒斑が存在する。 外面頸部に指頭圧痕が残存する。

表－41　西山12号墓出土須恵器杯身・杯蓋観察表

番号	口径	器高	技法	色調	回転方向	残存率	備考
218	14.4	4.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	左	完形	外面の天井部と体部の境に稜を有する。 内面口縁端部に段を有する。
219	13.6	4.5	内　ヨコナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　淡青灰色 外　暗青灰色	右	完形	内面口縁端部に段を有する。 外面全体に自然釉が付着している。
220	12.6	3.8	内　ヨコナデ　仕上げナデ 外　ヘラケズリ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	右	復元完形	外面に自然釉が付着している。 内面に有機物が付着している。

表－42　西山12号墓出土須恵器壺観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	残存率	備考
221	20.8	29.5	19.7	内　ヨコナデ 外　タタキ　カキメ　ヨコナデ	内　青灰色 外　青灰色	ほぼ完形	口縁部にクシ描き波状文が存在する。 口縁部に2条の凹線が2段に存在する。

表－43　西山古墳群表土出土須恵器甕観察表

番号	口径	器高	最大径	技法	色調	回転方向	残存率	備考
222	—	—	—	内　同心円タタキ　ヨコナデ 外　平行タタキ　カキメ ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	右	約1/10	焼成極めて良好。 内外面に自然釉が付着している。
223	—	—	—	内　同心円タタキ　ヨコナデ 外　平行タタキ　カキメ ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	右	約1/10	焼成極めて良好。 内外面に自然釉が付着している。
224	23.2	49.2	48.8	内　同心円タタキ　ヨコナデ 外　平行タタキ　カキメ ヨコナデ	内　灰色 外　灰黄色	右	約2/3	器表面に瘤状の隆起が認められる。 外面肩部に灰が多く付着している。
225	26.5	48.0	51.8	内　同心円タタキ　ヨコナデ 外　平行タタキ　カキメ ヨコナデ	内　青灰色 外　灰色	右	約1/2	口縁端部が著しく肥厚している。 外面全体に自然釉が付着している。

表－44　西山古墳群出土耳環計測表

遺構名	挿図番号	外径（cm）（上下）	外径（cm）（左右）	内径（cm）（上下）	内径（cm）（左右）	断面径（cm）（上下）	断面径（cm）（左右）	切れ目幅（mm）	重量（g）	備考
1号墳	1	3.14	3.42	1.53	1.73	0.95	0.88	0.9	31.21	銅地銀貼　2と対
	2	3.17	3.59	1.60	1.84	0.91	0.88	0.9	30.67	銅地銀貼　1と対
	3	3.05	3.25	1.52	1.71	0.78	0.88	0.8	27.07	鉄地銀貼　4と対
	4	3.06	3.68	1.38	1.61	0.89	0.85	1.5	28.77	鉄地銀貼　3と対
	5	2.89	3.18	1.42	1.68	0.78	0.75	1.5	20.68	銅地銀貼　6と対
	6	2.84	3.16	1.42	1.66	0.80	0.74	1.9	21.60	銅地銀貼　5と対
	7	2.87	3.16	1.45	1.60	0.85	0.85	2.7	24.01	銅地銀貼　8と対
	8	2.61	2.97	1.35	1.61	0.66	0.70	2.3	16.90	銅地銀貼　7と対
	9	2.38	2.59	1.38	1.52	0.53	0.52	1.6	9.62	金銅製　10と対
	10	2.32	2.61	1.36	1.55	0.59	0.47	1.9	9.20	金銅製　9と対
	11	3.09	3.38	1.51	1.75	0.84	0.81	1.8	31.40	銅地銀貼
	12	2.64	3.07	1.44	1.61	0.73	0.72	1.7	16.49	銅地銀貼

1号墳	13	2.20	2.83	1.20	1.68	0.50	0.58	2.2	8.94	金銅製
	14	2.40	2.69	1.27	1.48	0.67	0.58	2.5	8.03	金銅製？
	15	2.18	2.38	1.21	1.37	0.51	0.50	2.4	7.47	銅地銀貼
2号墳	16	3.04	3.42	1.42	1.77	0.89	0.84	2.3	27.44	銅地銀貼
	17	2.98	3.30	1.56	1.76	0.80	0.78	2.5	25.97	銅地銀貼？
	18	2.54	2.73	1.67	1.79	0.42	0.45	0.5	6.94	銅地銀貼
	19	2.48	2.74	1.57	1.86	0.40	0.44	0.6	6.18	銅地銀貼？
	20	2.41	2.61	1.59	1.78	0.40	0.41	0.2	4.04	銅地　金銀不明
	21	2.21	2.42	1.29	1.34	0.73	0.55	2.1	9.10	銅地銀貼
	22	1.52	1.76	0.81	0.95	0.41	0.38	2.2	2.79	銅地銀貼
	23	2.74	2.91	1.33	1.52	0.94	0.71	2.2	5.25	中空　銅地銀貼
3号墳	24	2.42	2.62	1.71	1.79	0.36	0.42	0.4	4.87	銅地銀貼　25と対
	25	2.47	2.51	1.79	1.80	0.34	0.39	0.8	3.96	銅地銀貼　24と対
4号墳	26	2.57	2.86	1.42	1.70	0.76	0.56	1.4	16.49	銅地銀貼　27と対
	27	2.51	2.81	1.40	1.55	0.77	0.65	2.1	14.96	銅地銀貼　26と対
5号墳	28	2.43	2.79	1.35	1.61	0.79	0.60	1.2	15.46	銅地銀貼　29と対
	29	2.34	2.77	1.30	1.50	0.73	0.61	1.1	14.05	銅地銀貼　28と対
	30	2.17	2.29	1.21	1.20	0.76	0.50	1.3	10.65	銅地銀貼　31と対
	31	2.14	2.19	1.23	1.28	0.69	0.51	0.8	10.88	銅地銀貼　30と対
	32	2.12	2.41	1.22	1.47	0.49	0.47	2.0	6.20	銅地銀貼

表－45　西山1号墳出土玉類計測表

挿図番号	種　類	長さ(㎜)	径(㎜)	孔　径（㎜）	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
1	切子玉	23.2	12.5	上3.5　下0.9	4.14	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
2	切子玉	22.5	12.8	上3.5　下1.0	4.34	水　晶	透明　表面はやや白色	片面穿孔　反対側若干の抉り
3	切子玉	19.5	14.5	上3.0　下1.0	4.97	水　晶	透明　表面は研磨により白色	片面穿孔　反対側若干の抉り
4	切子玉	19.3	12.9	上3.2　下1.3	3.94	水　晶	やや白色	片面穿孔　反対側若干の抉り
5	切子玉	20.0	11.6	上3.2　下1.1	3.70	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
6	棗　玉	—	9.5	—　下2.4	—	琥　珀	表面：黄褐色　割面：赤褐色	約半分が欠損
7	丸　玉	8.1	13.5	上3.0　下1.2	2.12	瑪　瑙	半透明淡褐色　一部褐色	片面穿孔　反対側若干の抉り
8	丸　玉	8.7	12.8	上3.0　下1.2	2.04	瑪　瑙	半透明　淡褐色	穿孔部分が欠損
9	小　玉	7.7	7.9	1.8	0.66	ガラス	群　青　色	片面穿孔
10	小　玉	6.5	9.1	3.7	0.61	ガラス	群　青　色	片面穿孔
11	小　玉	7.2	8.3	1.5	0.76	ガラス	群　青　色	片面穿孔
12	小　玉	6.8	8.3	1.8	0.73	ガラス	群　青　色	片面穿孔　上から下まで空気の気泡の穴
13	小　玉	6.1	9.0	1.6	0.63	ガラス	群　青　色	片面穿孔
14	小　玉	6.2	8.5	1.5	0.66	ガラス	群　青　色	片面穿孔
15	小　玉	6.0	8.6	1.6	0.60	ガラス	群　青　色	片面穿孔
16	小　玉	6.2	8.3	1.7	0.65	ガラス	群　青　色	片面穿孔
17	小　玉	5.8	8.6	1.2	0.60	ガラス	群　青　色	片面穿孔
18	小　玉	5.2	8.5	2.1	0.49	ガラス	群　青　色	片面穿孔
19	小　玉	5.5	7.7	1.6	0.50	ガラス	群　青　色	片面穿孔
20	小　玉	4.9	7.5	1.9	0.36	ガラス	群　青　色	片面穿孔
21	小　玉	4.8	7.0	1.6	0.30	ガラス	群　青　色	片面穿孔
22	小　玉	4.3	7.3	2.0	0.34	ガラス	群　青　色	片面穿孔
23	小　玉	3.9	7.4	1.6	0.34	ガラス	群　青　色	片面穿孔

表－46　西山2号墳出土玉類計測表

挿図番号	種　類	長さ(㎜)	径(㎜)	孔　径（㎜）	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
24	管　玉	31.3	11.2	上3.1　下0.9	5.90	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
25	管　玉	30.1	10.1	上3.5　下1.2	5.62	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
26	管　玉	28.1	10.7	上3.4　下1.2	5.83	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
27	管　玉	27.6	9.9	上3.0　下1.0	4.89	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
28	管　玉	26.7	9.7	上3.5　下0.9	4.25	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
29	管　玉	23.1	10.3	上3.5　下1.4	4.71	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
30	管　玉	22.0	8.6	上3.6　下1.1	2.58	碧　玉	深　緑　色	片面穿孔
31	切子玉	15.9	10.5	上3.8　下1.1	2.40	水　晶	透明　表面は研磨により白色	片面穿孔　反対側若干の抉り
32	切子玉	13.0	13.8	上4.2　下1.1	2.66	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
33	切子玉	11.6	11.1	上3.6　下1.5	1.72	水　晶	透　明	片面穿孔
34	小　玉	7.2	8.4	上1.9　下1.2	0.65	ガラス	群　青　色	
35	小　玉	5.9	5.9	上2.4　下1.4	0.29	ガラス	群　青　色	
36	小　玉	3.5	4.5	1.1	0.09	ガラス	群　青　色	
37	小　玉	2.5	3.9	1.0	0.05	ガラス	群　青　色	
38	臼　玉	4.0	6.2	2.1	0.18	蛇紋石	灰　白　色	
39	臼　玉	3.5	6.3	2.0	0.19	蛇紋石	灰　白　色	
40	臼　玉	3.2	5.6	1.9	0.13	蛇紋石	灰　白　色	
41	小　玉	3.4	4.0	1.2	0.04	ガラス	濁った黄緑色	
42	小　玉	2.6	4.4	1.2	0.07	ガラス	白く濁った黄緑色	

挿図番号	種　類	長さ(㎜)	径(㎜)	孔　径（㎜）	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
43	小　玉	3.0	4.0	1.2	0.06	ガラス	濁った黒っぽい黄緑色	
44	小　玉	3.3	3.6	1.2	0.04	ガラス	白く濁った黄緑色	
45	小　玉	2.8	4.0	1.1	0.05	ガラス	白く濁った黄緑色	
46	小　玉	2.7	3.9	1.0	0.04	ガラス	白く濁った黄緑色	
47	小　玉	3.0	3.6	1.0	0.05	ガラス	濁った黄緑色	
48	小　玉	2.9	3.6	1.2	0.05	ガラス	白く濁った黄緑色	
49	小　玉	3.1	3.4	1.1	0.05	ガラス	濁った黄緑色	
50	小　玉	2.3	4.1	1.2	0.03	ガラス	白く濁った黄緑色	
51	小　玉	2.3	4.1	1.1	0.04	ガラス	濁った黒っぽい黄緑色	
52	小　玉	2.7	3.7	1.4	0.04	ガラス	白く濁った黄緑色	
53	小　玉	2.9	3.5	1.0	0.04	ガラス	濁った黄緑色	
54	小　玉	2.3	4.0	1.5	0.03	ガラス	濁った黄緑色	
55	小　玉	2.8	3.5	1.1	0.04	ガラス	濁った黄緑色	
56	小　玉	2.4	3.8	1.3	0.03	ガラス	濁った黄緑色	
57	小　玉	2.7	3.5	1.0	0.04	ガラス	濁った黄緑色	
58	小　玉	2.9	3.3	1.2	0.04	ガラス	濁った黄緑色	
59	小　玉	2.8	3.3	0.9	0.05	ガラス	濁った黄緑色	
60	小　玉	2.7	3.2	0.8	0.03	ガラス	淡緑色を帯びた透明	
61	小　玉	2.2	3.6	1.0	0.05	ガラス	半透明の濁った緑色	
62	小　玉	2.2	3.6	1.0	0.02	ガラス	白く濁った黄緑色	
63	小　玉	2.0	3.6	1.2	0.01	ガラス	白く濁った黄緑色	
64	小　玉	2.3	3.3	1.0	0.03	ガラス	白く黄緑色	
65	小　玉	1.6	3.8	1.4	0.02	ガラス	白く濁った黄緑色	
66	小　玉	1.8	3.2	1.0	0.03	ガラス	濁った黄緑色	
67	小　玉	3.3	3.9	1.0	0.05	ガラス	透明な青色	
68	小　玉	3.0	3.9	1.3	0.05	ガラス	白く濁った水色	
69	小　玉	2.3	4.3	1.3	0.03	ガラス	白く濁った青色	
70	小　玉	3.4	3.2	0.8	0.02	ガラス	白く濁った水色	
71	小　玉	2.3	4.0	1.0	0.04	ガラス	白く濁った水色	
72	小　玉	2.5	3.8	1.0	0.03	ガラス	白く濁った青色	
73	小　玉	2.5	3.8	1.0	0.04	ガラス	透明な青色	
74	小　玉	3.1	3.2	0.8	0.04	ガラス	一部透明で少し濃い藍色	
75	小　玉	2.4	3.8	1.2	0.04	ガラス	白く濁った水色	
76	小　玉	2.4	3.8	1.4	0.03	ガラス	透明な青色	
77	小　玉	2.6	3.6	0.9	0.04	ガラス	白く濁った青色	
78	小　玉	2.7	3.5	0.8	0.03	ガラス	白く濁った青色	
79	小　玉	2.4	3.7	1.1	0.05	ガラス	白く濁った青色	
80	小　玉	1.9	3.9	1.3	0.03	ガラス	青の入った緑色	
81	小　玉	2.3	3.5	1.1	0.02	ガラス	白く濁った青色	
82	小　玉	2.3	3.5	1.2	0.03	ガラス	少し濁った青色	
83	小　玉	2.9	2.9	0.9	0.02	ガラス	濃い紺色	
84	小　玉	1.9	3.8	1.3	0.03	ガラス	淡青色を帯びた青色	
85	小　玉	2.1	3.6	1.1	0.02	ガラス	濁った緑色	
86	小　玉	2.4	3.3	1.0	0.04	ガラス	白く濁った青色	
87	小　玉	2.5	3.2	1.1	0.03	ガラス	透明な濃紺色	
88	小　玉	2.6	3.0	0.8	0.02	ガラス	透明な青色	
89	小　玉	2.0	3.5	1.1	0.03	ガラス	透明な青色	
90	小　玉	2.4	3.1	1.0	0.02	ガラス	白く濁った青色	
91	小　玉	2.5	3.0	0.8	0.03	ガラス	透明な藍色	
92	小　玉	2.0	3.4	1.1	0.02	ガラス	透明な青色	
93	小　玉	2.0	3.4	1.0	0.07	ガラス	透明な青色	
94	小　玉	1.6	3.7	1.1	0.01	ガラス	透明な水色	
95	小　玉	1.8	3.3	1.0	0.03	ガラス	透明な青色	
96	小　玉	1.9	3.4	1.3	0.03	ガラス	半透明な濃い青色	
97	小　玉	2.2	3.1	0.9	0.01	ガラス	半透明な薄い青色	
98	小　玉	1.7	3.5	1.0	0.03	ガラス	半透明な薄い青色	
99	小　玉	1.7	3.5	1.1	0.02	ガラス	透明な青色	
100	小　玉	1.8	3.4	1.0	0.02	ガラス	白く濁った青色	
101	小　玉	2.1	3.1	1.1	0.02	ガラス	半透明な薄い青緑色	
102	小　玉	2.2	2.2	1.0	0.03	ガラス	淡青を帯びた青色	
103	小　玉	1.8	3.3	0.9	0.02	ガラス	透明な青色	
104	小　玉	2.1	3.0	0.8	0.05	ガラス	透明で薄い藍色	
105	小　玉	1.5	3.4	1.3	0.01	ガラス	青が入った緑色	
106	小　玉	2.0	2.9	0.8	0.02	ガラス	濁った青色	
107	小　玉	1.9	2.8	1.0	0.02	ガラス	白く濁った水色	
108	小　玉	2.0	2.7	0.8	0.02	ガラス	透明な藍色	
109	小　玉	1.9	2.7	0.8	0.01	ガラス	透明な青色	
110	小　玉	2.3	2.3	0.8	0.02	ガラス	濁った青の入った緑色	

挿図番号	種　類	長さ(㎜)	径(㎜)	孔　径（㎜）	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
111	小　玉	1.5	3.2	1.0	0.01	ガラス	透明な青色	
112	小　玉	2.2	2.2	1.0	0.03	ガラス	淡青色を帯びた透明	
113	小　玉	1.6	2.7	0.8	0.02	ガラス	白く濁った水色	
114	小　玉	1.9	3.2	0.9	0.03	ガラス	透明な青色	

表—47　西山3号墳出土玉類計測表

挿図番号	種　類	長さ(㎜)	径(㎜)	孔　径（㎜）	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
115	管　玉	29.4	6.7	上3.5　下0.9	2.12	碧　玉	濃緑色よりやや薄い色	片面穿孔
116	管　玉	28.3	9.7	上3.1　下1.2	4.93	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔　反対側若干の抉り
117	管　玉	27.7	7.9	上3.7　下1.0	3.99	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
118	管　玉	27.3	9.3	上2.2　下0.5	4.28	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
119	管　玉	27.3	8.4	上2.7　下0.6	3.66	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
120	管　玉	26.6	10.0	上3.6　下1.3	4.79	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
121	管　玉	26.5	7.2	上3.0　下0.9	3.31	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
122	管　玉	26.4	9.9	上2.8　下1.1	4.04	緑色凝灰岩	明　緑　灰　色	片面穿孔
123	管　玉	24.6	7.4	上2.1　下0.7	2.40	碧　玉	深　緑　色	片面穿孔
124	管　玉	24.5	7.4	上2.9　下0.7	2.44	碧　玉	濃　深　緑　色	片面穿孔
125	管　玉	24.2	7.0	上2.1　下0.8	2.23	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
126	管　玉	23.6	7.4	上2.5　下0.4	2.45	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
127	管　玉	23.1	7.9	上1.9　下1.2	2.73	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
128	管　玉	23.0	7.3	上3.3　下2.1	2.26	碧　玉	深　緑　色	片面穿孔
129	管　玉	22.7	7.0	上3.4　下1.2	1.84	碧　玉	暗　緑　色	片面穿孔
130	管　玉	22.4	9.9	上2.7　下1.1	3.76	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
131	管　玉	22.4	7.6	上2.3　下0.8	2.47	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
132	管　玉	22.4	7.3	上3.0　下1.2	2.18	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
133	管　玉	24.2	7.0	上2.1　下0.8	2.23	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
134	管　玉	21.3	7.2	上2.4　下0.6	2.03	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔　反対側若干の抉り
135	管　玉	21.0	7.5	上2.5　下0.8	2.21	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
136	管　玉	20.0	7.4	上3.2　下0.9	1.89	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
137	管　玉	19.0	6.6	上2.2　下0.7	1.46	碧　玉	深　緑　色	片面穿孔
138	管　玉	15.6	6.0	上2.1　下0.7	1.02	碧　玉	濃　緑　色	片面穿孔
139	切子玉	27.1	18.3	上5.1　下0.7	10.14	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
140	切子玉	27.0	16.0	上4.6　下0.7	8.75	水　晶	透明　研磨による白い濁り	片面穿孔　反対側抉り
141	切子玉	26.7	16.0	上3.5　下1.3	7.64	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
142	切子玉	24.8	17.0	上3.3　下1.7	8.29	水　晶	透明　穴の内面に赤色顔料あり	片面穿孔　反対側抉り
143	切子玉	24.3	14.5	上3.4　下1.6	6.23	水　晶	内外面とも研磨による白い濁り	片面穿孔
144	切子玉	23.4	15.4	上3.4　下1.4	6.35	水　晶	透明　表面は研磨による白い濁り	片面穿孔　反対側若干の抉り
145	切子玉	22.5	15.5	上4.1　下1.3	6.44	水　晶	表面は研磨による白い濁り	片面穿孔　反対側若干の抉り
146	切子玉	21.4	14.3	上3.3　下1.1	5.34	水　晶	透明だが研磨による白い濁り	片面穿孔
147	切子玉	18.6	14.6	上3.9　下1.2	4.81	水　晶	透明だが研磨による白い濁り	片面穿孔　反対側若干の抉り
148	切子玉	18.2	11.3	上3.7　下1.5	2.75	水　晶	透明だが研磨による白い濁り	片面穿孔
149	切子玉	18.0	12.1	上3.4　下1.1	2.93	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
150	切子玉	15.7	10.9	上2.9　下1.0	2.34	水　晶	透明　穴の内面に赤色顔料あり	片面穿孔　反対側若干の抉り
151	切子玉	15.2	13.5	上4.0　下0.9	3.31	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
152	切子玉	14.5	9.3	上3.2　下0.8	4.34	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
153	切子玉	14.1	10.5	上3.2　下0.9	1.81	水　晶	透明だが少し濁り	片面穿孔
154	切子玉	13.7	11.0	上3.1　下1.3	2.03	水　晶	透明だが研磨による白い濁り	片面穿孔　反対側若干の抉り
155	切子玉	12.9	9.1	上3.4　下0.6	1.35	水　晶	透明だが研磨による白い濁り	片面穿孔　反対側抉り
156	切子玉	12.1	8.3	上2.4　下0.8	0.97	水　晶	透　明	片面穿孔
157	切子玉	12.0	10.0	上2.9　下1.3	1.46	水　晶	透　明	片面穿孔
158	切子玉	11.9	7.9	上3.0　下1.9	1.03	水　晶	透明だが外面に白い濁り	片面穿孔
159	棗　玉	16.3	12.1	0.25（楕円）	3.20	琥　珀	にぶい黄橙色	
160	平　玉	10.0	16.1	上2.9　下1.3	4.62	碧　玉	濃　緑　色	片側に抉り
161	勾　玉	長17.1　幅 7.7		上2.5　下0.4	1.65	翡　翠	緑　灰　色	片面穿孔
162	勾　玉	長11.1　幅 4.4		上1.8　下0.6	0.38	翡　翠	青灰色と濃青灰色が混じる	頭端部を欠損
163	小　玉	8.1	10.8	上1.7　下1.3	1.45	水　晶	透明だが白く濁っている	
164	小　玉	8.1	10.5	上2.4　下1.2	1.00	碧　玉	濃　緑　色	
165	小　玉	6.0	8.9	1.8	0.66	ガラス	濃　紺　色	
166	小　玉	4.7	8.7	3.0（楕円）	0.43	ガラス	濃　紺　色	
167	小　玉	6.5	8.2	1.7	0.67	ガラス	濃　紺　色	
168	小　玉	6.0	7.9	1.3	0.53	ガラス	濃　紺　色	
169	小　玉	5.4	7.9	1.5	0.47	ガラス	群　緑　色	
170	小　玉	5.1	7.6	1.6	0.43	ガラス	濃　紺　色	
171	小　玉	6.1	7.4	1.4	0.45	ガラス	濃　紺　色	
172	小　玉	4.9	7.4	1.4	0.37	ガラス	群　青　色	

挿図番号	種　類	長さ(㎜)	径(㎜)	孔　径(㎜)	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
173	小　玉	5.7	7.3	1.3	0.40	ガラス	濃 紺 色	
174	小　玉	4.6	7.3	1.2	0.35	ガラス	群 青 色	
175	臼　玉	4.9	8.0	2.4	0.53	蛇紋石	灰 褐 色	
176	練　玉	8.5	10.6	1.6	0.89	土	黒　　色	
177	練　玉	4.6	9.8	2.8	0.44	土	外：黒色　内：灰褐色	上下部分を欠損
178	練　玉	9.8	8.9	1.8	0.51	土	灰 褐 色	
179	練　玉	8.5	8.7	1.5	0.65	土	灰 褐 色	
180	練　玉	8.7	8.5	1.5	0.52	土	灰 褐 色	
181	練　玉	8.0	8.6	1.6	0.55	土	灰 褐 色	
182	練　玉	7.5	8.8	1.5	0.47	土	黒　　色	
183	練　玉	8.0	8.3	1.5	0.52	土	黒　　色	
184	練　玉	7.7	8.4	1.9	0.40	土	黒 灰 色	
185	練　玉	7.5	8.5	1.5	0.47	土	黒 灰 色	
186	練　玉	7.9	8.0	1.4	0.56	土	黒 褐 色	
187	練　玉	7.9	8.0	1.4	0.51	土	黒 褐 色	
188	練　玉	7.1	8.6	1.2	0.40	土	黒 褐 色	一部分を欠損
189	練　玉	6.9	8.7	1.5	0.48	土	黒　　色	
190	練　玉	6.8	7.8	1.8	0.40	土	黒 褐 色	
191	練　玉	7.0	8.5	1.4	0.52	土	黒 褐 色	
192	練　玉	6.8	8.6	1.4	0.46	土	灰 褐 色	
193	練　玉	7.3	8.1	1.5	0.47	土	黒　　色	
194	練　玉	6.8	8.5	1.3	0.37	土	黒　　色	
195	練　玉	7.0	8.3	1.3	0.47	土	灰 褐 色	
196	練　玉	7.3	8.0	1.3	0.49	土	灰 褐 色	
197	練　玉	6.9	8.3	1.3	0.42	土	黒　　色	
198	練　玉	7.2	8.0	1.7	0.38	土	黒　　色	
199	練　玉	7.3	7.9	1.5	0.46	土	灰 褐 色	
200	練　玉	7.4	7.8	1.3	0.48	土	黒 褐 色	一部分を欠損
201	練　玉	7.2	7.9	1.4	0.30	土	灰 褐 色	一部分を欠損
202	練　玉	6.6	8.4	1.3	0.47	土	灰 褐 色	一部分を欠損
203	練　玉	7.0	8.0	1.7	0.43	土	黒　　色	
204	練　玉	7.0	8.0	1.5	0.46	土	黒　　色	
205	練　玉	7.1	7.9	1.7	0.45	土	黄 灰 色	
206	練　玉	7.4	7.6	1.3	0.49	土	黒 褐 色	
207	練　玉	6.8	8.3	1.1	0.47	土	灰 褐 色	
208	練　玉	6.8	8.1	1.4	0.40	土	黒　　色	
209	練　玉	7.0	7.9	1.5	0.42	土	黒　　色	
210	練　玉	7.1	7.8	1.4	0.32	土	黒 褐 色	一部分を欠損
211	練　玉	7.2	7.7	1.2	0.36	土	黒　　色	
212	練　玉	6.7	8.1	1.4	0.43	土	黒　　色	一部分を欠損
213	練　玉	6.8	8.0	1.5	0.35	土	黒 褐 色	
214	練　玉	6.8	8.0	1.4	0.41	土	黒　　色	
215	練　玉	6.9	7.9	1.6	0.45	土	黒　　色	
216	練　玉	7.0	7.8	1.6	0.38	土	黒　　色	
217	練　玉	7.0	7.8	2.1	0.45	土	灰 褐 色	
218	練　玉	6.5	8.2	1.5	0.46	土	灰 褐 色	
219	練　玉	6.6	8.1	1.4	0.46	土	灰 褐 色	
220	練　玉	6.7	8.0	1.2	0.38	土	黒　　色	
221	練　玉	7.8	6.9	1.6	0.48	土	黒　　色	
222	練　玉	6.6	8.0	1.6	0.40	土	黒　　色	一部分を欠損
223	練　玉	6.8	7.8	1.4	0.41	土	黄 褐 色	一部分を欠損
224	練　玉	7.2	7.4	1.5	0.38	土	黒 褐 色	
225	練　玉	6.0	8.5	1.6	0.36	土	黒　　色	
226	練　玉	6.7	7.8	1.4	0.44	土	灰 褐 色	
227	練　玉	6.7	7.8	1.4	0.34	土	黒 褐 色	
228	練　玉	6.9	7.6	1.3	0.39	土	黒 褐 色	一部分を欠損
229	練　玉	7.0	7.5	1.9	0.39	土	黒 褐 色	
230	練　玉	7.3	7.2	1.5	0.33	土	灰 褐 色	
231	練　玉	6.9	8.0	1.3	0.36	土	黒 褐 色	
232	練　玉	6.5	7.9	1.2	0.36	土	黒 褐 色	
233	練　玉	6.6	7.8	1.5	0.37	土	黒 褐 色	
234	練　玉	6.9	7.5	1.5	0.47	土	黒　　色	
235	練　玉	6.4	7.9	1.2	0.34	土	黒　　色	
236	練　玉	6.5	7.8	1.7	0.37	土	灰 褐 色	
237	練　玉	6.6	7.7	1.5	0.36	土	灰 褐 色	
238	練　玉	6.9	7.5	1.4	0.37	土	黒　　色	
239	練　玉	7.7	6.7	1.7	0.45	土	黒　　色	
240	練　玉	5.7	8.5	1.5	0.34	土	黒 褐 色	

挿図番号	種　類	長さ(㎜)	径(㎜)	孔　径（㎜）	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
241	練　玉	6.2	8.0	1.6	0.38	土	灰　褐　色	
242	練　玉	6.4	7.8	1.3	0.33	土	黒　　色	
243	練　玉	6.0	8.1	1.7	0.41	土	黒　　色	
244	練　玉	6.3	7.8	1.6	0.40	土	黒　褐　色	
245	練　玉	6.4	7.7	1.3	0.38	土	黒　褐　色	
246	練　玉	6.6	7.5	1.3	0.32	土	黒　褐　色	
247	練　玉	6.6	7.5	1.4	0.36	土	黒　　色	
248	練　玉	6.7	7.4	1.5	0.34	土	黒　褐　色	
249	練　玉	6.8	7.3	1.3	0.46	土	黒　褐　色	
250	練　玉	6.4	7.5	1.6	0.30	土	黒　褐　色	
251	練　玉	6.4	7.5	1.6	0.34	土	黒　　色	
252	練　玉	6.5	7.4	1.2	0.42	土	灰　褐　色	
253	練　玉	6.7	7.2	1.4	0.47	土	黒　褐　色	
254	練　玉	6.3	7.5	1.4	0.30	土	黒　褐　色	一部分を欠損
255	練　玉	6.4	7.4	1.3	0.33	土	灰　褐　色	一部分を欠損
256	練　玉	6.0	7.7	1.5	0.38	土	灰　褐　色	
257	練　玉	6.1	7.5	1.5	0.32	土	黒　褐　色	
258	練　玉	6.2	7.4	1.1	0.30	土	黒　褐　色	
259	練　玉	6.4	7.2	1.4	0.31	土	黒　褐　色	
260	練　玉	6.8	6.7	1.3	0.31	土	黒　　色	
261	練　玉	6.4	7.0	1.8	0.40	土	黒　　色	
262	練　玉	6.1	7.2	1.4	0.34	土	灰　褐　色	
263	練　玉	6.3	7.0	1.2	0.29	土	黒　　色	
264	練　玉	6.3	7.0	0.9	0.23	土	黒　　色	
265	練　玉	5.4	7.8	1.3	0.32	土	黒　褐　色	一部分を欠損
266	練　玉	5.8	7.4	1.1	0.29	土	灰　褐　色	
267	練　玉	5.0	8.1	1.4	0.19	土	灰　褐　色	
268	練　玉	5.6	7.5	1.4	0.30	土	灰　褐　色	
269	練　玉	5.7	7.4	1.3	0.27	土	黒　　色	
270	練　玉	5.8	7.3	1.2	0.31	土	灰　褐　色	
271	練　玉	6.1	7.0	1.5	0.27	土	黒　　色	
272	練　玉	6.2	6.9	1.4	0.48	土	黒　褐　色	
273	練　玉	6.1	6.9	1.4	0.31	土	灰　褐　色	
274	練　玉	6.2	6.8	1.4	0.39	土	灰　褐　色	
275	練　玉	5.2	7.7	0.8	0.40	土	灰　褐　色	
276	練　玉	5.6	7.3	1.2	0.28	土	黒　褐　色	
277	練　玉	5.8	7.1	1.5	0.23	土	黒　褐　色	
278	練　玉	5.9	7.0	1.2	0.32	土	黒　褐　色	
279	練　玉	6.0	6.9	1.3	0.27	土	黒　　色	
280	練　玉	6.2	6.7	1.3	0.38	土	黒　　色	
281	練　玉	6.3	6.3	1.6	0.25	土	黒　褐　色	
282	練　玉	6.3	7.3	1.3	0.19	土	黒　褐　色	
283	練　玉	5.8	7.0	1.2	0.26	土	黒　褐　色	
284	練　玉	5.8	7.0	1.2	0.26	土	灰　褐　色	
285	練　玉	6.1	6.7	1.4	0.22	土	灰　褐　色	
286	練　玉	5.7	7.0	1.4	0.28	土	灰　褐　色	
287	練　玉	6.1	6.6	1.6	0.23	土	黒　褐　色	
288	練　玉	6.2	6.5	1.4	0.23	土	黒　褐　色	
289	練　玉	6.3	6.4	1.4	0.26	土	黒　褐　色	
290	練　玉	6.1	6.5	1.5	0.26	土	灰　褐　色	
291	練　玉	6.3	6.3	1.3	0.28	土	灰　褐　色	
292	練　玉	5.3	7.2	1.4	0.26	土	黒　褐　色	
293	練　玉	5.7	6.8	1.5	0.25	土	黒　褐　色	
294	練　玉	5.9	6.6	1.5	0.27	土	黒　　色	
295	練　玉	5.4	7.0	1.3	0.20	土	黒　褐　色	
296	練　玉	5.6	6.8	1.2	0.23	土	灰　褐　色	
297	練　玉	5.4	6.9	1.3	0.17	土	灰　褐　色	
298	練　玉	5.7	6.5	1.4	0.20	土	灰　褐　色	
299	練　玉	5.3	6.8	1.3	0.19	土	灰　褐　色	
300	練　玉	5.4	6.7	1.3	0.21	土	灰　褐　色	
301	練　玉	5.5	6.6	1.4	0.27	土	灰　褐　色	
302	練　玉	5.5	6.6	1.3	0.23	土	灰　褐　色	
303	練　玉	5.5	6.6	1.3	0.12	土	黒　　色	
304	練　玉	5.6	6.5	1.5	0.11	土	黒　　色	
305	練　玉	5.8	6.3	1.6	0.18	土	黒　褐　色	一部分を欠損
306	練　玉	5.4	6.6	1.2	0.24	土	黒　褐　色	
307	練　玉	5.4	6.6	1.2	0.24	土	灰　褐　色	
308	練　玉	5.9	6.1	1.6	0.21	土	黄　灰　色	

挿図番号	種　類	長さ(㎜)	径(㎜)	孔　径 (㎜)	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
309	練　玉	5.1	6.8	1.4	0.19	土	灰　褐　色	
310	練　玉	5.5	6.4	1.3	0.23	土	灰　褐　色	
311	練　玉	5.3	6.5	1.4	0.17	土	灰　褐　色	
312	練　玉	5.4	6.4	1.5	0.20	土	灰　褐　色	
313	練　玉	5.4	6.3	1.2	0.22	土	黒　褐　色	
314	練　玉	5.8	6.0	1.4	0.19	土	黒　褐　色	一部分を欠損
315	練　玉	6.3	5.3	0.7	0.20	土	黒　　色	
316	練　玉	4.9	6.8	1.3	0.19	土	灰　褐　色	
317	練　玉	5.2	6.5	0.7	0.19	土	黒　　色	
318	練　玉	5.3	6.4	1.2	0.19	土	灰　褐　色	一部分を欠損
319	練　玉	5.3	6.4	1.2	0.19	土	灰　褐　色	
320	練　玉	5.4	6.3	1.2	0.20	土	灰　褐　色	
321	練　玉	5.4	6.3	1.6	0.19	土	黒　褐　色	
322	練　玉	5.4	6.3	1.4	0.19	土	灰　褐　色	
323	練　玉	5.5	6.2	1.0	0.22	土	灰　褐　色	
324	練　玉	4.9	6.7	1.4	0.19	土	灰　褐　色	
325	練　玉	5.2	6.4	1.4	0.21	土	黒　　色	
326	練　玉	5.2	6.4	1.6	0.18	土	黒　　色	
327	練　玉	5.4	6.2	1.3	0.20	土	黒　褐　色	
328	練　玉	5.6	—	1.1	0.17	土	黒　　色	一部分を欠損
329	練　玉	4.6	6.9	1.3	0.19	土	黒　褐　色	
330	練　玉	5.1	6.4	1.4	0.20	土	灰　褐　色	
331	練　玉	5.1	6.4	1.6	0.17	土	灰　褐　色	
332	練　玉	5.3	6.2	1.2	0.13	土	黒　　色	
333	練　玉	5.6	5.9	1.3	0.19	土	黒　褐　色	
334	練　玉	5.0	6.4	1.7	0.20	土	黒　褐　色	
335	練　玉	5.0	6.4	1.4	0.20	土	黒　褐　色	
336	練　玉	5.4	6.0	1.0	0.15	土	黒　褐　色	
337	練　玉	5.0	6.4	1.2	0.17	土	黄　灰　色	
338	練　玉	5.0	6.4	1.4	0.19	土	灰　褐　色	
339	練　玉	5.0	6.4	1.6	0.18	土	灰　褐　色	
340	練　玉	5.0	6.3	1.5	0.08	土	灰　褐　色	一部分を欠損
341	練　玉	5.3	6.0	1.5	0.18	土	灰　褐　色	
342	練　玉	—	6.0	1.4	0.16	土	黒　　色	一部分を欠損
343	練　玉	5.0	6.1	1.1	0.17	土	黒　　色	
344	練　玉	4.7	6.3	1.4	0.16	土	灰　褐　色	
345	練　玉	4.9	6.1	1.2	0.12	土	灰　褐　色	
346	練　玉	5.0	6.0	0.9	0.19	土	灰　褐　色	
347	練　玉	—	5.9	1.2	0.18	土	黒　　色	一部分を欠損
348	練　玉	5.0	5.9	1.1	0.15	土	灰　褐　色	
349	練　玉	5.0	5.9	1.0	0.13	土	黒　　色	
350	練　玉	5.1	5.8	1.2	0.17	土	黒　褐　色	
351	練　玉	4.8	6.0	1.7	0.17	土	黒　褐　色	
352	練　玉	5.1	5.7	1.4	0.19	土	灰　褐　色	
353	練　玉	4.2	6.5	1.5	0.15	土	灰　褐　色	
354	練　玉	4.6	6.1	1.7	0.17	土	灰　褐　色	
355	練　玉	5.0	5.7	1.1	0.14	土	黒　　色	
356	練　玉	5.1	5.6	1.5	0.17	土	灰　褐　色	
357	練　玉	4.4	6.2	1.4	0.13	土	灰　褐　色	
358	練　玉	4.7	5.9	1.1	0.12	土	灰　褐　色	
359	練　玉	4.9	5.7	1.1	0.12	土	黒　　色	
360	練　玉	4.4	6.0	1.4	0.16	土	黒　　色	
361	練　玉	4.7	5.7	1.1	0.14	土	灰　褐　色	
362	練　玉	4.7	5.7	1.3	0.17	土	灰　褐　色	
363	練　玉	5.0	5.4	1.3	0.15	土	灰　褐　色	
364	練　玉	5.0	5.7	1.2	0.16	土	灰　褐　色	
365	練　玉	4.6	5.6	1.4	0.15	土	黒　　色	
366	練　玉	—	5.9	1.5	0.09	土	黄　灰　色	一部分を欠損
367	練　玉	4.3	5.4	1.2	0.13	土	灰　褐　色	
368	小　玉	4.7	5.6	2.0	0.22	ガラス	透明な紺色	
369	小　玉	3.8	5.7	1.3	0.16	ガラス	透明な藍色	
370	小　玉	3.8	5.3	1.3	0.17	ガラス	群　青　色	
371	小　玉	2.4	4.7	1.6	0.05	ガラス	濃　紺　色	
372	小　玉	2.5	4.5	1.5	0.06	ガラス	濃　紺　色	
373	小　玉	3.0	8.0	1.4	0.06	ガラス	深みのある紺色	
374	小　玉	3.2	3.4	1.0	0.02	ガラス	濃　紺　色	
375	小　玉	2.5	3.9	1.1	0.04	ガラス	濃　紺　色	
376	小　玉	2.3	4.0	1.2	0.06	ガラス	濃　紺　色	

挿図番号	種　類	長さ(㎜)	径(㎜)	孔　径（㎜）	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
377	小　玉	2.4	3.5	1.0	0.04	ガラス	濃　紺　色	
378	小　玉	2.3	3.5	1.0	0.03	ガラス	濃　紺　色	
379	小　玉	1.7	4.0	1.1	0.03	ガラス	濃　紺　色	
380	小　玉	2.4	3.3	1.0	0.03	ガラス	濃　紺　色	
381	小　玉	2.3	2.9	0.8	0.04	ガラス	透明な藍色	
382	小　玉	2.0	2.9	0.9	0.02	ガラス	透明で深い青色	
383	小　玉	1.8	3.0	1.0	0.02	ガラス	透明で濃い藍色	
384	小　玉	2.0	2.8	1.1	0.02	ガラス	透明で濃青色	
385	小　玉	3.6	5.0	1.6	0.12	ガラス	赤　褐　色	
386	小　玉	3.9	4.2	1.4	0.09	ガラス	赤　褐　色	
387	小　玉	4.7	3.3	1.4	0.08	ガラス	赤　褐　色	
388	小　玉	2.7	5.2	1.8	0.09	ガラス	赤　褐　色	
389	小　玉	2.9	4.9	1.7	0.09	ガラス	赤　褐　色	
390	小　玉	3.3	4.4	1.9	0.09	ガラス	赤　褐　色	
391	小　玉	3.5	3.4	1.0	0.06	ガラス	半透明な黄色	
392	小　玉	2.1	3.8	1.3	0.04	ガラス	黄　　色	
393	小　玉	3.4	4.4	1.3	0.06	ガラス	透明で濁った緑色	
394	小　玉	4.0	3.6	1.0	0.06	ガラス	濁った深緑色	
395	小　玉	2.7	4.7	0.6	0.08	ガラス	濁った深緑色	
396	小　玉	2.6	4.6	0.9	0.05	ガラス	透明で濁った緑色	
397	小　玉	2.8	4.4	0.9	0.05	ガラス	少し濁った緑色	
398	小　玉	2.5	4.6	1.2	0.05	ガラス	濁った深緑色	
399	小　玉	2.1	4.9	1.6	0.06	ガラス	濁った緑色	
400	小　玉	2.7	4.3	1.4	0.06	ガラス	透明で深い緑色	
401	小　玉	0.3	4.0	1.1	0.06	ガラス	青　緑　色	
402	小　玉	3.1	3.9	1.1	0.06	ガラス	濁った深緑色	
403	小　玉	2.2	4.6	1.5	0.07	ガラス	透明で深い緑色	
404	小　玉	2.7	4.1	1.2	0.06	ガラス	濁った緑色	
405	小　玉	2.9	3.9	1.0	0.05	ガラス	白く濁った黄緑色	
406	小　玉	3.0	3.8	0.9	0.02	ガラス	半透明で濁った緑色	
407	小　玉	2.7	3.9	1.2	0.05	ガラス	透明で白く濁った青緑色	
408	小　玉	2.3	4.2	1.4	0.05	ガラス	濁った深緑色	
409	小　玉	2.5	4.0	1.2	0.05	ガラス	濁った深緑色	
410	小　玉	3.0	3.5	1.0	0.02	ガラス	濁った緑色	
411	小　玉	3.0	3.3	1.3	0.04	ガラス	白く濁った青色	
412	小　玉	2.4	3.8	1.0	0.04	ガラス	黄緑がかった青色	
413	小　玉	2.5	3.7	1.2	0.04	ガラス	少し濁った緑色	
414	小　玉	2.5	3.7	1.0	0.05	ガラス	明るい深緑色	
415	小　玉	2.9	3.3	1.0	0.04	ガラス	少し濁った緑色	
416	小　玉	2.1	3.9	1.2	0.05	ガラス	半透明で少し濁った緑色	
417	小　玉	2.6	3.3	1.1	0.03	ガラス	濁った緑色	
418	小　玉	2.8	3.1	1.0	0.03	ガラス	透明で濁った深い緑色	
419	小　玉	2.2	3.5	1.0	0.03	ガラス	少し濁った緑色	
420	小　玉	2.6	3.1	1.0	0.02	ガラス	透明で少し濁った緑色	
421	小　玉	2.0	3.6	1.0	0.02	ガラス	白く濁った緑色	
422	小　玉	2.3	3.2	1.1	0.03	ガラス	少し濁った緑色	
423	小　玉	1.8	3.6	1.0	0.01	ガラス	透明で青が入った緑色	
424	小　玉	1.9	3.5	0.9	0.03	ガラス	透明な緑色	
425	小　玉	2.2	3.0	0.9	0.03	ガラス	透明で深い緑色	
426	小　玉	2.5	2.7	0.8	0.02	ガラス	少し白く濁った黄緑色	
427	小　玉	1.7	3.4	1.4	0.02	ガラス	透明な緑色	
428	小　玉	1.6	3.4	1.1	0.02	ガラス	透明な緑色	
429	小　玉	1.9	3.1	1.0	0.02	ガラス	透明な緑色	
430	小　玉	1.8	3.1	0.9	0.02	ガラス	透明で深い深緑色	
431	小　玉	2.0	2.9	0.7	0.01	ガラス	透明で少し濁った緑色	
432	小　玉	2.2	2.7	0.8	0.02	ガラス	透明で濁った緑色	
433	小　玉	1.6	3.2	1.0	0.02	ガラス	透明で深い深緑色	
434	小　玉	1.7	3.1	1.2	0.02	ガラス	透明な緑色	
435	小　玉	1.8	3.0	1.0	0.02	ガラス	透明で青の入った緑色	
436	小　玉	1.5	3.2	0.9	0.02	ガラス	水色を帯びた透明	
437	小　玉	1.6	3.1	0.9	0.01	ガラス	透明で深い深緑色	
438	小　玉	1.8	2.9	1.0	0.02	ガラス	透明で青の入った緑色	
439	小　玉	2.0	2.7	0.8	0.01	ガラス	少し白く濁った黄緑色	
440	小　玉	2.4	2.3	0.9	0.03	ガラス	透明な緑色	
441	小　玉	1.4	3.2	1.3	0.02	ガラス	透明な緑色	
442	小　玉	1.5	3.1	0.8	0.02	ガラス	透明な緑色	
443	小　玉	1.6	3.0	1.0	0.02	ガラス	透明で少し深い緑色	
444	小　玉	1.6	3.0	1.1	0.01	ガラス	透明で青色が入った緑色	

挿図番号	種　類	長さ(㎜)	径(㎜)	孔　径(㎜)	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
445	小　玉	1.8	3.7	1.2	0.01	ガラス	透明な緑色	
446	小　玉	1.5	3.0	0.5	0.01	ガラス	半透明で白く濁った緑色	
447	小　玉	1.5	3.0	1.1	0.02	ガラス	透明な青色が入った緑色	
448	小　玉	1.5	3.0	1.0	0.01	ガラス	透明な緑色	
449	小　玉	1.5	3.0	1.1	0.01	ガラス	透明で緑色	
450	小　玉	1.6	2.9	0.8	0.02	ガラス	透明で深い深緑色	
451	小　玉	1.8	2.7	0.7	0.01	ガラス	少し白く濁った緑色	
452	小　玉	1.8	2.7	0.9	0.02	ガラス	透明で深い深緑色	
453	小　玉	1.4	3.0	1.0	0.02	ガラス	透明できれいな緑色	
454	小　玉	1.6	2.8	0.8	0.02	ガラス	透明で青色が入った緑色	
455	小　玉	1.6	2.8	0.9	0.01	ガラス	透明な緑色	
456	小　玉	1.4	2.9	1.0	0.01	ガラス	透明で青が入った緑色	
457	小　玉	1.7	2.5	0.7	0.01	ガラス	透明で青色が入った緑色	
458	小　玉	1.5	2.7	0.7	0.01	ガラス	透明な緑色	
459	小　玉	1.9	2.2	0.9	0.02	ガラス	透明で濁った緑色	
460	小　玉	1.0	2.8	1.0	0.01	ガラス	透明で青の入った緑色	
461	小　玉	1.1	2.7	0.9	0.01	ガラス	透明な緑色	
462	小　玉	1.1	2.7	0.8	0.01	ガラス	透明な緑色	
463	小　玉	1.1	1.0	0.5	0.02	ガラス	少し濁った黄緑色	
464	小　玉	3.6	6.3	1.5	0.19	ガラス	透明で白く濁った藍色	
465	小　玉	4.4	5.5	2.1	0.19	ガラス	濃　紺　色	
466	小　玉	3.3	6.0	1.7	0.13	ガラス	透明で薄い藍色	
467	小　玉	3.6	4.5	1.2	0.08	ガラス	透明で明るい青色	
468	小　玉	3.0	5.0	1.3	0.07	ガラス	透明で青く澄んだ色	
469	小　玉	3.0	5.0	1.7	0.10	ガラス	透明で紺色が入った青色	
470	小　玉	3.2	4.5	1.2	0.06	ガラス	透明だが白く濁った水色	
471	小　玉	3.3	4.4	1.0	0.07	ガラス	透明な藍色	
472	小　玉	2.7	4.9	1.4	0.05	ガラス	透明な青色	
473	小　玉	2.7	4.8	1.4	0.07	ガラス	透明で青色を帯びた水色	
474	小　玉	3.1	4.4	1.7	0.05	ガラス	透明で青く澄んだ色	
475	小　玉	2.5	4.8	1.4	0.06	ガラス	透明な青色	
476	小　玉	2.7	4.6	1.3	0.08	ガラス	透明で薄い藍色	
477	小　玉	3.0	4.3	0.1	0.05	ガラス	水色を帯びた透明	
478	小　玉	2.7	4.4	1.5	0.05	ガラス	白く濁った青色	
479	小　玉	3.0	3.9	1.5	0.04	ガラス	透明な藍色	
480	小　玉	3.0	3.9	1.4	0.07	ガラス	透明な青色	
481	小　玉	2.3	4.4	1.5	0.06	ガラス	透明で明るい青色	
482	小　玉	2.6	3.7	1.2	0.05	ガラス	濃　紺　色	
483	小　玉	2.5	3.6	1.0	0.02	ガラス	透明で青色を帯びた水色	
484	小　玉	2.1	3.8	1.0	0.04	ガラス	透明で少し濁った青色	
485	小　玉	2.2	3.5	1.4	0.02	ガラス	透明で青色を帯びた水色	
486	小　玉	2.3	3.4	1.0	0.02	ガラス	透明で濃い青色	
487	小　玉	2.4	3.3	1.0	0.04	ガラス	透明な青色	
488	小　玉	2.0	3.6	1.2	0.02	ガラス	透明な青色	
489	小　玉	2.1	3.4	1.0	0.03	ガラス	透明で藍色	
490	小　玉	2.4	2.9	0.9	0.03	ガラス	少し濁った水色	
491	小　玉	1.7	3.5	1.0	0.02	ガラス	透明な青色	
492	小　玉	2.0	3.2	1.0	0.03	ガラス	透明な青色	
493	小　玉	2.2	3.0	0.3	0.03	ガラス	透明な水色	
494	小　玉	2.1	3.0	1.0	0.04	ガラス	透明で緑の入った青色	
495	小　玉	1.6	3.4	1.0	0.01	ガラス	白く濁った水色	
496	小　玉	1.8	3.2	0.7	0.02	ガラス	透明で青が入った緑色	
497	小　玉	1.9	3.1	0.8	0.03	ガラス	透明で藍色が入った青色	
498	小　玉	2.0	3.0	1.1	0.03	ガラス	半透明で少し濁った青色	
499	小　玉	2.3	2.6	0.7	0.03	ガラス	透明な青色	
500	小　玉	1.5	3.3	1.1	0.01	ガラス	透明で青色を帯びた水色	
501	小　玉	1.6	3.2	1.0	0.01	ガラス	濃　紺　色	
502	小　玉	1.8	3.0	0.9	0.01	ガラス	透明で濃い青色	
503	小　玉	1.6	3.1	1.0	0.02	ガラス	透明な水色	
504	小　玉	1.6	3.1	1.0	0.01	ガラス	白く濁った青色	
505	小　玉	1.4	3.2	0.9	0.03	ガラス	透明で青が入った緑色	
506	小　玉	1.5	3.1	1.1	0.01	ガラス	紺　　色	
507	小　玉	1.6	3.0	0.8	0.01	ガラス	透明な青色	
508	小　玉	1.6	3.0	1.0	0.02	ガラス	透明で青が入った緑色	
509	小　玉	1.6	3.0	1.0	0.02	ガラス	透明な水色	
510	小　玉	2.0	3.2	1.0	0.03	ガラス	透明な青色	
511	小　玉	1.3	3.2	1.0	0.03	ガラス	透明な青色	
512	小　玉	1.4	3.1	1.2	0.01	ガラス	濃　紺　色	

挿図番号	種　類	長さ(mm)	径(mm)	孔　径（mm）	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
513	小　玉	1.5	3.0	1.0	0.01	ガラス	淡青色を帯びた透明	
514	小　玉	1.0	3.4	1.0	0.02	ガラス	半透明で濁った青色	
515	小　玉	1.4	3.0	1.1	0.01	ガラス	群　青　色	
516	小　玉	1.4	3.0	1.1	0.02	ガラス	透明で明るい青色	
517	小　玉	1.5	2.9	1.2	0.02	ガラス	濃　紺　色	
518	小　玉	1.7	2.7	0.9	0.01	ガラス	透明な水色	
519	小　玉	1.3	3.0	1.0	0.01	ガラス	透明で紫の入った青色	
520	小　玉	1.2	3.0	0.7	0.01	ガラス	透明な青色	
521	小　玉	2.1	2.1	0.8	0.02	ガラス	透明で青が入った緑色	
522	小　玉	1.4	2.7	1.0	0.02	ガラス	白く濁った青色	
523	小　玉	1.2	2.8	0.8	0.01	ガラス	透明で青が入った緑色	
524	小　玉	1.1	2.8	0.9	0.01	ガラス	群　青　色	
525	小　玉	2.2	1.2	1.0	0.04	ガラス	透明な水色	
526	小　玉	1.6	1.2	1.0	0.02	ガラス	透明な水色	

表—48　西山5号墳出土玉類計測表

挿図番号	種　類	長さ(mm)	径(mm)	孔　径（mm）	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
527	切子玉	18.9	14.6	上3.4　下1.1	4.45	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
528	切子玉	16.6	13.3	上3.6　下1.6	3.76	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
529	勾　玉	長27.7	幅 8.8	上2.8　下0.5	5.74	水　晶	透　明	片面穿孔　反対側若干の抉り
530	勾　玉	長27.3	幅 9.2	上3.0　下1.4	5.73	碧　玉	濃緑色と緑灰色が混じる	片面穿孔
531	勾　玉	長27.2	幅 8.8	上2.7　下1.8	4.82	碧　玉	深　緑　色	片面穿孔
532	小　玉	7.6	8.1	3.1	1.13	ガラス	深　緑　色	片面穿孔
533	小　玉	3.7	6.3	3.1	0.20	ガラス	緑　　色	片面穿孔　風化が著しい

表—49　西山11号墳出土玉類計測表

挿図番号	種　類	長さ(mm)	径(mm)	孔　径（mm）	重量(g)	材　質	色　　調	備　　考
534	小　玉	3.6	3.2	1.1	0.05	ガラス	白く濁った青色	片面穿孔
535	小　玉	2.2	3.4	1.1	0.05	ガラス	白く濁った青色	片面穿孔

付載　西山３号墳出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター
本　田　光　子

はじめに

西山古墳群３号墳出土の須恵器杯に付着残存している赤色物について、顕微鏡観察を行い、蛍光X線分析および一部の試料についてはX線回折の測定を行い、赤色顔料とその使われ方を調べた。

墳墓出土例や土器・木器等の彩色例に関する現在までの知見によれば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第２鉄：赤鉄鉱（Hematite）を主成分とするベンガラと、硫化水銀（赤）：辰砂（Cinnabar）を主成分とする朱の２種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

試料

須恵器杯身や蓋の内面に赤色物が付着残存している。X線分析に際しては赤色部分の量が充分であるものについては試料採取を行い、赤色部分の量が微量であるものは試料採取は行わずにそのままで測定を行った。

顕微鏡観察

試料一覧とその観察結果を表１に示した。実体、生物顕微鏡により検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の三種の赤色顔料（朱、ベンガラ、鉛丹）は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。

№４、７、８、12に朱が認められ、それ以外にはベンガラが認められた。ほとんどのものが、赤色物の量は少なく、しかも土に混じった状態であり、充分に観察できないものであった。しかし、ベンガラはいわゆる広義のベンガラではなく、すべてはっきりと粒子が確認できた。ただし、ベンガラ粒子がきわめて微量なものが多く、パイプ状粒子の確認は№11以外のものについてはできなかった。№11については図版４－１～３に顕微鏡写真を示した。また、№７にはベンガラと朱の両者が認められた状態を図版４－４～６に示した。ベンガラと朱は完全には混合されていない。ベンガラの上に少量の朱が点在している状態である。朱がある部分は両者が混じって観察される。

表１　試料一覧と顕微鏡観察結果

№	試料	顕微鏡観察結果
1	３号墳、杯蓋、№304、３－３	赤色物の量は微量。微量のベンガラが土に混じっている。朱は含まれていない。
2	３号墳、杯蓋、№238Ａ、３－14	赤色物の量は微量。微量のベンガラが土に混じっている。朱は含まれていない。
3	３号墳、杯蓋、№214、３－15	赤色物の量は微量。微量の朱が土に混じっている。ベ

		ンガラは含まれていない。
4	3号墳、杯身、№298、3—53	赤色物の量は少量。ベンガラが土に混じっている。朱は含まれていない。
5	3号墳、杯身、№298の内容物	赤色物の量は少量。ベンガラが土に混じっている。朱は含まれていない。
6	3号墳、杯身、№315、3—63	赤色物の量はきわめて微量。微量のベンガラが土に混じっている。朱についてはわからない。
7	3号墳、杯身、№238C、3—76	ベンガラと朱が認められる。両者は完全に混合されていない。ベンガラの上に少量の朱が点在している。
8	3号墳、杯身、№233、3—78	赤色物の量は少量。ベンガラが土に混じっている。朱は含まれていない。
9	3号墳、杯身、№314、3—63	赤色物の量は少量。微量のベンガラが土に混じっている。朱は含まれていない。
10	3号墳、杯身、№314の内容物	赤色物の量は少量。微量のゲンガラが土に混じっている。朱は含まれていない。
11	3号墳、杯身、№243、3—80	ベンガラだけである。ベンガラはいわゆるパイプ状粒子を含んでいる。朱は含まれていない。
12	3号墳、杯蓋、№302、3—84	微量の朱だけである。ベンガラは含まれていない。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。結果を表2に示す。

№4、7～9、11について、理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電粒；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管で測定を行った。測定は宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏によるものである。それ以外については、理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置システム3511を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；50kV、印加電流；50mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管で測定を行った。

赤色顔料の主成分元素としては№3、7、12に水銀と鉄が検出され、それ以外は鉄のみが検出された。全試料とも鉛は検出されなかった。このほか、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、これらはみな主として混入の土砂に由来するものと考えられる。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものと土砂に由来するものとの区別は蛍光X線強度から判断した。

表2　蛍光X線分析の検出結果

№.	試料	鉄	水銀
1	3号墳、杯蓋、№304、3—3	+	—
2	3号墳、杯蓋、№238A、3—14	+	—
3	3号墳、杯蓋、№214、3—15	+	+
4	3号墳、杯身、№298、3—53	+	—
5	3号墳、杯身、№298の内容物	+	—
6	3号墳、杯身、№315、3—63	+	—

7	３号墳、杯身、No.238C、３—76	＋	＋
8	３号墳、杯身、No.233、３—78	＋	－
9	３号墳、杯身、No.314、３—63	＋	－
10	３号墳、杯身、No.314の内容物	＋	－
11	３号墳、杯身、No.243、３－80	＋	－
12	３号墳、杯蓋、No.302、３－84	＋	＋

X線回折

No.４、７～９、11について、赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として、X線回折の測定を行った。結果を表３に示す。No.７については、顕微鏡下で朱と観察される部分とベンガラと観察される部分を別々に採取したものを試料とした。理学電機㈱製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kV、印加電流：10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（線路幅）；４㎜、ゴニオメーター走査範囲（２θ）；30～66°、走査速度２θ４°／分、時定数；２秒の条件で測定を行った。

赤色の由来となる鉱物として、No.７のベンガラ部分とNo.11に赤鉄鉱、No.７の朱部分に辰砂が同定された。そのほか石英、長石などが確認されたが、それは主として混入土砂に由来するものと考えられる。No.４、８、９には赤色の由来となる鉱物は特に同定されなかった。

表３　X線回折の検出結果

No.	試料	赤鉄鉱	辰砂
4	３号墳、杯身、No.298、３—53	－	－
7	３号墳、杯身、No.238C、３—76の朱部分	－	＋
7	３号墳、杯身、No.238C、３—76のベンガラ部分	＋	－
8	３号墳、杯身、No.233、３—78	－	－
9	３号墳、杯身、No.314、３—63	－	－
11	３号墳、杯身、No.243、３—80	＋	－

結果と考察

顕微鏡観察で朱だけが認められ、蛍光X線分析で水銀が検出されたものNo.214（３—15）とNo.302（３—84）は朱である。顕微鏡観察でベンガラが認められ、蛍光X線分析で水銀が検出されていないものNo.304（３－３）、No.238A（３—14）、No.298（３—53）、No.315（３—63）、No.233（３—78）、No.314（３－63）、No.243（３—80）はベンガラである。No.243（３—80）には赤鉄鉱が同定されたが、他の試料では確認されなかった。赤色の由来が非晶質の褐鉄鉱にあることも考えられるが、顕微鏡観察でははっきりと粒子が確認されている。試料に含まれる赤鉄鉱の量が少ないため、赤鉄鉱の顕著なピークが検出されない可能性もある。No.243（３—80）にはパイプ状ベンガラ粒子が含まれていたが、他の試料には観察されなかった。これも試料の量や状態と関係しているかもしれないので、今後検討したい。

No.238C（３—76）は、顕微鏡で朱とベンガラ、蛍光X線分析で水銀と鉄が検出された。さらに、X

線回折では、顕微鏡下で朱と観察され分離したものは辰砂が、顕微鏡下でベンガラと観察され分離したものは赤鉄鉱が、それぞれ同定された。特別な方法は使わずに実体顕微鏡下の手作業で、２種類の微粉末が分離できるということは、２種類の赤色顔料があらかじめ混ぜてあったものではないことを示すものと判断したい。ベンガラと朱の量や、前者の上に後者が点在していること等から見て、ベンガラの入った杯に朱を加えたものと考えられる。

他の試料は、すべてベンガラと朱がそれぞれ単体で収められており、両方の赤色顔料が収められていた杯は１例である。弥生時代の後期から古墳時代を通して続いてきた「朱とベンガラの使い分け」から考えると、極めて異常な行為と言わざるを得ない。「遺骸や埋葬施設に赤色顔料を施す際の重要な取り決め」である「遺骸に朱、埋葬施設にはベンガラ」という厳然たる約束ごとが、意味を持たなくなったのか。埋葬に伴う赤色顔料に対する意識の変化の現れと考えられるが、今後、赤色顔料入りの須恵器杯内赤色顔料の出土例とともに、古墳時代前期の主体部内出土の朱壺や、周溝や盛土内出土のベンガラ入り容器も、併せて再度検討を行いたい。

まとめ

１．３号墳出土須恵器杯に付着残存していた赤色物は、鉱物質の赤色顔料である。

２．№214（３－15）と№302（３－84）は朱だけが入っていた。

３．№304（３－３）、№238Ａ（３－14）、№298（３－53）、№315（３－63）、№233（３－78）、№314（３－63）、№243（３－80）はベンガラだけが入っていた。

４．№238Ｃ（３－76）は朱とベンガラが一緒に入っていた。

５．本例は死者に赤色を施す風習に対する、古墳時代の人々の意識の変化を知る貴重な資料である。

謝辞

赤色顔料調査の機会を戴きました岡山県古代吉備文化財センターの福田正継氏に感謝致します。Ｘ線分析の測定に御協力戴いた宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏、九州産業大学総合機器センター古賀啓子氏に感謝致します。

１．工道４区　（北から）

２．工道５区
（南から）

３．工道２区
（北から）

図版２

1．A・B区
（北東から）

2．A・B－南区
（北東から）

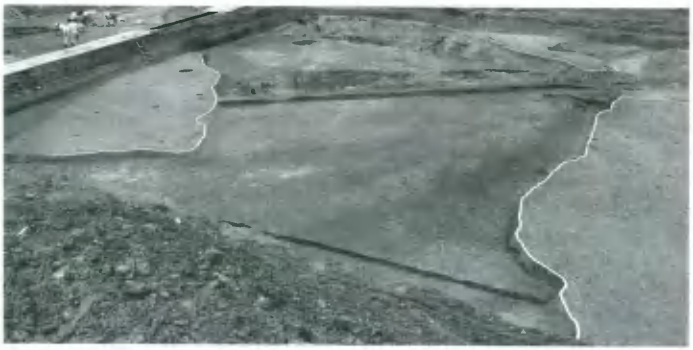
3．C区北半
（南から）

１．Ｃ－東区北半
（南から）

２．Ｄ区　（北から）

３．Ｅ区　（東から）

図版４



１．Ａ・Ｂ区河道－２
検出状況
（北東から）

２．河道－２断面
（西から）

３．Ｂ－南区河道－４
（北東から）

４．河道－４断面
（南から）

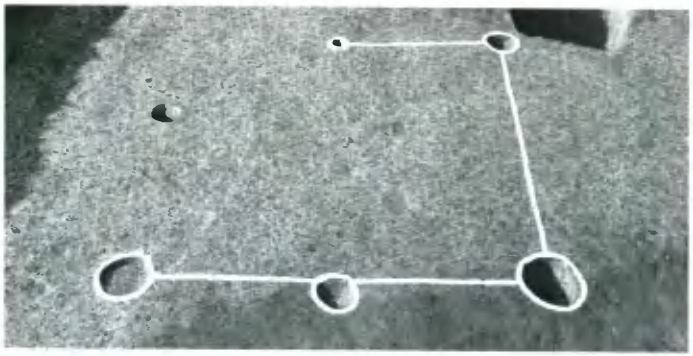
１．溝－９・10
（南から）

２．溝－９・10断面
（南から）

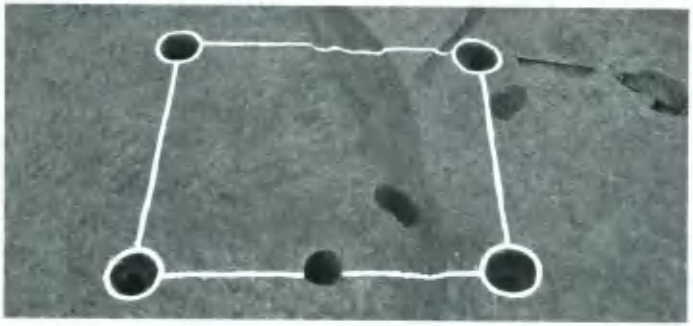
３．溝－４・５
（西から）

４．溝－４断面
（南から）

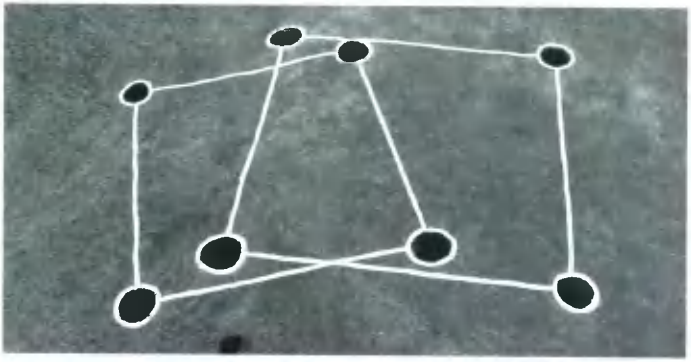
図版6



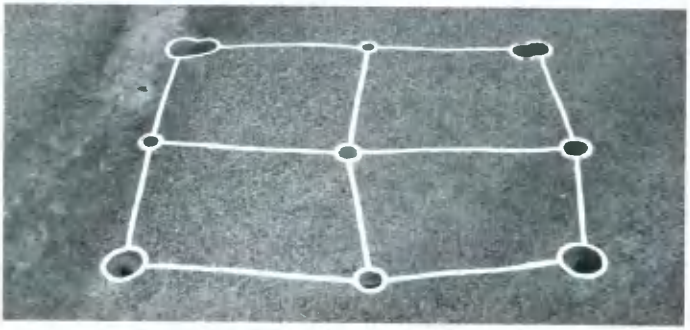
1．建物－2
（南東から）



2．建物－12
（南から）



3．建物－15・16
（東から）



4．建物－17
（南から）

１．土器棺－１（南から）

２．土壙－17（南東から）

３．土壙－１（東から）

４．土壙－２（北から）

５．土壙－14断面（南から）

６．土壙－14（南から）

７．土壙－３断面（西から）

８．土壙－３（西から）

図版８

1

32

36

2

38

9

14

44

54

19

60

58

69

80

81

河道－１・２出土遺物

１．河道－２出土遺物

２．河道－４出土遺物（１）

図版10

125

158

182

124

164

177

159

227

228

276

237

232

264

267

河道－４出土遺物（２）

135

145

136

206

178

180

210

211

212

河道－４出土遺物（３）

図版12

253

254

252

317

279

305 306 303

340

341

河道－４出土遺物（４）

139

272

300

285

311

321

290

333

291

334

336

332

335

337

339

324

342

1

2

河道－４出土遺物（５）

図版14

345

401

402

414

369

353

377

416

355

358

359

364

河道埋没以前の溝・土壙出土遺物

427

449

450

459

460

439

458

488

495

河道埋没後の土壙出土遺物

図版16

465

472

473

466

477

468

483

484

土壙－14出土遺物

1．西山古墳群
遠景
（東から）

2．西山古墳群
全景
（東から）

3．１号墳全景
（北西から）

4．１号墳石室
全景
（西から）

1．1号墳石室全景
（南から）

2．1号墳石室
全景
（南から）

3．1号墳西側
墳丘土層断面
（南西から）

1．２号墳全景
（南西から）

２．２号墳石室内遺物出土状況
（東から）

３．２号墳奥壁
部分遺物出
土状況
（東から）

1．２号墳石室
全景
（南から）

2．２号墳石室内
検出箱式石棺
（南から）

3．２号墳北側
墳丘土層断面
（北東から）

1．３号墳全景
（南から）

2．３号墳石室
上面
（西から）

3．３号墳石室
入口部分
（南から）

1．３号墳石室内
遺物出土状況
（南から）

2．３号墳石室内
遺物出土状況
（北から）

3．３号墳石室内
玉類出土状況
（西から）

1．３号墳奥壁
部分
（南から）

2．３号墳玄室
入口部分
（北から）

3．３号墳玄室
左側壁石組み
状況
（西から）

1．４号墳全景
（南西から）

2．４号墳石室
全景
（南から）

3．４号墳石室
全景
（北から）

4．４号墳石室
全景
（東から）

1．５号墳陶棺出土状況
（南から）

2．５号墳陶棺
出土状況
（東から）

3．５号墳石室
全景
（西から）

1．５号墳石室
全景
（南から）

2．５号墳全景
（北西から）

3．６号墳全景
（北から）

1．６号墳埋葬施設内遺物出土状況（西から）

2．６号墳埋葬施設南側小口部分遺物出土状況　（北から）

3．６号墳埋葬施設北側小口部分遺物出土状況　（南から）

1．７号墳全景
（東から）

2．７号墳埋葬施設遺物出土状況
（南から）

3．７号墳埋葬施設北側小口部分（南から）

1．８号墓全景
（東から）

2．９号墓全景
（東から）

3．10号墓全景
（東から）

1．11号墳全景
（東から）

2．11号墳埋葬施設内遺物出土状況
（東から）

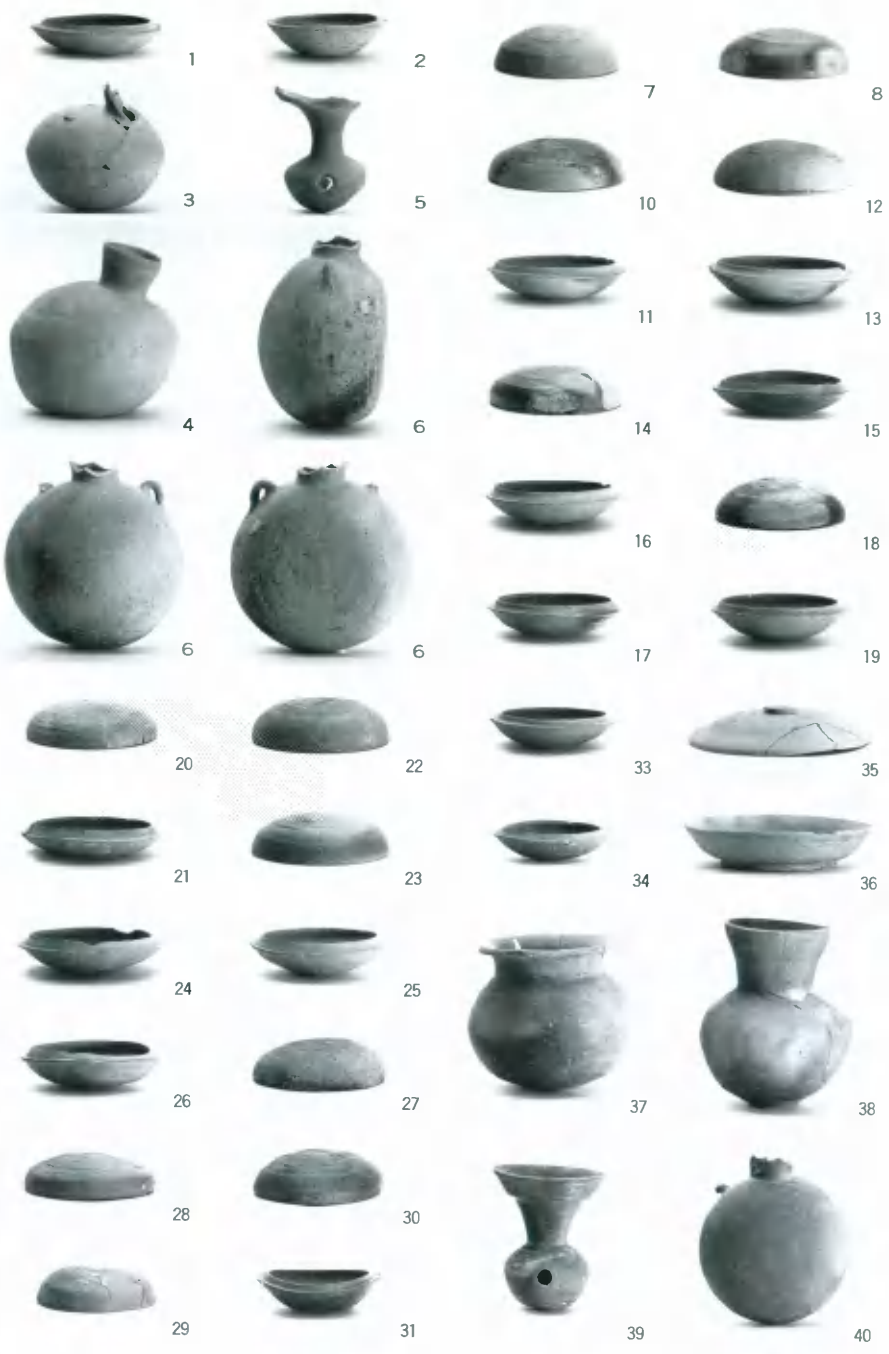
3．11号墳埋葬施設北側遺物出土状況
（南から）

1．12号墓全景
（東から）

2．５号墳・７号墳・８号墓作業風景
（南から）

3．11号墳埋葬施設内作業風景
（南から）

図版32

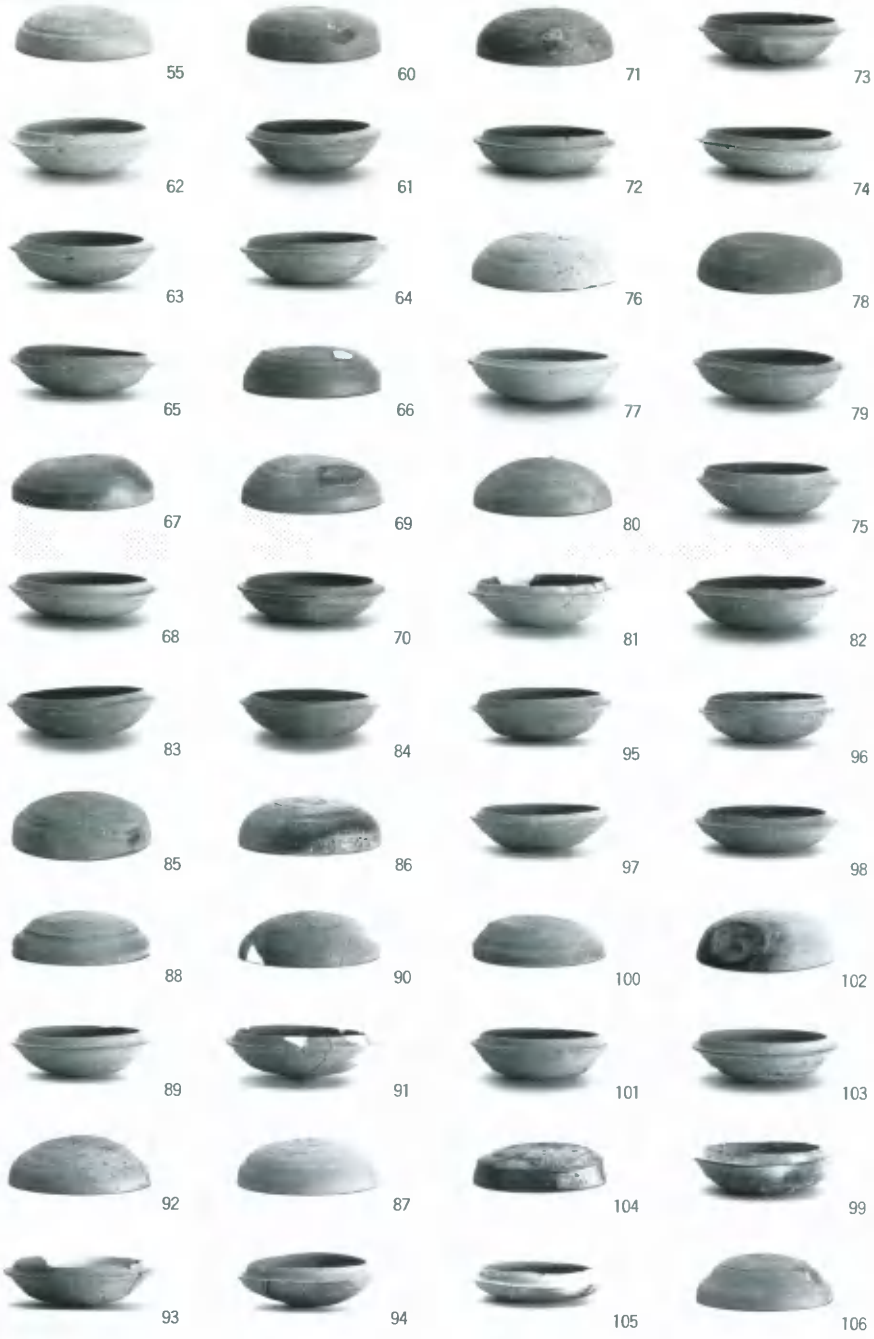


1号墳・2号墳出土土器

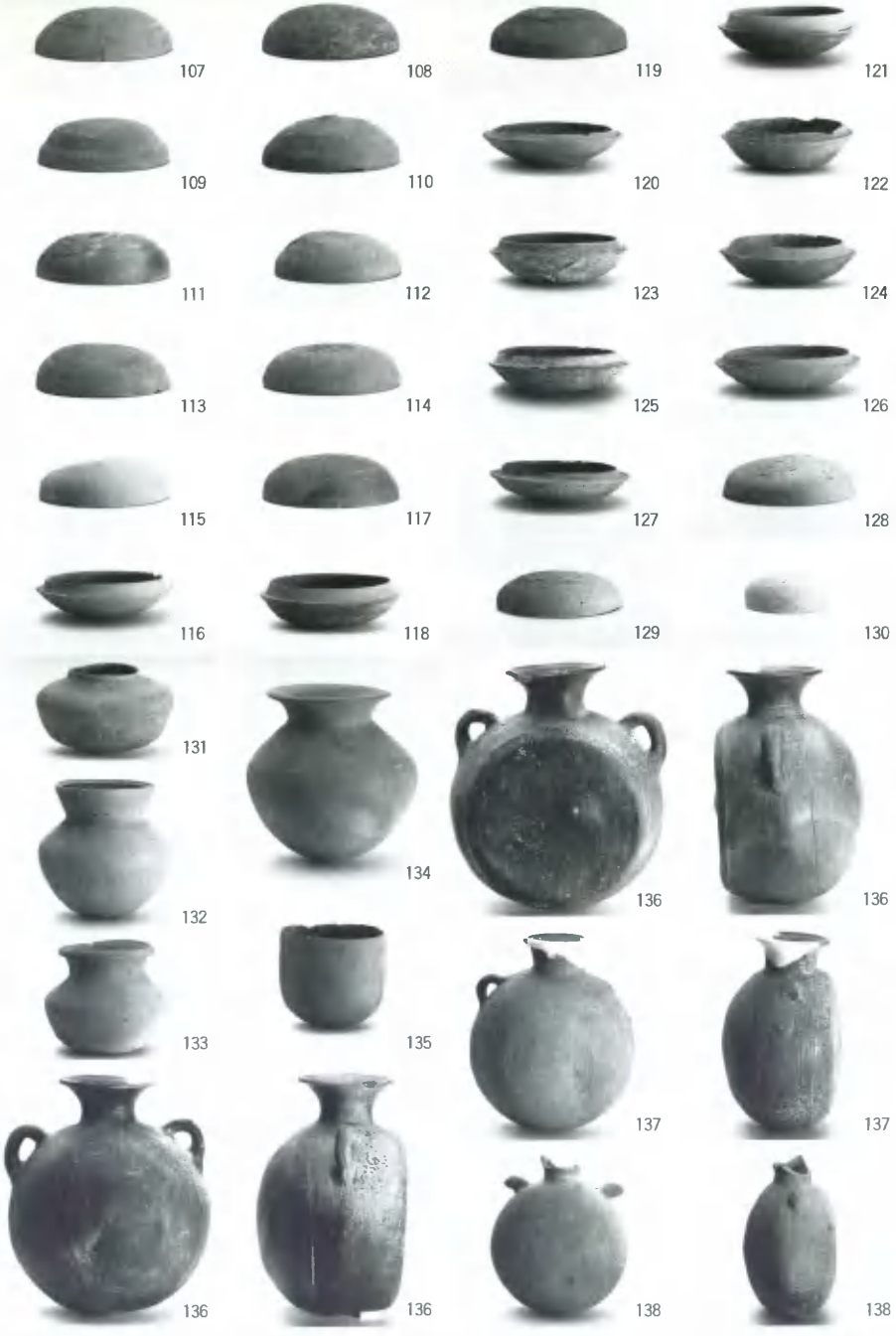
40
40
42
42
41
41
42
43
41
41
43
43
44
44
47
49
44
44
48
50
44
44
51
53
52
54
45
46
56
58
57
59

2号墳・3号墳出土土器

図版34



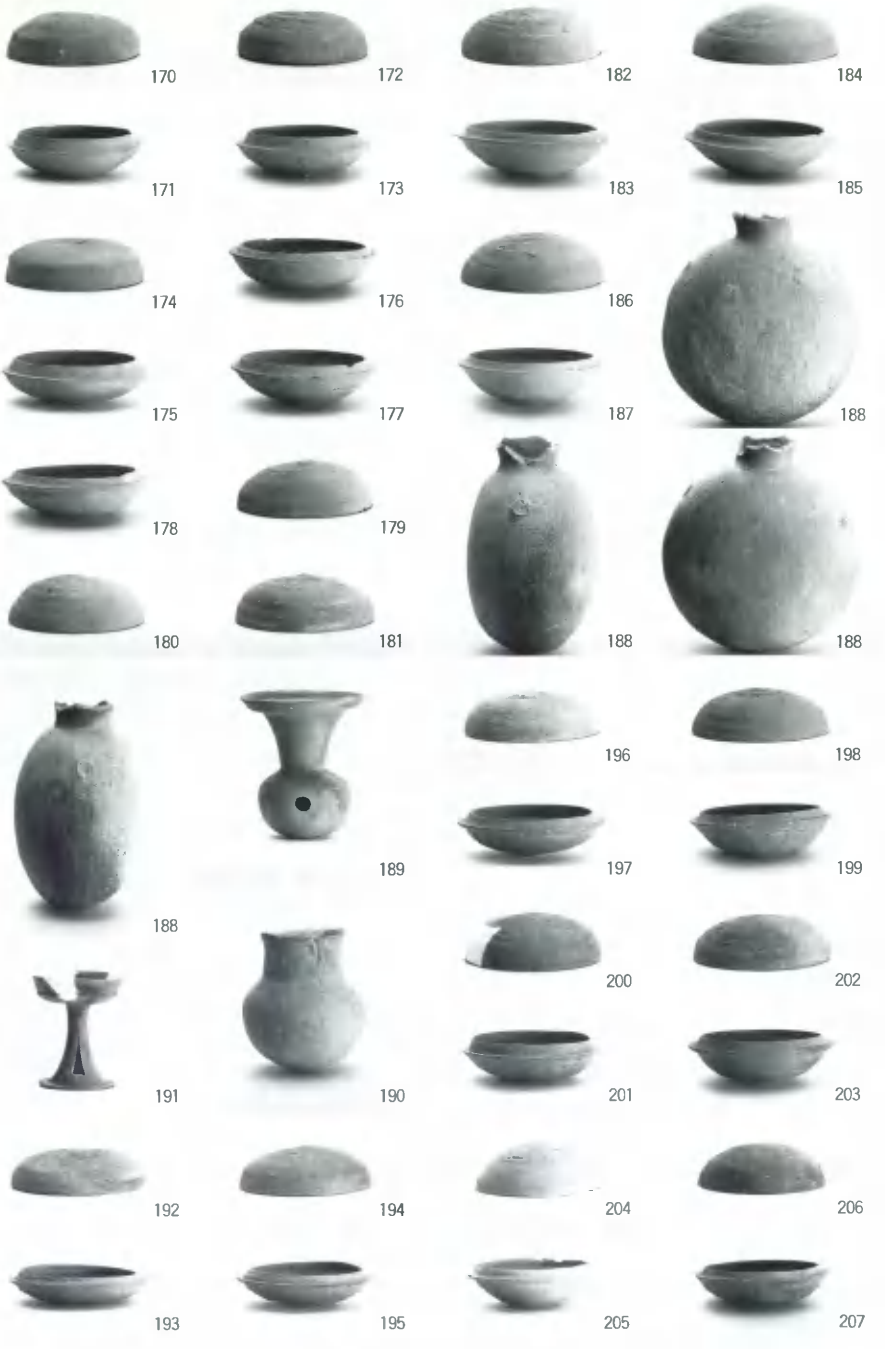
３号墳出土土器


107
108
119
121
109
110
120
122
111
112
123
124
113
114
125
126
115
117
127
128
116
118
129
130
131
132
133
134
135
136
136
136
136
137
137
138
138

3号墳出土土器

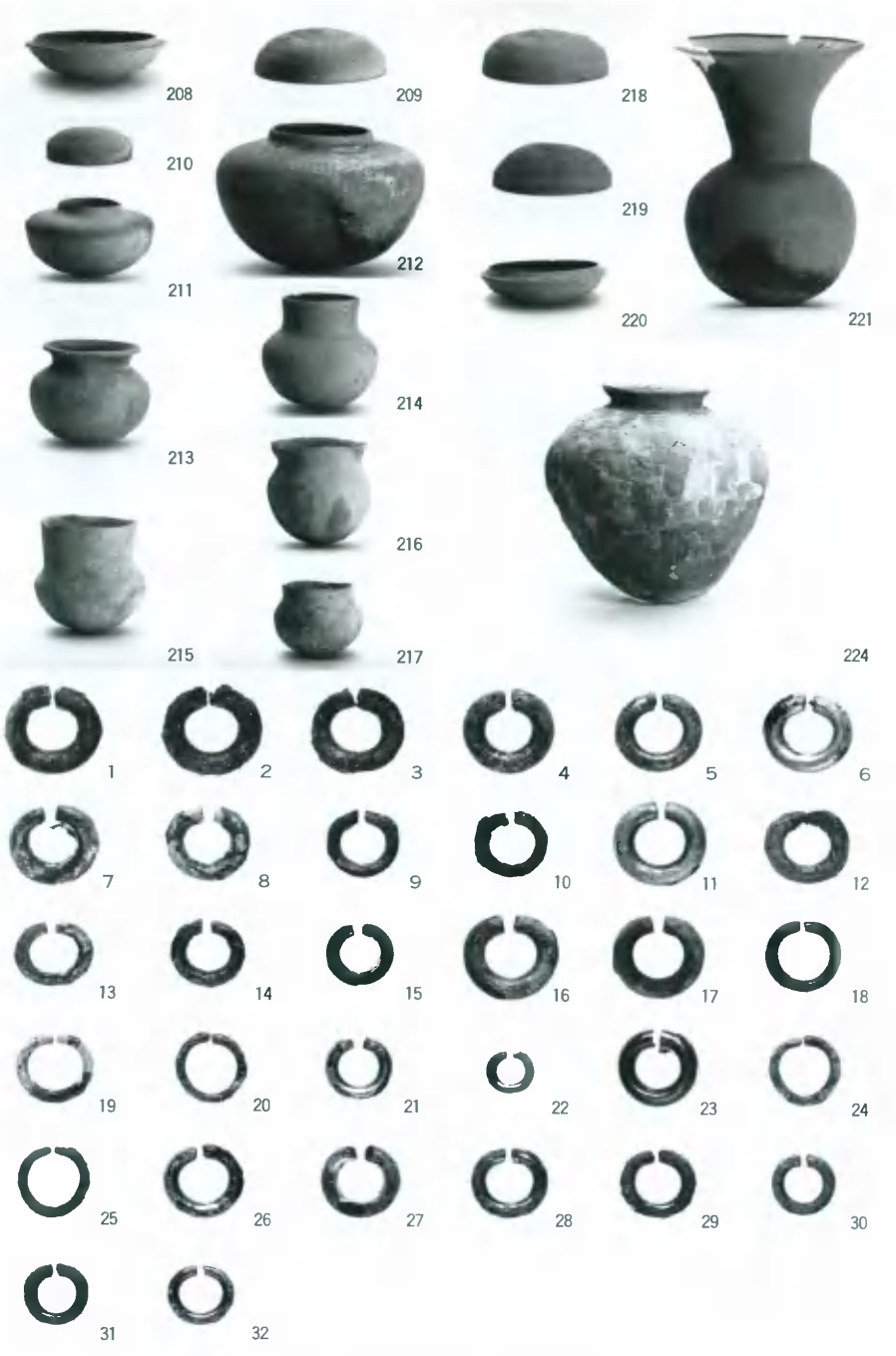
図版36

3号墳・5号墳出土土器

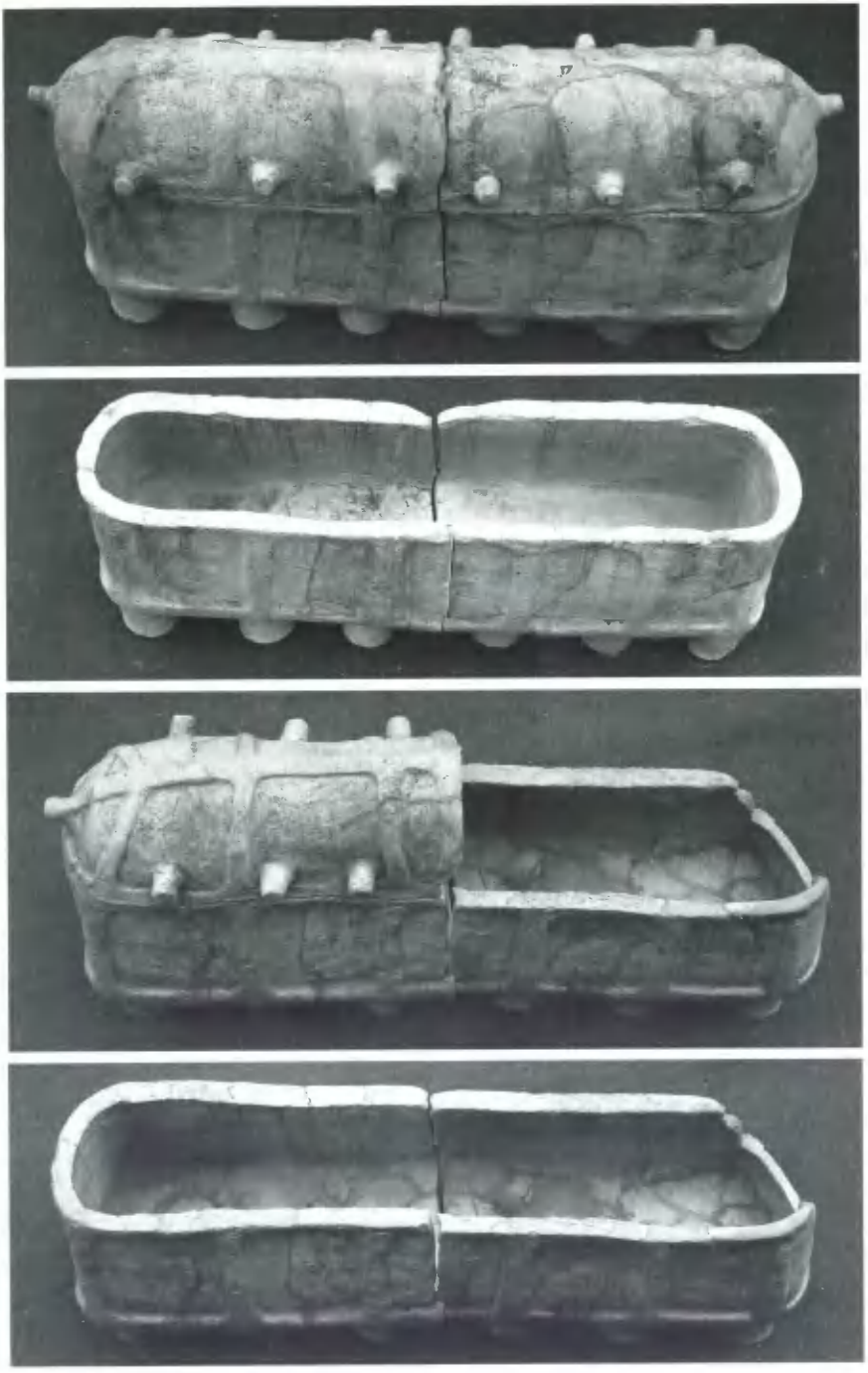


6号墳・7号墳・11号墳出土土器

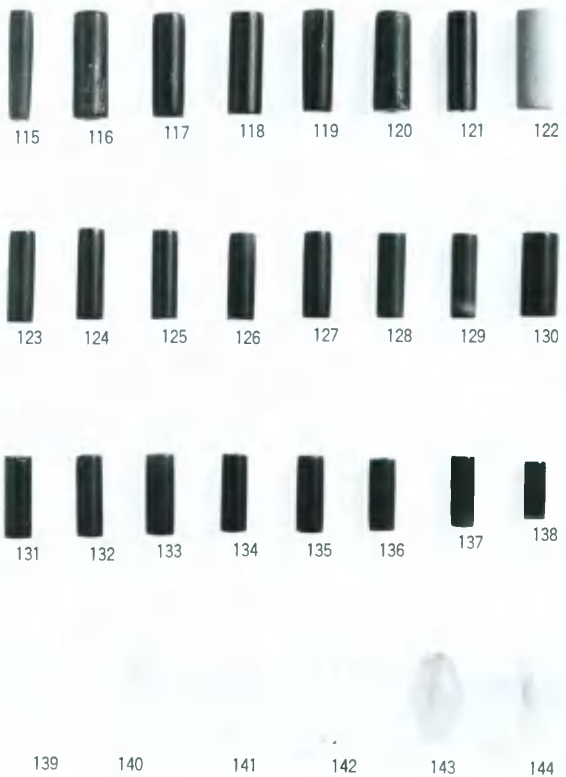
図版38



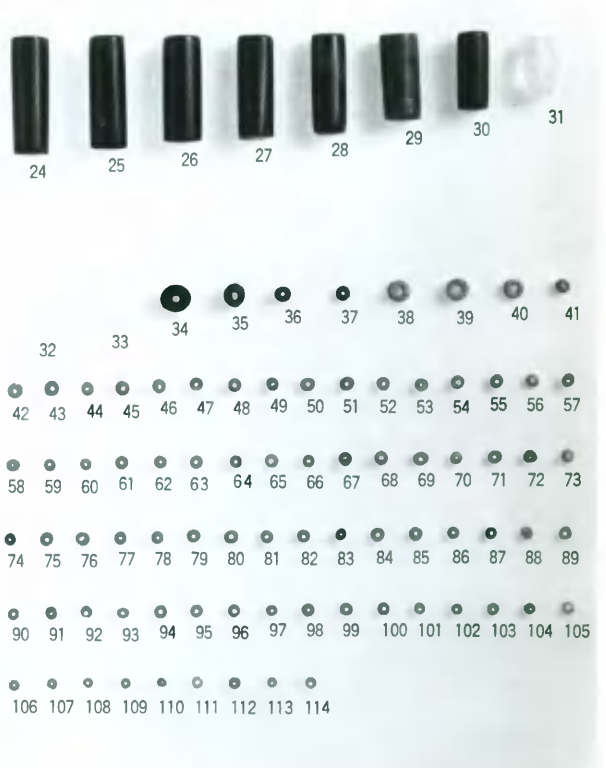
11号墳・12号墓・表土出土土器，耳環



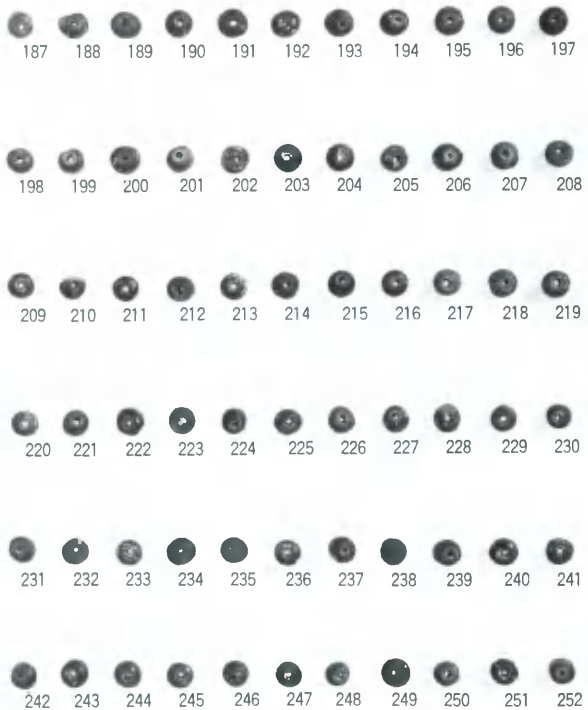
5号墳出土A陶棺（上）・B陶棺（下）



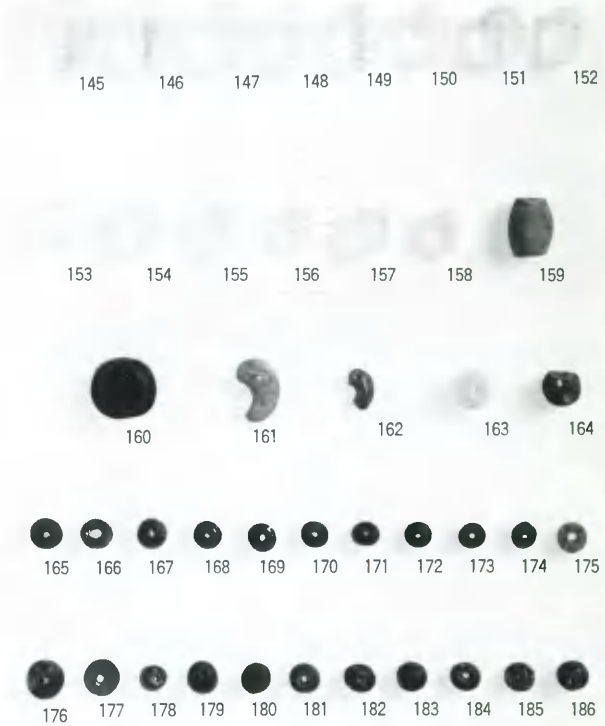
2．3号墳出土玉類（1）



1．2号墳出土玉類

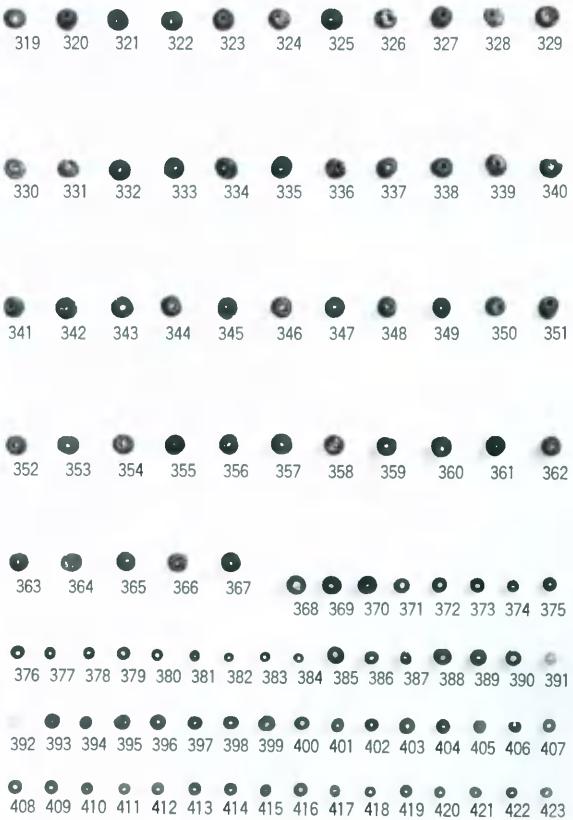


2．３号墳出土玉類（３）



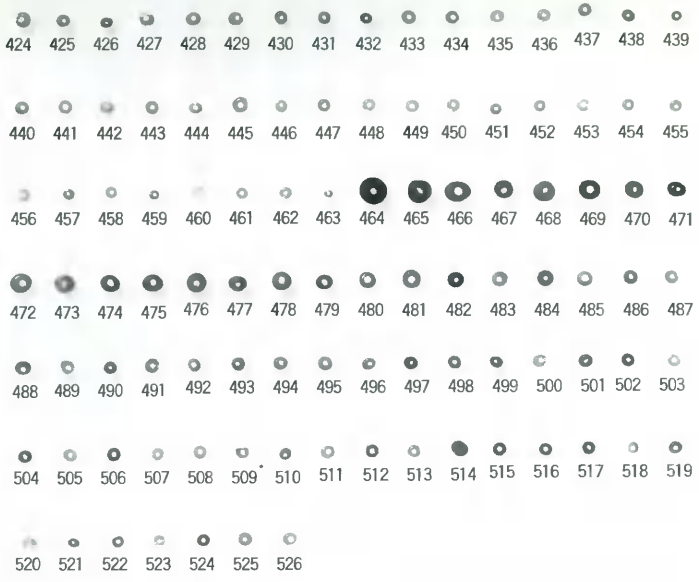
1．３号墳出土玉類（２）

図版41

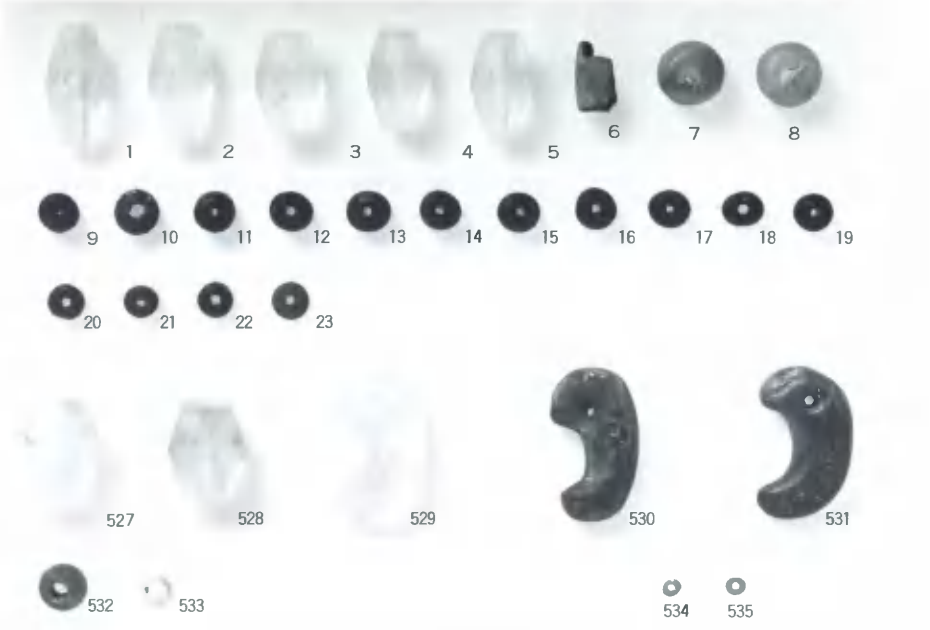


1．３号墳出土玉類（４）

2．３号墳出土玉類（５）



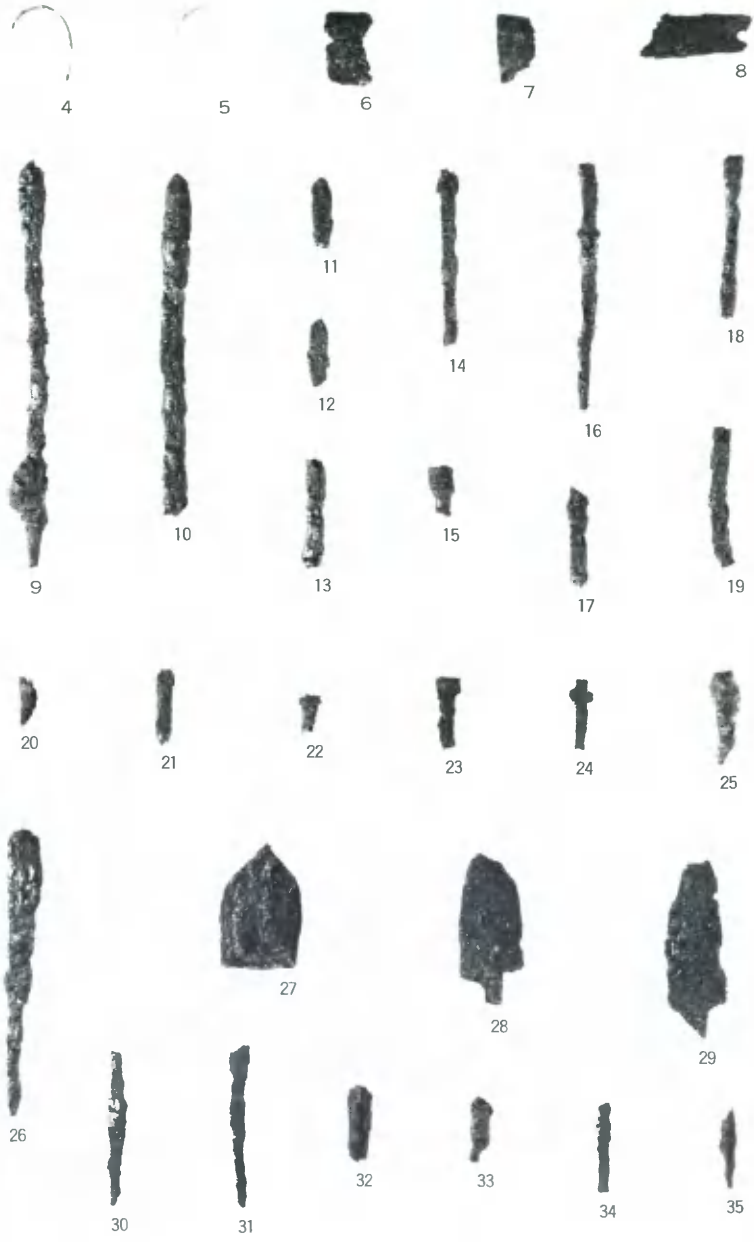
1．３号墳出土玉類（６）



２．１号墳・５号墳・11号墳出土玉類

図版44

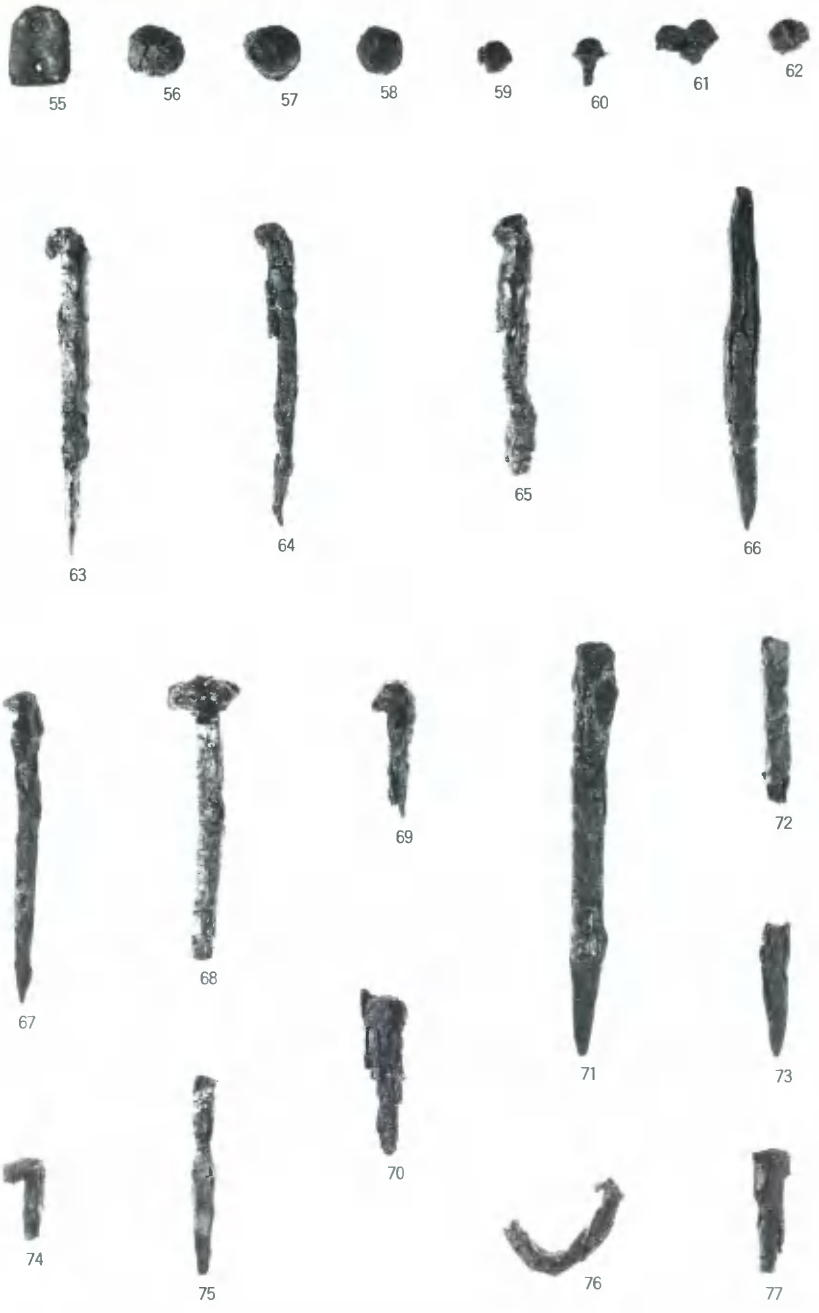
西山古墳群出土鉄器


4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35

1号墳出土鉄器（1）

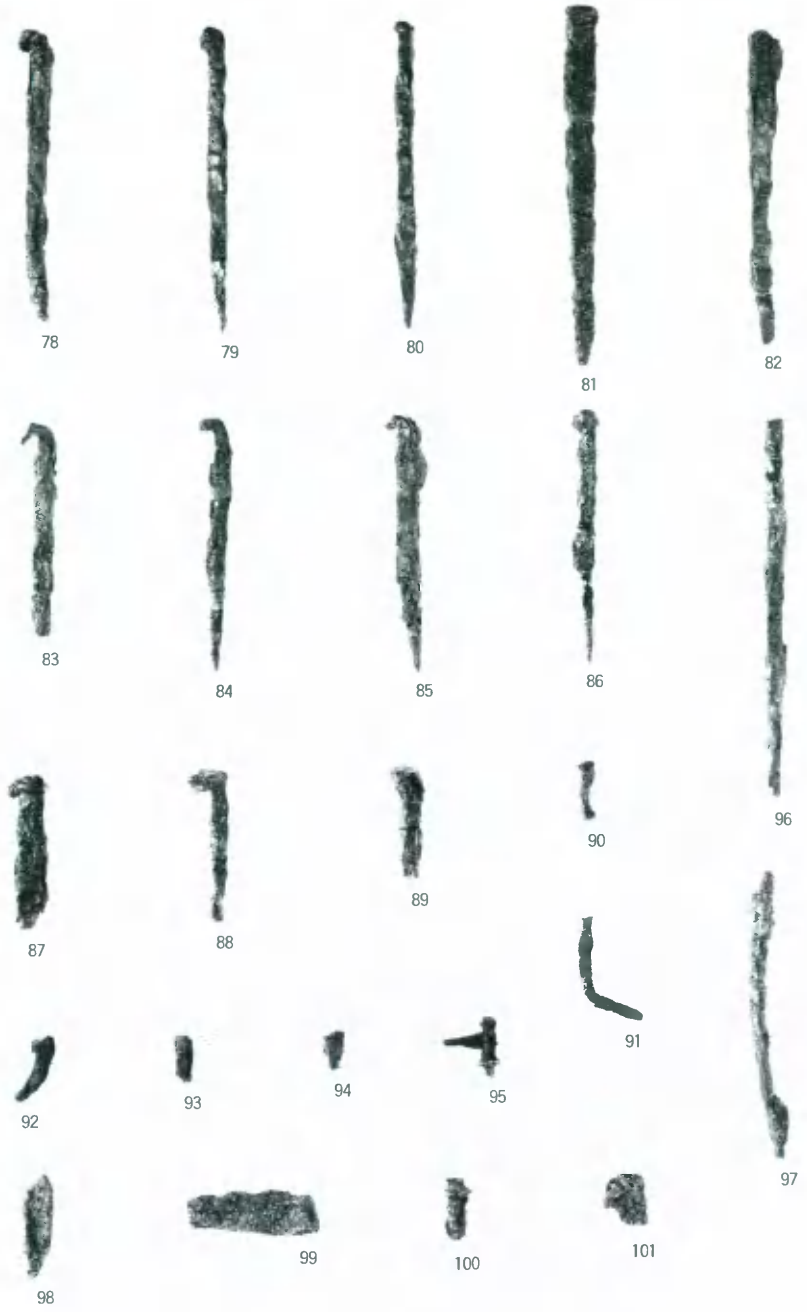
図版46

1号墳出土鉄器（2）

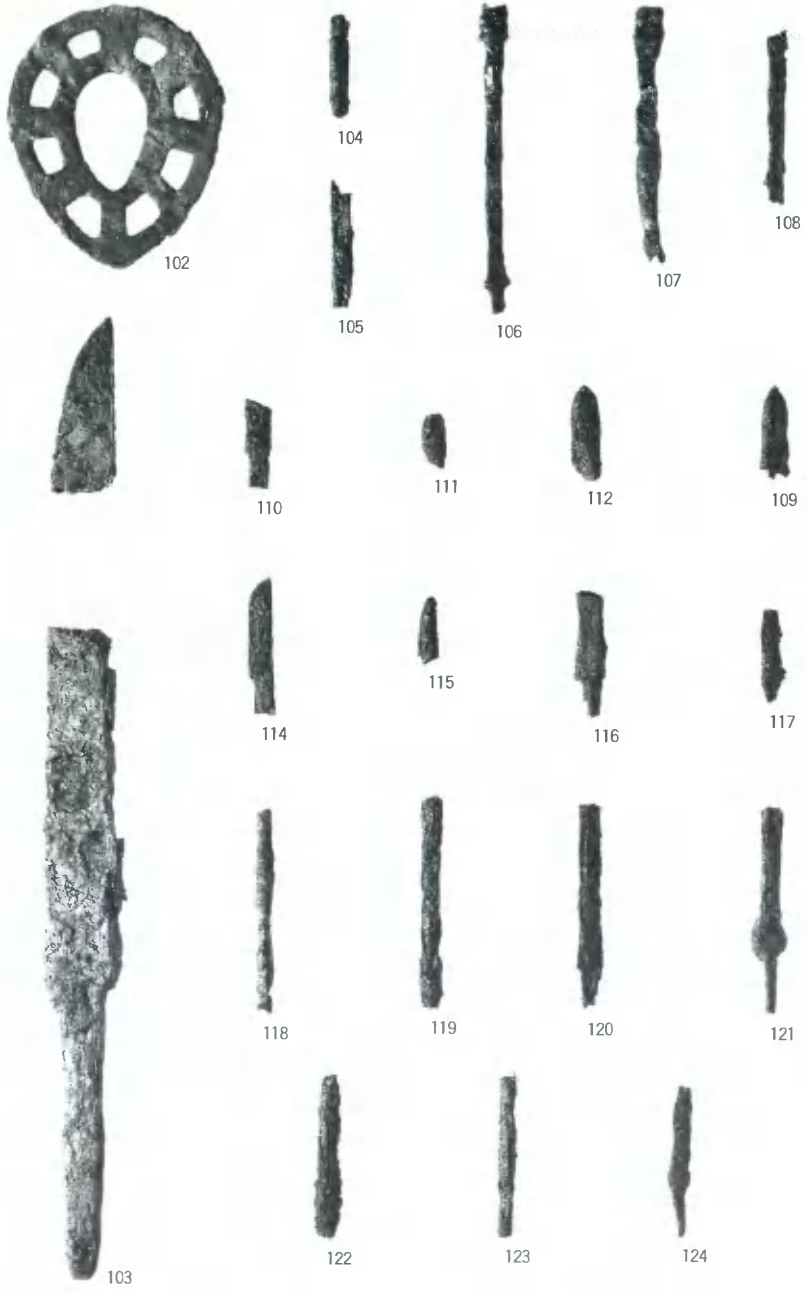


1号墳出土鉄器（3）

図版48

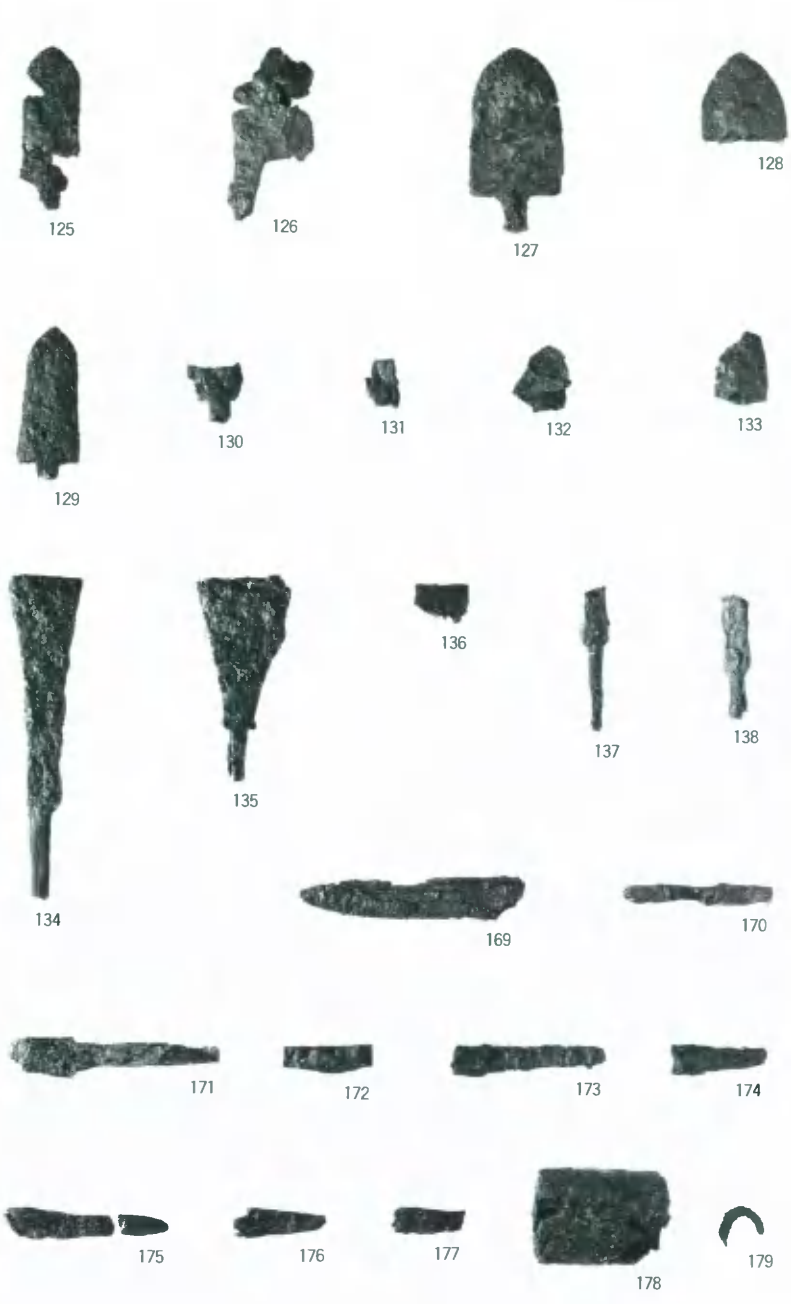


1号墳出土鉄器（4）


102
104
105
106
107
108
110
111
112
109
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
103

2号墳出土鉄器（1）

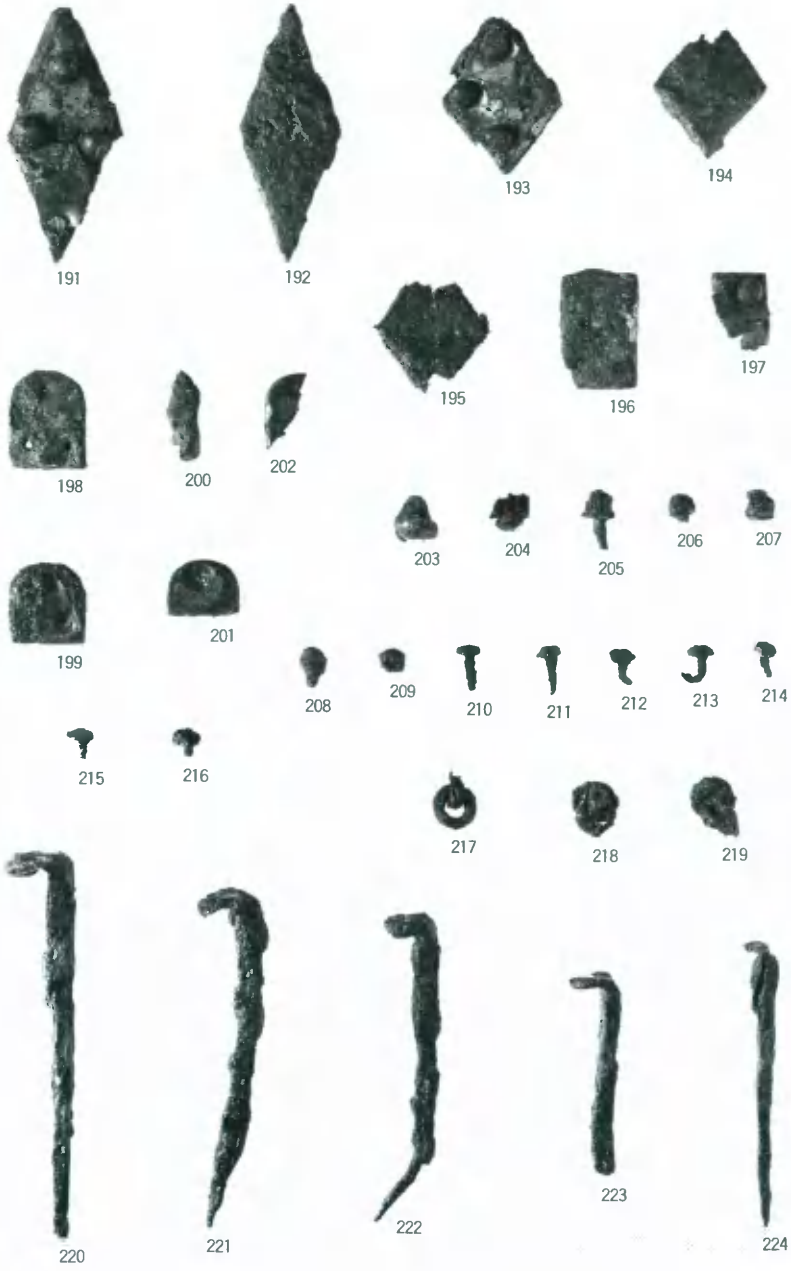
図版50



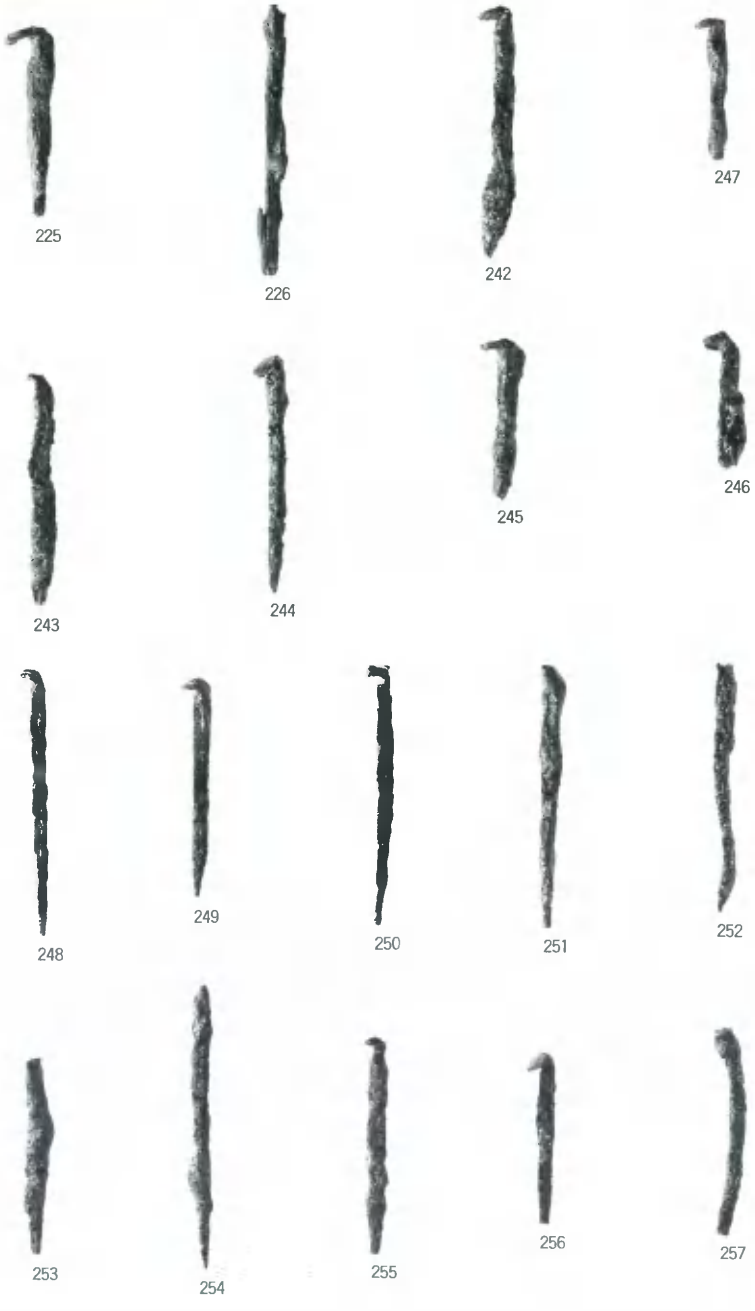
２号墳出土鉄器（２）

２号墳出土鉄器（３）

図版52

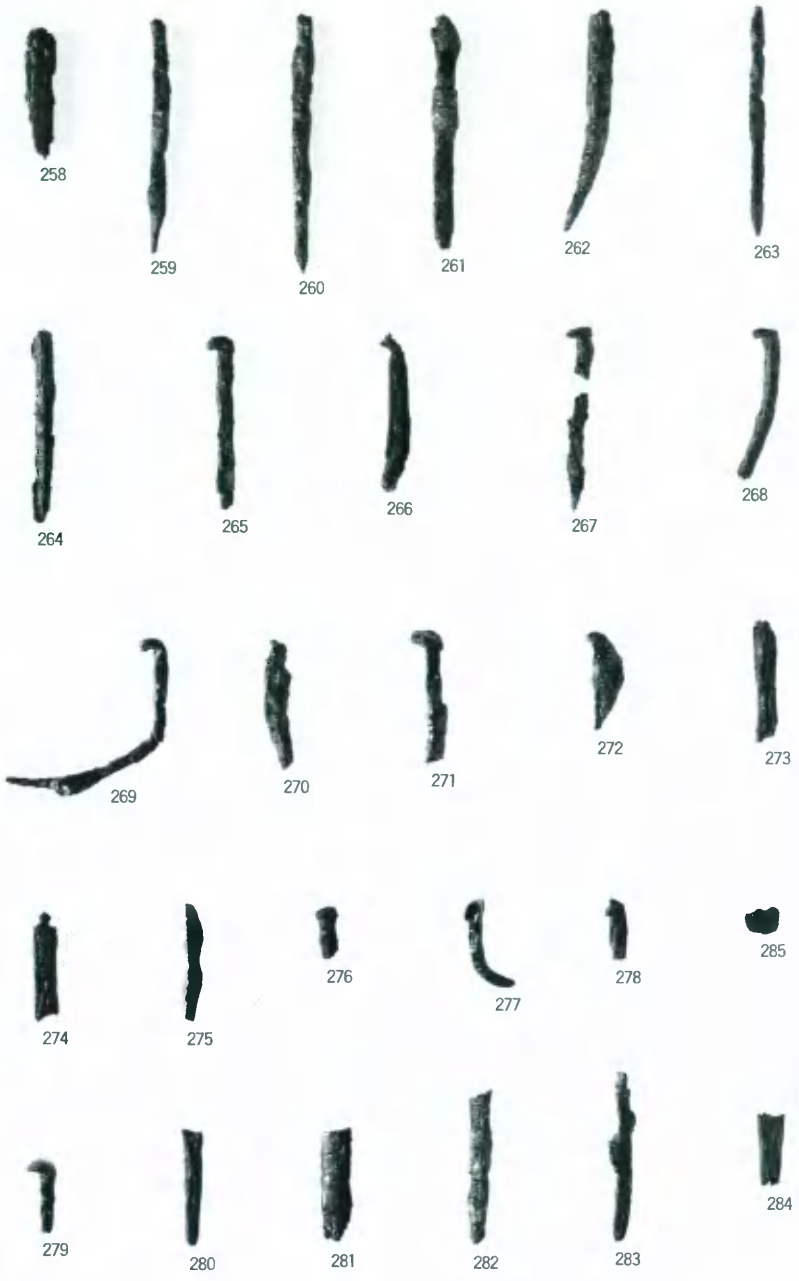


２号墳出土鉄器（４）


225
226
242
247
243
244
245
246
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257

２号墳出土鉄器（５）

図版54

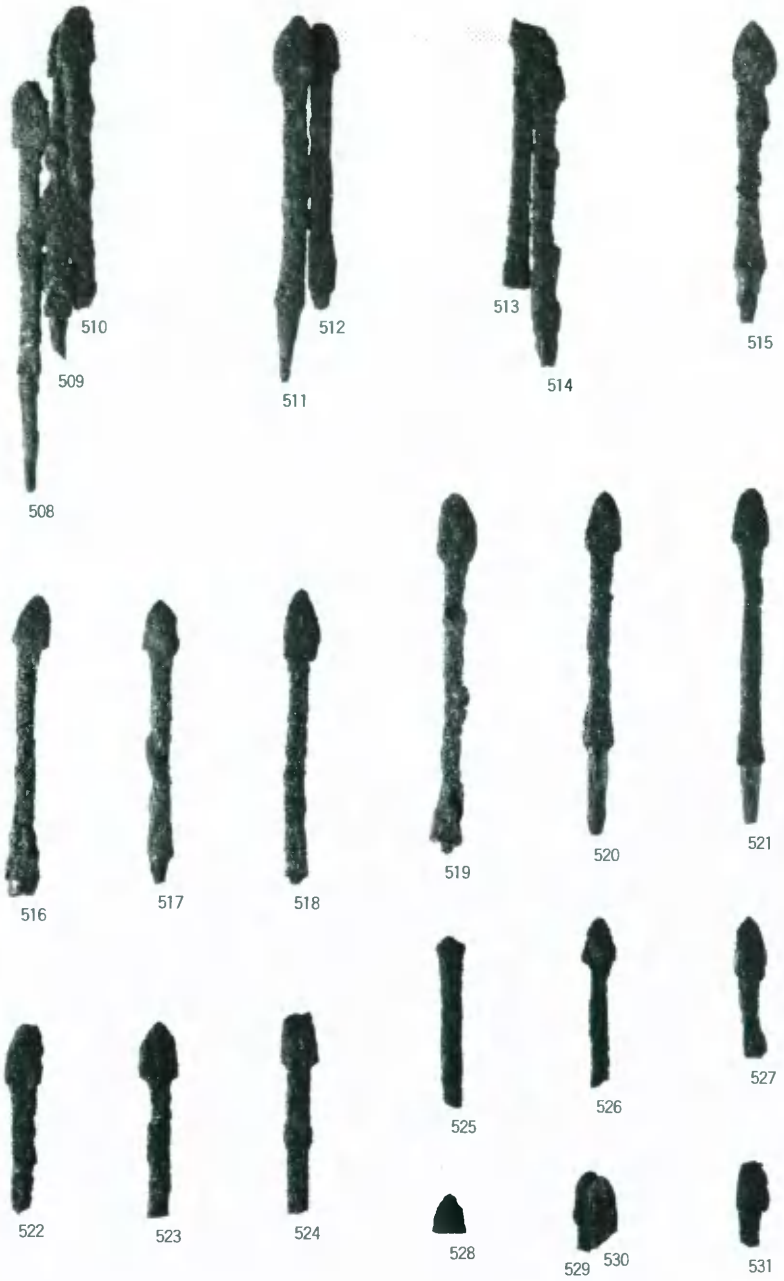


2号墳出土鉄器（6）

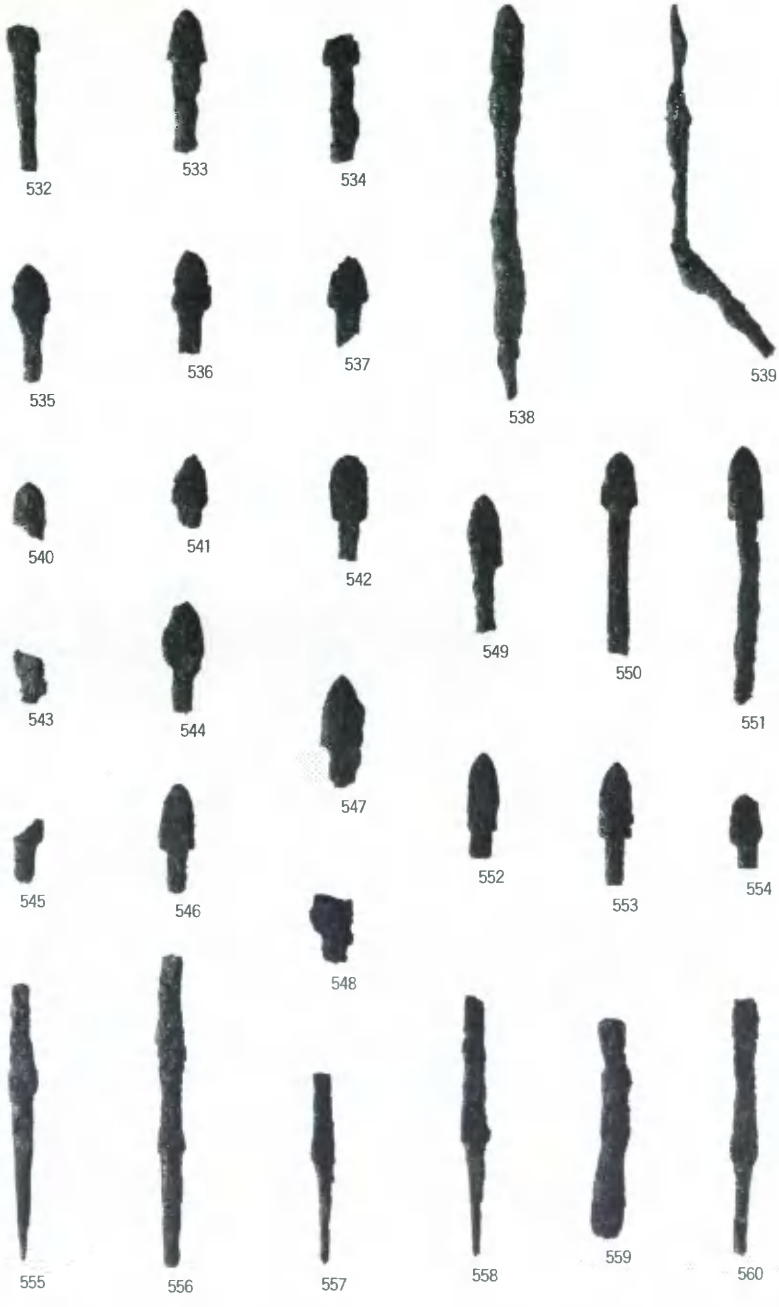
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
351
352
465
466
467

2号墳出土鉄器（7）

図版56

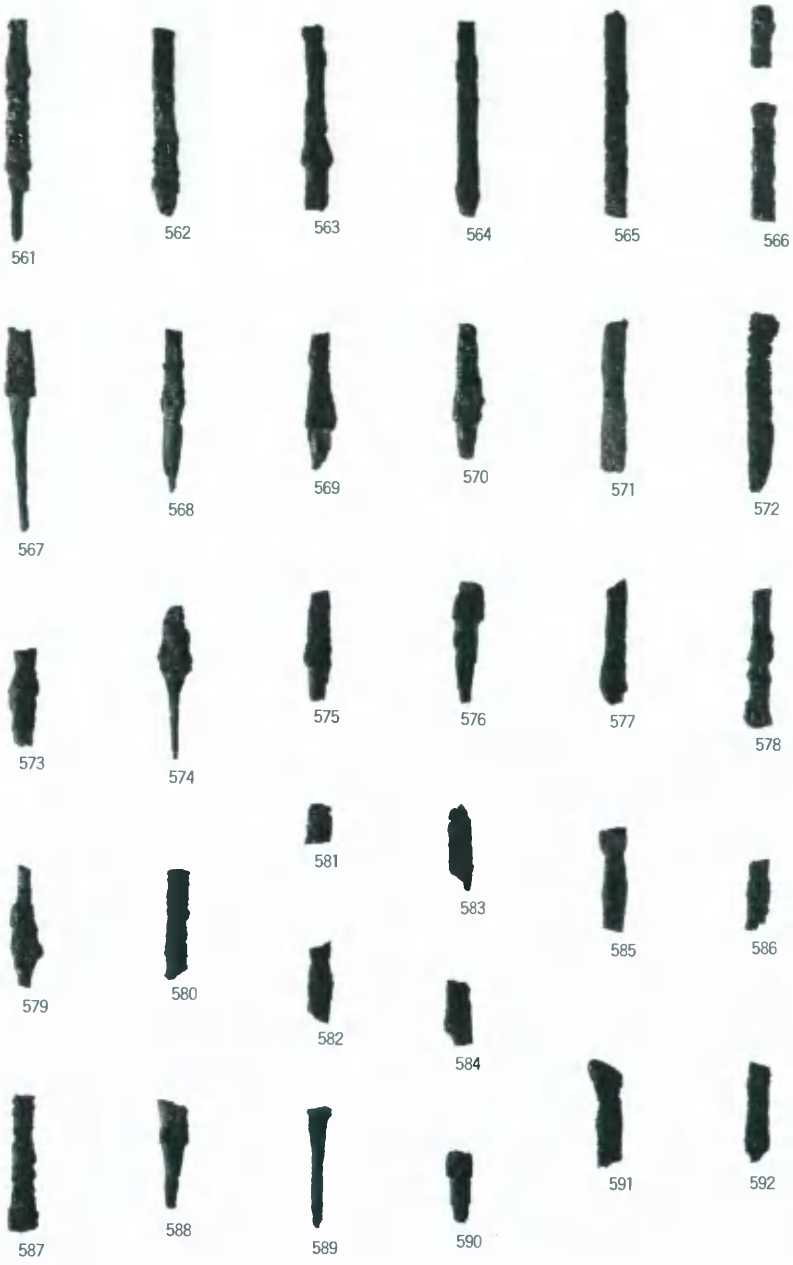


３号墳出土鉄器（１）

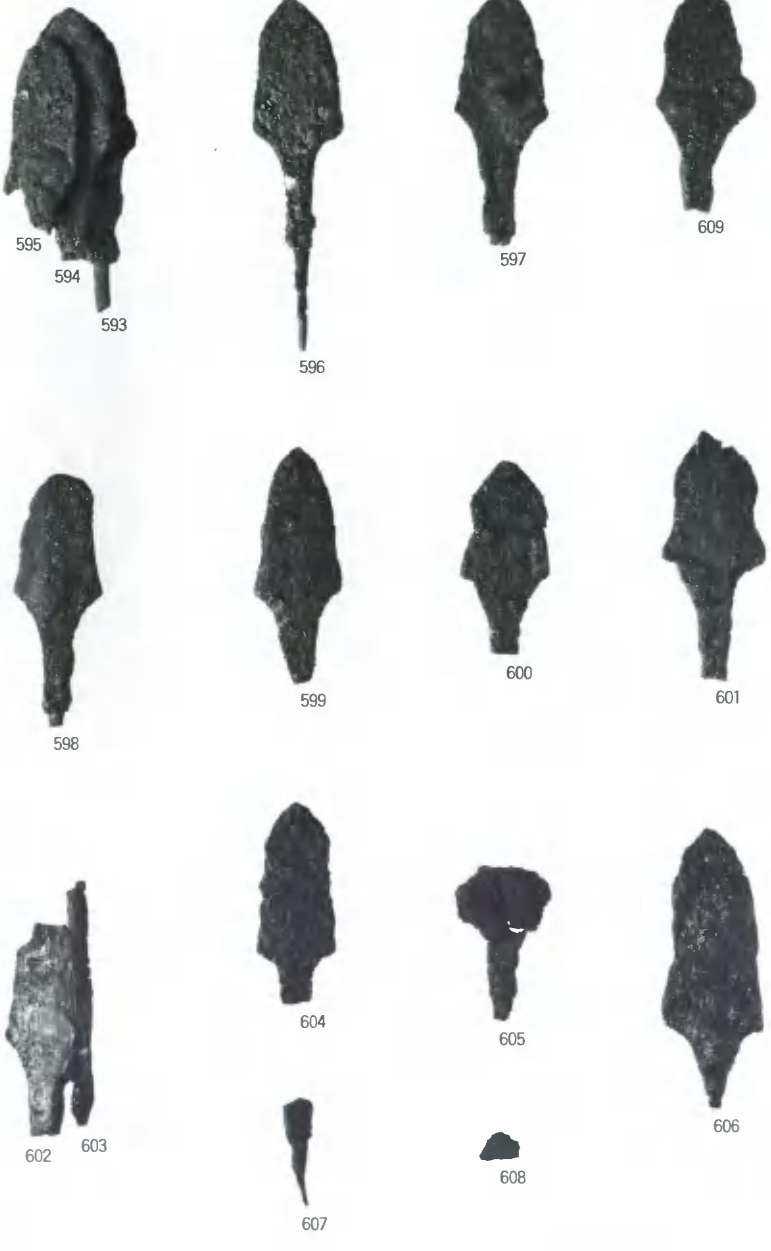

532
533
534
538
539
535
536
537
540
541
542
549
550
551
543
544
547
545
546
552
553
554
548
555
556
557
558
559
560

3号墳出土鉄器（2）

図版58

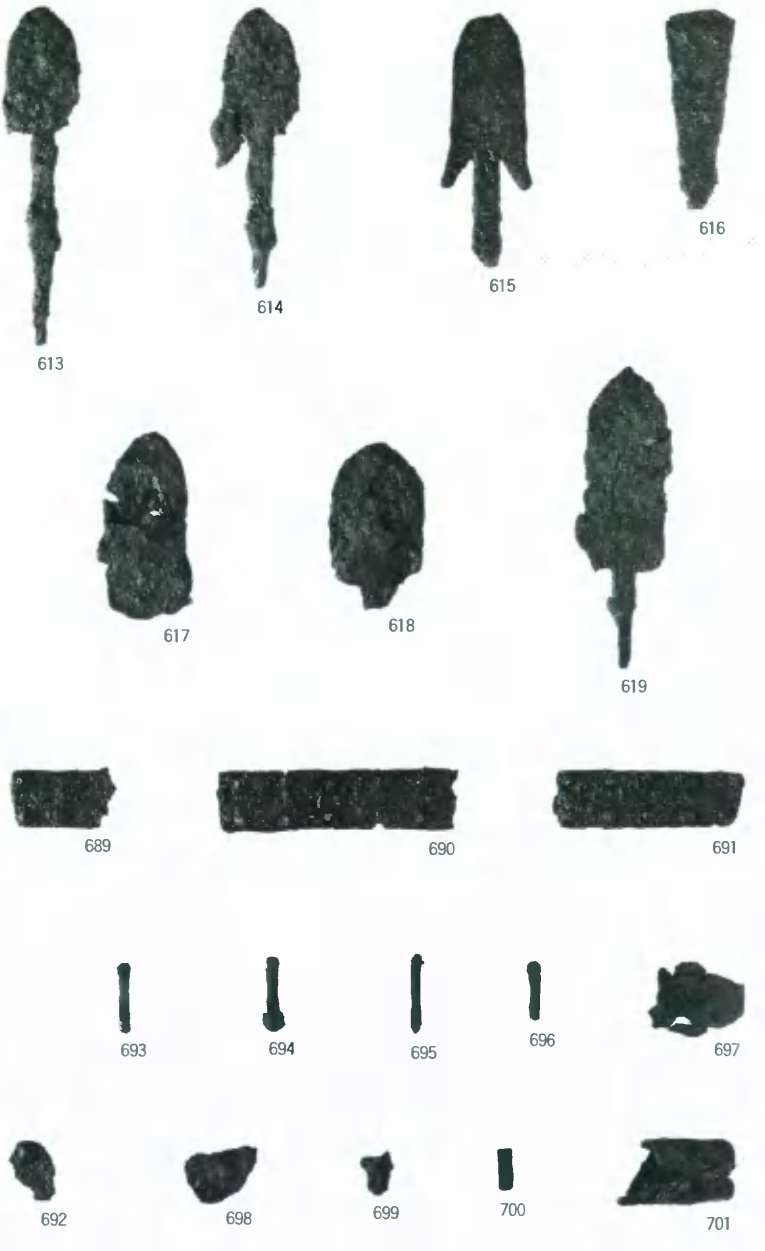


3号墳出土鉄器（3）

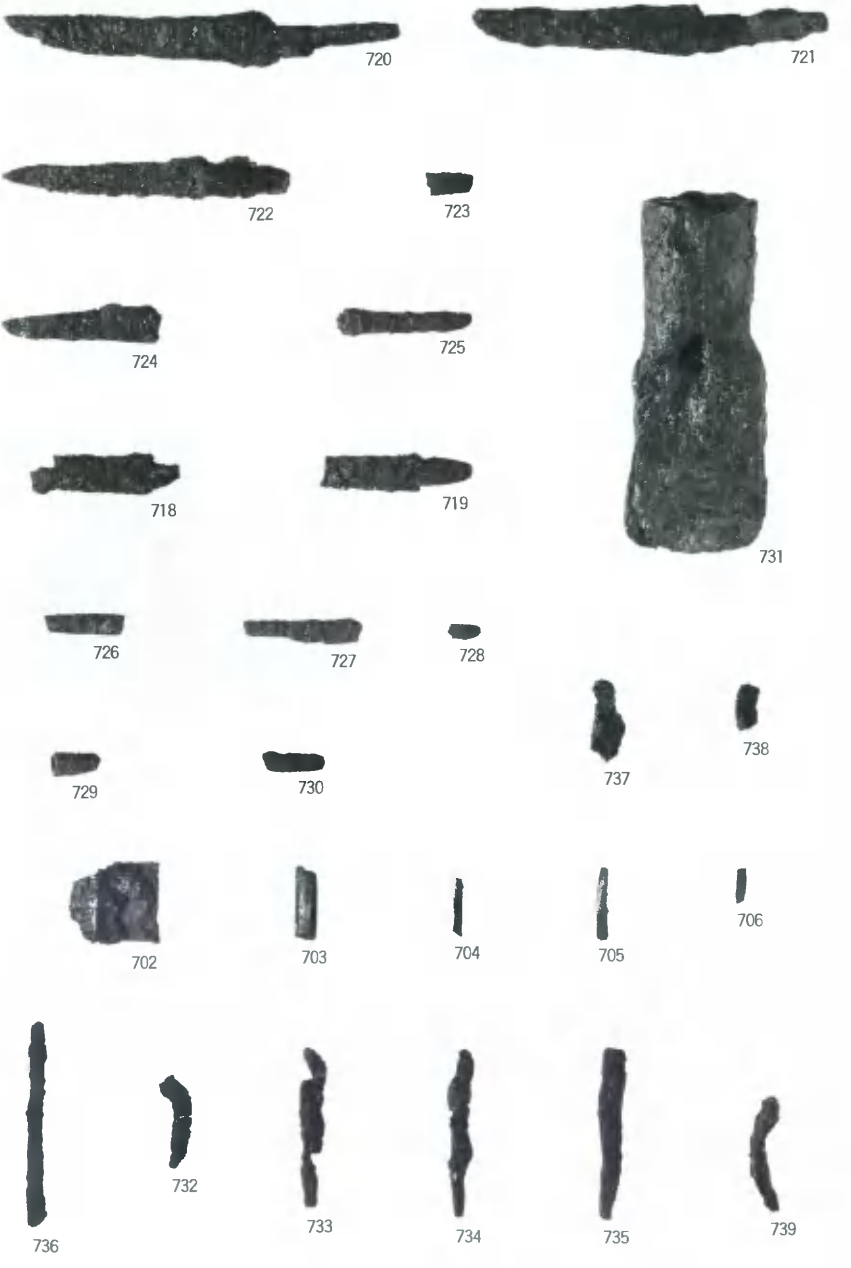

595
594
593
596
597
609
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608

3号墳出土鉄器（4）

図版60

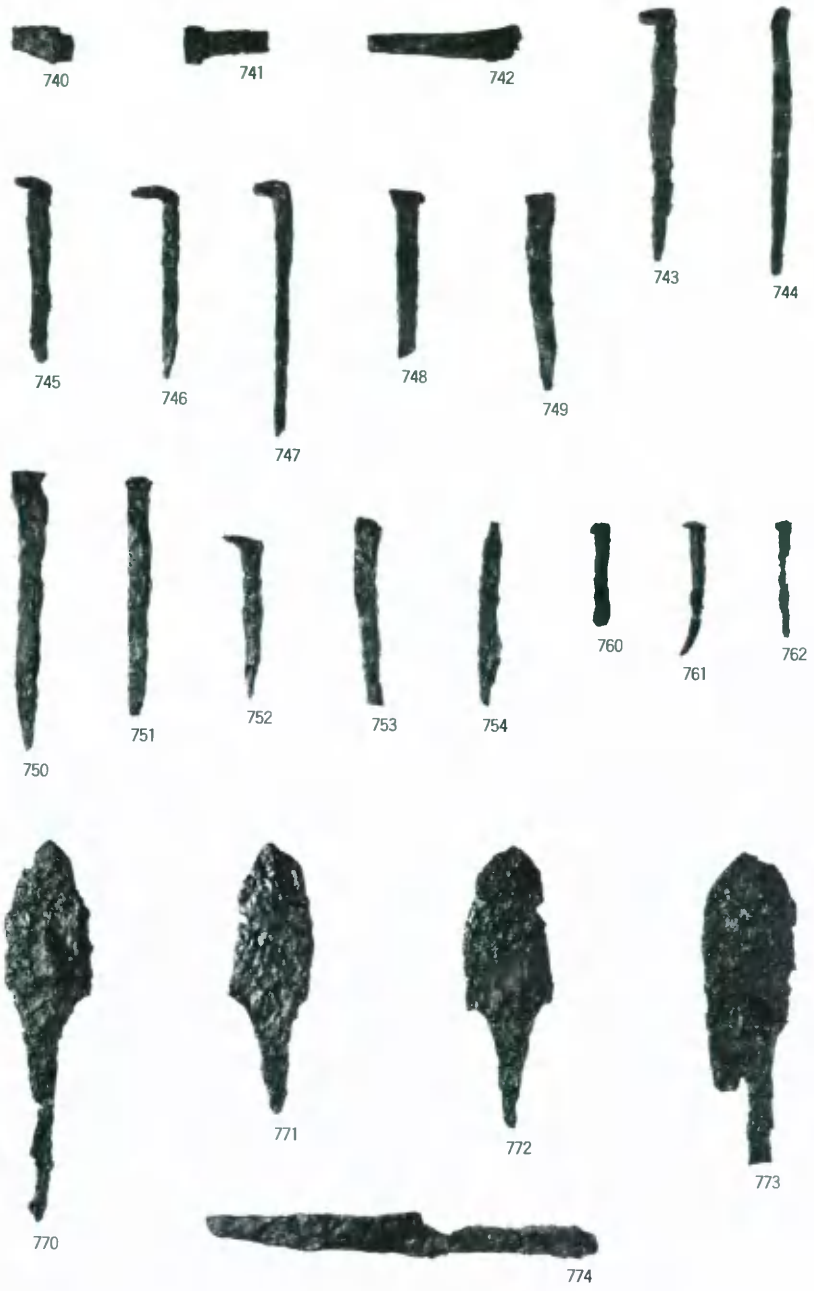


3号墳出土鉄器（5）


720
721
722
723
724
725
718
719
731
726
727
728
729
730
737
738
702
703
704
705
706
736
732
733
734
735
739

3号墳出土鉄器（6）

図版62



4号墳・6号墳出土鉄器

6号墳出土鉄器

図版64

7号墳・8号墓・11号墳出土鉄器

報 告 書 抄 録

ふりがな	たますしんでんいせき　にしやまこふんぐん
書名	田益新田遺跡・西山古墳群
副書名	一般国道53号（岡山北バイパス）建設に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	109
編著者名	福田正継・内藤善史
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　℡　(086)-293-3211
発行機関	建設省岡山国道工事事務所 岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市鹿田町2-4-36　℡　(086)-226-1051 〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　℡　(086)-224-2111
発行年月日	西暦　1996年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たますしんでんいせき 田益新田遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 たます 田益	33201		34 42 36	133 54 14	19920525 ～19930331	5,000 ㎡	一般国道53号（岡山北バイパス）建設に伴う発掘調査
にしやまこふんぐん 西山古墳群	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 かいだに 栢谷	33201		34 42 36	133 54 14	19921101 ～19930731	3,210 ㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田益新田遺跡	旧河道 集落	弥生時代 古墳時代 中世	旧河道 溝 建物 土器棺 土壙	弥生土器・土師器 須恵器・石器	旧河道の埋土中で弥生時代末から古墳時代初頭の土器が大量に出土
西山古墳群	古墳 墳墓	古墳時代	古墳 墳墓	土師器・須恵器 馬具・武具・耳環 玉類・弥生土器 石器	竪穴式石室から横穴式石室への変換期に築造された古墳群

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 109

田益新田遺跡
西山古墳群

一般国道53号（岡山北バイパス）
建設工事に伴う発掘調査

平成8年3月20日　印刷
平成8年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
発　行　建設省岡山国道工事事務所
　　岡山県教育委員会
印　刷　西日本法規出版株式会社